

一般国道
210号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第20集

堂 畑 遺 跡 II

福岡県浮羽郡吉井町大字新治所在遺跡の調査

2004

福岡県教育委員会

一般国道
210号 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第20集

堂 畑 遺 跡 II

福岡県浮羽郡吉井町大字新治所在遺跡の調査

2004

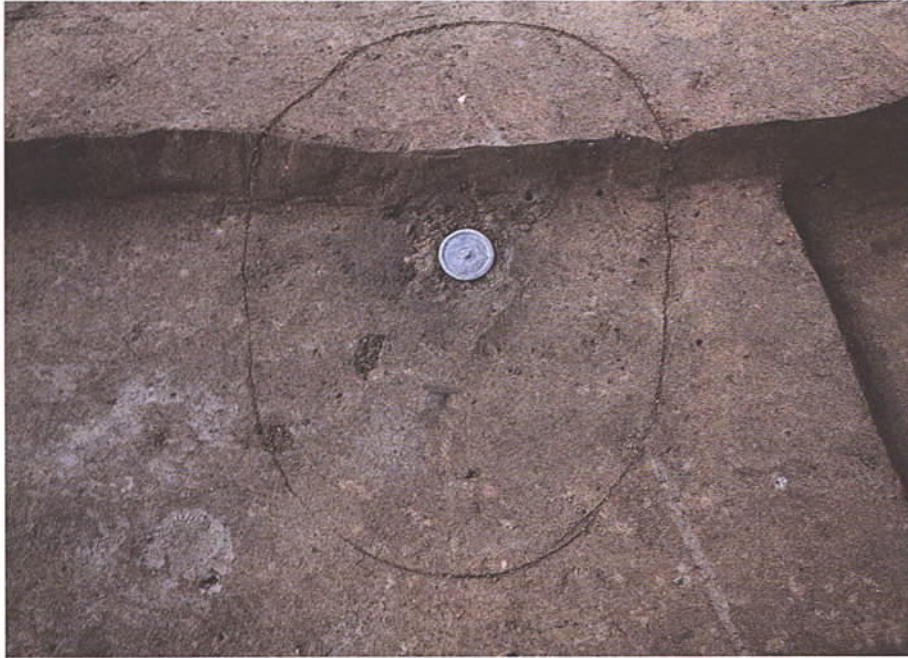
福岡県教育委員会



堂畑遺跡第1面全景（上が西）



堂畑遺跡第2面全景（上が西）



3号土坑青銅鏡出土状況（北東から）



3号土坑出土青銅鏡



1区ピット116青銅器出土状況（東から）



1区遺構面出土内面朱付着土器

序

福岡県教育委員会では、国土交通省九州地方整備局の委託を受けて、一般国道210号浮羽バイパス建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しております。昭和54(1979)年に調査を開始し、既に吉井町のほぼ全区間・浮羽町の一部の区間で一般供用されています。

本報告書は平成12～14年に発掘調査を実施した吉井町大字新治に所在する堂畑遺跡3・4次調査の記録で、平成8・9年に発掘調査を実施し、平成14年に報告いたしました『堂畑遺跡』Iの続編にあたります。遺跡は筑後川と耳納山脈に挟まれた緑豊かな田園地帯に立地しています。本調査でも弥生時代から奈良時代に至る各時代の集落跡を確認することができ、当地における人々の暮らしが深い歴史的広がりをもつことを各種の人間活動の痕跡、出土遺物を通じて改めて認識することができました。

本書が地域文化の研究や文化財思想の普及、及び学術研究の一助となれば幸いです。

発掘調査及び報告書の作成に当たりまして御協力、御助言いただきました方々にここで深甚の謝意を表します。

平成16年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 森山 良一

例言

1. 本報告書は平成12～14年(2000～2002)年度に福岡県教育委員会が実施した国土交通省九州地方整備局の委託を受けて実施した一般国道210号線浮羽バイパスの建設に先立つ堂畑遺跡3・4次の埋蔵文化財発掘調査記録で、一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第20集となる。
2. 本書に記録した堂畑遺跡は一般国道210号浮羽バイパスの埋蔵文化財調査第4地点にあたり、福岡県浮羽郡吉井町大字新治に所在する。
3. 堂畑遺跡の発掘調査は平成8・9・12～14年度に実施しており、平成8・9年度の整理報告については平成14年度(2002)に一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第17集『堂畑遺跡I』を刊行しており、本書はこの第2冊目にあたる。
4. 本書に掲載した遺構図は児玉真一・飛野博文・今井涼子・進村真之・大庭孝夫・小澤佳憲・飯田澄江・石橋丸子・上村智美・河内享子・江田裕子・小西富美子・原紀代が作成した。なお、使用した方位は全て座標北(G. N.)である。
5. 本書に掲載した遺構写真は今井涼子・進村真之・大庭孝夫が、遺物写真は石丸洋(九州歴史資料館)・北岡伸一が撮影した。なお、空中写真は(株)九州航空、(有)空中写真企画に委託し、巻頭図版1・2は、空中写真をもとに(株)凸版印刷がデジタル合成を行った。
6. 出土遺物の整理・復元作業は九州歴史資料館において、岸本圭・今井涼子・坂元雄紀の指導の元を実施した。出土遺物の実測は調査担当者のほかに吉田東明(甘木歴史資料館)・平田春美・棚町陽子・久富美智子・田中典子・坂田順子・若松三枝子・寺岡和子・栗林明美・橋之口雅子・堀江圭子・荒川妙・西垂彩子・一瀬智が行った。製図は豊福弥生・原カヨ子・江上佳子が行い、土山真弓美・安永啓子・山田智子・辻清子が補助した。
7. 出土遺物・写真・図面はすべて九州歴史資料館及び文化財保護課太宰府事務所に保管している。
8. 本書の執筆は今井・進村・大庭・小澤が行い、編集は進村・小澤・橋之口・荒川の協力を得て大庭が行った。

目次

巻頭図版
序
例言
目次
図版目次
挿図目次
表目次

I .はじめに	1 (大庭)
1. 調査の経過	1
2. 調査の組織	4
II 位置と環境	6
1. 地理的環境	8
2. 歴史的環境	8
III 発掘調査の記録	13
1. 遺跡の概要	13
2. 基本層序	13
3. 1区検出遺構と遺物	21 (今井・進村・小澤・大庭)
(1) 第1面の遺構と出土土器	21
(2) 第2面の遺構と出土土器	98
(3) 1区ピット・遺構面	160
(4) 1区出土石器・土製品・金属器	173
IV まとめ	188
1. 小形仿製鏡について	188 (進村)
2. 1区のみまとめ	190 (大庭)

図版目次

巻頭図版	1 堂畑遺跡第1面全景 (上が西)
巻頭図版	2 堂畑遺跡第2面全景 (上が西)
巻頭図版	3 3号土坑鏡出土状況 (北東から) 3号土坑出土小形仿製鏡
巻頭図版	4 1区ピット116青銅器片出土状況 (東から) 1区遺構面出土内面朱付着土器
図版1	1 堂畑遺跡から耳納山地を望む (北) 2 堂畑遺跡から東を望む (空中写真) 3 堂畑遺跡から西を望む (空中写真)
図版2	1 1区第1・2面全景 (空中写真) 2 1区第1面全景 (東から) 3 1区西南壁土層 (北から)
図版3	1 1号竪穴住居跡 (北から) 2 2号竪穴住居跡 (南東から) 3 3号竪穴住居跡 (南東から)
図版4	1 3号竪穴住居跡カマド (南東から) 2 3号竪穴住居跡カマド (南西から) 3 4号竪穴住居跡 (北から)
図版5	1 5号竪穴住居跡周辺 (南東から) 2 5号竪穴住居跡 (南東から) 3 5号竪穴住居跡カマド (南東から)
図版6	1 6号竪穴住居跡 (南東から) 2 6号竪穴住居跡カマド (南東から) 3 7号竪穴住居跡 (南西から)

図版 7	1 7号竪穴住居跡カマド (南東から)	2 8号竪穴住居跡 (南西から)
	3 8号竪穴住居跡カマド (南東から)	
図版 8	1 9号竪穴住居跡 (南から)	2 10号竪穴住居跡 (南から)
	3 12号竪穴住居跡 (北西から)	
図版 9	1 13号竪穴住居跡 (南から)	2 14号竪穴住居跡 (南東から)
	3 14号竪穴住居跡カマド (南東から)	
図版 10	1 15号竪穴住居跡 (南東から)	2 15号竪穴住居跡カマド (南東から)
	3 16号竪穴住居跡 (南東から)	
図版 11	1 17号竪穴住居跡 (南西から)	2 18号竪穴住居跡 (南から)
	3 18号竪穴住居跡カマド (南から)	
図版 12	1 19号竪穴住居跡 (南東から)	2 19号竪穴住居跡カマド (南東から)
	3 20号竪穴住居跡 (東から)	
図版 13	1 20号竪穴住居跡カマド (東から)	2 22号竪穴住居跡 (北から)
	3 23号竪穴住居跡 (東から)	
図版 14	1 24号竪穴住居跡 (南から)	2 24号竪穴住居跡カマド (南から)
	3 24号竪穴住居跡 (南から)	
図版 15	1 25号竪穴住居跡 (南東から)	2 26号竪穴住居跡 (南西から)
	3 27号竪穴住居跡 (東から)	
図版 16	1 28号竪穴住居跡 (南から)	2 29号竪穴住居跡 (北西から)
	3 30号竪穴住居跡 (北西から)	
図版 17	1 31号竪穴住居跡 (東から)	2 32号竪穴住居跡 (南西から)
	3 32号竪穴住居跡カマド (南西から)	
図版 18	1 33号竪穴住居跡 (南から)	2 34号竪穴住居跡 (東から)
	3 34号竪穴住居跡カマド (東から)	
図版 19	1 35号竪穴住居跡 (南から)	2 35号竪穴住居跡カマド (南から)
	3 36号竪穴住居跡 (南東から)	
図版 20	1 37号竪穴住居跡 (南から)	2 38号竪穴住居跡 (南から)
	3 38号竪穴住居跡カマド (南から)	
図版 21	1 39号竪穴住居跡 (南から)	2 40号竪穴住居跡 (南東から)
	3 40号竪穴住居跡カマド (南から)	
図版 22	1 41号竪穴住居跡 (南東から)	2 42号竪穴住居跡 (南から)
	3 43号竪穴住居跡 (南から)	
図版 23	1 43号竪穴住居跡カマド (南から)	2 44号竪穴住居跡 (南東から)
	3 44号竪穴住居跡カマド (南から)	
図版 24	1 44号竪穴住居跡カマド (南西から)	2 1号掘立柱建物跡 (南から)
	3 2号掘立柱建物跡 (北西から)	
図版 25	1 1号土坑 (南西から)	2 2号土坑 (南から)
	3 3号土坑鏡出土状況 (北東から)	
図版 26	1 3号土坑検出状況 (北東から)	2 3号土坑土層 (南西から)
	3 1号溝南壁土層 (北から)	
図版 27	1 1区第2面全景 (東から)	2 45・46号竪穴住居跡 (南から)
	3 47号竪穴住居跡 (東から)	
図版 28	1 48号竪穴住居跡 (南から)	2 49・50号竪穴住居跡、1号円形周溝状遺構 (北から)
	3 51号竪穴住居跡 (北から)	
図版 29	1 52号竪穴住居跡 (南から)	2 55号竪穴住居跡 (南から)
	3 56号竪穴住居跡 (南から)	
図版 30	1 57号竪穴住居跡 (西から)	2 58・59号竪穴住居跡、17号土坑 (南から)
	3 59号竪穴住居跡カマド (南から)	

図版 31	1 60号竪穴住居跡(南から) 3 62号竪穴住居跡(北から)	2 61号竪穴住居跡(南東から)
図版 32	1 63号竪穴住居跡(南から) 3 65・66号竪穴住居跡、13号土坑(西から)	2 64号竪穴住居跡(東から)
図版 33	1 67・68号竪穴住居跡、12号土坑(南から) 3 70号竪穴住居跡カマド(南から)	2 69号竪穴住居跡、15号土坑(東から)
図版 34	1 73号竪穴住居跡(南から) 3 6号土坑(南から)	2 5号土坑(北西から)
図版 35	1 9号土坑出土状況(南から) 3 17号土坑出土状況(北から)	2 9号土坑完掘状況(南から)
図版 36	1 17号土坑完掘状況(北から) 3 9号溝土層(東から)	2 17号土坑付近出土状況(東から)
図版 37	1 12号溝土層(南から) 3 3号円形周溝状遺構(東から)	2 13号溝土層(南から)
図版 38	1 ピット116青銅器片検出状況(北から) 3 ピット116完掘状況(東から)	2 ピット116青銅器片検出状況(東から)
図版 39	12・14号竪穴住居跡出土土器	
図版 40	25・26号竪穴住居跡出土土器	
図版 41	26・28・31号竪穴住居跡出土土器	
図版 42	31号竪穴住居跡出土土器	
図版 43	31・33・36～38号竪穴住居跡出土土器	
図版 44	38・39・42・44号竪穴住居跡出土土器・1号溝出土土器(1)	
図版 45	1号溝出土土器(2)	
図版 46	1号溝出土土器(3)	
図版 47	1号溝出土土器(4)、4号溝出土土器	
図版 48	6号溝・56～60・62号竪穴住居跡出土土器	
図版 49	62・64・66・68・70～72号竪穴住居跡出土土器	
図版 50	74号竪穴住居跡、9・17号土坑出土土器	
図版 51	17号土坑、8号溝出土土器	
図版 52	8・12号溝、3号円形周溝状遺構・ピット出土土器	
図版 53	ピット出土土器・1区遺構面出土土器(1)	
図版 54	1区遺構面出土土器(2)	
図版 55	1区遺構面出土土器(3)	
図版 56	1区遺構面出土土器(4)	
図版 57	1区遺構面出土土器(陶硯・転用硯)、石器・石製品(1)	
図版 58	1区出土石器・石製品(2)	
図版 59	1区出土石器・石製品(3)	
図版 60	1区出土石器・石製品(4)	
図版 61	1区出土石器・石製品(5)、製塩土器(1)	
図版 62	1区出土製塩土器(2)	
図版 63	1区出土土製品、金属器	
図版 64	3号土坑出土青銅鏡	

挿図目次

第1図	堂畑遺跡の位置	1
第2図	周辺地形分類図(1/50,000)	5
第3図	周辺遺跡分布図(1)(1/50,000)	7
第4図	周辺遺跡分布図(2)(1/10,000)	9

第5図	調査区周辺地形図(1/2,000 ただし断面図鉛直方向は 1/100)	11
第6図	1～5区土層実測図 (1)(1/60)	14
第7図	1～5区土層実測図 (2)(1/60)	15
第8図	1・2次調査1区西壁・東壁土層実測図 (1/100)	16
第9図	堂畑遺跡遺構配置図 (1/600)	折込
第10図	1区第1面遺構配置図 (1/200)	折込
第11図	1区第2面遺構配置図 (1/200)	折込
第12図	1・2号竪穴住居跡実測図 (1/60)	20
第13図	1～4・6・7号竪穴住居跡出土土器実測図 (1・11・16・20は 1/4、他は 1/3)	22
第14図	3・4号竪穴住居跡実測図 (1/60)	23
第15図	3号竪穴住居跡カマド・カマド下層実測図 (1/30)	24
第16図	5～8号竪穴住居跡実測図 (1/60)	26
第17図	5・6号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	27
第18図	8～12 (1) 号竪穴住居跡出土土器実測図(14・15は 1/4、他は 1/3)	28
第19図	9・10号竪穴住居跡実測図 (1/60)	30
第20図	11・12号竪穴住居跡実測図 (1/60)	31
第21図	12号竪穴住居跡出土土器実測図 (2)(1/3)	33
第22図	13号竪穴住居跡実測図 (1/60)	35
第23図	14・15号竪穴住居跡 (1/60)・14号住居跡カマド実測図 (1/30)	36
第24図	14・15・18・19号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	37
第25図	16・17号竪穴住居跡実測図 (1/60)	38
第26図	18号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	39
第27図	19号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	40
第28図	20号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	41
第29図	21～23号竪穴住居跡実測図 (1/60)	42
第30図	22～24号竪穴住居跡出土土器実測図(1～5・11・12は 1/4、他は 1/3)	43
第31図	24・25号竪穴住居跡 (1/60)・24号住居跡カマド実測図 (1/30)	44
第32図	25号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	45
第33図	26・28・31・42号竪穴住居跡実測図 (1/60)	47
第34図	26号竪穴住居跡出土土器実測図(1・5は 1/4、他は 1/3)	49
第35図	27・29・30号竪穴住居跡実測図 (1/60)	50
第36図	27・29・30号竪穴住居跡出土土器実測図(3は 1/3、他は 1/4)	51
第37図	28号竪穴住居跡出土土器実測図 (1)(1～11は 1/4、他は 1/3)	52
第38図	28号竪穴住居跡出土土器実測図 (2)(1/3)	53
第39図	31号竪穴住居跡出土土器実測図 (1)(1～4は 1/4、他は 1/3)	54
第40図	31号竪穴住居跡出土土器実測図 (2)(1/3)	55
第41図	32号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	56
第42図	32～35号竪穴住居跡出土土器実測図(1～5・10～14・21は 1/4、他は 1/3)	58
第43図	33・34号竪穴住居跡 (1/60)・34号住居跡カマド実測図 (1/30)	59
第44図	35・36号竪穴住居跡 (1/60)・35号住居跡カマド実測図 (1/30)	60
第45図	36号竪穴住居跡出土土器実測図(1～10は 1/4、他は 1/3)	62
第46図	37・39号竪穴住居跡実測図 (1/60)	64
第47図	37～39号竪穴住居跡出土土器実測図(1・15は 1/4、他は 1/3)	65
第48図	38号竪穴住居跡実測図(1/60・1/30)	66
第49図	40号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	68
第50図	40～43号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	69
第51図	41号竪穴住居跡実測図 (1/60)	70
第52図	43号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	71
第53図	44号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	72

第54 図	44号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	73
第55 図	1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	74
第56 図	2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	75
第57 図	1・2号掘立柱建物跡出土土器実測図 (4・5は1/4、他は1/3)	76
第58 図	1～4号土坑実測図 (1・2・4は1/60、3は1/30)	77
第59 図	1～4号土坑出土土器実測図 (9・10は1/4、他は1/3)	78
第60 図	1・36号溝実測図 (1/120)	79
第61 図	1・36号溝北壁土層実測図 (1/30)	80
第62 図	1号溝出土土器実測図 (1)(1～9は1/4、他は1/3)	81
第63 図	1号溝出土土器実測図 (2) (1/3)	83
第64 図	1号溝出土土器実測図 (3) (1/3)	84
第65 図	1号溝出土土器実測図 (4) (1/3)	85
第66 図	1号溝出土土器実測図 (5) (1/3)	87
第67 図	1号溝出土土器実測図 (6) (1/3)	89
第68 図	1号溝出土土器実測図 (7) (1/3)	91
第69 図	1号溝出土土器実測図 (8) (1/3)	93
第70 図	36号溝出土土器実測図 (3は1/6、他は1/3)	94
第71 図	2・4・6・7号溝出土土器実測図 (1・2・7は1/4、他は1/3)	96
第72 図	45・46号竪穴住居跡実測図 (1/60)	98
第73 図	45・46・48～52・55・56号竪穴住居跡出土土器実測図(6～10・14～16・18～20は1/3、他は1/4)	99
第74 図	47・48号竪穴住居跡実測図 (1/60)	101
第75 図	49・50号竪穴住居跡実測図 (1/60)	102
第76 図	51・52号竪穴住居跡実測図 (1/60)	104
第77 図	54・55号竪穴住居跡 (1/60)・55号住居跡炉跡 (1/30) 実測図	106
第78 図	56号竪穴住居跡実測図 (1/60)	107
第79 図	57・58号竪穴住居跡実測図 (1/60)	109
第80 図	57号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	110
第81 図	59・60号竪穴住居跡実測図 (1/60)	112
第82 図	59号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	113
第83 図	58～60号竪穴住居跡出土土器実測図(12～15・20～22は1/3、他は1/4)	114
第84 図	61・63号竪穴住居跡実測図 (1/60)	116
第85 図	62号竪穴住居跡実測図 (1/60)	118
第86 図	62号竪穴住居跡出土土器実測図(1)(18・19は1/3、他は1/4)	120
第87 図	62(屋内土坑)～64号竪穴住居跡出土土器実測図(24～26・64は1/3、他は1/4)	121
第88 図	64・66号竪穴住居跡実測図 (1/60)	123
第89 図	65・74号竪穴住居跡実測図 (1/60)	124
第90 図	65～67号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)	126
第91 図	67・68号竪穴住居跡実測図 (1/60)	128
第92 図	68～73号竪穴住居跡出土土器実測図(1～11は1/3、他は1/4)	129
第93 図	69・70号竪穴住居跡実測図 (1/60)	130
第94 図	70号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	131
第95 図	71～73号竪穴住居跡実測図 (1/60)	132
第96 図	76号竪穴住居跡実測図 (1/60)	134
第97 図	74・76号竪穴住居跡出土土器実測図(1～9は1/3、他は1/4)	135
第98 図	5号土坑実測図 (1/60)	137
第99 図	5号土坑出土土器実測図 (5・6は1/3、他は1/4)	137
第100 図	6号土坑実測図 (1/60)	138
第101 図	9・12号土坑実測図 (1/30)	139

第102図	9・12・13・15号土坑出土土器実測図(1・4・5～7は1/4、他は1/3)	140
第103図	13・14号土坑実測図(1/30)	141
第104図	15号土坑実測図(1/30)	142
第105図	17号土坑実測図(1/30)	143
第106図	17号土坑出土土器実測図(1)(1/4)	144
第107図	17号土坑出土土器実測図(2)(1/4)	146
第108図	17号土坑出土土器実測図(3)(1/4)	147
第109図	8・11～13号溝土層実測図(1/30)	149
第110図	8号溝出土土器実測図(1)(1/4)	150
第111図	8号溝出土土器実測図(2)(1/4)	152
第112図	8(3)～10号溝出土土器実測図(31～39・43・44は1/4、他は1/3)	153
第113図	12・17号溝出土土器実測図(1～9・14・15は1/4、他は1/3)	155
第114図	1・2号円形周溝状遺構実測図(1/60)	157
第115図	3号円形周溝状遺構実測図(1/60)	158
第116図	1・3号円形周溝状遺構出土土器実測図(13は1/3、他は1/4)	159
第117図	ピット116実測図(1/4)	160
第118図	1区ピット出土土器実測図(1)(1/4)	162
第119図	1区ピット出土土器実測図(2)(1/3)	163
第120図	1区遺構面等出土土器実測図(1)(1/4)	165
第121図	1区遺構面等出土土器実測図(2)(1/3)	167
第122図	1区遺構面等出土土器実測図(3)(1/3)	168
第123図	1区遺構面等出土土器実測図(4)(1/3)	169
第124図	1区遺構面等出土土器実測図(5)(1/3)	171
第125図	1区遺構面等出土土器実測図(硯)(6)(1/3)	172
第126図	1区出土石器・石製品実測図(1)(1～7は2/3、他は1/2)	174
第127図	1区出土石器・石製品実測図(2)(1/2)	176
第128図	1区出土石器・石製品実測図(3)(1/2)	177
第129図	1区出土石器・石製品実測図(4)(1/2)	179
第130図	1区出土石器・石製品実測図(5)(1～3は1/2、他は1/3)	181
第131図	1区出土石器・石製品実測図(6)(1/3)	181
第132図	1区出土石器・石製品実測図(7)(1/4)	183
第133図	製塩土器・土製品実測図(1～26は1/3、27～38は1/2)	184
第134図	1区出土金属器実測図(1/2)	185
第135図	3号土坑出土小形仿製鏡実測図(1/1)	188

表目次

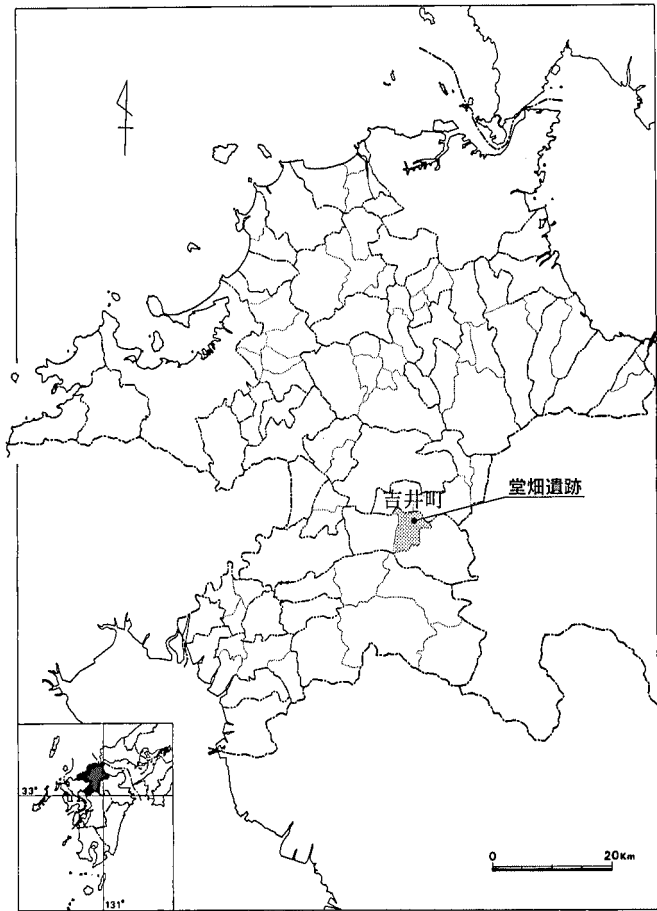
第1表	浮羽バイパス調査遺跡一覧	1
第2表	石製品・土製品・金属器観察表	186

I. はじめに

1. 調査の経過

一般国道210号線は大分県大分市と福岡県久留米市を結び、九州を横断する主要幹線であり、豊後街道として古くからこの地域の幹線道路であった。

福岡県浮羽郡内において国道210号線は浮羽町・吉井町・田主丸町の市街地中心を東西に貫く対面2車線の道路となっているが、歩道も狭く交通混雑が頻繁に起こっている。そこで、交通混雑の緩和と地域産業の発展を目的として、昭和48(1973)年度に事業化されたのが浮羽バイパスである。浮羽バイパスは田主丸町豊城から浮羽町山北に至る総延長約14.0km、幅員16～25mの第1級道路である。東側の浮羽町より工事が進行し、現在浮羽町一部と吉井町の大半において暫定的に対面2車線で供用が開始されている。



第1図 堂畑遺跡の位置

この浮羽バイパスの建設に先立つ埋文化財保護の対応は、昭和47(1972)年2月3日付けで建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所(現国土交通省九州地方整備局)福岡国道工事事務所から福岡県教育庁管理部文化課(現総務部文化財保護課)あての、「一般国道210号浮羽～田主丸間バイパス建設予定地内の文化財の有無について」との調査依頼に始まる。これによって、吉井町塚堂遺跡の発掘調査を昭和54

第1表 浮羽バイパス調査遺跡一覧

地点	町名	工区と地点名	遺跡名	対象面積(m ²)	発掘調査面積(m ²)	調査年度	報告年度	報告書番号
1	浮羽	9.日永	日永	19,000	16,800	S61	H4・5	6・7集
2	吉井	7.塚堂	塚堂	18,479	12,768	S54～57・59～61	S57～59・62	1～5集
3	吉井	7.能楽	—	5,100	試掘のみ	H6	—	—
4	吉井	6.7.三牟田	堂畑	12,700	9,700	H8・9・12～14	H13・15・16	17集・本書
5	吉井	6.新治	仁右衛門畑	8,400	3,000	H7～9	H11・12	12・14集
6	吉井	6.稲崎A	稲崎A	6,300	1,600	S62	H9	9集
7	吉井	6.稲崎B	稲崎B	4,900	520	S62	H9	9集
8	吉井	6.清宗	—	2,400	試掘のみ	H1	—	—
9A	吉井	5.6.上菅A	堺町・大碓	21,000	18,000	H1・2	H5	8集
9B	吉井	5.6.上菅B	鷹取五反田	14,000	7,420	H2・5・6	H9・10	9・10集
10	田主丸	5.船越A	船越高原	25,000		H8-H12	H11～13	13・15・16集
11	田主丸	5.船越B	船越二ノ上	20,000	18,500	H6～9	H10	11集
12	田主丸	5.植木		19,200				
13	田主丸	5.常盤	松門寺A	15,000		H11	H13	第18集
14	田主丸	5.野田A	玉田	14,800		H15		
15	田主丸	5.野田B	大的・日詰	10,800		H12・13	H14・15	第19・21集
16	田主丸	5.野田C	日詰2次	13,500		H14～	H16～	
17	浮羽	7.朝日	—	2,400	試掘のみ			
18	浮羽			28,400				
19	浮羽			16,600				

(1961) 年度～57 年度までの4ヵ年にわたって実施した。

その後、昭和61(1986)年4月2日付けで福岡国道工事事務所から再度「埋蔵文化財の分布調査について」との調査依頼が文化課あてに出され、文化課は塚堂遺跡を除く計16地点で発掘調査必要箇所が存在する旨を回答している。

また平成10年には機構改革により文化課から文化財保護課となり、同時に受託調査担当係が係として独立し(調査第二係)、受託調査事業の事業計画を策定する中で、改めて浮羽バイパスの分布調査を行った結果、既調査地点を含む計19地点の発掘調査必要箇所の存在を確認し、平成12年度に福岡国道工事事務所に回答した。現在、この回答にもとづいて福岡県教育庁総務部文化財保護課を調査主体として、順次用地買収が完了した地点より試掘調査・本発掘調査が実施されている(第1表)。

堂畑遺跡は、福岡県浮羽郡吉井町大字新治字堂畑・柿木畑・字大月に所在し、浮羽バイパスと県道吉井恵蘇宿線が交差する「三牟田」交差点の東西にわたって分布している。平成8・9年度には文化課が調査主体となり、県道西側約2200㎡の本調査を行い(堂畑遺跡1・2次調査)、平成13年度にその調査成果を収めた報告書を刊行している。(重藤輝行編 2002『堂畑遺跡』I 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第17集)

本書に掲載するのは平成12～14年度に堂畑遺跡3・4次調査として本調査を実施した部分、県道から東約320m、調査対象面積10,500㎡の調査成果であり(1～4区)、また補足調査として1・2次調査の未調査地点(5区)180㎡の結果も合わせて報告する。5区では3層の遺構面、1～4区ではほぼ全体で2層の遺構面を確認したため、実際の調査面積は、14,000㎡になり、遺構の内容も正確な数は現在整理中のため若干前後するが、竪穴住居跡230棟、掘立柱建物跡12棟、土坑81基、溝46条、円形周溝状遺構5基、竪穴状遺構1基などを検出した。平成14年度から1区から順次整理作業を開始し、今年度は1区、平成16年度には2～5区と分けて調査成果を報告する予定である。

今回の調査前の状況は、三牟田交差点西は平成10年度にバイパスが仮開通し、東は既に三牟田交差点約400m部分まで仮舗装している段階であった。国土交通省ではこの間約400m部分の平成14年度内での開通を目指しており、県教委としてもそれに合わせた対応が求められた。県道近くには未買収地が存在したため、この未買収地以外について平成12年7月に確認調査を行い、県道より東350m部分は全体的に複数面で遺構密度は高いことが分かった。そのため県



調査風景



現地説明会

教委は、未買収地の解決を待たずにすぐに本調査を実施することとし、浮羽バイパス10地点の本調査終了後に引き続き、4地点の調査を実施することとした。まず県道から約80m離れた場所から調査を開始し（1区）、順次東側に向かって調査を進めた（2区）。

平成8・9年度は1・2次調査としていたため、平成12年度は堂畑遺跡3次調査として、平成11年11月13日から1区の表土剥ぎを開始したが、遺構密度が高く、また2層遺構面が存在したため遺構検出に苦勞したが、3号土坑からは小形仿製鏡が出土するなどの調査成果を得て、平成13年3月7日に1区第1面遺構全体写真の撮影を行い、調査を終了した。遺物はパンケース100箱分出土した。

平成13年度は、4月9日より作業員を投入し、1区第2面、2区第1面の調査を開始したが、1区第2面では5月15日にピットより青銅器片が出土した。7月5日には1区遺構全体写真を撮影したが、この年の梅雨は大雨に見舞われ、調査区周囲に水田があったこともあり、約1ヶ月間1・2区とも水没することとなった。そのため、1区第2面の遺構は地山が砂質のため、遺構に多大な影響を受けてしまうこととなった。2区第1面は1区第2面同時に西側から調査を開始したが、1区の表土剥ぎの失敗の反省のもと、何度も重機や人力によって慎重に遺構検出を進めた結果、時間がかかってしまったが、多数の遺構を確認することができた。2区第1面西側は10月24日に全体写真撮影を行い、引き続き2区第1面東側の調査を進めた。

8月4日には浮羽郡社会教育振興会主催の親子体験発掘並びに県教委主催の現地説明会を開催し、計70人の参加を得た。2区第1面東では、東南端で奈良時代の竪穴住居跡が多数切り合う部分があり、調査に手間取ったが、1月25日には遺構全体写真を撮影した。また10月31日には吉井町立吉井中学校1年生による総合的学習の時間を利用した体験発掘並びに土器洗いを行った。

2区第1面完掘後、また2区西側から第2面の調査を始めたが、2区中央では1面しかなかったために、順調に進み、2区第2面西は1月25日に遺構全体写真を撮影した。第2面東は20号溝では大量の弥生土器が出土し、また2×6間の9号掘立柱建物跡を確認するなどの成果があり、3月19日に遺構全体を撮影し、平成13年度の調査を終了した。

平成14年度は4月15日から作業員を投入し、排土置き場部分であった2区東端の一部と3



中学生による体験発掘風景



冠水状況

区第1面の調査を実施し、2区東端は4月末で終了した。3区第1面の調査を行い、多数の竪穴住居跡を検出した。この年は梅雨に雨も少なく順調に進み、6月13日には遺構全体写真を撮影した。また同時に5月から4区第1・2面も調査を進めた。3区第2面は遺構が少なかったこともあり、4区第2面と一緒に8月21日に遺構全体写真を撮影した。また前年度と同様、8月8日に浮羽郡社会教育振興会主催の親子体験発掘と現地説明会を開催し、約100名の参加を得た。9月中旬には3・4区の調査を終了し、堂畑遺跡県道東部分の調査は終了した。引き続き、県道を挟んだ西側、1・2次調査の続きの5区の調査を開始し、3層の遺構が検出されるも、遺構が少なかったため、順調に進み、10月31日に浮羽バイパス4地点堂畑遺跡の発掘調査は終了した。

なお、平成15年4月には浮羽バイパス4地点が暫定2車線で供用され、吉井町内は西端の一部を除き、全線開通することとなった。

2. 調査の組織

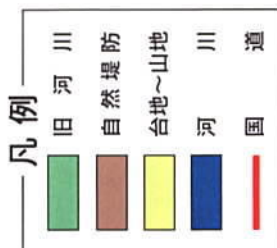
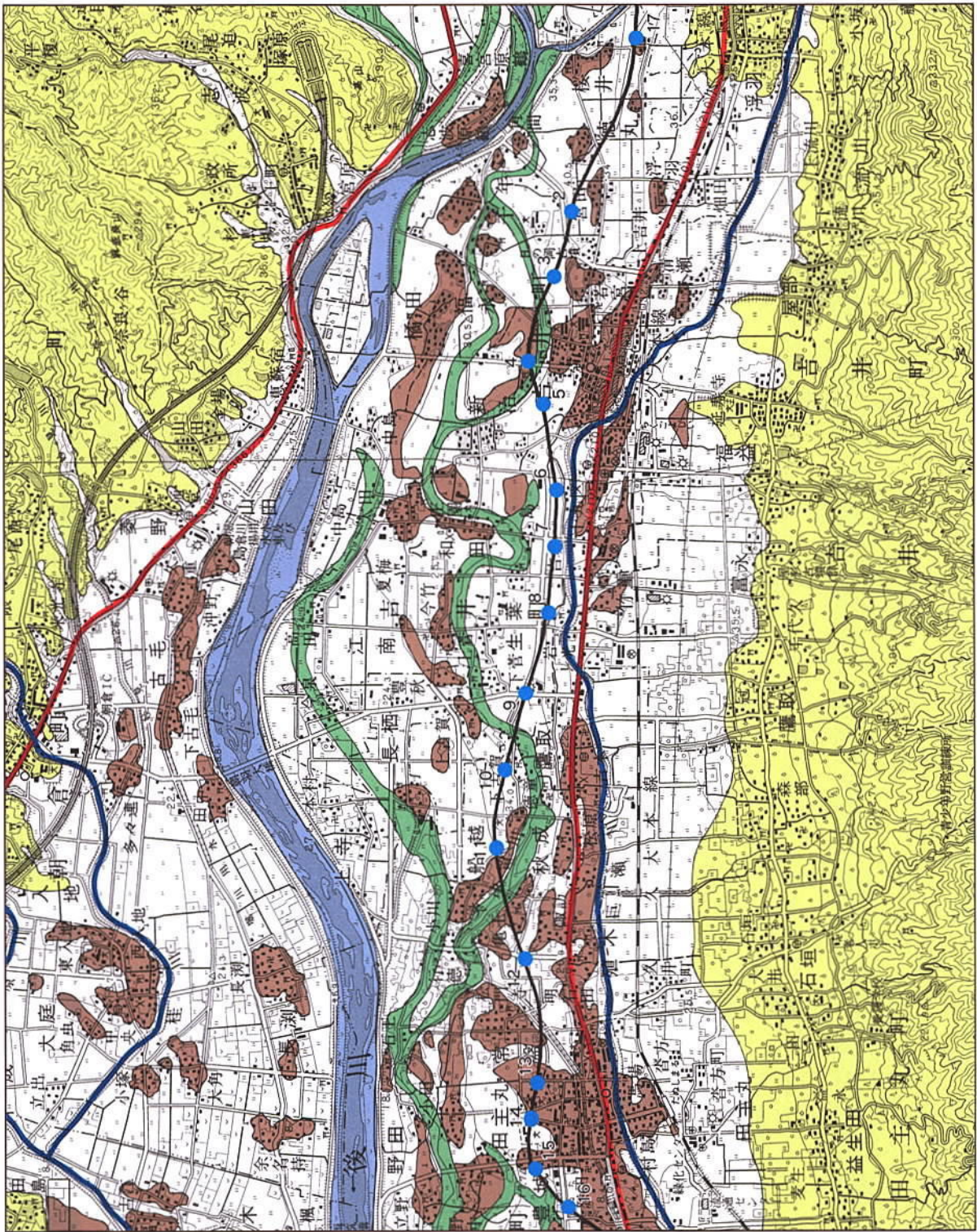
発掘調査及び整理・報告書作成の関係者は下記のとおりである。

国土交通省九州地方整備局福岡国道工事事務所

	[平成12年度]	[平成13年度]	[平成14年度]	[平成15年度]
所長	森 将彦	森 昌文	森 昌文	増田 博行
副所長	兼武征二郎	有働 伸幸	小串 正志	小串 正志
	田中 義高	田中 義高	百田 国広	徳留 忠
建設専門官			池田 正	
建設監督官	有家 信義	浅井 博海	浅井 博海	内田 智視
調査第2課長	赤星 文生	久野 隆博	久野 隆博	上村 一明
			上村 一明	
調査係長	大榎 謙	大榎 謙	大榎 謙	長友 浩信
			長友 浩信	
専門調査員			島川 浩一	島川 浩一
国土交通技官	松山ひろみ	佐藤 博信	佐藤 博信	立石 洋和
工務課長	後藤 昌隆	末岡 彰	末岡 彰	田中秀之進
工務第一係長	古木 英昭	山口 隆	山口 隆	竹永 浩
			竹永 浩	
工務第三係長	川内 学	川内 学	川内 学	山下 正昭

福岡県教育委員会（教育庁総務部文化財保護課）

	[平成12年度]	[平成13年度]	[平成14年度]	[平成15年度]
総括				
教育長	光安 常喜	光安 常喜	森山 良一	森山良一
教育次長	森山 良一	森山 良一	三瓶 寧夫	三瓶 寧夫
総務部長	岩本 誠	三瓶 寧夫	松本 通憲	清水 圭輔



第2図 周辺地形分類図 (1/50,000)

文化財保護課長	柳田 康雄	井上 裕弘	井上 裕弘	井上 裕弘
参事	井上 裕弘			
参事兼課長技術補佐	橋口 達也	橋口 達也	橋口 達也	川述 昭人
			川述 昭人	木下 修
参事兼課長補佐		平野 義峰	久芳 昭文	久芳 昭文
課長補佐兼管理係長	平野 義峰			
参事補佐兼調査第一係長	佐々木隆彦	佐々木隆彦	佐々木隆彦	小池 史哲
参事補佐兼調査第二係長	児玉 真一	児玉 真一	児玉 真一	中間 研志

庶務

参事補佐兼管理係長			古賀 敏生	古賀 敏生
管理係長		三笠ひとみ		
事務主査	吉武 祐二	井上 雅之	宮崎 志行	宮崎 志行
主任主事	鎮守 俊明	鎮守 俊明	鎮守 俊明	末竹 元
	佐藤 雅二	秦 俊二	秦 俊二	秦 俊二

調査・報告

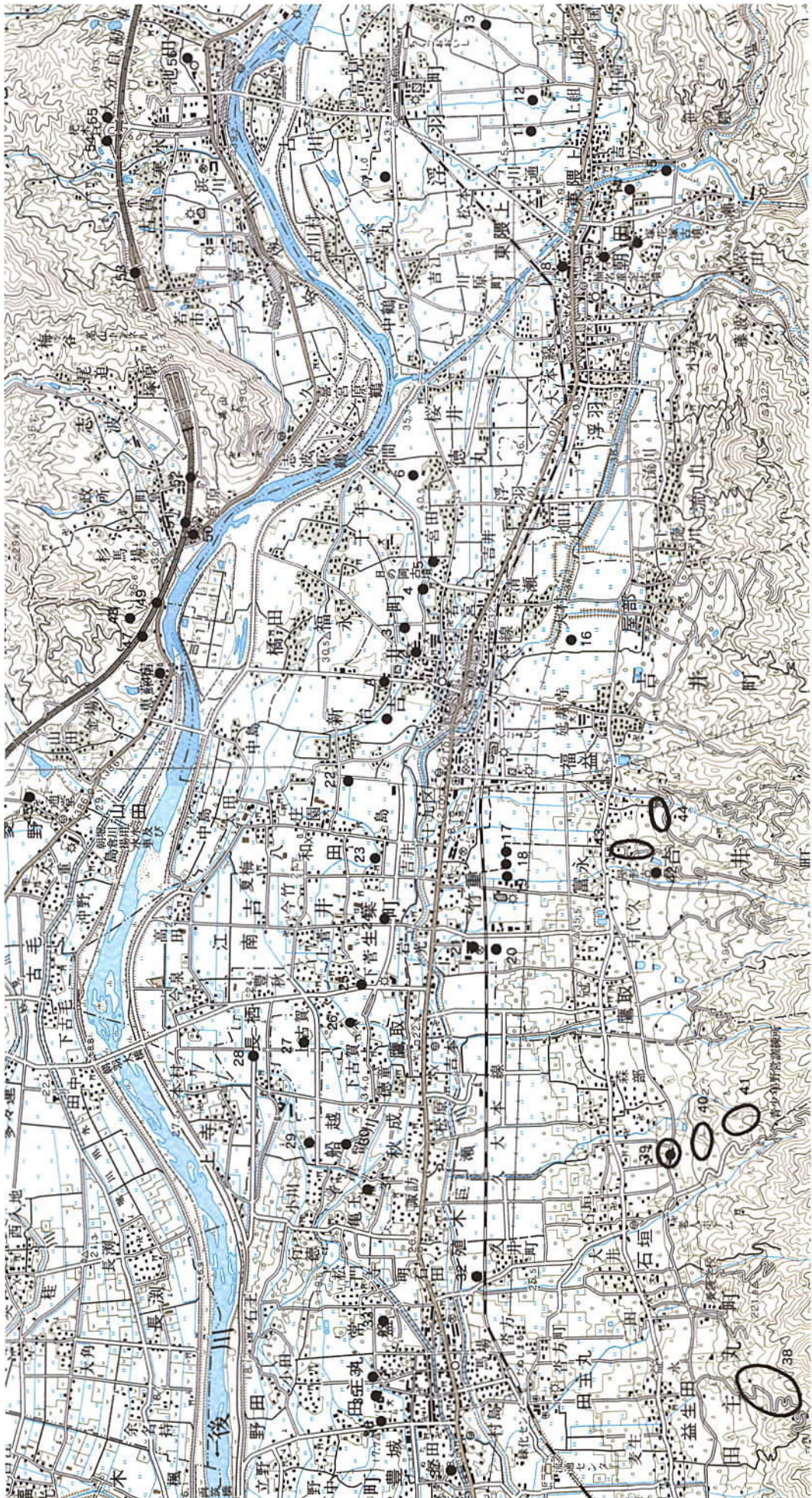
参事補佐兼調査第二係長	児玉 真一	児玉 真一	児玉 真一	中間 研志
技術主査		飛野 博文		
主任技師	今井 涼子	今井 涼子		今井 涼子
	進村 真之			進村 真之
				小澤 佳憲
				大庭 孝夫
技師		小澤 佳憲	小澤 佳憲	
		大庭 孝夫	大庭 孝夫	

調査及び整理期間中には、元福岡県文化財保護指導委員の金子文夫先生、前指導委員の東典子先生、現指導委員の安達照真先生、また地元である吉井町教育委員会の小河誠嗣・平川祐介・江島尚子・樋口秀夫氏、浮羽郡文化財担当の浮羽町教育委員会寺島克史氏・田主丸町教育委員会丸林禎彦・江島伸彦氏、北筑後教育事務所生涯学習課の立花宏・重藤輝行氏には現地説明会・親子



虹の出た現場

体験発掘事業を進めるにあたり大変お世話になりました。3年にも及ぶ調査には多数の方々作業員として参加されました。調査は悪天候、悪条件での作業も伴い、これら多くの作業員の皆様の御尽力無しには無事に調査を完了することはなかったと思います。ここに深甚の謝意を表します。



- A. 空知遺跡 1. 仁石御門堀遺跡 2. 広瀬地区遺跡 3. 吉井中学校遺跡 4. 月岡古墳 5. 日岡古墳 6. 塚堂遺跡・塚堂古墳 7. 田島北遺跡 8. 西隈上古墳 9. 重定古墳・柳名古墳 10. 法正寺古墳 11. 日本遺跡 12. 沖出遺跡 13. 若野遺跡 14. 弥次部古墳
- 15. 船越遺跡 16. 尾瀬西文蔵遺跡 17. 吉井大手水遺跡 18. 富本櫛巻遺跡 19. 富本櫛巻遺跡 20. 富本正地遺跡 21. 竹重遺跡 22. 女塚古墳 23. 生葉地区遺跡 24. 大渡遺跡 25. 船越高原遺跡 26. 船越高原遺跡 27. 船木地区遺跡 28. 千代久遺跡
- 29. 船越一ノ上遺跡 30. 船越宮ノ前遺跡 31. 亀王遺跡 32. 船木平田遺跡 33. 松門寺A遺跡 34. 玉田遺跡 35. 大の遺跡 36. 日詰遺跡 37. 豊成中ノツロ 38. 養生田古墳群 39. 大塚古墳・大塚古墳群 40. 清長橋古墳群 41. 森部平原古墳群 42. 法華原遺跡
- 43. 扇形原古墳群 44. 東扇形原古墳群 45. 刺塚古墳 46. 恩賜八幡宮古墳 47. 大迫遺跡 48. 本陣古墳 49. 外之原遺跡 50. 志波長崎宮遺跡 51. 把木宮原遺跡 52. 志波長崎宮遺跡 53. 草隈遺跡 54. クリナラ遺跡 55. 西の迫遺跡 56. 長光寺遺跡

第3図 周辺遺跡分布図(1) (1/50,000)

II. 位置と環境

1. 地理的環境

堂畑遺跡は、福岡県浮羽郡吉井町大字新治字堂畑・柿木畑・大月に位置する。遺跡の所在する吉井町は、福岡県の南東部に位置し、浮羽町を挟んで、東は大分県日田市に至る。町域は面積28.29k㎡、人口約17,000人を測り、南には東西に屏風のように連なる水縄山地と両側に広大な沖積平野を形成する筑後川で町の南北を区切られる。

吉井町は水縄山地山麓では葡萄や柿など果樹栽培が盛んであり、筑後川に近い平野部では水田を中心とする農業が盛んである。吉井町は江戸時代には久留米市から日田市へと至る豊後街道が通る宿場町として、また水縄山地に産出する木材資源の売買を中心にした商業地として栄え、現在でもその当時の面影を残す町並みが残っており、平成9年には国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。現在、町並みの整備を進めており、近年では県外の観光客も増加する傾向にある。

吉井町の北を流れる筑後川は阿蘇外輪山に源を発し、筑紫平野に出会うと緩やかな蛇行を繰り返しながら西流し、久留米地峡部で流れを西南に転じ、福岡・佐賀の県境を曲流しながら有明海に注ぐ、九州第一の河川である。筑後川両側に形成される筑紫平野は、福岡県側では筑後平野といい、背振山地と水縄山地を結ぶ久留米地峡部を境にして、上流部を両筑平野、下流部を南筑平野と呼ぶが、吉井町が位置する両筑平野は筑後川及びその支流によって形成された、ほぼ三角形の平野である。

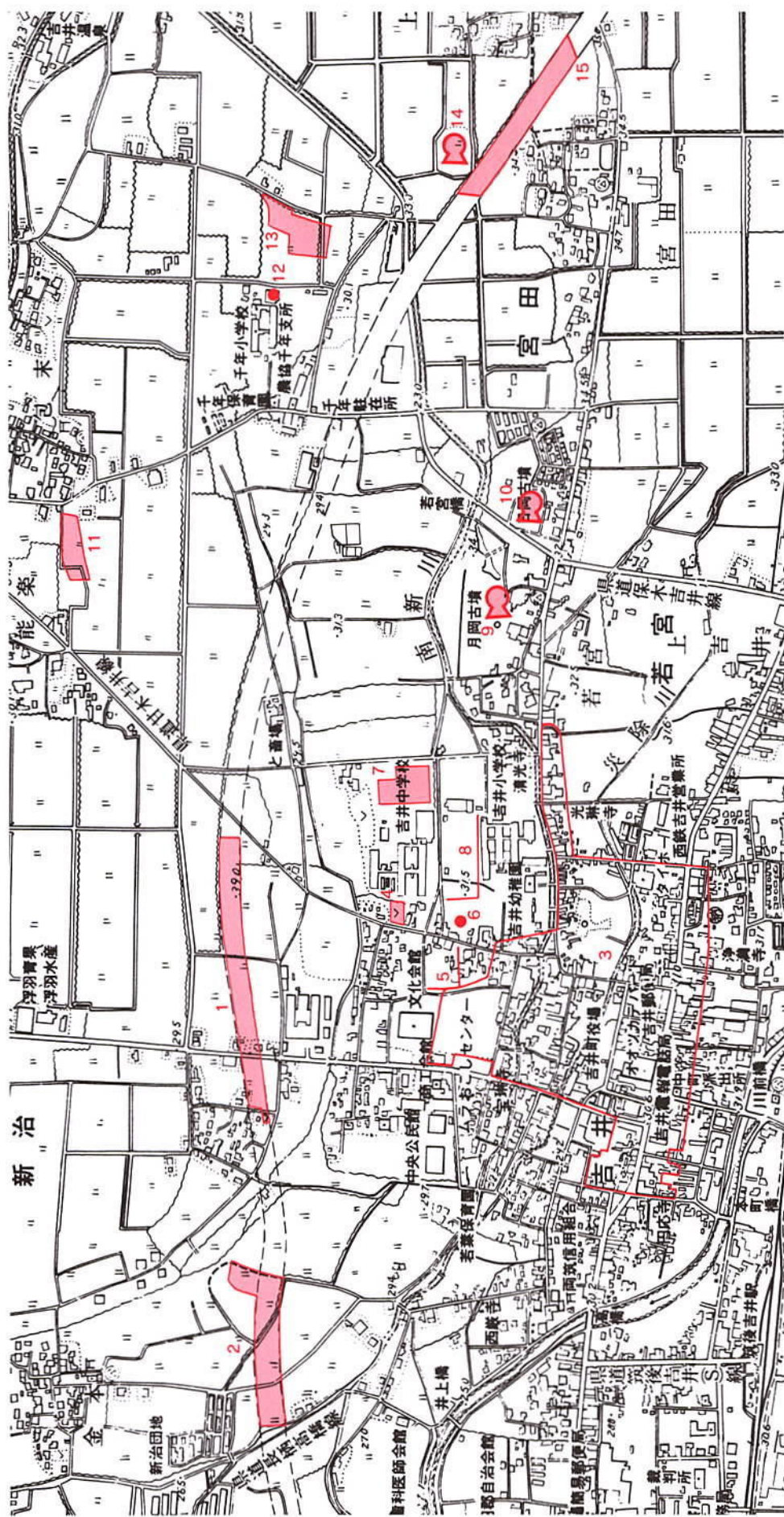
この三角形の平野の大部分は、弥生時代以降に成立した、いわゆる「新期沖積層」にあたる。この「新期沖積層」は弥生時代になると、筑後川による両筑平野の沖積作用はほとんど終わり、周辺の丘陵地から流れる河川による沖積作用が盛んになって形成されたものであり、土壌は砂・シルト・粘土から構成され、堂畑遺跡も同様の地盤を呈する。堂畑遺跡の周辺の遺跡では縄文時代後期以前の遺構・遺物などは確認されておらず、堂畑遺跡が立地する場所も弥生時代以降に形成されたものと思われる。

堂畑遺跡はこの「新期沖積層」の一部である自然堤防上に位置する。この自然堤防は洪水で氾濫した水が、両側にあふれて流速が急に落ちるため、運ばれてきた土砂が堆積してつくられるものである。巨瀬川と筑後川本流の間には大小多くの旧河道が存在し、この旧河道の中で現在も水をたたえる美津留川は、堂畑遺跡を取り囲むように西に流れ、堂畑遺跡が位置する自然堤防もこの美津留川によって形成されたものと思われるが、今回報告する堂畑遺跡中央部（1・2区）と仁右衛門畑遺跡は粘質土系の地山であるのに対し、堂畑遺跡1・2次調査地点を含む西側（3・4区）は砂・シルト層が地山である。このことは第5図の断面図を参照すると自然堤防上でも場所によってかなりの凹凸があり、この凹凸が遺構の在り方にも大いに関係すると考えられる。

2. 歴史的環境

浮羽郡内の歴史的環境については、『堂畑遺跡』Iにまとめているので（重藤2002）、本書では堂畑遺跡周辺の遺跡の概要について、第2図の地形分類図も参考にしつつ、地形や地質の在り方を推測しながら、様相を見ていく。

まず、先述したように堂畑遺跡は美津留川の形成した自然堤防上に位置するが、第2図を見ると美津留川を挟んだ巨勢川との間の現在の市街地部分は自然堤防の微高地が広がっていたことがわかる。その自然堤防の北端、堂畑遺跡南約200mに広園地区遺跡、吉井中学校遺跡が位置する。もっとも北側の広園遺跡第I地点では地山が礫層であり、旧河川の氾濫原に近いことが推測でき



1. 堂畑遺跡 2. 仁右衛門畑遺跡 3. 吉井町伝統的建造物群保存地区 4. 廣園遺跡第1地点 5. 廣園遺跡第2地点 6. 小塚古墳 7. 吉井中学校遺跡第1地点
8. 吉井中学校遺跡第2地点 9. 月岡古墳 10. 月岡古墳 11. 月岡古墳 12. 千年丸遺跡 13. 千年小森遺跡 14. 塚堂古墳 15. 塚堂遺跡

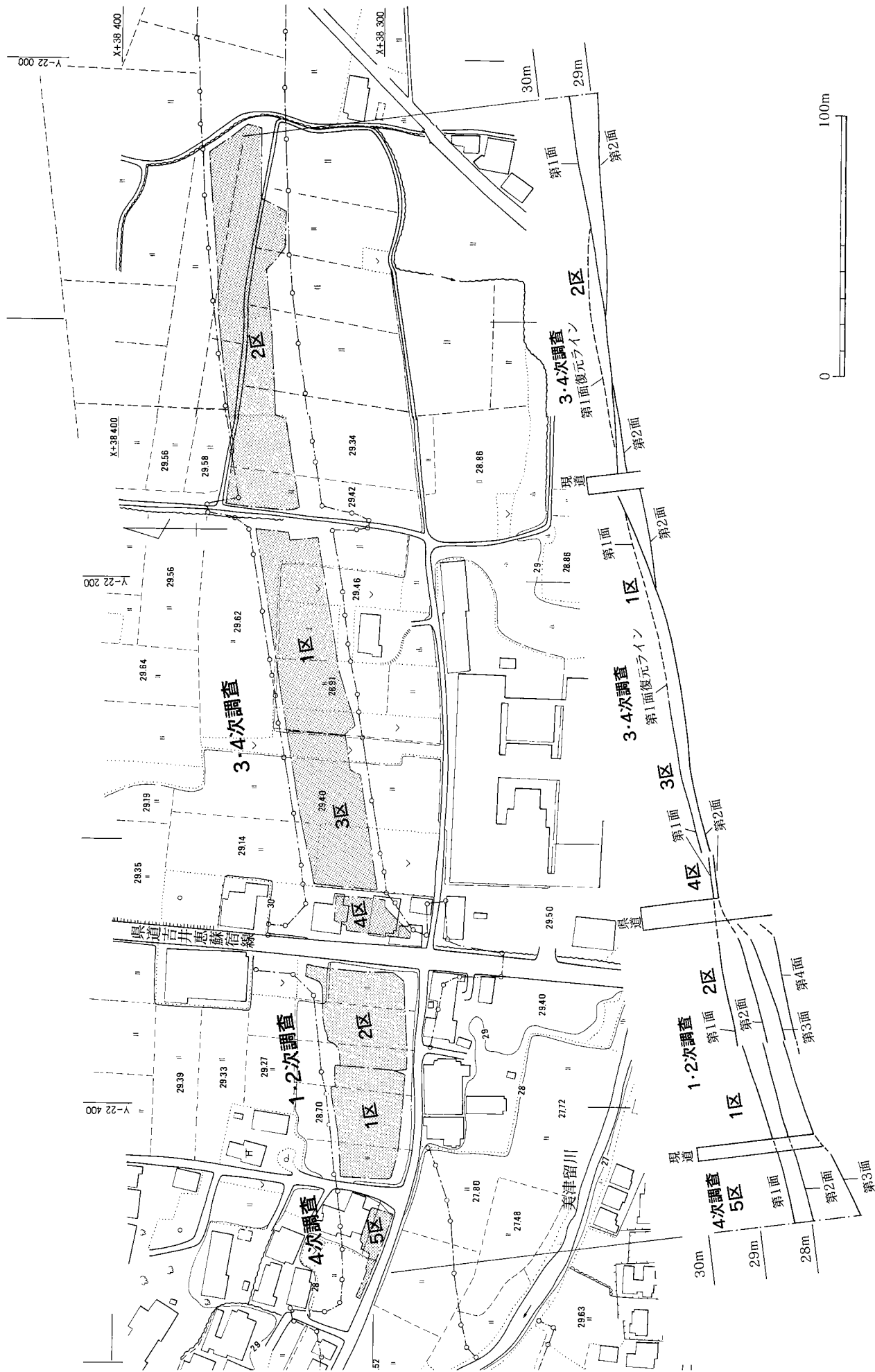
第4図 周辺遺跡分布図(2)

るが、約90mの南の第II地点では弥生時代中期前半～中期末の甕棺墓と石棺墓を確認しているが(江島2003)、この地点の地山は安定した砂質シルトを呈する。広園地区遺跡の東約250mに位置する吉井中学校遺跡においても同様の地質であり、弥生時代後期と古墳時代後期～奈良時代の2時期を主体とする集落が広がる(平川2001)。特に弥生時代後期には竪穴住居跡47棟が検出され、長軸が7.0mを越す大型竪穴住居跡も数棟存在し、覆土からは多数のガラス小玉が出土している。このことから弥生時代後期には吉井中学校遺跡を中心に集落が展開するが、墓地である広園地区遺跡に関係する中期の集落は西側の広園地区遺跡周辺に展開していたと考えられる。堂畑遺跡3・4次調査においても、中期後半～末の竪穴住居跡などの遺構が確認されているが、第2図から遺跡間には旧河川が流れており、両遺跡は別の自然堤防上に位置すると考えられることから、別の集落であると位置づけておきたい。なお、堂畑遺跡の北東約200mに位置する千年西田遺跡では(平川2001)、弥生時代中期後半の石棺墓・土壙墓が各1基調査されており、千年西田遺跡は堂畑遺跡の同一自然堤防上に存在することから、やや離れているものの、堂畑遺跡の墓地は千年西田遺跡周辺に位置する可能性もある。吉井中学校遺跡では古墳～奈良時代の竪穴住居跡17棟確認し、南の第2地点では古墳～奈良時代を中心とする掘立柱建物跡を検出することも、別の集落とすることの判断材料となる。また広園遺跡第II地点では小塚古墳のものと考えられる埴輪が出土したことから、古墳の時期がV期にあたることが判明し、若宮古墳群との関係も含め、注目される資料である。

吉井中学校遺跡から東約250mには5世紀中葉～6世紀前半に連続して築造された若宮古墳群が存在する。月岡・日岡古墳は周濠確認トレンチから砂質土を基盤とする自然堤防上に位置することが分かる(児玉編1990・1991)。月岡古墳は周濠部検出面で標高31m前後であり、日岡古墳は月岡古墳よりやや高く周濠部検出面で標高32m前後を測る。また日岡古墳から北東に約300m離れた塚堂古墳は内濠検出面で31.7m前後を測り、各古墳の削平度も考慮に入れなければならないが、最も古く築造された月岡古墳が最も低い地盤に立地することは明らかである。塚堂古墳周辺に広がる塚堂遺跡では、弥生時代後期後半・古墳時代前期～中期まで集落が継続的に営まれており、古墳時代前期は庄内系や布留系の外来系土器も出土すること、5世紀中葉のカマドを持つ住居跡や朝鮮半島系土器の存在から、他地域との交流を活発に行っていた集落であることがこれまでの調査から判明している(馬田編1983・副島編1984・佐々木編1984・馬田編1985)。しかし、塚堂遺跡周辺は第2図の地形分類図では平野にあたるが、塚堂遺跡の遺構検出面は標高32.7m前後、自然堤防上に位置する吉井中学校・広園地区遺跡の遺構検出面が標高30m前後であり、吉井中学校の方が遺構の残存度も良いことから推測すると、弥生時代後期までの河川の堆積により、新たに形成された微高地に塚堂遺跡が展開する状況が推測できる。この塚堂遺跡は古墳中期まで中心的な集落として存続し、若宮古墳群の成立に関しても関連すると考えられるが、6世紀前半～中頃の遺構は確認されていないことは若宮古墳群の後続の問題と何らかの影響するものと考えられる。

塚堂遺跡と同一の微高地(自然堤防上)にある可能性がある千年小森遺跡(平川2001)では弥生時代後期終末と7世紀中葉～8世紀前半の竪穴住居跡58棟など多数の遺構を確認しており、弥生時代終末には塚堂遺跡において外来系土器が出土する時期と重なることから、その関係が注目される。

また今年度、千年小森遺跡西に隣接する千年小学校内(千年今丸遺跡)で校舎改築に伴い吉井町教育委員会が発掘調査を行っており、弥生後期の竪穴住居跡十数棟、6世紀後半代の径35mの大型円墳を確認している。特に大型円墳の存在は日岡古墳以降の若宮古墳群の首長系列を考える上でも重要であり、今後の報告書の刊行が待たれる。



第5図 調査区周辺地形図 (1/2,000) ただし断面図鉛直方向は 1/100)

3. 堂畑遺跡1・2次調査と仁右衛門畑遺跡の概要

堂畑遺跡と仁右衛門畑遺跡は美津留川を挟んだ自然堤防上に位置する。堂畑遺跡を検討する上で、仁右衛門畑遺跡との比較が必要であり、ここでは堂畑遺跡1・2次調査と仁右衛門畑遺跡の調査成果の概要をまとめておきたい。

堂畑遺跡は西半分を1区、東半分を2区と調査の年度別に地点名をわけて報告している。堂畑遺跡では弥生時代の遺構は弥生時代中期後半～中期末の竪穴住居跡7棟など1区南西部を集中して存在し、2区では土坑2基のみである。2区は谷状の窪みが南東部にあり、遺構は少ない。仁右衛門畑遺跡では中期初頭～前半の竪穴住居跡15棟、土坑101基が確認されているが、調査区中央と北東の2ヶ所に分布の中心が分かれる。また後期中葉～後半の竪穴住居跡5棟は調査区の東に偏って存在する。両遺跡で遺構の存続期間が重ならないのは、仁右衛門畑遺跡で縄文後期～晩期の土器が出土していることと合わせ、集落の在り方として興味深い。現時点では、仁右衛門畑遺跡の方が標高約2mも高く、地山も粘土質であることから古い時代に形成された自然堤防であった可能性がある。

古墳時代になると、堂畑遺跡では、前期には竪穴状遺構2基は北東部に、中期の竪穴住居跡2棟は南西部に、後期には竪穴住居跡17棟等の遺構が、調査区中央やや西に固まって存在し、本調査区の中心の時期となる。仁右衛門畑遺跡では、前期前半の竪穴住居跡6棟存在するが、集中しない。中期では竪穴住居跡15棟確認され、カマドを採用する住居跡も存在する。この竪穴住居跡はグループを単位として、集落が拡充されたものとされる。後期には竪穴住居跡5棟と集落が縮小する。

堂畑遺跡では7世紀前半の竪穴住居跡1棟、8世紀後半は竪穴住居跡を1棟確認しており、また掘立柱建物跡5棟などが存在する。中でも1号掘立柱建物跡は2×8間の大型のものであるが、存続した下限が7世紀後半の2×5間の2号掘立柱建物跡が規模を縮小して建て替わった可能性が指摘されている。仁右衛門畑遺跡においては7世紀後半～8世紀後半の竪穴住居跡31棟、掘立柱建物跡6棟などが確認されている。この時期もグループを単位とした集落構成が想定され、大型の竪穴住居跡と大型掘立柱建物群で構成されるグループと普通の竪穴住居跡のみで構成されるグループが指摘されており、前者のグループの竪穴住居跡から円面硯が出土しており、識字層の存在が予想されるが、建物群は官衛的配置ではないことから、報告者は一般集落の中での有力者の居館の可能性を指摘する。このことは堂畑遺跡1次1号掘立柱建物跡、2区東で検出した3次9号掘立柱建物跡の位置づけを考えるうえでも参考意見となる。なお、両遺跡からは、中世～近世の遺構・遺物が出土しているが、堂畑遺跡3・4次調査では当該期の遺構・遺物を確認できなかったことから、3、4次調査地点では古代後期以降は、現在と同じく田畑として利用されたのであろう。

参考文献

- 馬田弘稔編 『塚堂遺跡』Ⅰ 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集 福岡県教育委員会
副島邦弘編 『塚堂遺跡』Ⅱ 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第2集 福岡県教育委員会
佐々木隆彦編 『塚堂遺跡』Ⅲ 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第3集 福岡県教育委員会
馬田弘稔編 『塚堂遺跡』Ⅳ 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第4集 福岡県教育委員会
吉田東明編 2000『仁右衛門畑遺跡』Ⅰ 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第12集 福岡県教育委員会
吉田東明編 2001『仁右衛門畑遺跡』Ⅱ 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第14集 福岡県教育委員会
重藤輝行編 2002『堂畑遺跡』Ⅰ 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第17集 福岡県教育委員会
児玉真一編 1989『若宮古墳群』Ⅰ 吉井町文化財調査報告書第4集 吉井町教育委員会
児玉真一編 1990『若宮古墳群』Ⅱ 吉井町文化財調査報告書第6集 吉井町教育委員会
平川祐介 2001『千年地区遺跡群』 吉井町文化財調査報告書第13集 吉井町教育委員会
平川祐介 2002『吉井中学校遺跡』遺構編 吉井町文化財調査報告書第15集 吉井町教育委員会
江島尚子 2002『広園地区遺跡』 吉井町文化財調査報告書第16集 吉井町教育委員会
田主丸町誌編集委員会編 1996『田主丸町誌』第二巻 田主丸町
※千年今丸遺跡の内容については吉井町教育委員会の江島尚子氏のご教示を得た。

Ⅲ 発掘調査の記録

1. 遺跡の概要と基本層序

(1) 遺跡の概要

堂畑遺跡は現在の美津留川の北岸に位置し、第2図の周辺地形分類図を見ると遺跡南側に沿って、筑後川の支流にあたる旧河川が東西に貫流することが分かり、その右岸の自然堤防上に遺跡は東西長く広がる。自然堤防上に立地するため川の沖積作用により厚く、細砂・シルトが堆積する。そのため遺構面は複数に及び、1・2次調査・4次調査5区では3～4面、2区中央部の削平された部分を除き、1～4区までほぼ全面2面の遺構面が存在する。

堂畑遺跡3・4次調査は、堂畑遺跡1・2次調査地点とは県道吉井恵蘇宿線を挟んだ東側の約320mの範囲を調査し、調査対象面積は計10,500㎡、先述したように複数の遺構面が存在するため、実際の調査面積は計14,000㎡、1・2次調査とあわせると調査した面積は21,700㎡になる。平成12・13年度は3次調査、平成14年度は4次調査とし、調査の便宜上調査した順に1区～5区まで名前をつけるが、その位置関係は第5図にある。今年度は1区の成果のみ報告する。

1区では第1面では竪穴住居跡44棟・掘立柱建物跡2棟・土坑4基・溝7条など、第2面では竪穴住居跡30棟、土坑8基、溝7条、円形周溝状遺構3基など多数の遺構を検出した。出土土器には弥生土器・土師器・須恵器があり、内面朱付着土器・移動式竈片・陶硯など出土した。また石器・鉄器・製塩土器のほか、小形仿製鏡・不明青銅器片など多数の遺物が出土し、調査段階でパンケース150箱分の遺物が出土した。

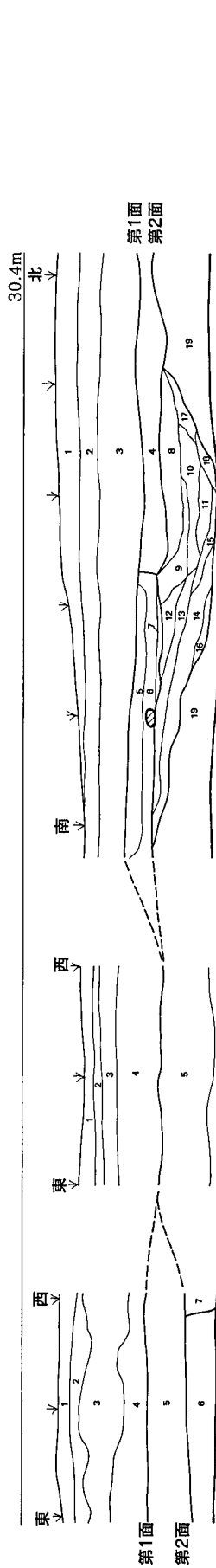
1・2次調査、3・4次調査2～5区と比べ、1区は遺構密度が高く、西側から表土剥ぎを開始した。しかし、第1面地山も包含層であり、多量の土器が地山と遺構埋土から出土し、第1面の地山が暗茶褐色粘質土、遺構覆土が暗褐色粘質土と区別が難しかったため、第1面の遺構は1区中央から西側では西端部分で約20cm下げすぎ、西側では第1面の遺構のほとんどは住居床面レベルまで下がっており、カマドの焼面が見える状態であった。このため、基本土層図から推測すると、1区西端部は若干高くなる地形のため、竪穴住居跡のいくつかは掘り飛ばしてしまった可能性もあるが、51・52号住居跡のように床面しか残っていないものでも極力遺構検出を行った。この反省をもとに、2～5区では表土剥ぎ段階から少しずつ下げては、人力で遺構検出を行ったことで、2層の遺構面を把握し、調査を行うことができた。

なお、本書では第1面・第2面と分けて報告するが、先述したように1区西側では明確に2層に分けて調査を行っていない。また途中で調査担当者が変わったため、担当者間で遺構の認識が異なる部分もあり、遺構の切り合いが複雑になってしまった箇所も存在する。そこで本書では最初に検出した遺構を第1面の遺構とし、年度を挟んでその後検出した遺構を第2面とするが、1区西側～中央にかけては第1面で弥生時代の遺構を検出しているため、西側部分においては各個別遺構の第1・2面どちらに属するかは判断できない。1区第2面遺構配置図も中央より西側をどう表現するか非常に迷ったが、25号住居跡から西は第1面しか遺構配置図を作成せず、25号住居跡より東側は第2面の遺構配置図を作成することにした(第10・11図)。

このように非常に分かりづらくなってしまったのは、調査担当者の責任であり、来年度の報告の中で、堂畑遺跡全体の時期別遺構変遷図を作成する予定であるので、そこで責任を果たしたい。

(2) 基本層序(図版2、第6～8図)

3・4次調査では5区を除き調査区南壁で土層図を作成した。今年度報告は1区のみであるが、1・2次調査の土層図も再録し(第8図)、浮羽バイパスで調査した堂畑遺跡全体の堆積状況と遺



2区東南壁土層

1. 暗褐色粘質土(表土)
2. 灰色粘質土に褐色土が80%混じる(床土)
3. 灰色粘質土に暗黄灰色粘質土がブロック状に20%、黄褐色粘質土がブロック状に30%混じる
4. 暗黄褐色粘質土に黄灰色細砂がブロック状に10%混じる
5. 暗黄褐色粘質土に黄灰色細砂が30%混じる
6. 黄灰色細砂(地山)
7. 暗黄褐色粘質土に黄灰色細砂が50%混じる(第2面ビット)

2区南壁土層

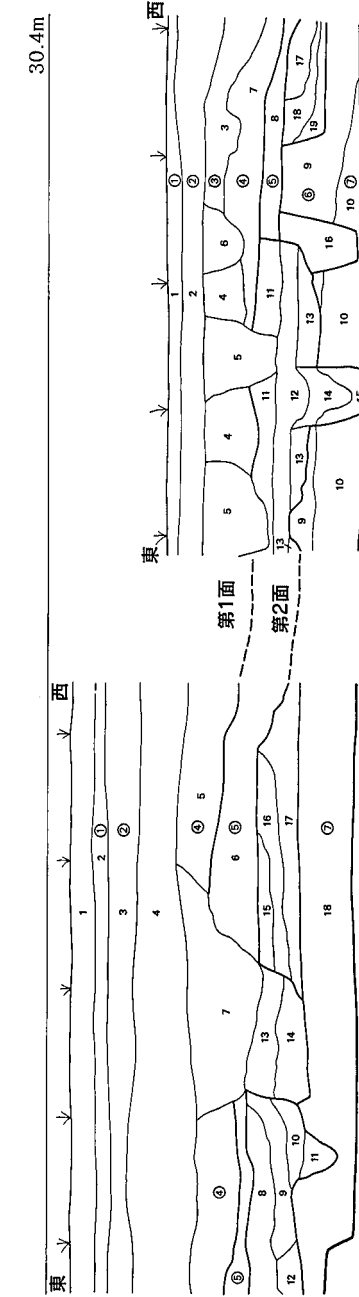
1. 暗褐色粘質土(表土)
2. 暗褐色粘質土に褐色土が50%混じる(旧表土)
3. 灰色粘質土に褐色土(鉄分が主体)床土
4. 暗黄褐色粘質土に黄褐色粘質土がブロック状に10%混じる
5. 黄灰色細砂に暗黄褐色粘質土が10%混じる(地山)
6. 黄灰色細砂(地山)
7. 黄灰色細砂(地山)

2区西端西壁土層

1. 暗褐色粘質土(表土)
2. 灰色粘質土に褐色土が混じる(床土)
3. 暗褐色粘質土に灰色粘質土がブロック状に60%混じる
4. 灰色粘質土に暗黄褐色粘質土が混じる
5. 暗黄褐色粘質土に黄褐色粘質土が混じる
6. 5より粘性が強く、やや暗い
7. 5よりさらにさらに暗く、灰少量混じる
8. 暗黄褐色粘質土、黄褐色粘質土が少量混じる
9. 8より暗く、褐色に近しい
10. 9より暗く、褐色に近しい
11. 黄褐色粘質土に暗黄褐色粘質土が20%ほど混じる
12. 暗褐色粘質土に灰色粘土少量混じる
13. 12よりやや暗く、灰色粘土の割合が高い、灰少量混じる

14. 黄褐色粘質土と黄褐色粘質土が互層状に堆積し、混じり多量
15. 11より暗黄褐色粘質土が70%混じる
16. 14より明るく、黄褐色粘質土が60%混じる
17. 黄褐色粘質土に暗黄褐色粘質土が少量混じる
18. 17より砂の割合が高く、また暗い
19. 暗黄褐色粘質土と黄褐色粘質土の互層(地山)

8~18:溝24



1区中央南壁土層

1. 褐色粘質土
2. ①表土
3. ②床土
4. 明灰褐色粘質土
5. ④に若干灰、焦土混じる
6. ⑤に黄灰色粘質土が互層状になる
7. 暗灰褐色粘質土+暗茶褐色粘質土に明灰褐色粘質土が混じる
8. ④+⑤+⑥の土がまじる(田んぼの溝か?)
9. 暗褐色粘質土に焦土少量混じる
10. 9より黄灰色粘質土が多く混じる
11. 黄灰色粘質土に褐色粘質土が混じる
12. 暗黄褐色粘質土に焦土少量混じる
13. 褐色粘質土に黄灰色粘質土が混じる(ビット)
14. 暗褐色粘質土に黄褐色粘質土がより多く混じる(ビット)
15. 黄褐色粘質土
16. 暗黄褐色粘質土(15-17より暗い)
17. 暗黄褐色粘質土
18. ⑦層は全く混じらない、黄褐色粘質土との互層(地山)

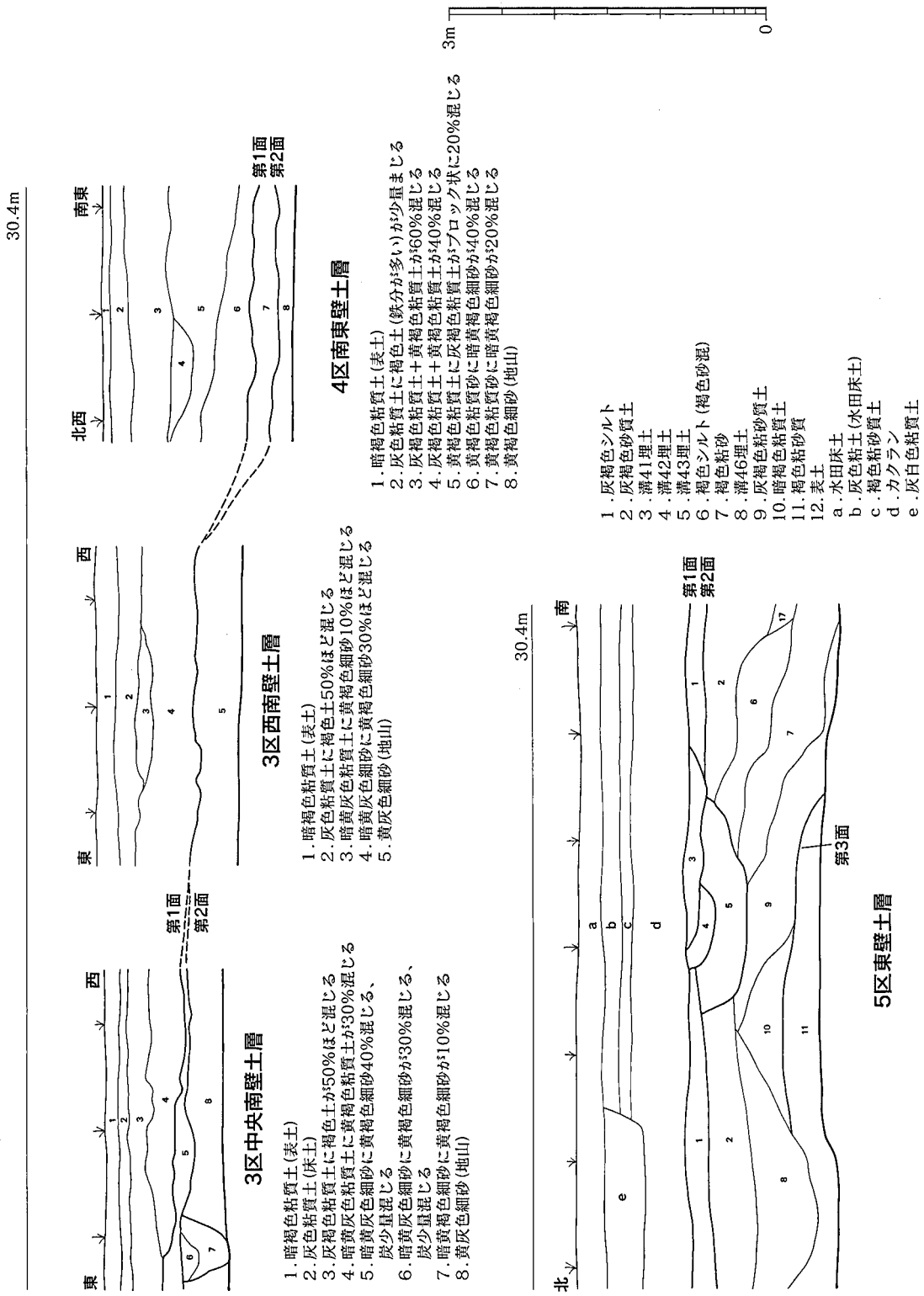
1区西端土層

1. (表土)暗灰褐色土
2. 灰色粘質土に褐色鉄分が混じる(床土)
3. 茶褐色粘質土
4. 暗褐色粘質土+暗茶褐色粘質土(3+7に近い、田んぼの溝か、砂質が少ない)
5. 暗黄褐色粘質土に灰、暗褐色粘質土が混じる
6. 暗茶褐色粘質土(4より明るく、灰混じる)
7. 暗褐色粘質土
8. 暗茶褐色粘質土(7より明るく、砂質が強くなる)
9. 暗黄褐色粘質土に黄褐色粘質土が混じる(地山)
10. 黄褐色粘質土に黄褐色粘質土が混じる
11. 暗褐色粘質土+茶褐色粘質土に灰少量混じる
12. 暗褐色粘質土に灰、焦土少量混じる
13. 暗褐色粘質土+暗黄褐色粘質土(住居盛り込み)
14. 灰褐色粘質土に黄褐色粘質土がブロック状になる
15. 黄褐色粘質土に灰褐色粘質土がブロック状になる
16. 暗黄褐色粘質土に灰褐色粘質土が混じる
17. 暗黄褐色粘質土(ビット)
18. 暗黄褐色粘質土に灰褐色粘質土が少量混じる
19. 暗黄褐色粘質土に褐色粘質土が少量混じる

8~12:土5 15-16:住30

11~13:住4 17~19:住51 (丸で囲んだ数字は1区西端土層と共通するもの)

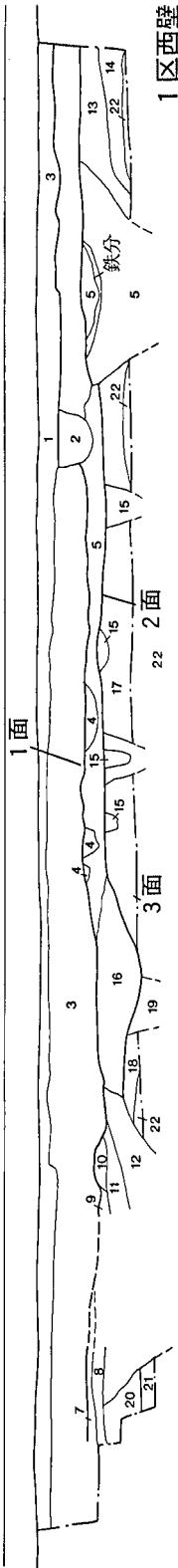
第6図 1~5区土層実測図(1) (1/60)



第7図 1～5区土層実測図 (2) (1/60)

29.0m北

南

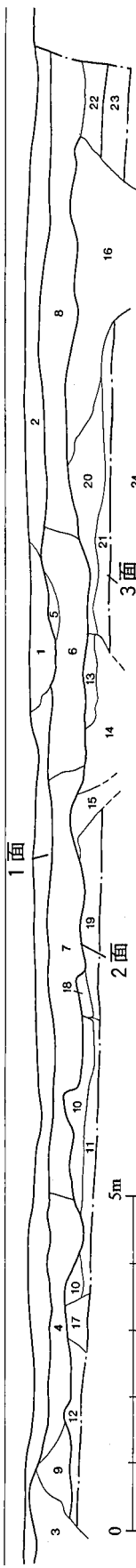


1区西壁

- 1. 灰褐色砂質シルト (水田床土、下面に鉄分沈澱)
- 2. 第1面遺構
- 3. 褐色砂質シルト (斑状に鉄分混)
- 4. 第1面遺構
- 5. 溝7
- 6. 暗褐灰色砂質シルト
- 7. 灰色粘質シルト
- 8. 暗褐色砂質土 (鉄分、マンガン多)
- 9. 茶褐色砂質土
- 10. 灰褐色砂質土 (マンガン多)
- 11. 10に同じ
- 12. 灰色シルト質粘土 (マンガン、鉄分多)
- 13. 黒褐色砂質シルト (土器多)
- 14. 暗褐色砂質シルト (土器多)
- 15. 第2面遺構
- 16. 暗褐色砂質土シルト (下面拳大円礫)
- 17. 暗褐色砂質シルト
- 18. 黒褐色砂質シルト
- 19. 第2面遺構
- 20. 暗褐色砂質シルト
- 21. 黒褐色砂質シルト
- 22. 灰褐色砂質土 (地山)

北

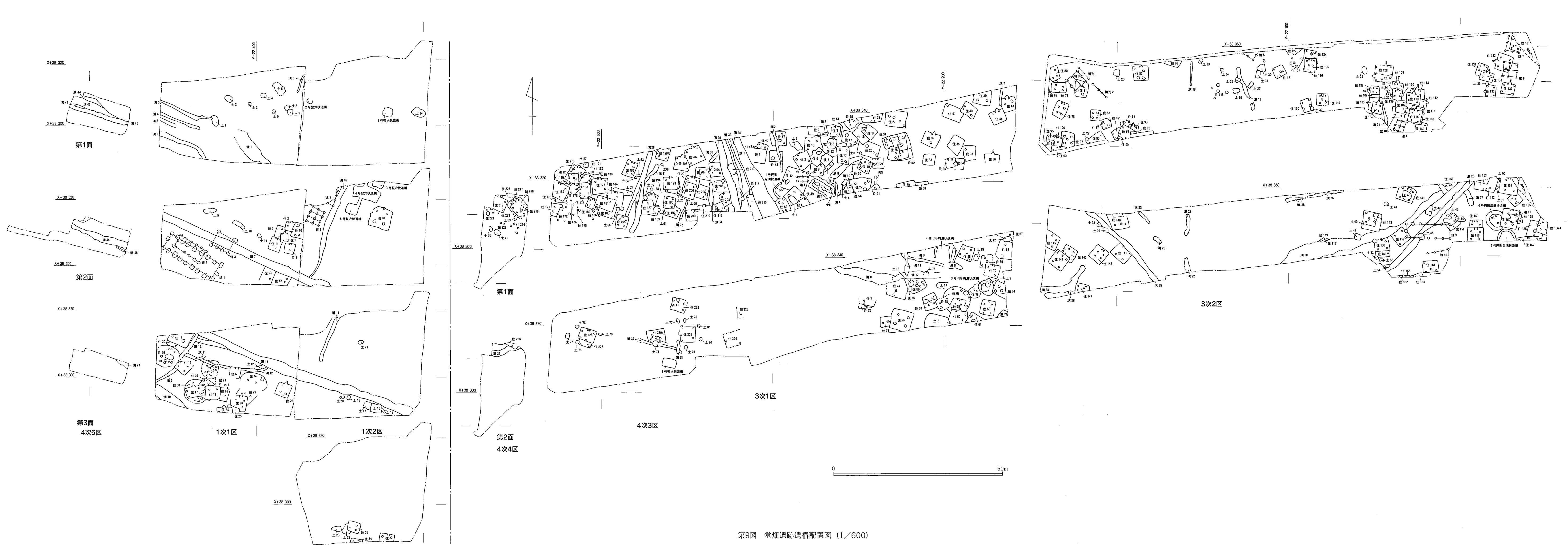
29.0m南



1区東壁

- 1. 灰色砂質シルト (鉄分多)
- 2. 褐色砂質シルト
- 3. 溝8埋土
- 4. 暗灰褐色砂質シルト
- 5. 灰色砂質シルト
- 6. 暗褐色シルト
- 7. 灰黄褐色砂質シルト
- 8. 灰褐色砂質シルト
- 9. 暗褐色砂質シルト
- 10. 暗褐色砂質シルト (ブロック状に灰色砂20%混)
- 11. 明褐色砂
- 12. 暗黄灰色砂質シルト
- 13. 灰褐色砂質シルト
- 14. 褐色砂質シルト (暗褐色土30%混)
- 15. 褐色砂質シルト
- 16. 溝7埋土
- 17. 黄褐色砂質シルト
- 18. 暗褐色砂質シルト
- 19. 黒褐色砂質シルト
- 20. 暗黄褐色砂質シルト (黄褐色・灰色土ブロック10%混)
- 21. 暗褐色砂質シルト
- 22. 褐色砂質シルト
- 23. 黒褐色砂質シルト
- 24. 灰褐色砂質土 (地山)

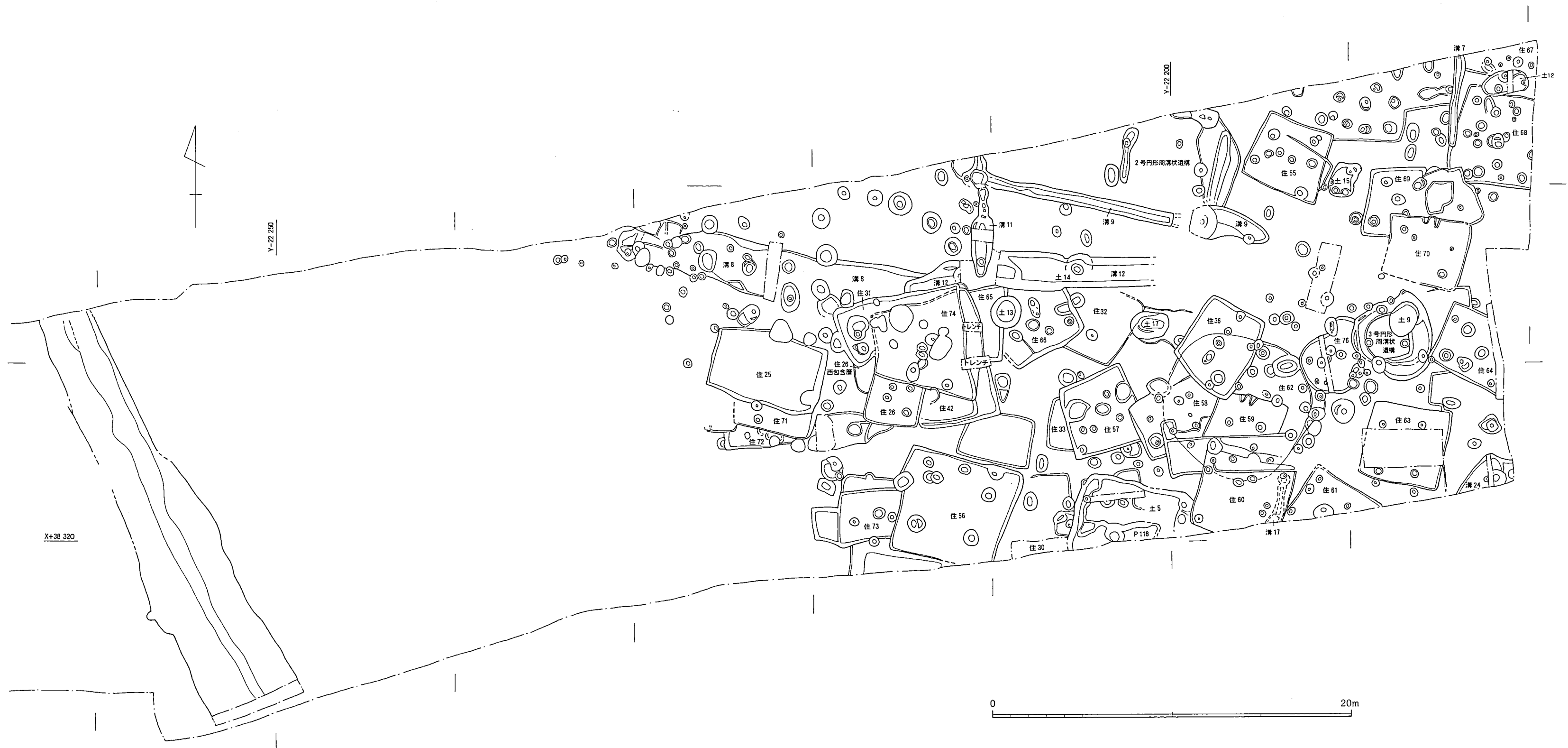
第8図 1・2次調査1区西壁・東壁土層実測図 (1/100) (『堂畑遺跡I』から再録)



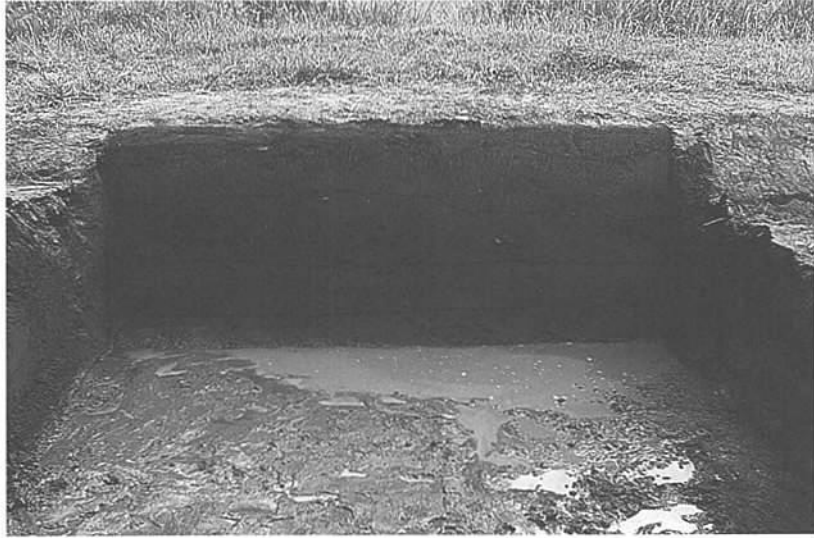
第9圖 堂烟遺跡遺構配置圖 (1/600)



第10図 1区第1面遺構配置図 (1/200)



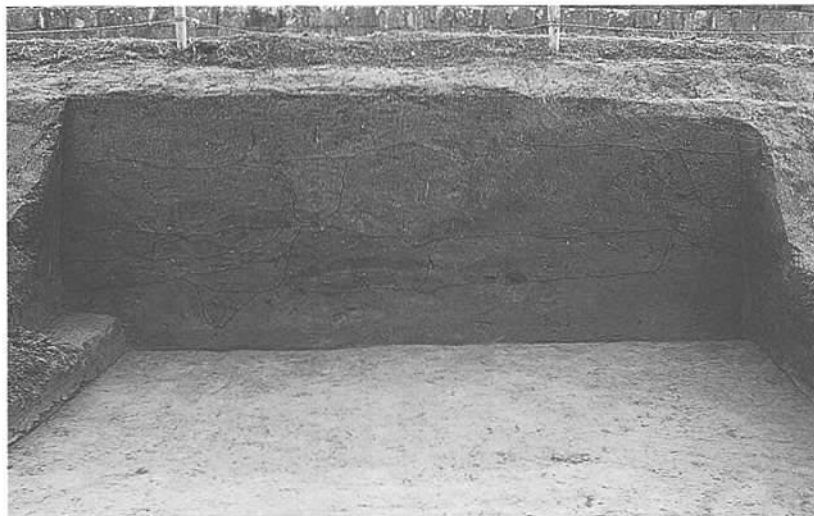
第11図 1区第2面遺構配置図 (1/200)



2区東、南壁土層

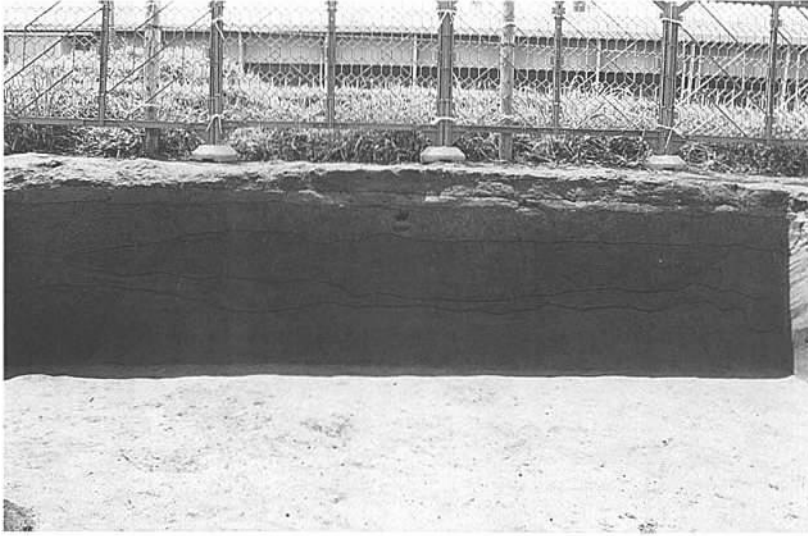


2区中央、南壁土層

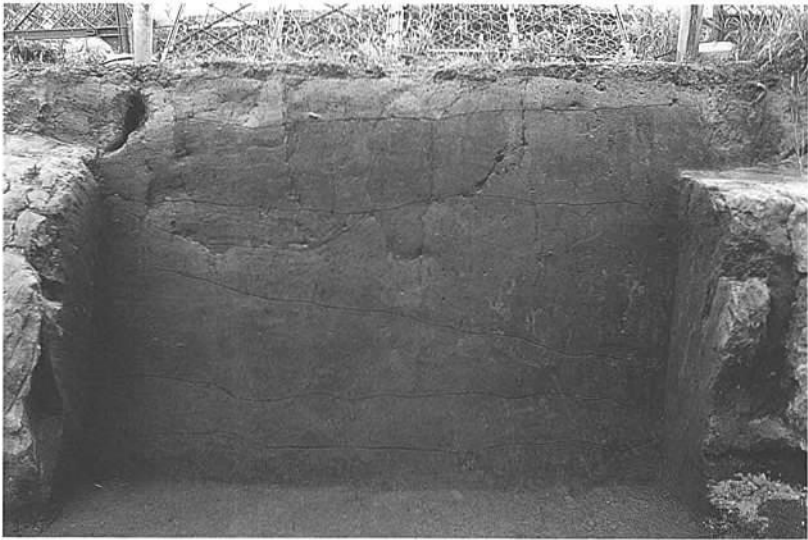


1区中央、南壁土層

堂畑遺跡各区土層(1)



3区中央、南壁土層



4区南、東南壁土層



5区東壁土層

堂畑遺跡各区土層(2)

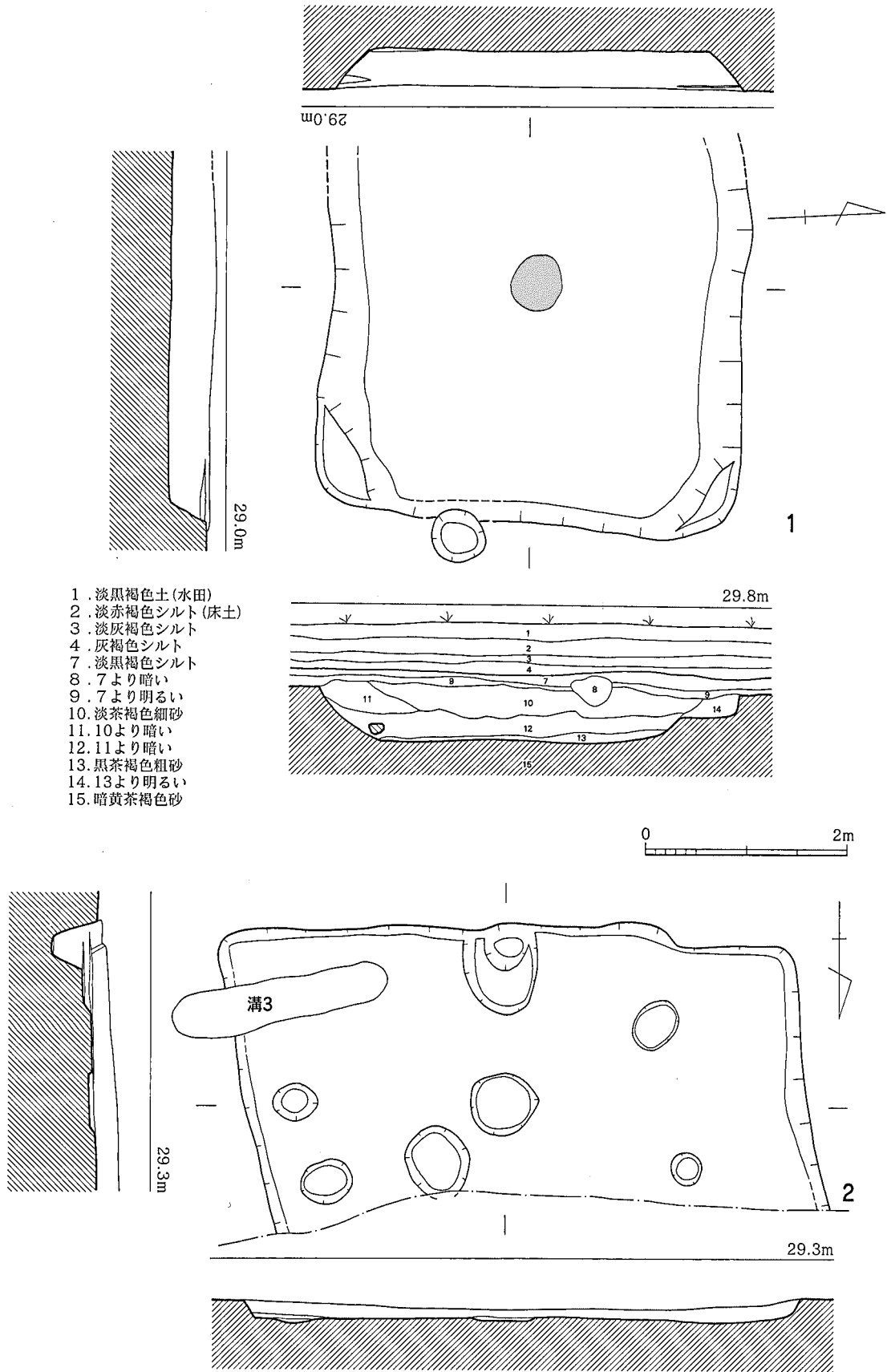
構面の在り方について検討を加える。なお、現在2～5区は整理途上で、遺構・遺物の検討はほとんど行っておらず、細かい点については見解が変わる可能性もあるが、その場合は来年度刊行予定の『堂畑遺跡Ⅲ』の中で補いたい。

西から順に基本層位を説明すると、2区では中央から東西で土の堆積状況が異なる。2区東側の第1面地山は暗黄灰色細砂、第2面地山は黄灰色細砂であるが、2区西端では第1面地山は褐色粘質土、第2面は同じ黄灰色細砂というように、第1面の地山が粘質土系になる。このことは1区でも2区西端と同じ結果となるが、3区中央では第1面地山は暗黄灰色細砂、第2面は黄灰色細砂となり、再び第1・2面とも砂質土系になる。4区でも3区中央と同じ砂質土系、さらに西側の1・2次調査区では、第1面は3・4次調査では確認されなかった中世を主体とする遺構面であるものの、第1～4面とも砂質土系の地山であり、これは5区第1～3面でも同様である。

この差を各区の各遺構面のレベルから考えてみたのが、第5図の断面図である。これと各区の第6～8図の土層をあわせて検討すると、2区東では第1面は29.2m前後に、第2面は28.9mであるが、2区中央では29.2mの1面しか確認できなかった。この面は弥生時代の遺構が多いことから第2面目にあたるものであり、この第2面も118号住居跡では炉が遺構検出時から確認されたことから、第2面は少なくとも29.5m以上の高さにあったと考えられる。このことからこの付近は、1・2次調査を含めた堂畑遺跡において調査した中で最も高く、第1面は田畑の耕作などで既に削平されたものと考えられる。2区西端は第1面が29.4m、第2面が29.2m、1区中央では第1面は29.0m、第2面は28.8mで、1区西端では第1面が28.8m、第2面が28.5mとゆるやかに西に傾斜する地形となる。3区中央では第1面が29.0m、第2面が28.9mと、1区西端部とほぼ同じ高さになるが、第1面と第2面の差はほとんど差がなく、3区西端では28.8mの1面しか確認できなかった。この西端付近の第1面28号溝は南側で削平されており、この付近は旧河川が湾曲する場所でもあり、河川の沖積作用で右岸が高くなることもあったと予想され、第1面は削平された可能性もあるが、道路幅内の調査では判断が難しく、今後の周辺の調査成果で明らかになることを期待したい。4区では第1面が28.3m、2面が28.0mになり、また西に傾斜するようになる。

県道を挟んだ1・2次調査区では第1面は時代が中世のため、3・4次調査とは単純には比較できないが、2区東側では4面が確認されており、県道部分を含む2区東は谷状に窪んでいたと考えられる。このことは、第5図の道路建設前の田面標高からも、1・2区の西側は、東側より50cm前後高く、北側の集落から延びる微高知の存在が予想される。このことから第4面部分は堆積作用が激しいため、さらにもう1面存在すると考えられる。1区第2・3面は東から西に若干上がり、安定した面を形成する。この安定した面に、1・2号掘立柱建物跡と多数の住居が形成される。5区はまた西へ傾斜する地形となり、第1面の高さは27.9m、第2面は27.7m、第3面は26.0mを測るが、遺構は少なくなっており、5区西側は美津留川に向かって落ちていくものと考えられる。

以上、土の堆積状況と各区各遺構面のレベルから堂畑遺跡の旧地形を復元すると、3区東～2区中央まで2区中央を最高点に粘質土を基盤する地形の高まりが認められる。この場所では2区中央は削平されているが、一番遺構密度が高い部分であり、大型円形住居跡・小形仿製鏡や青銅器片などが出土し、集落の中心に近い場所であったことがわかる。ここから2区東側はゆるやかに東に傾斜する地形であり、第1面は竪穴住居跡などが多く検出されるが、第2面は第1面に比べ傾斜が急になるものの、大型掘立柱建物跡などが存在し、遺構密度は第1面とあまり変化がなく、安定して集落が形成される。この大型掘立柱建物跡(9号)については、堂畑遺跡1次調査1号掘立柱建物跡と構造的に似るものであり、9号建物跡は第1面8世紀代の竪穴住居跡の下層で検出されたものであり、1・2次調査1号建物跡と同じ7世紀後半のものと考えておきたい。



第12図 1・2号竪穴住居跡実測図 (1/60)

3区中央～5区にかけては、3区南西部が川の沖積作用によりやや高まりを形成するが、3区中央部には遺構が存在するものの、1区に比べ遺構密度は低くなる。これは地山が南西部の高まりも砂質土であり、あまり安定した面ではないことにも起因していると考えられる。2次調査2区東では谷状の落ちを確認するが、この場所においても古墳時代の住居跡を確認できる。1次調査1区は安定した高まりを有し、遺構密度も高くなる。地山も砂質土系であるものの、褐色系のややしっかりした土であることが土層図（第8図）からも判断でき、大型掘立柱建物跡なども営まれる堂畑遺跡における集落のもう一つの中心地になる。5区では遺構が溝のみであり、第1～3面とも西の美津留川に向かって傾斜することから、5区西側は常に美津留川の影響を受けたものと思われる。このことから、5区付近が集落の西端にあたると思われる。

以上が、堂畑遺跡の自然環境的な在り方と思われるが、来年度にさらに遺構・遺物の整理を進める中で出てきた修正点については、『堂畑遺跡Ⅲ』の中で補足・訂正を行いたい。

2. 1区の検出遺構と遺物

(1) 第1面の遺構と出土土器

先述したように、1区第1面は表土剥ぎ段階で下げすぎてしまったため、1区西側半分は第1・2面を同一面で調査することとなった。ここでは、当初第1面として調査したもののみ報告する。検出した遺構は竪穴住居跡44棟・掘立柱建物跡2棟・土坑4基・溝7条と、1区西側で多数のピット群を確認したが、この中には第2面のものも含まれる。

a. 竪穴住居跡

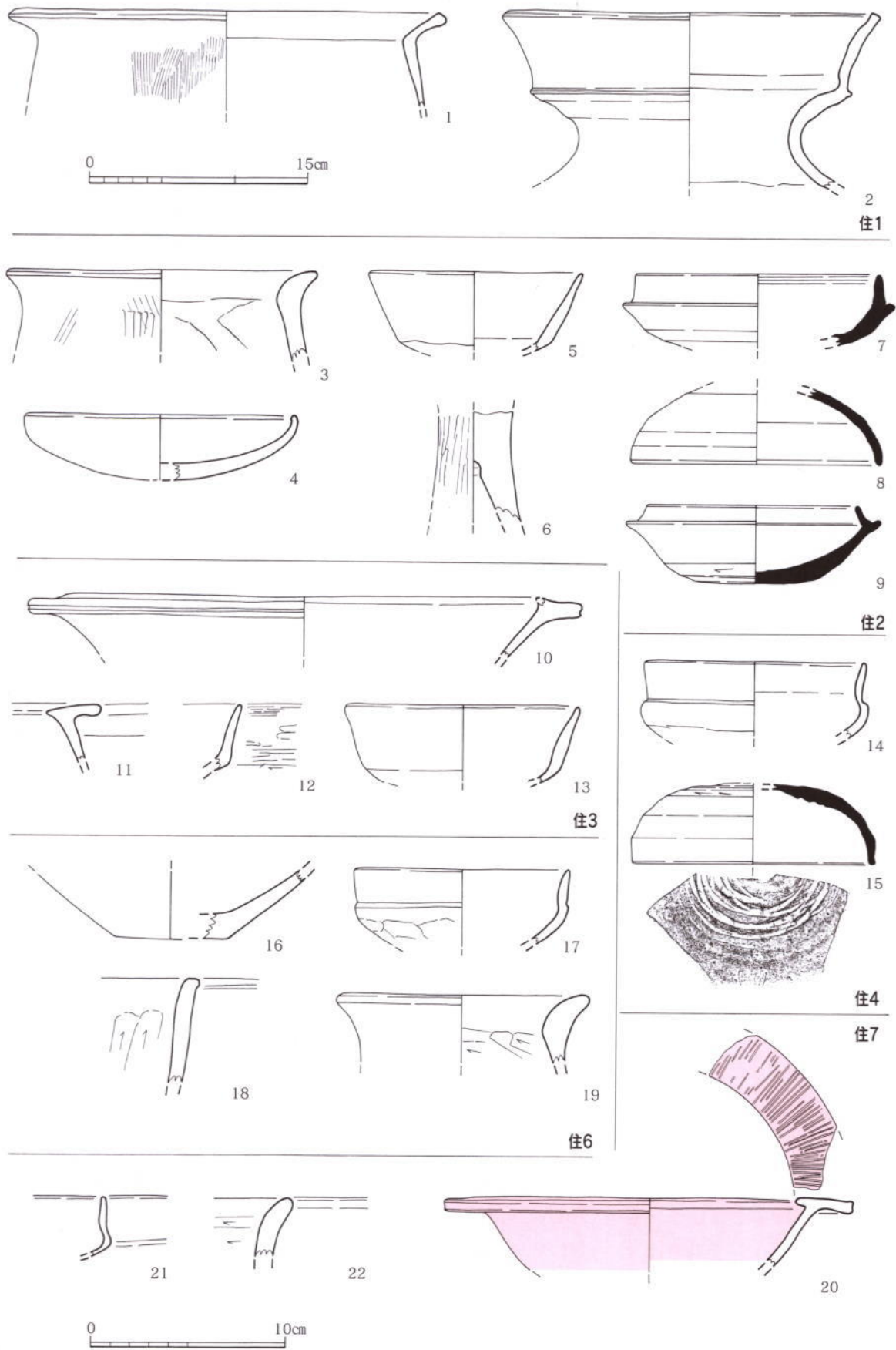
1号竪穴住居跡（図版3、第12図）

1号竪穴住居跡は1区北西端部に位置する。第2面として報告する45・46号住居跡も本来は1号住居跡に切られる住居跡であった可能性が強い。西側は1区調査段階では調査区外であったため、3区第2面を調査の際に続きを検出しようとしたが、重機により下げすぎてしまったため、検出できなかった。平面形は長方形のプランとなると思われる。東西3.7m以上×南北2.1m、壁の深さは現状で0.4mである。覆土は淡茶褐色砂質土。土層図でテラス状に見える部分があるが、掘り間違いであろう。東側の両側の隅はテラス状になり、中央に東西0.6m、南北0.5mの円形の炭化物が集積した炉跡を検出したが、掘り込みはない。床は礫面でピット等は検出できなかった。**出土土器**（第13図1～2）1は弥生土器甕の口縁部である。口径30.0cmを測り、色は茶褐色を呈する。外面の調整はハケメであり。口縁部と胴部の境にハケメ原体の痕跡が残る。その他の部分はナデである。2は土師器の壺で、混入であろう。二重口縁で全体に精良なつくりである。口径19.4cm、色は黄橙色～褐色を呈する。胴部以下はケズリである。口縁端部付近に黒斑がつく。

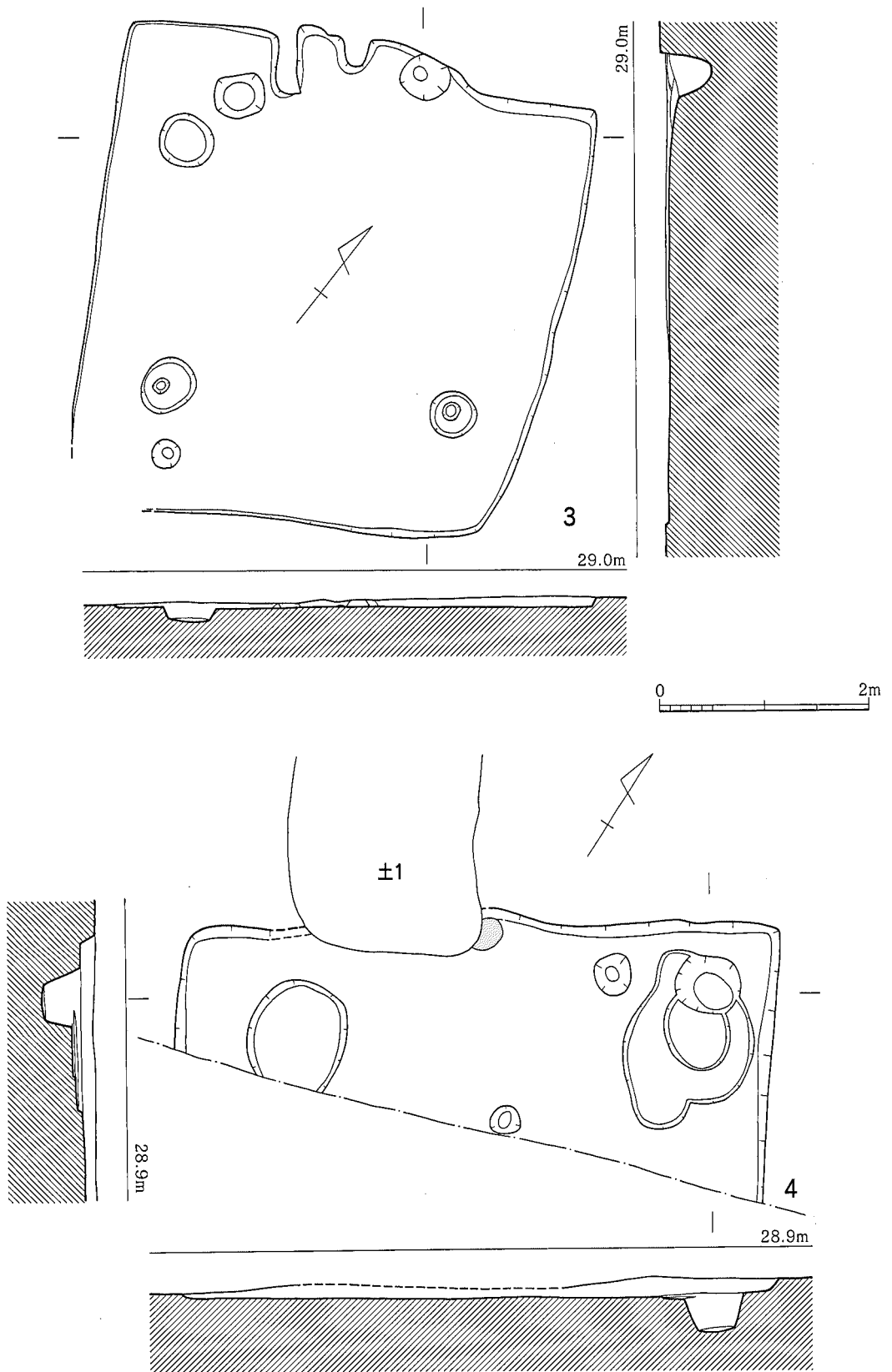
2号竪穴住居跡（図版3、第12図）

2号竪穴住居跡は1区西側の北端部に位置する。3号溝に切られ、北側は調査区外へ延びるが、平面形は長方形のプランとなるであろう。東西5.6m×南北3.0m以上、壁の深さは現状で0.2mである。南壁中央にテラスを持つ深さ0.4mの屋内土坑を検出している。また、複数のピットを検出しているがいずれも浅く、支柱穴とはなりえないであろう。

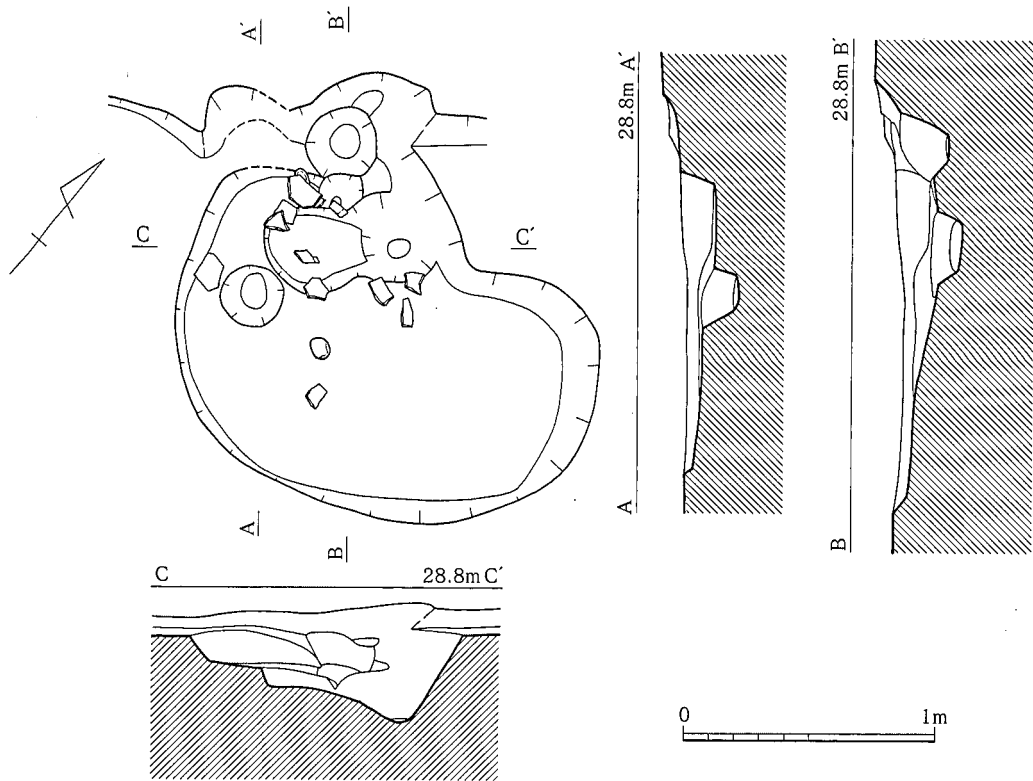
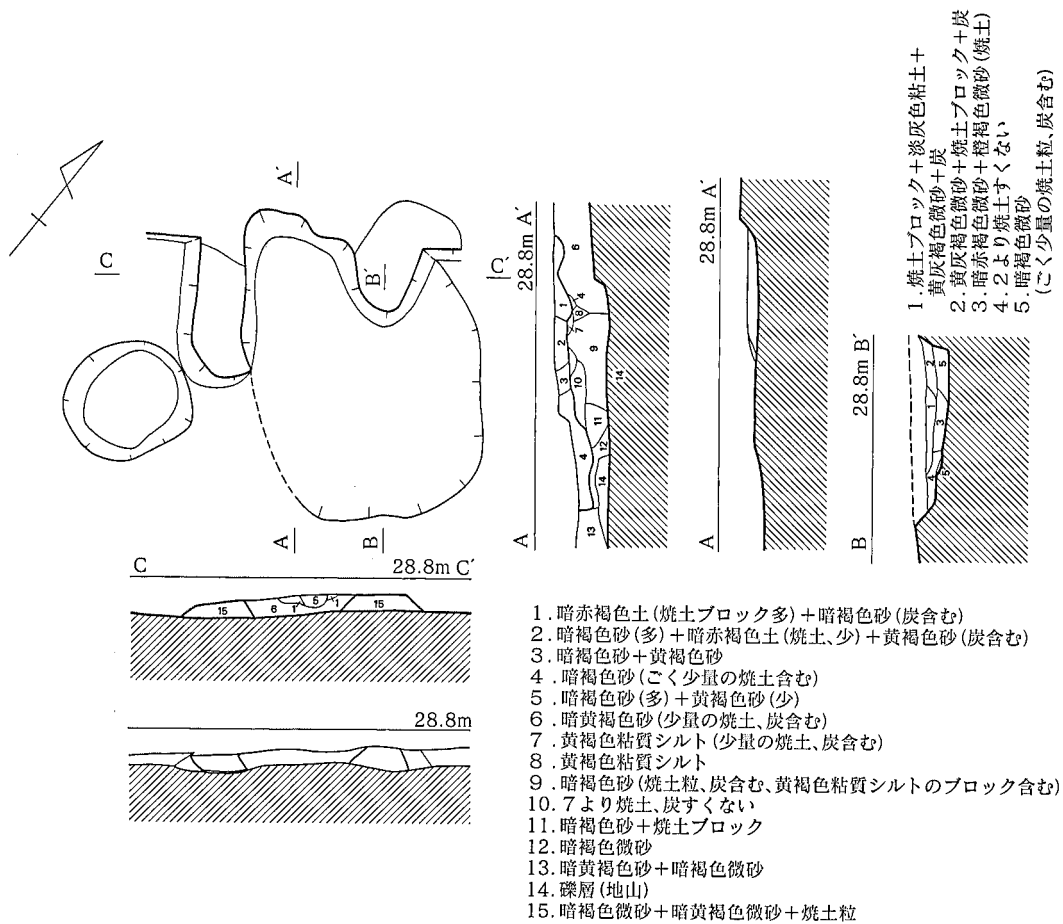
出土土器（第13図）3～6は土師器である。3は小形の甕である。口径16.0cm、全体に黒褐色である。外面は粗いハケメ調整。内面はケズリである。4は杯で器面は全体に摩滅している。口径14.0cm。色調は明黄橙色を呈する。5は高杯の杯部。口径11.0cmで、色は黄橙色。全体にナデ調整。6は高杯の脚部である。色は赤褐色を呈する。外面はミガキ、内面もケズリにより仕上げている。



第13図 1~4・6・7号竪穴住居跡出土土器実測図 (1・10・11・16・20は1/4、他は1/3)



第14图 3·4号竖穴住居跡实测图 (1/60)



第15図 3号竪穴住居跡カマド・カマド下層実測図 (1/30)

7～9は須恵器蓋杯である。7は杯身で、立ち上がりはまだしっかりしており、口縁端部に段の痕跡が残る。口径は12.6cm。最大径は14.2cmである。色は灰色を呈する。器壁は全体に厚い。8は杯蓋で、天井部は回転ヘラケズリ、口縁端部の仕上げは丸い。口径は13.0cm、色は灰黒色を呈する。9は杯身で立ち上がりやや細く貧弱になる。口径は10.9cm、最大径は13.8cm。立ち上がり部分を除き、外面全体に自然釉が付着しており、杯蓋と合せ口で焼成されたことがわかる。色は黒灰色。

3号竪穴住居跡（図版3、第14図）

3号竪穴住居跡は1区西側中央付近に位置し、12号住居跡に切られ、9・10号住居跡を切る。平面形は東西4.4m×南北4.6mのほぼ正方形を呈する。壁の深さは0.1m以下である。北壁中央部分にカマドを付設する。床面で複数のピットを検出しているが、住居に伴うものかは判断できなかった。

カマド（図版4、第15図） 北壁中央部分に造られ、わずかに突出する。左袖55cm、右袖20cm、高さ5cm程度が残存する。右袖は掘り過ぎの可能性ある。袖は焼土の混じった砂で構築されていた。袖の内側に掘り込み等はなく、住居床面とほぼ同じ高さである。カマド下層は不整形に大きく掘り込まれる。カマドの西側にはピットが掘られおり、ピットの覆土には焼土を含んでおり、このカマドと何らかに関連するものと思われる。

出土土器（第13図10～13） 10・11は混入の弥生土器である。10は高杯の口縁部で内外面はナデ調整。口径は38.0cm、色は黄褐色を呈する。11の色は橙褐色を呈する。12・13は土師器高杯の杯部である。いずれも摩滅が著しい。12の色は茶褐色。13は口径12.0cm、色は橙色を呈する。11～13はカマド下層の土坑から出土し、磨石（第131図4～7）もカマド下層土坑からの出土。

4号竪穴住居跡（図版4、第14図）

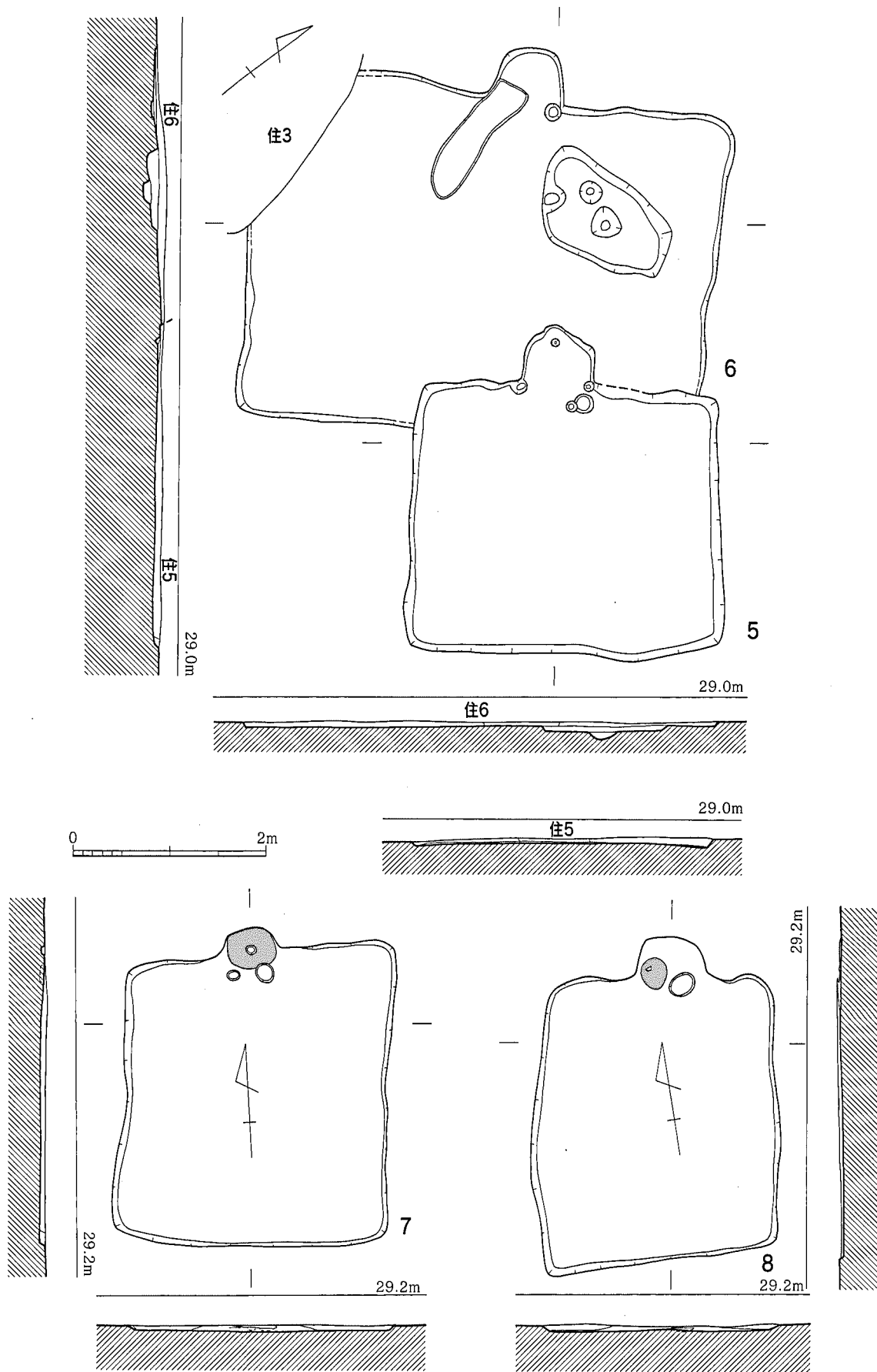
4号竪穴住居跡は1区西側南端部に位置し、1号土坑に切られる。第2面として報告する49号住居跡も本来は4号住居跡に切られる住居跡の可能性が強い。南側が調査区外へ延びるが、平面形は長方形を呈すると思われる。東西5.7m×南北2.6m以上、壁の深さは現状で0.15mである。北壁中央部分に焼けた面を検出しており、カマドの痕跡とも考えられる。床面で複数のピットを検出しているが住居に伴うかは不明。下層から石製紡錘車（第127図23）が出土。

出土土器（第13図14・15） 14は土師器の杯である。口径11.4cm、色は淡黄橙色を呈する。胴部で屈曲する。内外面の調整はナデであるが、底面はケズリ。15は須恵器の杯身である。口径12.4cm、色は青灰色を呈する。天井部は回転ヘラケズリを行う。内面には複数回の当て具痕が残る。

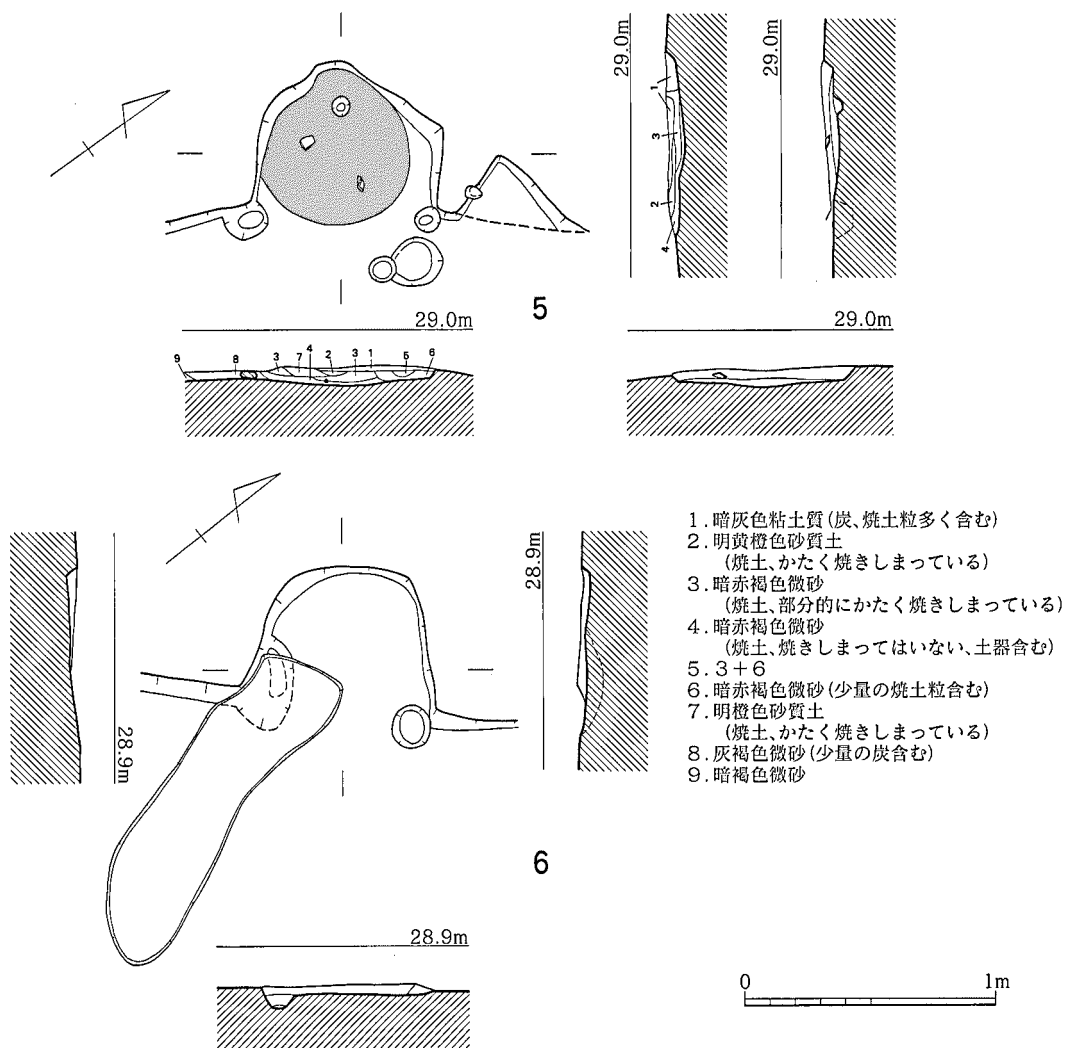
5号竪穴住居跡（図版5、第16図）

5号竪穴住居跡は1区西側中央付近に位置し、6・9・11号住居跡を切る。下層には第2面52号住居跡がある。平面形は東西2.8m×南北3.2mでほぼ正方形に近い。壁の深さは0.1m弱で、西壁中央にカマドを付設する。床面でピット等は検出されなかった。遺物は土師器が出土するが、細片のため、図化できなかった。

カマド（図版5、第17図） 西壁中央部分に30cm突出して造られる。深さは5cmほどしか残存していないが、突出部分は全体に焼けている。奥の付近で小ピットを検出しているが、位置的にみて支脚の抜き取り穴の可能性は低い。突出部の手前でP1～P4のピットを検出しているが、P1、P4が袖石の抜き跡と考えられる。P4から北の部分の壁は掘り間違いで、推定ラインを点線



第16图 5~8号竖穴住居跡実测图 (1/60)



第17図 5・6号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

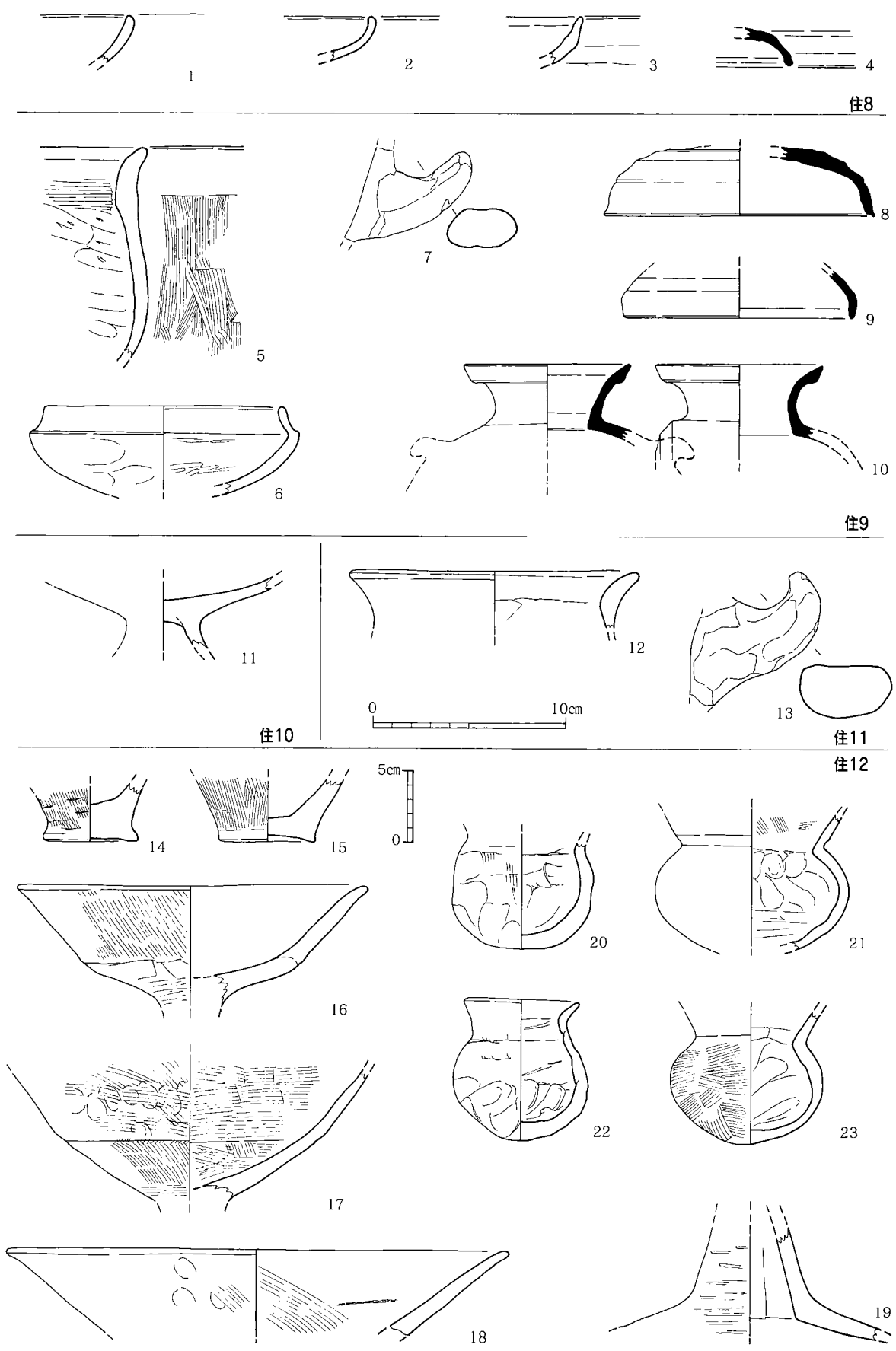
で記しておく。

6号竪穴住居跡 (図版6、第16図)

6号竪穴住居跡は1区西側中央付近に位置する。9・52号住居跡を切り、3・5号住居跡に切られる。下層には第2面52号住居跡がある。平面形は東西3.6m×南北4.8mの長方形を呈する。壁の深さは現状で0.1m弱、西壁中央にカマドを付設する。床面でピットを検出しているが、支柱穴の可能性は低い。

カマド (図版6、第17図) 西壁中央部分に30cm突出して造られる。壁の深さは5cmほどしか残存していない。両袖にあたる付近でピット2基を検出しており、袖石の抜き跡と考えられる。突出部で焼面は確認できなかったが、焼土や炭化物を検出している。カマドから南に細長く約1m、灰の集積した部分があり、内部の灰を掻きだしたものと思われる。

出土土器 (第13図16～19) 16・17は貼床下層で出土した。16は弥生土器壺の底部。底径8.0cmで平底である。色は褐色を呈する。17は土師器杯である。口径11.0cm、色は橙色。貼床



第18図 8~12(1)号竖穴住居跡出土土器実測図 (14・15は1/4、他は1/3)

下層から出土した。底面の調整はケズリ、その他の部分はナデ調整である。18は土師器で、小形の甌か。外は褐色、内は淡橙褐色。やや外側へ広がる器形で内面はケズリ。19は土師器で小形の甕。口径13.2cm、色は灰褐色を呈する。口縁部が厚く、胴部は膨らまない。内面の調整はケズリを施す。

7号竪穴住居跡（図版6、第16図）

7号竪穴住居跡は1区西部の北よりに位置する。下層には第2面51号住居跡がある。平面形は東西2.7m×南北3.1mの正方形に近いプランを呈し、壁の深さは0.1m弱である。北壁中央にカマドを付設する。床面でピット等は検出できなかった。

カマド（図版7）北壁より30cm突出して造られる。検出時に削りすぎたため、焼面のみしか残存していない。突出部分中央に小ピットを検出しており、支脚の抜き取り跡と考えられる。また、両袖にあたる付近でピット2基を検出、袖の抜き取り痕の可能性もある。突出部は全体に強く焼けている。

出土土器（第13図20～22）20は混入の弥生土器である。口径28.0cmを測る。高杯の杯部で発達した鋤先状の口縁を呈し、全面に丹塗り、口縁部上面には暗文を入れる。21は土師器杯であるが、小片のため傾きは推定である。色は黄橙色で一部黒色となる。22は甕の口縁部で、胴部のふくらまないタイプのものであろう。内面に横方向のケズリを施す。色は白黄橙色を呈する。

8号竪穴住居跡（図版7、第16図）

8号竪穴住居跡は1区西部の北よりに位置する。下層は第2面51・52号住居跡がある。平面形は東西2.6m×南北2.9mの正方形に近いプランを呈する。北壁中央部分にカマドを付設する。深さは0.1m弱であるが、カマド付近はほとんど残存していない。床面でピット等は検出できなかった。

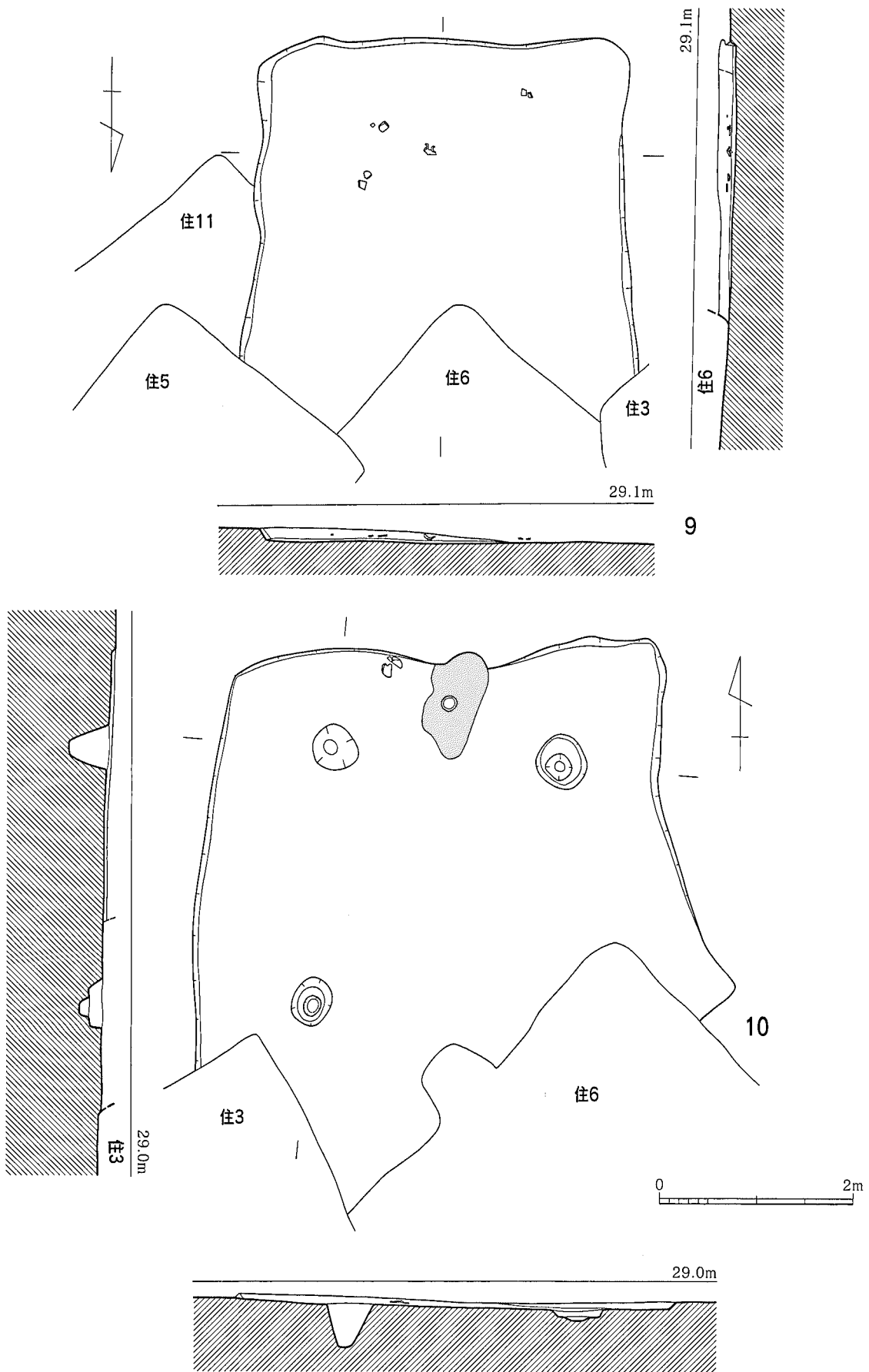
カマド（図版7）北壁より45cm突出して造られる。検出時に削りすぎたため、ほぼ焼面のみしか残存していない。突出部の西側で赤く変色し、強く焼けた面を検出している。また、浅いピットを確認しているが、カマドに伴うものであるかは不明である。

出土土器（第18図1～4）1～3は土師器の杯。1・2の色は黄橙色を基調とする。3は口縁付近が屈曲する。色は白黄褐色を呈する。4は須恵器杯蓋である。小形で端部の仕上げは丸い。全体にナデ調整。焼成は堅緻である。色は黒褐色を呈する。

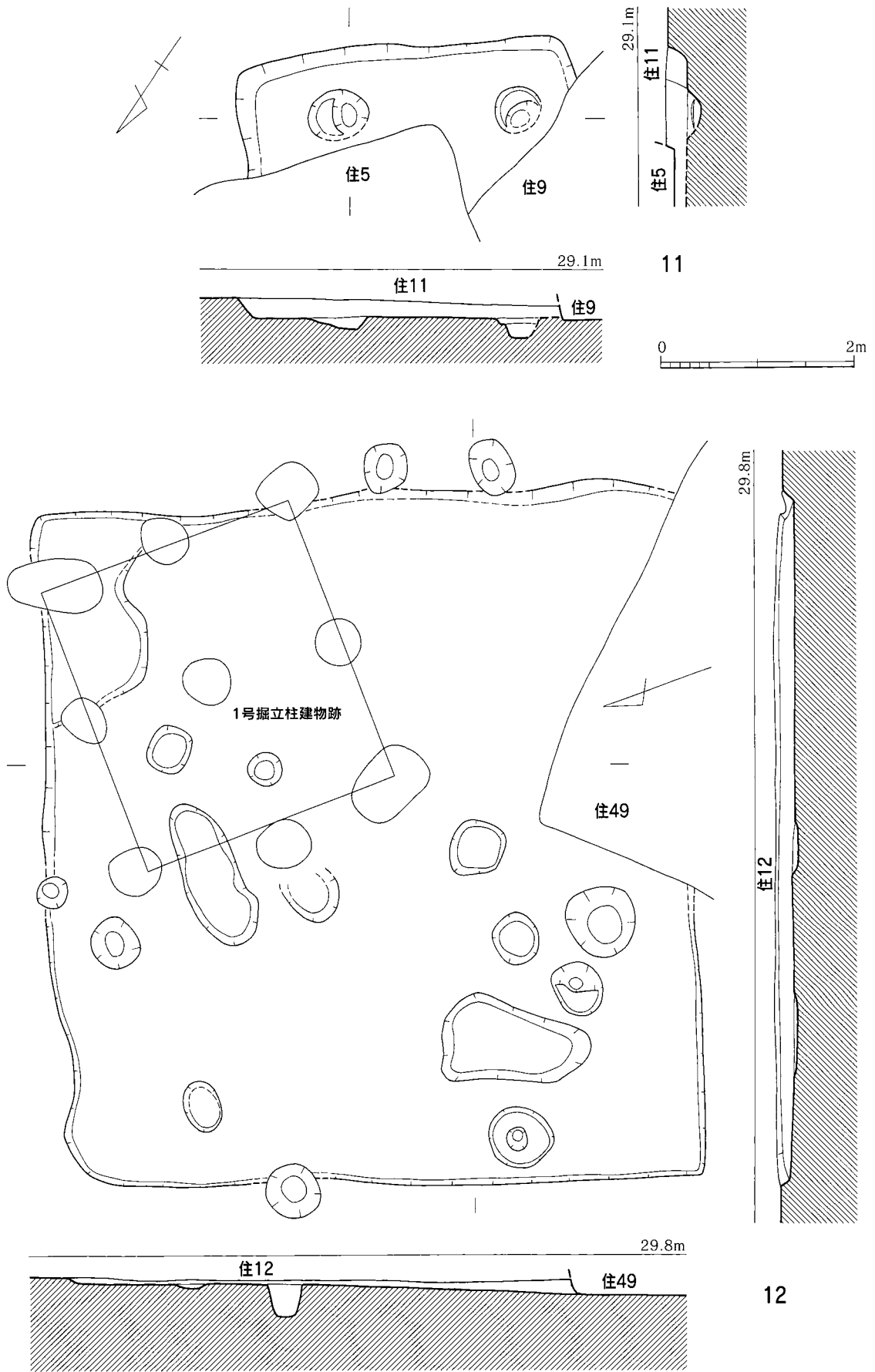
9号竪穴住居跡（図版8、第19図）

9号竪穴住居跡は1区西側の中央付近に位置する。11号住居跡を切り、3・5・6号住居跡に切られる。平面形は東西3.8m×南北4.0m以上の方形で、深さは深い部分で0.1m残存する。床面でピット等は検出されていない。床面からわずかに浮いた状態で土器が出土している。なお、鉄器も出土するが、残りが悪く図化できなかった。覆土から扁平片刃石斧（第126図10）が出土した。

出土土器（第18図5～10）5・10は床面から出土した。5～7は土師器である。5は甕の口縁から胴部にかけての破片で外面はハケメ、内面は斜め方向のケズリ、口縁部と胴部の境は横方向にハケメを施す。色は黄橙色を基調とし、外面一部黒色である。6は土師器杯で外底面はケズリ、内面はミガキである。口径12.2cm、色は褐色を呈する。7は甌の把手である。色は橙褐色を呈する。8～10は須恵器である。8・9は杯蓋である。8は口縁端部に段をつけて仕上げ、口縁部と胴部の境に沈線が残り、やや古い形態を残す。全体の仕上げは丁寧である。口径14.0cm、色は青灰色を呈する。9はやや小形化し、口縁端部も丸くなっている。口径12.0cm、色は青灰褐色を



第19图 9・10号竖穴住居跡实测图 (1/60)



第20图 11·12号竖穴住居跡実测图 (1/60)

基調とする。10は提瓶の口縁から胴部にかけてである。口縁端部等の仕上げは鋭い。口径8.6cm、色は青灰色を呈する。

10号竪穴住居跡（図版8、第19図）

10号竪穴住居跡は1区西側やや北よりに位置する。3・6号住居に切られる。下層には52号住居跡がある。東西5.6m×南北5.7mの不整な方形を呈するが、掘り間違いの可能性もある。壁はほとんど残存していない。北壁中央にカマドを付設する。床面からは3基のピットを検出しており、支柱穴と考えられる。

カマド 北壁中央部分にわずかに突出して構築される。削りすぎたため、壁は残存しない。焼面はなく、炭化物の広がりが見出されたのみである。この中央に浅いピットを検出しており、カマドに伴う可能性がある。

出土土器（第18図11） 11は土師器高杯の杯部から脚部にかけての破片であろう。全体に摩滅が著しいが、脚部内面はケズリによって仕上げている。色調は橙褐色である。

11号竪穴住居跡（第20図）

11号竪穴住居跡は1区西側中央付近に位置する。5・9号住居跡に大きく切られるが、平面形は東西2.5m×南北1.8m以上で方形を呈するであろう。壁の深さは0.2mである。床面から2基のピットを検出したがいずれも浅く、支柱穴とはなりえないであろう。

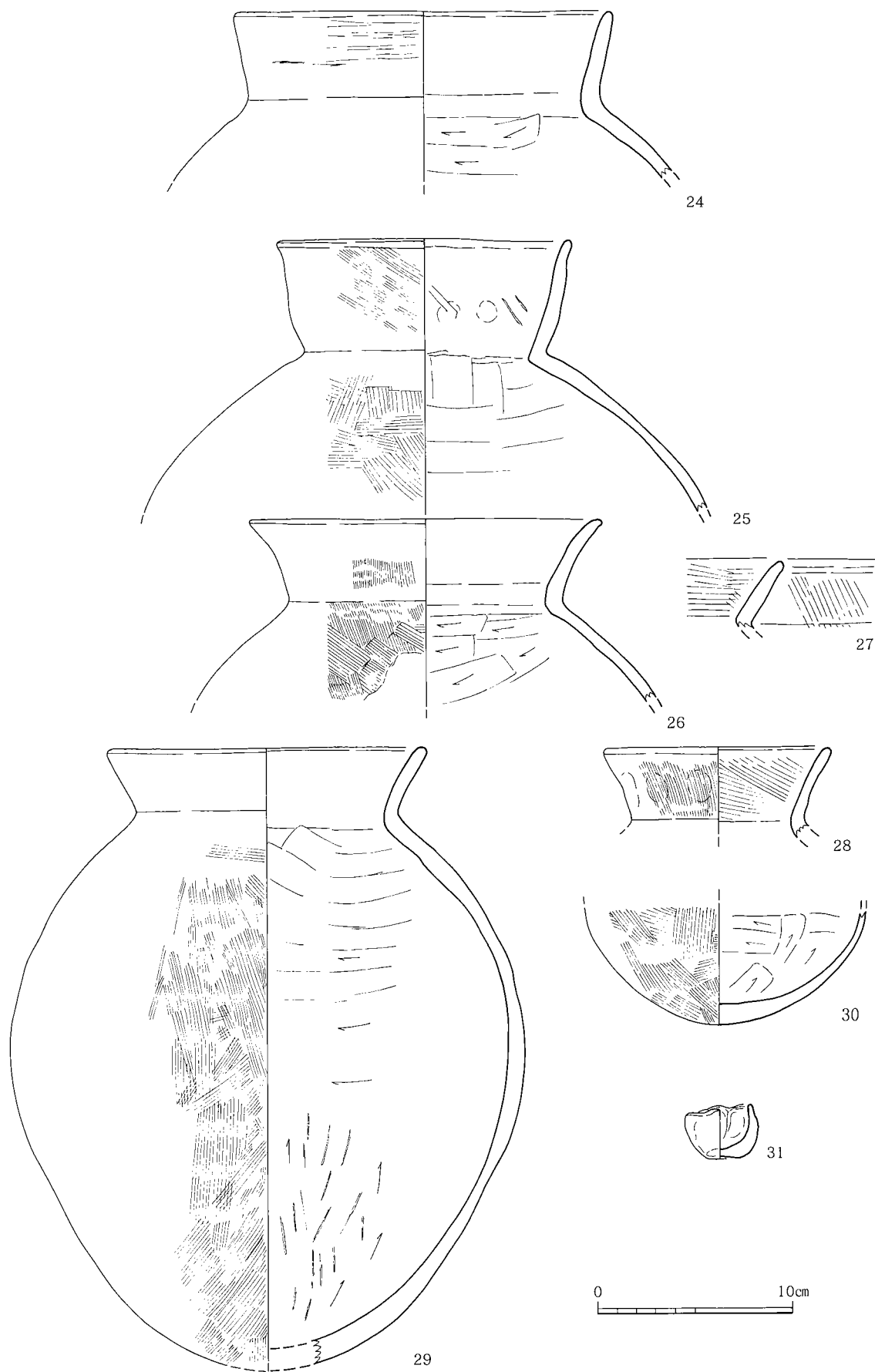
出土土器（第18図11・12） 12は土師器甕の口縁部。口径15.2cm、色は灰褐色を呈する。小形で胴部の膨らまない器形であろう。13は土師器甕の把手である。断面は楕円形に成形され、端部は上向きに仕上げられる。色は橙色を呈する。

12号竪穴住居跡（図版8、第20図）

12号竪穴住居跡は1区西側の中央やや南よりに位置する。第2面で検出した49号住居跡及び1号掘立柱建物に切られる。49号住居跡に切られることから、本来は第2面の住居跡の可能性はある。平面形は東西8.0m×南北6.5mの方形で、壁の深さは0.1m程度である。床面からは複数のピットを検出しているが、支柱穴は不明である。住居南東隅の床面からやや浮いた状態で土器が比較的まとまって出土した。

出土土器（図版39、第18図14～19・第21図） 14・15は混入の弥生土器甕の底部である。14は底部がくびれ、やや上げ底となる。底径は6.6cm、色は灰黄褐色を呈する。15の底部もわずかに上げ底である。底径は6.7cm、色は灰黄褐色を呈する。

16～31は土師器である。17・18・20・25・26・28～30は住居南東部付近の土器集中部分から出土した。16～18は高杯の杯部である。16の口縁部外面はハケメ、屈曲部から下はケズリである。内面の調整はナデ。口径18.2cm、色は暗茶褐色を呈する。17は内外面ともにハケメ調整で、口縁外面には指押さえ痕が残る。色調は淡茶褐色を呈する。18は内外面ともにハケメの後にナデ。口径26.0cm、色は茶褐色を呈する。19は高杯脚部で外面はミガキ、内面はケズリである。色は暗茶褐色を呈する。20～23は小形丸底壺の類であろう。最大径は20が7.3cm、21が7.3cm、22が7.4cm、23が8.0cmである。いずれも茶褐色を基調としている。20・22は粗製のもので、外面はナデ調整であるが凹凸が残る。21・23は比較的精製のものである。23は外面ハケメ調整。24～28は壺である。24・27・28は口縁が直線的に広がるものである。24は口径19.6cm。25は口縁がやや内湾するものである。口径は15.0cm、色は茶褐色を呈する。26は口縁がやや外反する。全体的にハケメによって調整される。内面はケズリである。口径は18.0cm、色は外が茶褐色、内が灰褐色である。27は暗褐色を呈する。28は口径11.7cm、色は茶褐色を呈



第21图 12号竖穴住居跡出土土器実測图(2)(1/3)

する。29は甕である。胴部外面は粗いハケメ、内面はケズリである。底部付近に黒斑が付着する。口径16.4cm、最大径26.4cm、器高は30.5cm、色は暗茶褐色で一部黒色となる。30は甕の底部か。球形の底部で器壁は厚い。色は外面が淡茶褐色、内は灰黄褐色。31は手捏ね土器。部分的に黒褐色を呈する。口径3.6cm、器高は2.8cm、色は暗茶褐色で一部黒色となる。

13号竪穴住居跡（図版9、第22図）

13号竪穴住居跡は1区中央やや西よりに位置する。6号溝を切り、下層には53号住居跡がある。平面形は東西4.0m×南北5.1mの方形である。壁の深さは0.1m以下弱で、床面からは複数のピットを検出したが、いずれも浅い。出土遺物で図示できるものはない。

14号竪穴住居跡（図版9、第23図）

14号竪穴住居跡は1区中央やや北よりに位置する。15号住居跡、8号溝を切る。平面形は東西3.6m×南北3.1mの方形で、壁の深さは0.1m程度である。西壁中央にカマドを付設する。床面でピット1基を検出した。

カマド（図版9、第23図） 西壁中央部分に付設されるが、細長く突出しており、途中から煙道となる。右袖は70cmで内側に曲がる。左袖は80cm。いずれの袖も黄褐色砂質土で構築され、内部はわずかに掘り込まれる。煙道は西向きに曲がって造られる。煙道内部から土器がまとまって出土した。

出土土器（図版39、第24図1～4） 1～4はいずれもカマドの煙道から出土しており、15号住居に伴うものである可能性も考えられる。1は移動式カマドの炊口部分である。3つの破片を合成して図化した。外面の調整はハケメ、内面はケズリである。炊き口部分を切り開け、それに合せ底を貼り付けている。底内面には煤が付着している。色は淡黄茶褐色である。2は甕であろうか。外面はハケメ、内面は横方向のケズリを行う。色調は赤褐色を呈する。3は甕である。口径が25.0cm、色は茶褐色を呈する。口縁が外側に強く屈曲する。内面は斜め方向のケズリ、他の部分はナデである。4は鉢である。口径34.0cm、色は茶褐色を呈する。摩滅が著しく、調整は不明。

15号竪穴住居跡（図版10、第23図）

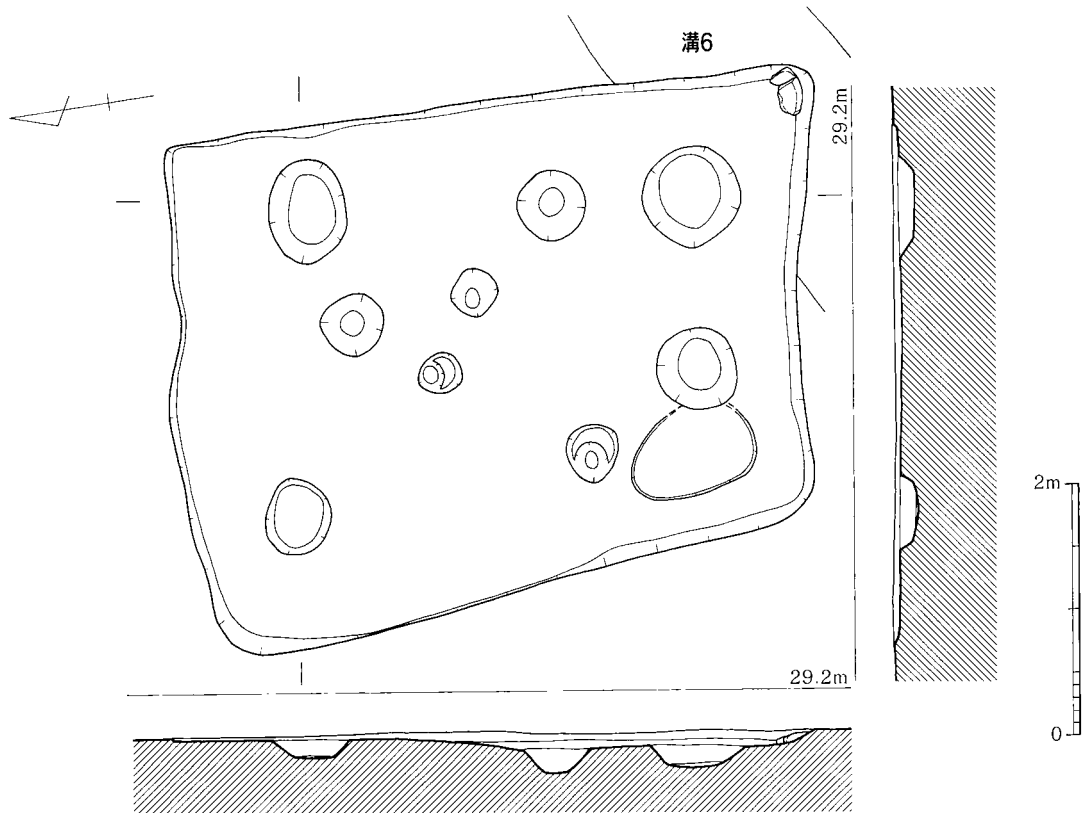
15号竪穴住居跡は1区中央やや北よりに位置する。17・25号住居跡、8号溝を切り、14号住居跡に切られる。平面形は東西4.8m×南北4.8mのやや不整な方形を呈する。壁の深さは0.1m程度で西壁中央にカマドを付設する。床面から土坑状の掘り込みを検出した。

カマド（図版10） 西壁中央部分に付設される。袖等は検出されず、40cm×50cmの範囲で焼面のみが広がっていた。焼面付近で小ピット2基を検出したがカマドに伴うものかどうかは不明である。

出土土器（第24図5～9） 5は土師器杯である。口径は13.2cm、色は白黄橙色を呈する。全体にナデ調整。6は土師器甕。内面に製作時の接合痕が明瞭に残る。口径17.0cm、色は茶褐色を呈する。7～9は須恵器杯身。7は立ち上がりが小さく内傾する。口径11.8cm、色は灰色を呈する。8はさらに立ち上がりが退化している。口径9.8cm、色は灰色。9は高台を貼りつけたもので、混入と判断した。色は暗茶灰色を呈する。

16号竪穴住居跡（図版10、第25図）

16号竪穴住居跡は1区中央部北端に位置し、8号溝を切る。調査区の北側に向かって延び、東西3.8m×南北2.8m以上の方形を呈するものと考えられる。壁の深さはわずかで、床面で深さ0.2mのピット2基を検出している。若干浅い気もするが、位置的には支柱穴でも良いと思われる。



第22図 13号竪穴住居跡実測図 (1/60)

る。出土遺物で図示できるものはない。

17号竪穴住居跡 (図版11、第25図)

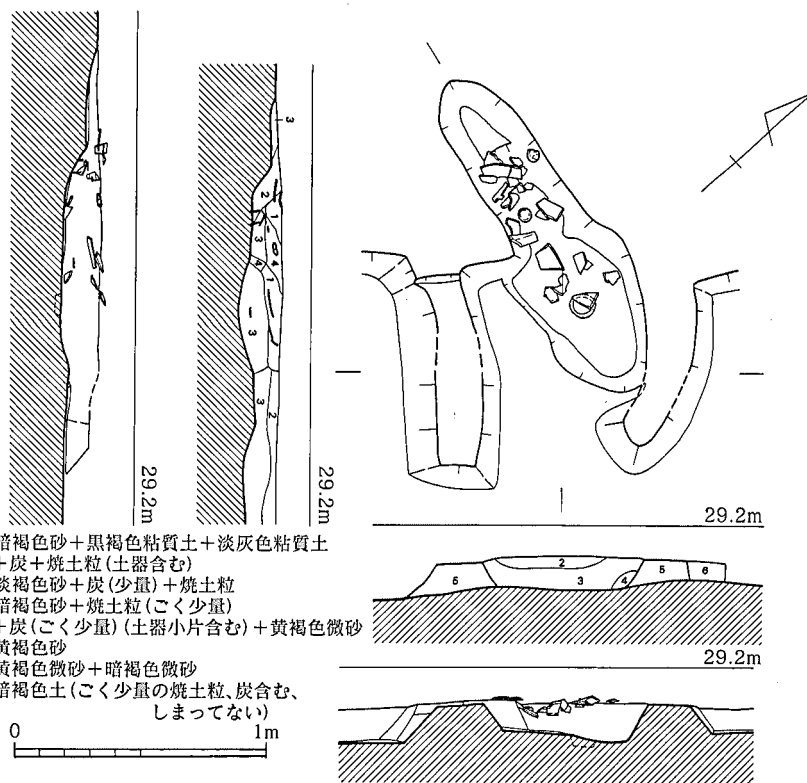
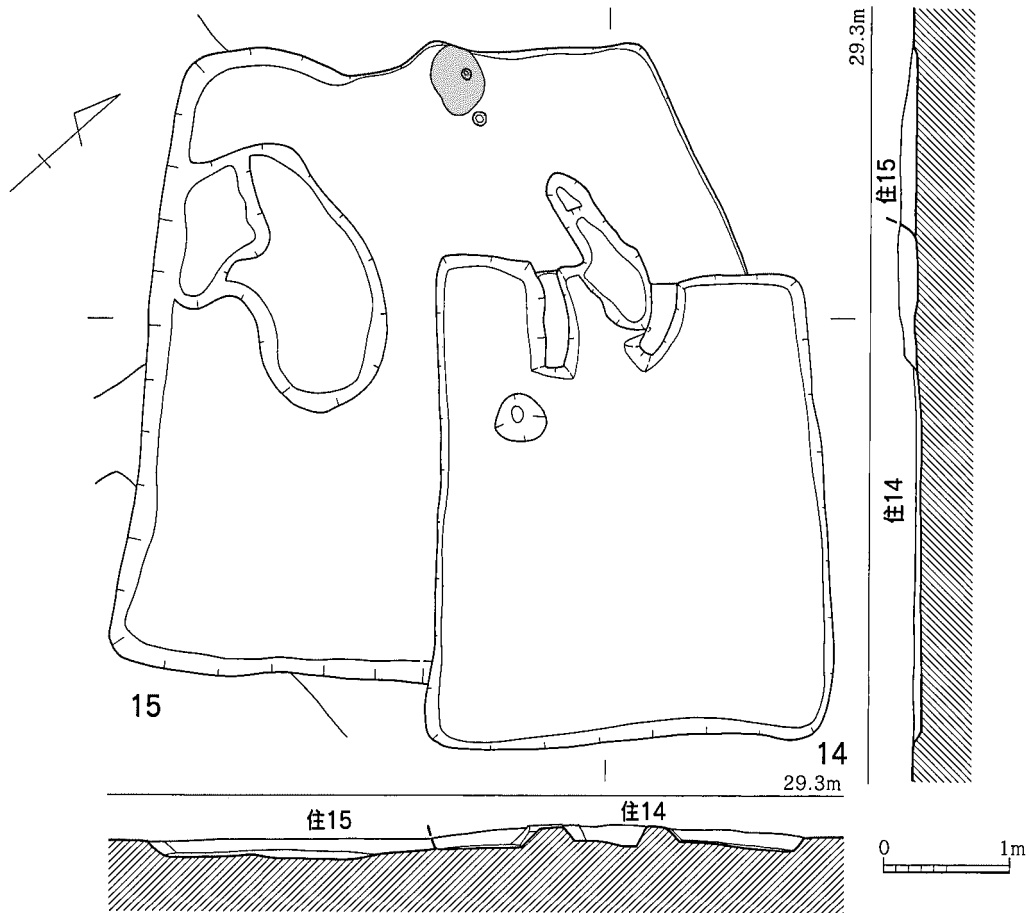
17号竪穴住居跡は1区中央やや北西よりに位置する。15号住居跡に切られる。下層には第2面51号住居跡がある。平面形は東西4.8m×南北3.6mで、南側に長方形の東西1.8m×南北0.9mの張り出し部をもつ。壁の深さは0.1m弱である。床面からは張り出し部で1基、その他に1基のピットを検出している。出土遺物で図示できるものはない。

18号竪穴住居跡 (図版11、第26図)

18号竪穴住居跡は1区中央付近の南端部に位置する。22号住居跡を切る。調査区の南側に向かって延びているが、東西4.0m×南北1.8m以上の方形のプランを呈すると考えられる。壁の深さは0.1m程度で、北壁中央部にカマドを付設する。床面西側でピット1基を検出しており支柱穴となりうるが、対応する東側の位置では検出できなかった。

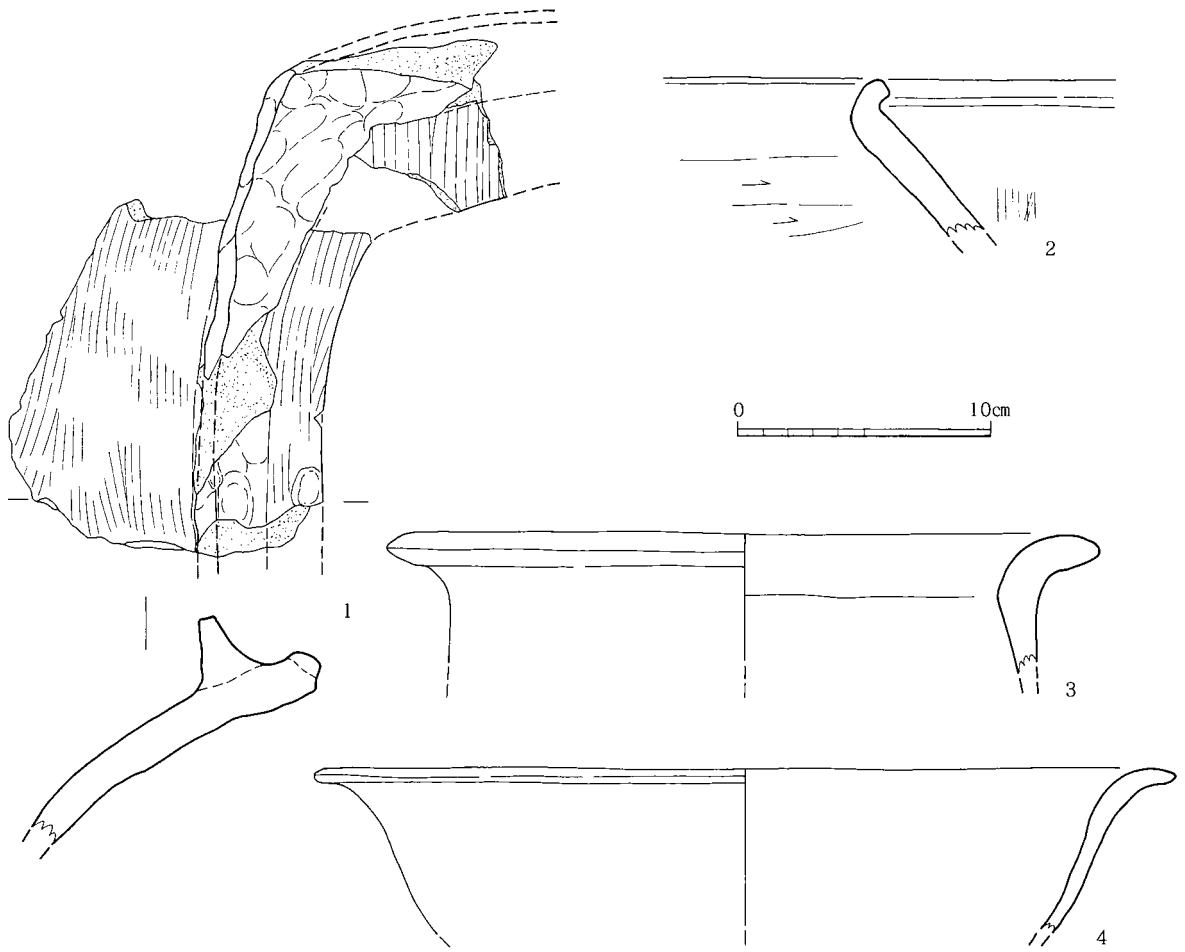
カマド (図版11、第26図) 北壁中央部分に60cm突出するように付設され、袖等は確認できなかった。壁の深さは15cm程度で、住居の床面よりわずかに掘り込まれる。煙道は60cmの長さが残存していた。

出土土器 (第24図10・11) 10・11は須恵器杯蓋。10は深めであるが、口縁端部は丸く、天井部と口縁部の段も消失している。口径は12.4cm、器高4.0cm、色は外が灰色、内が淡赤灰色を呈する。11は擬宝珠つまみの付く蓋である。色調は灰色である。出土遺物はこの2点であるが、カマドの形態から考えると11が住居に伴う時期のものであろう。



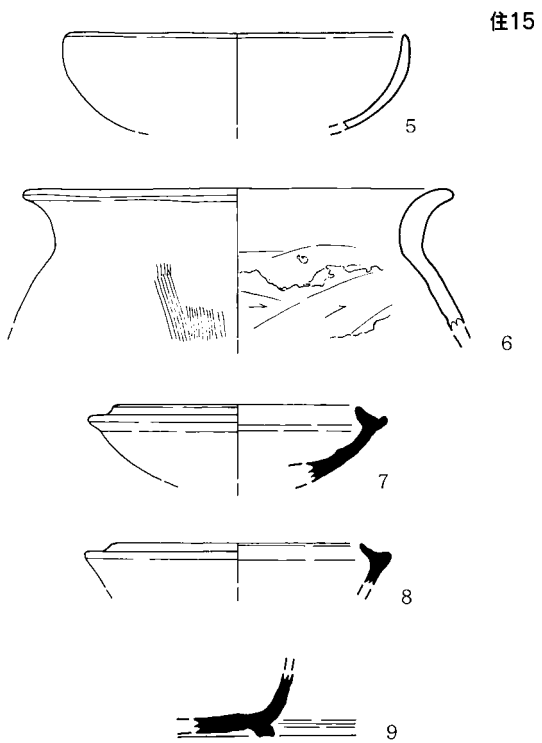
1. 暗褐色砂+黒褐色粘質土+淡灰色粘質土
+炭+焼土粒(土器含む)
2. 淡褐色砂+炭(少量)+焼土粒
3. 暗褐色砂+焼土粒(ごく少量)
+炭(ごく少量)(土器小片含む)+黄褐色微砂
4. 黄褐色砂
5. 黄褐色微砂+暗褐色微砂
6. 暗褐色土(ごく少量の焼土粒、炭含む、
しまっていない)

第23図 14・15号竪穴住居跡 (1/60)・14号住居跡カマド実測図 (1/30)

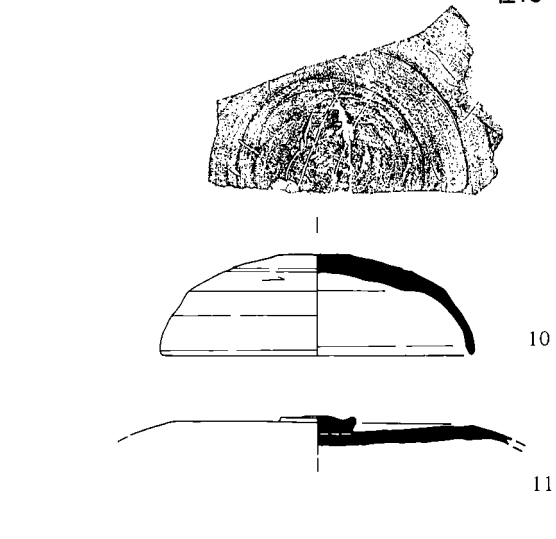


住14

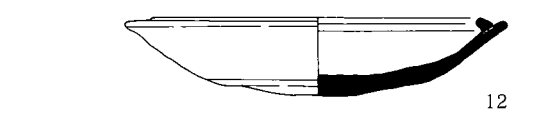
住18



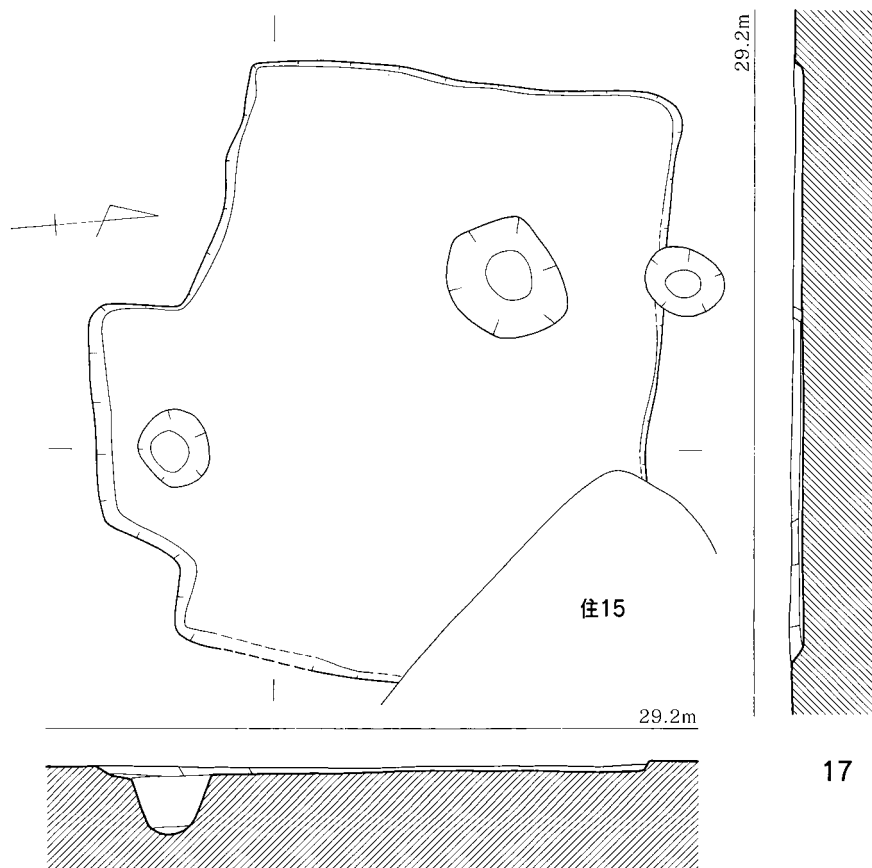
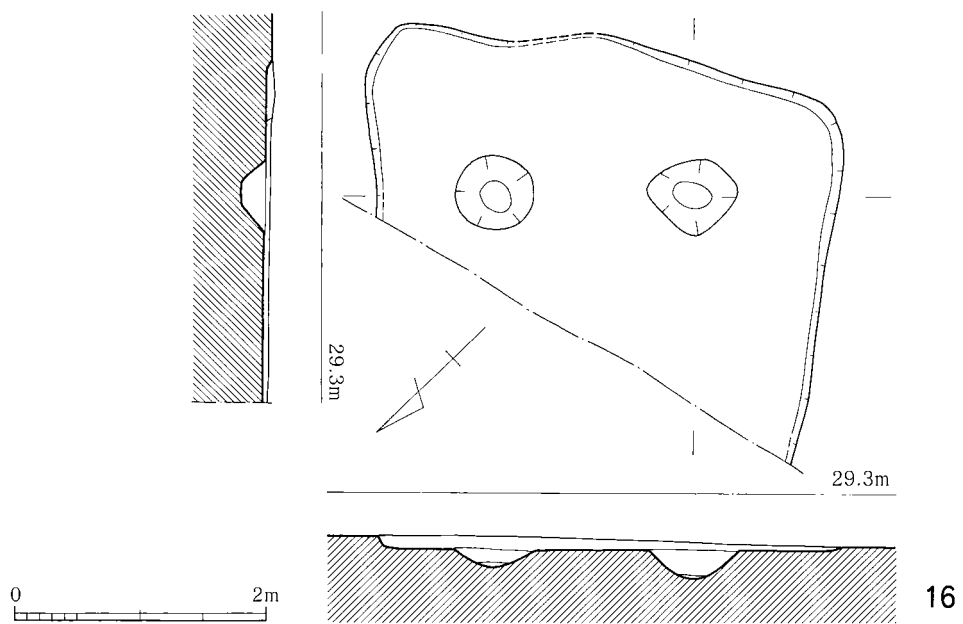
住15



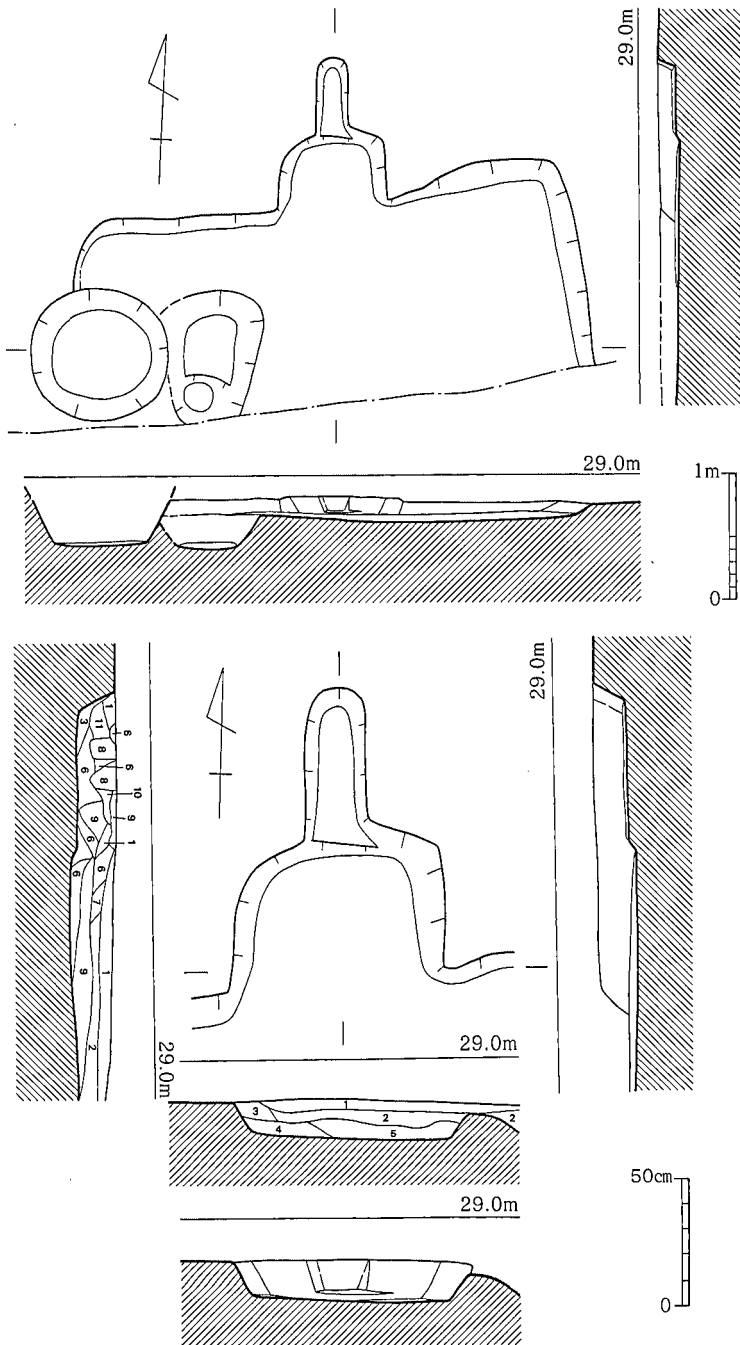
住19



第24图 14·15·18·19号竖穴住居跡出土土器実测图 (1/3)



第25図 16・17号竪穴住居跡実測図 (1/60)



- | | |
|----------------------|-------------------|
| 1. 黄褐色砂質土 | 7. 黄灰褐色砂質土 |
| 2. 暗褐色砂質土(小炭粒が若干混じる) | 8. 焼土混黄褐色砂質土 |
| 3. 灰褐色砂質土 | 9. 焼土炭混黄灰褐色砂質土 |
| 4. 明灰褐色砂質土 | 10. 焼土ブロック多含褐色砂質土 |
| 5. 暗灰褐色砂質土 | 11. 焼土混褐色砂質土 |
| 6. 焼土混黄灰褐色砂質土 | |

第26図 18号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

ものと思われる。壁の深さは0.1m弱で、西壁にカマドを付設する。床面でピット等は検出できなかった。

カマド (図版12、第28図)

西端をピットに切られ、全長は不明であるが、西壁中央部分に突出するカマドが付設される。壁は削られてほとんど残っていない。突出部の中央が特に赤く焼けしまっている。周辺からは土器

19号竪穴住居跡 (図版12、第27図)

19号竪穴住居跡は1区中央やや南よりに位置する。20号住居跡を切り、24号住居跡に切られる。平面形は東西3.8m×南北3.8mのほぼ正方形を呈する。壁の深さは0.1m弱で西壁にカマドを付設する。床面ではピット4基を検出しており、若干浅い点が気になるが主柱穴であると考えられる。

カマド (図版12、第27図) 西壁中央部分にわずかに突出するカマドが付設される。右袖は80cm、左袖は75cmでほぼ平行に延びる。内側は、住居床面より5cm程度掘り込まれる。煙道が25cmほど延びるが本来は、より長かったものであろう。炭化物は出土するが焼面は確認できなかった。

出土土器 (第24図19) 19は須恵器杯身である。口径は15.0cm、器高は3.1cm、色は外が茶灰色、内は白黄灰色を呈する。立ち上がりは小さく、内傾も著しいため杯蓋の可能性もある。底部は回転ヘラケズリ、内面は仕上げナデを施す。

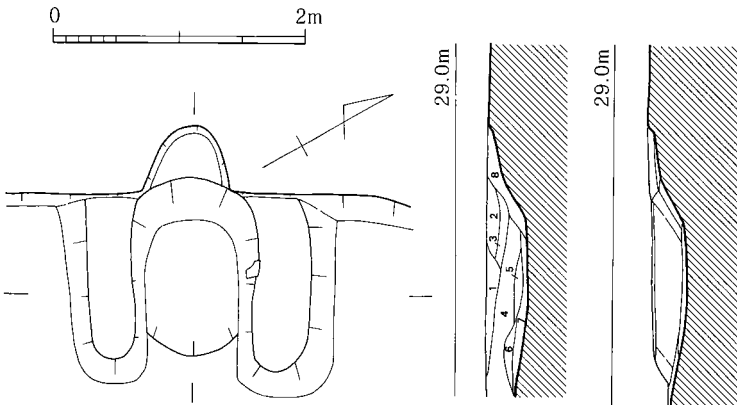
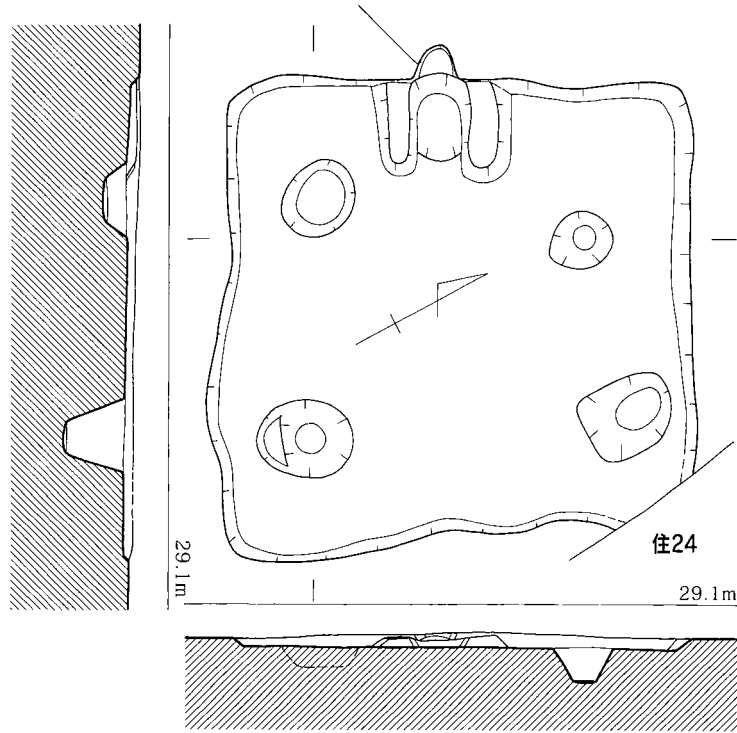
20号竪穴住居跡 (図版12、第28図)

20号竪穴住居跡は1区中央やや南よりに位置する。22号住居跡を切り、19号住居跡に切られる。東側は削られて残存しないが、平面形は東西2.0m以上×南北4.3mで方形プランを呈する

がまとまって出土しているが、整理途中で所在が現在不明になってしまった。2～5区の遺物中に混じた可能性もあり、来年度報告の中で報告できるよう努力したい。

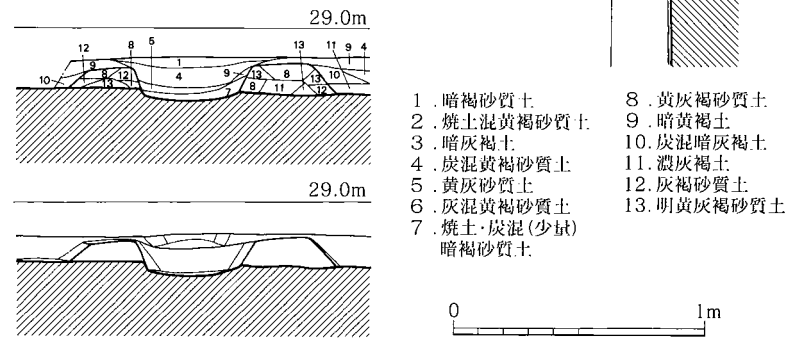
21号竪穴住居跡 (第29図)

21号竪穴住居跡は1区中央南端部に位置する。22号住居跡・5号溝を切り、南側は調査区外へ延びる。平面形は3.2m以上×南北1.8m以上の方形を呈するものと考えられる。壁の深さは0.1m程度である。北壁にカマドの痕跡と考えられる焼面を検出している。壁小溝の一部である可能性がある壁際の掘り込みを確認した。床面では深さ0.3mのピット1基を検出しており、位置的にも支柱穴としてよいものであろう。出土遺物は細片のため、図化できなかった。



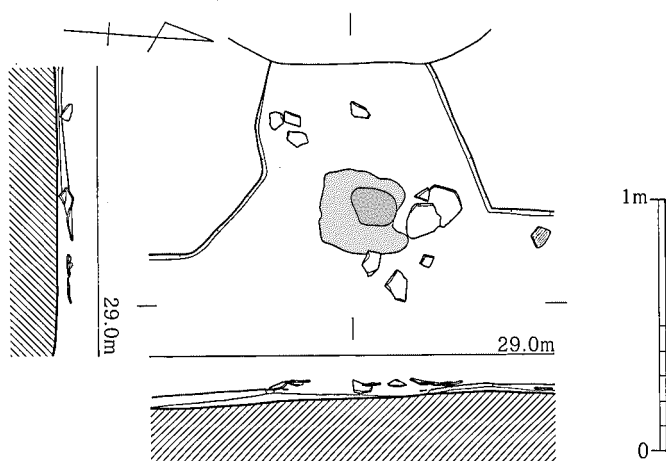
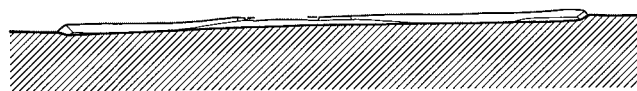
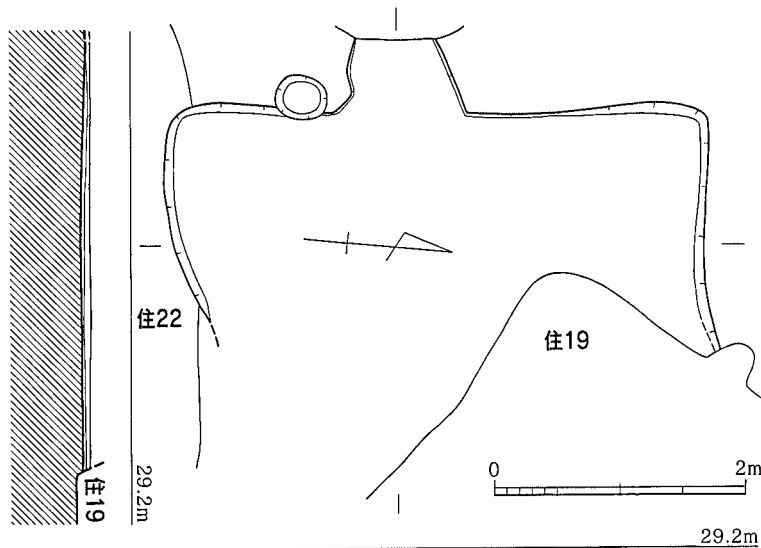
22号竪穴住居跡 (図版13、第29図)

22号竪穴住居跡は1区中央の南端部に位置する。18・20・21号住居跡に切られる。南側は調査区外へ延びる。平面形は東西6.2m×南北4.0m以上の不整形な方形を呈するものと思われる。壁の深さは0.2m程度である。床面からはピット4基を検出しているが、位置的には支柱穴で良いと思われるが浅い。



第27図 19号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

出土土器 (第30図1～10) 1～5は混入の弥生土器片。1は小形の壺胴部であろう。最大径は14.0cmで、最大径の部分を実帯状に整形している。色は茶褐色を呈する。2・3は甕の口縁部。2は口縁端部に刻み目を施す。口径28.5cm、色は黄褐色を呈する。3の口径は30.3cm。丹塗りであろうか。4は甕の底部である。底径7.2cm、黄褐色を呈する。5は鉢になるのであろうか。口径20.2cm、色は白黄褐色を呈する。全体にナデ調整である。



第28図 20号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

全面に丹塗を施し、口縁上部平坦面には暗文を施文する。

24号竪穴住居跡 (図版14、第31図)

24号竪穴住居跡は1区中央の北よりに位置する。19号住居跡を切る。平面形は東西3.5m×南北3.1mの方形で、壁の深さはわずかである。北壁にカマドを付設する。床面からはピット1基を検出した。

カマド (図版14、第31図) 北壁のやや西よりで検出した。わずかに突出するカマドで、右袖は65cm、左袖は45cm、わずかに両袖が内向きとなる。袖には黄褐色砂質土を用い、高さは現状で5cmほどである。内側の西側部分が焼け、赤変する。

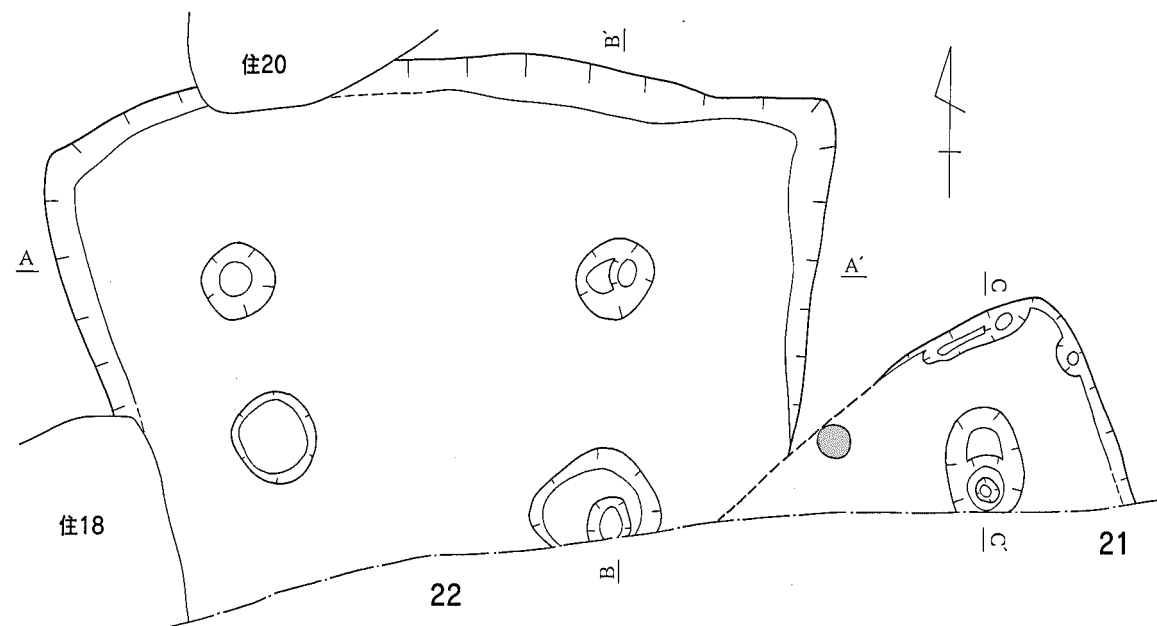
出土土器 (第30図12) 図示できるのは1点のみ。12は弥生土器の高杯で混入品であろう。口径は15.0cmである。鋤先状の口縁部付近の破片で、内面の調整はミガキ。全面に丹塗を施す。口縁上部平坦面には暗文を施文する。

6～8は土師器である。6は甕で、胴部が大きく膨らむものであろう。口径21.3cm、色は白黄褐色を呈する。7・8は高杯の脚部。内外面ともにケズリで仕上げる。7は白黄褐色を呈する。8は底径11.0cm、色は外が茶褐色、内が白黄褐色を呈する。9・10は須恵器杯蓋。いずれも口縁端部は丸い。9は口径14.1cm、色は外が黒褐色、内が淡灰色を呈する。10は口径が12.5cm、色調は外が灰茶色、内が灰色を呈する。

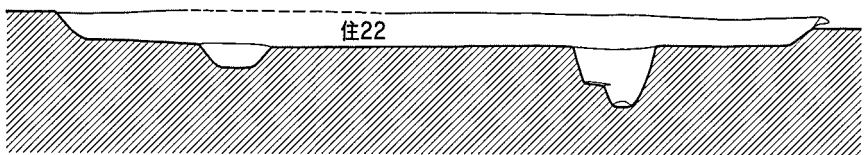
23号竪穴住居跡 (図版13、第29図)

23号竪穴住居跡は1区中央北端部に位置する。北側は調査区外へ延びる。平面形は東西6.4m以上×南北2.3m以上の方形のプランを呈すると考えられる。壁の深さは0.1m強で、南壁中央に東西1.2m×南北0.7mの楕円形の、深さ0.2mの屋内土坑が検出された。

出土土器 (第30図11) 図示できる遺物は1点のみである。11は弥生土器の高杯片で、口径は25.8cmを測る。鋤先状の口縁部上端面がわずかに内傾する。全

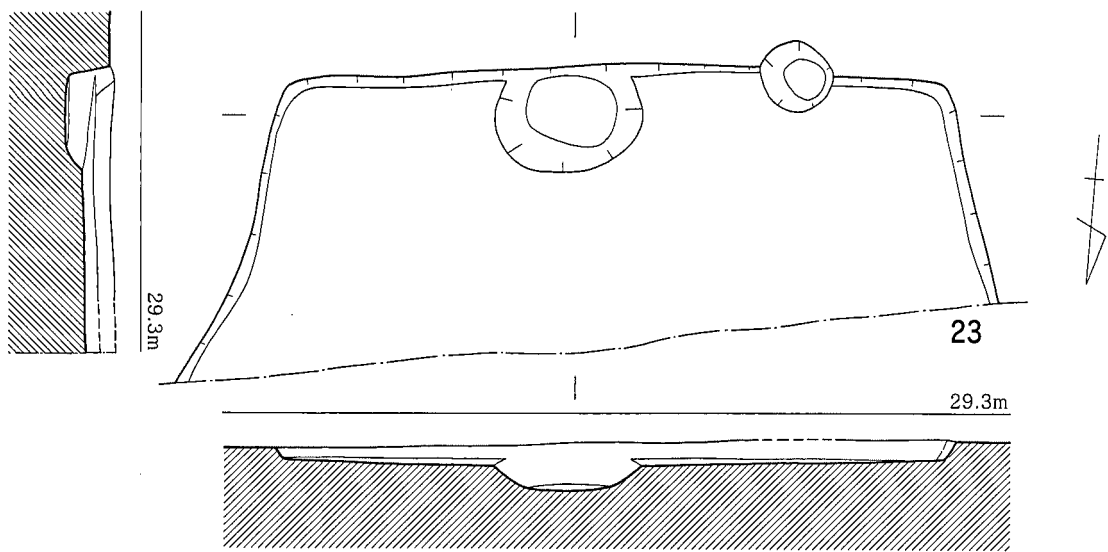
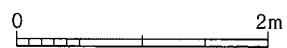
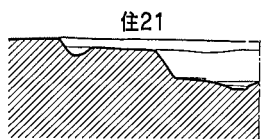
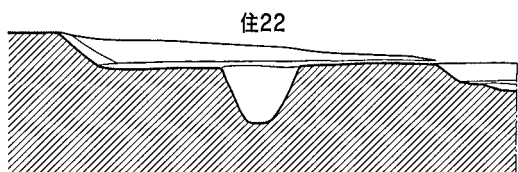


A 29.1m A'

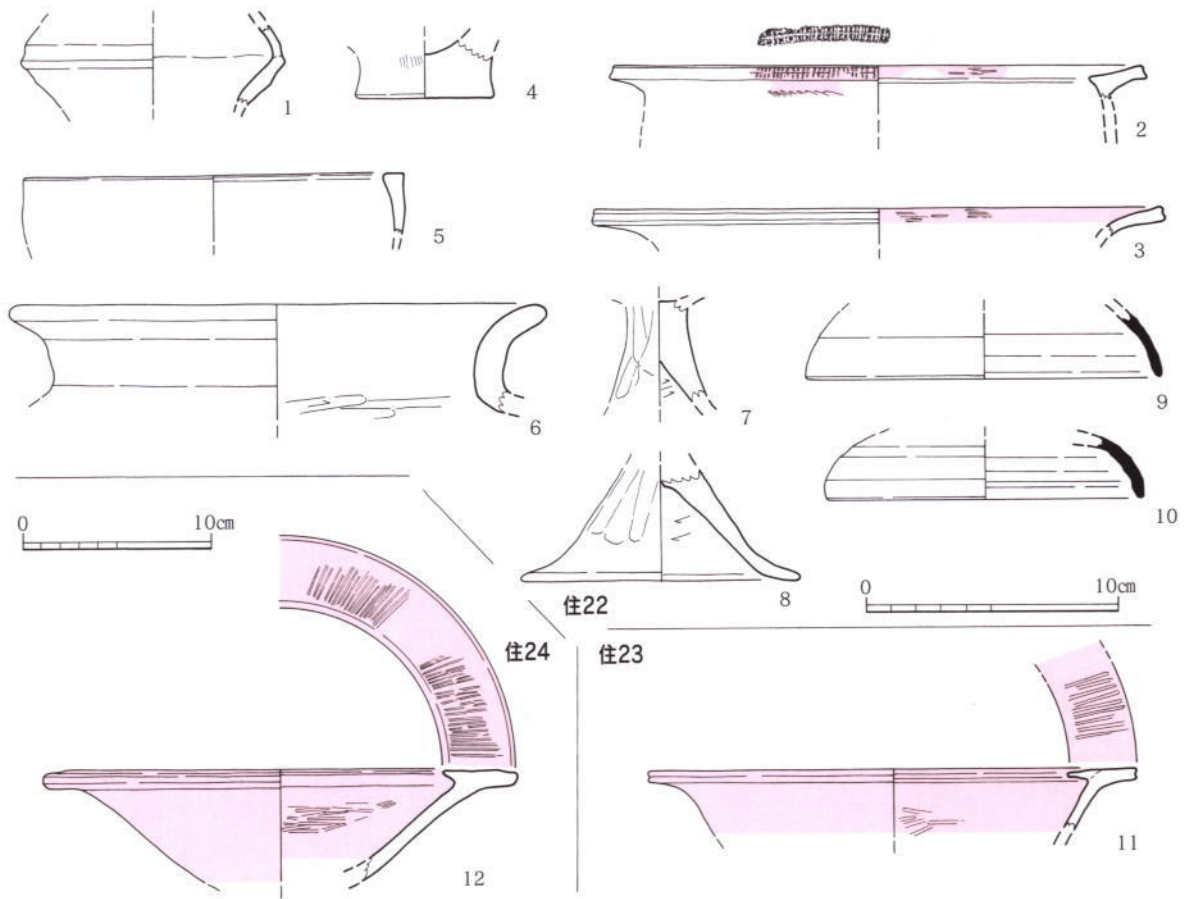


B 29.1m B'

C 29.1m C'



第29图 21~23号竖穴住居跡実測图 (1/60)

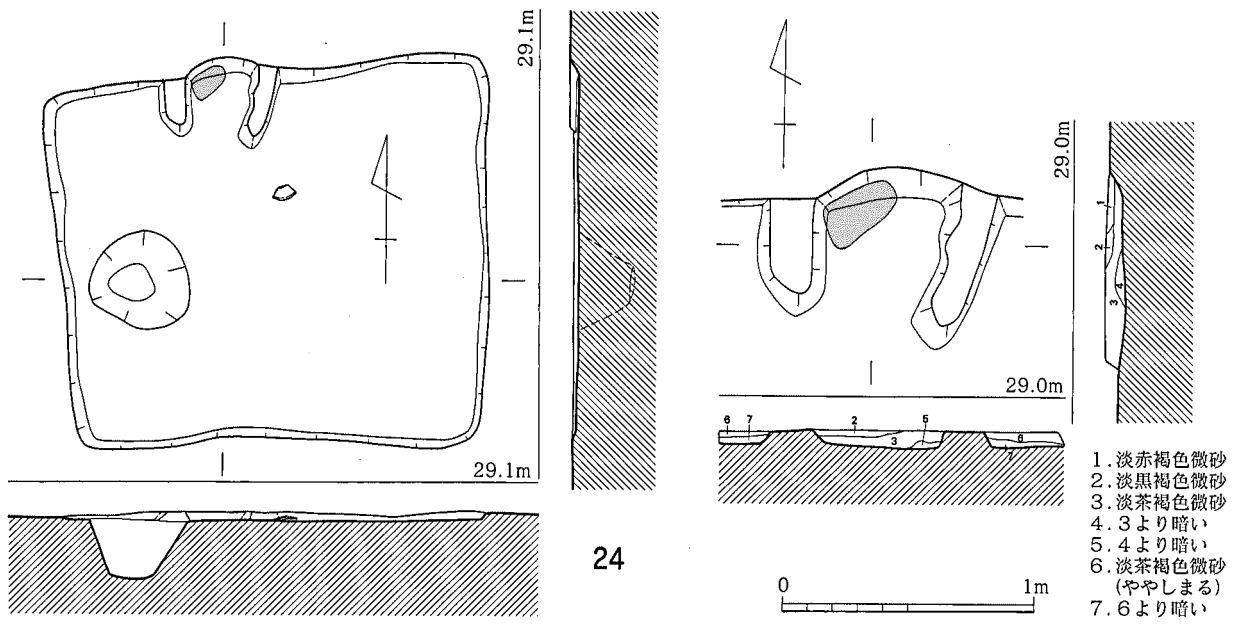


第30図 22～24号竪穴住居跡出土土器実測図（1～5・11・12は1/4、他は1/3）

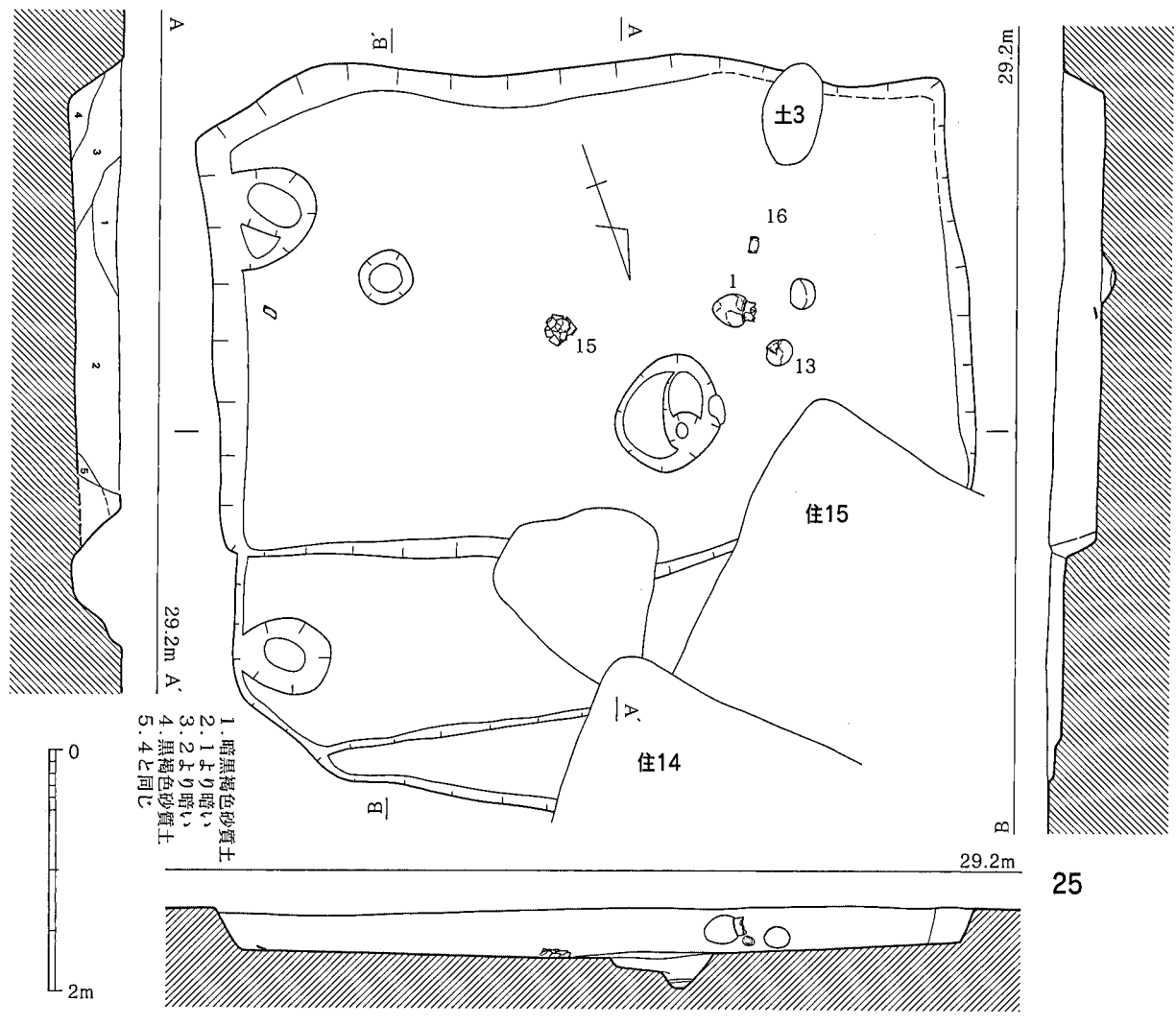
25号竪穴住居跡（図版15、第31図）

25号竪穴住居跡は1区中央付近に位置する。14・15号住居跡および3号土坑に切られる。平面形は東西6.3m×南北6.0mの方形を呈する。北側は二段のベッド状遺構を持つが、2棟もしくは3棟の住居が切りあっている可能性もある。壁の深さは0.4m程で、床面中央付近に0.45m×0.45mの略円形で深さ0.2mの土坑を検出した。一部で炭化物を検出しており、炉の可能性もある。その他、いくつかのピットを検出しているが、いずれも浅い。床面よりわずかに浮いた状態で4個体の完形に近い土器が出土した。住居跡からは砥石2点が出土し、第128図1は覆土、第128図2は下層出土。

出土土器（図版40、第32図） 図示したものは全て弥生土器である。うち、1・13・15・16は床面よりわずかに浮いた状態で出土した。1～5は壺。1は卵形の胴部にやや開き気味の口縁がつく。底部は復原であるが、わずかにレンズ状になるであろう。外面の調整は粗いハケメで、肩部に一条の小さな突帯を貼り付ける。胴部中位に焼成後の穿孔を施す。口径15.4cm、最大径23.8cm、器高36.6cm。色は外が暗黄茶褐色、内が黒色を呈する。2は広口壺の胴部。最大径23.2cm、底径6.0cmで、色は茶褐色を呈する。内外面はハケメを中心とした調整である。特徴的なのは胴部中位に5条の小さな突帯を貼り付ける点である。同様の壺は吉井町塚堂遺跡でも出土する。3はやや広がり気味の口縁を持つ壺であろうか。口径10.0cm、色は黄茶褐色である。外面はハケメ調整。4・5は胴部の広がり具合から壺の底部と判断した。4の底径は4.4cm、色は黄茶褐色を呈する。ハケメを中心とした調整である。5は底径7.6cm、色は灰黄茶色。内外面をハケメで仕上げる。

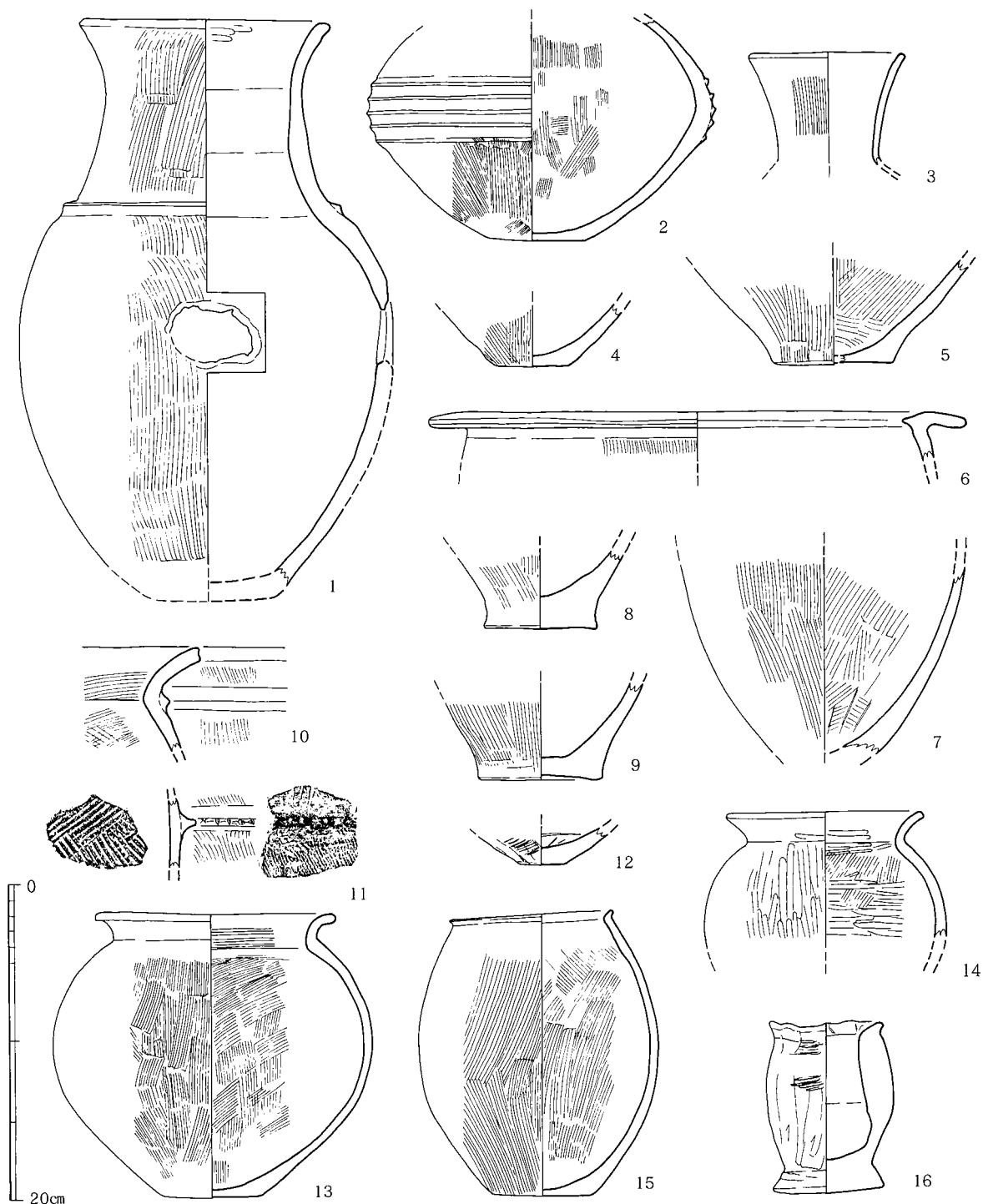


24



25

第31図 24・25号竪穴住居跡 (1/60)・24号住居跡カマド実測図 (1/30)



第32図 25号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

6～12は甕。6は口縁部片で、口縁内側にもわずかに粘土が貼り付けられる。口径34.0cm、色は灰黄色を呈する。7は胴部片。色は外が暗黄茶褐色、内が茶褐色を呈する。内外面の調整はハケメである。8・9はわずかに上げ底の底部。外面の調整はハケメ。8は底径7.0cm、色は灰黄褐色を呈する。9は底径7.9cm、色は外が橙褐色、内は白橙色で、底面の約半分は黒斑がある。10は「く」字口縁の屈曲部に突帯を貼り付けたもの。色は灰黄色。内外面ともに粗いハケメ。11は胴部片でやや大き目の突帯に刻み目を施す。色は暗黄茶褐色を呈する。12は甕の底部か。極めて

小さい底部で、外面は底部周辺でケズリ、それより上位はタタキである。底径は2.8cm、色調灰色～黄褐色～黒色を呈する。混入の可能性もある。

13～15は鉢。13は球形の胴部を持ち、強く外反する口縁をもつ。口径14.8cm、最大径20.2cm、底径6.3cm、器高18.0cmである。色は外が灰黄褐色、内が黄茶褐色を呈する。丁寧なつくりで内外面の調整はハケメである。14も同様の器形であろう。口径12.0cm、最大径15.4cm、色は黄茶褐色を呈する。胴部内面下半は横方向のミガキ、上半はハケメ。外面は縦方向のミガキである。15は鉢とするには胴部が細すぎる気がするが、ここでは鉢としておく。口径10.2cm、最大径15.2cm、底径6.4cm、器高18.1cmである。色は外が暗黄茶色、内が灰黄褐色である。内外面の調整はハケメである。16は手捏ねのコップ状土器である。口径7.2cm、最大径8.0cm、底径7.1cm、器高10.6cmである。色は暗黄茶色を呈する。強いナデにより成形を行うが、器壁は厚く重い。

26号竪穴住居跡（図版15、第33図）

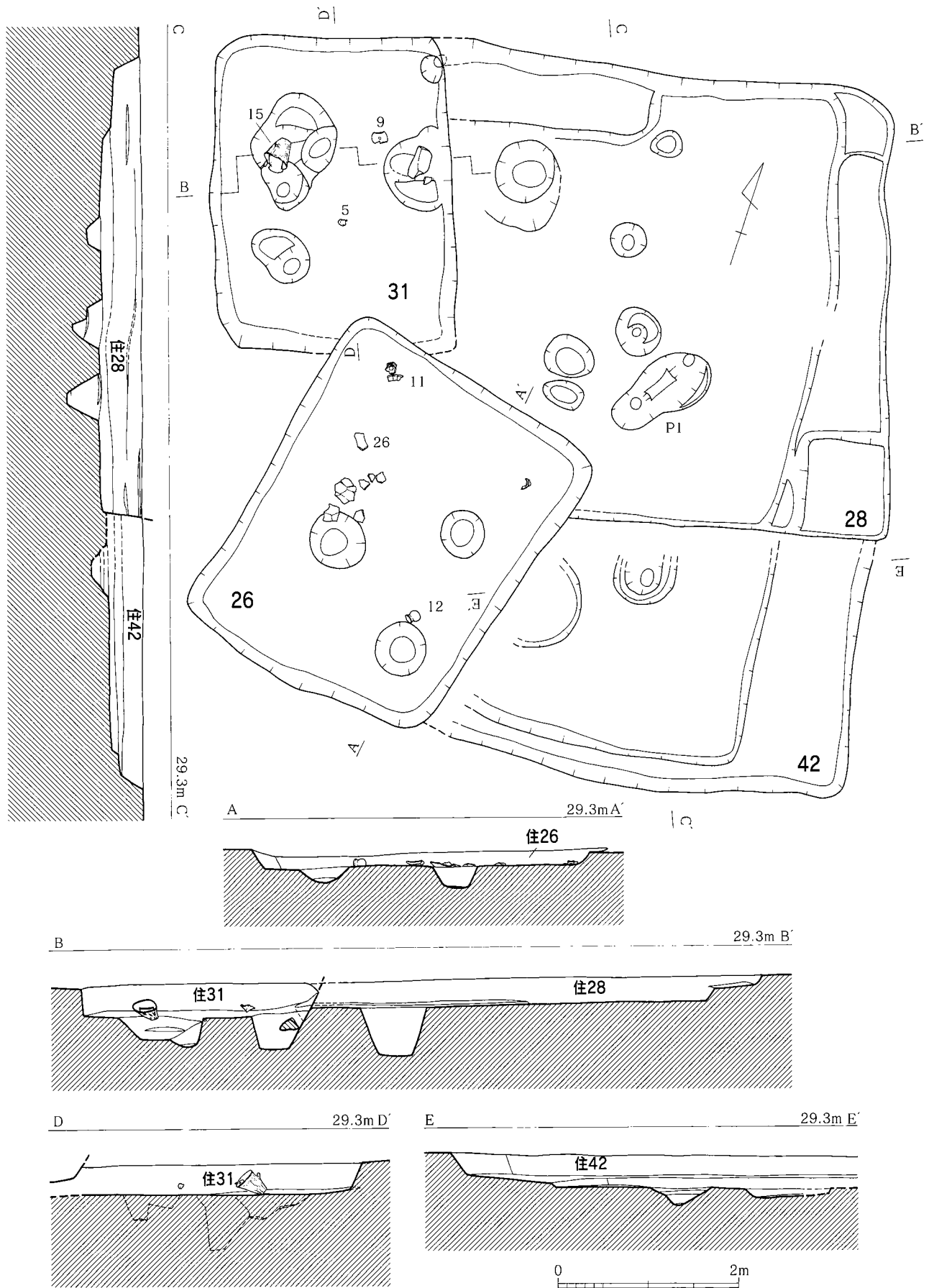
26号竪穴住居跡は1区の中央付近に位置する。28・31・42号住居跡を切る。平面形は東西3.1m×南北3.9mの方形を呈する。壁の深さは0.1m程で、床面でピット3基を検出したが、いずれも浅い。床面からは数個体の土器がまとまって出土している。

出土土器（図版40・41、第34図）1は混入の弥生土器。貼床下層から出土した。台付甕の台部分か。底径12.0cm、色は茶褐色を呈する。2～12は土師器である。2は高杯の杯部である。口径19.0cm、色は灰黄褐色を呈する。摩滅が著しいが外面にはハケメが一部残る。3～5は甕である。3は口縁部外面に圧痕が残る。口径27.6cmで、色は灰黄茶色を呈する。胴の張る器形であろう。貼床下層から出土した。4は胴部の大きく膨らむもので、最大径26.0cm、色は灰黄褐色を呈する。外面は粗いハケメ、内面はケズリである。床面付近から出土した。5は大形甕の胴部で最大径36.4cmである。色は外が灰黄色～暗褐色、内が灰黄褐色である。外面の調整はハケメ、内面の調整はケズリである。床面付近から出土した。6は甕の把手である。色は暗黄褐色を呈する。小形のもので内面の調整はケズリ。7～12は小形壺である。7～10は貼床下層から出土した。11・12は床面からの出土。7はややつぶれ気味の胴部に直線的に開く口縁をもつ。口径8.8cm、最大径9.2cmで、色は黄茶褐色である。外面はミガキ、内面はケズリ。8・9は頸部が窄まらず、口縁が大きく開く。外面はハケメとナデ、内面はケズリである。8は最大径9.4cmで、色は黄茶褐色である。9は口径10.8cm、色は灰黄褐色である。10は球形の胴部で短い口縁がつくもの。口径9.0cm、最大径10.0cm、器高10.6cmである。色は灰黄褐色である。口縁部内面に圧痕が残る。11・12は球形の胴部に直線的に広がる口縁をもつ。外面の調整はハケメとナデ、内面はケズリ。11は口径9.8cm、最大径12.8cm、色は赤褐色である。12は胴部下半に穿孔を施す。口径11.0cm、最大径12.6cm、器高13.8cm、色は黄橙色を呈する。

27号竪穴住居跡（図版15、第35図）

27号竪穴住居跡は1区中央付近の北端部に位置する。北側の一部が調査区外となるが、平面形は東西6.8m×南北4.8mの方形を呈する。南壁には幅15cm程のテラスを有する。床面ではピット4基を検出した。

出土土器（第36図1） 図示できるものは1点のみ。1は弥生土器の甕である。口縁部分で端部は丸く仕上げている。色は外が灰黄褐色、内が黄橙色である。外面の調整はナデ、内面はナデ調整である。



第33图 26・28・31・42号竖穴住居跡実測图 (1/60)

28号竪穴住居跡（図版16、第33図）

28号竪穴住居跡は1区中央付近に位置する。42号住居跡を切り、26・31号住居に切られる。平面形は、東西4.8m以上×南北4.8mの方形を呈するものと考えられる。壁の深さは0.3mで、北壁の一部と東壁にベッド状遺構をもつ。東壁のベッド状遺構は両コーナー部分が一段高くなっている。床面からはピット7基が検出した。

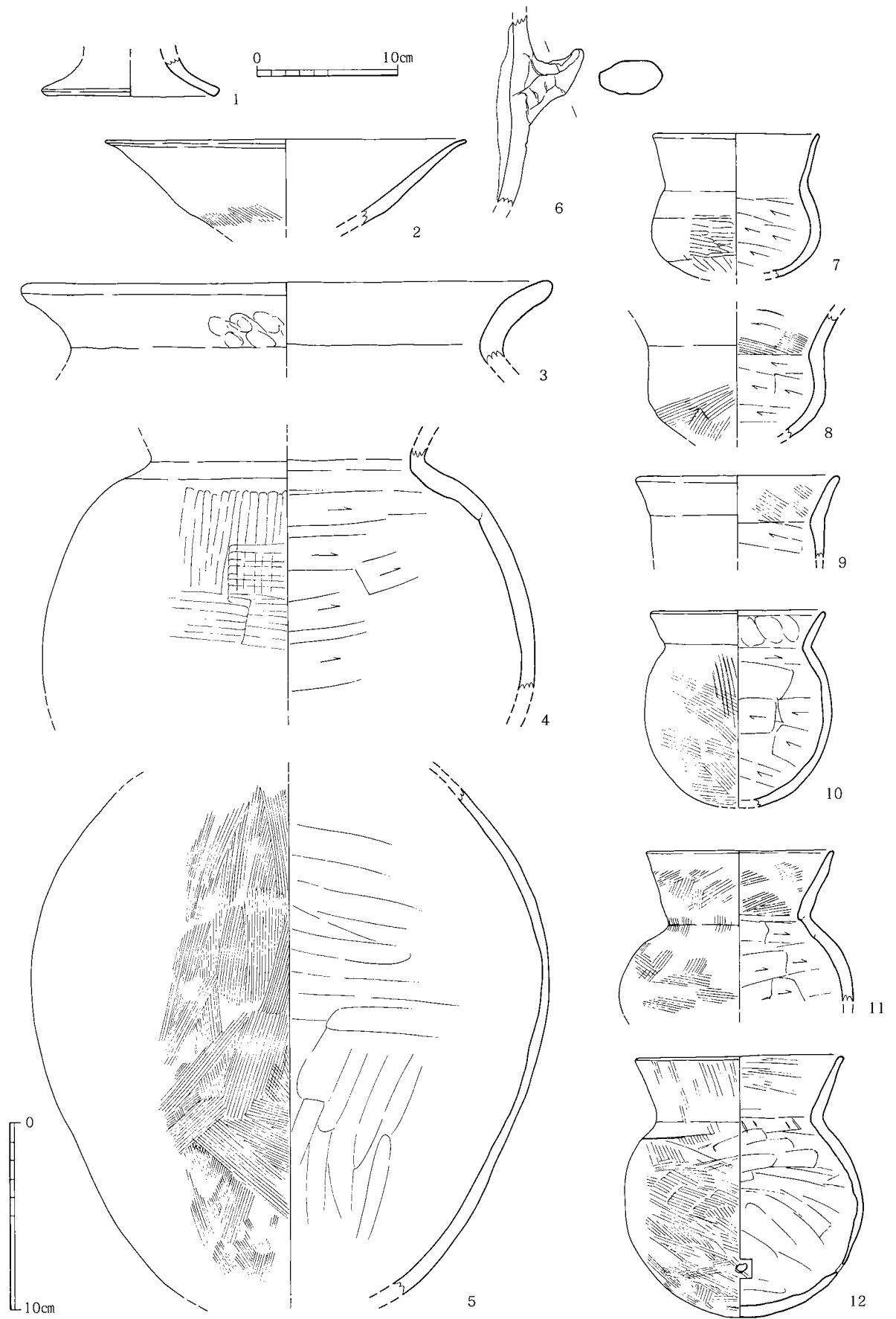
出土土器（図版41、第37・38図） 1～11は弥生土器である。混入であろう。1は口縁の強く外反する短頸の壺である。同一個体である底部片も出土しているが、接合しない。底部はわずかにレンズ状である。口径14.8cm、底径9.0cm、色は灰黄色である。外面の調整はハケメ、内面はナデ。2は球形の胴部で、外面は粗いハケメが残る。最大径14.8cm、底径5.4cmである。色は暗茶褐色を呈する。内面はナデ調整。底部は平底である。3は壺の胴部か。小さな二条の突帯が下向きに貼り付ける。色は灰褐色を呈する。内外面の調整はナデ。4は壺の底部か。底径5.0cm、色は茶褐色。平底で、内外面はハケメ調整。5はレンズ状の底部を呈する壺の底部。色は茶褐色、一部に黒斑がある。外面はケズリ。内面はハケメが残る。6～9は甕の口縁部である。6の口縁部内面はハケメ調整。色は暗灰褐色。7の色は灰褐色。8・9は口縁を角張って仕上げている。8の色は茶褐色、9は黄橙褐色。10・11は高杯の口縁部片である。10は鋤先に近い口縁を呈する。色は灰褐色。11は口縁を屈曲させるもので内面の調整はミガキである。色は暗茶褐色を呈する。

12～28は土師器である。12～18は高杯。12は口縁と胴部の境を屈曲させるもので、主にハケメ調整である。口径19.4cm、底径13.9cm、器高13.0cmである。13～16も同様の形態である。13はP1から出土した。口径18.3cm、色は赤褐色である。14は口径19.6cm、色は黄橙色を呈する。15は口径24.2cm、色は赤褐色を呈する。16は口径23.6cm、色は黄灰褐色を呈する。17は底径12.6cm、色は茶褐色を呈する。18は直線的に広がる脚部をもつ。底径13.0cm、色は黄橙褐色を呈する。19・20は小形の甕である。いずれも外面はハケメ調整、内面はケズリを中心とした調整である。19は成形後の胎土の柔らかい段階、20は比較的乾いた段階で穿孔を施す。19は口径17.7cm、器高10.5cm、色は淡赤褐色を呈する。20は口径13.5cm、器高8.5cm、色は淡赤褐色を呈する。21・22は小形の甕としておく。21はつぶれ気味の胴部に大きく開く口縁をつけた器形で内面はケズリ、その他の部分はハケメ調整。口径は13.0cm、最大径12.0cm、色は暗褐色を呈する。22は球形の胴部に短い口縁をつけたもので、器壁はやや厚い。口径11.7cm、最大径15.0cm、色は茶褐色を基調とする。23・24は壺である。いずれも屈曲する口縁をもつ。23の口縁は内湾したのち、端部は外反する。口径は16.0cm、色は黄褐色を呈する。24の口縁はわずかに内湾する。口径15.4cm。25～27はわずかに外反する口縁をもつ甕である。25は口径20.0cm、色は暗茶褐色を呈する。26は口径13.2cm、色は黄褐色。27は口径18.6cm、色は黄褐色。28は甕の底部か。色は暗茶褐色を呈する。外面はハケメ、内面はケズリ。底部に黒斑あり。29は須恵器甕の口縁部で混入品か。色は灰色を呈する。2条の波状文を施す。

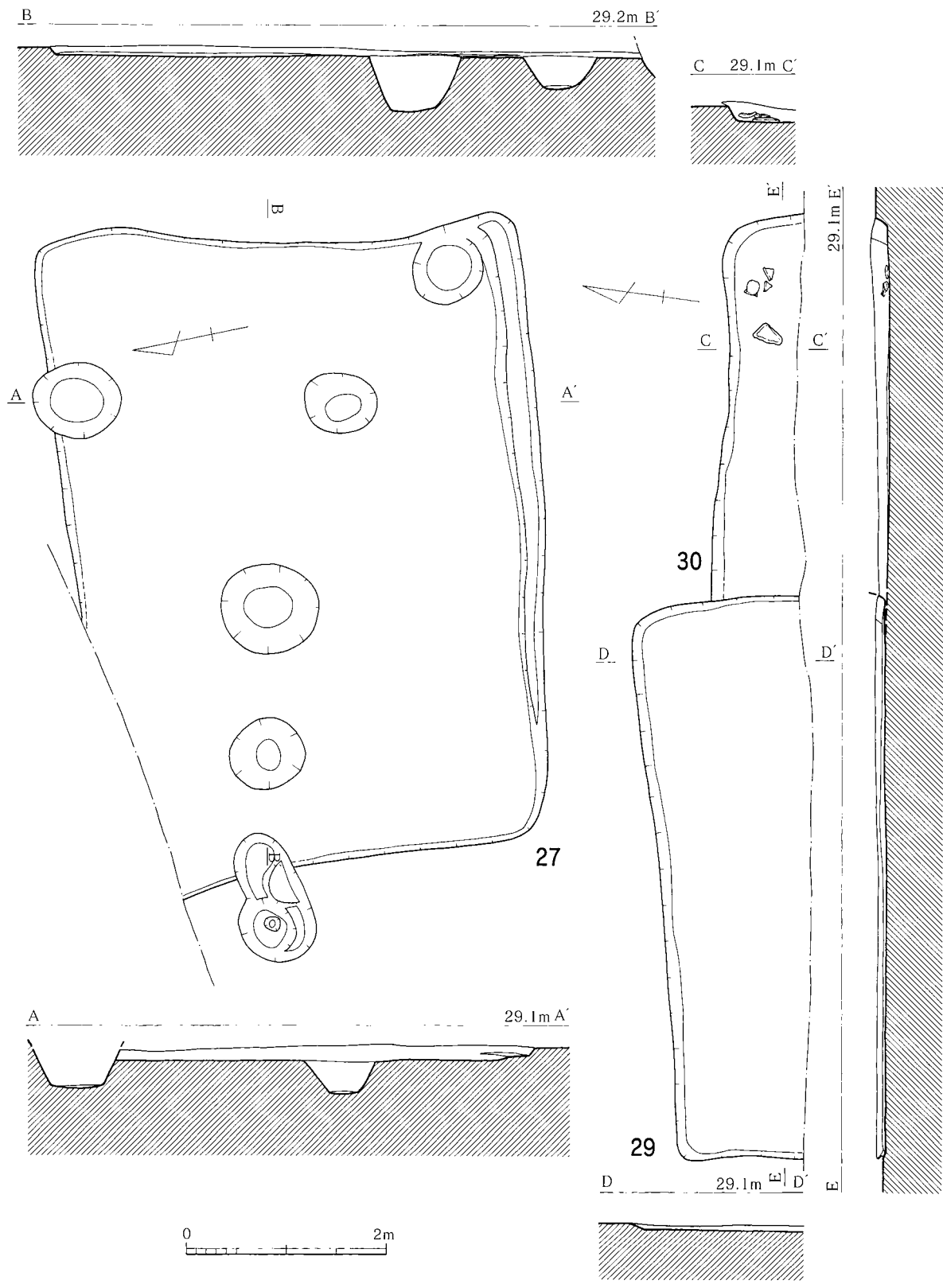
29号竪穴住居跡（図版16、第35図）

29号竪穴住居跡は1区中央付近南端部に位置し、30号住居跡を切る。南壁が調査区外へ延びるが、東西5.5m×南北1.7m以上の方形を呈するものと考えられる。壁の深さは0.1m弱で、床面でピット等は検出できなかった。

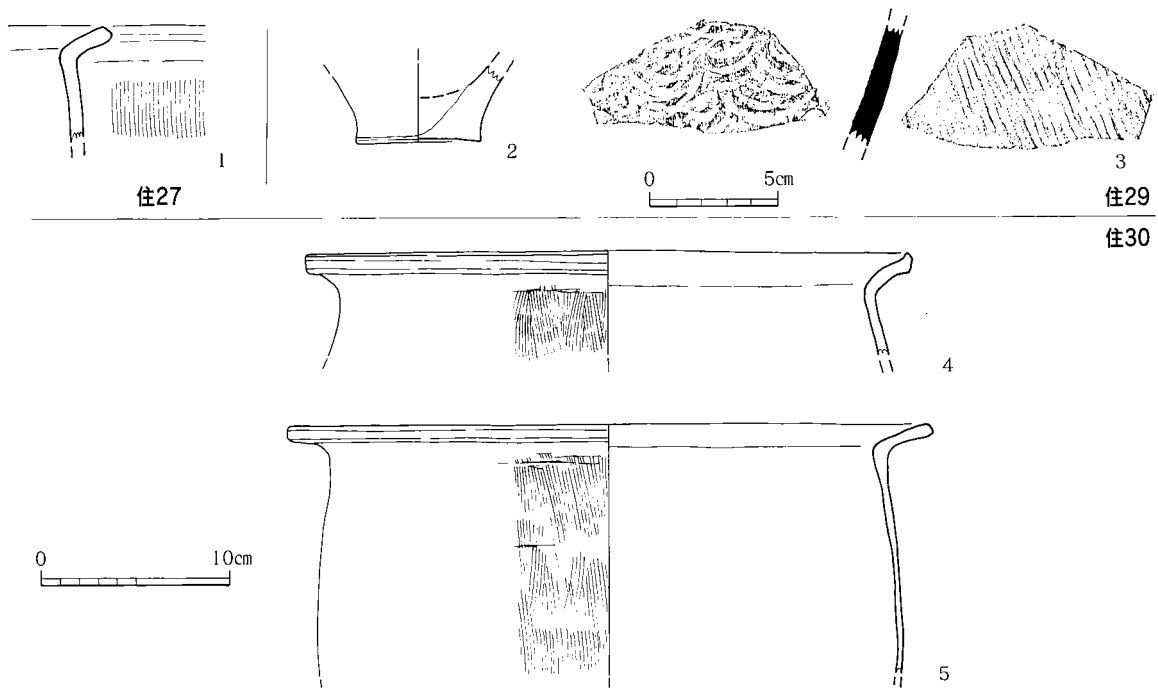
出土土器（第36図2・3） 2は混入の弥生土器である。底径6.6cm、色は内外面ともに灰黄褐色～茶褐色を呈する。わずかに上げ底の底部で全体をナデで仕上げる。3はこの住居跡に伴うものであろう須恵器甕の胴部片である。色は青灰色を呈する。内面は同心円文、外面には平行タタキの跡が残る。



第 34 図 26 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1・5は 1/4、他は 1/3)



第35图 27·29·30号竖穴住居迹实测图 (1/60)



第36図 27・29・30号竪穴住居跡出土土器実測図（3は1/3、他は1/4）

30号竪穴住居跡（図版16、第35図）

30号竪穴住居跡は1区中央やや東より南端部に位置し、29号住居跡に切られる。南壁が調査区外に延びるが、東西3.7m以上×南北0.9m以上の方形のプランを呈するものと考えられる。壁の深さは0.1m程度で、床面からはピット等は検出できなかった。床面付近から土器が出土している。

出土土器（第36図4・5） 4・5は弥生土器の甕口縁部である。4は口縁端部をはねあげるもの。口径30.0cm、色は橙褐色を呈する。外面の調整はハケメ、内面はナデ調整。5は住居跡の床面付近から出土したものである。口径は34.0cm、色は橙褐色を呈する。外面は粗いハケメ、内面はナデ調整で、薄く造りがよいもの。

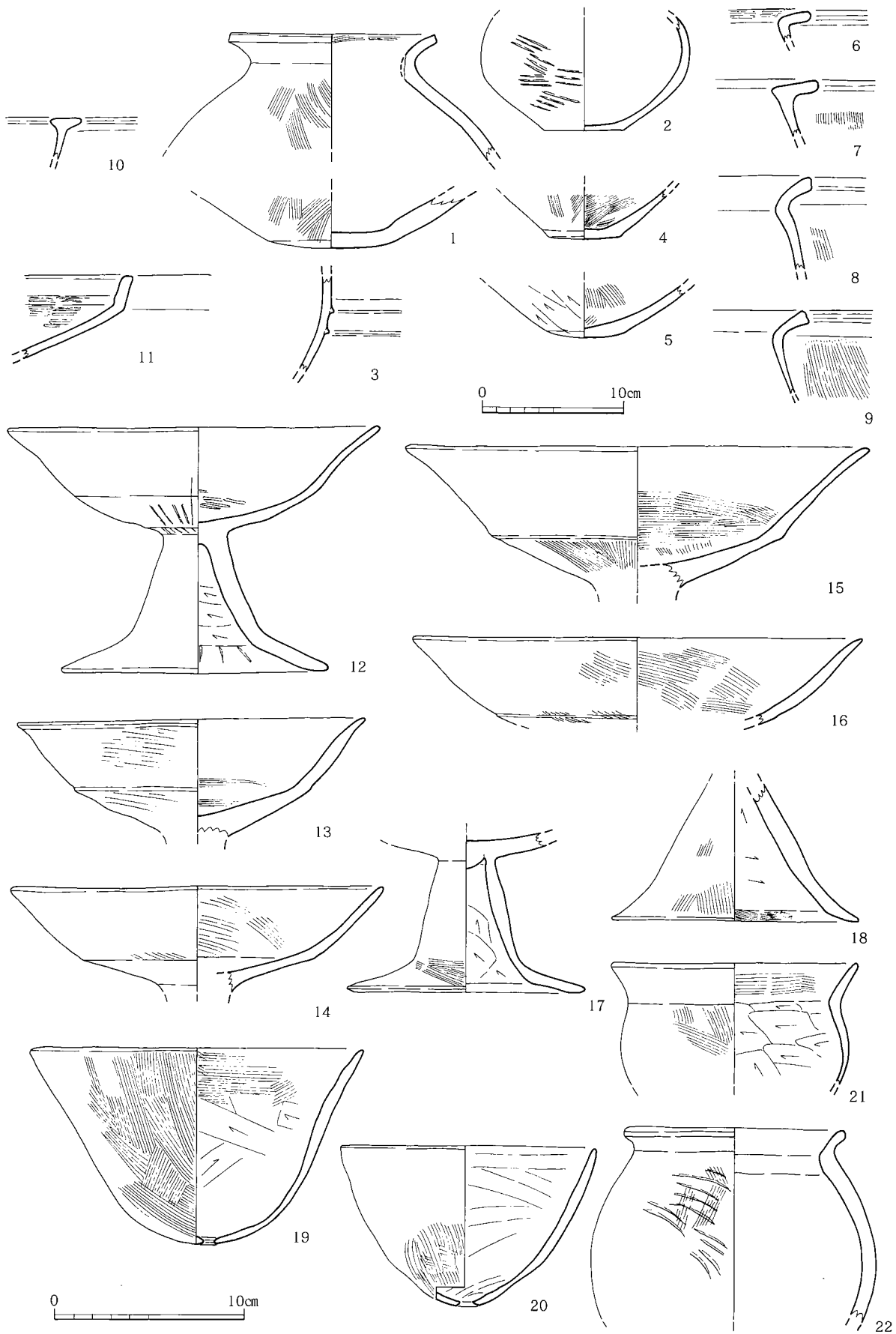
31号竪穴住居跡（図版17、第33図）

31号竪穴住居跡は1区中央付近に位置する。28号住居跡を切り、26号住居跡に切られる。平面形は東西2.7m×南北3.5mの方形を呈する。壁の深さは0.3mで、床面からはピット数基を検出している。床面直上で、ほぼ完形の甕等が出土しているが、カマドは検出できなかった。掘り間違いもしくは住居でない可能性もある。覆土からは磨製石斧（第126図12）が出土。

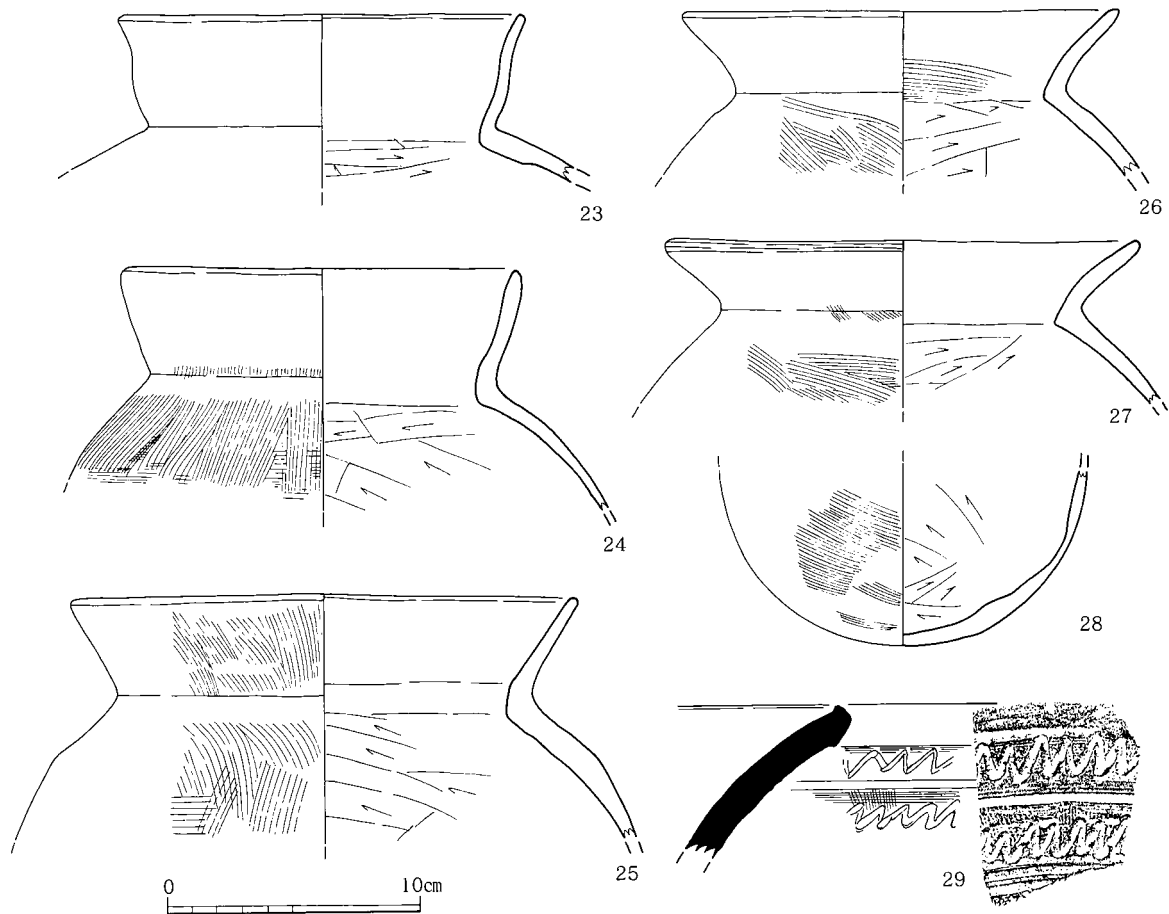
出土土器（図版41～43、第39・40図） 弥生土器・土師器・須恵器が出土しているが、土師器は二つの時期に分けることができ、時期の異なる2棟の住居を同時に掘った可能性が高い。

1～4は混入の弥生土器である。1は鉢である。小形で平底。口径11.6cm、底径6.0cm、器高4.8cm、色は橙褐色である。外面は縦方向のミガキ、内面はナデ調整である。2・3は甕である。2は口縁端部をはねあげるように仕上げる。色は白橙色を呈する。3はわずかに上げ底の底部で外面はハケメ。底径8.2cm、色は灰黄褐色である。4は支脚でタタキ成形である。口径5.8cm、底径11.4cm、器高10.0cm、色は茶褐色を呈する。上面に穿孔が施される。

5～15は土師器である。5は小形丸底壺で外面のハケメ、内面は圧痕が残る。口径5.4cm、最大径5.2cm、器高4.6cm、色は黄茶褐色で、一部黒斑あり。粗製である。6～9は高杯である。



第 37 図 28 号 竖穴住居跡出土土器実測図 (1) (1 ~ 11 は 1/4、他は 1/3)



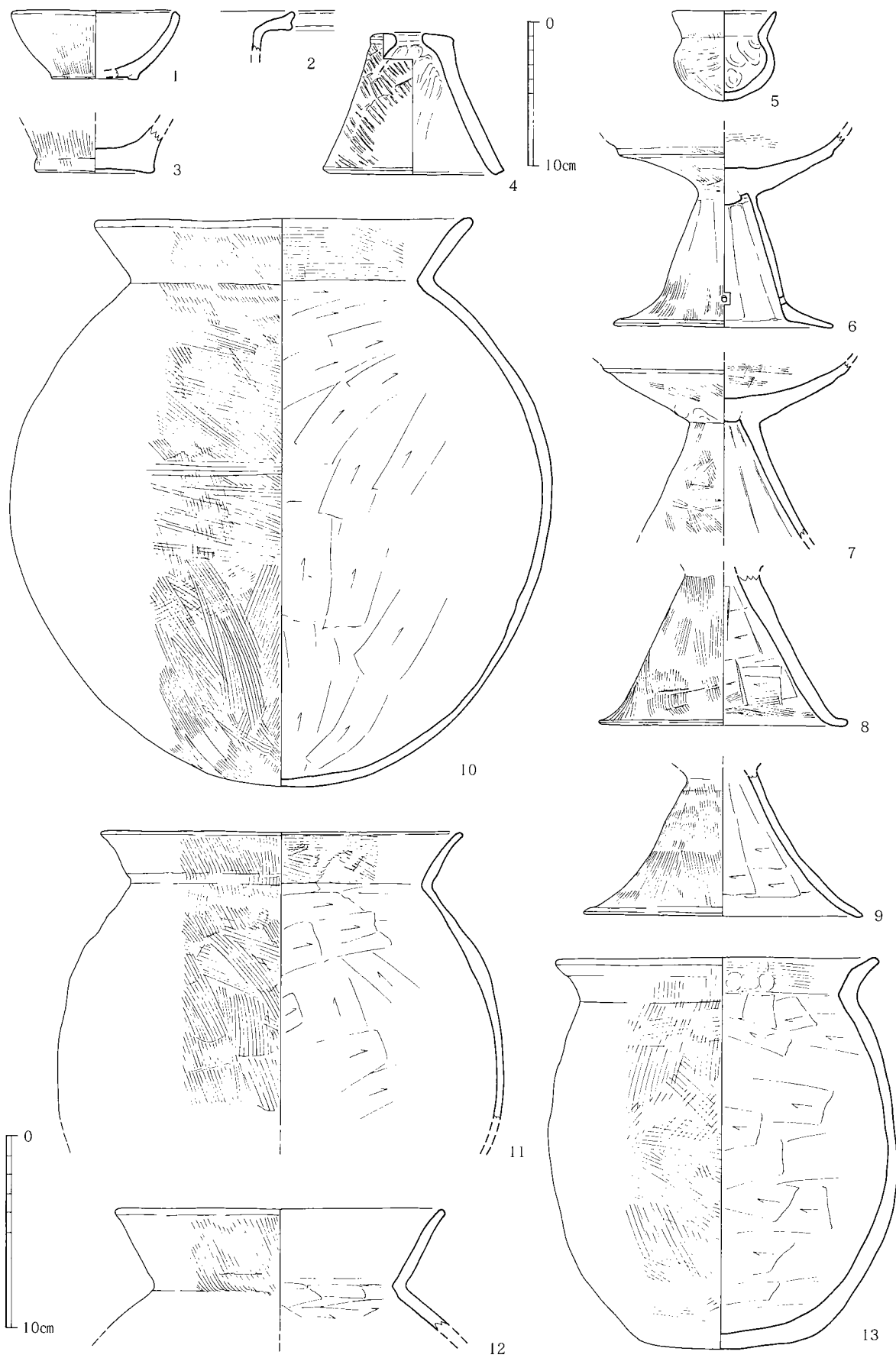
第38図 28号竪穴住居跡出土土器実測図(2)(1/3)

6・7は脚部が屈曲し大きく開くもの。6は底径11.4cm、色は橙褐色である。7の色は黄褐色である。8・9は直線的に開くものである。全体に外面はハケメ調整、脚部内面はケズリである。8は底径12.8cm、色は黄褐色である。9は底径14.5cm、色は赤褐色である。10～14は甕である。10～12は比較的薄い器壁に直線的に開く口縁をもつものである。外面はハケメ、内面はケズリである。10は口径19.5cm、最大径30.0cm、器高29.5cmである。色は橙褐色を基調とする。11は口径18.8cm、最大径23.0cm。色は暗黄茶褐色を呈する。12は口径17.0cm、色は橙褐色である。13は平底気味で口縁がやや外反しながら広がる甕で、先述の甕よりは明らかに新しい傾向をもつ。口径16.7cm、最大径19.0cm、器高20.4cmである。色は暗茶褐色を基調とする。器壁は厚く、口縁部内面には圧痕が残る。外面はハケメ、内面は主に横方向のケズリである。14は大きく膨らむ胴部で外面はハケメであるが、タタキ跡が残る。内面の調整はハケメ。色は黄灰色である。15は甑である。口径25.8cm、底径10.8cm、器高27.2cm、色は橙褐色を基調とする。胴部やや上位の両側に大きな把手がつく。外面は粗いハケメ、内面はケズリである。

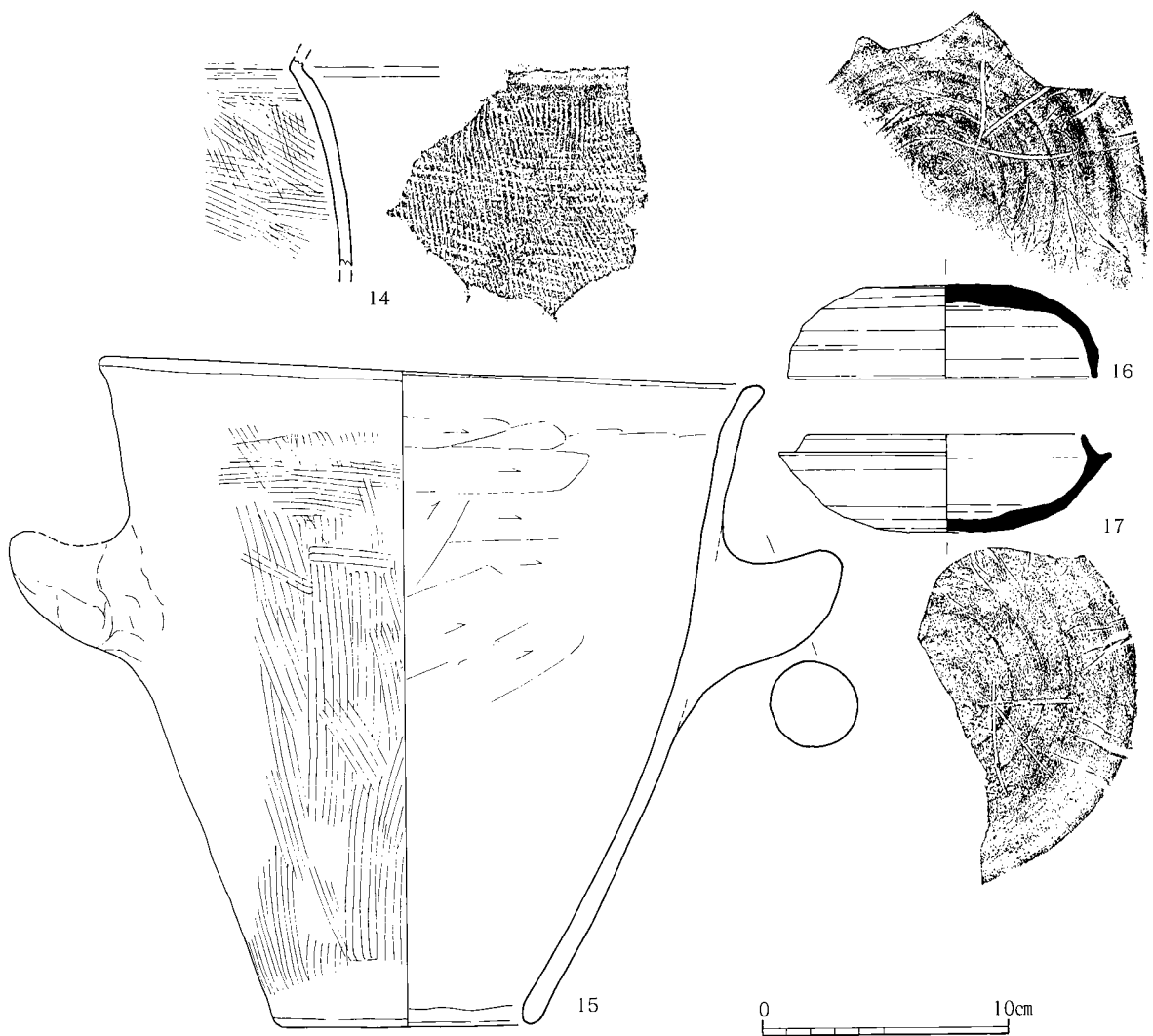
16・17は須恵器の杯蓋である。16は口径12.6cm、器高4.3cm、色は暗灰色である。17は口径11.2cm、最大径13.4cm、器高4.0cm、色は暗灰色である。胎土・焼成も似通っており、いずれも同じヘラ記号を外面にもち、内面の仕上げナデの順序も同一であることから、同一工人による製作と判断しても良いと考えられる。

32号竪穴住居跡(図版17、第41図)

32号竪穴住居跡は1区東より中央付近に位置する。平面形は東西4.7m×南北4.0mの方形を



第39図 31号竖穴住居跡出土土器実測図(1) (1~4は1/4、他は1/3)



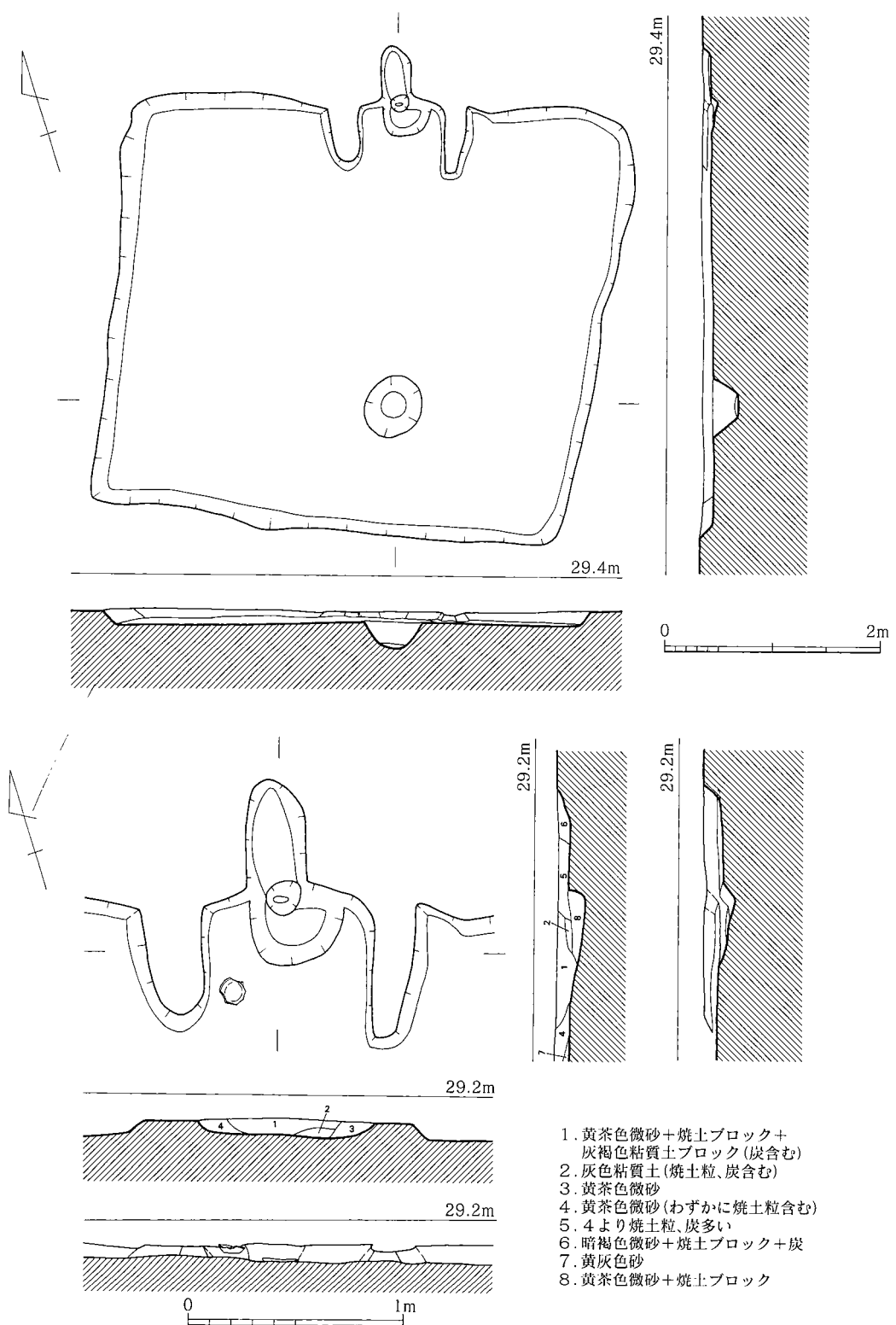
第40図 31号竪穴住居跡出土土器実測図(2)(1/3)

呈する。壁の深さは0.1m程度で、北壁中央部にカマドを付設する。床面からピット1基を検出した。

カマド(図版17、第41図) 北壁の中央で検出した、突出のほとんどないカマドで、右袖70cm、左袖60cmで、平行に並ぶ。袖には砂質土を用い、高さは現状で8cmほどである。奥側がわずかに掘り込まれ、そこから北に煙道は0.5m延びる。カマド内部からは土師碗1点がやや浮いた状態で検出される。

出土土器(第42図1~9) 1~5は混入の弥生土器である。1~3は甕である。1は口径30.0cm、色は橙色を呈する。外面はハケメ調整。2は鋤先に近い口縁部片で、内外面ともにナデ調整。色は橙褐色を呈する。3はわずかに上げ底の底部。底径7.2cm、色は外面が赤橙色、内面が黄褐色を呈する。外面はハケメ、内面はナデ調整。4は鉢か。口径10.0cm。胴部中位に突帯を貼り付ける。全面ナデ調整。5は高杯の杯部である。口径30.0cm、色は橙褐色を呈する。口縁部と胴部の境で強く屈曲する器形で、口縁部外面に波状文を暗文で施す。

6~8は土師器である。6・7は杯の蓋である。天井部との境で屈曲し、大きく広がる。口径9.6cm、色は黄褐色を呈する。7は口径12.8cm、色は橙褐色である。8は小形の甕の底部である。色は橙褐色を呈する。器壁は厚い。9は須恵器高杯である。色は灰色を呈する。全体にナデ



第41図 32号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

調整を行う。

33号竪穴住居跡（図版18、第43図）

33号竪穴住居跡は1区東より中央付近に位置する。平面形は東西3.5m×南北3.2mの方形で、壁の深さは0.1m程である。床面からはピット等は検出されていない。

出土土器（図版43、第42図10～14） 10～14は弥生土器の甕である。10は口縁端部を丸く仕上げる甕で、胴部がわずかに膨らむ。口径30.7cm、色は橙褐色である。11は胴部が膨らまないもの。口径30.0cm、色は暗橙褐色である。12は口縁端部をはねあげて仕上げるもので、口縁部下に突帯を貼り付ける。口径31.8cm、色は淡黄褐色である。13は口縁端部を丸く仕上げ、口縁部下に突帯を貼り付けるものである。口径36.0cm、色は淡黄褐色を呈する。内面はハケメ調整。14はわずかに上げ底の底部である。底径9.2cm、色は茶褐色、外面には煤が付着する。外面は粗いハケメ。内面はナデ調整である。

34号竪穴住居跡（図版18、第43図）

34号竪穴住居跡は1区東部やや南よりに位置し、35号住居を切る。平面形は東西2.6m×南北3.3mの方形で、壁の深さは0.1m程である。西壁中央部にカマドを付設する。床面からはピット等は検出できなかった。

カマド（図版18、第43図） 西壁の中央で検出した。約40cm突出するカマドで、右袖は40cmで内側に曲がる。左袖は65cmである。左袖に比べ、右袖が短く掘りすぎの可能性もある。カマド床面は住居床面に比べ、20cmと大きく掘り込まれている。焼土ブロック等は出土しているが、焼面は確認できなかった。

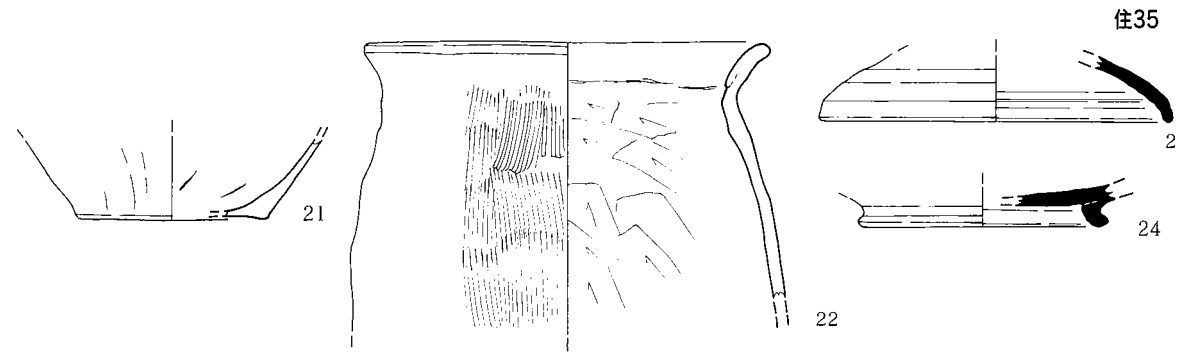
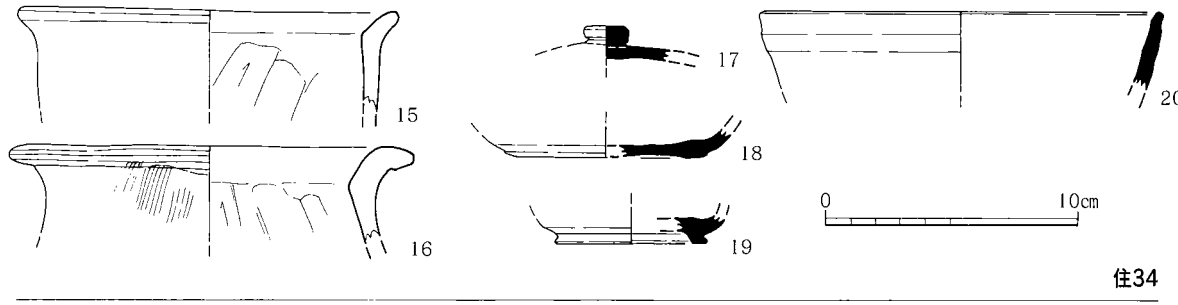
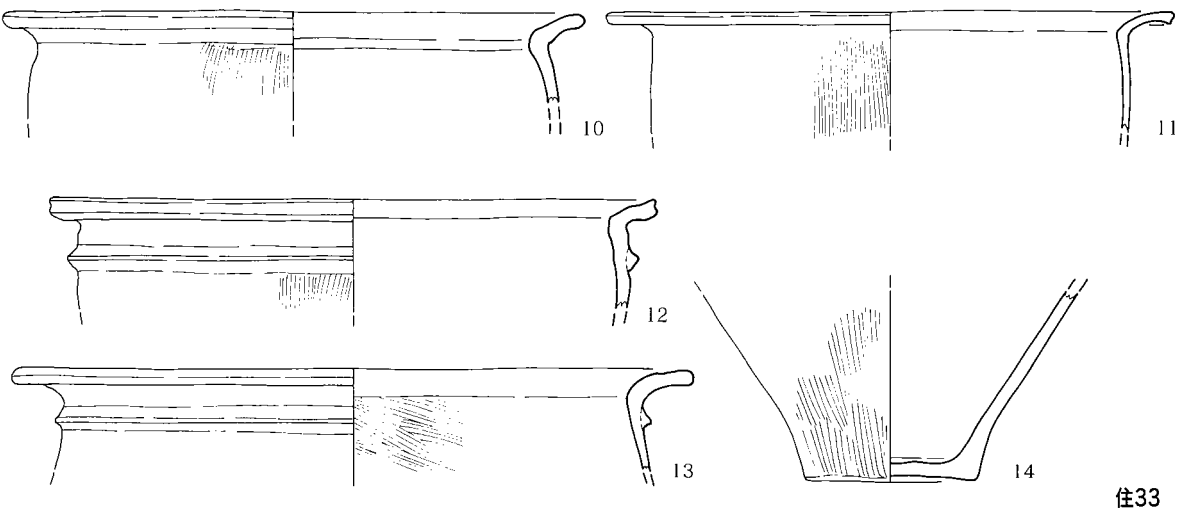
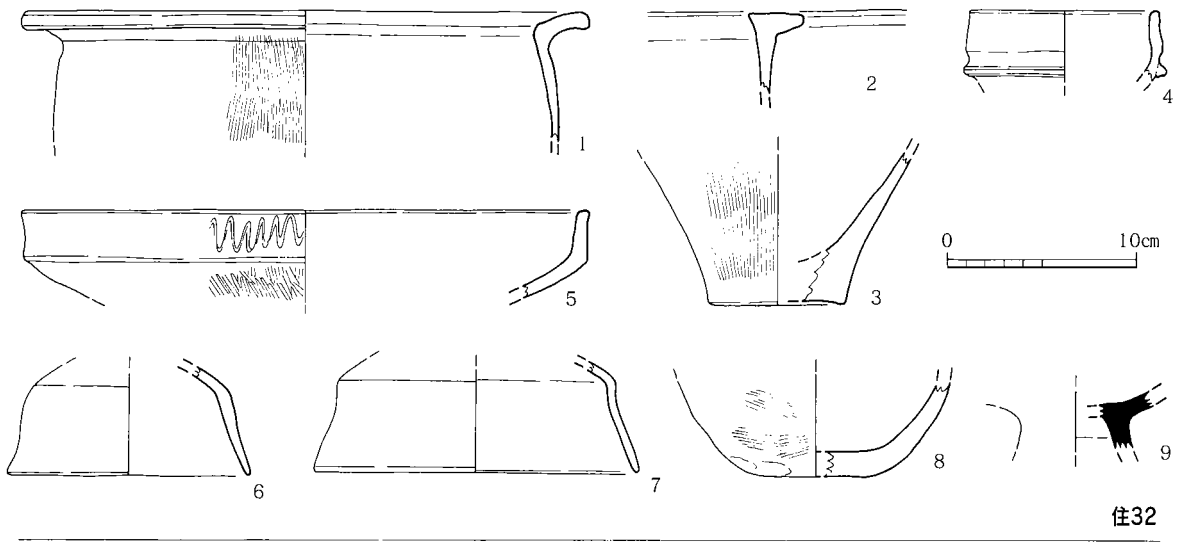
出土土器（第42図15～20） 15・16は胴部の張らない小形の土師器甕である。外面はハケメ、内面はケズリ。15は口径15.0cm、色は橙褐色～暗灰色を呈する。16は口縁を強く屈曲させ、口縁部外面にハケメの原体が残る。口径16.0cm、色は橙褐色で、一部黒灰色を呈する。17～20は須恵器である。17は杯蓋。擬宝珠つまみがつく。つまみの径は1.8cm。ナデ調整。18は高台を貼り付けない杯身。底径8.0cm、色は灰色を呈する。内外面の調整はナデ。19は高台の踏ん張らない杯身である。底径6.0cm、色は暗灰色～黒灰色である。全体にナデ調整を施す。20は大形杯か。口径16.0cm、色は灰色～暗灰色を呈する。内外面ともにナデ調整。

35号竪穴住居跡（図版19、第44図）

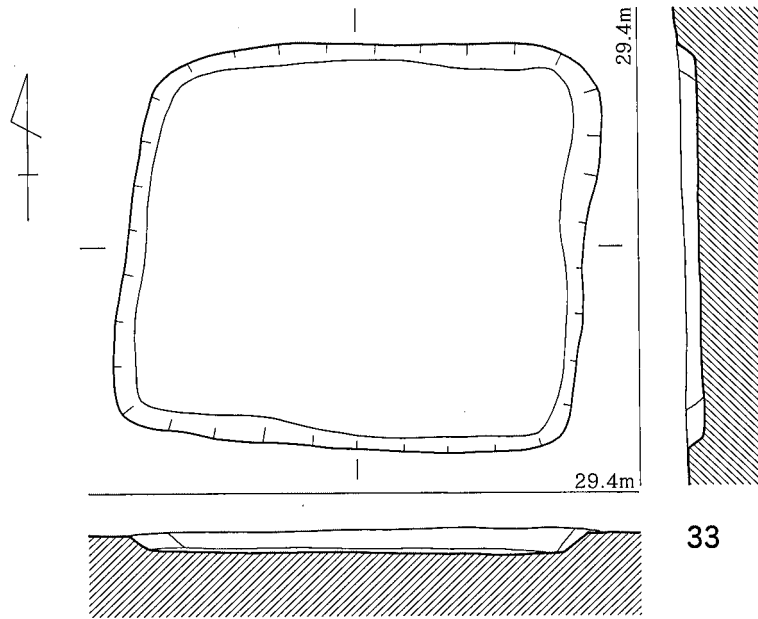
35号竪穴住居跡は1区東部南寄りに位置し、34号住居跡に切られる。平面形は東西3.1m×南北2.7mの方形を呈し、壁の深さは0.1m弱である。北壁の中央部にカマドを付設する。床面からはピット1基を検出したが、主柱穴とはなり得ないであろう。

カマド（図版19、第44図） 北壁の中央で検出した。約25cm突出するカマドである。右袖は60cm、左袖は60cm、袖は砂質土で構築される。カマド床面は掘り窪めることがなく、小ピット3基を検出している。遺物は右袖の直上で土器が出土した。

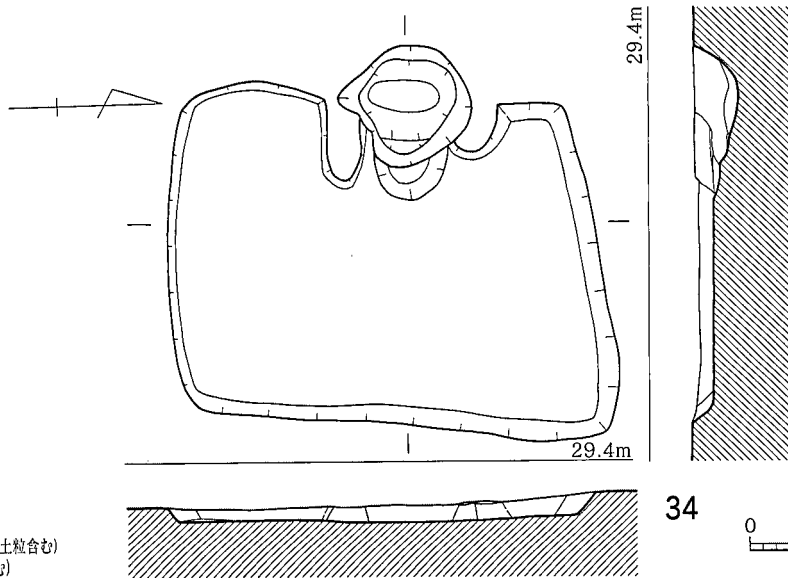
出土土器（第42図21～24） 21は弥生土器甕の底部か。底径11.2cmを測り、色は外が灰黄色～黒灰色、内は橙褐色を呈する。内外面の調整はナデであり、混入品と考えられる。22は土師器の甕である。カマドから出土した。内面の口縁部と胴部の境に接合痕が明瞭に残る。口径16.0cm、色は灰黄色～暗灰色を呈する。外面はハケメ、内面は斜め方向のケズリを施す。23は須恵器杯蓋である。浅いのが特徴的である。口径14.0cm、色は暗灰色～黒灰色である。内外面の調整はナデ。24は高台の踏ん張る杯身である。底径10.0cm、色は暗灰色である。内外面の調整はナデである。



第42図 32～35号竪穴住居跡出土土器実測図 (1～5・10～14・21は1/4、他は1/3)



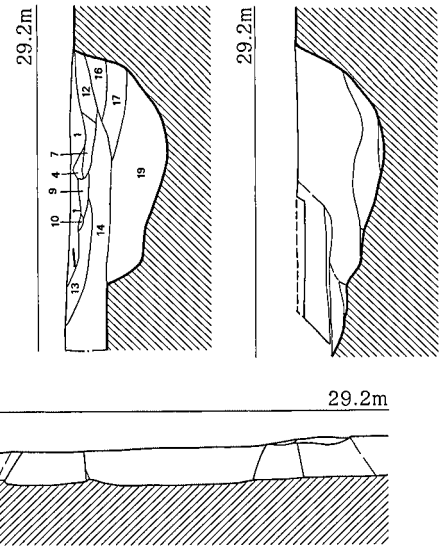
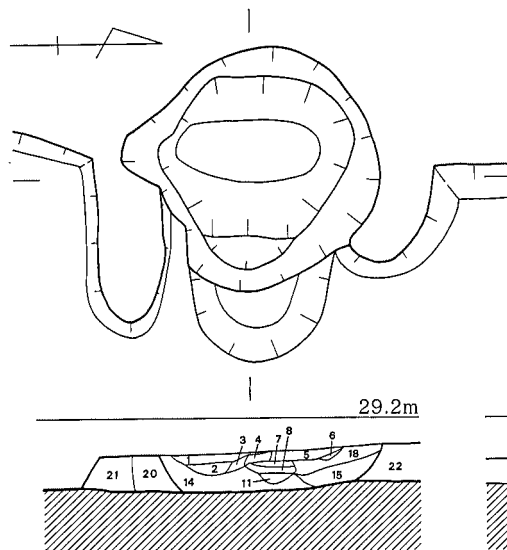
33



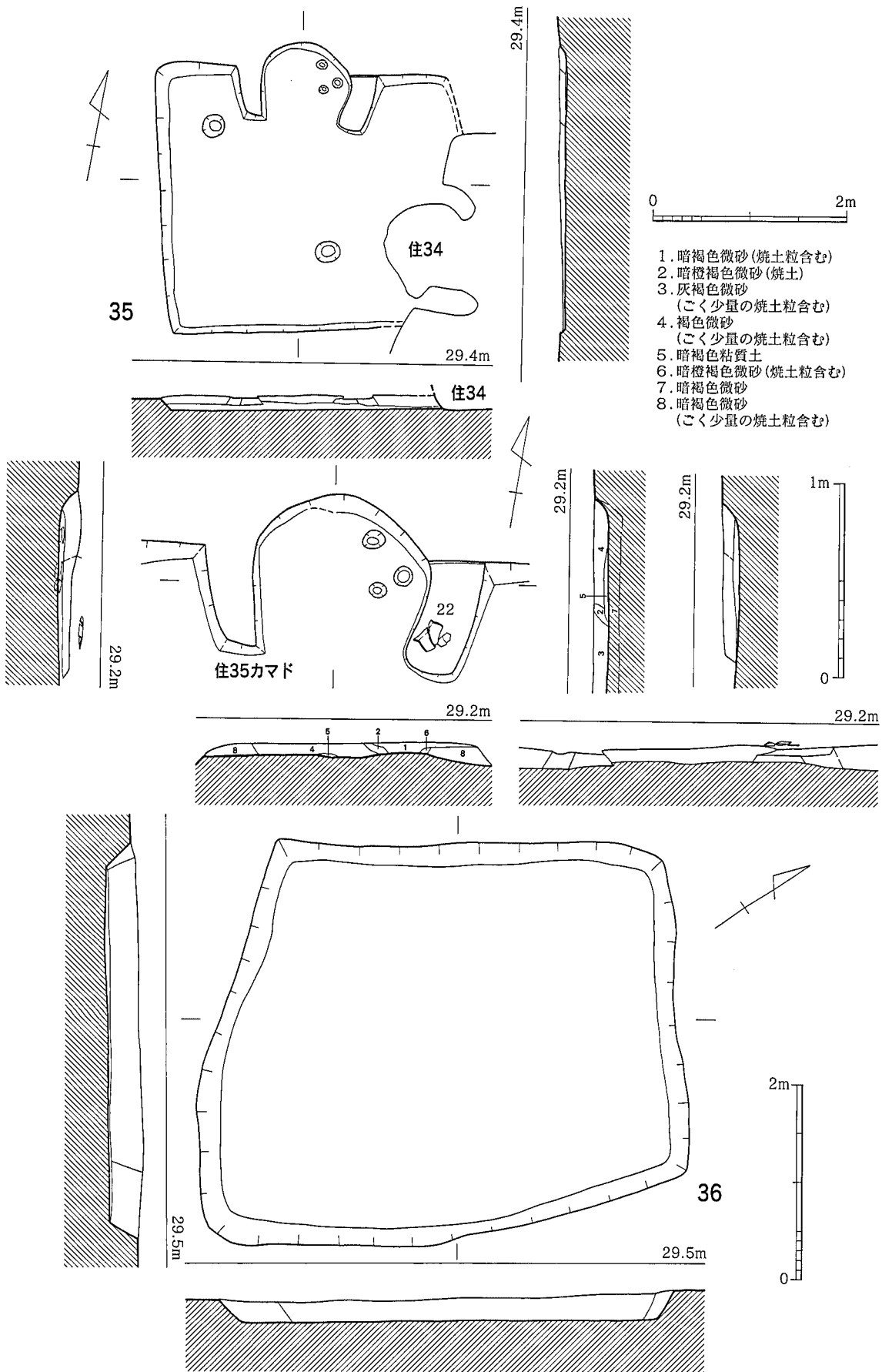
34



1. 淡褐色微砂(土器片少量の焼土粒含む)
2. 暗赤褐色微砂(焼土粒、炭含む)
3. 灰褐色微砂(焼土粒、炭含む)
4. 茶褐色粘質土(焼土粒、炭含む)
5. 褐色微砂(焼土粒、炭含む)
6. 2に同じ
7. 淡橙色土(焼土、カチカチに焼けている)
8. 暗褐色微砂(焼土)
9. 暗赤褐色微砂(焼土粒含む
2より赤味うすい)
10. 4に同じ
11. 暗赤灰褐色微砂(焼土粒含む)
12. 褐色微砂(焼土砂、灰色粘質土粒含む)
13. 黄褐色微砂(ごく少量の焼土粒を含む)
14. 暗褐色微砂(焼土粒含む)
15. 暗褐色微砂(14より粘土粒すくない)
16. 褐色微砂(12より灰色粘質土粒すくない)
17. 暗赤褐色微砂(2より焼土粒、炭多い)
18. 褐色微砂(5より焼土粒、炭すくない)
19. 暗褐色微粒+黄褐色粘質土(焼土粒含)
ブロック+暗灰色粘質土(焼土粒含)ブロック
+焼土塊+炭(土器片含む)
20. 暗褐色微砂(粘土粒炭、土器含む)
21. 暗褐色微砂
22. 暗褐色土
(やや粘質、焼土粒炭、土器含む-大きい)



第43図 33・34号竪穴住居跡 (1/60)・34号住居跡カマド実測図 (1/30)



第44図 35・36号竪穴住居跡 (1/60)・35号住居跡カマド実測図 (1/30)

36号竪穴住居跡（図版19、第44図）

36号竪穴住居跡は1区東より中央付近に位置する。平面形は東西4.1m×南北5.0mの不整形な方形を呈する。壁の深さは0.2m程で、床面からピット等は検出されていない。覆土からは石包丁（第128図14）、磨石（第131図8）が出土。

出土土器（図版43、第45図） 1～10は弥生土器である。1は壺の底部。底径9.0cm、色は黒灰色～黄橙色を呈する。外面はハケメであるが底部付近は縦方向のミガキを施す。内面はナデ調整。2～5は甕である。2・3はいずれも口縁端部を角張って仕上げているが、3の口縁はより「く」字に近い。2は口径32.0cm、色は灰褐色である。外面はハケメ調整、他はナデ。3は口径30.6cm、色は灰褐色を呈する。4は底部片で、外面はハケメ調整、内面には圧痕が残る。底径8.0cm、色は外が淡橙褐色、内が暗灰褐色である。5は壺の可能性もある。底径3.8cm、色は暗茶色～茶褐色を呈する。外面はナデ、外面はケズリである。6～8は鉢である。6は鋤先に近い口縁を呈する。口径14.6cm、色は暗褐色を基調とする。内外面の調整はナデ。7は口縁を外側に強く屈曲するもので、底部はわずかに上げ底である。口径22.4cm、底径8.0cm、器高13.3cmである。色は外が暗茶褐色、内が灰黄褐色である。内外面ともにナデ調整。8は「く」字型に近い口縁部をもつ。口径17.6cm、色は茶褐色を呈する。底部はそのまま丸底になるのであろう。外面はケズリによって仕上げられる。内面はミガキ。9は鋤先の口縁をもつ高杯の杯部である。口径21.8cm、色は橙褐色を呈する。内面にミガキが残る。10は高杯の脚部で外面はミガキで仕上げる。内面には絞り痕が残る。色は灰黄色。

11～17は土師器である。11～13は杯。11は小形で口縁の内湾は強くない。口径11.0cm、器高2.5cm、色は橙褐色を呈する。内面はハケメ調整。12の外面はケズリ時の工具痕が残る。口径16.9cm、器高4.2cm、色は橙褐色を呈する。13は口縁が強く内湾する。口径16.6cm、器高3.6cm、色は橙褐色を呈する。14～16は小形の甕である。14・15は内面をケズリにより仕上げるものである。14は口径13.8cm、色は外が黄灰色、内は暗茶色である。15は口径13.0cm、色は暗茶色である。16は口径10.4cm、色は灰褐色である。ナデによって全体を仕上げている。口縁部外面には工具痕が残る。17はカマド内から出土した。比較的大形の甕で口縁の屈曲は緩やかである。口径29.2cm、色は灰茶褐色。外面はハケメ調整、内面は横方向のケズリを施す。

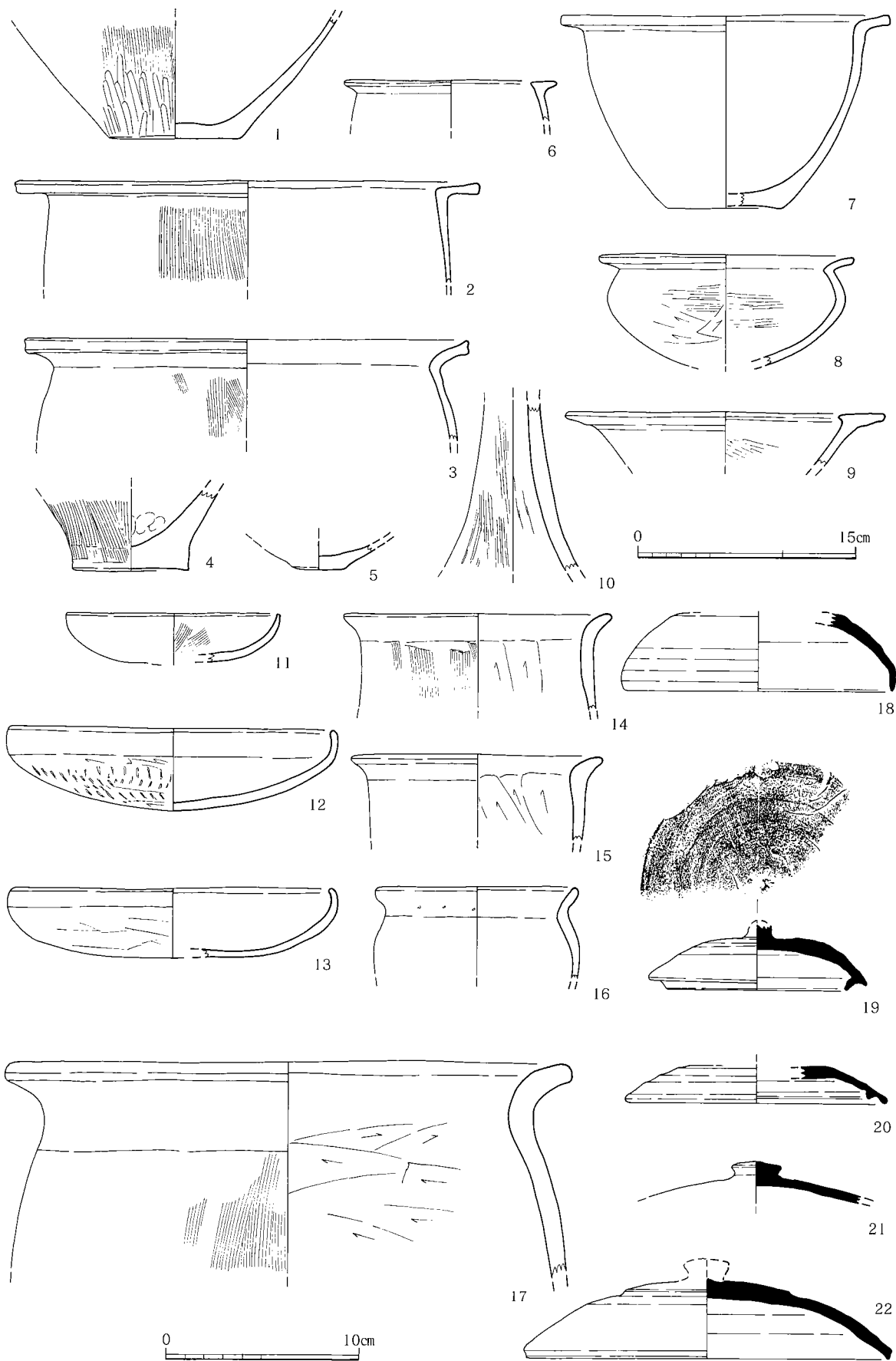
18～22は須恵器杯蓋である。18は口縁端部を丸く仕上げるもの。口径14.0cm、色は灰色を呈する。天井部は回転ヘラケズリを施す。19は天井部に丸い小さなつまみをつけるものである。口径9.3cm、最大径11.2cm、色は暗灰色～黒色である。器壁は厚い。壺の蓋になる可能性もある。20は小さな返しがつくもの。色は灰色を呈する。21は擬宝珠つまみのつくもので、内外面の調整はナデである。つまみ径2.2cm、色は橙褐色を呈する。22はつまみの付く大形の杯蓋である。口径19.0cm、色は茶灰色。返しはなく、口縁端部をわずかに屈曲気味に成形する。

37号竪穴住居跡（図版20、第46図）

37号竪穴住居跡は1区東部やや南よりに位置する。平面形は東西3.5m×南北4.4mの方形を呈し、壁の深さは0.1m程である。床面からピット1基を検出している。

出土土器（図版43、第47図1～7） 1は混入の弥生土器である。わずかに上げ底の底部。底径7.2cm、色は外が黄褐色、内が暗褐色を呈する。外面はハケメ、内面はナデ調整。2～4は土師器の小形甕である。いずれも胴部は膨らまない。2は口縁がわずかに広がるもの。口径14.0cm、色調は暗茶褐色を呈する。3は口縁がほとんど広がらないもの。口径14.0cm、色は橙褐色を基調とする。4は口縁が強く折れ曲がるものである。

5～7は須恵器杯蓋である。5は深く口縁端部を丸く仕上げる。口径11.2cm、色は暗灰色を呈する。6・7は返しがわずかに残るものである。内外面の調整はナデである。いずれも灰色



第45図 36号竪穴住居跡出土土器実測図（1～10は1/4、他は1/3）

を呈する。

38号竪穴住居跡（図版20、第48図）

38号竪穴住居跡は1区東端部南よりに位置する。南側は試掘トレンチにより削られるが、平面形は東西2.2m×南北2.0m以上の方形を呈するものと考えられる。深さは0.2mで、北壁の中央にカマドを付設する。床面からピット等は検出できなかった。

カマド（図版20、第48図）北壁の中央で検出した。当遺跡内の住居としては珍しく、遺構の検出時すでにカマドのプランがよく焼けてはつきりしていたため、掘削は容易であった。外に約40cm、方形に突出する。そこから煙道が約90cm延び、両側壁から奥壁および煙道が焼けている。床面は突出部分より手前によく焼けた部分があり、本来、それ以上に袖が延びていたのであろうが、検出できなかった。焼けた範囲から奥壁にかけて60cm×60cmの円形で、深さ7cmの小土坑を検出している。内部には焼土や炭化物が詰まっていた。カマド内部の床面直上から土器がまとまって出土した。

出土土器（図版43・44、第47図8～14）8～10・14はカマド内から出土した。8・9は土師器杯である。いずれも底部はケズリを施す。8は内面に記号状の刻みが施される。底径12.0cm、色は橙褐色を呈する。9は口径14.4cm、器高3.2cm、色は橙褐色を呈する。10・11は土師器甕。10は比較的大形で、胴部はあまり膨らまず、口縁を強く外反させる。口径27.0cm、色は黄褐色を呈する。11は小形で器壁が薄い。口径15.6cm、色は橙褐色を基調とする。12・13は須恵器杯蓋。12はつまみ径2.2cm、色は茶灰色を呈する。焼成が甘い。13は小さな返しを貼り付ける。内外面の調整はナデ。口径16.6cm、色は灰色を呈する。14は須恵器鉢。直線的に広がり口縁端部がわずかに外反する。口径16.0cm、色は灰色を呈する。内外面の調整はナデ。

39号竪穴住居跡（図版21、第46図）

39号竪穴住居跡は1区東より北端部に位置する。北側は調査区外に延びるが、東西5.1m×南北4.5m以上の方形のプランを呈するものと考えられる。壁の深さは0.1m程で、床面からはピット2基を検出しているが、いずれも浅い。

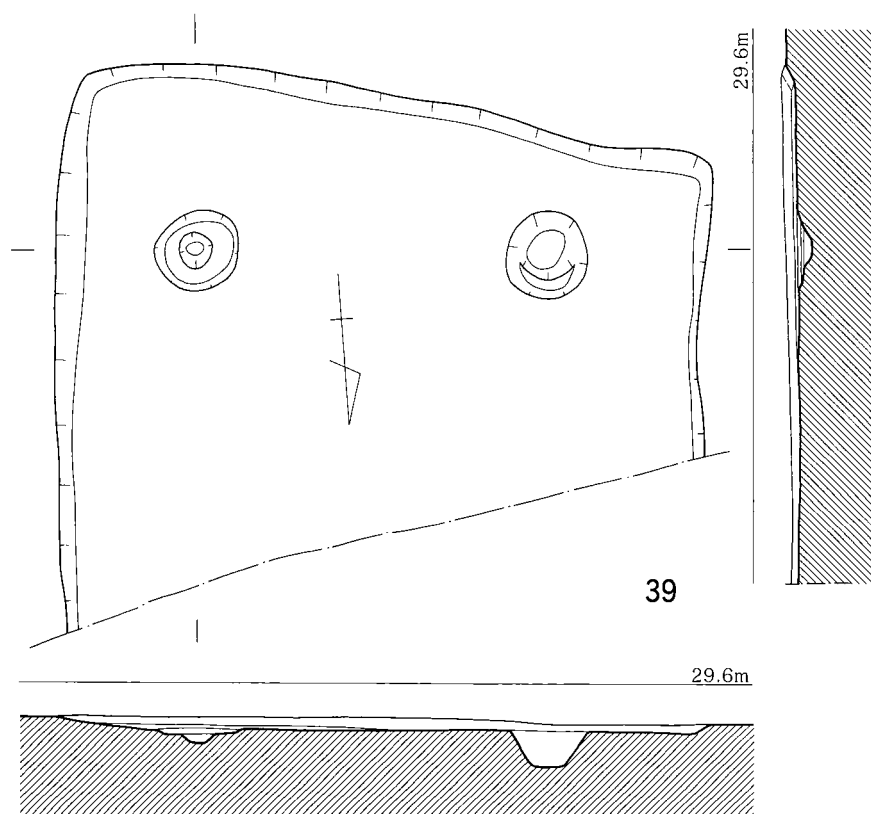
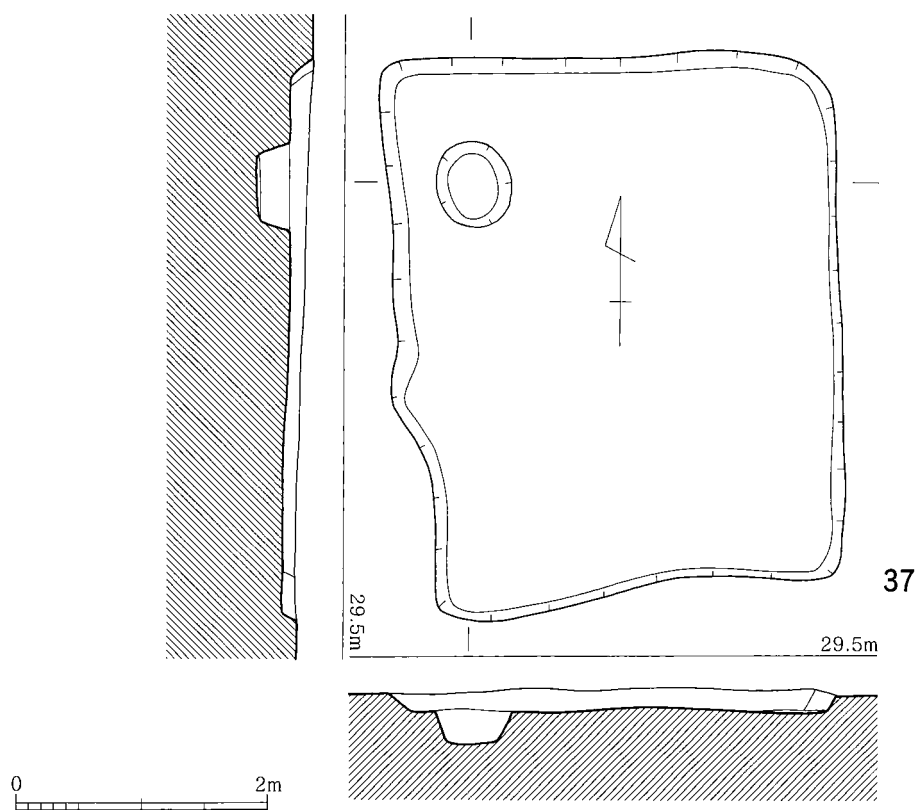
出土土器（図版44、第47図）15は混入の弥生土器甕である。「く」字口縁部下に小さな突帯を貼り付ける。口径22.0cm、色は黄橙色を呈する。内外面の調整はナデである。16～18は土師器杯。16は口縁と胴部との境に段をつけるものである。口径15.3cm、底径10.2cm、器高3.3cmを測る。色は橙褐色を呈する。器壁は厚い。内面には記号状の刻みが施される。17は口縁と胴部の境にわずかに段が残る。口径14.8cm、底径12.0cm、器高3.3cmである。色は淡橙黄色を呈する。底面はケズリ。18は器壁が薄く、口縁の長いもの。口縁端部がわずかに内湾する。口径13.9cm、色は黄橙色を呈する。19は須恵器杯蓋である。口径14.6cm。口縁端部は丸く仕上げている。

40号竪穴住居跡（図版21、第49図）

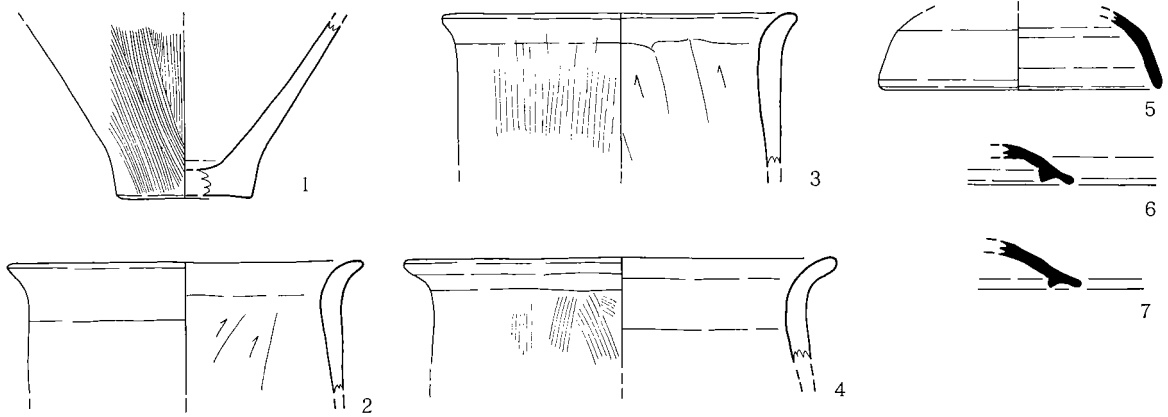
40号竪穴住居跡は1区東部やや北よりに位置し、41号住居跡を切る。東西4.3m×南北3.3mの方形を呈し、壁の深さは0.2m程度である。西壁の中央にカマドを付設する。床面からはピット1基を検出した。覆土から磨製石鏃（第126図8）、土錘（第133図31）が出土。

カマド（図版21、第49図）西壁の中央で検出した、突出しないカマドである。両袖ともに80cm程あり、わずかに外側に開く。床面から10cmほど残存しているが、内側は10cm弱ほど掘り込んでおり、その底面で焼土面を検出した。

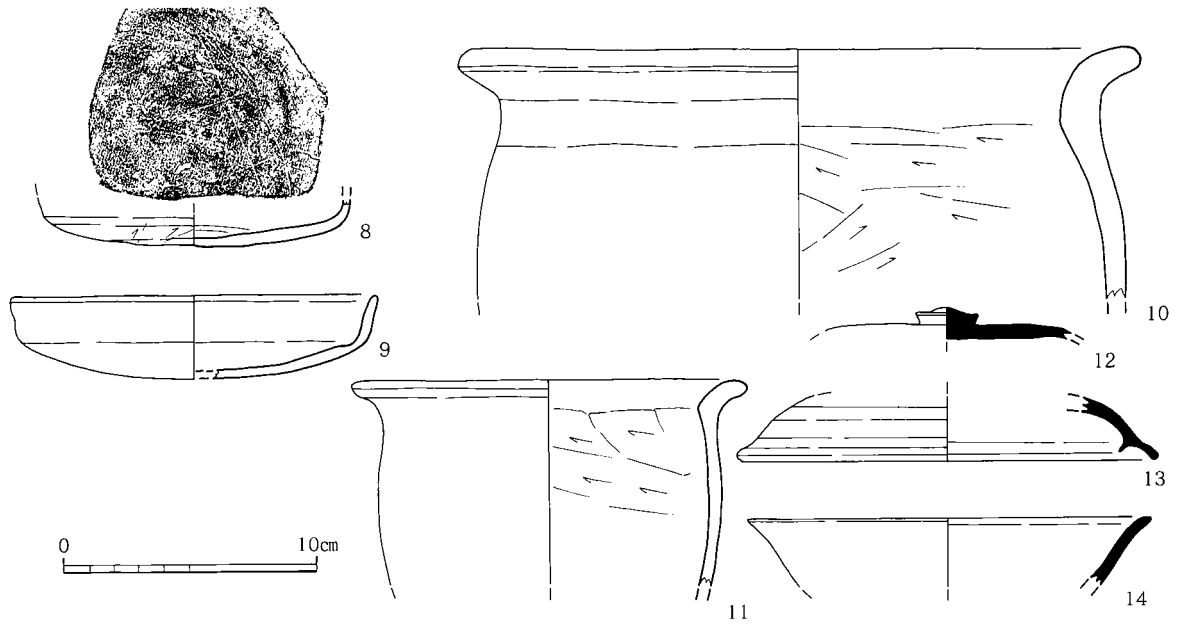
出土土器（第50図1～7）1・2は土師器杯である。1の底面はケズリ、その他はナデ調整。口



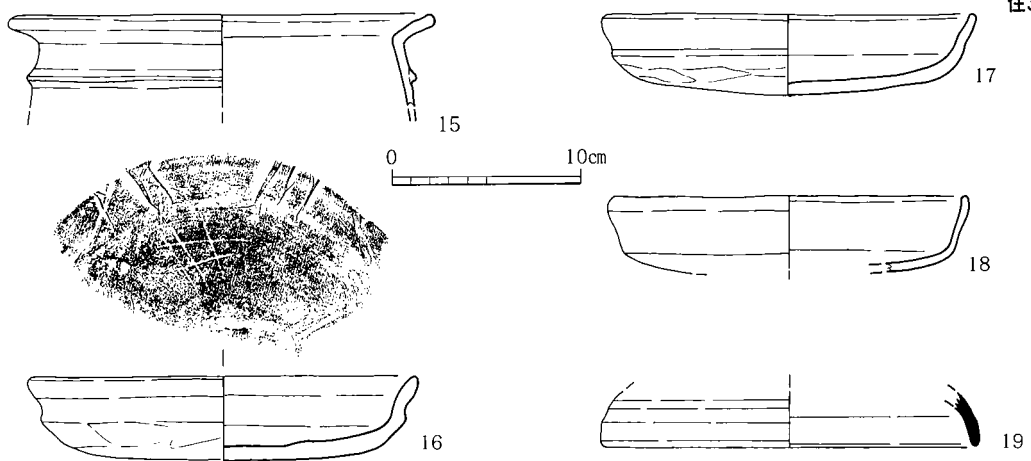
第46图 37·39号竖穴住居跡実测图 (1/60)



住37

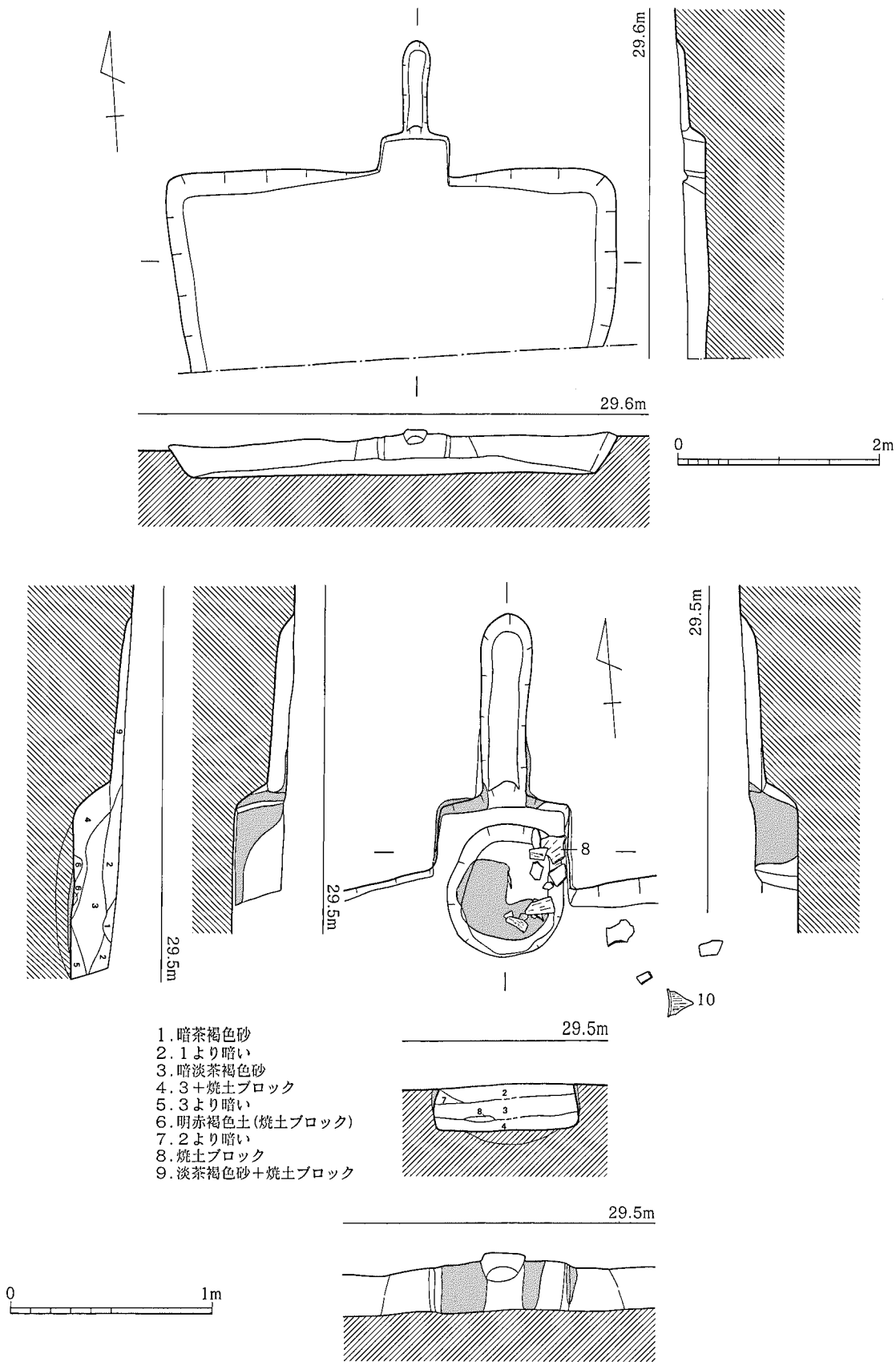


住38



住39

第47図 37～39号竪穴住居跡出土土器実測図（1・15は1/4、他は1/3）



第48図 38号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)

径12.0cm。2は口径13.5cm、色は橙茶色を呈する。3・4は土師器甕である。いずれも大形で、胴部が大きく膨らむ器形である。外面の調整はハケメ、内面の調整は縦方向のケズリである。3の色は橙茶色。4の色は橙茶色。4はカマドから出土した。

5～7は須恵器杯蓋である。5・6は小さい返しのつくもの。5は口径10.3cm、器高2.3cm、色は白灰色を呈する。6の色は黒灰色を呈する。7は口縁端部を折り曲げるものである。口径13.7cm、色調は青灰色を呈する。

41号竪穴住居跡（図版22、第51図）

41号竪穴住居跡は1区東部やや北よりに位置し、40号住居跡に切られる。平面形は東西5.8m×南北4.0mの方形を呈する。壁の深さは0.1m程度で、床面からはピット1基を検出している。覆土から石包丁（第127図15）が出土。

出土土器（第50図8～11） 8は土師器杯である。大形で浅く、口縁を強く折り曲げる。口径17.5cm、器高2.8cm、色は白橙茶色を呈する。摩滅が著しいが底部はケズリである。9・10は土師器甕である。9は小形でわずかに胴部の膨らむもの。口径12.9cm、色は外が黒褐色、内面は白黄橙色を呈する。外面は細かいハケメ、内面は縦方向のケズリ。10は口縁を強く屈曲させ、胴部の膨らむものであろう。色は白茶色を呈する。内外面の調整はナデ。11は須恵器杯身である。立ち上がりは小さく内傾している。

42号竪穴住居跡（図版22、第33図）

42号竪穴住居跡は1区中央付近に位置する。26・28号住居跡に大きく切られる。平面形は東西4.8m以上×南北2.9m以上で方形を呈すると考えられる。東側と南側にベッド状遺構が検出された。床面からはピット2基を検出した。

出土土器（図版44、第50図12～13） 12・13は土師器高杯である。12は杯部で全体のつくりは良い。口縁部の外面はミガキ調整。脚部との接合部分に充填した時の粘土の膨らみが残る。口径23.0cm、色は橙褐色。13はわずかに外反しながら広がる脚部である。底径は14.2cm、色は黄褐色～赤褐色を呈する。外面はミガキ、内面はケズリである。14は土師器甕で、胴部が大きく膨らむ大形の甕である。断面には内傾の接合痕が明瞭に残る。色は淡橙色を呈する。外面の調整は粗いハケメ、内面はケズリである。

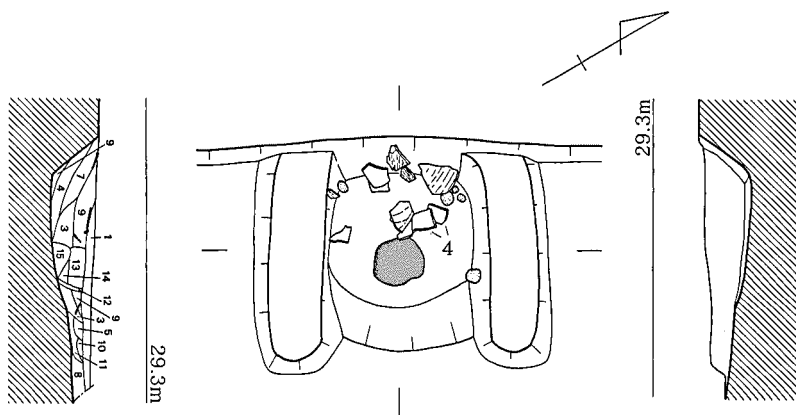
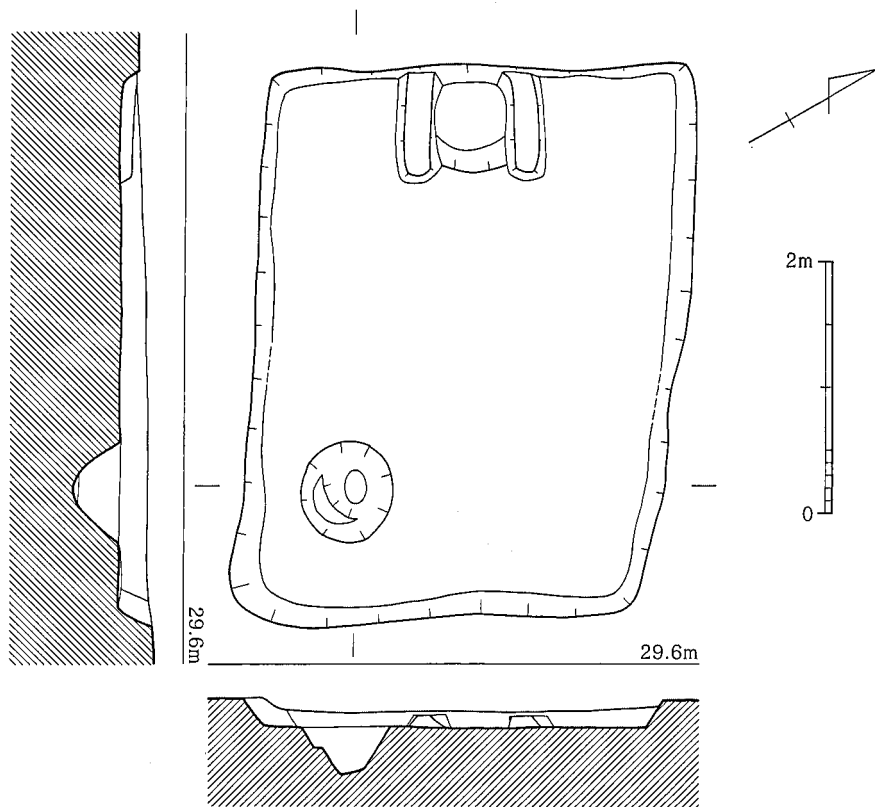
15は須恵器杯身。立ち上がりは細く、外面に回転ヘラケズリは施されない。16は須恵器杯蓋である。大形のもので、口縁端部はわずかに折り曲げられる。口径は20.0cm、色は白色を呈する。ナデ調整。17は須恵器鉢。口径は14.1cm、色は白灰色を呈する。直線的に広がる器形で内外面の調整はナデである。

43号竪穴住居跡（図版22、第52図）

43号竪穴住居跡は1区北東端部に位置する。44号住居跡を切り、7号溝に切られる。東側は調査区外に延びるが、東西4.4m×南北4.0mの方形を呈する。壁の深さは0.2m程度である。北壁中央にカマドを付設する。床面ではピット4基を検出しているが、いずれも浅い。

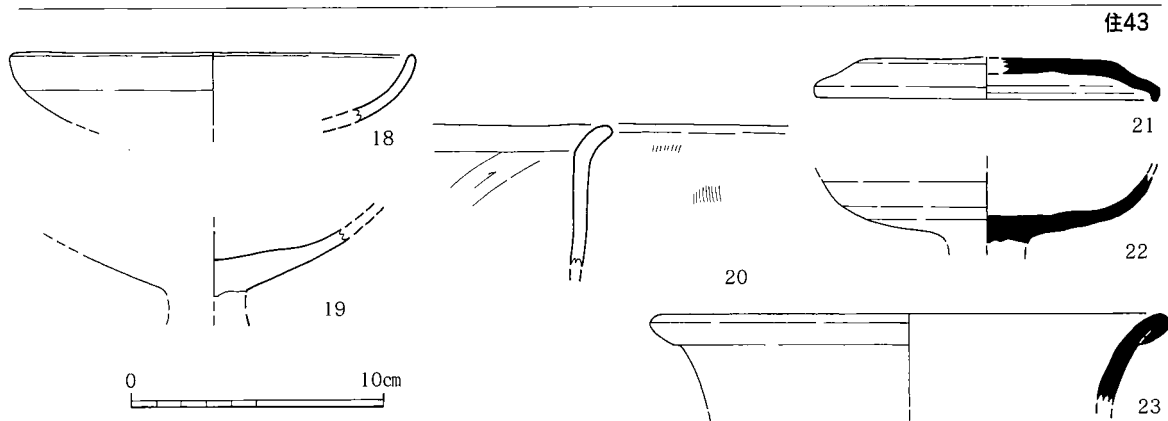
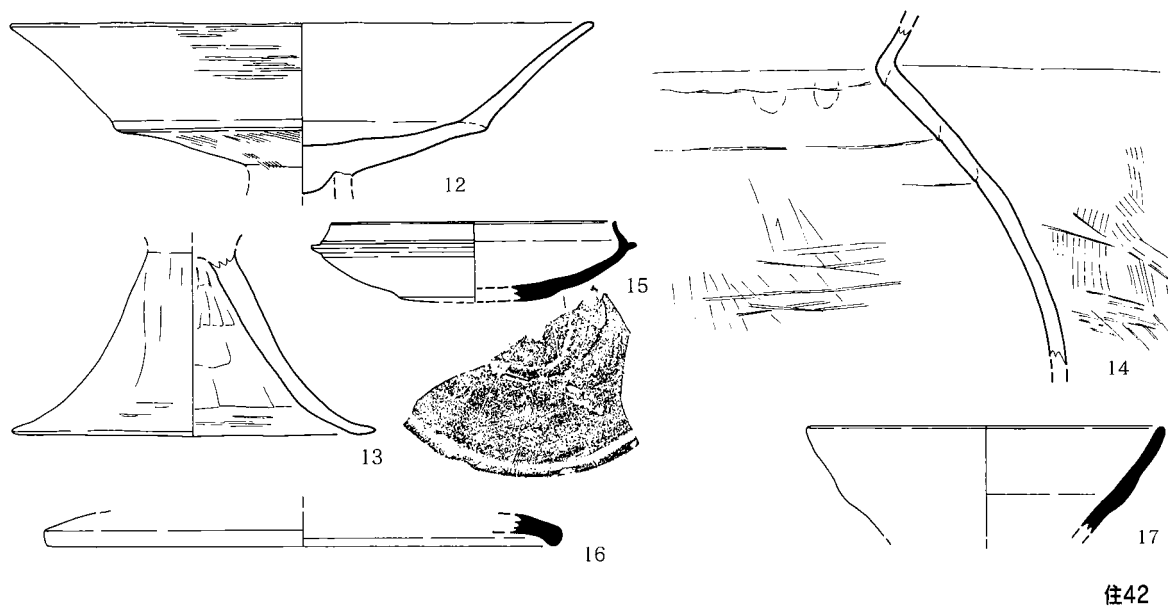
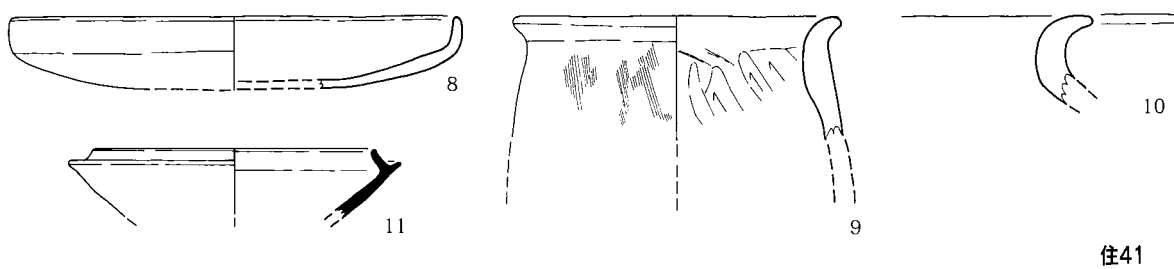
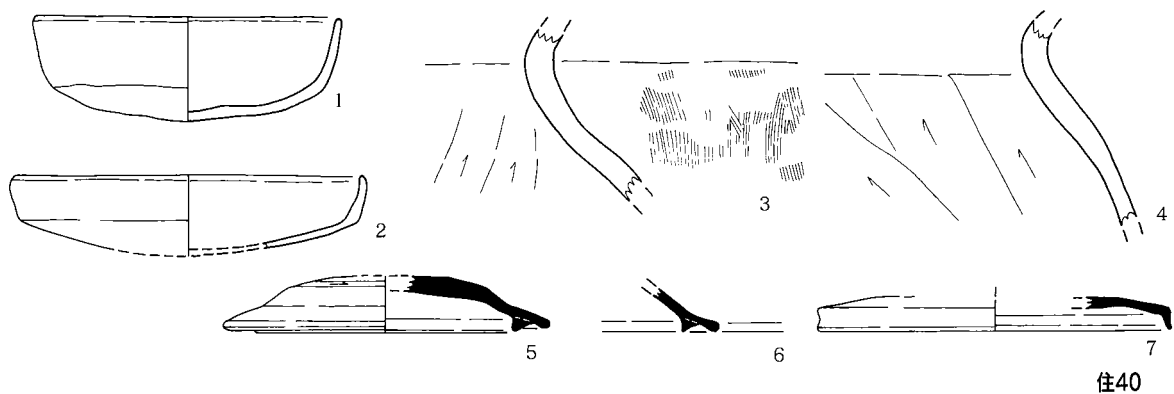
カマド（図版23、第52図） 北壁の中央で検出した。大きく突出するカマドである。袖は砂質土で構築され、右袖は50cm、左袖は40cm、高さ約20cm残っており、内側は床面より深さ10cmほど掘り込まれる。

出土土器（第50図18～23） 18は土師器杯。口径15.6cm、色は淡橙色を基調とする。あまり内湾しない器形で、調整は摩滅のため不明。19は土師器高杯。色は橙色を呈する。器表面の摩滅が著しい。20は土師器甕。カマド内から出土した。膨らまない胴部に、わずかに広がる口縁が付

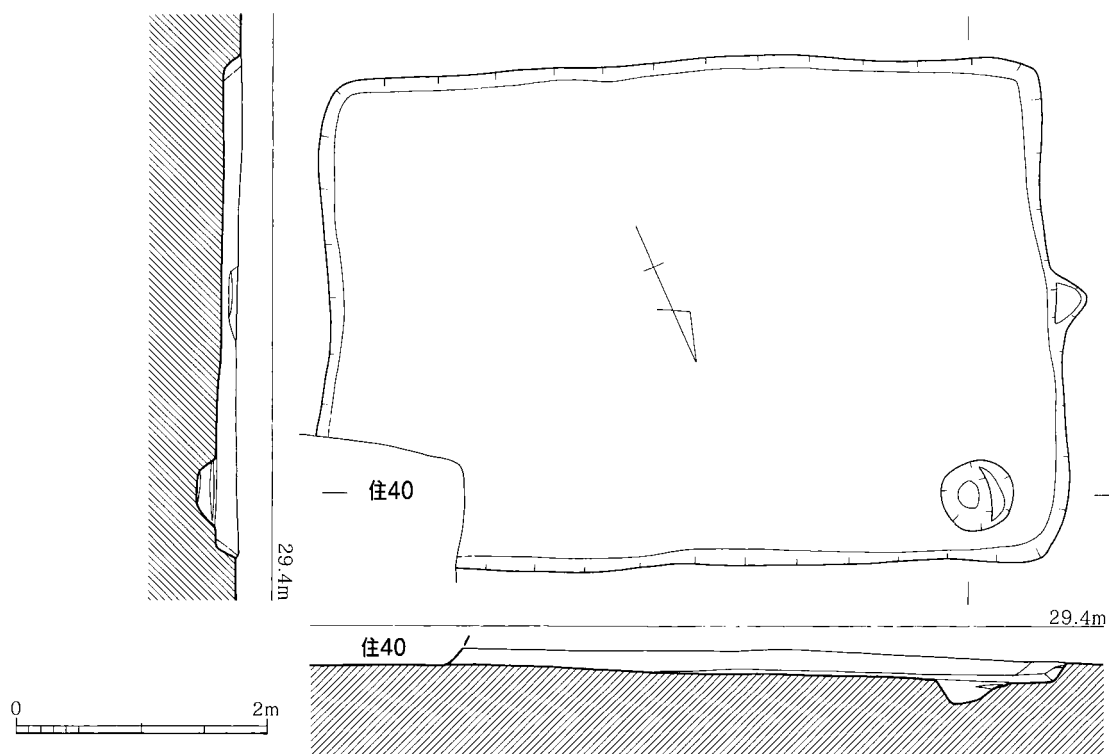


1. 焼土・炭混灰褐砂質土
2. 焼土混淡灰褐砂質土
3. 焼土混明灰褐砂質土
4. 灰褐砂質土
5. 炭混暗褐砂質土
6. 明灰褐砂質土
7. 黄灰褐砂質土
8. 暗灰褐砂質土
9. 焼土混灰褐砂質土
10. 炭混暗灰砂質土
11. 炭・焼土混濃暗褐砂質土
12. 炭混暗灰褐粘質土
13. 焼土ブロックを主体とした灰褐土
14. 焼土粒多含灰褐土
15. 焼土粒多含暗灰褐土
16. 焼土
17. 暗灰褐土
18. 濃暗灰褐土
19. 焼土混暗灰褐土
20. 灰褐土

第49図 40号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



第50图 40~43号竖穴住居迹出土土器实测图 (1/3)



第51図 41号竪穴住居跡実測図 (1/60)

く。色は外が橙色、内が白黄色を呈する。内面の調整はケズリ、外面はハケメ。

21は須恵器杯蓋。口径13.5cm、器高1.7cm。カマド内から出土。天井部につまみの痕跡が残る。返しは無く、口縁端部をわずかに屈曲させる。22は須恵器高杯である。色は灰色を基調とする。カマド内から出土。杯部の屈曲はゆるく、内外面ともにナデで仕上げる。23は小形の須恵器甕。口径19.6cm、色は青灰色を呈する。カマド内から出土である。口縁端部を折り曲げて丸く仕上げる。

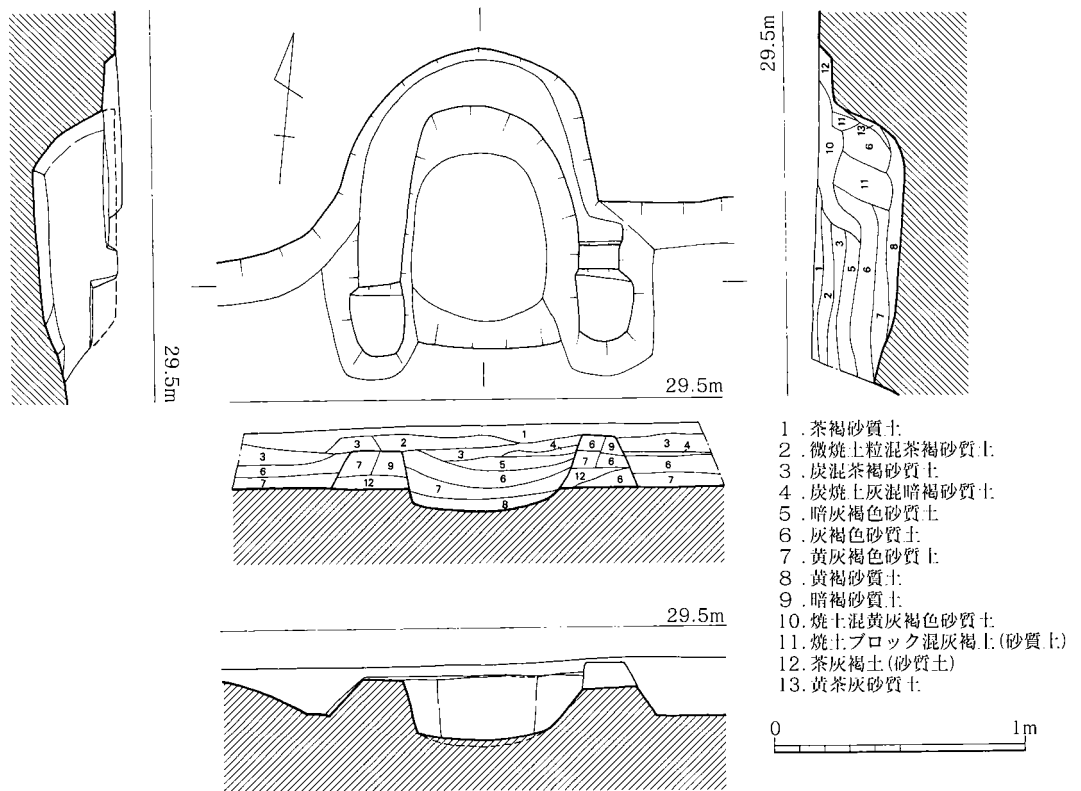
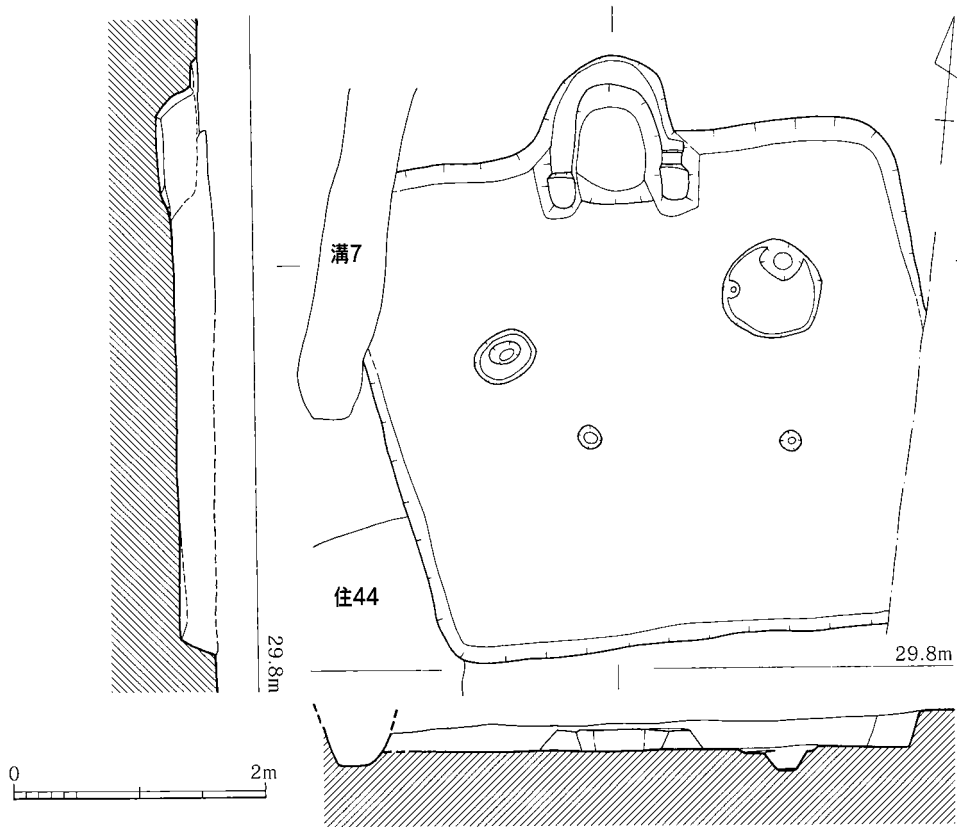
44号竪穴住居跡 (図版23、第53図)

44号竪穴住居跡は1区東端部に位置する。43号住居跡に切られる。平面形は東西4.3m×南北3.6mの方形を呈する。壁の深さは0.3m弱であるが、掘りすぎてしまった。推定ラインを点線で示しておく。したがって、出土遺物は貼床もしくは別の遺構の可能性もある。

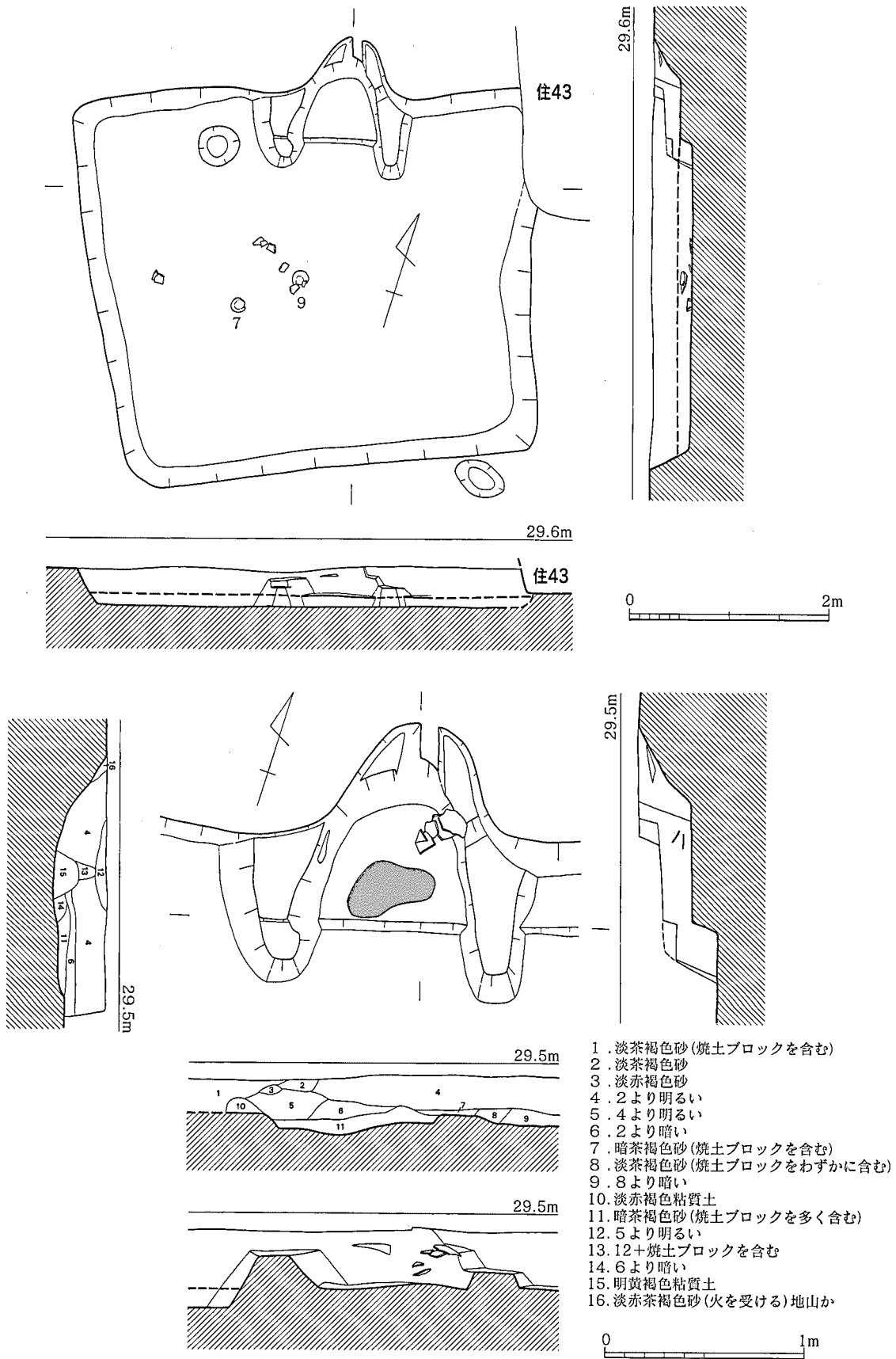
カマド (図版23、第53図) 北壁の中央で検出した。約50cm突出するカマドで、両袖は基底部のみ残存する。住居床面よりわずかに掘り込まれたカマド床面では、焼土面を検出している。

出土土器 (図版23・24、第54図) 1・2は土師器杯である。1は口径14.8cm、色は淡橙色を呈する。2は口径15.9cm、色は淡茶色を呈する。内外面は摩滅している。3～5は土師器甕である。3は小形で胴部は膨らまない。口径16.1cm、色は淡黄茶色を呈する。外面は粗いハケメ、内面は縦方向のケズリである。4は口縁部のみの破片で大きく外反する。口径21.1cm、橙茶色を呈する。5は胴部が大きく膨らむ。口縁端部は強く外反する。色は橙茶色を呈する。内面は横方向のケズリである。

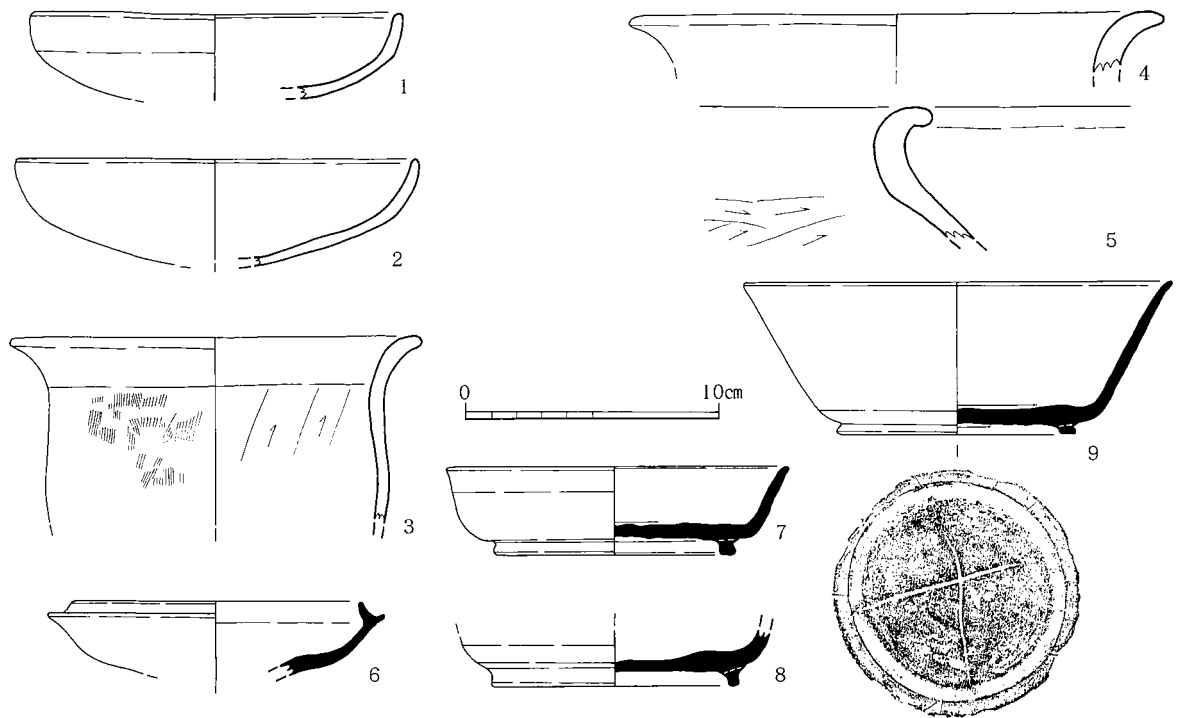
6～9は須恵器杯身である。7・9は住居床面付近から出土した。6は立ち上がりが小さく内傾する。口径は11.4cm、色は淡青灰色を呈する。7は口径13.5cm、底径9.4cm、器高3.5cmである。色は青灰色を基調とする。焼け歪みがある。8は底径9.8cm、色は青灰色を呈する。器壁



第52図 43号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



第53図 44号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)



第54図 44号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

は厚い。9は大形のもので、高台が貼り付けられる。口径16.9cm、底径9.4cm、器高6.0cmである。色は灰色を基調とする。底面には焼成前にヘラ記号が刻まれる。

b. 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 (図版24、第55図)

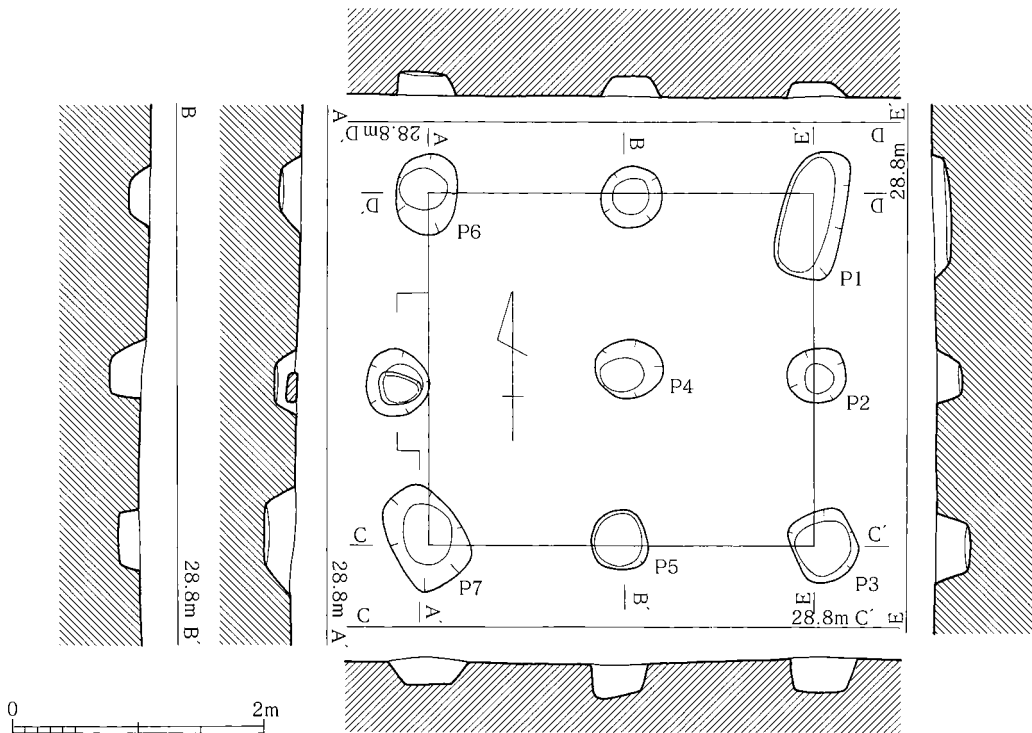
1号掘立柱建物跡は1区西側南寄りに位置し、12号住居跡を切る。主軸方位はほぼ真東を向く2間×2間の総柱建物である。柱間は東西方向で1.5～1.7m、南北方向で1.4～1.5mを測る。柱の掘り方は0.5～0.8m程、深さは0.3～0.1mの円形や楕円形でばらつきがある。柱痕は確認できなかった。

出土土器 (第57図1～3) 1は土師器の甕である。胴部のあまり張らないタイプで、外面の調整はハケメ、内面はケズリである。色は灰黄褐色を呈する。2は土師器の鉢か。色は暗茶褐色を呈する。外反する口縁で、内外面の調整はナデである。3は須恵器の杯身である。口径は11.0cm、色は灰色。立ち上がりは小さく、内傾する。内外面の調整はナデである。

2号掘立柱建物跡 (図版24、第56図)

2号掘立柱建物跡は1区西側中央付近に位置する。主軸方位は北に向かって西へ56°傾く。布掘りの掘立柱建物跡である。南北は2間、心心間の距離で1.5m程である。布掘りであること、柱痕も残っていなかったことから東西が何間であったかは不明であるが、掘り方の深い部分から3間、柱間の距離1.8m程度に復元できるであろう。深さは0.5m程残る。掘り方内から使用剥片(第126図4)が出土。

出土土器 (第57図4～9) 4・5は弥生土器の甕である。4は口縁を折り曲げ、端部を角張って仕上げるもの。口径は24.0cm、色は暗茶褐色を呈する。外面はハケメ調整。内面はナデ調整である。5の色は白黄茶色。6は土師器の甕である。口径は12.4cm。口縁部は緩やかに外反し、胴部外面は粗いタタキである。内面は粘土紐の痕跡が明瞭に残り、無文の当て具による調整である



第55図 1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

うか。7は土師器の杯か。色は淡茶褐色を呈する。内外面の調整はナデである。8は土師器の杯。口径10.9cm、色は茶褐色を呈する。胴部との境で強く屈曲し、口縁はわずかに内傾する。内外面の調整はナデである。9は須恵器の杯蓋である。外面には明瞭な段が残り、口縁端部にも段が残る。色は灰色を呈する。内外面の調整はナデである。

c. 土坑

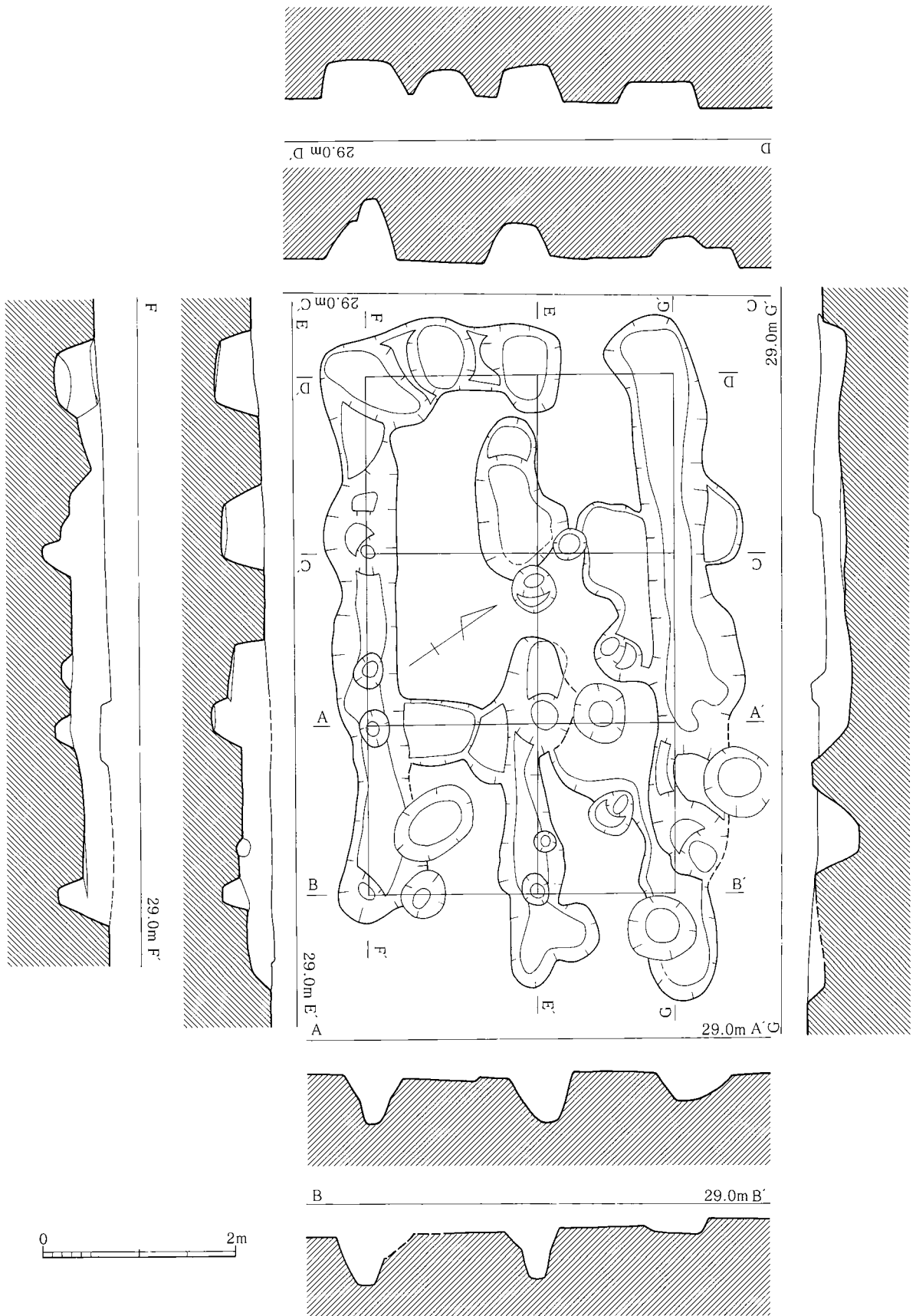
1号土坑 (図版25、第58図)

1号土坑は1区南西部に位置する。4号住居跡を切る。平面形は東西1.8m×南北2.8mの方形を呈し、深さは0.2mである。内部には炭化物が多く検出されており、土器片が出土した。

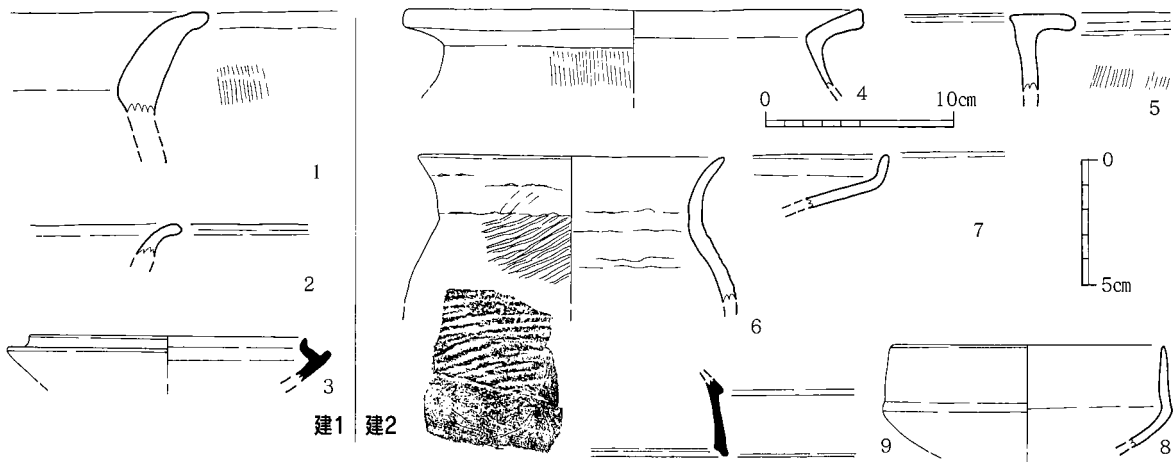
出土土器 (第59図1～8) 1～4は土師器の甕である。1・2は小形で胴部の張らないものである。いずれも胴部外面の調整はハケメ、内面はケズリである。1は口径14.3cm、色は暗茶褐色を呈する。大きく黒斑が付着する。2は口径16.3cm、色は灰黄褐色を呈する。3は胴部の張るもので、口縁端部を角張って仕上げる。口径18.0cm、色は外が黄茶色～黒色、内が茶褐色を呈する。胴部外面は細かいハケメ、内面はケズリである。4も胴部の張るもので、口径20.4cmを測る。外面の調整は粗いハケメ。5は土師器の甕である。色は灰黄褐色を呈する。把手の部分でナデにより仕上げている。6は須恵器の杯蓋である。口径13.0cm、色は灰色を呈する。全体に丸いつくりである。7は須恵器高杯である。底径15.8cm、色は灰色を呈する。大きく開く脚部で端部の仕上げは甘い。図面上で復元すると3ヶ所に透かしが開けられる。8は須恵器の鉢か。色は明灰色を呈する。焼成はやや甘い。口縁上端面はわずかに内傾する。外面にはわずかにハケメが残る。

2号土坑 (図版25、第58図)

2号土坑は1区西部北寄りに位置する。東西4.0m×南北2.5mの不整形な菱形を呈し、最も深い部分で0.5m弱であるが、床面に大小の掘り込みがある。



第56图 2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第57図 1・2号掘立柱建物跡出土土器実測図（4・5は1/4、他は1/3）

出土土器（第59図9・10）9は弥生土器の壺である。口縁端部を断面三角形に仕上げ、外面は粗いハケメ、内面は横方向の細かいハケメである。10は弥生土器甕の口縁部である。口縁を直角に折り曲げる。色は灰黄褐色を呈する。外面はハケメ。内面はナデである。

3号土坑（巻頭図版3・図版25・26、第58図）

3号土坑は1区中央付近に位置し、25号住居跡を切る。弥生時代小型仿製鏡を出土した土坑である。検出時には東西0.88m×南北0.5mの楕円形の土坑と考えていたが、検討の結果、土層名1・3から構成される南北0.35mのさらに小形の土坑である可能性が高い。鏡はこの小形の土坑の底部付近で斜めに傾いた状況で出土している。鏡以外の出土遺物はない。なお、出土した鏡についての観察結果は「IV まとめ」で後述する。

4号土坑（第58図）

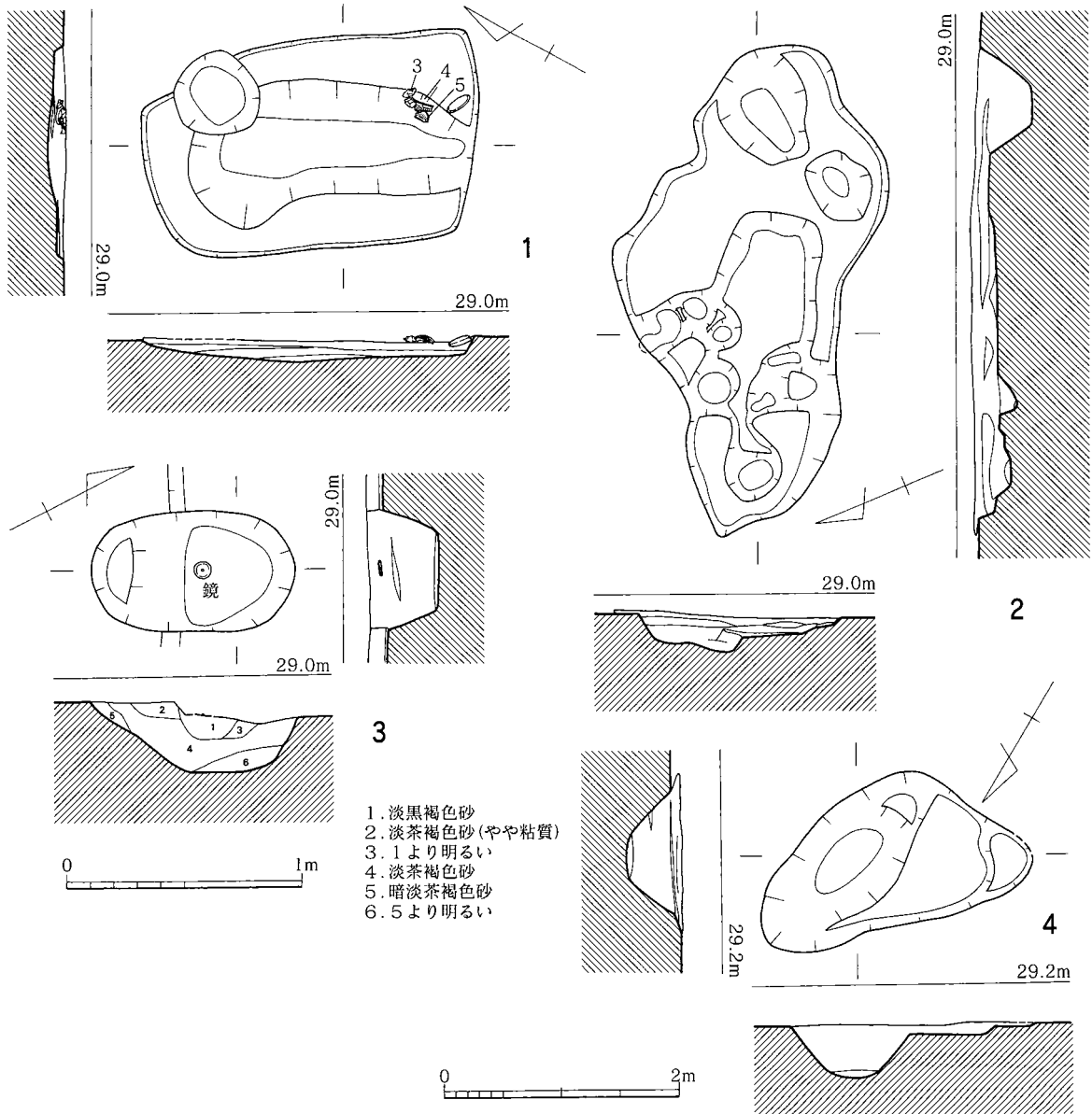
4号土坑は1区西側やや南よりに位置する。東西2.2m×南北1.2mの三角形を呈する。西側がテラス状になっており、中心は0.4mほど掘り込まれる。

出土土器（第59図11・12）11は土師器高杯の脚部である。底径16.0cm、色は灰黄褐色を呈する。外面はナデによる仕上げ、内面はケズリである。12は須恵器の杯身である。立ち上がりは内傾している。色は明灰色を呈する。内外面は回転ナデにより仕上げられる。

c. 溝

1・36号溝（図版26、第60・61図）

1号溝と36号溝は、1区西端と3区東端の境界付近に、調査区を南北に横切るようにして重複しながら検出された大溝である。1・3区境界部分をやや斜めに横切るため、北側では溝の東側の肩が1区、西側の肩が2区に含まれることになった。このため、1区の調査時点では十分な精査を行うことができず、比較的判別しやすかった1号溝のみを検出、調査した。ところが、3区の調査中1号溝の西側の肩付近を調査していた際に、地山と考えていた溝の肩部分から土器が検出されたため、トレンチを入れて確認したところ、新たに外側に遺構面から20cmほど下層の円礫を多量に含む地山に切りこむ、砂質土層を確認したため、平面も再度精査し、1号溝と重なり合っただけで同じ方向に伸びる溝の西側の肩を検出した。この溝を36号溝として調査を開始したが、西側の肩部分は確認したものの、東側は1区の調査が終了してから長期間放置されていたため、36号溝

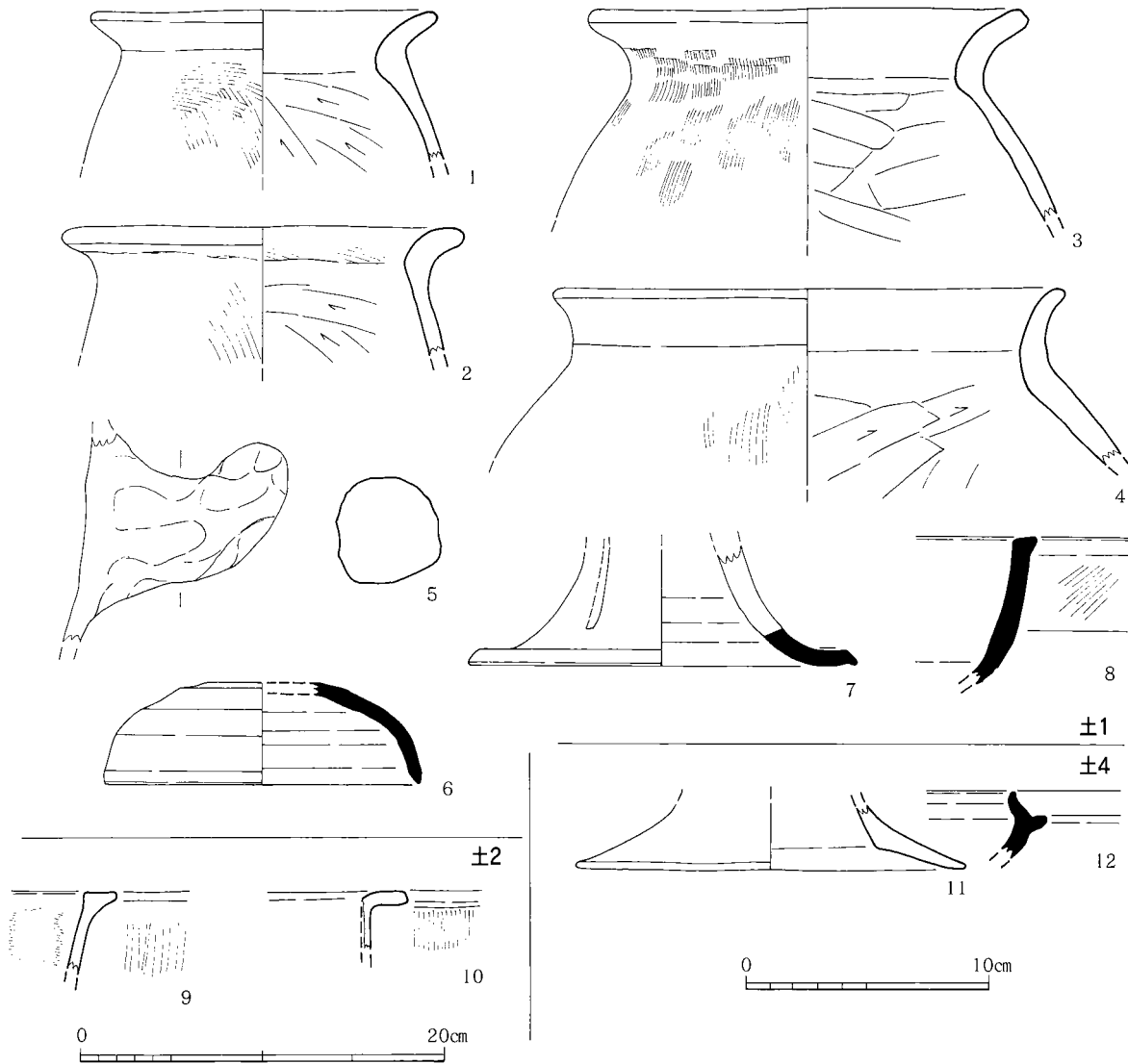


第58図 1～4号土坑実測図 (1・2・4は1/60、3は1/30)

の肩を検出・調査することが困難な状況であった。また、36号溝は当初予想したよりも深く、途中から多量の湧水に見舞われたため、底部まで完掘することが困難な状況となった。そこで、36号溝は西側の肩の検出を最優先し、底部までの掘削をあきらめて、底部形状を土層にて記録することとした。3区調査終了後、溝の土層断面をとるために調査区北端を重機で掘削したが、2m以上掘削しても溝の底部が確認できず、途中から多量の湧水により掘削したトレンチが崩落する危険も出たため、溝の土層をおおよそその形とレベルのみ記録し、すぐに埋め戻した。従って、土層図では36号溝の下半部はおおよその推定ラインで表現している。

また、途中まで36号溝の埋土と1号溝の埋土の区別が十分でなかったため、出土遺物を調査時に十分に区別することができなかった。従って、1号溝の出土土器の中には本来36号溝から出土したものが混じっているが、36号溝出土として提示したものは、その存在を確認して以降区別して取り上げたもので、確実に36号溝に伴うものである。

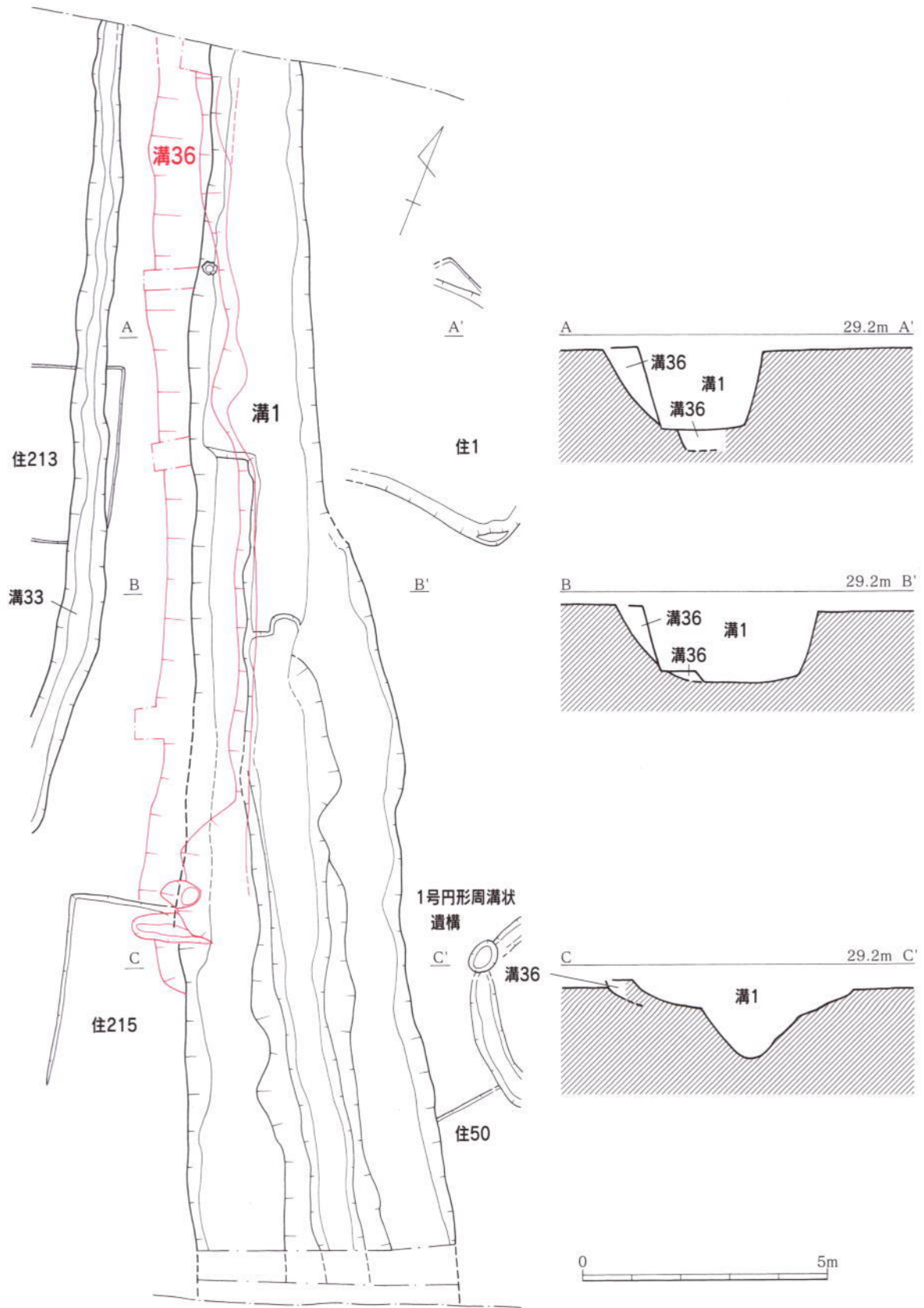
1号溝は、先述の通りおおよそ南北に直線的に伸びる、断面逆台形上を呈する大溝である。溝



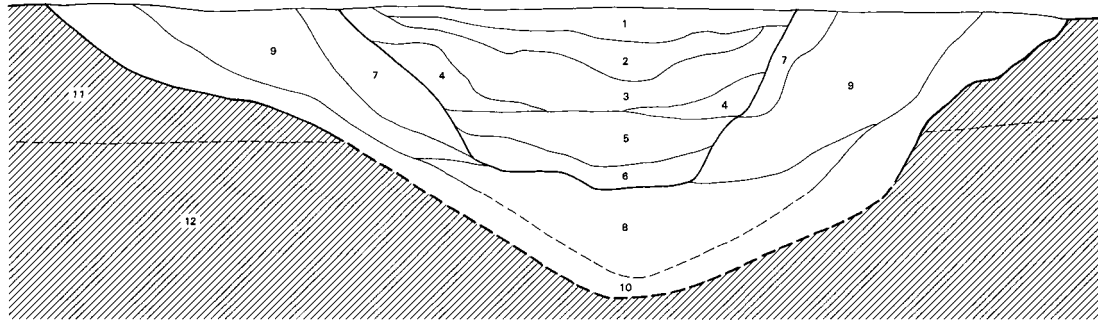
第59図 1～4号土坑出土土器実測図（9・10は1/4、他は1/3）

幅は検出時で3 m 60 cm、深さは1 m 45 cmを測る。埋土は大きく2層に分かれ、上層（1～4）と下層（5・6）の境界部から下層にかけての埋土には鉄分が特に多く混じっていた。従って、下層の上に長期間にわたる帯水があった可能性が指摘され、上層が掘り直しの溝で、この溝に長期間の滞水があった可能性が高い。出土土器は弥生時代中期～後期土器、古墳時代後期の土師器・須恵器、飛鳥・奈良時代の土師器・須恵器が見られ、特に古墳時代後期～7世紀後半のものが最も多く出土した。しかし、8世紀前半～中頃の土器も多く検出されたことから、1号溝の埋没時期はこの時期に求めることが妥当であろう。掘削時期は明らかではないが、この直前かあるいは多量の土器が出土した7世紀代前後が考えられる。

36号溝は、1号溝と重複して南北に伸びる大溝である。幅は検出面で約8 mをはかり、深さは推定で2 m 30 cm程度の断面V字状を呈する。先述の事情により、1 m 20 cmより以下は推定で、溝肩ラインも西側の肩の北半分のみを検出にとどまり、溝底の確認もできなかったが、西側の肩は緩やかな2段掘削になっているようである。上層は粘質土混じりの砂層で、下層にいくほどに地山由来と考えられる円礫を多く含む。8・9層は均質な砂層で、急激に埋没した可能性が高い。出土土器は古墳時代後期の土師器・須恵器が確認され、7世紀後半以降の土器は出土しておらず、



第60図 1・36号溝実測図 (1/120)



1~6: 溝1
7~10: 溝36

0 2m

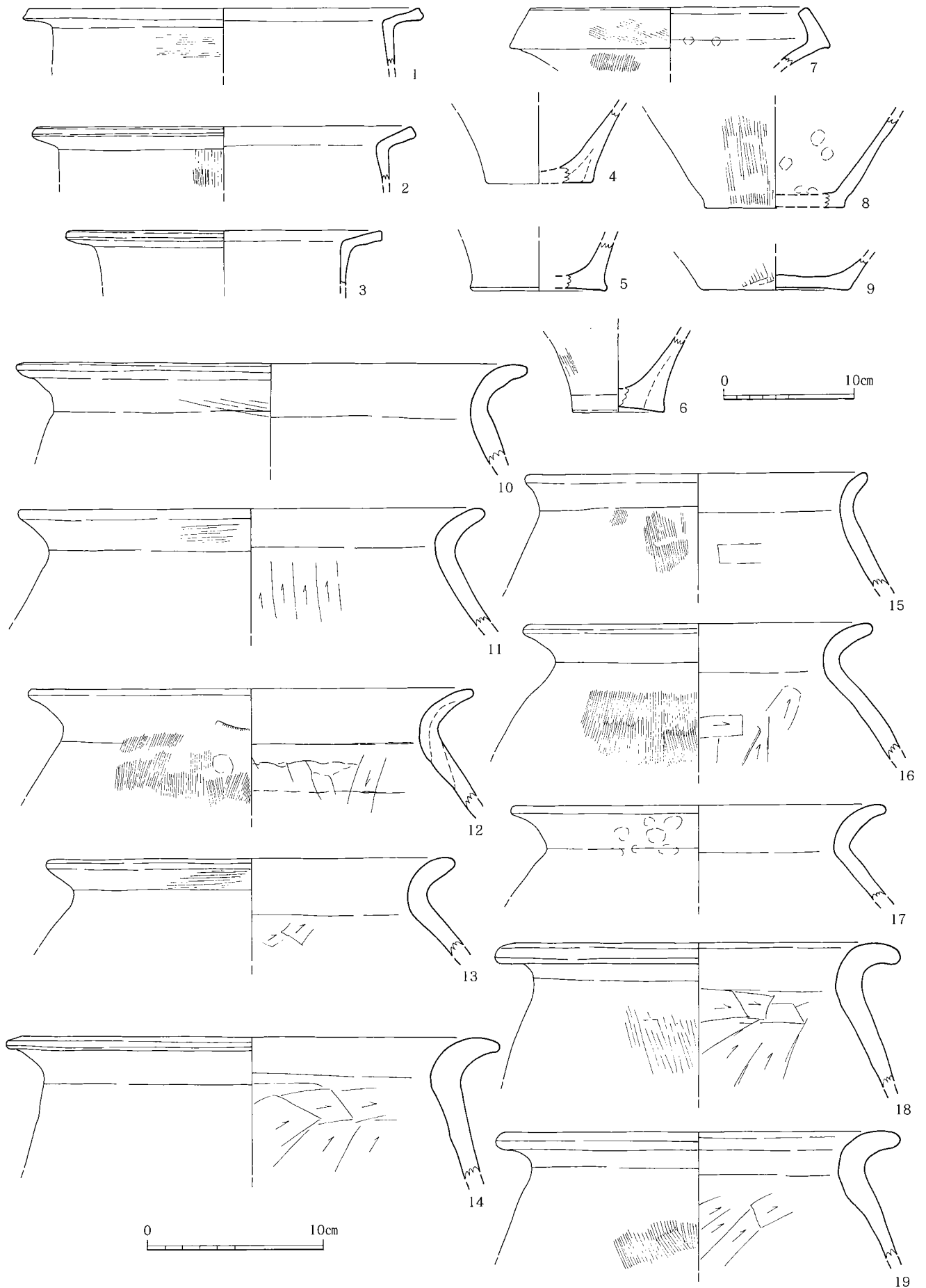
- | | |
|--------------------------------------|------------------------------------|
| 1. 灰黄褐色粘砂。均質。 | 7. 灰黄色粘砂。鉄分多く付着するが、外側にむかって鉄分が減少する。 |
| 2. 灰褐色シルト。粒均質で、1よりやや大きく全体に20%砂粒が混じる。 | 8. 灰青色粘土。鉄分多く付着。 |
| 3. 青灰色シルト。鉄分付着。均質。 | 9. 暗黄褐色砂質土。均質。 |
| 4. 灰黄色粘質砂。均質。 | 10. 暗褐色粘砂に9が少し混じる。均質。 |
| 5. 明赤褐色砂。鉄分多く付着し、灰青色粘土が30%混じる。 | 11. 暗黄褐色粘土(地山)。 |
| 6. 明黄赤色砂質土。鉄分全体的に付着。 | 12. 礫層(地山)。 |

第61図 1・36号溝北壁土層実測図 (1/30)

この溝の機能していた時期はおおよそ古墳時代後期の中で収まるものと見てよいだろう。従って、36号溝の埋没時期と1号溝の掘削時期は近接している可能性もあり、この場合36号溝が埋没したあとの窪地を再利用して1号溝が掘削した可能性が指摘できる。1号溝内から使用剥片(第126図6)が出土。

出土土器 (図版45~47・第62~69図) 1~9は弥生土器である。1~3はL字状口縁甕の口縁部片である。いずれも端部を直角に納めるタイプのもので、口縁端部の平坦面はやや内湾して、端部をやや上方にのぼす。須玖式のいわゆる以東系、跳ね上げ口縁甕の影響を受けたものであるが、典型的な跳ね上げ口縁甕とも異なり、浮羽地域にしばしば認められる形状のものである。いずれも内面と外面のうち口縁部の調整はナデで、胴部外面には1・2がハケメ痕を残す。口径は1が30.2cm、2が29.0cm、3が23.8cm、色は赤褐色~黄褐色。4~6は甕底部である。6はやや底部径が狭く厚めであり、4・5よりもやや古相を呈する。4は胴部から底部にかけてなだらかにすぼまっているが、5は屈曲部で一度小さく外に張り出しており、以東系の影響を受けたものであろう。6は両者の中間の様相を呈するが、両者よりやや古相を呈しており以東系の影響と見るべきではなかろう。いずれも内外面ともにナデ仕上げで、6は上方にハケメを残す。底径は4が8.2cm、5が10.2cm、6が7.0cm。色はいずれも灰橙褐色~灰赤褐色。7は複合口縁壺の口縁部である。頸部から口縁屈曲部にかけて緩やかに外反しながら立ち上がり、屈曲上方はわずかに内湾しながら、端部を四角く納める。外面はハケメ、内面はナデ仕上げ。後期前半の新しい段階に入るものか。口径21.0cm、色は赤褐色。8・9は壺底部である。いずれも胴部から底部にかけて薄く仕上げられており、底部径も広いことから、須玖II式の中でも新相の範疇に入るものであろう。外面にはハケメ、内面には指押しえ痕を残す。底径は8が10.6cm、9が11.2cm。色は8が灰黄褐色、9が灰橙褐色を呈する。

10~64(43を除く)は古墳時代後期の土師器である。10~19は甕の口縁部片である。いずれも長卵形の胴部からすぼまりの甘い頸部を経て、如意状に外反する器形を有する大型の甕である。口縁部はいずれも厚みがあり、端部に向かってすぼまりながら丸く収める。外反が著しいも



第62図 1号溝出土土器実測図(1) (1~9は1/4、他は1/3)

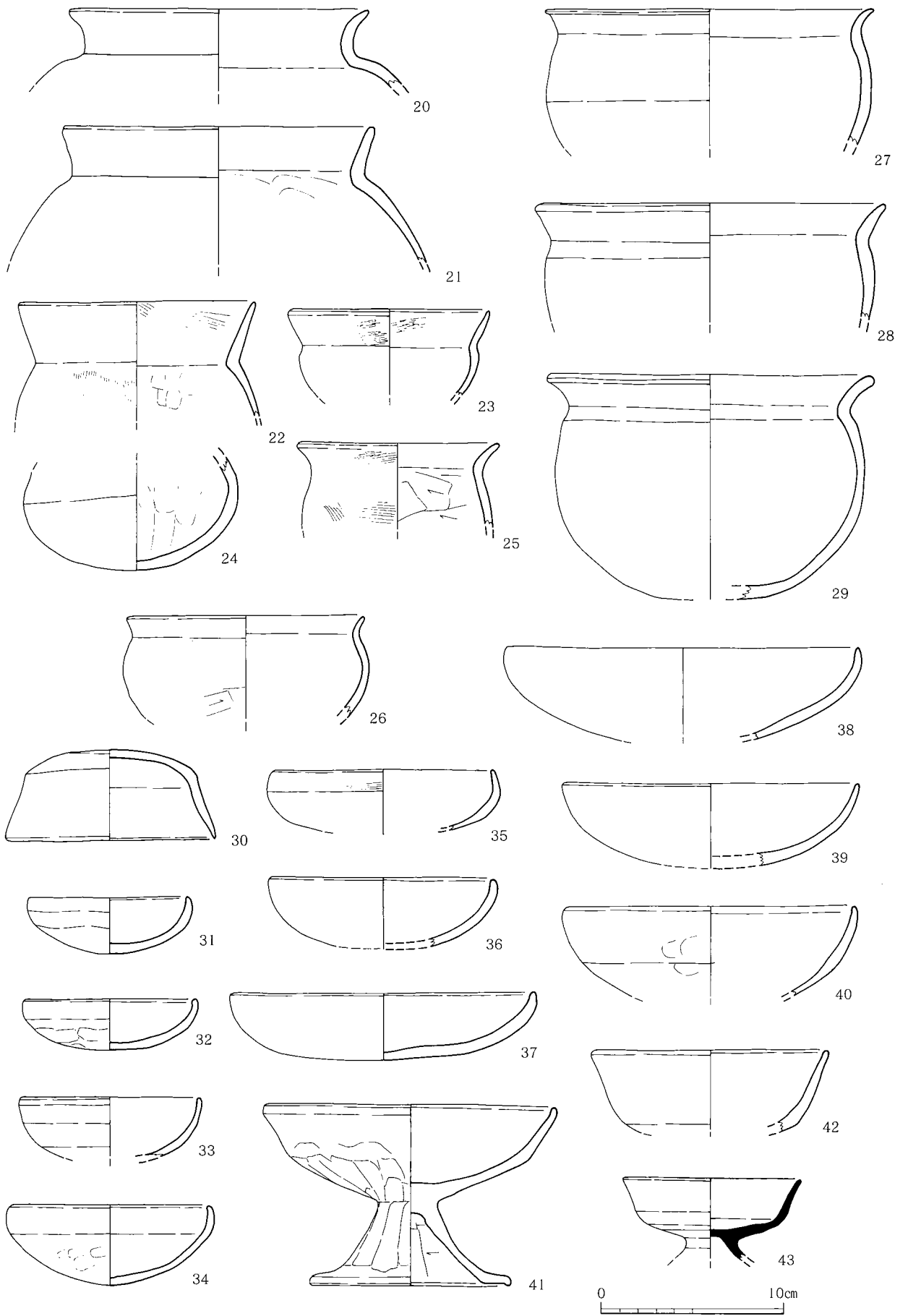
のほど新出の要素で、14・18・19などは7世紀代以降の可能性が高い。口縁部外面には指押さえ痕を残すものがいくつか認められるが、基本的にはハケメ後、口縁部のみ横方向ナデ調整にて仕上げを行っている。内面は屈曲部より上方は横方向のナデ仕上げで、頸部以下はケズリ後顕著な仕上げを行っていない。11は頸部から口縁部にかけて粘土紐の接合痕が観察され、内傾接合である。口径は10が26.2 cm、11が25.2 cm、12が23.2 cm、13が29.0 cm、14が28.0 cm、15が19.4 cm、16が17.2 cm、17が20.1 cm、18が23.0 cm、19が23.0 cm。色はいずれも黄・橙褐色～赤褐色。

20～24は壺である。20・21は短頸壺の口縁部片である。20はやや扁平な胴部から急激に内湾してよくすばまった頸部へと至り、口縁部が短く外反しながら立ち上がるもので、口径は16.3 cm、色は灰黄褐色～橙褐色。24は球形の胴部を持ち、直立に近く立ち上がる短い直線的な頸部を持つ。口径17.0 cm、色は黄褐色～赤褐色。いずれも胴部内面はケズリ調整によって器壁を薄くした後にナデ調整にて仕上げを行っている。そのほかの部分は摩滅により調整は明らかでない。22～24は小型丸底壺である。22・23は胴部上半～口縁部が、24は胴部下半部のみが残存する。22は球形の胴部を持つもの、23・24はやや扁平な胴部を持つものである。22・23は直線的に伸びる口縁部を持ち、器壁を薄く仕上げる精製品であり、特に23は内・外面ともにハケメ調整により仕上げを行う。22の外面は口縁部がナデ、胴部がハケメ、内面は胴部にケズリ、口縁部にハケメが残る。24は器壁が厚い。内面はケズリ、外面はナデ仕上げか。口径は22が12.8 cm、23が10.8 cm。色は赤褐色～橙褐色。

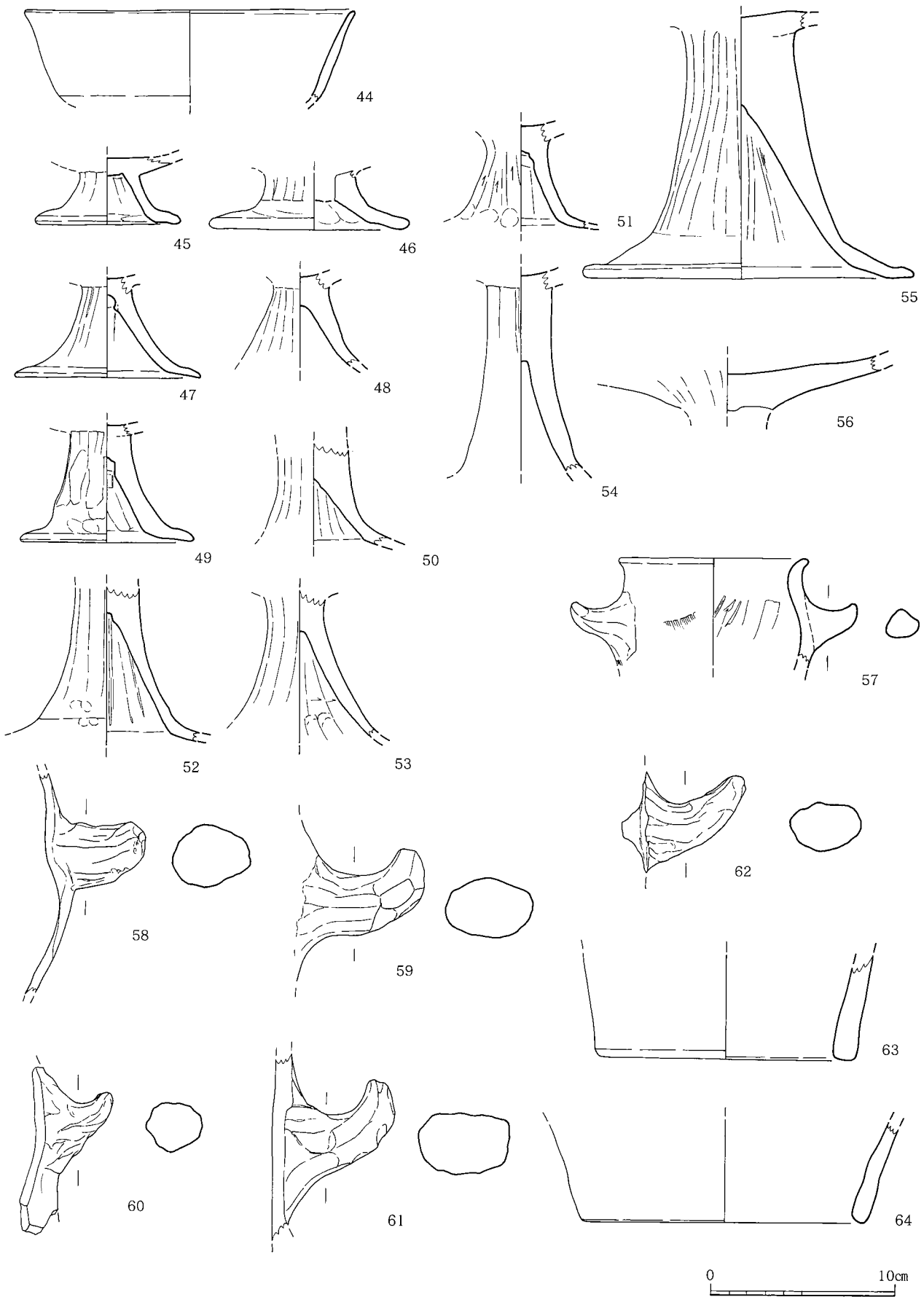
25～29は小型の鉢である。25・26は特に小型である。25は小型の甕としてもよいものか。器壁を薄く、丁寧に仕上げる。外面にはハケメ、内面にはケズリ痕が残る。26・27は扁平な胴部を持ち、頸部に明瞭な屈曲部を持たずに緩やかに湾曲するもの。いずれも口縁部は内外面ともに横方向ナデ仕上げで、他は摩滅が著しいが、26の胴部の一部にケズリ痕が認められる。28は扁平な胴部から直線的に上方に伸びる短い口縁部を持つもの。内外面ともに摩滅により調整が確認できない。29は扁平な胴部から外に向かってやや湾曲しながら広がる短い口縁部を持つ。口縁部は内外面ともに横方向ナデ仕上げで、胴部内面はケズリ、外面は摩滅により不明。口径は25が11.0 cm、26が13.0 cm、27が18.0 cm、28が18.6 cm、29が18.0 cm。色はそれぞれ黄褐色～赤褐色を呈する。

30は模倣坏蓋で、天井部と胴部の境界に屈曲と段を明瞭に有し、口縁部が直線的に開く器形を持つ。天井部外面はケズリ、天井部内面と口縁部内・外面はナデ調整。口径は11.4 cm、色は黄褐色。31～40は杯。31～33は口縁部径10 cm以下の小型品。いずれも丸い底部から立ち上がり内湾しつつ、口縁部に至る浅い椀形の器形を持つ。33を除いて、いずれも外面は全面的に細かな単位のケズリ調整により仕上げられる。外面の口縁部と内面全体はナデ調整により仕上げる。33は器壁を薄く仕上げる精製品。口径は31が8.8 cm、32が9.4 cm、33が9.6 cm。34～36は口縁部径11～13 cmの中型品である。いずれも小型品と同じく丸い底部から緩やかに立ち上がり、内湾しつつ口縁部に至る浅い器形を有する。35は口縁部の内湾度が著しい。34は外面をケズリ、内面と口縁部付近をナデ調整により仕上げる。35・36は摩滅により調整不明。いずれも器壁をきわめて薄く仕上げる精製品である。口径は34が10.7 cm、35が12.2 cm、36が12.4 cm。37～40は口縁部径15 cm以上の大型品である。小型・中型品と同様、丸い底部から内湾しながら緩やかに立ち上がる浅い器形。摩滅により調整不明瞭なものが多いが、調整のわかる40は胴部外面をケズリ、口縁部内外面と胴部内面をナデ調整によって仕上げている。口径は37が16.8 cm、38が19.8 cm、39が16.2 cm、40が15.6 cm。色はよく類似しており灰橙褐色～灰赤褐色。

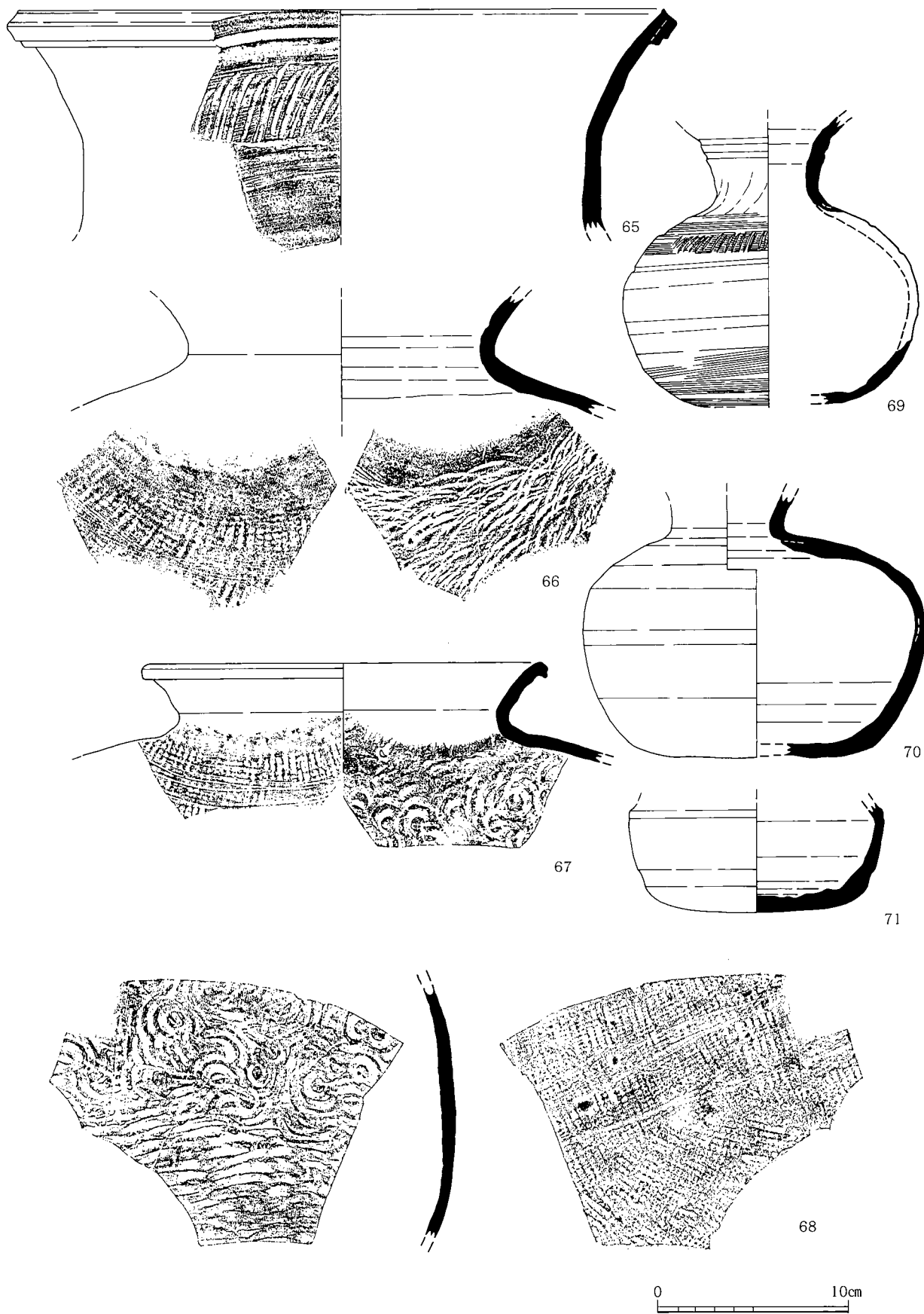
41～56は高杯で、うち43のみ須恵器である。41は全形がわかる資料である。杯部は直線的に広がって中位で浅く屈曲し、直線的に伸びる。脚部は短く、端部は屈曲して外に広がる。脚端



第63图 1号沟出土土器实测图(2)(1/3)



第64图 1号沟出土土器实测图(3)(1/3)

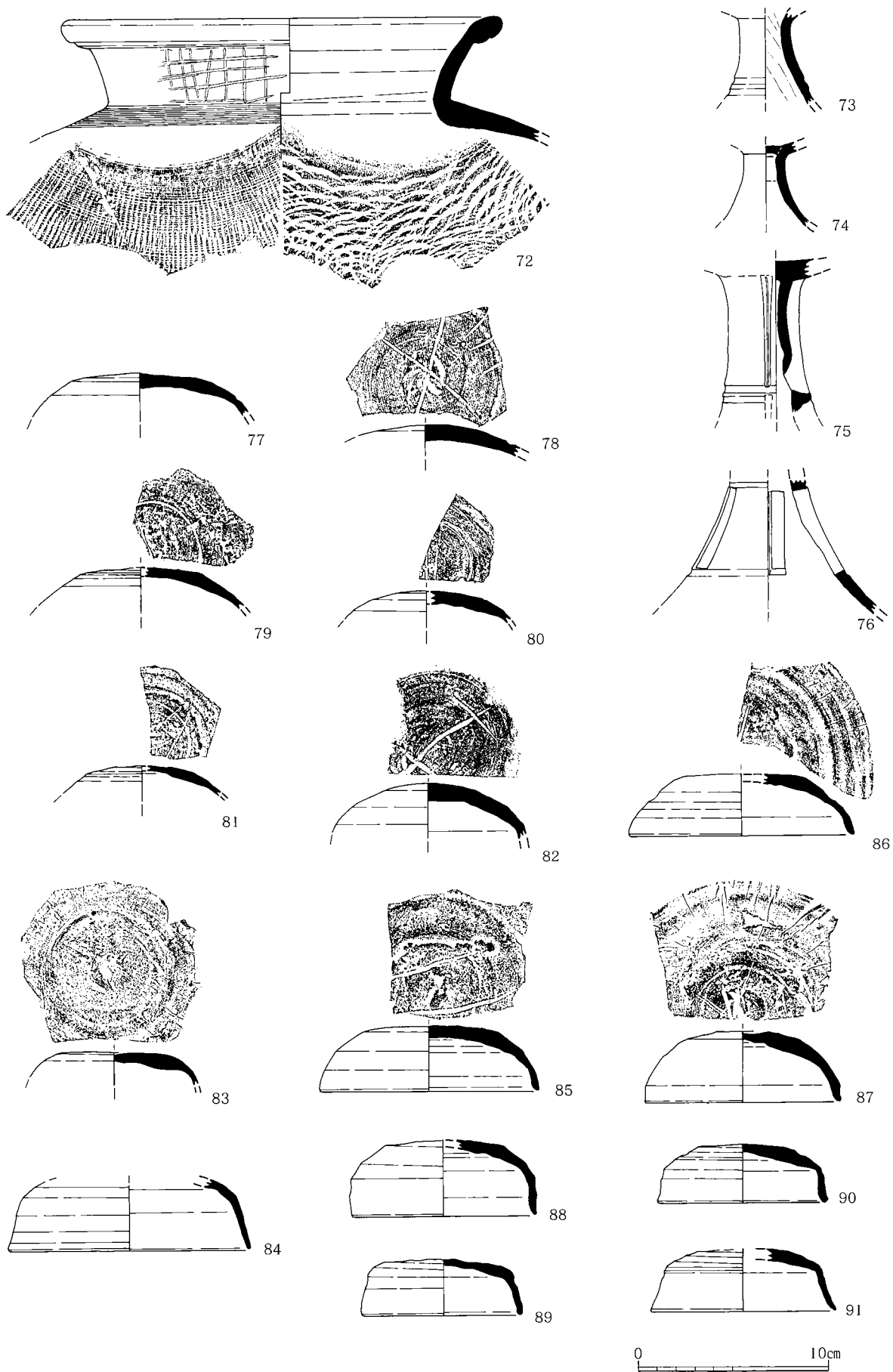


第65图 1号沟出土土器实测图(4)(1/3)

部は外面から内面に向かって粘土を丸く仕上げる結果、内面に低い段を形成する。口縁部と脚端部は内外面ともに横方向ナデ、杯胴部は短い単位のケズリ、脚部外面は上下方向に長い単位のケズリ、脚部内面は縦長の面を有する横方向のケズリ調整を施す。42は杯部のみの形状が判明する資料である。下部から直線的に開いたのち中位で明瞭に屈曲して、直線的に口縁部に向かって伸びる器形を持つ。口縁端部は丸く仕上げ、やや内側に向かって突き出す。調整は口縁部のみ判明し、横方向のナデ仕上げ。43は杯部と脚上部が残存する。42とほぼ同様の器形を持つが、端部がわずかに外反しながら細く仕上がる点がやや異なる。杯部全面がナデ仕上げ、脚部は調整不明瞭。44も43とほぼ同様の器形を有する杯部のみの資料である。調整は摩滅により不明瞭。これらの杯部の口径は41が16.1 cm、42が13.0 cm、43が9.7 cm、44が17.9 cm。色はいずれも橙褐色～黄褐色。45～55は脚部のみが残存する資料。45・46はきわめて低い短脚を持つ。いずれも脚端部に明瞭な屈曲部を有する。内・外面ともにケズリ調整が認められる。46は杯部の接着部に擬口縁が認められる。47～51は短脚高杯の脚部である。いずれも脚端部に明瞭な屈曲を持ち、そこから外に向かって開く端部を有する。内・外面ともにケズリあるいは板状工具ナデ調整が認められ、屈曲部には指押さえ痕も認められる。52・53は中型の脚部である。52は脚端部に外に向かって開く明瞭な屈曲部を有する。53も同様の形状と思われる。外面には上下方向に長いケズリを行い、内面には円周方向に短くケズリを行う。屈曲部に指押さえ痕が残るものが見られる。54・55は長脚の高杯である。54は脚端部が残存していないために全形が不明確であるが、残存部が緩やかに外湾していることから脚端部に明瞭な屈曲点を持たず緩やかに外湾しながら端部まで広がっていくタイプと見られる。調整は摩滅しており不明確である。55は端部に屈曲点を持ち外反するものである。端部から3 cmほどのところで一度外側に屈曲し、さらに脚端部が短く外反する特徴を有する。内・外面ともに板状工具ナデあるいはケズリ調整により仕上げを行う。56は杯底部のみの残存であり、全形をうかがい知ることができない。脚部径の判明するものを列挙すると、45が7.8 cm、46が10.8 cm、47が10.1 cm、49が9.4 cm、55が18.9 cm。色は全て灰橙褐色～灰赤褐色を呈する。

57～64は甑である。57は小形の甑で口縁部径が10.2 cmをはかる。やや扁平な球形の胴部を有し、頸部でややすぼまり、口縁部は湾曲しながら小さく外反するという器形を有する。外面をハケメ、内面をケズリ調整にて仕上げ、口縁部を内・外面ともに横方向ナデにて仕上げる。58～62は把手のみの資料である。60が比較的小型であるが、他は中型～大型の甑に付属するものであろう。いずれも断面はややいびつな楕円形をしており、粗いナデ調整にて仕上げている。62には甑本体の側に突出した接合面が明瞭に観察される。63・64は底部片である。比較的直に近く立ち上がるもので、内外面ともにナデ調整にて仕上げを行い、端部を丸く仕上げる点でも共通性が見られる。底部径は63が13.5 cm、64が15.0 cm。

65～97は古墳時代後期の須恵器である。65～72は壺である。67は出土状況から68と同一個体である可能性があるが、接合しなかったため別個体として記述する。65～68・72は大型壺（あるいは大型甕）である。65は肩部が強く締まらないタイプと考えられる。口頸部が残存し、径は34.0 cm。器形は頸部から緩やかに外湾しながら口縁部へと長く伸びていくもので、口縁端部に貼り付けによる肥厚帯を作り、その下端部に段を付与する。端部内面は短く上方に引き上げる。頸部上半にはカキメ状の回転ケズリをした上から連続短斜線文を付与している。内面はナデ調整である。色調は灰色。66・67・72はほぼ同様の器形を持つとおもわれる大壺の肩～口縁部片である。肩部はよく締まって顕著に屈曲し、やや直線的に短く外反しながら立ち上がる口縁部を有する。胴部上半は強く開いており、おそらく大型の球形の胴部を持つものであろう。口縁端部は66と72に残存し、66は先端部が短く外反、72は先端を肥厚させて丸く収める。径は66が21.0 cm、72が22.4 cmを測る。いずれの資料も口・頸部はヨコナデ、胴部はタタキ調整をそのまま残



第66图 1号沟出土土器实测图(5)(1/3)

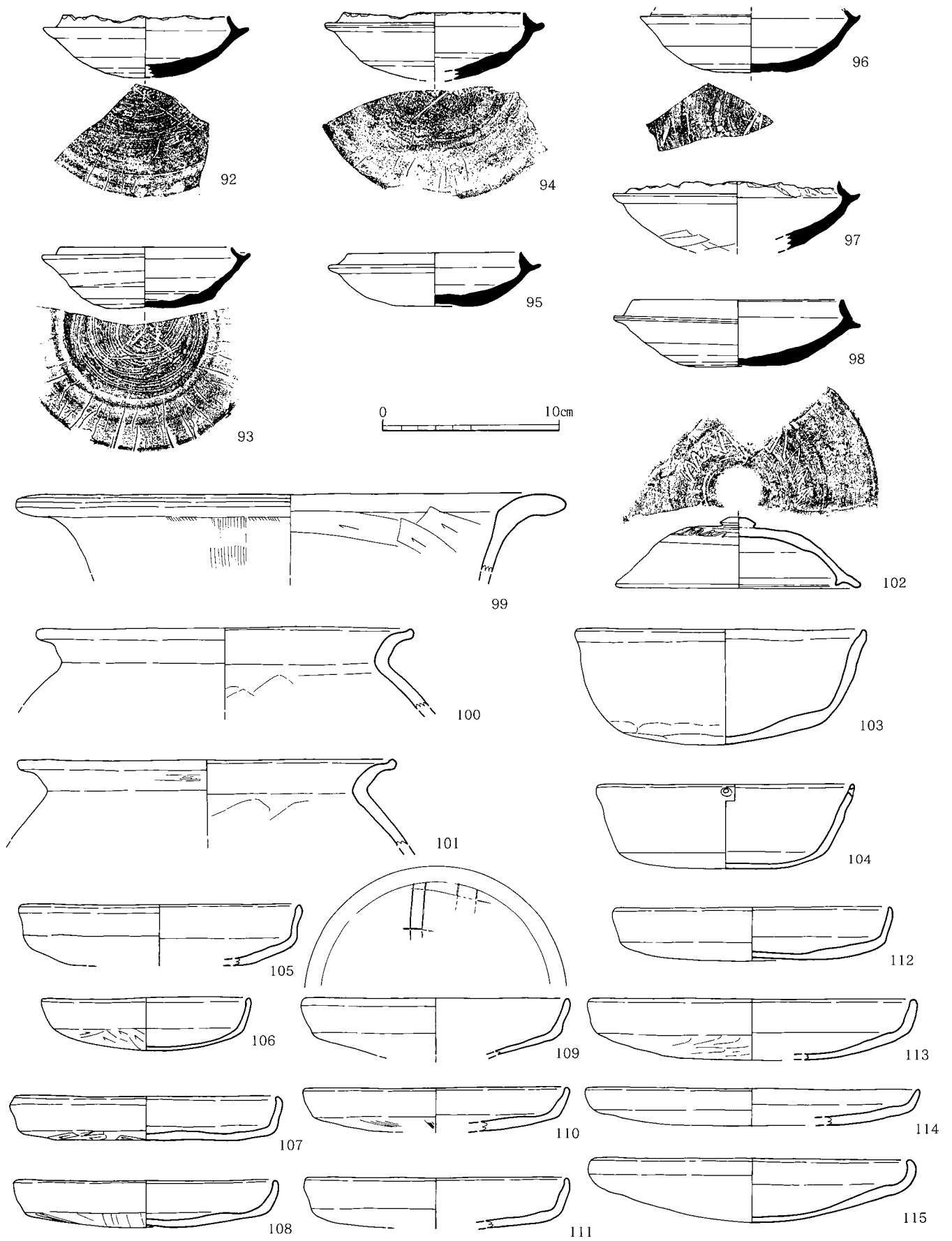
す。内面にはタタキ当て具痕、外面には格子文タタキ痕が明瞭に残る。72の口径部外面にはヘラ記号のような文様が付されている。68は大壺（あるいは大甕）の胴部片で、内面は当て具、外面を格子文のタタキ工具によって整形される。色調は67・68によく類似し、両者ともに青灰色。

69・71は臑である。69は扁平で最大径（15.6 cm）が胴部中央に来るやや平底気味の胴部を持ち、肩部が強く締まってやや外湾しながら伸び上がる頸部を有する。口縁部がラッパ状に大きく発達したタイプであるが、口～頸部の大半は欠失している。胴部上半に二条の沈線を引き、その間に短斜線文をめぐらす。頸部にも二条の沈線を引く。胴部外面には全面にカキメが残り、頸部は丁寧にナデで仕上げているが一部に絞り痕が残る。内面は丁寧にナデ消しているが一部に板状工具ナデ痕が残る。71は胴部のみ資料である。やや角張った扁平な形状をしており、最大径（13.4 cm）の位置する胴部上半には特に明瞭な屈曲を有する。屈曲部には沈線状の段を形成する。内・外面ともに丁寧なナデ仕上げである。色調は類似し、両者ともに暗～黒灰色。これらはいずれも古墳時代後期後半のものであろう。

70は平瓶である。胴部から肩部にかけてと、頸部の下半が残存する。胴部は比較的扁平でなく、小型である。胴部全体を正位の方向にロクロ成形し、胴部外面を回転ヘラケズリ、内面をナデ調整によって仕上げている。頸部の位置は胴部の中心からやや横にずれるが、ずれは顕著ではない。肩部の断面には接合面が確認される。胴部最大径は17.9 cm、色調は暗～黒灰色。

73～76は高杯である。いずれの資料も杯部は残存しておらず、脚部中位のみである。73・74は小型の高杯の脚部である。杯部から外側に湾曲しながら広がる器形を持ち、残存部に透かしは確認されない。73の脚中位には2条の沈線がめぐる。74は杯底部が確認され、接合痕より上方からの充填による製法と判断できる。いずれも内・外面ともにナデ調整であるが、73の内面には縦方向のナデ痕が明瞭に残る。色は前者が青灰色、後者が黒灰色。75・76は中型～比較的大型の高杯脚部である。両者は色がよく似ており、ともに黒灰色を呈する。75は細長く直線的な脚上部片であり、76は長脚高杯の下半部と見られ急激に「ハ」字状に広がる形状を持つ。ともに透かし孔を持っている。75は脚上半と下半にそれぞれ3つずつの透かし孔を配する。これらの透かし孔は、脚の中位にめぐらせた二条の沈線の上と下にそれぞれ沈線に接するように配される。孔の形状は非常に細長く、ほとんど貫通していないために断面がくさび状を呈する。一方76は脚中位と下位にそれぞれ1条（以上）の沈線をめぐらせ、その間に3つの透かし孔を配する。台形の大きなもので、切り口は丁寧に調整されている。

77～91は杯蓋である。77～83は口縁部を欠いて全形の不明な資料である。これらのうち77～82はやや丸みを帯びた天井部を持ち、肩部が顕著に角張らない資料群である。いずれの資料も調整は外面が天井部はヘラケズリ、肩部以下はヨコナデで、内面は全体をヨコナデによって丁寧に仕上げる。一方83は天井が水平になって肩部がやや張る資料である。径も小さく、前者よりもやや新相を呈すると考えられる。これらのうち78～83にヘラ記号が確認されるが、いずれも破片資料のためその全体形状が確認されるものはない。これらの資料はおおよそ古墳時代後期後半まで下がるものが大半を占める。84～91は口縁部から天井部までほぼ全形が復元される資料群である。84～87は口縁部径が11 cmを越える中～大型の資料群である。84は天井部形状が不明であるが、口縁部から肩部にかけて比較的直線的のびており、肩部の屈曲も比較的明瞭であることから、天井部が水平なやや新しい資料の可能性が高い。口縁部外面をケズリ、内面をナデによって薄く仕上げる。85～87は全体形状が丸みを帯びやや古相を呈する資料である。天井部外面をヘラケズリ、天井部内面と口縁部内・外面をナデによって丁寧に仕上げている。86は肩・口縁部境をケズリによって薄くし、口縁部で再びやや厚みを増す形状をもつ。85・87は肩・口縁部境の段が認められない。これら3点にヘラ記号が認められるがその全体形状は不明である。これらの口径を列挙すると、84が12.6 cm、85が11.3 cm、86が11.6 cm、87が10.3 cmである。88



第67图 1号沟出土土器实测图(6)(1/3)

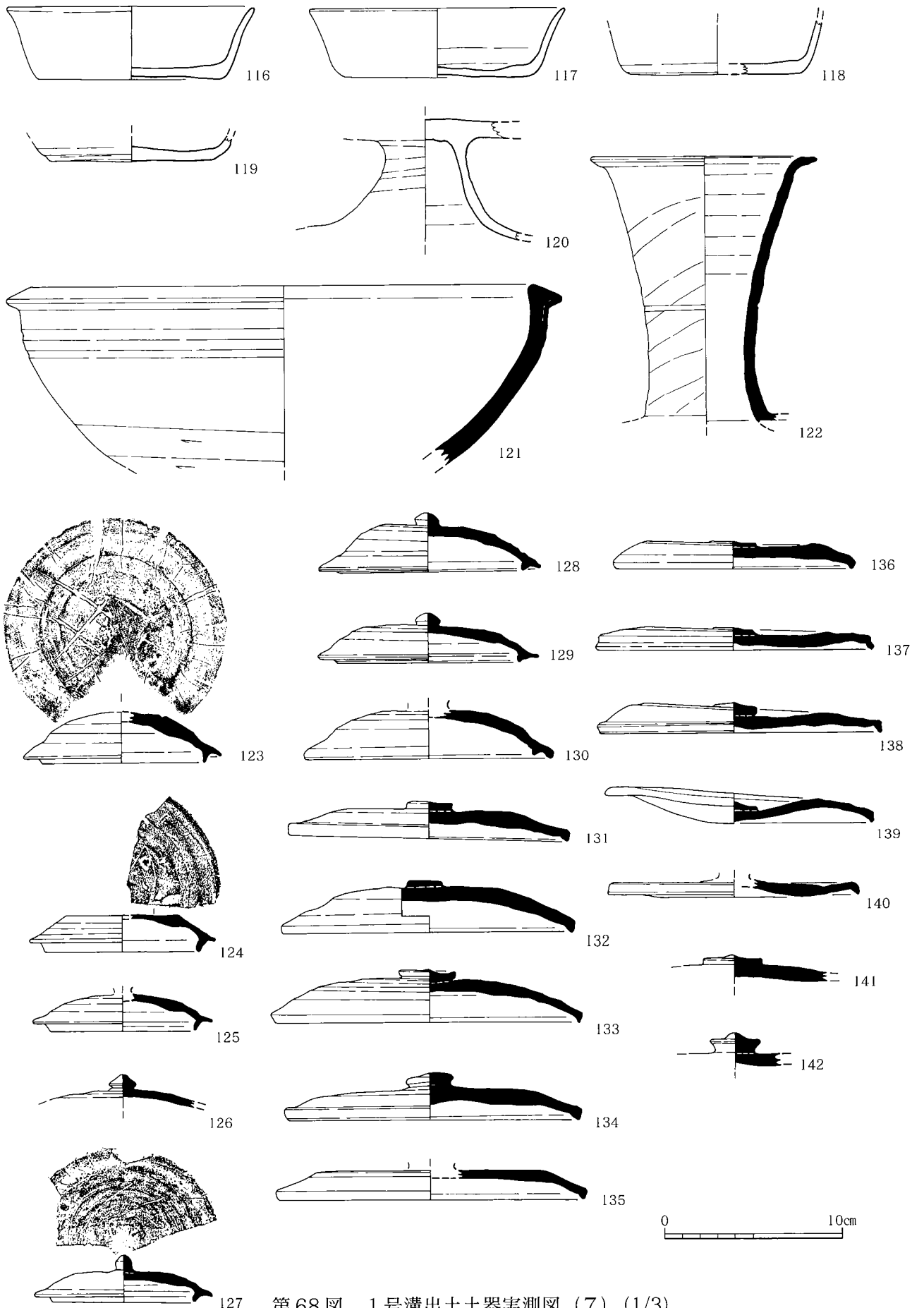
～91は小型品である。88は天井部が丸みを帯びて肩部に明瞭な屈曲や段を持たない。89～91は天井部が水平になって肩部に明瞭な屈曲を有する。口縁部径も88が10cmを越えるのに対し89～91はいずれも10センチ以下であり、前者が古く後者はやや新しい様相を呈する。口縁部形状は、88・89がやや内湾しながら伸びるのに対し90・91はわずかに外反する。調整はいずれも天井部外面のみにケズリ調整痕を残し、そのほかの部位は丁寧なナデ仕上げが施される。これらの資料は色がよく似ており、基本的に灰～暗灰色であるが、88・91はやや青灰色を呈する。口径を列挙すると、88が9.6cm、89が8.5cm、90が9.0cm、91が9.6cm。

92～98は杯身である。いずれも底部から口縁部にかけて明瞭な屈曲部を持たずに緩やかに内湾しながら立ち上がるもので、口縁部に受け部を持つタイプである。92・93は返りが細く、やや湾曲しながら上に伸びるタイプである。受け部の基部外面が湾曲しないで直線的に伸びる。底部外面はケズリ調整、口縁部と底部内面には丁寧なナデ調整が施される。92の返り部には打ち欠きが全周にわたって施されている。いずれの資料にもヘラ記号が施されるが全体形は不明である。口径は92が9.2cm、93が9.6cm。94・95は返り部が太い資料である。返り部の断面形は二等辺三角形を呈し、わずかに外反しながら上方に突き出る。受け部の基部外面がやや外側に湾曲する。94の返り部には打ち欠きが施される。いずれも底部外面にはケズリ調整が、そのほかの部位には丁寧なナデ調整が施される。94にはヘラ記号が確認されるが、その形状は不明である。口径は94が10.4cm、95が9.9cm。96～98は返り部がやや太く、上方に直線的に伸びたあと短く外反する形状を持つ資料群である。受け部の基部外面には明瞭な屈曲部を有するものが多い。いずれも底部外面はケズリ調整である。そのほかの部位は丁寧なナデ調整を施す。97の返り部には全周にわたって打ち欠きが施される。96が10.6cm、97が11.4cm、98が11.9cmを測り、色は基本的に灰～暗灰色であるが92・94はやや青みがかかる。いずれも古墳時代後期後半。

99～120は古代の土師器である。99はバケツ状の胴部と広い丸底の底部を持つ大型甕の口縁部片である。頸部のくびれがないために如意状口縁の屈曲度合いは10～19と比べて顕著でない。調整は口縁部が内・外面ともにナデ仕上げ、胴部外面はハケメが残り、内面にはケズリ痕がよく残る。口径は31.0cm、色は赤褐色。100・101は短頸壺の口頸部と判断した。両者はよく類似しており、同一のものである可能性もあるが、接合しなかったためともに実測図を提示した。球状の胴部を有し、頸部がよく締まって外反しながら広がり、口縁部は外側に湾曲する。口縁短部は上方に弱く引き上げ、丸く収める。調整は、胴部内面にケズリ痕、外面の一部にハケメが残るほかはナデ仕上げ。口径はともに23.0cm、色は橙褐色～赤橙褐色。平安京等畿内の9世紀中頃に類似品があったが、地域が大きく異なるため疑義がある。古墳時代中期前半期の、布留式土器系統の甕が変化したものである可能性もある。

102は模倣坏蓋である。やや立体的なボタン形のつまみを有し、口縁端部にかえりを持つ。天井部外面には沈線で鋸歯文状の波線をめぐらせる。天井部外面は回転ヘラケズリ、そのほかの部位はヨコナデ。口径は13.9cm、色は黄橙褐色。7世紀中頃の資料。

103～119は杯身である。103はやや深さのある杯である。大型品で、やや不安定な底部から明確に屈曲したあと直線的に立ち上がる口縁部を有する。104は103よりもやや深さがなく、底部も安定しているが、口縁部の形状は103によく類似する。調整は103が屈曲部外面に指押しえ痕、底部外面にケズリ痕を残すが、ともに最終的には全体を丁寧にナデ調整にて仕上げている。104の口縁端部には穿孔が1カ所確認されるが、これは焼成後に外面から穿孔したものである。口径は103が16.5cm、104が14.6cm、色は103が茶褐色、104が黄褐色。105～115は平坦な底部から明瞭な屈曲部を経て短く立ち上がる口縁部を有する皿状の杯の一群である。105・106は底部がやや丸みを帯び、明瞭な屈曲部を経て直線的に立ち上がる口縁部を持つものである。106は小型である。いずれも底部外面にケズリ痕が認められるほかは全体を丁寧にナデ消して仕上げ



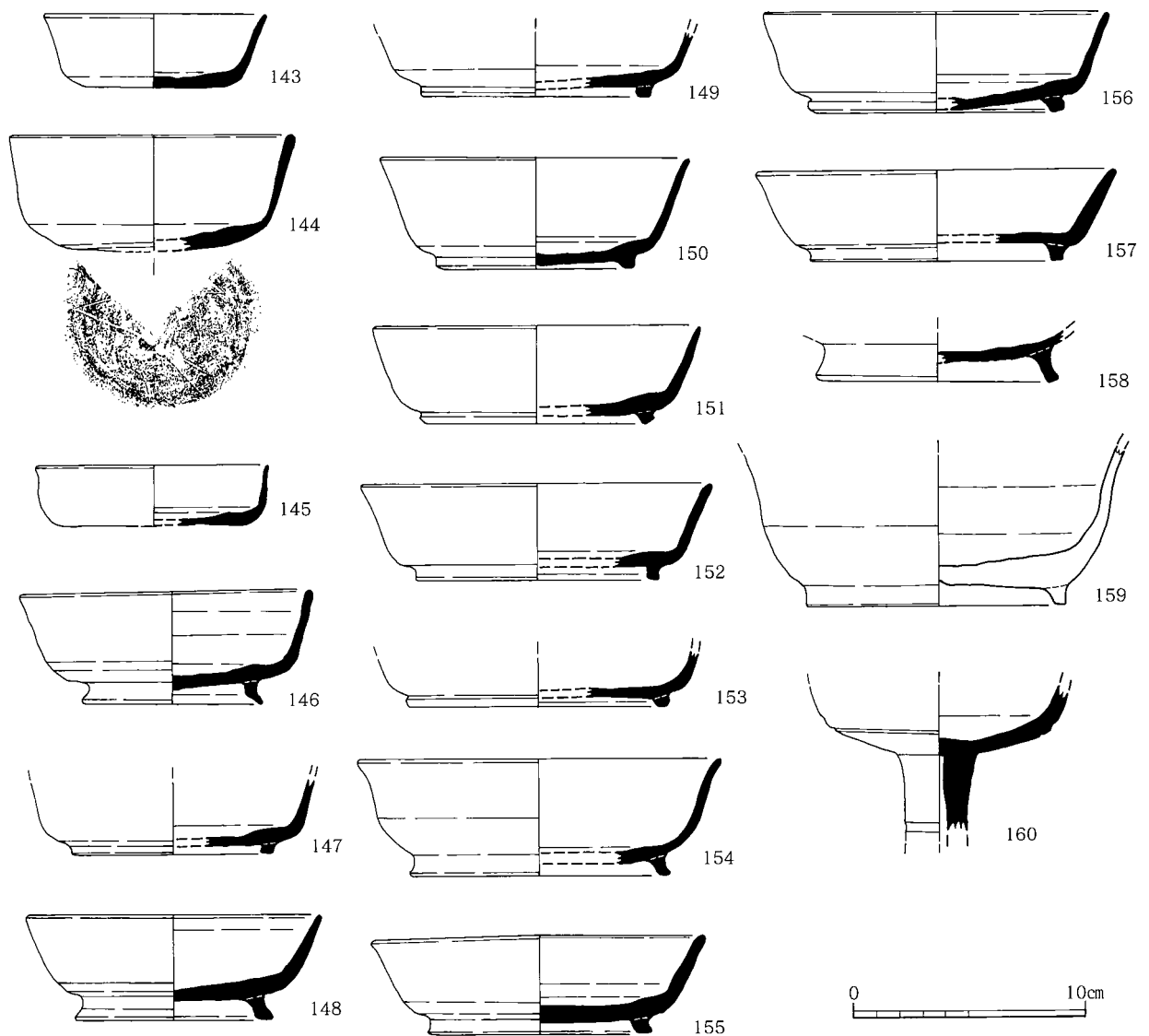
第68图 1号沟出土土器实测图(7)(1/3)

ており、器壁も薄く、精製品と判断される。107～112はよく類似した器形を持つ一群である。平坦な底部から外面に明瞭な稜、内面にはやや緩やかな湾曲を持つ屈曲部を有し、わずかに内湾しながら上方に伸びる短い口縁部を経て口縁端部はやや内側に湾曲しながら細く仕上げるものである。底部外面の調整は摩滅により不明なものを除いて基本的にはケズリ調整が認められるが、110は例外的にハケメ調整痕が確認される。そのほかの部位はナデ調整で仕上げる。109は内面にヘラ記号のような文様を持つ。113もこれらとよく類似するが屈曲部の稜が甘い。114は口縁部の立ち上がり角度が甘いため屈曲も甘くなる。調整等は共通する。115は底部が緩やかに湾曲し、口縁部も明瞭な稜を持たずに湾曲するもので、やや特徴的な形態を有する。外面調整はケズリ、そのほかは摩滅しており不明瞭ながら全体にナデ仕上げか。これらの皿状の杯の一群は大・中・小の3群に大きく分けられる。106が小で口縁部径が11.8cm。105・107～112が中で口縁部径が14.8cm(116)～15.8cm(120)、そのほかはほぼ15.0cm内外に収まる。113～115が大で、114が19.0cm、113・115が18.6cmをはかる。116～119は中型の杯の一群である。118・119は底部～口縁部下半のみの資料であるが、おそらく116・117と同様に平坦な底部からきつく屈曲して直線的に外反しながら伸びる口縁部へと至る形状を持つと思われる。調整は116～118が全体に丁寧なナデを施すが、119のみ底部外面に回転ヘラケズリ痕を残す。口縁部が残存する116・117の口径はそれぞれ13.8cm・14.2cmである。これらの資料はいずれも8世紀中頃～後半であろう。

120は高杯である。扁平な脚部と平坦に広がる杯底部のみの残存であるため全体形は不明であるが、おそらく浅く広い皿状の杯部と大きく湾曲して広がる脚端部を持つものと思われる。調整は内・外面ともにナデ仕上げ。

121～160(159を除く)は須恵器である。121は浅い鉢である。底部形状は不明だが、緩やかに内湾しながら立ち上がって口縁端部は外側に断面三角形に張り出す。調整は内面と口縁部外面が丁寧なヨコナデ、胴部外面は回転しながらの板状工具ナデか。色は灰白色、口縁部径が31.2cmの大型品である。122は長頸壺の口頸部である。少しずつ広がりながら上方に向かって伸び、端部付近で屈曲して外に強く開く器形を有する。胴部との接合部に擬口縁が観察され、それによると口頸部を上からのせて粘土を引き伸ばして接着しているようである。外面は斜め方向に指頭によるナデ調整痕をよく残し、内面はヨコナデ仕上げ。色は黒灰～青灰色、口縁部は径12.6cmを測る。8世紀前半頃のものである。

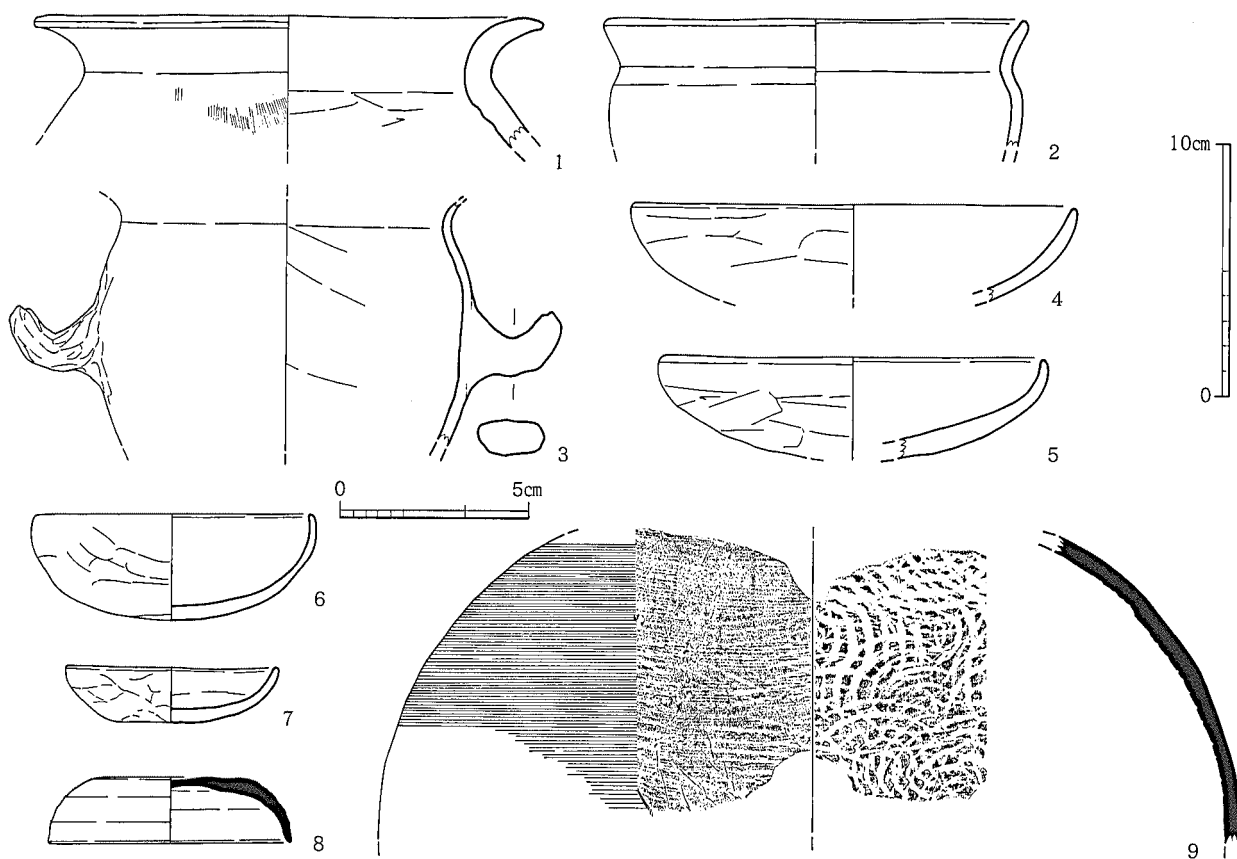
123～142は杯蓋である。123～130は器高が高く未だ受け部が退化していないもので、123～125はつまみを持たず、126～129は宝珠形つまみ部を有する。130も本来つまみを持っていたものと思われる。大半がやや丸みを帯びた天井部から、緩やかに湾曲しながら口縁部に向かって降りてきて、口縁端部にかえり部を付するという共通した器形を持つ。ただし124は天井部が平坦で、蓋身が反転する前段の杯身である可能性も考えられる。また126は口縁部が欠失しており全形は不明である。返り部を有するものは、内側が外側よりも明らかに伸びて古相を呈する123～125・127と、やや内側が外側よりも下に伸びる128・129、外側が内側よりも伸びており新相を呈する130に分けられる。いずれも調整はつまみ部と口縁部外面、内面全体を丁寧にナデ調整で仕上げを施しており、天井部のみケズリ調整にて仕上げを行っている。口縁部径の判明する資料を列挙すると、123が9.1cm、124が8.6cm、125が8.2cm、127が8.0cm、128が10.3cm、129が10.2cm、130が11.6cmである。色はいずれも灰色～黒灰色。これらはいずれも7世紀中頃～後半と考えられる。131～140は扁平なボタン形つまみ部を持ち、返りを有する受け部を持たない一群である。口縁部と天井部の境界にやや明瞭な屈曲部を有し、その結果天井部に高さがある131～136と、天井部から口縁部に直線的にのびるため高さのない136～140に分けることが出来るが、口縁端部は下方に向いて三角形に収めており、いずれも8世紀中頃～



第69図 1号溝出土土器実測図(8)(1/3)

後半の資料と考えられる。調整はいずれもつまみ部と内面全体、そして外面の口縁部付近がヨコナデ、天井部付近は回転ヘラケズリである。口径は、131が15.6 cm、132が16.2 cm、133が16.6 cm、134が16.5 cm、135が17.0 cm、136が13.6 cm、137が15.4 cm、138が15.8 cm、139が15.0 cm、140が14.0 cmである。色はいずれも灰色～暗灰色で、一部に青灰色を呈するものが含まれる。141は先掲の一群と同様の器形を持つものと思われるが、口縁部を欠失し全形は定かではない。調整は天井部がケズリ、その他はナデ。色は赤茶色。142も口縁部を欠失する。つまみはやや立体的で中央部が上方に突出する。調整はナデ仕上げ。

143～159は杯身である。143～145は高台を持たない資料である。143は水平な底部からやや開き気味にまっすぐ口縁部が伸びる器形を持つ。杯部がやや浅めの資料である。144はやや大型で143同様水平な底部とやや開き気味で直線的な口縁部を持つ。やや杯部が深い。145も水平な底部から、明確な屈曲部を経て直線的に伸びる口縁部を持つ器形であるが、口縁部が前二者と比較して直角に立つ。坏部は浅めである。調整はいずれも底部外面以外がナデ、底部外面がヘラケズリであるが、151はヘラケズリ後板状工具ナデを行った可能性がある。口径は143が9.4 cm、144が12.0 cm、145が9.8 cm。色は143・144が灰色～暗灰色、145が青灰色を呈する。146～159は高台を持つ杯である。いずれも水平な底部から明確に屈曲してやや開きながら口縁



第70図 36号溝出土土器実測図 (3は1/6、他は1/3)

部に向かって直線的に伸びる器形を有する。ただし154・159は先端が緩やかに外反する特徴がある。高台の断面形はそれぞれに特徴があり、方形または平行四辺形でやや内側を向くものとして147・149・152が、やや外側に広がるものとして150・151・153・155～157・159が、崩れた平行四辺形で外側に広がり、人の足のような形状をしたものに146・148・154がある。158は高台断面が細長く特徴的であるが、口縁部付近が残存せず全形は不明。太宰府市宮ノ本4号窯出土品に類例がある。以上の資料の色は灰色～暗灰色を呈し、147・157がやや青灰色、158がやや灰赤褐色を呈する。口縁部の残存する資料について口縁部径を列挙すると、146が12.5cm、148が12.6cm、150が13.2cm、151が13.8cm、152が14.8cm、154が15.5cm、155が14.3cm、156が14.8cm、157が15.4cmである。全てが8世紀前半～後半の資料である。なお、159は土師器である。

160は小型高杯の杯部下半～脚部上半である。杯部は底部と口縁部間の屈曲がやや緩やかで、屈曲部の外面に沈線を一条めぐらせる。脚部は残存部ではほとんど外反が始まっておらず、比較的高い脚部を持つものと見られる。色は灰色。

36号溝出土土器 (第70図) 1～7は土師器である。1は甕口縁部である。長卵形の胴部から比較的良好に締まった頸部を経て如意状に開く口縁部へと続く器形を有する。口縁端部は細まりながら丸く収める。器壁は厚い。調整は胴部外面がハケメ、内面がケズリ、口縁部は内外ともにナデ仕上げ。色は橙褐色を呈し、口径20.1cm。2は鉢の口縁部片である。やや扁平な胴部と短く外反する口縁部を有する。頸部の屈曲はさほど明瞭ではなく、口縁端部を丸く収める。調整は摩滅により不明瞭だが、全体をナデ仕上げか。色は淡橙褐色を呈し、口径16.8cm。3は非常に大型の

甗である。球形の胴部と短く外反する口縁部をもつ。4～7は杯である。4・5は径が15cmを超える大型品。6は径が10cmを超える中型品。7は小型品。いずれも底部から緩く湾曲しながら口縁部へと立ち上がる類似した器形を持ち、調整も胴部外面をケズリ、内面と口縁部外面をナデ仕上げと共通する。6は器壁を薄く仕上げる点が特徴的である。口径は4が17.6cm、5が15.3cm、6が10.9cm、7が8.4cm。

8・9は須恵器である。8は小型の杯蓋である。底部は直線的で、湾曲して口縁部へと続き、口縁部も湾曲しながら伸びる器形を持つ。小型化が進行しつつあることから古墳時代終末期の資料であろう。径は9.6cm、色は灰色～暗灰色。9は大型の壺の胴部上半である。外面をカキメ調整にて仕上げ、内面にはタタキ成形の際の当て具痕がよく残る。

2号溝

2号溝は1区北西端部に位置する。第2面47・48号住居跡を切り、北側は調査区外へ延びる。幅0.8m、深さ0.2mで断面台形を呈する。遺物は弥生土器、須恵器が出土している。

出土土器 (第71図1～3) 1・2は弥生土器の口縁部である。いずれも口縁端部を角張って仕上げるもの。内外面の調整は摩滅して不明である。1の口径は31.2cm、色は黄茶褐色である。2は口径30.2cm、色は赤褐色を呈する。3は須恵器の杯蓋である。色は灰色を呈する。天井部は回転ヘラケズリ、内面の調整は仕上げナデである。

3号溝

3号溝は1区北西部に位置する。2号住居跡を切る。長さ2.1m、幅0.4m、深さ0.15mである。出土遺物で図示できるものはない。

4号溝

4号溝は1区南西部に位置する。第2面6号土坑を切り、南側は調査区外へ延びる。幅0.6m、深さ0.2mで断面台形を呈する。

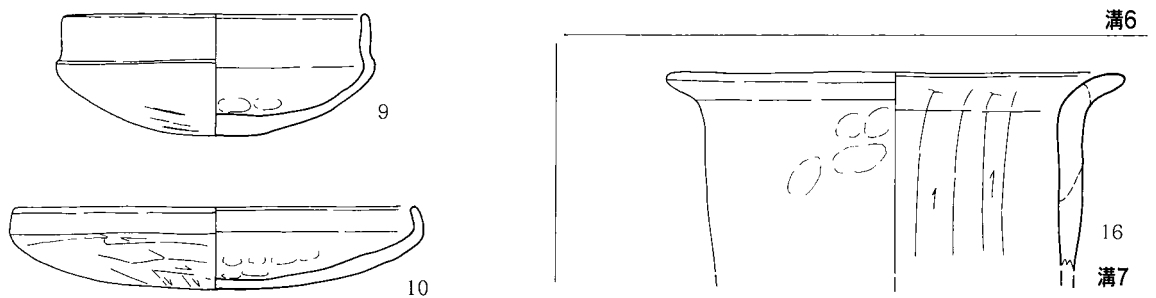
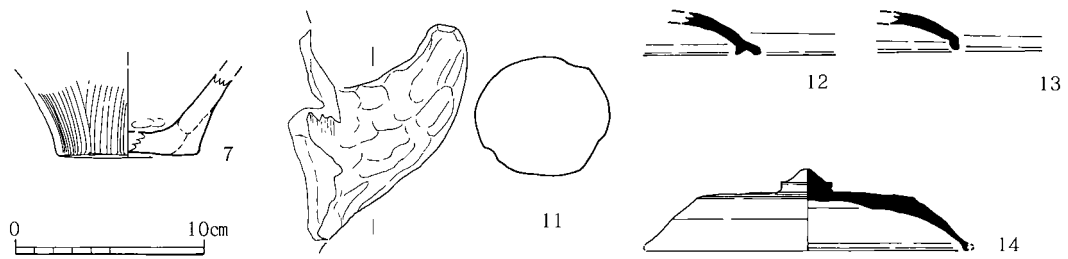
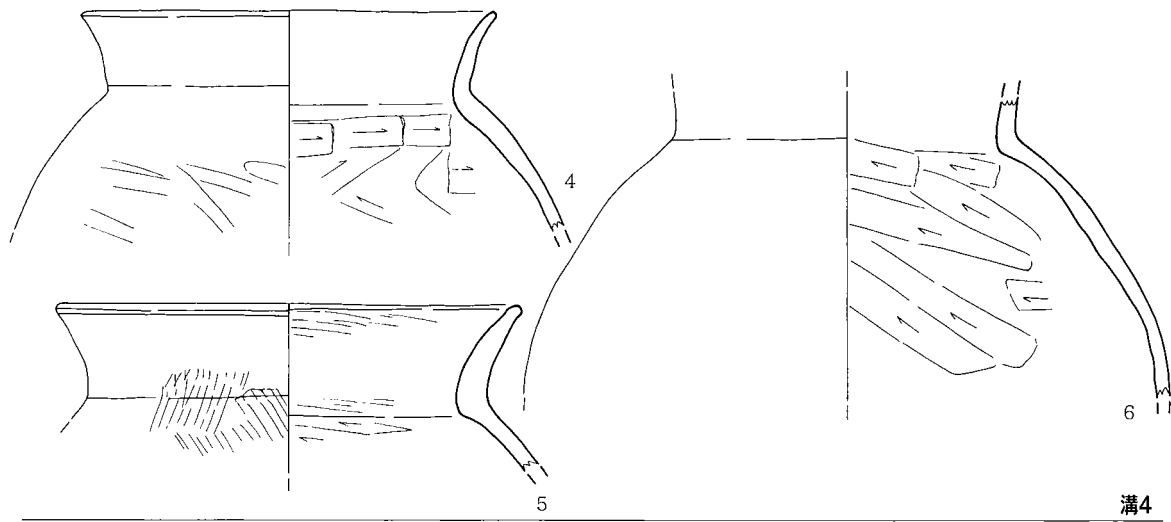
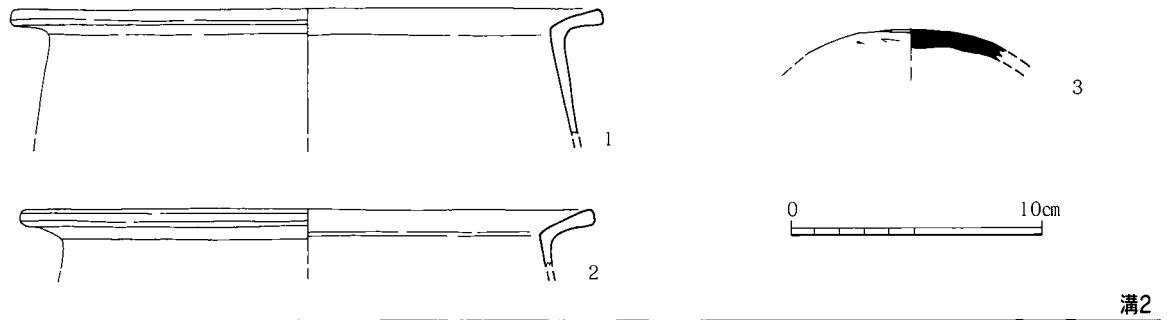
出土土器 (図版47、第71図4～6) 4～6はいずれも土師器の甗である。4は直口で口縁端部をわずかに外反させるもの。4は口径16.4cm、色は外が赤褐色、内が黄褐色を呈する。外面は粗いハケメ、内面はケズリである。5は口縁が全体に外反するものである。口縁部と頸部の境は厚くなる。口径18.4cm、色は暗黄茶褐色を呈する。外面と口縁内面の調整は粗いハケメ。胴部内面の調整はケズリである。6も4と同様に直口で口縁端部をわずかに外反させるものであろう。色は外が赤褐色、内が茶褐色を呈する。外面の調整はハケメか。内面はケズリである。

5号溝

5号溝は調査区中央やや南よりに位置する。21号住居跡に切られる。幅0.7m、深さ0.3mで断面台形を呈する。出土遺物で図示できるものはない。

6号溝

1区中央よりやや西、25号住居跡南に位置し、13・19号住居跡に切られ、第2面72号住居跡を切るが、第2面71号住居跡との切り合いの前後関係は不明。その付近も第1・2面とのレベルの差はない。溝は第2面71号住居跡西から西へ貫流し、13号住居跡で南西に折れ曲がり、2号掘立柱建物跡北東付近で止まるもの。このことから2号掘立柱建物跡と時期など何らかに関連する可能性がある。当初は71号住居跡の東まで続くと考えたが、遺構検出できずトレンチを2本設定し、トレンチの土層観察を行ったが溝らしき立ち上がりは確認できなかったため、東端は71号住居跡で止まると判断した。溝中央部は未調査であるが、長さ東西21.2m、幅2.1m、深さは最も



第71図 2・4・6・7号溝出土土器実測図 (1・2・7は1/4、他は1/3)

深さ所で0.6 mを測る。溝南西は2段掘り状を呈するが、1段目が5 cmと浅いため、溝本体は次第に細くなる。南西部隅で最上層には炭の広がりを確認した。埋土は茶褐色砂質土で、下部ほど砂質が強くなる。溝内から投弾状土製品（第133図37）が出土。

出土土器（図版48、第71図7～15） 7は弥生土器甕底部片で、底径7.5 cm。底部にはスス³が、内面には炭化物が付着する。細粒を多く含み、色は黄褐色～褐色を呈する。8は土師器模倣杯蓋である。口径12.5 cmで、内外面は摩滅がひどく、調整不明。色は橙色を呈する。9は土師器模倣杯身で、蓋受け部の突出度が弱い。口径12 cm、器高4.8センチで、底部は手持ちヘラケズリを施すか。色は黄橙色～橙褐色を呈する。10はやや内傾気味に直立する口縁部をもつ低平な土師器杯で、口径16 cm、器高3.3 cmを測る完形品。底部は手持ちヘラケズリを施し、色は橙褐色を呈する。11は土師器甕の把手。色は黄橙褐色を呈する。12は返りの付く須恵器杯蓋片で、口縁部と返り部との高さと同じもの。外面は口縁近くまでヘラケズリを施す。色は灰色～灰茶色を呈する。13は口縁端部をわずかに外反させる低平な須恵器杯蓋口縁部片。端部は丸く収める。色は淡灰色～灰色を呈する。14は宝珠つまみがつく須恵器杯蓋で、口縁部外端部が欠けるもの。口縁部近くは厚さがかなり薄くなる。口径12.8 cm、器高3.2 cmを測る。色は灰色を呈する。15は須恵器口縁部で、口縁と口頸部との境には稜を作る。口径13.3 cmを測り、内面全体は厚く自然釉が付着する。外は灰黒色、内は灰白色。

7号溝

1区東端、44号住居跡北側に位置し、43号住居跡を切る。北側は調査区外まで延び、長さ5.2 m以上、幅65 cm、深さは最大で33 cmを測る、南から北に流れる小溝である。埋土は灰黄褐色砂質土1層のみ堆積する。

出土土器（第71図16） 16は土師器甕で、直立する胴部に水平まで強く外反する口縁部を持つ。口縁端部は外につまみ出し、口径18 cmを測る。内面は頸部までヘラケズリを施す。口縁部外面にはスス、内面には炭化物が付着。色は黄橙褐色を呈する。

（2）第2面の遺構と出土土器

先述したように1区西側は表土剥ぎ段階で下げすぎてしまい、第2面は1区中央より東側のみ第1・2面を分けて調査した。1区西側部分は調査年度により、第1・2面と分けたため、本来は同一面のもので切り合いが関係が想定されるものでも、第1・2面と分けたために複雑になってしまった。そのため、25号住居跡より西側で第2面として調査した遺構は、第10・11図の遺構配置図については第1面の中に記入し、確実に第2面の遺構と判断できる25号住居跡東側のみ第2面遺構配置図を作成した。そのため、第2面の遺構配置図は西側が空白となっている（第11図）。

1区では第1面は奈良・古墳時代、第2面は弥生時代と大まかに分けることができるが、第2面で検出した古墳時代の遺構も少なくない。この理由は重機による表土剥ぎは、遺構面を水平にするために、地形の凹凸の、凹部分の箇所は掘り残してしまうことにあると考えられる。

またこの第2面調査中はちょうど梅雨の時期で、調査区周辺の田畑からの水が調査区内に流れ込む事態になり、約1ヶ月間調査区が完全に水没した。このため、地山が砂質土で柔らかかったため、切り合いを示すベルトなどがなくなったものや、ピット、壁などが壊れてしまったもの、また埋まってしまったなど図面や写真に多大な影響が出てしまった。特に住居跡の床面には厚く土が堆積し、住居下層の掘り込みや遺構の切り合いなど調査できなかった部分も多い。調査で不十分な点については、できるだけ本文中に可能性も含めて表記し、調査担当者としての責任を果たしたい。

第2面で検出した遺構は竪穴住居跡30棟、土坑8基、溝7条、円形周溝状遺構3基、ピット多数である。

a. 竪穴住居跡

45号竪穴住居跡 (図版27・第72図)

1区西端に位置し、第1面1号住居跡に切られ、第2面46号住居跡を切る。1区調査段階では西壁のほとんどは調査区外であったが、3区第2面調査時の表土剥ぎで下げすぎてしまい、西壁並びに住居跡の痕跡も検出できなかった。埋土は暗黄褐色砂質土で、床面ではピット等は検出できなかった。1・46号住居跡を含めて、第2面の弥生時代の遺構であり、出土土器からも1号住居跡より古い中期末の時期と考えられる。

出土土器 (第73図1) 図示できるものは1点のみである。1は弥生土器甕口縁部片である。口縁端部は丸く収め、上端部をやや上方につまみ出す。頸部外面にはハケの際の工具痕が残る。口径29.6cmを測り、橙茶色を呈する。

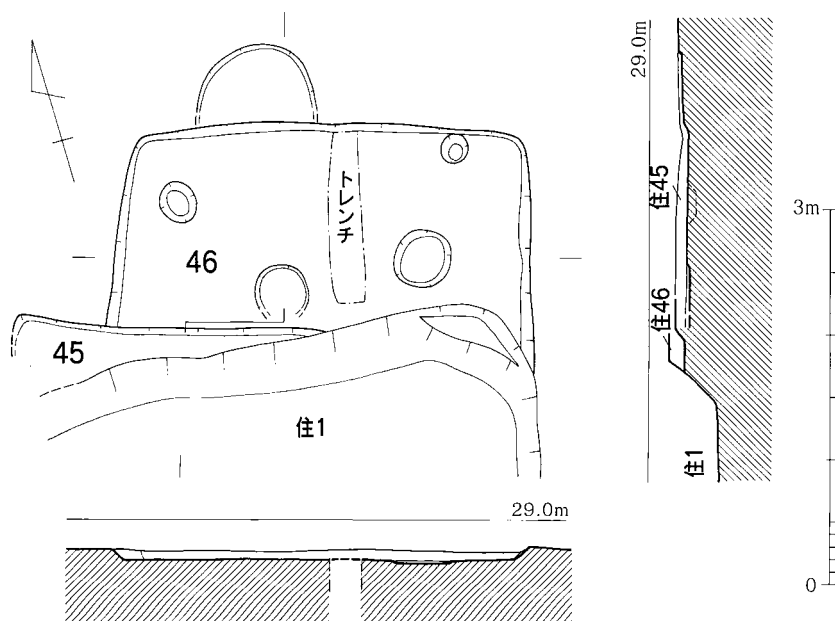
46号竪穴住居跡 (図版27、第72図)

1区西端に位置し、第1面1号住居跡、第2面45号住居跡に切られる。調査当初は、包含層の可能性もあると考えたため、住居跡中央にトレンチをいれたところ、トレンチ壁で住居の床ラインが確認できたため、住居跡とした。埋土は暗黄褐色砂質土で、床面に大小4基のピットを検出したが、いずれも2~8cm程度と浅く、住居の主柱穴ではないと考えられる。

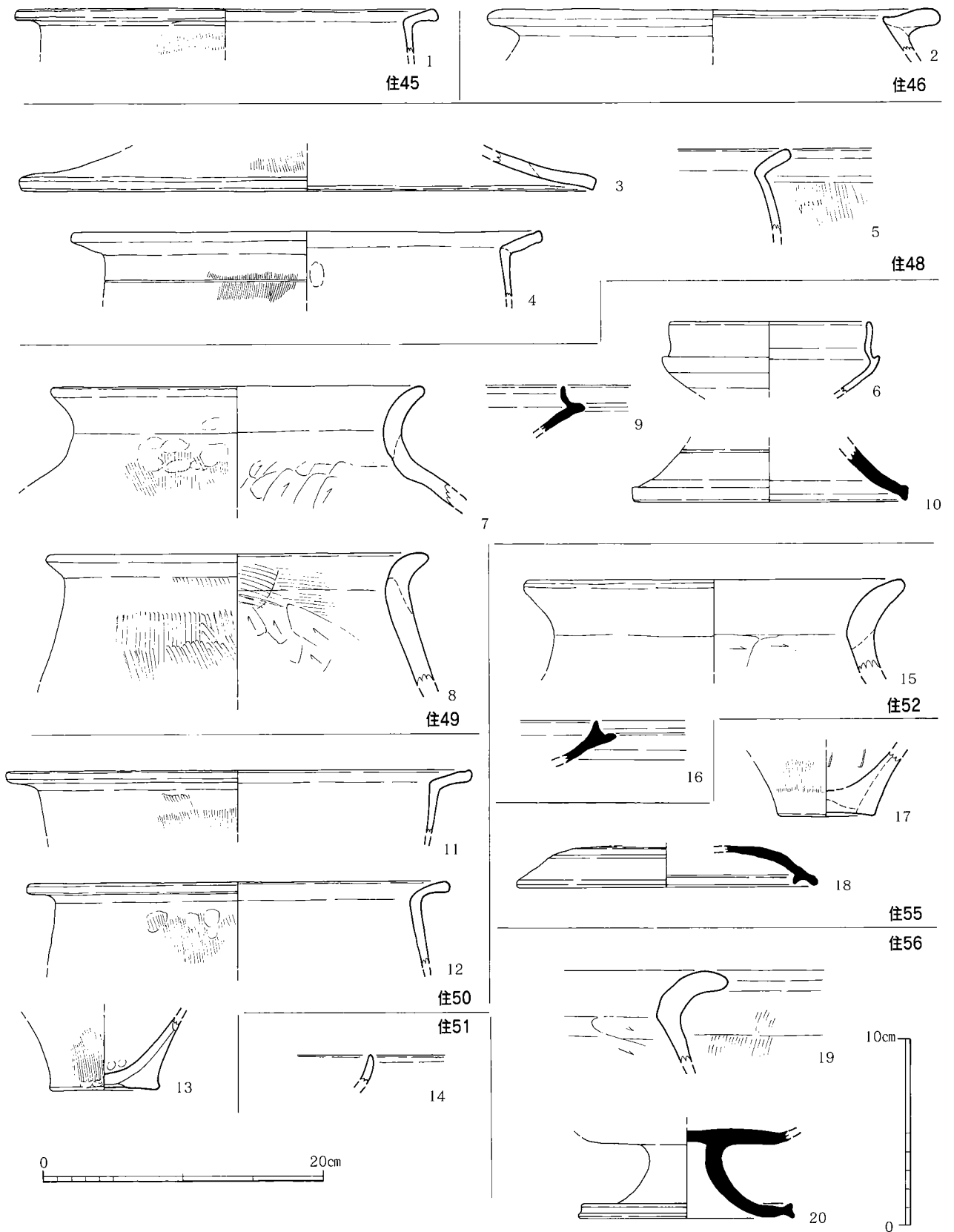
出土土器 (第73図2) 図示できるのは2のやや大形の弥生土器甕口縁部片1点のみである。口径は30cmを測るが、小片のため、径についてはやや不安が残る。口縁部は全体的にやや内傾し、口縁外端部は丸く収め、内端部は内側につまみ出すもので、胴部が強く張る形態の甕になる。焼成はやや甘く、黄褐色を呈する。

47号竪穴住居跡 (図版27、第74図)

1区北西端に位置し、南には48号住居跡、南西には45・46号住居跡が存在する。2号溝が南



第72図 45・46号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第73図 45・46・48～52・55・56号竪穴住居跡出土土器実測図
 (6～10・14～16・18～20は1/3、他は1/4)

北に住居西側中央を貫通する。南北4.2 m、東西4.6 m、面積18.7 m²のほぼ正方形の住居跡で、住居の主軸はほぼ座標に合う。図面上では多くのピットが存在するが、P1～4のみ、住居跡床面から掘り込まれたものである。P3以外は、深さが10 cm以下といずれも浅いが、P3のみ住居跡中央に位置し、深さが約20 cmを測る。床面の一部には礫層が露出する。埋土は暗茶灰色砂質土。住居跡北側の遺構面から砥石（第131図1）が出土。出土土器はいずれも小片で、図示できない。

48号竪穴住居跡（図版28、第74図）

1区西、中央よりやや北側に位置し、北には47号住居跡、西には45・46号住居跡がある。2号溝が住居跡北中央から南東隅を切る。南北3.3 m×東西3.7 m、面積12.7 m²のほぼ正方形の住居跡であり、住居の主軸は47号住居跡と同じく座標と合う。住居北壁付近には礫層が露出する。床面には深さ5 cmのピットが1基存在するのみである。埋土は灰黄色砂質土。覆土からくさび形石器（第126図1）、台石（第131図14）が出土。

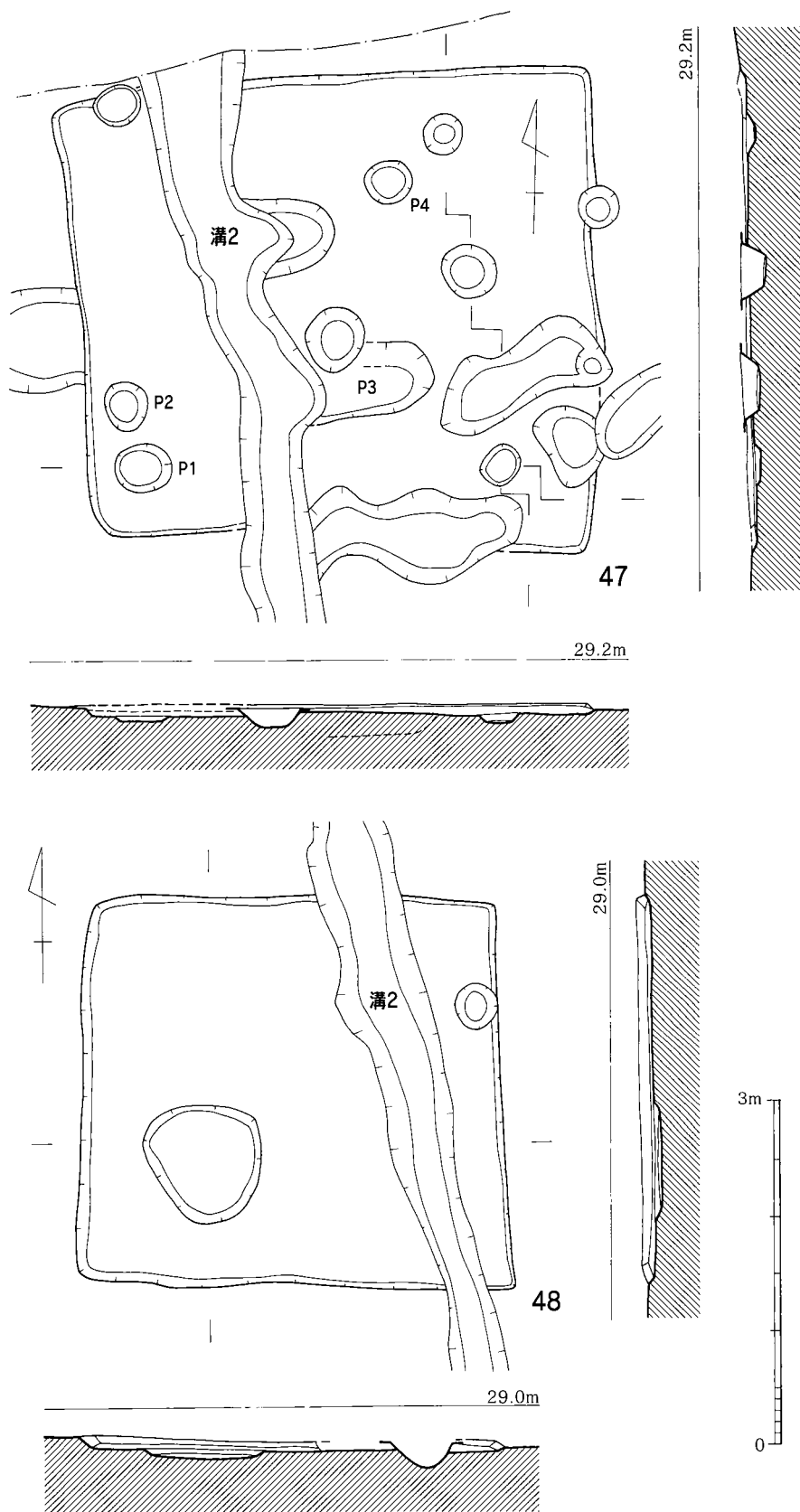
出土土器（第73図3～5） 3はP1出土の弥生土器甕の蓋片で、径が40.4 cmを測るが、小片のため径に自信がない。口縁端部はナデで面取りし、やや下方を向くもの。外は灰黄褐色、内は淡橙褐色を呈する。4・5は弥生土器甕口縁部片である。4は口縁部が直線的にくの字状に外折し、口縁から約3 cmほど下がったところに浅い1条の凹線が巡る。胎土には金雲母粒が多く、暗黄褐色を呈する。5の口縁端部は丸く収め、色は橙褐色を呈する。5の時期は弥生時代後期前半であるため、本住居跡も後期前半まで下るものか。

49号竪穴住居跡（図版28、第75図）

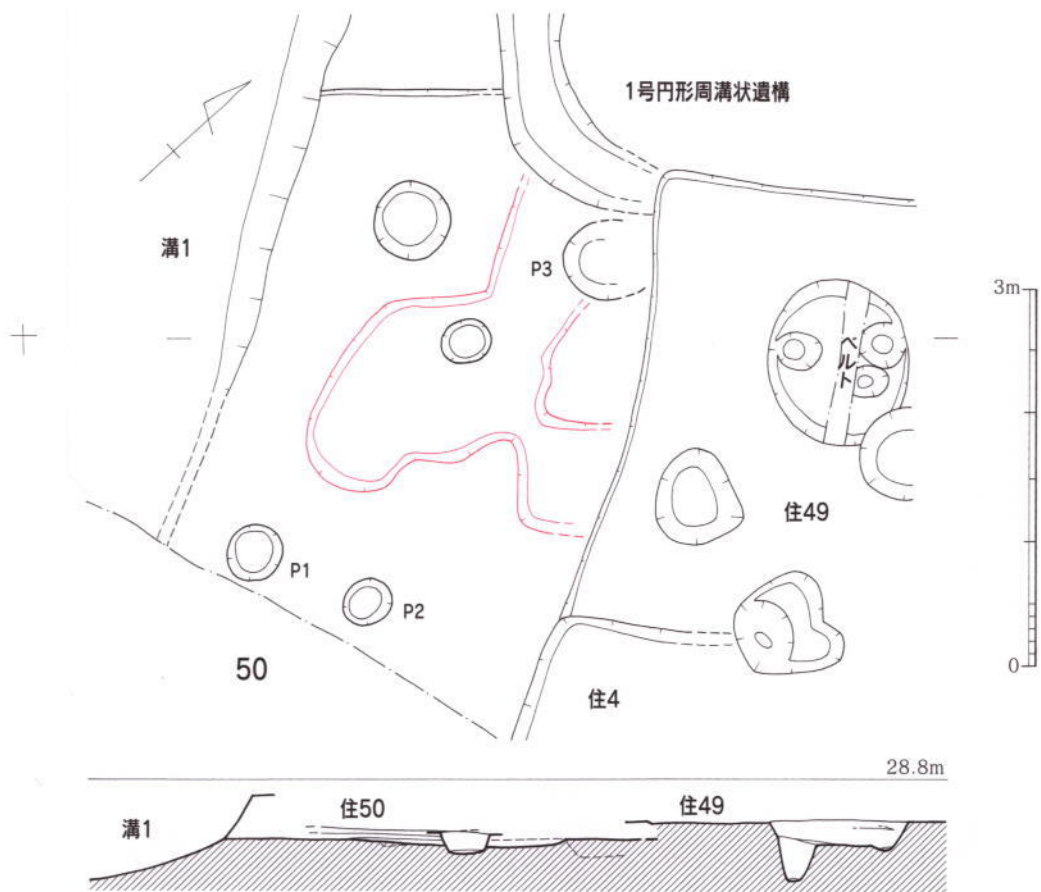
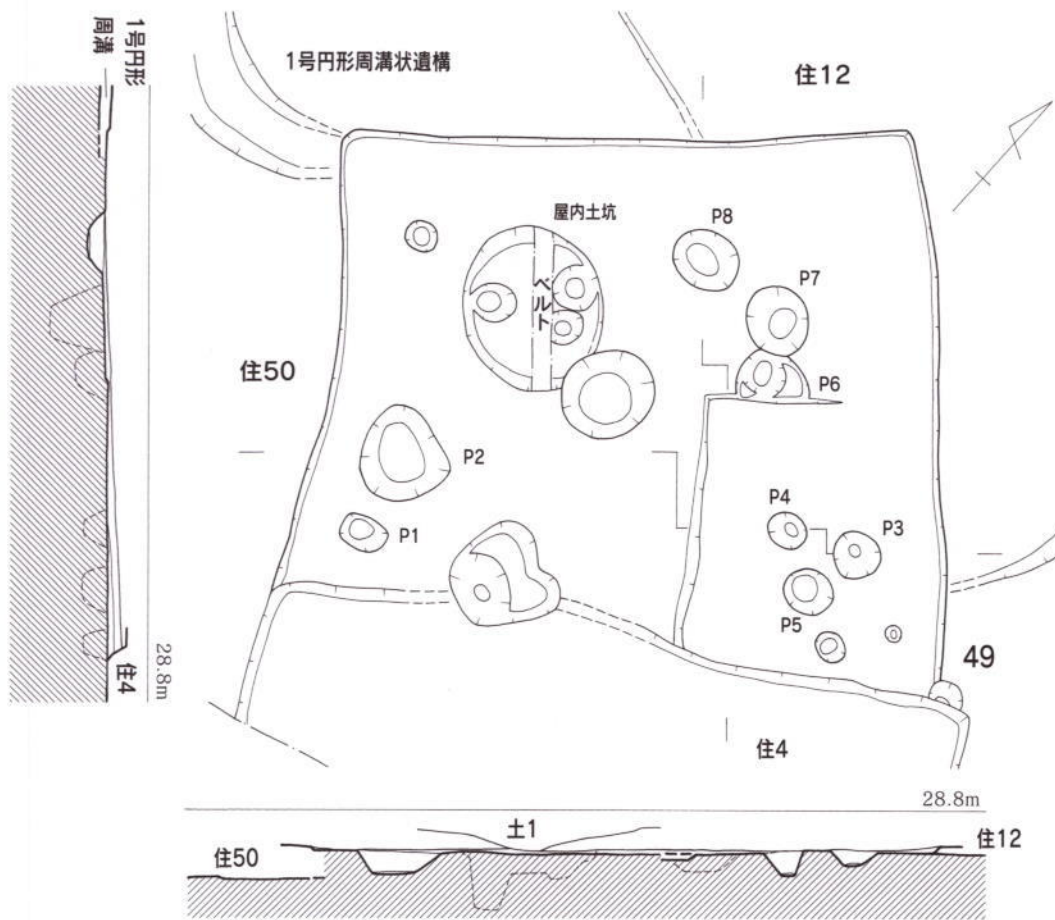
1区南西隅、1号溝東に位置する。上層には第1面1号土坑が存在し、第1面4号住居跡に切られ、第1面12号住居跡、第2面50号住居跡を切る。第1面4号住居跡と床面がほぼ同じ高さになり、出土土器からも4・49号住居跡とも同じ古墳時代後期後半になるため、第1面で検出できなかった遺構であろう。住居の主軸が北西－南東であり、住居跡は北西－南東が4.2 m以上、南西－北東5.2 mで、南側を4号住居跡に切られているが、ほぼ正方形の住居跡になる可能性が高い。南西隅は4号住居跡北西隅にちょうど合うが、南東隅とは合わないため、4号住居跡とは別の住居跡と判断した。埋土は暗黄灰色砂質土。

床面は東側がベット状に高くなるが、この部分が本来の床面の高さであり、この付近以外では3 cm程度床面を掘りすぎている。床面からは屋内土坑1基、ピット11基を検出したが、P7の深さが40 cmあり、位置的にも主柱穴と考えられるが、その他は20 cm程度で、どれが主柱穴か判断できない。屋内土坑は埋土が明茶褐色砂質土で、全体的には20 cm程度の深さを測るが、土坑床面から掘り込まれた西側のピットは土坑上端からの深さが50 cmと深いことから、住居跡の主柱穴の可能性はある。

出土土器（第73図6～10） 6は土師器模倣杯の杯身である。口縁端部はやや内傾し、蓋受けは明確な段をなす。底部は蓋受け部近くまで手持ちヘラケズリを施す。口径10.7 cmを測り、内外面には黒斑がある。色は淡黄色を呈する。7・8は土師器甕口縁部片である。7は外湾する口縁部で、口径19.8 cmを測る。頸部外面付近には指押しえ痕が良く残り、内面は頸部までヘラケズリを施し、頸部には粘土接合痕が見える。外面には黒斑がある。色は橙色。8は口径20.2 cmの、短く外湾する口縁部で、内面は頸部下までハケ調整を行い、後ヘラケズリを施している。内面には炭化物が付着する。外面は橙褐色、内面は灰黒色を呈する。9は須恵器杯身口縁部片である。口縁部は外湾し、蓋受けの窪みが浅いもの。色は灰色。10は須恵器高杯脚部で、底部外端はナデで面取りし、下端部をやや下方につまみ出す。外面にはナデによる浅い凹線が残るが、小片のため透かし孔は確認できない。内面には薄く自然釉が付着する。外は灰黒色、内は白黄色を呈する。



第74图 47·48号竖穴住居跡实测图 (1/60)



第75図 49・50号竪穴住居跡実測図 (1/60)

50号竪穴住居跡（図版28、第75図）

1区南西隅、1号溝東に位置し、第2面49号住居跡、第1面1号溝、第2面1号円形周溝状遺構に切られ、南側は調査区外まで延びる。このため、住居北壁1.4mしか壁は残っておらず、住居の規模は北西-南東4.5m以上、東西3.2m以上で、住居形態は不明。埋土は暗黄褐色砂質土であり、住居の床面にはP1~3のピットと、住居下層の掘り込みを確認した。ピットはいずれも浅い。住居の時期は弥生時代中期後半。

出土土器（第73図11~13） 11はやや長めで、水平近くまで外折する口縁部を持ち、口縁外端部は丸く収める。胴部は弱く内湾する。口径32.4cmを測るが、小片のため径に不安が残る。外面胴部には黒斑、口縁端部内面は黒化する。外は灰黄褐色、内は褐色を呈す。12は口縁端部が肥厚し、強く外湾する口縁部で、口径29.6cmを測るが、小片のため径に自信がない。外面頸部付近には指押さえ跡が残る。胎土は角閃石を多く含み、焼成はやや甘い。淡橙色を呈する。13は底径7.7cmを測り、底部端部をやや外側に突出させる。外面底部端部には指押さえ痕が残り、内面には炭化物が付着する。焼成はやや甘く、外は灰褐色、内は黄橙色を呈する。

51号竪穴住居跡（図版28、第76図）

1区西側中央より、やや北よりに位置し、上層には第1面7・8・17号住居跡があり、南西隅で52号住居跡と接するが、前後関係は不明。52号住居跡と同じく古墳時代後期後半の住居跡と考えられ、上層の住居跡と時期はほぼ同じであり、本来は第1面で検出すべきもの。壁は南壁で2cmほどの高さが残っている以外は住居下端しか確認できなかった。このためやや大きさには不安が残るが、南北3m、東西3m、面積9.1㎡の正方形の小型住居跡になると思われる。

調査当初は床面で2基のピットを確認したが、第1面7・8・17号住居跡を掘る際に調査したピットの高さや位置で検討すると、床面には3基のピットが存在すると考えられる。いずれも深さが10cmと浅いが、P1・2では5cm、P3では10cmの柱痕跡を確認できたため、いずれも主柱穴と判断した。埋土は暗茶褐色砂質土である。

出土土器（第73図14） 図示できるのは14の1点のみである。14はP3出土の土師器杯口縁部で、丸い器形の杯身になるか。色は淡橙色を呈する。

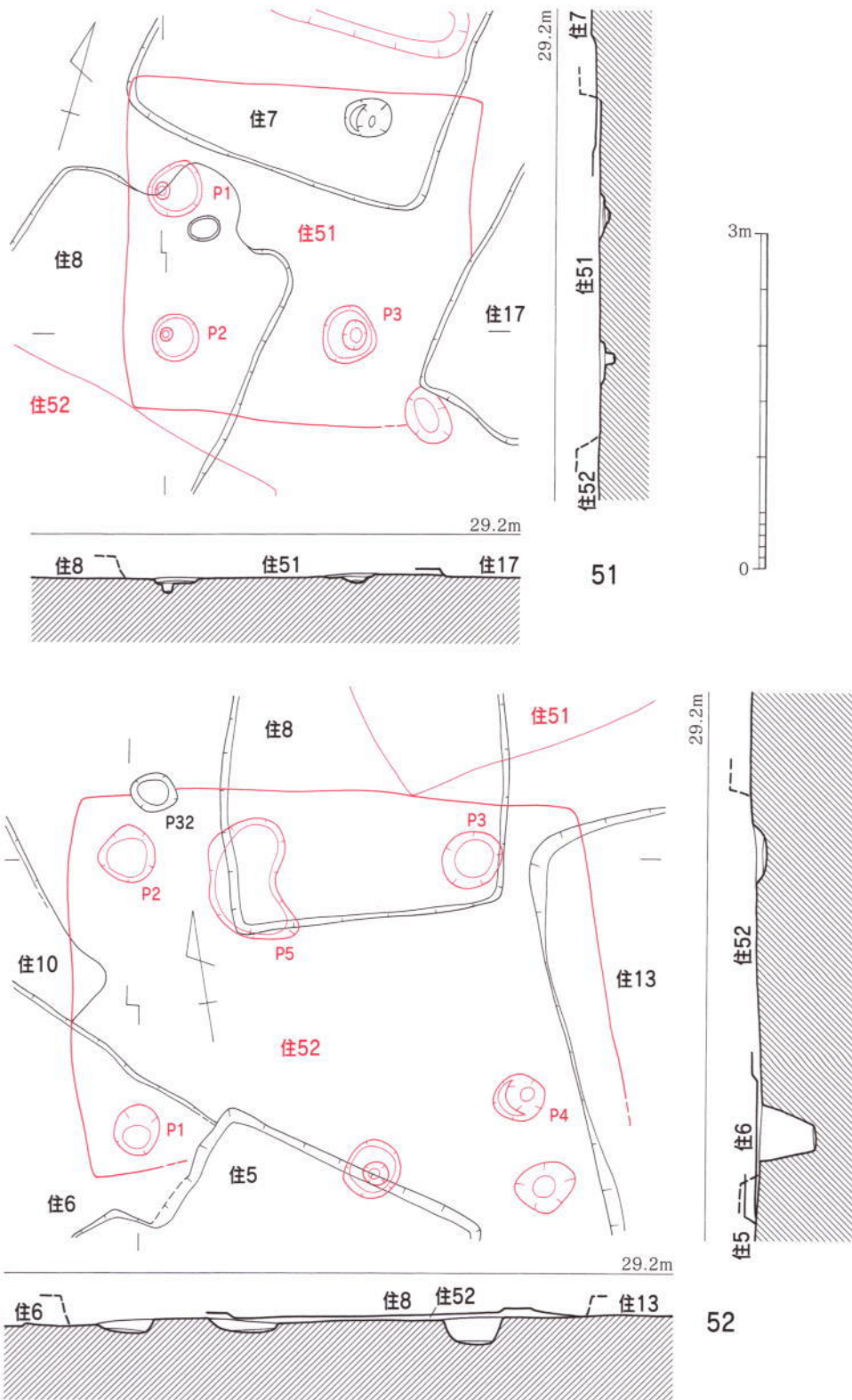
52号竪穴住居跡（図版29、第76図）

1区西側中央に位置し、上層は第1面5・6・8・10・13号住居跡があり、北壁で51号住居跡と接するが、前後関係は不明。住居跡は赤で示すが、51号住居跡と同じく、第1面の住居跡と考えられる。住居の壁は全く残ってなく、下端のみ確認したが、東南では下端も検出できなかった。下端のため、大きさには不安が残るが、規模は南北3.4m、東西4.8mの長方形の住居跡になると思われ、西側がやや広い。床面では5つのピットを確認し、P1・P4は、主柱穴に間違いはないが、P2・3は深さが浅いため、位置的は良いが、自信がない。埋土は暗茶褐色砂質土。

出土土器（第73図15・16） 15は土師器甕口縁部で、外反する口縁部を持ち、端部は丸く収める。口径は19.6cmを測るが、小片のため口径に自信がない。内面は頸部までヘラケズリを施す。灰黄褐色を呈する。16は須恵器杯身口縁部で、立ち上がりは短く、ほぼ直立する。外面には回転ヘラケズリの痕跡が残る。色は灰色を呈する。

54号竪穴住居跡（第77図）

1区中央南端に位置し、第1面18・22号住居跡、第2面10号溝に切られる。住居の壁は西側の一部0.8m、残りのよい部分で高さ6cmしか残っておらず、西壁南半分では下端のみ検出した。住居西壁中央には焼面が0.8×0.5mの範囲で広がるが、当初は18号住居跡のカマドの一部

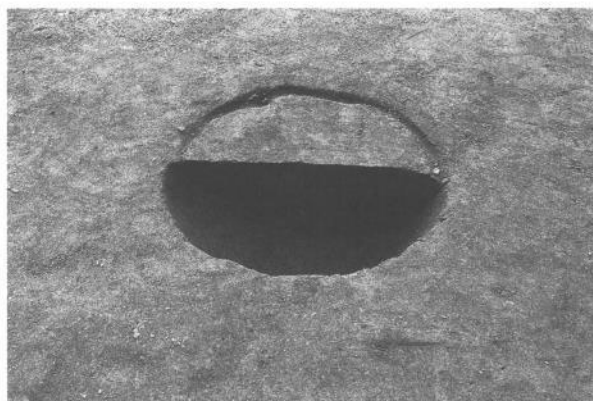


第76図 51・52号竪穴住居跡実測図 (1/60)

とも考えたが、住居跡及びカマドの外側にも広がるため、この住居跡に伴うものと判断した。埋土は暗黄褐色砂質土。出土した土器はいずれも小片のため、図示できない。

55号竪穴住居跡（図版29、第77図）

1区北東隅付近に位置する。第1面39・40・41号住居跡の下層で検出した。北壁3.7m、南壁4.4m、東壁4.1m、西壁3.8mの正方形に近い台形の平面形となる。床面の大部分が40号住居跡によって削られており、北東隅付近が本来の床面で、この部分で深さ20cm弱を測る。床面に硬化面は認められず、貼床の痕跡も確認できなかった。壁小溝も不明。床面で9基のピットを検出している。このうち北半に位置するP1・P2が支柱穴に相当すると思われるが、南半の支柱穴は検出できなかった。住居跡ほぼ中央に位置する径0.4mのピットは炉跡と思われるが、埋土中に焼土、炭化物は含まれていない。



55号竪穴住居跡炉跡断面（東から）

出土土器（第73図17・18）

17は弥生土器甕底部で、底部はやや上げ底。内面には工具痕が残り、板ナデ後、指ナデを施したものである。内面には炭化物が付着する。18は返りの付く須恵器杯蓋口縁部片で、返りの立ち上がりは短く、口縁部との差はほとんどない。口縁端部は丸く肥厚し、自然釉が付着する。胎土は細粒を多く含み、色は灰色を呈する。混入品と考えられる。

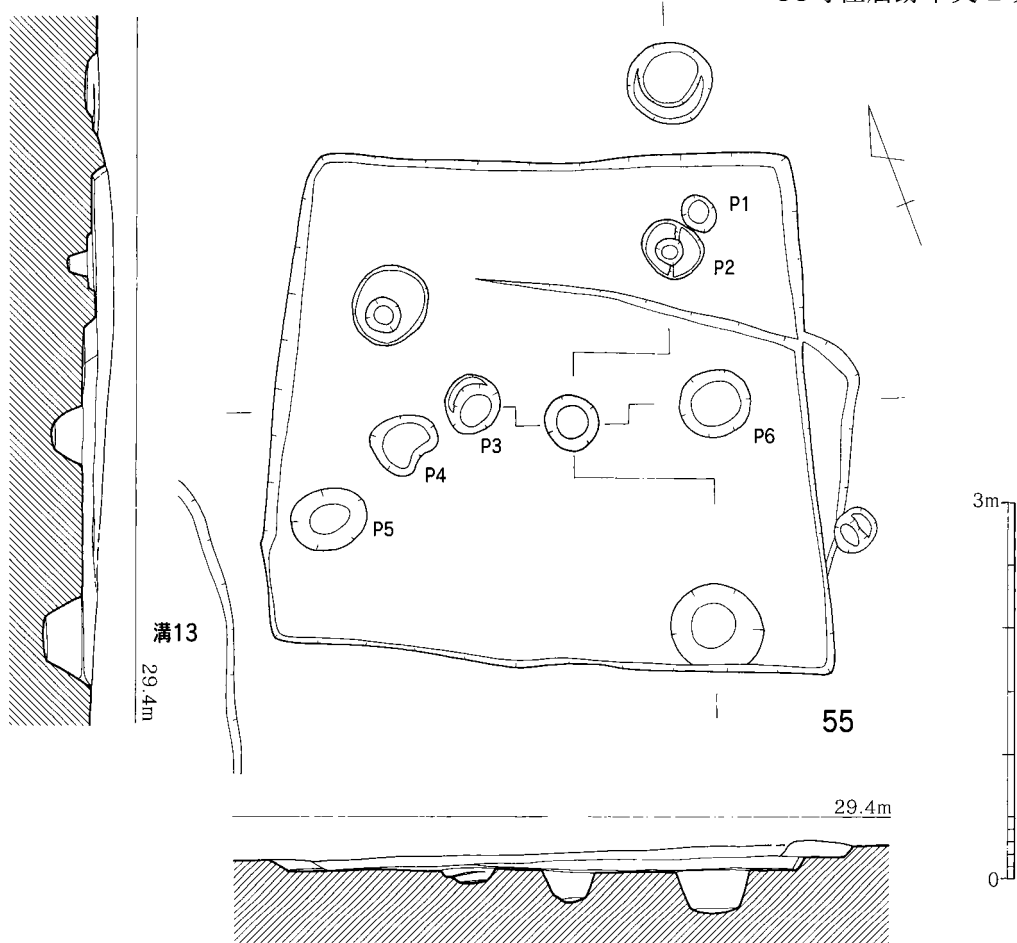
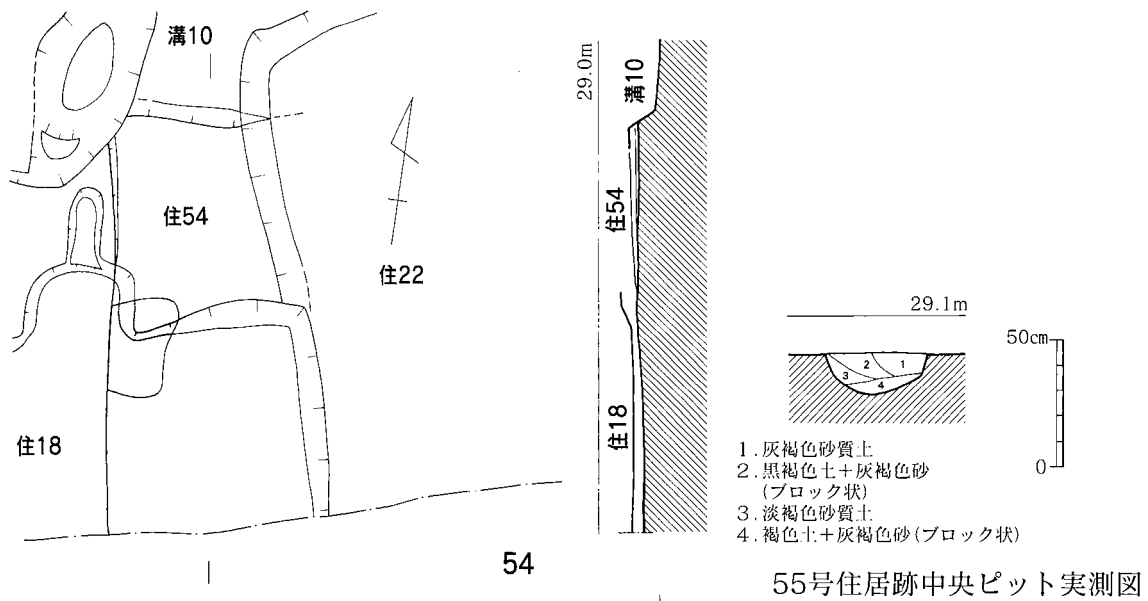
56号竪穴住居跡（図版29、第78図）

1区中央南端に位置し、73号竪穴住居跡を切り、南東隅は調査区外まで延びる。南北5.8m、東西6.6m、面積36.3㎡を測り、ほぼ正方形のやや大型住居跡になる。埋土は暗茶褐色砂質土。床面ではピット8基を検出し、P1・2・4・7は位置や深さから支柱穴と考えられるが、P4は径0.6m、深さが10cmとその他が0.8～1m、深さも20cm以上あるのと比べるとやや小さく不安。奈良時代の住居跡と考えられるが、カマドや焼面は確認できなかった。覆土から砥石（第128図3）・磨石（第130図9）が出土。

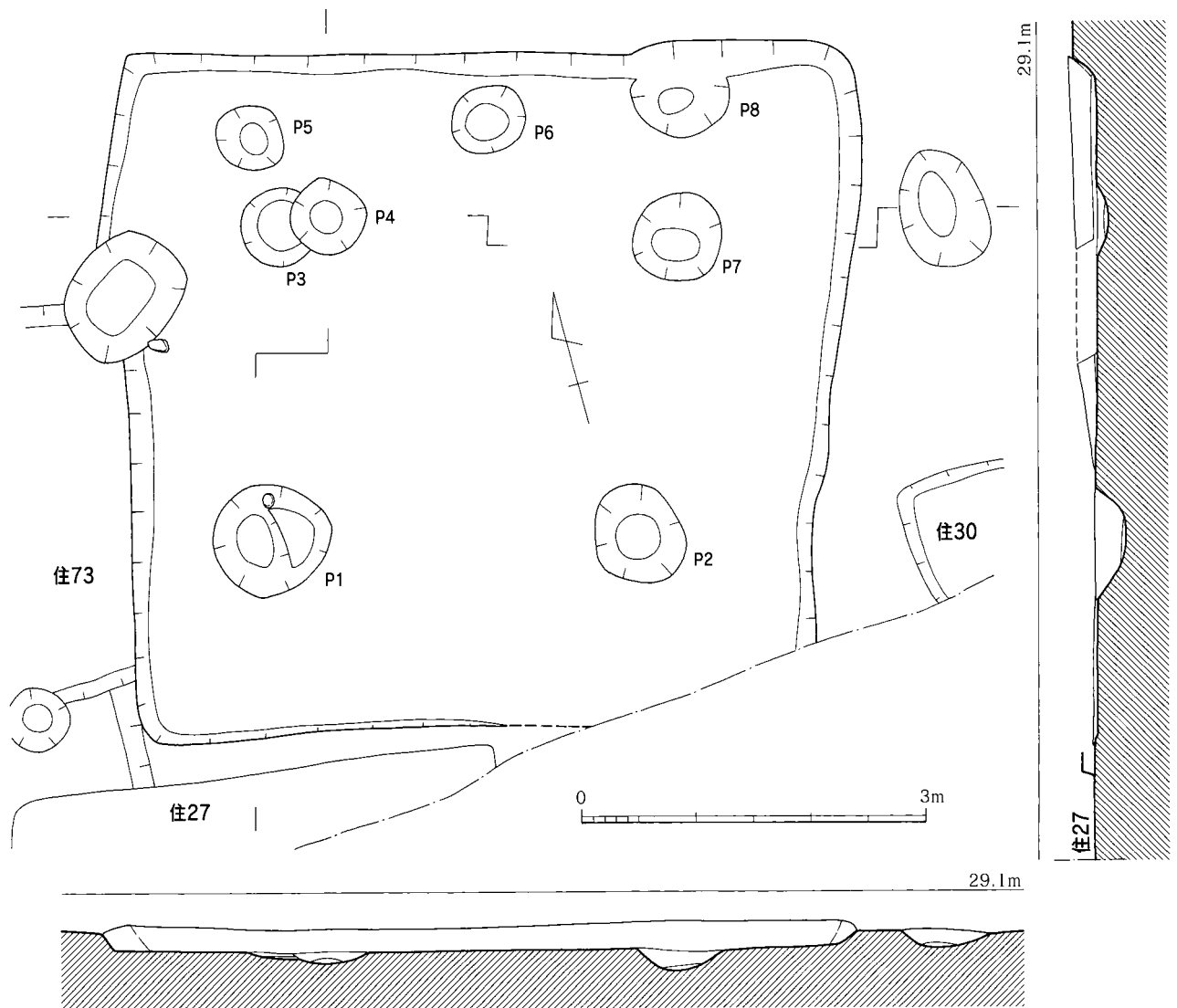
出土土器（図版48、第73図19・20）19は土師器甕口縁部で、短く外湾し、外端部はやや下方に垂れる。内面頸部までヘラケズリを施す。色は暗茶褐色を呈する。20は須恵器高杯脚部である。ほぼ水平の杯部に強く外湾する脚部がつく。脚部端部はナデで面取りし、脚端部は上下につまみ出す。脚部内面は全体に自然釉が付着し、底径11.6cmを測る。暗灰色～灰色を呈する。

57号竪穴住居跡（図版30、第79図）

1区中央よりやや南東側に位置し、58号住居跡に切られる。南北4.2m×東西4.2mの正方形の住居跡で、東壁が外にやや広がる。住居の壁が約30cm残る、比較的残りの良い住居跡であり、床面からは大小9基のピットと、弥生時代中期末の土器が床面近くからまとまって出土した（第80図3・5～7・9・10）。埋土は土層図から3・5層がまず堆積したことがわかり、1・2・4層は縞状に堆積することから、堆積に時間がかかったものと推測できる。住居の中央には埋土に炭が多く混じる炉があり、その周りに径が30～40cm、深さ10cmの小ピットを4つ配す、位置と大きさがほぼ同じことから柱穴の可能性が高いが、炉に近いことは住居の構造的に見て支柱



第77図 54・55号竪穴住居跡 (1/60)・55号竪穴住居跡中央ピット実測図 (1/30)



第78図 56号竖穴住居跡実測図 (1/60)

穴と判断するには不安が残る。P5・6は屋内土坑であり、P6上面から甕の破片や台石が遺棄された状態で検出した(第80図2・12、第132図16)。

出土土器(図版48、第80図) 1は弥生土器甕蓋の頂部片で、P6出土。頂部は平坦で、外端部を突出させ、八の字状に口縁部へと伸びるもの。内面頂部付近はナデで、指押さえ痕が良く残る。その下はハケ工具による絞りにより調整を行う。頂部径6.9cmで、淡黄褐色を呈す。2は弥生土器の丹塗小型無頸壺胴部になるものか。P6出土。強く張る胴部中位よりやや上に最大径があり、径は20.0cmを測る。底部はやや上げ底で、底部径6.2cmを測る。外面には横方向のミガキを密に施し、その上に丹を塗布する。内面はナデで、胴部最大径付近には指押さえ痕がわずかに残る。外面にはススが付着し、内面はすべて黒変する。外は赤褐色～黒色、内は黒色。

3～9は弥生土器甕である。3の口縁部はくの字状にやや内湾しながら屈曲し、口縁端部を丸く収める。胴部がやや強く張り、最大径が高さ2/3のところにくるもの。胴部外面下部は摩滅しているが、縦ハケを施したものと考えられ、内面下部にはナデ上げ痕が残る。外は橙褐色～黄褐色、内は灰黄色褐色～橙褐色を呈する。4は小型の甕であり、短く直線的に外反する口縁部を持

つ。胴部がやや膨らむものの、ほぼ直線的な形態の器形になる。口径は19.6cmを測る。口縁部はやや内湾気味であり、上端部はやや上方につまみ出す。口縁から2.5cmほど下がったところに、2条の浅い凹線を一周させる。外面は全体的に摩滅し、調整は不明であるが、縦ハケを施したものか。外は暗黄褐色、内は黄褐色を呈する。5はやや口縁部が短く、屈曲が強いもの。端部は丸く収め、頸部外面には口縁部を最後に貼り付ける際に付いたと考えられる工具痕がある。口径26.7cmで、色は淡茶色。6はほぼ直角に屈曲する口縁部で、口縁端部はナデで面取りし、やや下方に垂れるもの。胴部はほとんど張らない器形になると考えられ、口縁より3cmほど下がったところに浅い1条の凹線が巡る。焼成はやや甘く、色は明褐色を呈する。7は胴部が強く張る器形で、胴部最大径は36.0cmを測る。外面は摩滅し、調整は不明であるが、胴部中位～下位にかけて指押さえ痕が残る。内面は板ナデ痕と指押さえ痕が残る。暗茶色を呈する。8は甕底部で、底部径9.4cmを測る。外面ハケが底部外端まで施される。内面には指押さえ痕が残り、外面には黒斑がある。色は黄褐色～灰黒色を呈する

9・10は大型甕口縁部である。いずれも住居中央の炉近くの床面に近いレベルで出土。9は強く張る胴部に、ほぼ水平のT字状の口縁部がつくもの。口径38.8cmを測る。口縁外端部はナデで面取りし、口縁部頂部は強いナデを施し、凹線状に窪む。口縁内端部は強く突出し、端部は丸く収める。頸部内面も強い横ナデで凹線状に窪む。胴部内面には指押さえ痕が残る。色は褐色を呈する。10は口縁部がくの字状に屈曲し、口縁端部をナデで面取りし、凹線状に窪む。口縁内端部はナデでやや内側に突出させる。口径41.3cmを測る。口縁部から2cmほど下がったところに、端部を上につまみ出す三角突帯を張り付ける。胴部内面には粗い横ハケが残る。

11・12は弥生土器高杯脚部片。11は円柱状の脚柱部で、外面には縦ミガキを密に施し、内面には細長い工具による絞りを行う。外面には丹塗りを施す。色は赤褐色～灰黄色を呈する。12は脚部が八の字に開くやや小形のもの。脚部外面には縦ミガキを密に施し、内面はナデ調整を行う。杯部内面にはハケが残るが、外面は摩滅のため不明。杯部内外面・脚柱部外面には丹塗りを施す。色は赤褐色～灰黄色を呈する。

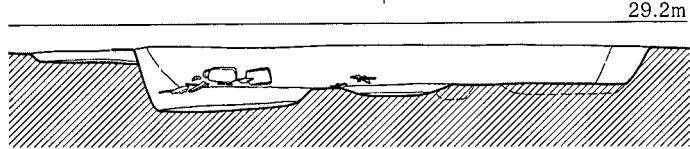
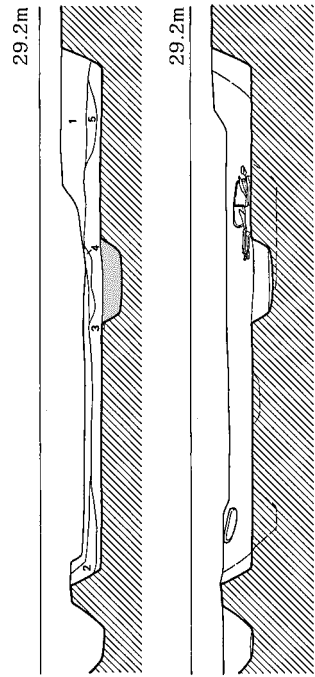
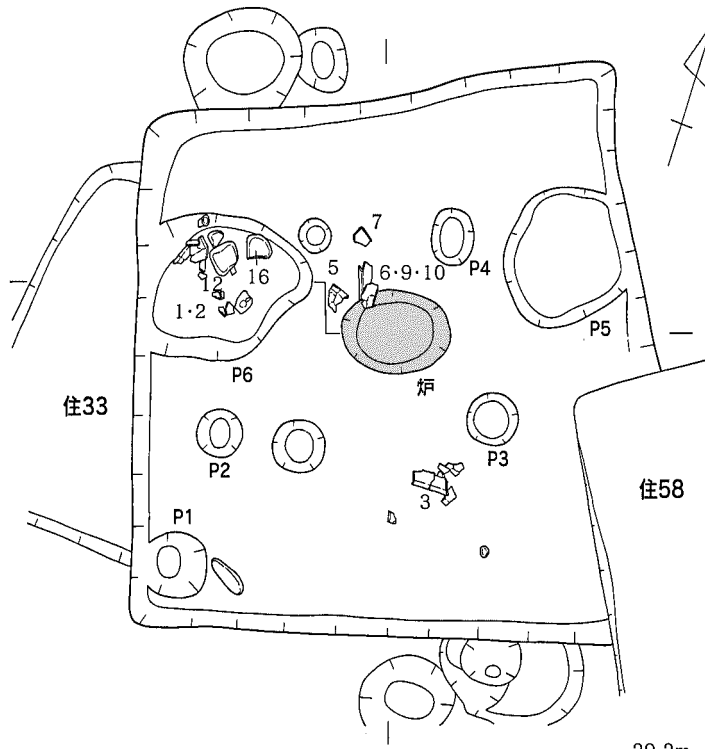
58号竪穴住居跡 (図版30、第79図)

1区中央よりやや東、57号住居跡東に位置する。36・59号住居跡に切られ、57号住居跡を切る。南北3.5m、東西5m以上の長方形の住居跡である。東壁で6cm残り、南壁のほとんどはトレンチのためなくなり、北壁は一部のみ残る。北壁中央ではピットの切り合いを間違え、先に住居跡を掘ってしまい、ピットと住居跡の土器が混ざってしまった。

床面では大小7基のピットを確認し、P1・2・4・7の4つのピットが支柱穴である。南側の掘り込みは第1面の遺構(34・35号住居跡)によるものである。埋土は明茶褐色砂質土。出土土器は弥生時代中期中葉～後期中葉のものであるが、4本柱の住居跡であることから中期末の住居跡と考えられる。

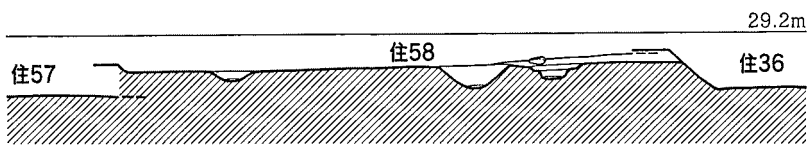
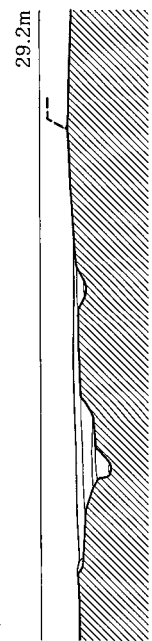
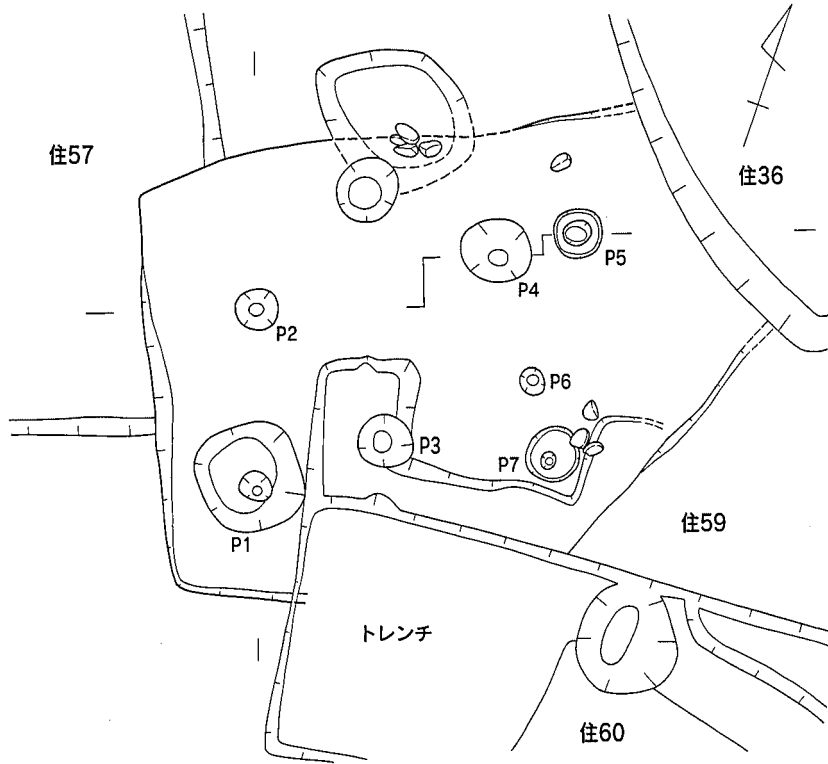
出土土器 (図版48、第83図1～10) 1は弥生後期中葉複合口縁壺口縁部である。くの字に強く屈曲する口縁部で、口縁端部はナデで面取りし、やや上方を向く。屈曲部には端部を下方につまみ出した突帯状の粘土紐を貼り付ける。このような形態は豊前地方出土土器に類例がある。外面は縦ハケを施し、内面屈曲部には指押さえ痕が明瞭に残り、横ハケも残る。外は橙色、内は灰黄色を呈する。

2～8は弥生土器甕である。2は口縁部がTの字状になるもの。口縁頂部はほぼ水平で、口縁内端面は胴部から緩やかに内湾しながら突出する。口径27.7cmであるが、小片のため径に自信がない。色は黄褐色を呈する。弥生時代中期前半のもの。3は口縁部が強く屈曲し、口縁端部は肥厚する。口縁外端部はナデで面取りし、凹線状になる。内端部は稜が明瞭である。口径28.6cmで

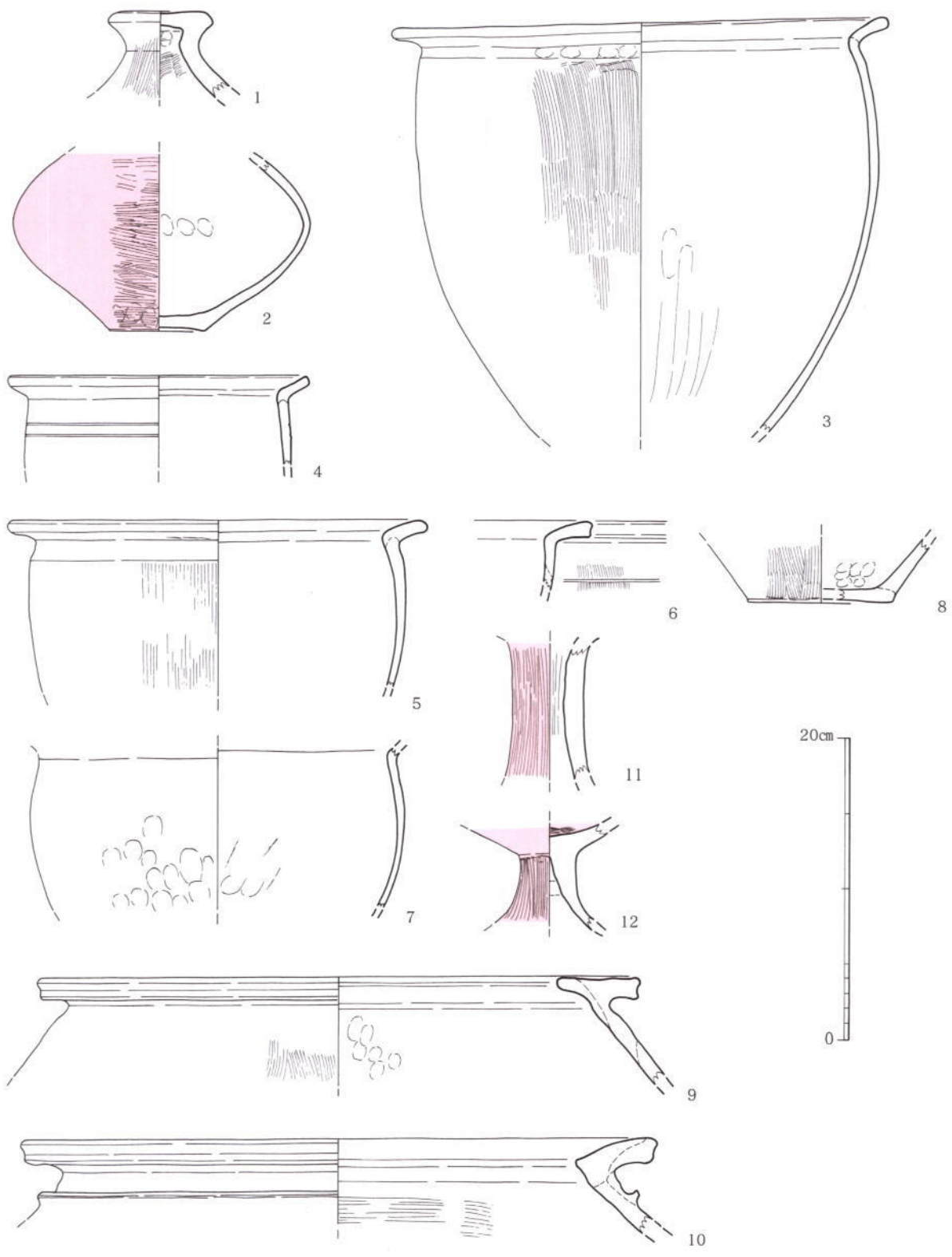


57

- 1. 暗黄灰色砂質土 (縞状に堆積)
- 2. 1より明るい
- 3. 黄灰色砂質土+明灰白色粘土ブロック
- 4. 1+2
- 5. 1のように縞状に堆積せず、3より暗い



第79図 57・58号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第80图 57号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

あるが、小片のため大きさには不安が残る。口縁部外面にはススが付着する。黄茶色を呈する。4はやや丸みを帯びながら屈曲する口縁部で、端部を丸く収める。口径34.3cmを測るが、小片のため径に自信がない。黄橙色を呈する。5は小型甕底部で、底部端部を外側に突出させるもの。底径は6.8cmを測り、外面にはハケ工具痕が残る。灰黄色を呈する。6はやや上げ底で、底径6.3cmを測る。外面は横ナデを施し、内面はナデ調整で、指押さえ痕が残る。外は明褐色、内は黄茶色を呈する。7は底径7.6cmを測り、外面には黒斑がある。色は黄褐色を呈する。8は7のようには底部外端部の稜は明瞭でない。底径は10.0cmで、外面外端部には指押さえ痕が残り、外面はややローリングを受けたと思われるほど摩滅が進む。内面はハケ調整を行い、工具痕とハケが残る。色は明褐色を呈する。

9は弥生土器鉢であり、口径12.9cm、器高8.3cm、底径5.8cmを測る。口縁端部は丸く、内外面は粗いハケ調整を行う。底部には幅3mmの板状圧痕が残る。外面には黒斑あり。灰黄橙色を呈する。10は鼓形の器台口縁部片である。口縁部内外面は横ナデを施し、端部はナデにより凹線状にやや窪む。内面には縦方向のナデ上げ痕が残る。色は黄褐色を呈する。

59号竪穴住居跡（図版30、第81図）

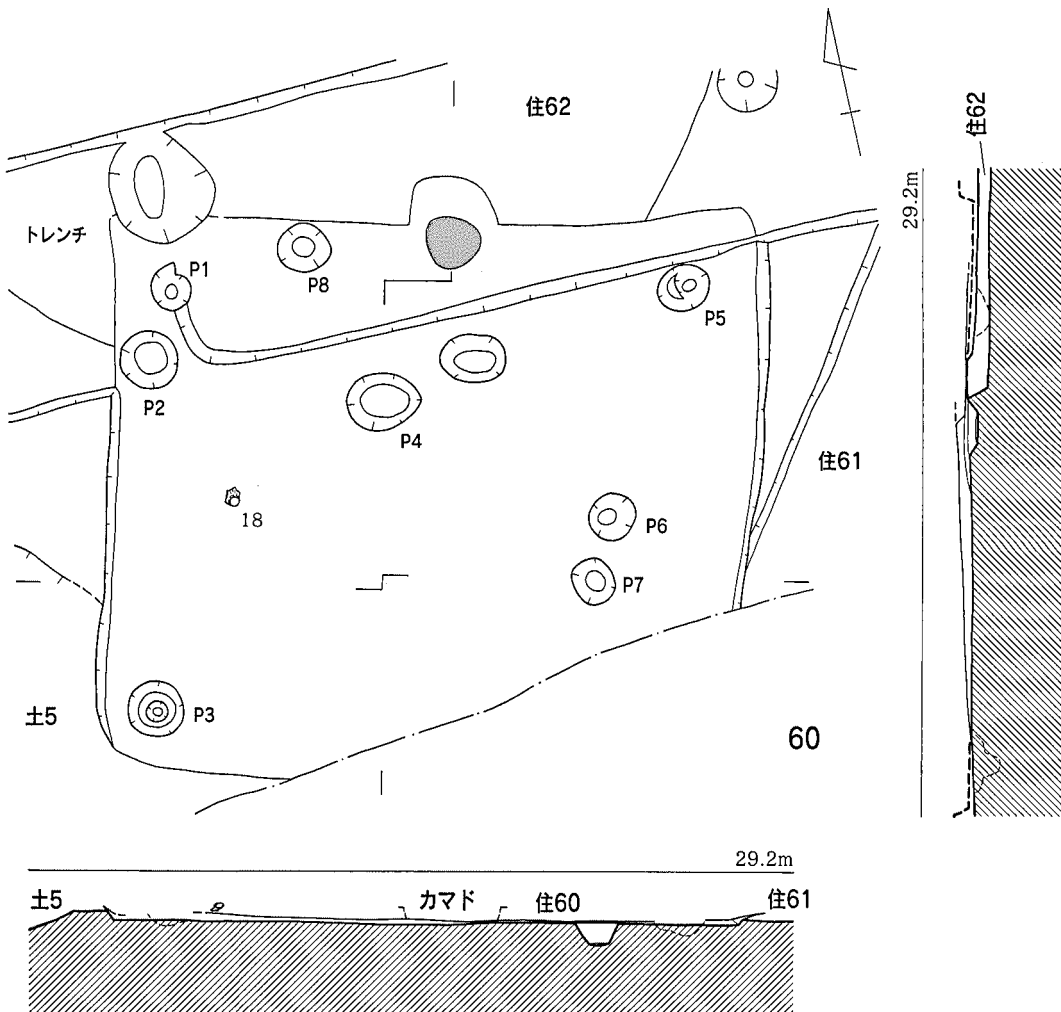
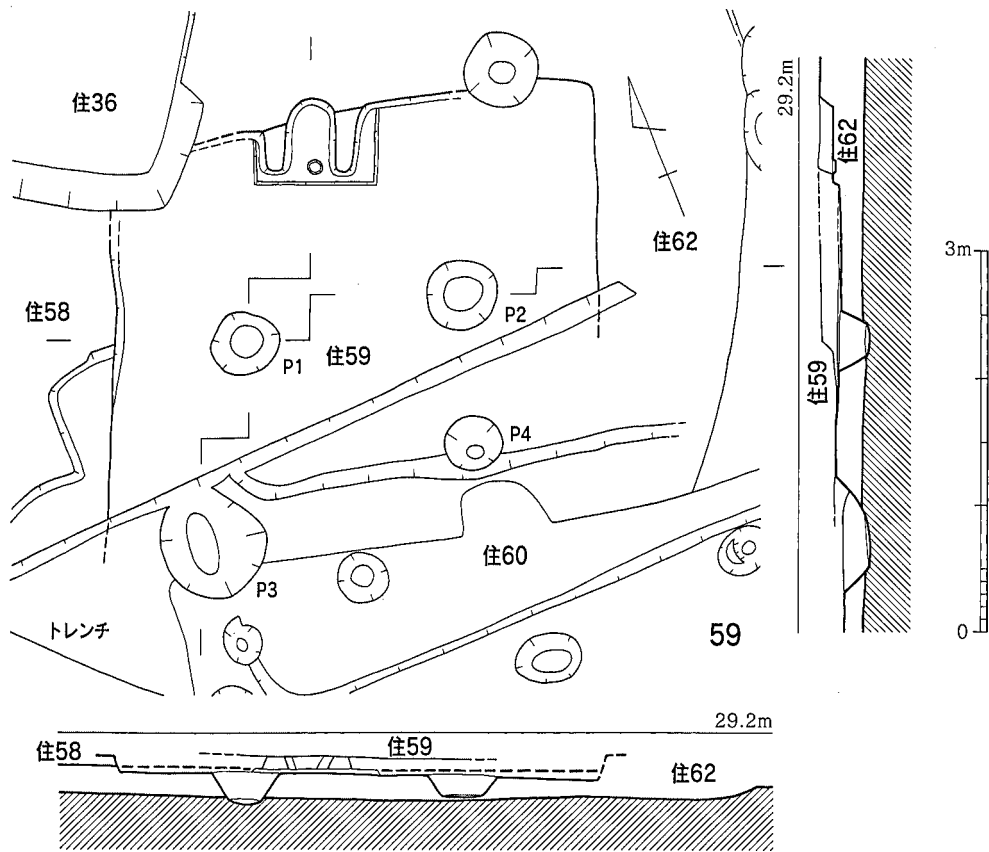
1区東中央よりやや南に位置し、58・62号住居跡を切り、主柱穴と考えられるピットが60号住居跡北西隅を切るような図面になるが、60号住居跡もトレンチにより下げすぎてしまったため、切り合いの前後関係は自信がない。遺構検出時に住居南・東側をかなり下げてしまったために、東壁は下端のみ、南側はトレンチのため床面下まで下げてしまった。住居の規模は南北2.6m以上、東西4mの住居跡で、埋土は暗黄褐色砂質土。

当初、床面ではP1・2のピット2基しか検出できなかったが、トレンチ内を精査すると主柱穴と思われるP3・4のピット2基を確認した。ピットの位置から住居の形態を推定すると、南北が4m前後の南北に長い住居跡になる。北壁中央よりやや西側にカマドを設置しているが、住居の床面を全体的に約3cm下げすぎてしまい、図面ではカマドが床面から浮いた状態になっている。住居の時期は8世紀初頭前後。覆土から磨石（第131図10・11）が出土。

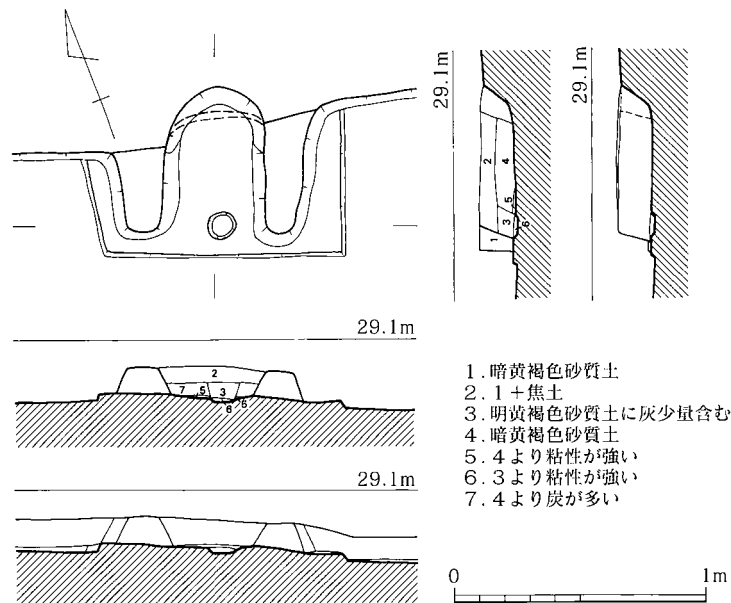
カマド（図版30、第82図）北壁やや西よりにカマドを確認した。前述したように、カマドが約3cm浮いている図面になっているが、カマドの床面の高さが本来の住居の床面レベル。袖は右袖で壁から50cm、左袖で35cm突出し、カマド奥壁が壁から10cm突出した図面になっているが、これは掘りすぎたもので、本来は点線で示すように壁とほぼ同じになるものと考えられる。袖間は支脚推定付近で32cmを測り、当初は石製の支脚を据えたものと思いき、径10cmの範囲で掘ったが、支脚抜き跡ではなく土のしみであった可能性が高いと判断した。焼面は確認できないが、両袖奥壁部は良く焼ける。住居の時期は古墳時代後期後半である。

出土土器（図版48、第83図11～15）11は鼓形の器台片である。外面下部は幅3mmのタタキを施し、その後縦ハケを施す。内面には板状工具による絞り痕が残る。色は黄褐色を呈する。12は土師器甕で、強く外湾する口縁下端部を外側につまみ出す。内面は頸部付近までヘラケズリを施す。口径は20.3cm、胎土には細粒多く含み、色は橙褐色を呈する。

13は須恵器杯蓋片で、宝珠つまみが残るもの。焼成は不良で、色は淡灰色。14は高台付の須恵器杯身である。杯部はゆるやかに内湾しながら立ち上がり、高台部はやや高く、端部は外方につまみ出す。焼成後、打ち欠きを行っている。杯部底部にはヘラ状工具による葉状のヘラ記号がある。底径7.8cmで、色は灰色を呈する。15は須恵器高杯脚裾部である。底部端部はナデで面取りし、弱い凹線状になる。底径14.2cmを測るが、小片のため大きさには自信がない。外面には自然釉が付着する。外は暗灰色、内は灰色を呈する。



第 81 図 59・60 号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第82図 59号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

1. 暗黄褐色砂質土
2. 1+焦土
3. 明黄褐色砂質土に灰少量含む
4. 暗黄褐色砂質土
5. 4より粘性が強い
6. 3より粘性が強い
7. 4より炭が多い

60号竪穴住居跡 (図版31、第81図)

1区東南端に位置し、61・62号住居跡、5号土坑を切る住居跡であるが、59号住居跡との切り合いの前後関係は自信がない。住居跡北側は試掘トレンチを掘る際に、住居を検出できず、床面から約3cm下げすぎてしまい、かまどの焼面の痕跡と住居下端の痕跡のみ検出したが、この部分の住居の範囲についてはやや不安が残る。住居跡の東南隅は調査区外まで延び、壁は東・西壁で7cm残り、南壁は下端のみ確認した。住居の規模は南北4.4m×東西5.1mになる。

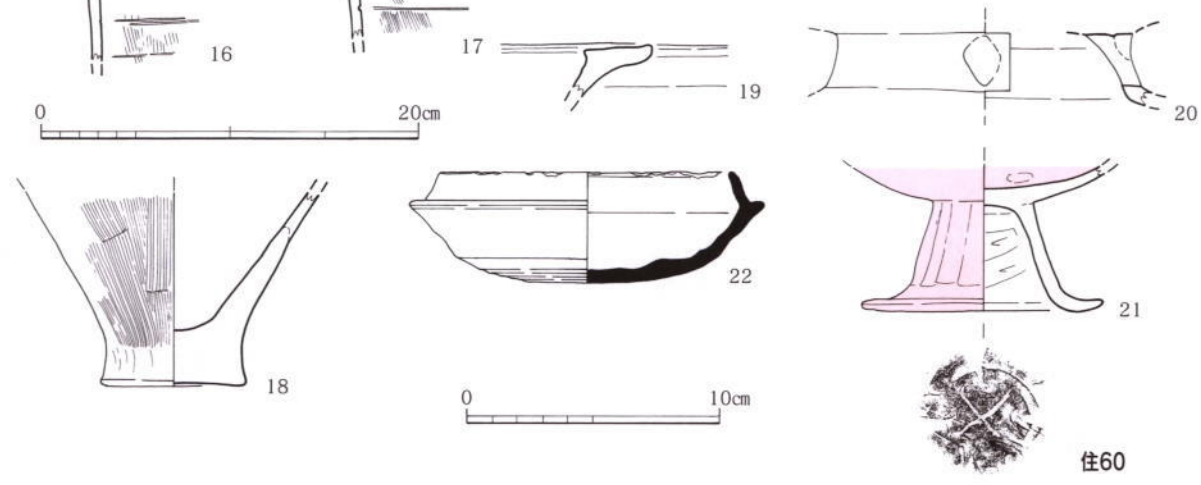
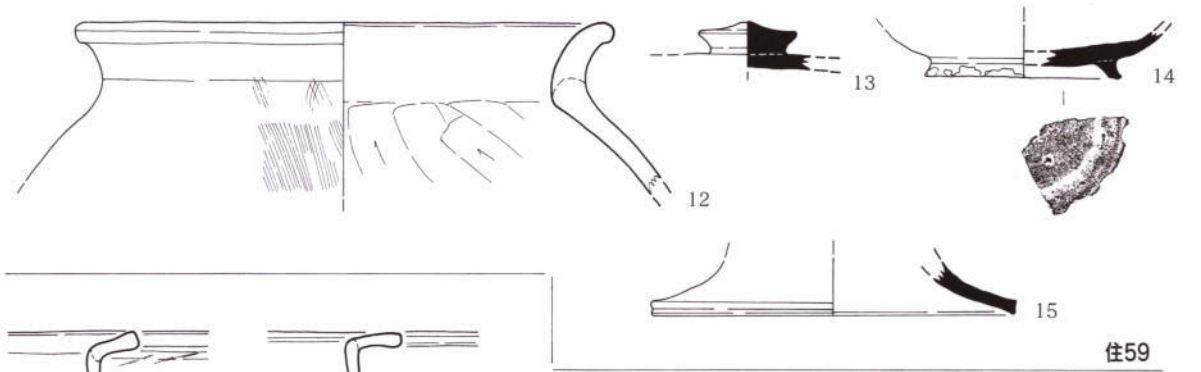
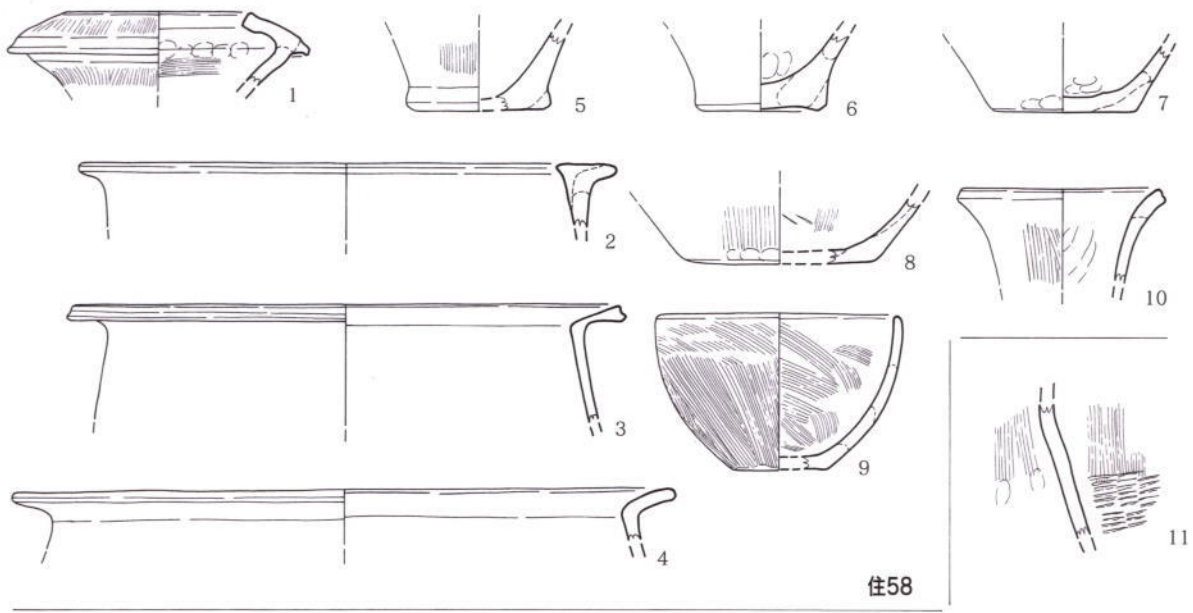
住居の床面では大小7基のピットを確認し、P3・5は支柱穴と考えられる。P1は位置は良いが浅いため、支柱穴とするには不安。住居北壁中央でカマド焼面の痕跡のみ検出し、壁から突出するタイプのカマドと推定されるが、北壁がもう少し北に延びれば、壁の中に収まるカマドになるために断定できない。

出土土器 (図版48、第83図16～22) 16～18は弥生土器である。16は甕口縁部で、直立する胴部に、短く強く外折する口縁部を持ち、端部は上方につまみ上げたために、やや内湾する。頸部外面にはハケの際の工具痕が残り、口縁部から3cmほど下がったところに2条の浅い凹線が巡る。上の凹線はちょうど継ぎ目部分であり、一部2条になる。下の凹線は残存部分が少ないため、全周するかどうかは不明。外は灰黄褐色、内は淡橙褐色を呈す。17はほぼ直角に屈曲する甕口縁部で、口縁頂部はほぼ水平なるが、端部はやや下方を向くもの。口縁外端部はナデで面取りし、口縁から2cm下がったところに浅い1条の凹線を巡らす。色は灰黄茶褐色を呈する。18は厚さ3cmと厚い甕底部で、底径は7.7cmを測る。底部外端部は縦ハケのち強い横ナデを施す。胴部外面には2次加熱痕が認められ、底部内面には炭化物が沈着する。胎土は良く、灰黄褐色を呈する。19は高杯口縁部で、口縁内端部をわずかに張り出させたもの。口縁外端部はわずかに上方につまみ出す。内外面とも横ナデ調整で、色は黄橙褐色を呈する。

20は土師器高杯脚部の柱状部片である。柱状部中央にはヘラ状工具で半乾燥時に切り取った、菱形の透かし孔が4ヶ所回ると考えられるが、現在は1ヶ所のみ残る。脚部接合部は擬口縁になり、この上に杯部が付いたもの。焼成はやや甘く、橙褐色を呈する。21は土師器高杯であるが、スリップ状の赤褐色の顔料を脚部内面以外塗布するもの。脚部外端面は強く上がるもので、脚柱部内面の杯部との接合面にはヘラ状工具による「×」状のヘラ記号を施す。脚柱部外面はヘラナデ、内面はヘラケズリを施す。杯部はいずれもナデ調整。胎土は精良で、色は赤褐色～淡橙褐色。

61号竪穴住居跡 (図版31、第84図)

1区東南隅、62号住居跡南に位置し、60号住居跡に西壁の一部を切られる。住居の南半分は調査区外であり、現状では三角形状しか確認できなかった。トレンチにより住居北東隅が切られる。埋土は暗黄灰色砂質土で、住居の深さは8cmと残りは悪い。住居床面からは大小5基のピット



第83図 58～60号竪穴住居跡出土土器実測図（12～15・20～22は1/3、他は1/4）

トを確認した。P 1 は径 1 m、深さ 25 cm と大きく、炉の可能性も考えたが、埋土は住居埋土と同じであったため、炉でないと判断した。その他のピットは小さい。出土土器はいずれも小片のため、図示できるものはない。

62 号竪穴住居跡 (図版 31、第 85 図)

1 区東、中央よりやや南に位置する。上層には 36・58～60 号住居跡があり、76 号住居跡を切る。上層の住居跡のため、壁は北東部で 15 cm と北西部で 5～10 cm 残存する以外は下端のみ確認した。この下端部分で計測しても、南北 8.1 m、東西 8.3 m、面積 56 m² の大型の円形住居跡になる。埋土は地山よりやや暗い暗黄褐色砂質土で、床面付近は砂性が強くなる。

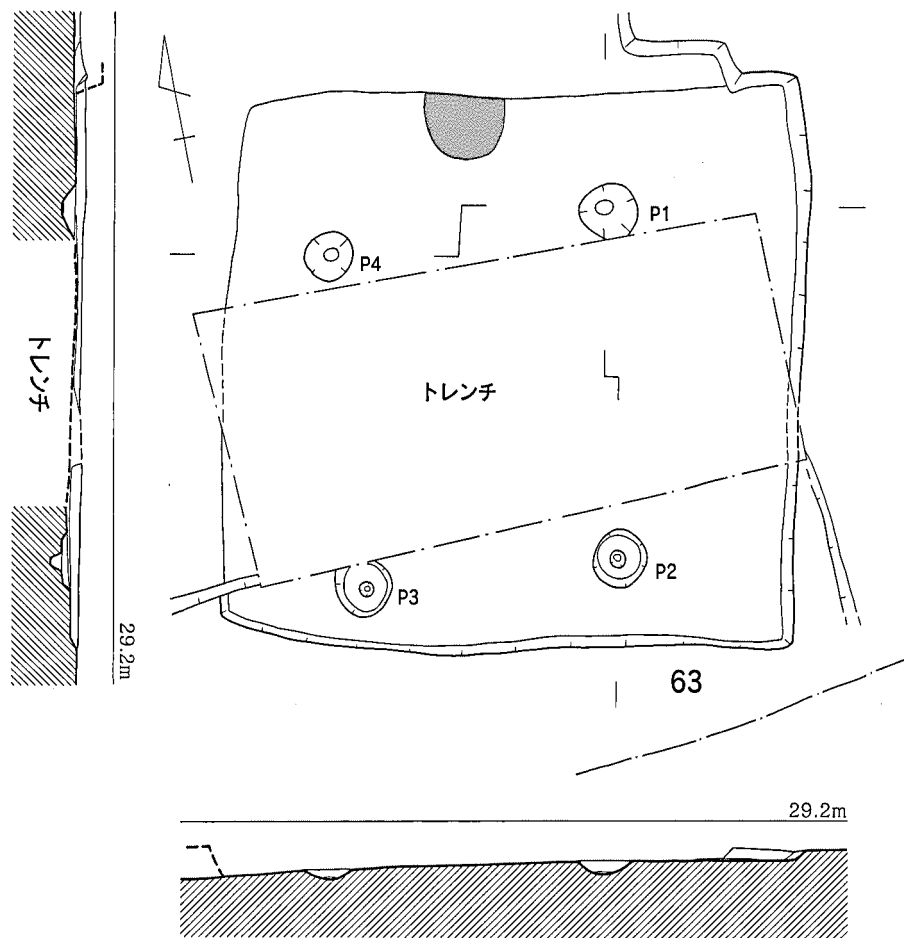
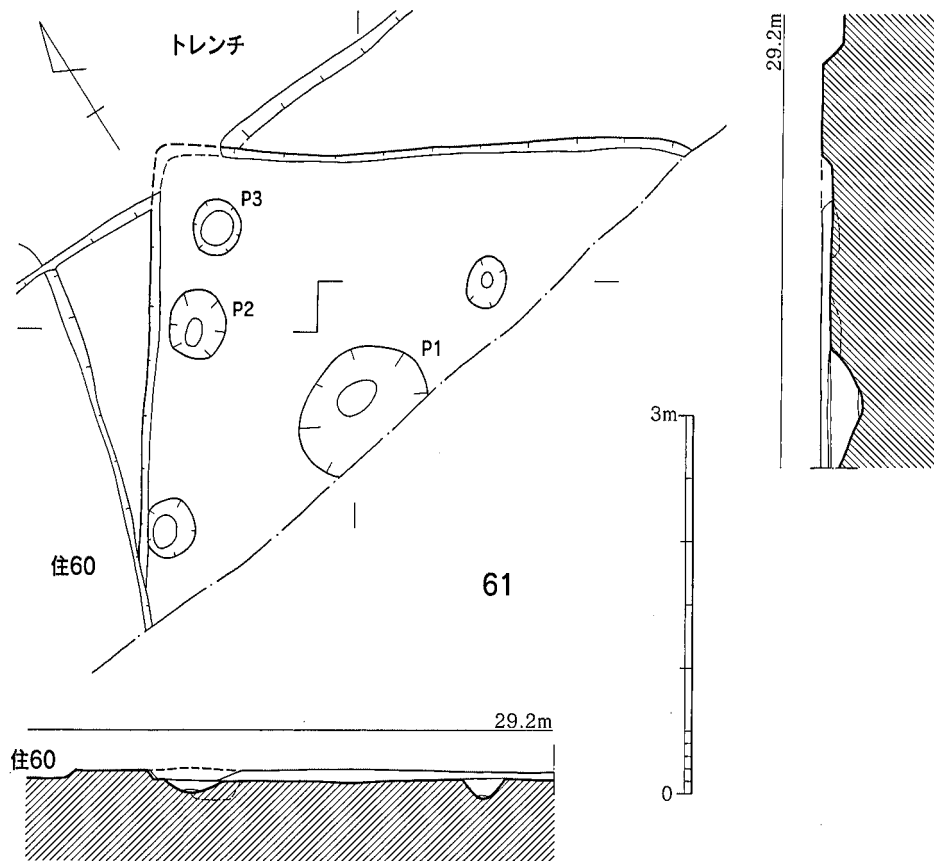
床面から 46 基もの大小様々なピットを検出したが、上層に住居跡が切り合って存在すること、また土師器甕の出土から (第 86 図 17)、このピット群のいくらかは上層の掘り残しのピットの可能性があるが、多数がこの住居跡に伴うものと思われる。南北 105 cm×東西 83 cm の P 18 を中心に主柱穴群は三重に配置される。7 基の柱穴から構成される内主柱穴群は深さが 30 cm～50 cm の深いものが多いが、P 18 から最も近いもので、約 30 cm しか離れておらず、住居構造的に疑問が残る。中主柱穴群は 7 基のピットから構成され、深さが 15～25 cm まで存在する。内主柱穴群と中主柱穴群は P 24・25 で約 10 cm と近接することから、同時に主柱穴としていた可能性は低く、時期差があるものと考えられる。外主柱穴群は 12 基のピットが壁に沿って検出できたが、北西部で全く検出できなかった。非常に埋土と地山の区別が難しかったため、主柱穴を検出し逃した可能性がある。外主柱穴群も浅いものもあるが、20 cm を越す、比較的深いものが多い。また柱痕を検出したものも存在する。

管見では二重に主柱穴が巡るものは、比恵遺跡 50 次 S C 114・109 など大型円形住居跡に存在するが、三重というのは担当者の力不足もあるが類例を探せず、また住居構造的にも問題が残ると考えられ、住居の建て替えの可能性も考えた方が良いでしょう。北東部の壁沿いに 1.5×1.2 m、深さ 55 cm の大型の屋内土坑を確認した。覆土から多くの土器が出土し、出土土器から弥生時代中期後半でも古相の様相を呈する。住居覆土から石包丁 (第 127 図 16) が出土。

出土土器 (図版 48・49、第 85・86 図 19～23) 住居覆土出土土器 (第 85 図 1～18) と屋内土坑出土土器 (第 86 図 19～23) に分けて報告する。

1～4 は弥生土器壺である。1 は広口壺口縁部である。頸部からゆるやかに外反する口縁部で、口径 32 cm を測る。口縁端部はナデにより凹線状に窪む。口縁部外面には横ミガキのち、12 条前後を基本とする分割暗文を放射状に施す。内面は摩滅しているが、横ミガキがわずかに残る。細粒が比較的多く、色は橙褐色を呈する。摩滅のため、丹塗りが全く残っていないが、もともと塗布したものか。P 20 出土。2 は鋤先口縁の壺口縁部。ほぼ直立する胴部に、水平に屈曲する口縁部を持ち、内面には粘土を貼り付け、内側につまみ出す。口径は 26 cm を測る。口頸部内面には工具痕が残り、板ナデ後、横ナデを施したもの。色は黄褐色を呈する。3 は壺底部で、外面には丹塗りが残る。上半部は欠損するが、焼成後に内側から穿孔する。底径は 8.4 cm で、色は赤褐色～黄橙色を呈する。

4 は強く胴が張る大型の甕口縁部で、口縁外端部付近でほぼ水平になる。外端部はナデで面取りし、口縁内端部の稜は明瞭である。色は灰黄褐色を呈する。5～8 は弥生土器甕口縁部である。5 は胴部が張る器形であり、口縁部は強く外折する。口縁外端部は肥厚させ、丸く収めるもの。外面口頸部はナデにより凹線状に窪む。口径は 32.2 cm であるが、小片のため大きさには自信がない。胎土は比較的良く、色は暗黄茶褐色を呈する。6 は小型の甕で、短く、くの字状に外折し、端部が肥厚する口縁部。口径は 21.0 cm を測る。やや胴部上位に胴部最大径が来て、胴部頸部付近は縦ハケのち横ナデを施す。胴部内面には指押さえ痕が残る。灰黄褐色を呈する。P 20 出土。7 は



第84図 61・63号竪穴住居跡実測図 (1/60)

ほとんど丸みを帯びない胴部から強く短く外折する口縁部で、端部はナデで面取りする。口径は25.9cmを測る。外面には薄くススが付着する。外は灰黄茶褐色、内は暗橙褐色を呈する。8はやや胴部上位が丸みを帯びた甕で、くの字状に屈曲する口縁部が付く。口縁端部はナデで面取りし、端部上方をつまみだす。頸部外面は強い横ナデにより、凹線状に窪む。口径は26.2cmを測る。色は橙色を呈する。9は平底の甕底部であるが、鉢の可能性もある。底径は10.5cmと大きく、厚さ1.0cmの比較的薄い造り。胎土は細粒多く含み、色は灰黄褐色を呈する。P 15出土。10は底径6.7cm、底部の厚さが2.9cmと厚い底部を持つ。底部端部近くまで縦ハケが残る。外は赤褐色、内は灰黄色を呈する。弥生時代中期前半のもの。11はやや上げ底の底部で、底部端部は強い横ナデで縦ハケ痕を消す。底径6.8cmを測る。内面には工具痕が残る。色は淡黄褐色を呈する。12は底径が8.3cmで、底部端部が持ち上がり、やや凸底を指向するものか。胴部は底部から、ややゆるやかな角度で立ち上がる。底部外面端部近くまで縦ハケを施し、内面には指押しえ痕が残る。外は橙褐色、内は灰黄褐色～灰黒色を呈する。P 16出土でP 16自体が上層のピットであった可能性がある。13は底径10.8cmのやや大きな平底から、胴部が内湾しながら立ち上がる。鉢底部の可能性もある。底部外端部にはヘラナデの際の工具痕が、底部内面には指押しえ痕が残り、最後は内外面ともナデ調整。胴部外面には薄くススが付着し、内面にはコゲ状の炭化物が付着する。外は黄褐色、内は灰黒色を呈する。

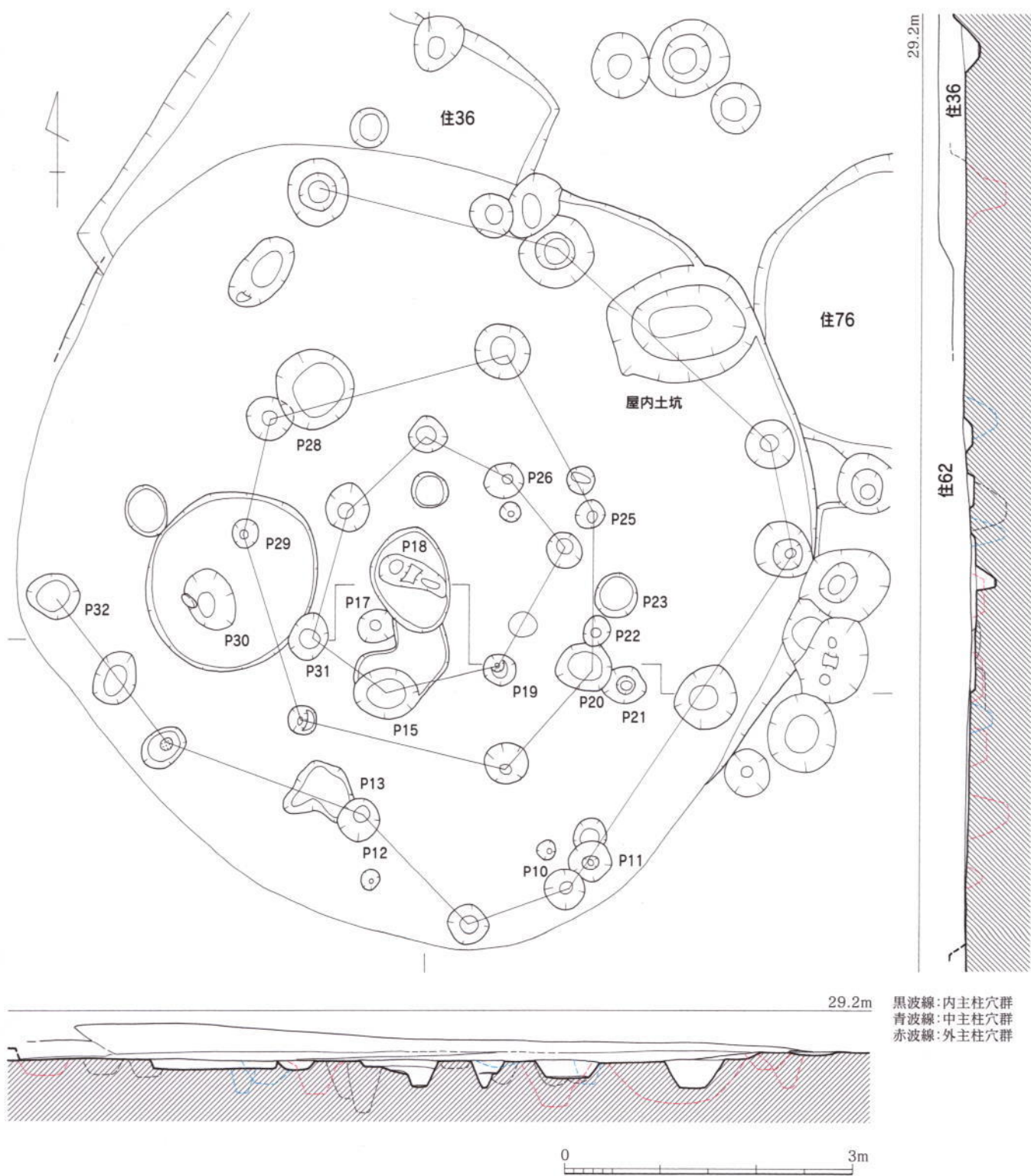
14は鉢口縁部。甕口縁部と同様のほぼ直角に外折する口縁部を持ち、口縁端部はナデで面取りし、端部上方をつまみ出す。口径は29.6cmを測る。胴部は下方ほど丸くなり、胴部が張らず、最大径は頸部にある。外面には2次加熱痕とススが付着する。外は暗褐色～赤褐色、内は灰黄褐色～赤褐色を呈する。P 15出土。15は小型の鉢で、口縁端部は丸く収め、やや内傾する。口径は15.6cmを測る。内外面ともハケ調整。灰黄褐色を呈する。16は鼓形の器台の口縁部で、端部はナデで面取り。外面は縦ハケ、内面は横ナデで調整。色は灰黄褐色。

17は土師器甕で、上層からの混入。外面は丸底の底部までハケで調整し、内面はヘラケズリを施す。外面には2次加熱による赤変とススが付着し、内面は全体的に黒化する。底径は7.9cm、最大胴部径は12.6cmを測る。色は赤茶褐色～黒褐色を呈する。18は籠目土器の鉢胴部片である。残存高は2.5cmで、胴部でもやや上部に近い部位の破片である。11段ほど網目が残り、下7段は粗い網目、上4段は下の網目の間の縦に1本足し、密な網み方になる。いずれも横方向にジクザクになり、また編み目部分が窪むことから、籠に押し付けて成形したものである。内面は下部は縦ナデ、上部は横ナデで調整。外は黄橙褐色、内は橙褐色を呈する。

この土器は福岡県内では、築上郡大平村上唐原遺跡第4層包含層、朝倉郡夜須町出口遺跡3号住居跡、福岡市早良区西新町遺跡12次調査144号住居跡について4例目の出土となる。形態的には上唐原遺跡例（口径15.0cm、器高7.1cm、底径3.7cm）に似る（上唐原遺跡例は、口縁部が玉縁状に肥厚し、底部から胴部にかけては四隅をもつ。下半分の18段目は目が粗く、上半分の19～23段目は縦方向に縦ヒゴを2本増した網み方になり、縁は螺旋状に巻いた籠に押し付けて整形したもの。古墳時代前期の住居跡が付近には存在する）。

この籠目土器は庄内式～布留式併行期に、畿内系土器の全国への拡散に伴って西日本～関東まで広がるものと考えられており、福岡県内の3例ともいずれも古墳時代前期の土器に伴い、62号住居跡は出土土器から弥生時代中期後半古相と考えられることと大きく離れる。このことからこの土器は覆土内出土であるが、周辺の74号住居跡、12号溝で庄内式・布留式併行期の土器がある程度まとまって出土することから、混入の可能性が高い。

19～23は屋内土坑覆土出土土器である。19～20は弥生土器壺である。19は壺口縁部。外傾する口縁部で、端部は外反する。口縁部内面に粘土紐を貼り付け、端部をやや上方に向けて突出させる鋤先口縁が見られるもの。口径は25.0cmを測る。内外面とも横ナデで調整し、内面には指



第 85 図 62 号竖穴住居跡実測図 (1/60)

押さえ痕が残る。胎土は比較的良く、色は淡橙褐色～灰黄色を呈する。20は胴部上位が最大径の壺胴部で、最大胴部径は32.6cmを測る。胴部は強く張り、胴部最大径の上は横ナデにあり弱い凹線状になる、M字状の突帯が2条巡る。内外面ともナデ調整。19と同一個体になると考えたが、胎土・焼成・頸部径も異なることから同一個体ではない。色は黄橙褐色を呈する。21は壺胴部である。肩が強く張るもので、胴部最大径26.4cmを測る。弥生時代中期の壺とするには違和感があるが、胴部最大径が胴部上位にくる広口壺の一種と考え、報告する。外面には摩滅が進むが、丹塗りの痕跡がわずかに残る。内面頸部付近は指押さえ痕があり、内面全体黒変する。外は灰黄褐色～赤褐色、内は黒色を呈する。22は弥生土器甕底部で、やや上げ底の底部端部はやや外側に突き出すもの。底部端部付近は縦ハケのち横ナデ、内面には指押さえ痕が残る。外面胴部にはススが付着し、内面には炭化物が全体的に付着する。底径6.9cmを測る。外は黄茶褐色、内は赤茶褐色を呈する。23は鋤先口縁の高杯杯部であり、口径29.1cm、深さ6.0cmを測る。口縁部がわずかに下に傾き、外端部はナデで面取り、内面には粘土を貼り付けて、内側につまみ出し、口縁部を形成する。外面は摩滅が進むが、横ミガキがわずかに残り、内面には幅5cmほどを単位とする横ミガキを施す。口縁頂部にも幅5cmほどを単位とする放射状に暗文を施す。内外面には丹塗りを施し、色は赤褐色～橙色を呈する。

63号竪穴住居跡（図版32、第84図）

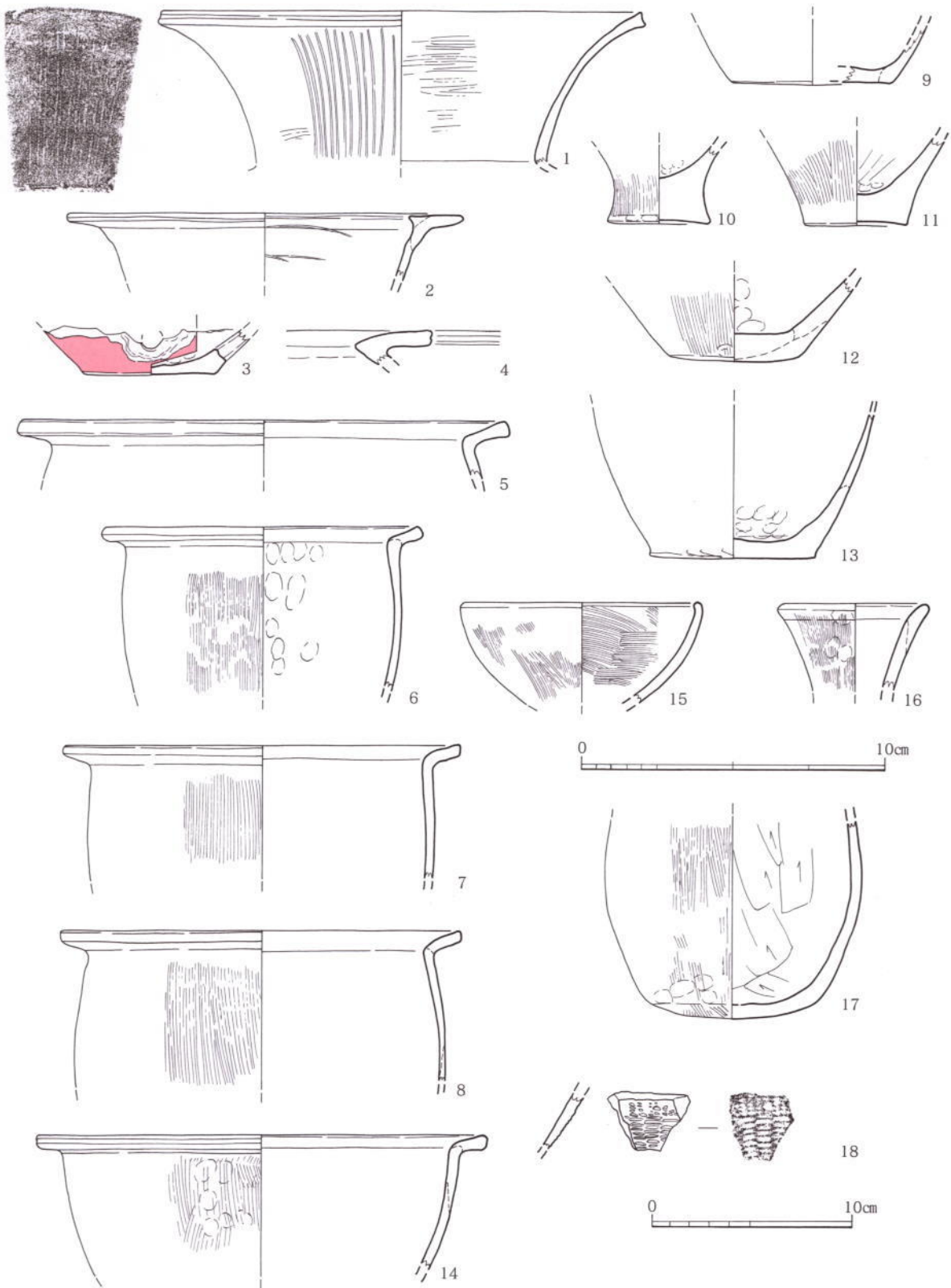
1区南東隅、62号住居跡東に位置する。住居跡中央に試掘トレンチを入れ下げてしまい、また遺構検出の際に北・西側を下げすぎてしまったため、北・西壁は下端しか検出できなかった。住居の規模は南北4.4m×東西4.6m、面積推定20㎡で、埋土は暗茶褐色砂質土。北壁中央にカマドが付設されるが、下げすぎたため焼面のみ検出した。カマドの袖が壁から長く突出し、住居内に収まる形態のカマドとなるか。住居の壁は南壁で8cm、東壁で7cm残る。住居床面からは4基のピットを検出した。いずれも深さが浅いが、位置から支柱穴と考えられる。P2・3は径10cmの柱痕跡を確認した。上層に第1面38号住居跡があり、本住居跡はその下層にあたることから、7世紀前半に位置づけられる。P1からくさび形石器（第126図2）が出土。

出土土器（第87図24～26） 24は小型の高台付土師器杯である。底径は8.8cmを測るが、小片のため径に自信がない。高台は低平で、端部を外方につまみ出した形態のもの。外は橙褐色、内は灰黄褐色を呈す。25は須恵器杯蓋で、色は暗灰色を呈す。26は高台付須恵器杯身である。低平な高台で、底径10.0cmを測るが、小片のため径に自信がない。焼成は甘く、色は暗黄茶褐色を呈す。混入品か。

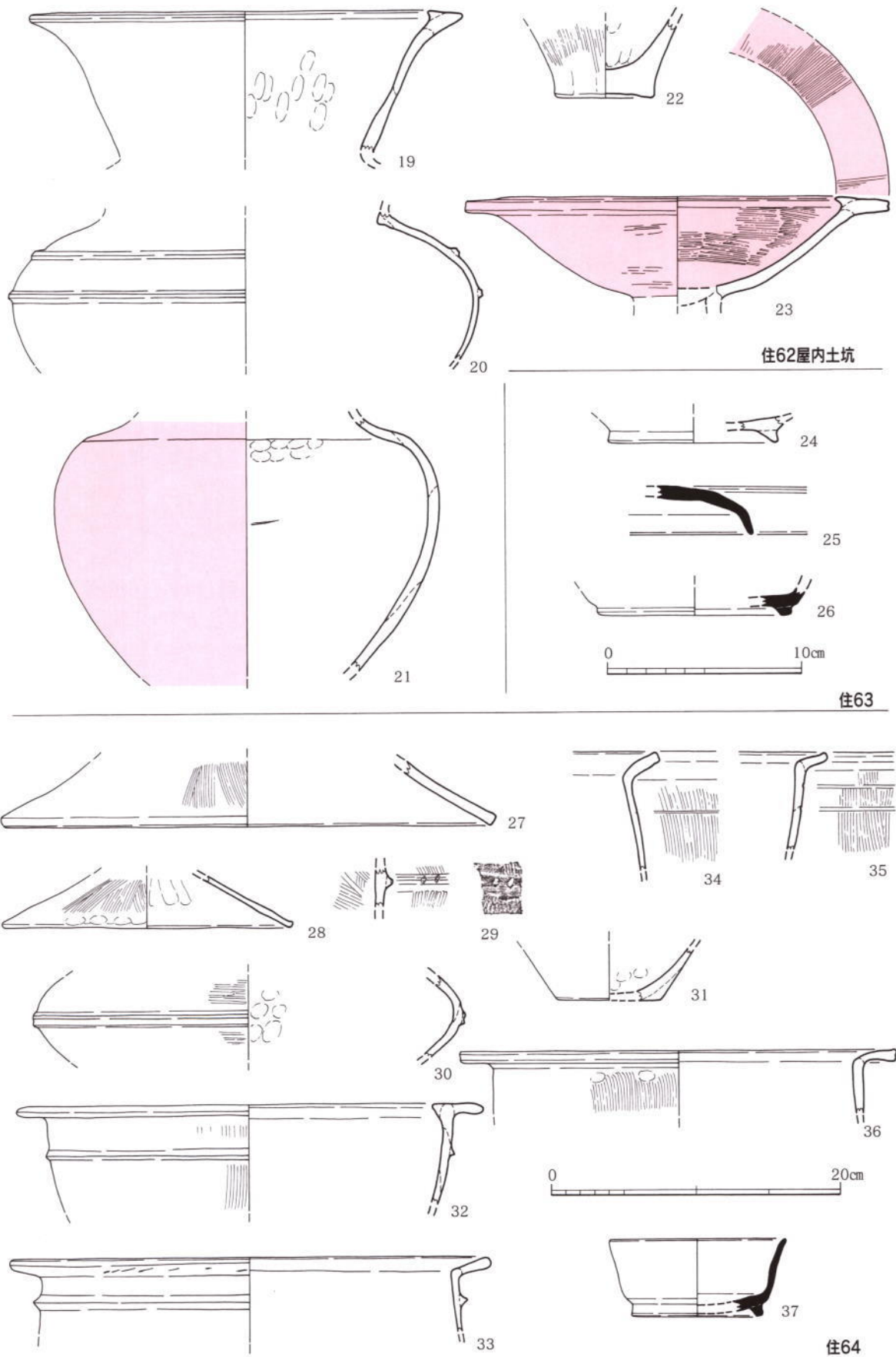
64号竪穴住居跡（図版32、第88図）

1区西端、中央よりやや南、3号円形周溝状遺構の東に位置する。3号円形周溝状遺構を住居跡南西隅でわずかに切り、住居西側は調査区外まで延びる。住居は南北3.7m×東西4.2m以上の長方形住居で、壁が全体的に15cm前後残り、埋土は茶褐色砂質土。床面には6つのピットを検出した。P4は住居中央に位置し、埋土には炭が混じっていることから、炉として使用されたもの。P1・3は深さ40cmの支柱穴となる。P2は深さが25cmあるが、埋土がP1・2とはやや異なり、形態からも屋内土坑の可能性がある。このことから本住居跡は4本柱の住居跡になると考えられる。35・36はP1出土。出土土器から弥生時代中期後半でも古い様相の住居跡となる。覆土からくさび形鉄器（第135図1）が出土。

出土土器（図版49、第87図27～37） 27・28は八の字状に開く弥生土器蓋片である。27は径が34cmを測るが、小片のため径に自信がない。口縁端部はナデで面取りし、外面にはハケ目が残る。色は黄橙褐色を呈する。28も小型の蓋で、径が20.0cmと小さい。ほぼ直線的に開き、端



第86図 62号竪穴住居出土土器実測図 (17・18は1/3、他は1/4)



第87図 62(屋内土坑)～64号竪穴住居跡出土土器実測図(24～26、37は1/3、他は1/4)

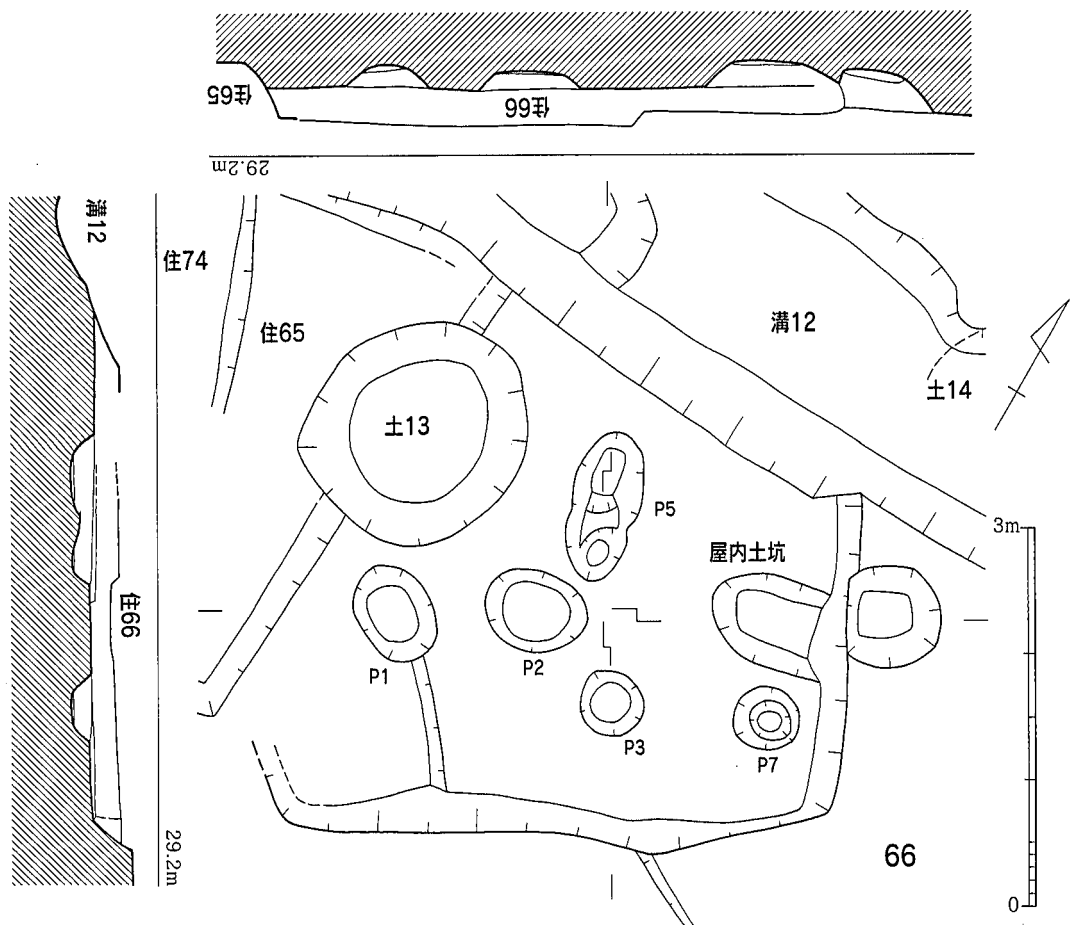
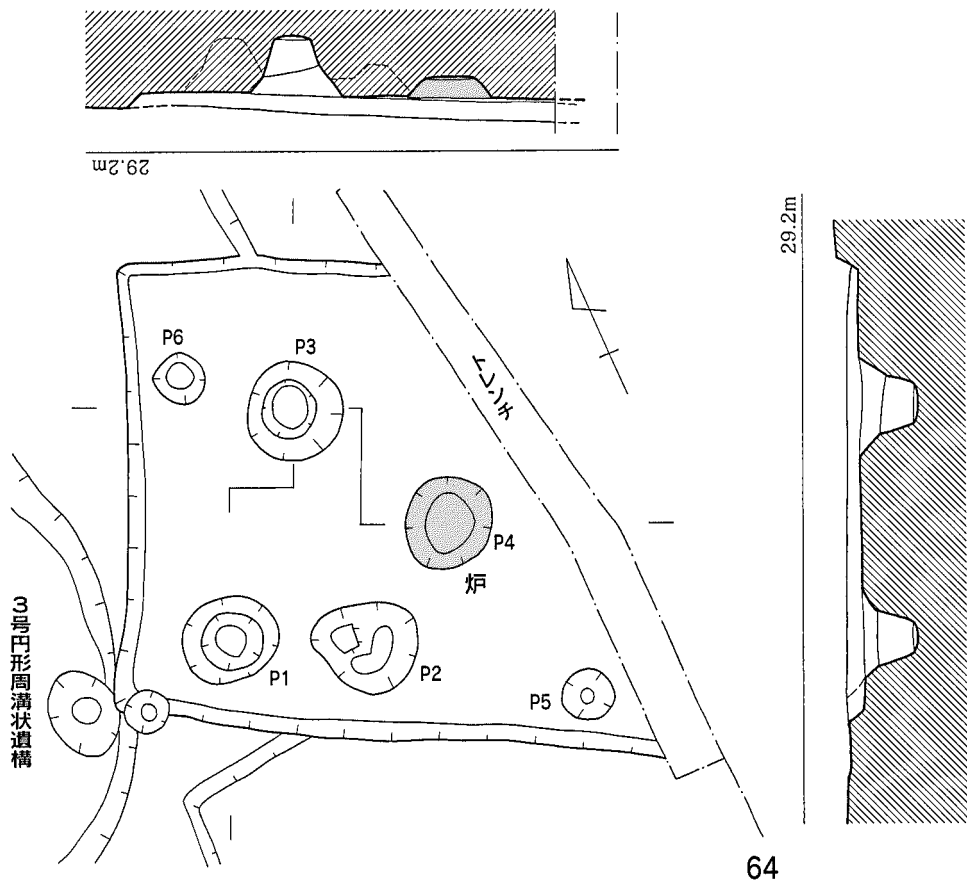
部は丸く収める。内面にはナデ上げ痕が残る。外面の一部が黒化する。色は灰黄褐色を呈す。29は弥生後期壺胴部片。縦ハケのち、外面に低い三角突帯を貼り付け、突帯頂部をハケ工具で5mm間隔に刻むもの。色は黄茶褐色を呈する。30は強く屈曲する壺胴部片で、最大胴部径が胴部中位にあり、29.6cmを測る。最大胴部径付近の胴部外面にはナデにより凹線状に窪めた1条のM字状突帯を貼り付ける。外面は摩滅するが、横ミガキが残り、内面には指おさえ痕が残る。胎土は細粒を比較的含まない。色は橙褐色を呈する。31は壺底部で、外面は摩滅のため、調整不明。内面はナデ調整で、指押さえ痕が残る。色は暗黄茶褐色を呈する。32～36は弥生土器甕口縁部片。32はT字状の鋤先口縁で、口縁外内端部はいずれもつまみ出したもので、口径32cmを測る。口縁部から2.5cm下がったところに、端部をやや下方につまみ出した三角突帯を貼り付ける。胴部は内湾し、最大径は突帯付近にある。外面のみ器表が荒れるため、火を受けている可能性がある。色は淡橙褐色を呈する。33は強く屈曲する口縁部をもち、口縁端部は肥厚させ、丸く収めるもの。口頸部外面にはハケ調整の際の工具痕がわずかに残る。口縁から2cmほど下がった場所に三角突帯を張りつける。色は橙褐色～灰黄褐色を呈する。34・35は、いずれも口縁部下に凹線が巡るもの。34はくの字状に外折する口縁部で、口縁外端部はナデで面取りし、口縁下3.5cmには1条の浅い凹線が巡る。内面頸部付近には炭化物が付着する。色は灰黄褐色を呈する。35は34より胴部が直立するものの、胴が張らないタイプの甕で、口縁部が短く強く屈曲する。口縁端部は上方につまみ出し、口縁部下2cmほどやや太めの凹線が2条巡る。外面にはススが付着する。胴部外面の器表が荒れるため、火を受けた可能性がある。色は外は灰褐色、内は橙褐色を呈する。P1出土。36は直立する胴部に、水平まで外折する口縁部が付く。口縁端部はナデで面取り、口縁外上端部は上につまみ出す。口頸部外面にはハケ工具痕が残る。色は黄橙褐色を呈する。

37は高台付須恵器杯身で、上層からの混入である。口径9.0cm、器高4cm、底径6.8cmの小型の杯身で、やや外反気味の口縁部を持つ。焼成はやや甘く、色は暗灰黄褐色を呈する。

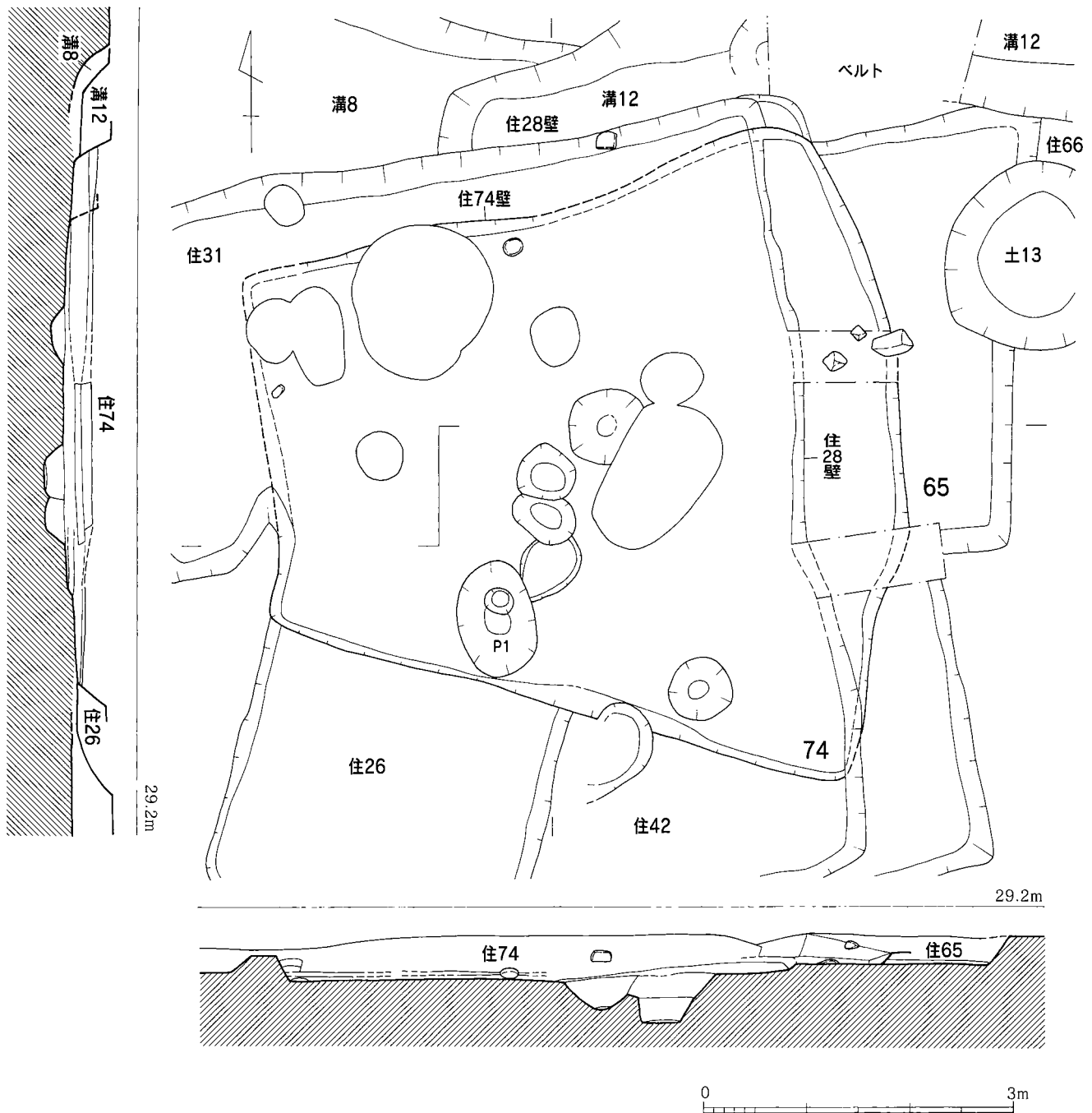
65号竪穴住居跡（図版32、第89図）

1区中央、74号住居跡東に位置する。74号住居跡、13号土坑、12号溝に切られ、66号住居跡を切る。東側の大部分は74号住居跡に切られるため、壁は北・南壁の一部、西壁しか残っていないが、最も残っている部分で高さが約25cmある。床面からはピットは検出できなかった。埋土は暗黄褐色砂質土。出土土器は弥生時代中～後期のものがあるが、66号住居跡を切り、12号溝に切られることから後期後半に位置づけたい。74号住居跡東壁トレンチを掘った隣に65号住居跡覆土内から砥石（第128図4）が出土したが、取り上げ時に74号住居跡の遺物と混ざってしまったため、どちらに属するかはやや不安。

出土土器（第90図1～8） 1は弥生土器壺口縁部である。外反する口頸部に、水平に肥厚させる口縁端部をもつ。口縁外端部は丸く収め、内端部は強い横ナデを施し、端部はナデにより内側に突出させる。口径は15cmで、内面には工具痕が残る。色は灰黄褐色を呈する。2は瓢形壺胴部片で、13号土坑との接合資料である。肩部はなで肩で、そのまま胴部が張り、緩やかに窄まる器形。残存する破片の胴部径は28.0cmを測る。外面肩部にはM字状の突帯を2条貼り付け、屈曲する部分に高さのある台形の突帯を1条貼り付ける。色は黄褐色を呈する。3は弥生土器甕口縁部片で、直立する胴部に、くの字状に外折する口縁部が付く。端部をナデで面取りする。色は灰黄色を呈する。4は弥生土器小型甕であり、口縁端部をナデで面取りする。口径は14cmを測る。口縁部内外面にはハケ目が残る。色は暗黄茶褐色を呈する。5は大型甕口縁部。かなり窄まる口縁部に、外側に粘土を三角状に貼り付け、口縁部を作り出す。口縁部はやや外下方を向き、外上端部はナデ面取りする。口径は32.0cm、口頸部にはススが付着する。暗黄茶褐色～灰黄褐色を呈する。6は甕底部で、底径は7.4cmを測る。内面底は横ナデで調整する。色は灰黄褐色を呈す



第88図 64・66号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第 89 図 65・74 号竪穴住居跡実測図 (1/60)

る。7は特殊な鉢か。底部は安定した平底であるが、底部端の厚さが0.8 cm～1.4 cmと厚さがまちまちである。内外面粗いハケ調整。色は淡茶褐色を呈する。8はやや凸底を指向し、底部が2 mmとかなり薄い。やや内湾しながら立ち上がる体部で、口縁端部は丸く収める。内外面上半部には粗いハケ目、下半部は板ナデの工具痕が残る。色は茶褐色を呈する。

66 号竪穴住居跡 (図版 32、第 88 図)

1 区中央付近に位置する。住居跡の西を 65 号住居跡、13 号土坑に、北を 12 号溝に切られ、完存するのは東壁のみで 4.2 m を測る。東壁は 2.6 m 残存する。平面形は長方形であろう。床面は確認が難しく掘りすぎてしまい、床下の掘り込み等を同時に検出している。現状で深さ 0.3 m を

測る。硬化面、貼床はみとめられなかった。壁小溝は不明である。

住居床面で5基のピットと屋内土坑を検出した。P1はやや浅いものの支柱穴と考えられるが、対になる支柱穴は検出できなかった。屋内土坑は東壁に接して掘削されている。完掘できなかったが、平面形は隅丸方形を呈するであろう。また、西壁に沿うと思われる掘り込みが見られる。出土土器から弥生時代後期前半に位置づけられる住居跡である。

土器のほかに抉入片刃石斧（第126図11）、石庖丁（第127図17）、砥石（第128図5・6）、磨石（第130図2・3）が出土している。

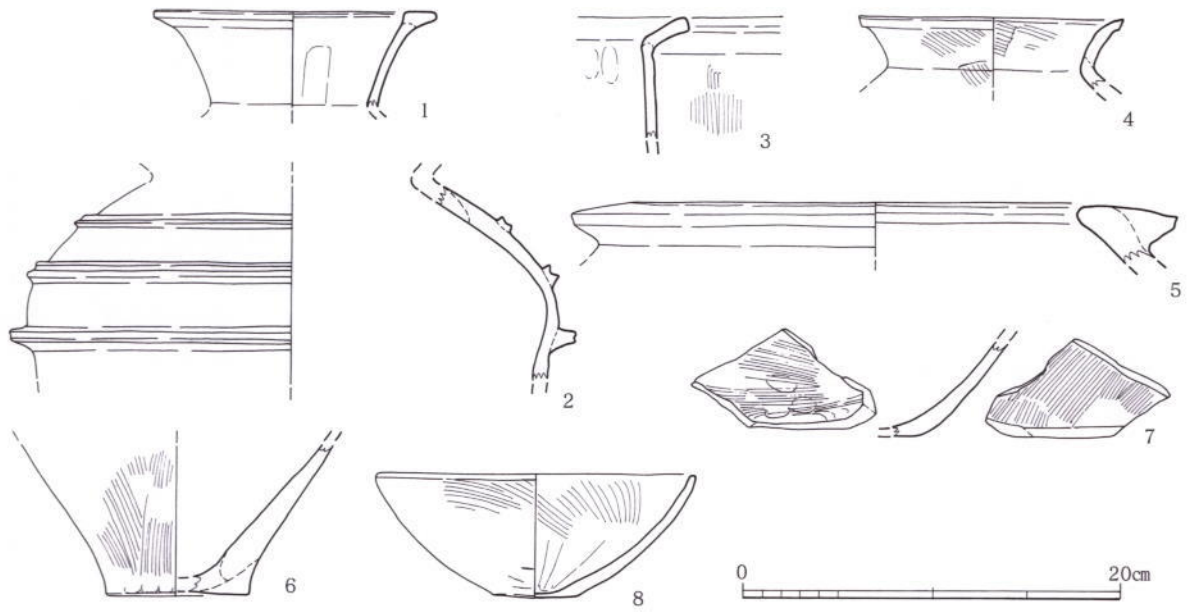
出土土器（図版49、第90図9～18） 9は八の字状に体部が開く弥生土器蓋頂部片で、頂部がやや窪むもの。頂部径は6.4cmを測り、頂部端部は強いナデで突出させる。外は黄橙褐色、内は暗茶褐色を呈する。10は弥生土器無頸壺で、住居跡東壁近くから出土。最大径が胴部中位の丸みを帯びた胴部に、直立気味に外傾する口縁部が付く。底部は中央がやや窪む平底である。口径15.8cm、器高18.8cm、最大胴部径21.7cm、底径8cmで、外面は縦ハケ、内面も斜めハケで調整し、口縁部は横ナデ。外面肩部に黒斑が、胴部下部にはススが付着する。色は黄茶褐色を呈する。11は弥生土器甕口縁部。やや外傾する胴部に、水平にまで外折した口縁部を持ち、口縁端部は肥厚させる。口径30cmを測るが、小片のため径は自信がない。口縁から2cmほど下がった場所に低平な三角突帯を貼り付ける。外面は黒変する。色は灰黄褐色を呈する。12は厚さが薄めの甕底部で、底径11cmを測る。底部端部近くまでハケ目が残り、黒斑もある。色は灰黄褐色を呈する。13は底径7cm、厚さ2.5cmと底部の厚さがあるもの。外は灰黄褐色、内は灰色を呈する。14は甕底部であるが、焼成後に外から穿孔する。底径は8cmで外面底部までハケ目が残り、内面には底部からのナデ上げ痕が残る。色は暗黄茶褐色を呈する。

15は弥生時代後期の甕か鉢の底部。底径6cmで、安定した平底である。内外面ハケ調整。底部にはススが付着し、内面には炭化物が付着する。胎土は細粒をあまり含まず、外は暗黄茶褐色、内は灰黄褐色を呈する。16は高杯口縁部である。口縁端部内外面は欠損するが、内側に粘土を貼り付けた鋤先口縁になる。口径24.0cmで、口縁頂部には横ミガキの痕跡がわずかに残る。口縁外面下部には丹塗りが、内面全体には丹塗りが残る。色は灰黄褐色～赤褐色を呈する。17・18は弥生土器鉢である。17は丸みを帯びる平底で、口径は18.0cm、器高6.0cm、底径5.3cmを測る。外面にはヘラナデ痕が、内面にはハケが残る。外面下部には黒斑がある。色は橙褐色を呈する。18は粗製の鉢。体部下では稜が明瞭に出るほど屈曲させ、直線的に口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめ、口径は15.4cmを測るが、小片のため大きさには自信がない。器壁は厚く、底部外面は工具ナデ、それ以外はナデで、指押さえ痕がよく残る。外面口縁部には黒斑が、底部にはススが付着する。色は灰黄褐色。

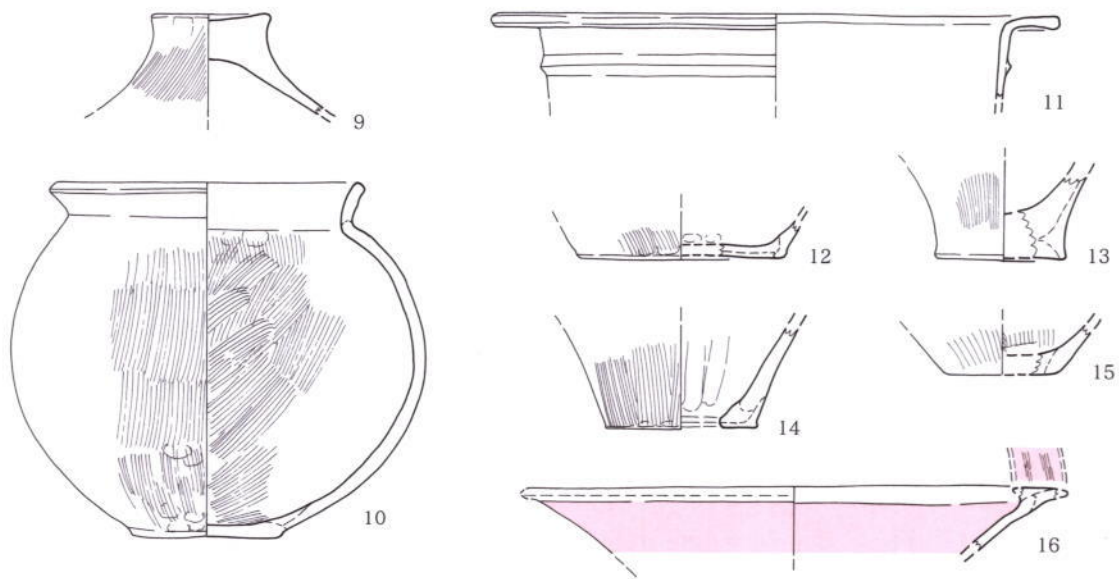
67号竪穴住居跡（図版33、第91図）

1区北東隅、68号住居跡北に位置する。12号土坑に南壁を、7号溝に南西隅を切られ、ほとんど大部分が調査区外にある住居跡。住居の壁は南壁で20cm残る。床面には5つのピットを検出したが、P1は深さが40cmあり、支柱穴の可能性もある。また西壁は7号溝の西では検出できなかったことから、西壁は7号溝内か壁に沿うようなものであった可能性が高い。埋土は茶褐色砂質土。

出土土器（第90図19） 図示できるものは1点のみである。19は弥生土器無頸壺胴部片。胴部最大径は20cmで、胴部中位よりやや上にくる。底部は底径6.3cmでやや上げ底になる。外面は横ミガキのち丹塗りを施す。内面はナデで、胴部中位には指おさえ痕が残る。外面にはススが薄く付着し、内面全体が黒変する。黒色～赤褐色を呈する。

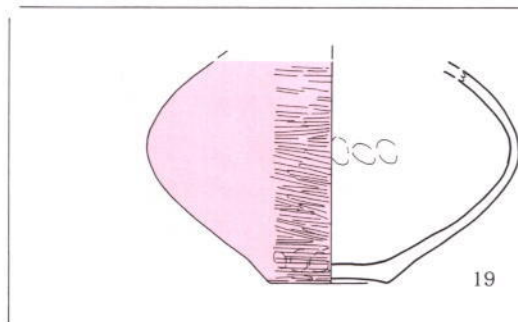
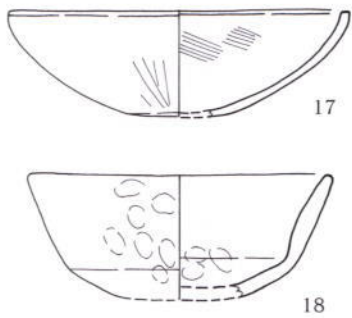


住65



住66

住67



第90图 65~67号竖穴住居跡出土土器实测图 (1/4)

68号竪穴住居跡（図版33、第91図）

1区北東隅に位置し、12号土坑、7号溝に切られる。住居跡は南北5.4m、東西4.8m以上で、住居東側は調査区外までのびる。埋土は茶褐色砂質土で、住居の壁は15cm前後残る。住居南西隅は第1面44号住居跡に切られるために確認できない。調査時は主柱穴が2本柱の弥生時代の住居跡と考えたが、出土した土器は須恵器・土師器がほとんどで、また主柱穴のP1からは第97図3の土師器甕が出土していることから、7世紀前半～中葉の住居跡と判断した。住居床面では大小19基のピットを検出した。P1・5は径が大きく、深さもあることから主柱穴と考えられる。P3・4も径が大きく、深いものである。

出土土器（図版49、第92図1～7） 1は土師器模倣杯蓋で、口径10cmを測る。全体的に摩滅するが、天井部外面は手持ちヘラケズリを施したもののか。天井部から明確な稜を形成し、外反する口縁部で端部は丸く収める。焼成は甘く、色は黄橙色を呈する。2は口縁部が直立し、深さが浅い器形の杯で、端部はやや内傾する。底部外面には手持ちヘラケズリを施す。外は淡橙色、内は黄褐色を呈する。3は小型の土師器甕であり、口径は13.6cmを測る。やや膨らむ胴部に、緩やかに外反する口縁部を持ち、端部は水平に外側につまみ出したもの。内面は頸部上まで、ヘラケズリを施す。胴部外面にはススが付着し、口縁部内面は黒化する。色は橙褐色～黒褐色。P1出土。4は須恵器杯蓋片。外面の稜ははっきりしておらず、天井付近はヘラ切りのち横ナデで調整する。色は灰色。5は須恵器杯蓋で、口径12.6cm、高さ4cmを測る。口縁部のみ、やや直立ぎみになり、端部は丸く収める。外面のヘラケズリは天井部付近のみで、V字の真ん中にもう1本線を足す形態のヘラ記号を付ける。色は灰色を呈する。6は返りのついた須恵器杯蓋である。口径11.4cmであるが、小片のため径に自信がない。返りと口縁部の高さの差がほとんどなく、器壁はかなり厚いもの。胎土は細粒多く含み、色は灰色を呈する。7は宝珠つまみが付く須恵器杯蓋である。外面は全体的に自然釉が付着する。外は淡灰色、内は灰色。

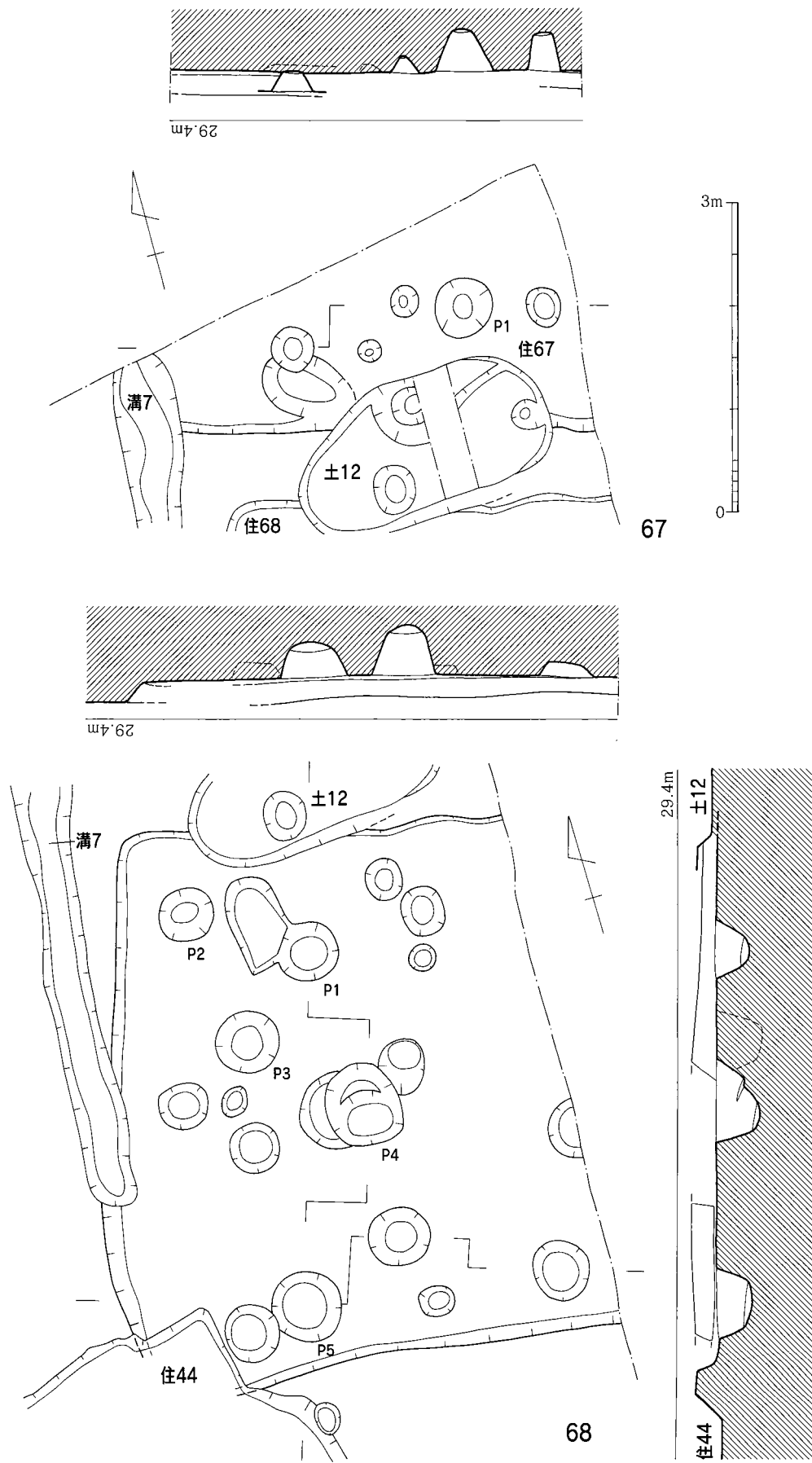
69号竪穴住居跡（図版33、第93図）

1区東端中央、68号住居跡西に位置し、70号住居跡に住居東南を切られる。壁は第1面44号住居跡により、東壁のほとんどが失われるが、その他の壁は約10cm残る。規模は南北3.9cm、東西3.1mの小型の住居跡。住居床面からピットを4基検出し、北東部でも大きなピットを検出したが、住居の壁を切ることから44号住居跡に伴う可能性が高いと判断した。住居の中央のP1は埋土である暗灰黄褐色砂質土に炭が少量混じる炉である。その北西、南西のP2・4は大きさ、位置から主柱穴であり、主柱穴が4本柱の住居跡となると考え、東側を精査したが対になるピットを確認できなかった。埋土は暗茶褐色砂質土。住居の時期は古墳時代後期以降の土器しか図化できなかったが、44号住居跡の下層の掘り込みの土器が混入してしまったためと思われる。図化できないが、弥生時代中期後半の土器も出土しており、住居形態から弥生時代中期後半の住居跡と位置づけたい。

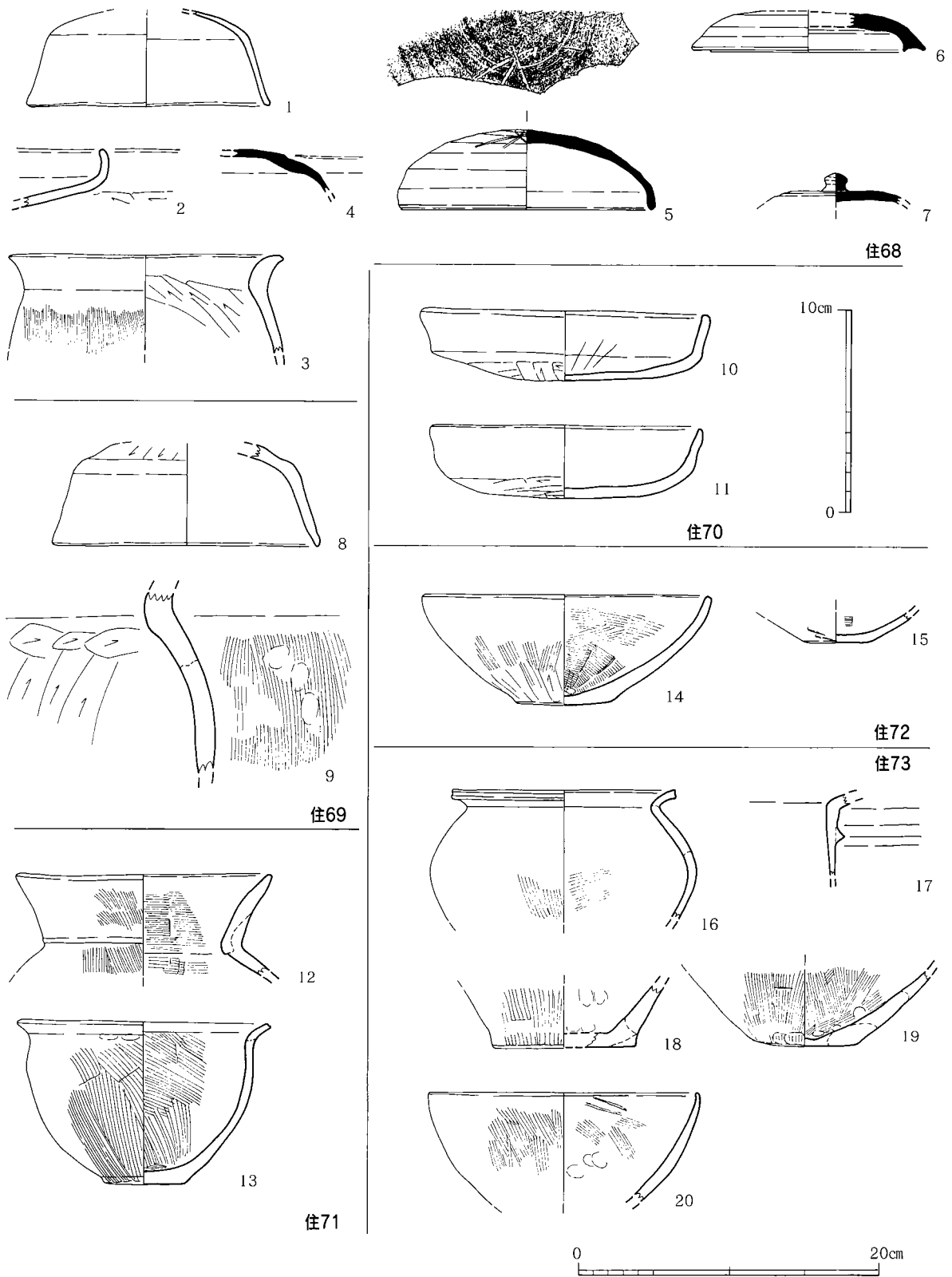
出土土器（第92図8・9） 8は土師器模倣杯蓋片であり、天井部との稜は明確ではなく、口縁部は直線的に外傾し、端部はやや外につまみ出したもの。口径は13.2cmを測る。天井部は手持ちヘラケズリを施すが、摩滅のため、稜が明瞭ではない。色は黄橙褐色を呈する。9は土師器甕胴部片である。あまり胴が張らず、ゆるやかに口縁部が外反する甕になると思われる。内面は頸部近くまでヘラケズリを施す。細粒を多く含み、色は橙褐色を呈する。

70号竪穴住居跡（第93図）

1区東端中央、3号円形周溝状遺構北側に位置する。遺構検出時にかなり下げてしまったため、住居西南壁はなくなり、東南隅も切り合いを間違えてとばしてしまった。規模は南北3.8m×東



第91図 67・68号竪穴住居跡実測図 (1/60)

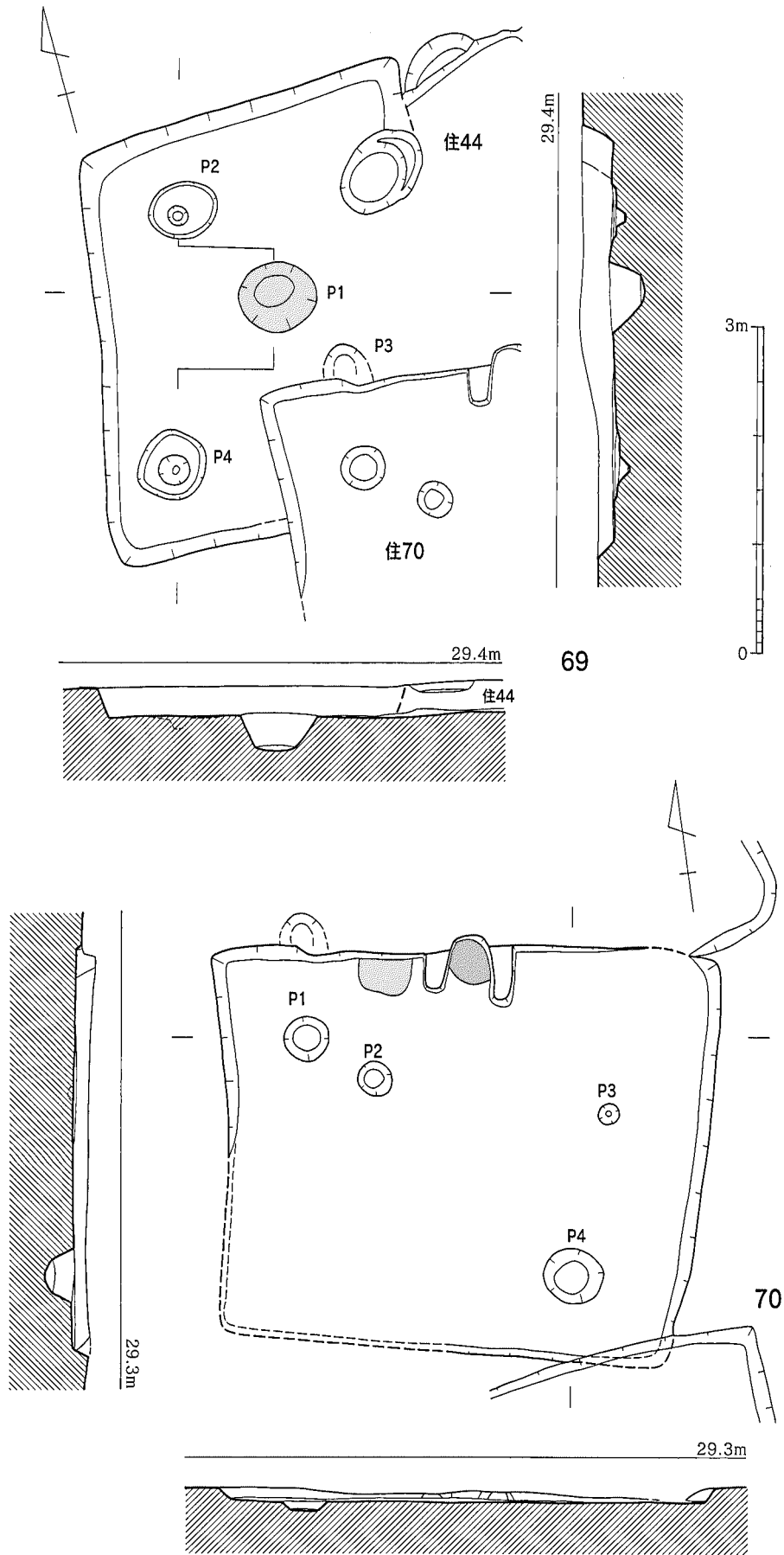


第92図 68～73号竪穴住居跡出土土器実測図（1～11は1/3、他は1/4）

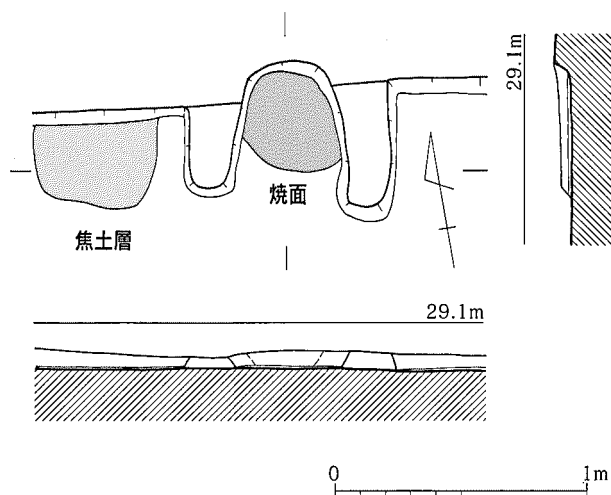
西4.6m、面積は約16㎡程度になるものと思われる。壁は一番残る東壁で13cm残る。

床面からは大小4基のピットを検出した。このうちP1・4は位置と大きさから支柱穴と考えられる。北壁中央にはカマドがあり、カマド西側北壁沿いには厚さ2～3cmのカマド廃棄土の広がりを確認した。住居の埋土は暗黄褐色砂質土。7世紀前半の住居跡である。

カマド（図版33・第94図） 住居北壁中央に位置し、壁から右袖で55cm、左袖で38cm、燃焼



第93图 69·70号竖穴住居跡实测图 (1/60)



第94図 70号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

部が壁から9cm突出し、袖と袖の間が支脚推定付近で41cmを測るカマドである。

遺構検出時に下げすぎてしまい、袖の高さは残りの良いところで8cmしか残っていない。燃烧部埋土は暗黄褐色砂質土に炭・焦土が多く混じる土を1層のみ確認した。カマドの床面には燃烧部からカマド奥壁にかけて焼面がうすく広がる。カマド西側には南北35cm、東西50cmの範囲でカマドの廃棄土と思われる焦土と炭が広がるのを確認した。焦土層の厚さは2~3cmで、その下層にはピットなどの掘り込みは確認できなかった。

出土土器 (図版49、第92図10・11)

10・11はいずれも土師器杯身である。10

は口径14.4cm、器高3.6cmの完形の杯で、平らに近い手持ちヘラケズリを施した底部、稜がはっきりするほど屈曲させた内湾気味の口縁部を持つ。口縁端部は丸く収め、内面屈曲部は黒化する。内面底部近くには焼成後に細い金属状のもので線刻した、「井」の中央に縦線1本を足したヘラ記号がある。色は橙褐色~黒色。11も口径13.4cm、器高3.6cmの完形の杯身で、手持ちヘラケズリを施した底部からゆるやかに内湾気味に立ち上がる口縁部を持ち、口縁端部は垂直方向につまみあげる。色は橙褐色を呈する。

71号竪穴住居跡 (第95図)

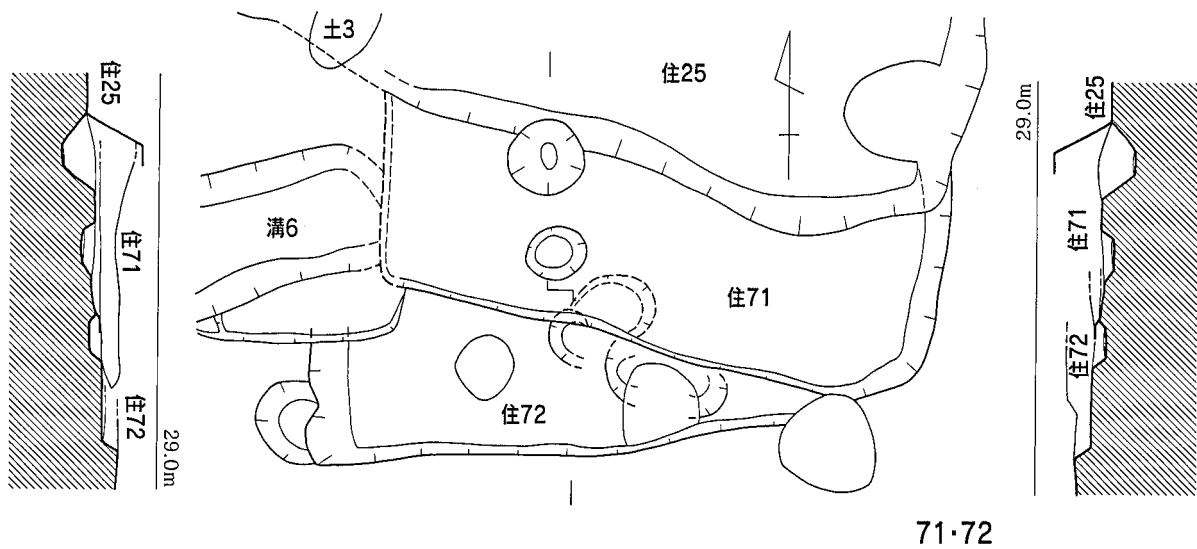
1区中央、74号住居西に位置し、第1面25号住居跡に切られ、72号住居跡を切る。この付近は表土剥ぎ段階で、第2面まで一度に下げってしまったため、第1面の遺構と、第2面の遺構の区別ができず、6号溝の方が古いと調査段階では考えたが、出土土器から6号溝の方が新しいと思われる。弥生時代後期中葉の住居跡と考えられることから、元々第2面の住居跡であろう。西壁は遺構検出で下げすぎてなくなり、一番残る東壁で15cm残るが、南壁は4cm前後しか残っていない。南北1.3m、東西推定4.6mの住居跡。床面からは2基のピットを検出したが、主柱穴らしきピットは、検出できなかった。埋土は茶褐色粗砂。

出土土器 (図版49、第92図12・13) 12は弥生後期の壺口縁部。くの字状に外折する長い口縁部。口径は16.8cm、内外面はハケ目が残り、内面頸部には粘土接合痕が残る。色は黄褐色を呈する。13は口縁部がくの字状に短く屈曲する弥生土器鉢で、口径16.7cm、底径5.2cm、器高11cmを測る。底部は平底で、ハケ目のちナデで調整。胴部は内外面ともハケ調整。外面には黒斑、内面には炭化物が付着する。色は黄褐色~白黄褐色を呈する。

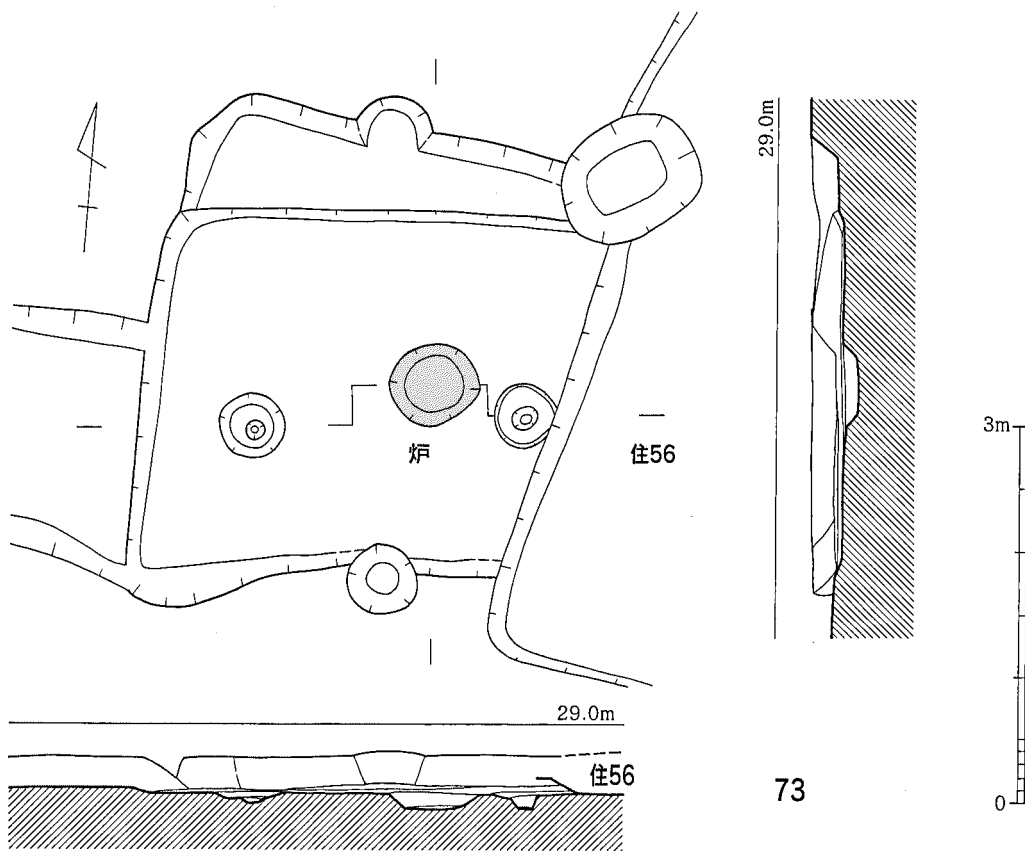
72号竪穴住居跡 (第95図)

1区中央に位置し、71号住居跡、6号溝に切られる。東西4m以上、南北1.3m以上で、南壁と西壁の一部しか残っていない。南壁で10cm残るが、住居形態などは不明。床面から4基のピットを確認した(点線で示すもの)。埋土は明茶褐色粗砂。71号住居跡と同じく、弥生時代後期中葉の住居跡。

出土土器 (図版49、第92図14・15) 14は弥生土器鉢で、やや凸状の底部からやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部はナデで面取りする。口径19.0cm、底径6.4cm、器高7.3cmのほぼ完形



71・72



73

第95図 71～73号竪穴住居跡実測図 (1/60)

品。底部外面はヘラナデ、それ以外はハケ調整で、口縁部内外面は最後に横ナデで調整。底部外面には黒斑がある。色は灰黄褐色を呈する。15は弥生土器鉢の底部か。底径4.4cmと小さい底部で、胴部外面には工具痕が、内面には工具による絞りを行った際の痕跡（ハケ）が残る。外面は2次加熱により赤変する。色は橙褐色を呈する。

73号竪穴住居跡（図版34、第95図）

1区中央部南端に位置し、56号住居跡西に位置する。56号住居跡に東側を切られる。南北2.9

m、東西3.5m以上で、南壁がやや内側に入る住居跡である。残りの良い南壁で20cm残る。調査時には見落としてしまったが、本住居跡はベットが付く長方形の住居跡の竪穴部しか調査せず、形態は気になるが、北側の段落ち部はベット状遺構になる可能性がある。このことは出土土器から弥生時代後期後半にあたることも根拠となる。埋土は暗黄褐色砂質土。床面では3基のピットを検出した。中央のピットは炭が混じっているため炉と判断した。その東西には深さは浅いものの、径15cm前後の柱痕があるピットがあるため、2本柱の住居跡になると思われる。

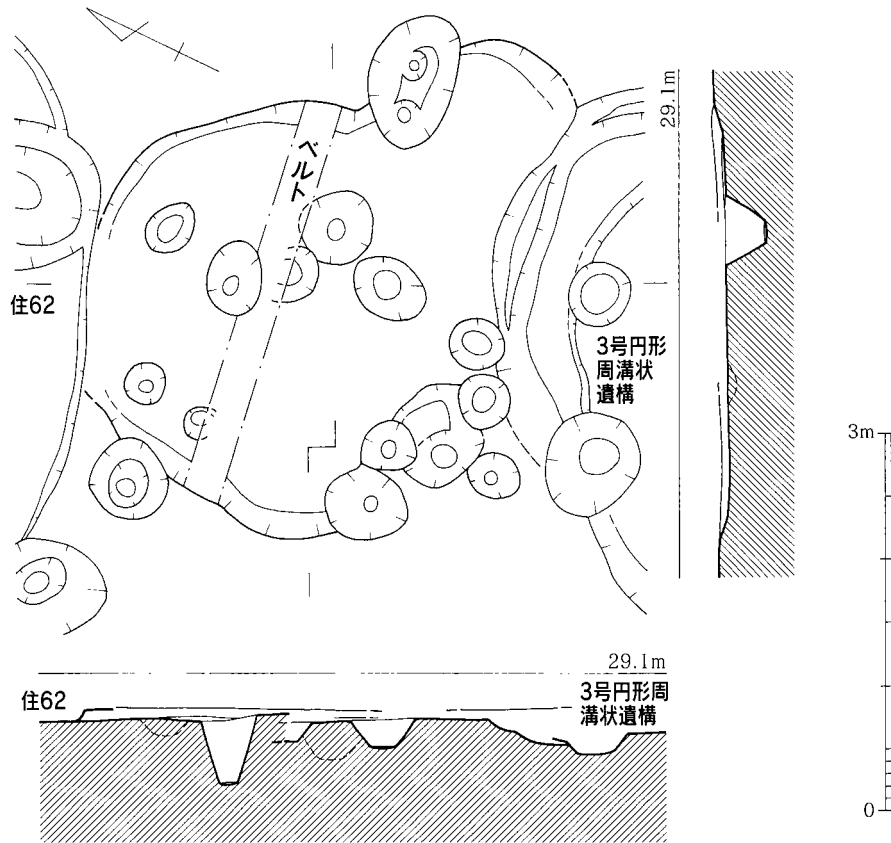
出土土器 (第92図16～20) 16は弥生後期無頸壺であり、胴部中位が最大径の丸い胴部に、強く外折する短い口縁部が付く。口径14.8cm、最大胴部径17.8cmを測る。全体的に摩滅が進むが、内外面とも下部にハケ目が残る。色は白黄褐色～淡黄褐色を呈する。17は弥生土器中期甕口頸部片。直立する胴部に、強く屈曲する口縁部が付く。頸部から1cmほど下がったところに、三角突帯を貼り付ける。色は黄橙褐色を呈する。18は弥生後期甕底部である。平底の底部で、底径は9.6cmを測る。外面は底部端までハケ目が残る。色は黄褐色～黄橙褐色を呈する。19は弥生後期甕か壺の底部で、底部が凸状に近い底である。底径は7.4cmを測り、底部は厚さ5mm前後と薄い。底部外面はハケのちナデで調整し、内面には強い指押さえ痕が残る。内外面ともハケ調整。色は茶褐色を呈する。20は弥生土器鉢口縁部で、口径18cmを測る。体部の立ち上がりがつく、口縁端部はやや内上方につまみ出したもの。内外面ともハケで調整し、内面はナデ消す。外面下部には2次加熱痕とススが付着する。色は茶褐色を呈する。

74号竪穴住居跡 (第89図)

1区中央、56号住居跡北側に位置し、第1面26・28・31・42号住居跡の下層にあたり、65号住居跡を切る。西壁の長さが3.4m、東壁の長さが6.3mと南北の長さが異なる面積29.5㎡の台形状の住居跡になる。西壁と北壁の一部は上層の住居跡のためなくなるが、残りの良い南壁で25cm残る。床面には上層の住居跡のピットが多く存在するが、この住居跡に伴うのはピット5基のみである。支柱穴・炉とも不明。埋土は茶褐色砂質土。P1から第97図4・5が出土。出土土器は弥生時代後期後半と古墳時代前期後半に分けられるが、上層の住居跡が後者の時期であり、本住居跡は前者の時期に位置づけられるか。

出土土器 (図版50、第97図1～9) 1は弥生土器壺底部である。底径は8.0cmで胴部はゆるやかに立ち上がる。外面底部には黒斑がある。色は黄橙色～黒色を呈する。住居跡北東隅から出土した2・3は土師器直口壺である。2は張りが弱い長胴の胴部から直線的に外傾する口縁部が付く、口縁部は横ナデ、胴部外面は縦ハケ、内面は頸部までヘラケズリを施す。胎土・焼成とも良く、胴部外面には黒斑がある。色は黄茶褐色～黒色を呈する。3は口径が13.6cmで、2と同様の器形であるが、3のほうが大きく、また器壁も厚い。P1付近から出土。口縁部内外面までハケで調整し、外面胴部中位は横ハケを施す。内面頸部までヘラケズリを施し、粘土接合痕も確認できる。口縁部にはススが部分的に付着し、内面頸部付近は黒化する。色は黄橙色～灰黄色。

4～7は土師器の丸底壺である。4は中型品で、口径11.2cm、最大胴部径12.8cmを測る。胴部中位がゆるやかにふくらむ胴部で、ゆるやかにやや内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。口縁端部は上方につまみあげる。外面にはハケが残り、口縁内面にはハケのような擦過痕が残る。内面頸部までヘラケズリを施す。色は橙褐色を呈する。74号住居P1と26号住居跡との接合資料。5は口径8.5cm。最大胴部径10.2cmで、4よりは胴部が張り、丸みを帯びる。口縁端部は内側上方につまみ出すもので、内側に段ができる。体部外面・口縁部外面にはハケが残り、内面は頸部までヘラケズリを施す。胎土は良く、黄橙褐色を呈する。P1出土。6は内湾する口縁部の端部が外反する。口径は8.4cmで、器壁は薄い。胎土は精良で、暗黄茶褐色を呈する。7は頸部の屈曲が少ないもので、やや下膨れの胴部から内湾気味に立ち上がり、そのまま口縁端部に至る。胴



第96図 76号竪穴住居跡実測図 (1/60)

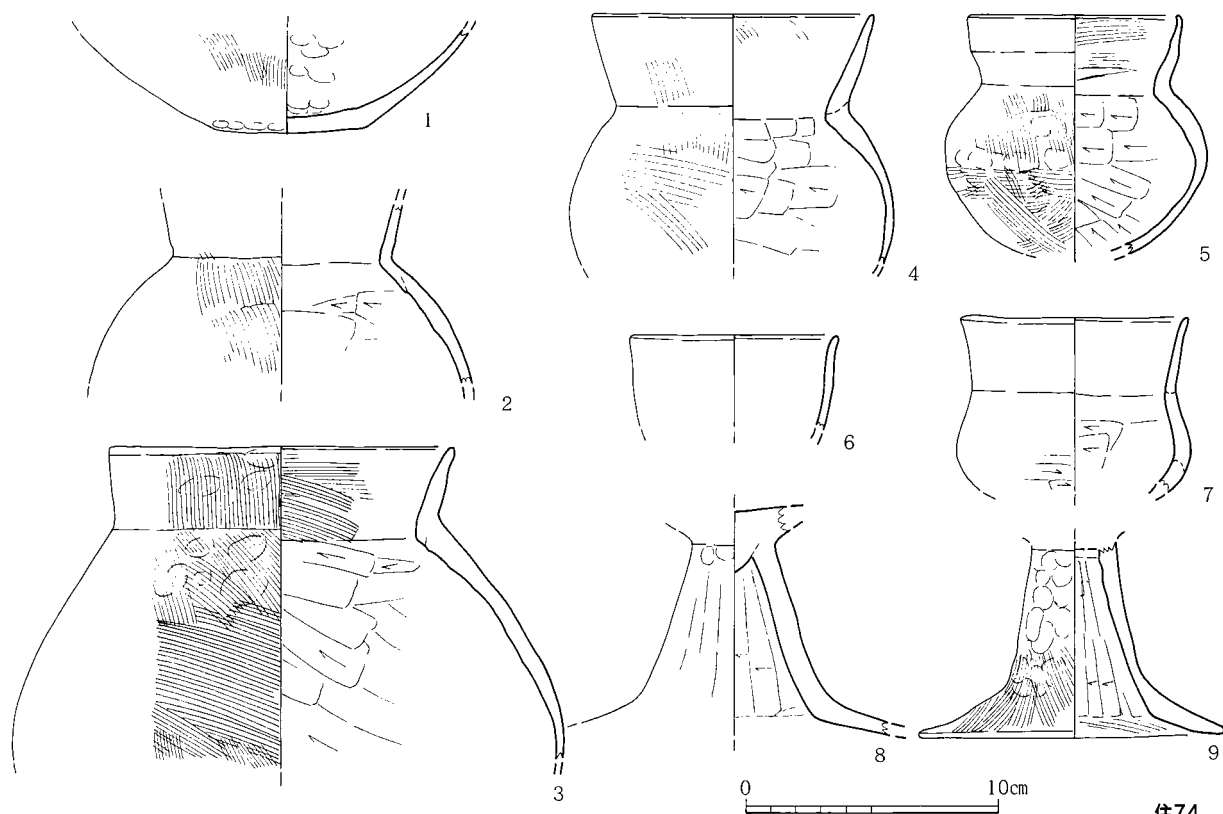
部下部は手持ちヘラケズリを施し、内面も頸部より1cmほど下がった所までしかヘラケズリを施さない。外面には黒斑がある。色は茶褐色～灰茶褐色を呈する。

8・9は土師器高杯脚部で、いずれも脚裾部が屈曲して開くもの。8は底部端部が欠損する。杯部との接合には粘土を充填して行う。脚柱部外面はナデ、内面はヘラケズリを行う。色は黄橙色を呈する。9は底径11.9cmで、脚裾部がゆるやかに開くが、内面は脚柱部のヘラケズリにより鋭い稜を形成する。脚裾部から屈曲部はハケで調整し、脚裾部内面もハケで調整。脚柱外面部には指押さえ痕が良く残る。色は黄橙色を呈する。P1北側から出土。

76号竪穴住居跡 (第96図)

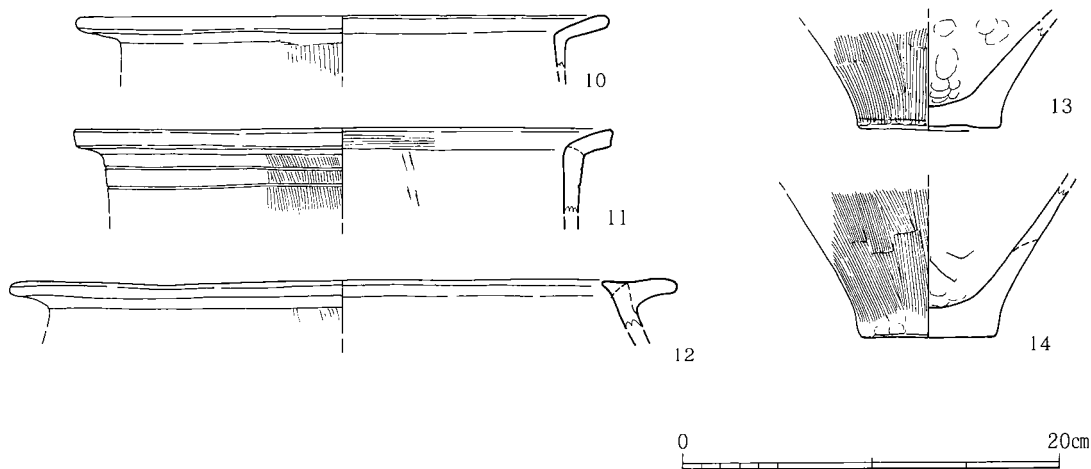
76号竪穴住居跡は1区東側中央、62号住居跡東に位置し、62号住居跡、3号円形周溝状遺構に切られる。住居は北東-南西方向が主軸のやや楕円形を呈し、規模は北東-南東4.5m、北西-南東3.4mを測り、北東部がやや突出した住居跡になる。地山と住居埋土との区別が難しかったため、住居平面形態にはやや不安が残る。住居東南はピットが多数切り込むが、62号住居跡も壁にピットが多数切り込む箇所があることから、住居の構造となんらか関連があるものか。住居の床面では6基のピットを検出したが、炉・支柱穴などは不明。埋土は暗黄褐色砂質土。出土土器から弥生時代中期後半の住居跡である。

出土土器 (第97図10～13) 10～13はいずれも弥生中期甕口縁部片である。10はくの字状に外折する口縁部で、口縁端部は肥厚し、丸く収める。口径は28cmを測るが、小片のため自信がない。内面頸部の稜ははっきりと明瞭。外面頸部にはハケの工具痕が残る、色は黄橙色を呈する。11は短く外折する口縁部で、端部はナデで面取りする。口径は20.4cmを測る。口縁部内面にも



住74

住76



第97図 74・76号竪穴住居跡出土土器実測図（1～9は1/3、他は1/4）

ハケ目、胴部内面には工具痕が残る。口縁下1cmには2条の凹線が巡る。灰黄褐色～暗黄褐色を呈する。12は胴が張るT字状の鋤先口縁で、口縁外端部が長く、やや下方に垂れる。口縁内端部はナデで内側につまみ出す。口径は35.0cmであるが、小片のため大きさには自信がない。外面頸部にはハケ工具痕が残る。色は黄橙色～淡黄褐色を呈する。13・14は甕底部で、いずれも外面端部までハケ目が残る。13は底径7.6cmのやや上げ底の底部で、内面には指押しえ痕が残る。外面には2次加熱とススが付着する。14は底径7.2cmで、底部外端部にはハケ工具の始点痕が残り、内面には工具痕が残る。外面にはススが付着し、内面には炭化物が付着する。外は灰黄褐色～黄褐色、内は灰褐色～灰黄褐色を呈する。

b. 土坑

5号土坑 (図版34、第98図)

1区中央よりやや東の南端、57号住居跡南に位置する。東壁は60号住居跡に、南西隅は第1面30号住居跡に切られ、土坑南半分は調査区外までのびる。当初は弥生時代の方形の住居跡と考え調査したが、南に深い溝状の落ちこみがあること、西壁沿いが幅70cm前後の溝状になること、東壁沿いにはピット群が切り合うこと、また床面は平らな部分があり、精査したが柱穴・炉とも確認できなかったことから土坑として報告する。検出時上面からは確認できなかったが、第1面のピットがこの土坑にいくつか切り込むと考えられ、土層からも1基確認できる。青銅器片が出土したP116もこの切り込むピットの一つである。土坑の規模は、南北4.3m以上、東西6.4m以上で、深さは北壁で30cm、南西隅で58cmを測る。

出土土器は、土師器・須恵器が混じるが、弥生時代中期後半の土器が最も多く、砂質土を主体とする埋土からも土坑自体は弥生時代に属すると考えられる。そのため5・6は土坑に切り込むピット等から出土したものと考えたい。埋土から使用剥片(第126図3)、砥石(第128図8)が出土した。

出土土器(第99図1～6) 1・2は弥生土器壺底部。1は底径7.6cmで、外面にはヘラナデ後、丹塗りを施す。底部には黒斑がある。外は暗赤褐色、内は黄橙褐色を呈する。2は底径7.4cmで、外面はヘラナデを施す。底部外面には黒斑が、内面全体は黒化する。外は灰黄褐色、内は灰黒色を呈する。3は弥生土器甕口縁部である。口縁部は水平近くまで外折し、端部はナデで面取りする。頸部外面はナデにより凹線状に窪む。色は黄褐色を呈する。4は弥生土器鉢口縁部で、口縁端部内外面には粘土を貼り付け、T字状の口縁になる。色は淡橙色を呈する。

5は土師器甕口縁部。くの字状にゆるやかに外反する口縁部で、端部は丸く収める。口径20cmで、口縁部内面には炭化物が付着する。6は須恵器杯身口縁部で、口縁部は内湾しながら立ち上がり、わずかに窪む蓋受け部を持つ。色は灰色を呈する。5・6は混入品。

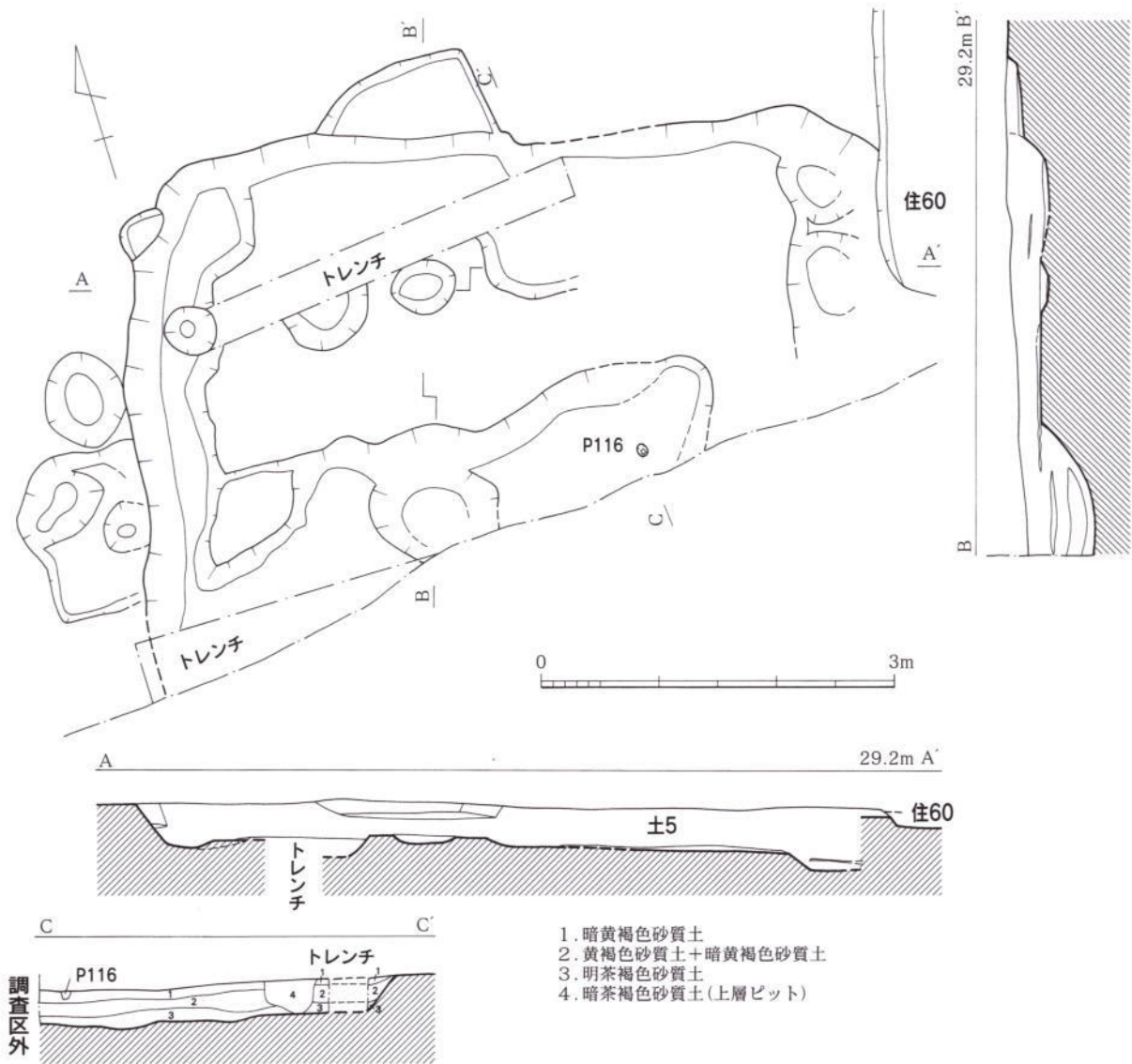
6号土坑 (図版34、第100図)

1区中央よりやや西の南端、第1面2号掘立柱建物跡東に位置する。西壁の大半を第1面2号建物跡の柱掘り方により切られ、残りの良い東壁と南壁で15cm前後残る。南北3.2m、東西1.2mの南北に細長い土坑で、埋土は上層が灰黄褐色砂質土、下層が暗黄灰色砂質土である。出土した土器はいずれも小片のため、図示できない。第2面の土坑か。

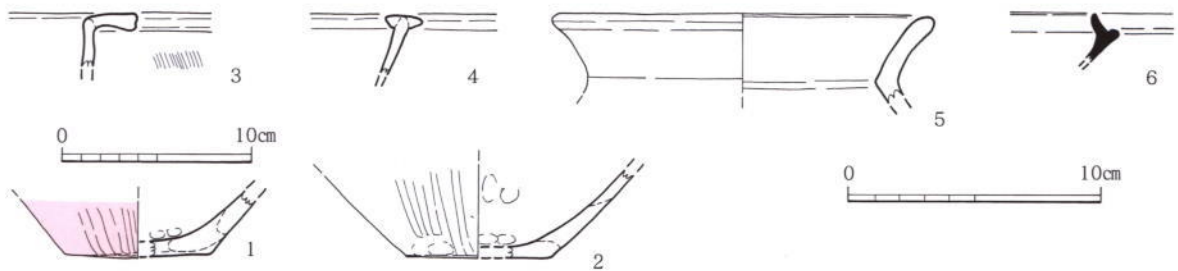
9号土坑 (図版35、第101図)

1区東中央、70号住居跡南に位置する。3号円形周溝状遺構の上層で検出した。南北2m、東西1.6mの南北方向に長い楕円形を呈す。遺構検出時に南側を下げすぎてしまい、中央より北側しか壁が残っていない。最も残っている北壁で10cm残る。土坑内には、焦土塊が面的に広がり、図でトーンを張った箇所は、よく焼けた焦土塊が広がる範囲を示し、線で囲んだ範囲は薄く焦土塊が広がる箇所を示す。深さは中央で10cm程度と浅く、立ち上がりも弱いことから、元々の窪みにカマドなどの廃棄土を遺棄したものと考えられる。

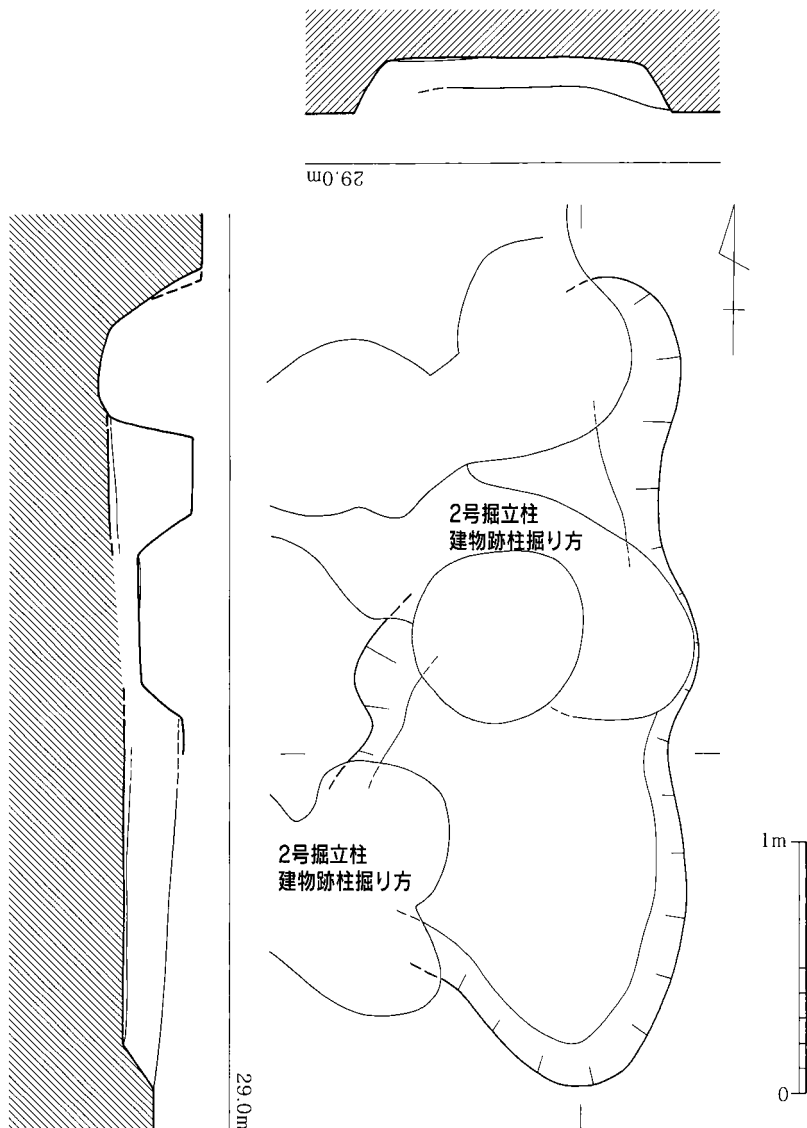
出土土器(図版50、第102図1～3) 1は弥生土器甕口縁部。くの字状に外折する口縁部を持ち、端部を丸く収める。焼成はやや甘く、外は灰黄褐色、内は橙褐色を呈する。2は土師器甕底部で、丸底の底部に内湾する胴部を持つ。外面上部はハケ目、下部はナデ、内面底部付近はナデ、上部はヘラケズリを施す。色は橙褐色を呈する。3は土師器甕の把手で、断面が隅丸の長方形になる。焼成はやや甘く、色は橙褐色を呈する。埋土から土錘(第133図27)が出土。



第98図 5号土坑実測図 (1/60)



第99図 5号土坑出土土器実測図 (5・6は1/3、他は1/4)



第100図 6号土坑実測図 (1/30)

埋土は灰褐色砂質土。弥生時代後期前半の土坑になるか。

出土土器 (第102図5～7) 5は弥生土器甕底部。底径7.7cmを測り、立ち上がりやや急な胴部をもつ。色は灰黄色を呈する。6は弥生土器高杯口縁部で、口縁部内側に粘土を貼り付け、鋤先口縁を形成する。口縁全体がやや下を向き、外端部はナデで面取り。内端部は内側につまみ出す。口縁頂部には放射状に暗文を密に施す。色は橙色～赤褐色を呈する。7は豊前地方に主に分布する杯部が椀状を呈する弥生後期高杯の杯部である。杯部外面下部には横ミガキを施し、脚部との接合部の杯底部断面には粘土が剥がれ落ちた痕跡があり、杯部底面を粘土で充填し、杯部を成形したものと思われる。色は黄褐色を呈する。

14号土坑 (第103図)

1区東部北寄りに位置する。12号溝との埋土の識別が難しく、溝として掘削してしまった。掘削後に溝底に径0.6mのピットを検出したこと、溝の肩がこの部分だけきつくカーブすることから、土坑を誤って掘削したことに気づいた。12号溝より新しい土坑となる。深さは最深部で0.55

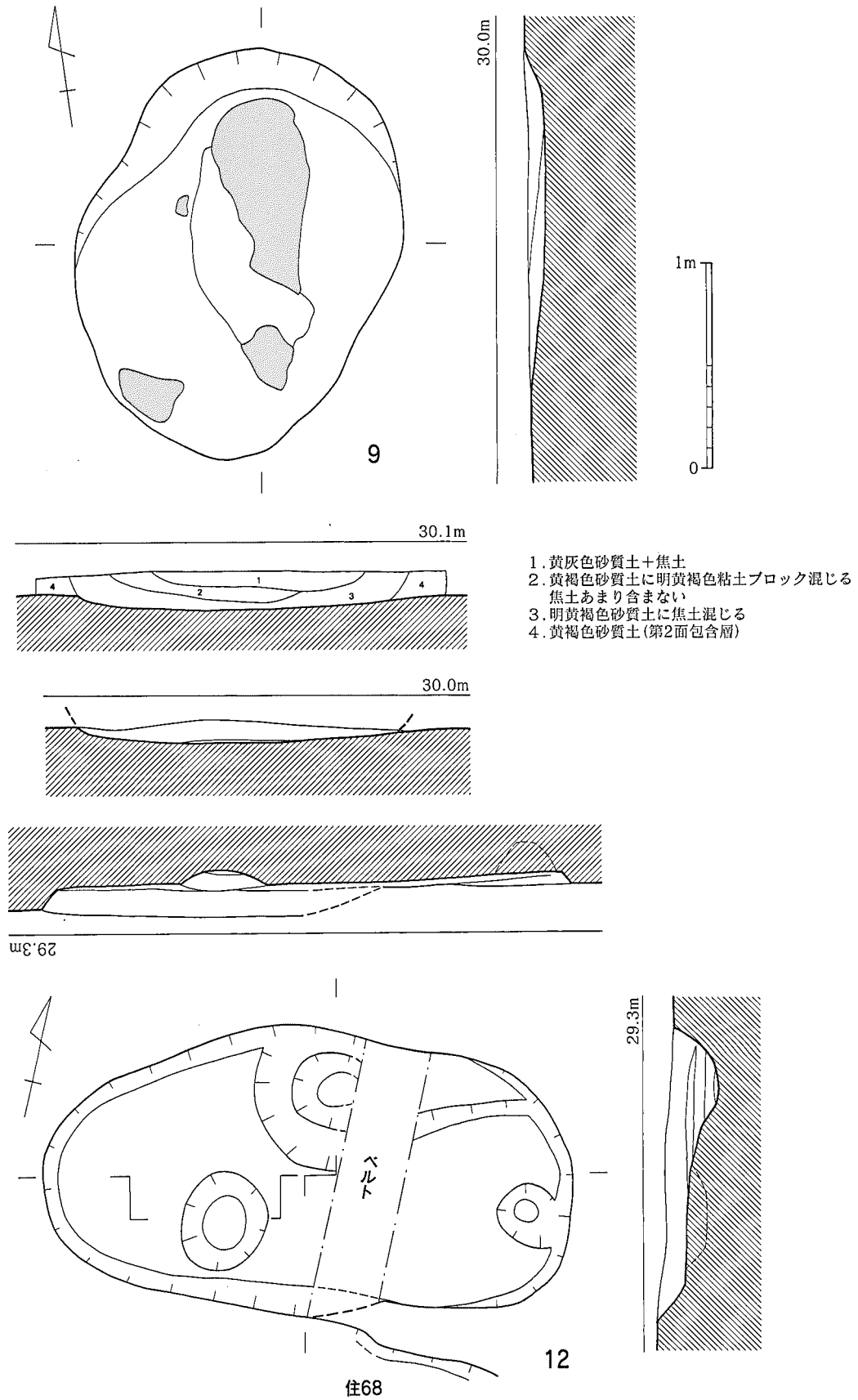
12号土坑 (図版33、第101図)

1区北東隅、68号住居跡北側に位置し、67・68号住居跡を切る。遺構検出時に南側を下げすぎてしまったため、南壁では下端のみ検出した。最も残る西壁では8cm残存する。南北1.4m、東西2.6mの東西に長い土坑で、土坑底面にはピットが3基切り込む。埋土は明灰黄色砂質土。

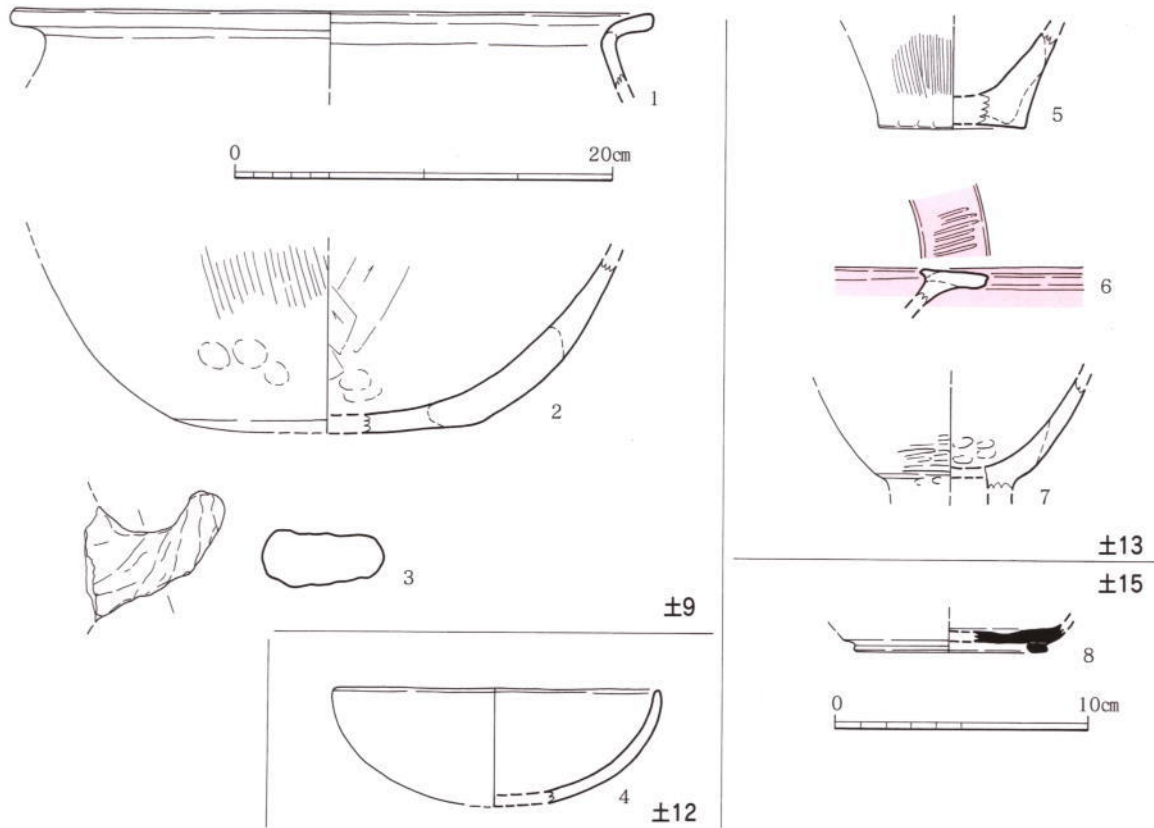
出土土器 (第102図4) 図示できるのは1点のみである。4は土師器杯身であり、口径13.0cmを測る。口縁端部を上方につまみ出す。内外面とも摩滅して調整は不明であるが、ナデの可能性が高い。色は灰黄褐色～淡橙色を呈する。

13号土坑 (図版32、第103図)

1区中央付近に位置し、65・66号住居跡を切る。平面形はほぼ円形で、長軸1.85m、短軸1.65mを測る。深さは0.35mである。



第101図 9・12号土坑実測図 (1/30)



第102図 9・12・13・15号土坑出土土器実測図（1・5～7は1/4、他は1/3）

mを測る。

出土土器は12号溝の土器と一緒に取り上げてしまったが、12号溝では弥生時代中期後半～末、古墳時代前期とそれ以降の土器が混じるが、12号溝が古墳時代前期に位置づけられ、埋土も含めて考えると古墳時代後期後半の溝となる可能性が高いと考えられる。

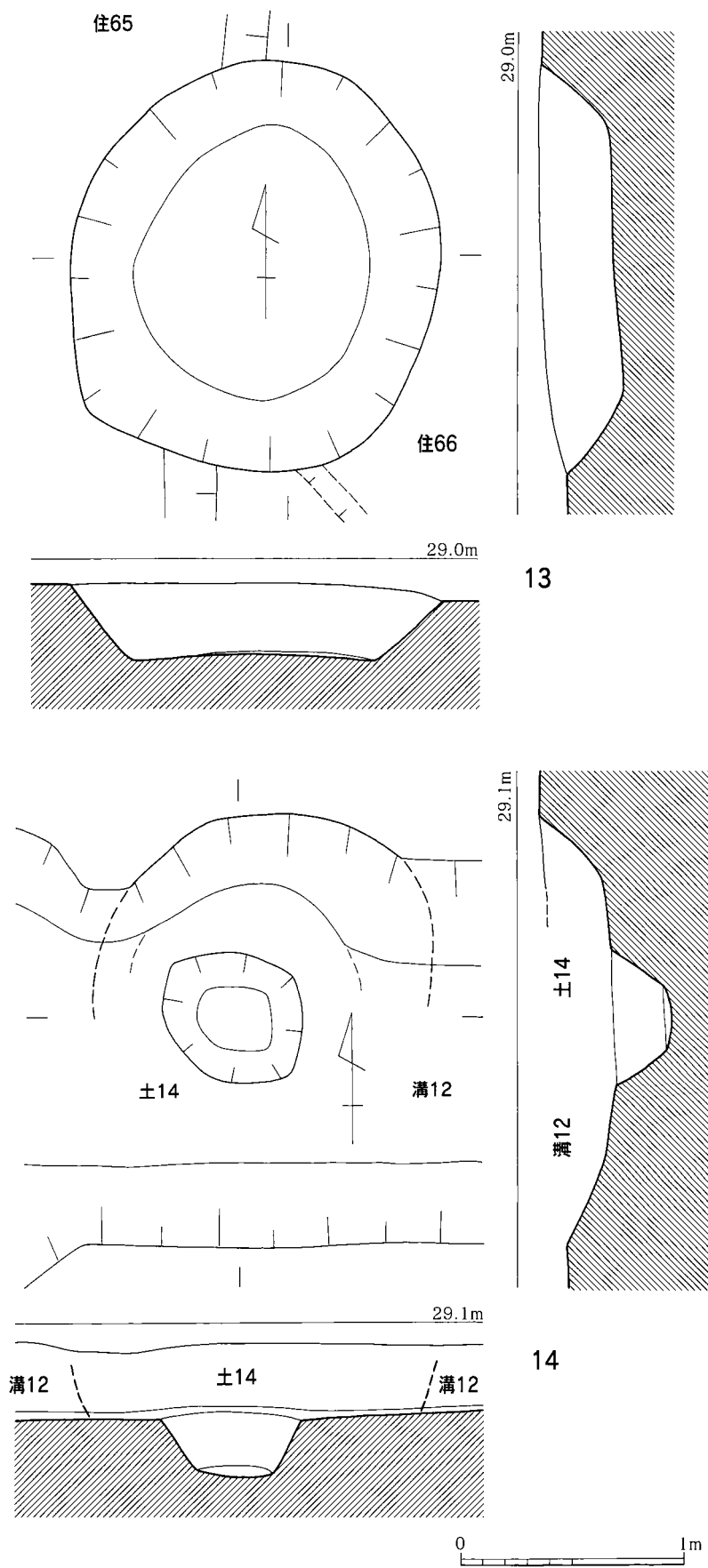
15号土坑（第104図）

1区東やや北寄り、55号住居跡東に位置する。南北2.3m、東西1.5m、深さ26cmを測る。土坑底面にはピットが4基切り込む。北東隅に位置するピットは床面からの深さが35cmを測るもの。埋土は暗黄褐色砂質土。

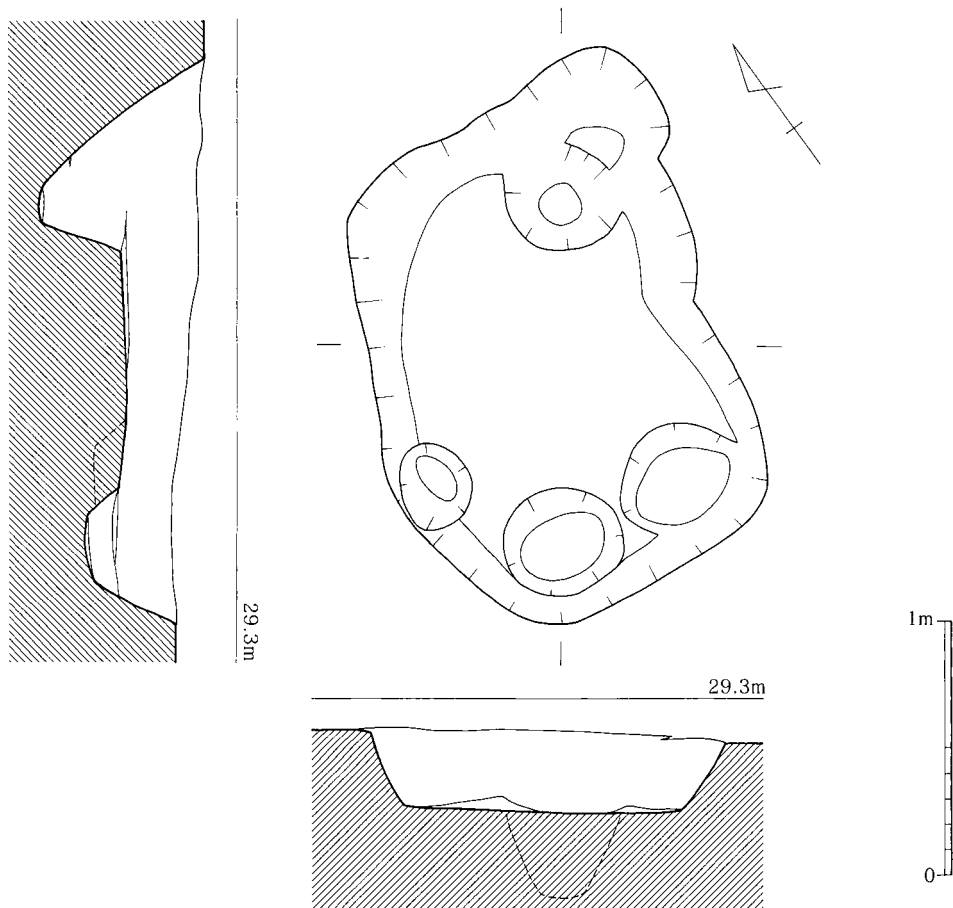
出土土器（第102図8） 図示できるのは1点のみである。15は高台付の須恵器杯身である。底径は7.5cmで、低平な高台を貼り付ける。杯部底面には板状圧痕が残る。色は外は灰色、内は赤灰色を呈する。

17号土坑（図版35・36、第105図）

1区やや東よりの中央、57号住居跡北側に位置する。南北1.5m、東西2.1mの床面中央に向かってゆるやかに傾斜する土坑となり、深さが最も深い中央部で検出面から31cmを測る。土坑内からは10cm程度底面から浮いた状態で、多量の土器と台石などが出土した。土坑の堆積状況は土層図や土器の接合状況から判断すると、まず3層が堆積するが、ほとんど土器を含まない。その後2層には大型甕など多量の土器を、土坑南西側から投げ込んで廃棄した状態が出土状況から推測できる。その後、台石などで使用した石をその時点でまだ濡んだ状態であった土坑中央に南西側から投げ込んだのが1層であろう。出土土器はやや幅があるものの、弥生時代中期後半～末の



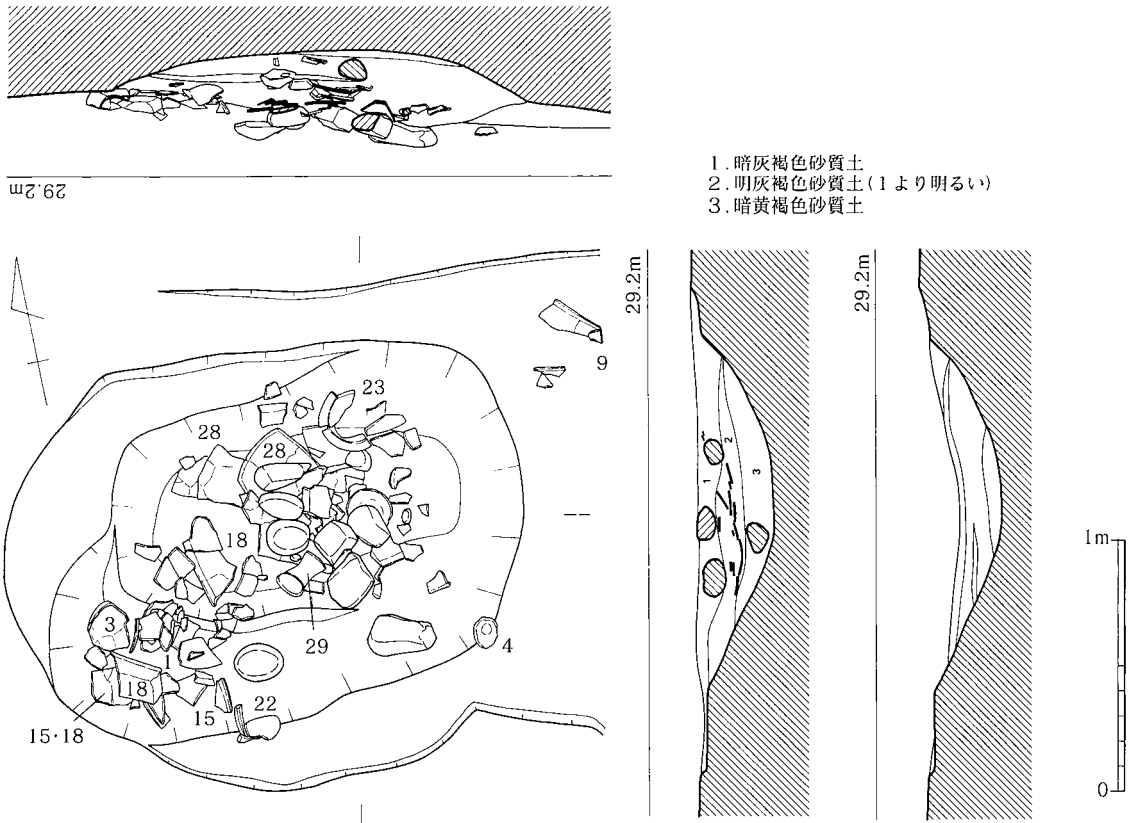
第 103 図 13・14 号土坑実測図 (1/30)



第104図 15号土坑実測図 (1/30)

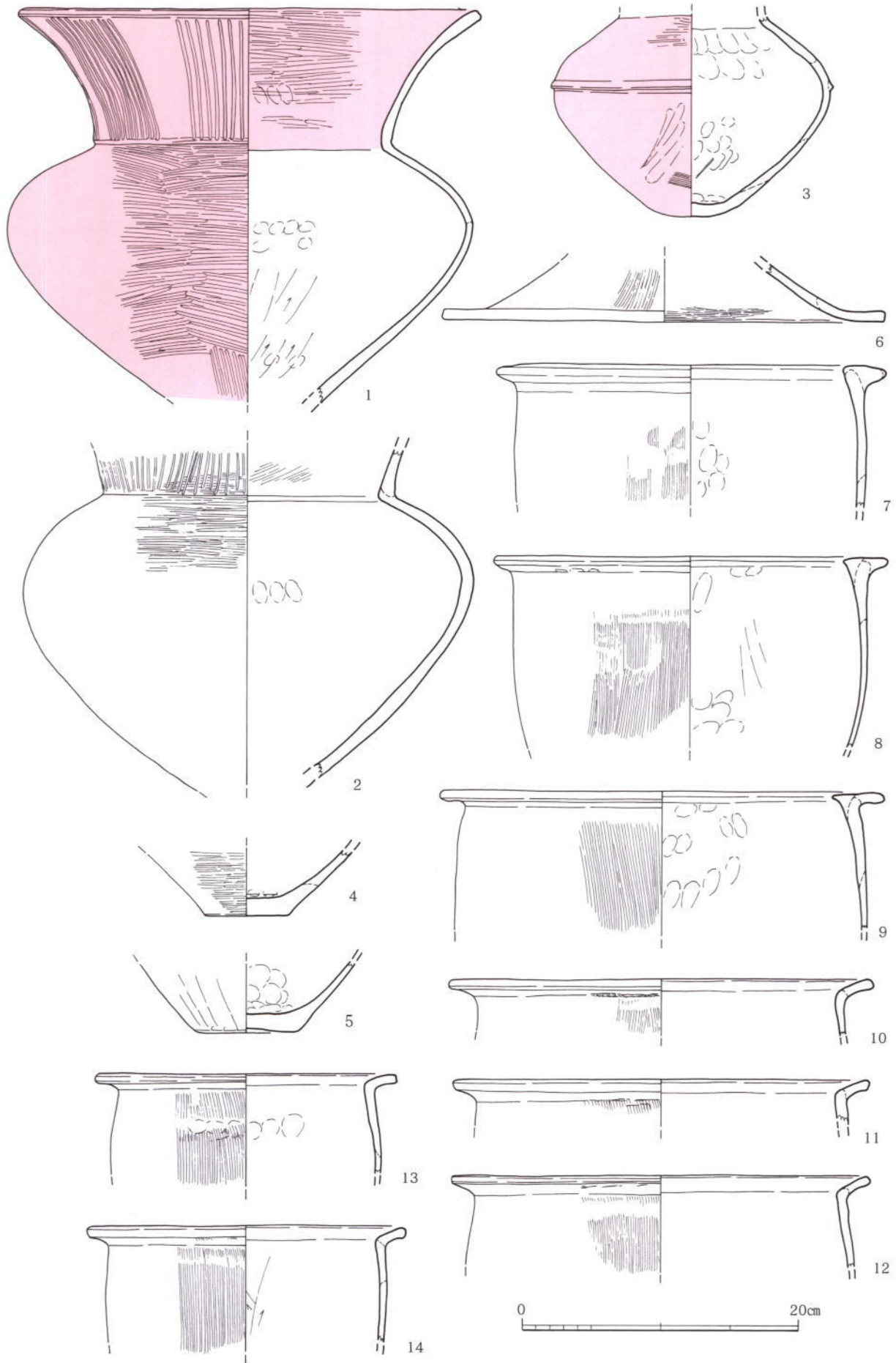
ものが主体である。

出土土器 (図版50・51、第106～108図) 出土土器はすべて弥生土器である。1・2は広口壺である。1は口径33.2cm、最大胴部径33.4cmの丹塗土器であり、最大胴部径が胴部上位で、やや肩が張る胴部に八の字に開く口縁部が付く。口縁端部はナデで面取りし、口縁部外面には11条前後を一単位とする放射状の分割暗文を施文する。頸部には暗文をする前の工具による凹線が残る。胴部は横ミガキを密に施し、底部付近は横ミガキのち縦ミガキを行う。口縁部内面にも横ミガキを密に施す。内面底部近くはナデ上げ痕が残る。丹塗りは外面全体と口縁部内面に施し、色は赤褐色～橙色を呈する。2は1よりも肩が張り、胴部最大径がより上にくるもの。全体的に摩滅するが、口縁部外面は単位ごとに分割し、施文するのではなく、全体放射状に暗文を施す。胴部肩部には横ミガキが、口縁部内面には斜めミガキが残る。元々丹塗りを塗布した可能性が高いが、現在では丹は確認できない。色は黄茶褐色を呈す。3は以東系の中型壺であり、底部は丸底である。胴部最大径は19.6cmを測り、この最大径部分には低い三角突帯を貼り付ける。外面肩部には横ミガキ痕が、底部近くには板ナデ痕があり、内面は全体的に黒化し、頸部と底部には指押さえ痕が良く残る。外面にはスリップ状の丹を塗布する。外は灰黄色～橙色、内は灰黒色を呈する。4・5は壺底部。4は底径6.0cmで、外面には横ミガキを密に施す。内外面とも黒化し、火を受けたものか。胎土には角閃石多く含み、外は暗橙褐色、内は灰黄色を呈する。5はやや上げ底の壺か甕の底部。底径は7.3cmで、外面が板ナデ、内面には指押さえ痕が良く残る。色は淡橙褐色を呈する。



第105図 17号土坑実測図 (1/30)

6は甕蓋口縁部。ゆるやかに八の字に開く器形で、口縁部がほぼ水平に屈曲する。口径は31.6 cmで、口縁端部はナデで面取りする。内外面ともハケ目のちナデで調整。外面にはススが薄く付着する。7～22は甕である。7は口縁部を玉縁状に肥厚させるもので、口径28.0 cmを測る。口縁内外面にはススが付着する。中期前半の土器か。外は灰黄褐色、内は暗橙褐色を呈する。8・9はT字状の口縁。8は口径28.4 cmを測り、口縁部がほぼ水平になる。内面にはナデ上げ、指押さえ痕が良く残る。外面はススがうすく付着し、胴部内面中位以下は炭化物が付着する。9は口径32.0 cmで、8に比べ、口縁外端部・内端部が長く、やや内側に傾くもの。外面には2次加熱痕とススが付着し、内面には炭化物が点在する。色は灰黄褐色～赤褐色を呈する。10～12はくの字状に外折する口縁部を持つ甕である。10は口縁端部を丸く収め、頸部外面には工具痕が残る。口径30 cmを測り、色は橙褐色～灰黄褐色を呈する。11は短い口縁部で、端部上面を上につまみ出すもので、口径29.6 cmを測る。外面には黒斑がある。色は灰黄褐色。12は10・11と比べ、口縁部がやや立つもので、端部はナデで面取りし、凹線状に窪む。口径30.0 cmを測る。外面頸部には工具痕が残り、口縁部外面は2次加熱痕がある。外は橙褐色、内は暗黄褐色～橙褐色を呈する。13・14は小形で口縁部が強く外折するもの。13はやや張る胴部に、やや内湾しながら強く屈曲する口縁部で、端部はナデで面取りし、口径21.6 cmを測る。色は灰黄褐色を呈する。14は口径23 cmで、口縁端部をやや肥厚させ、丸く収める。胴部内面には板ナデ痕がケズリ状に良く残る。色は橙褐色を呈す。15は口径28.3 cm、底径7.4 cm、器高34.7 cmを測る。やや張る胴部に、やや丸みを帯び、外折する口縁部を持つ。口縁端部上端は上方につまみ上げ、端部はナデで面取りする。口縁部内面にはハケ目、胴部中位には工具痕が残る。底部外面は強い横ナデを施す。外面胴部中位～底部にかけてススが付着し、内面には全体的に炭化物が付着する。角閃石を多く含み、



第 106 图 17 号土坑出土土器实测图 (1) (1/4)

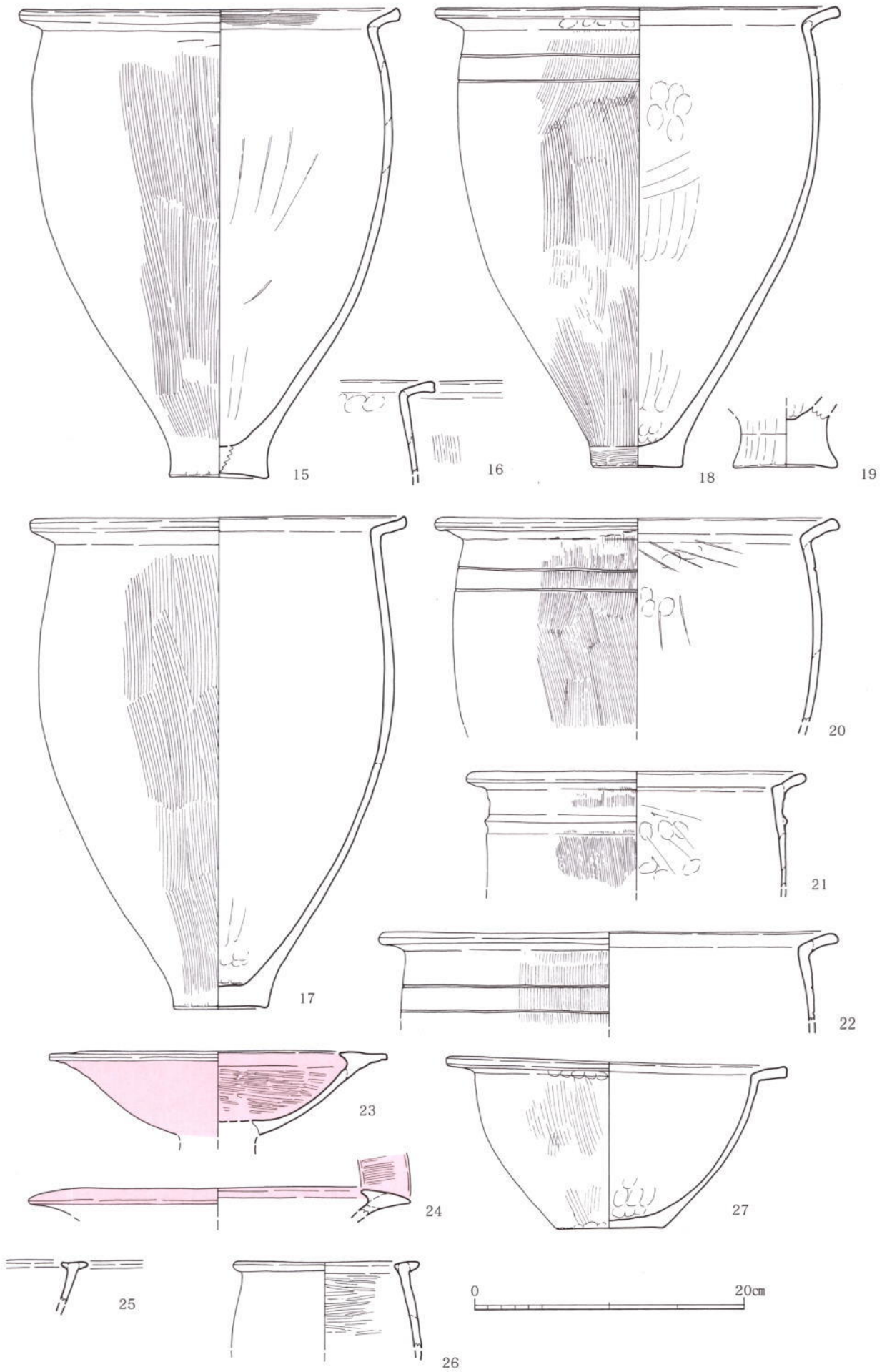
色は黄橙色～灰茶色を呈する。16は直角近くまで屈折する口縁部で、端部はナデで面取りする。外面は火を受け、器表が荒れており、また全体的にススが付着する。色は橙褐色～褐色を呈する。17は口径28cm、底径7cm、器高36.3cmの完形品。17は口縁部を強く屈曲させ、胴はやや張らないもの。口縁上端部を上方につまみ出し、端部はナデで面取りする。頸部外面には工具痕が残る。外面全体にはススが付着し、内面胴部中位以下は炭化物が付着する。外は黄橙色～灰黒色、内は黄褐色～灰黄褐色を呈する。18・20・22は口縁部下に2条の凹線を巡らすもの。18は丸みを帯びて屈曲する口縁部で、端部はナデで面取りする。胴部はやや張り、口縁部下3cmに2条の浅い凹線を巡らす。内面下部にはナデ上げ痕が残る。外面には2次加熱痕が残り、下部にはススと黒斑がある。内面には中位以下に炭化物が付着し、一部コゲ状に付着する。外は橙褐色～黒色、内は褐色～橙褐色を呈する。19は甕底部で、底径7.6cmを測る。やや上げ底で、厚さが3.3cmと厚いもの。外面はヘラナデで調整。外は灰橙褐色、内は黄褐色を呈する。20は口縁端部をナデで面取りする口縁部を持つ。口径29.6cmで、頸部外面には工具痕が残り、口縁部から2cmほど下には2条の凹線が巡る。内面胴部上位には工具痕が残る。外面には2次加熱痕とススが、内面胴部以下には炭化物が付着する。色は褐色を呈する。21は胴が張らず、ほぼ直立する胴部に、短く外折する口縁部が付く。口縁端部は丸く収め、頸部内面の稜は明瞭である。口径は25cmを測る。口縁から3cmほど下がった位置に、貼り付ける際の強いナデにより上下が窪んだ三角突帯を貼り付ける。胴部内面には工具痕が残る。色は褐色を呈する。22は口径が33.5cmで、口縁端部を丸く収める。口縁部下4cmほど下には2条の浅い凹線を巡らす。色は灰黄褐色～黄橙褐色を呈する。

23は鋤先口縁の高杯杯部である。口径は24.9cmを測り、口縁部は水平で、外端部はナデで面取りする。杯部外面は摩滅のため、調整は不明であるが、わずかに丹塗りの痕跡が残る。内面は横ミガキのち丹塗りを施す。色は赤褐色～橙褐色を呈する。24は口径28.6cmを測るが、小片のため自信がない。口縁部が全体的に下方を向き、内面には粘土を貼り付け、端部を斜め上につまみ出す。口縁頂部には放射状に暗文を施す。内外面には丹を塗布し、色は赤褐色を呈する。

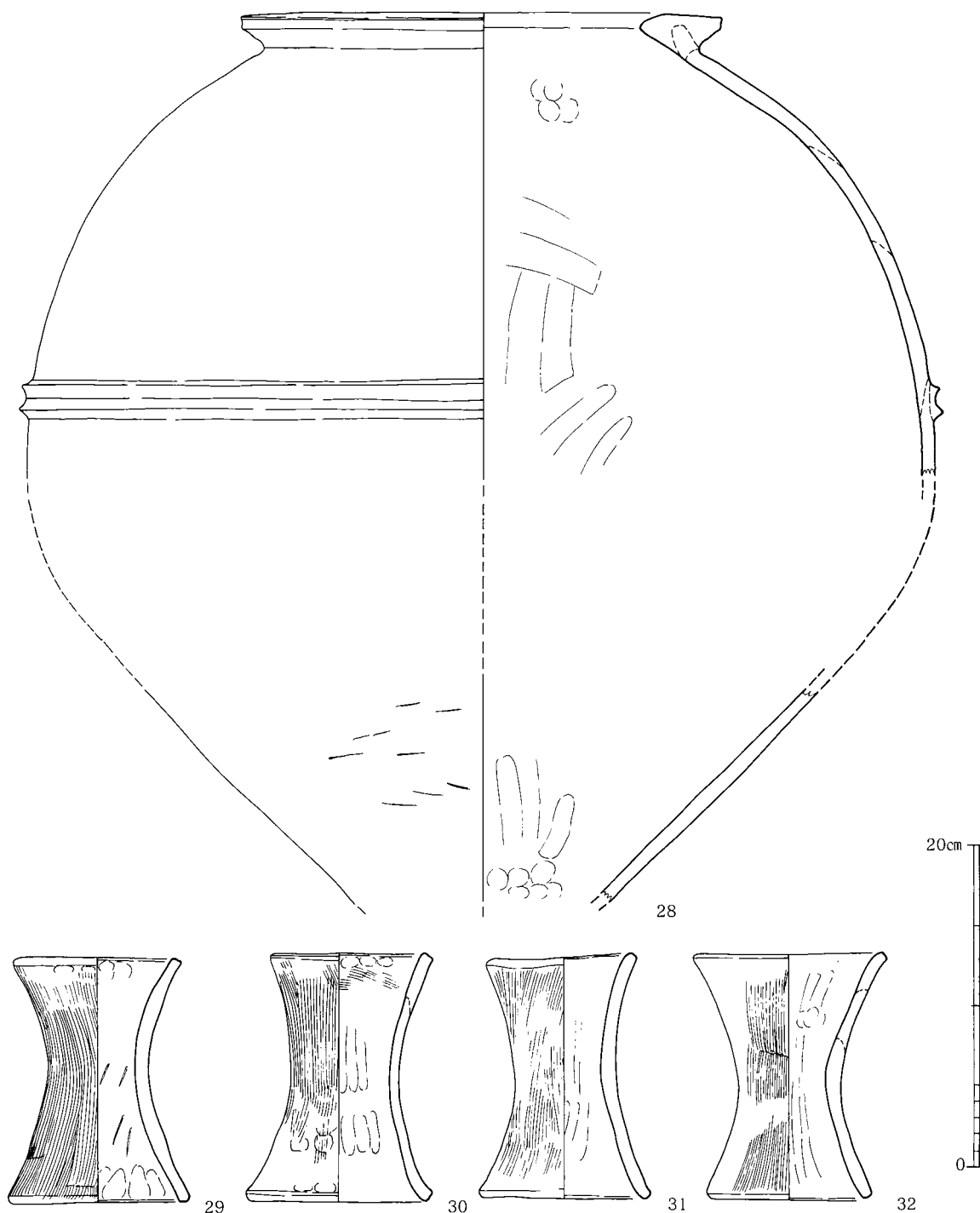
25・26は弥生土器鉢口縁部。25は口縁内外面に粘土を張り、鋤先口縁状になる。細粒は比較的少なく、色は淡橙色を呈する。26は口縁部内外面に粘土を貼り付けるが、内面はほとんど粘土を貼り付けず、わずかに突出させたもの。口径は13.5cmを測り、外面は摩滅のため調整不明であるが、内面には横ミガキが残る。色は灰黄褐色を呈する。27は口縁部を水平に屈曲させる鉢。口縁端部をナデで面取りし、やや内湾しながら平底の底部に至る。口径25.3cm、器高12.8cm、底径8cmを測る。外面には黒斑がある。色は黄橙褐色～黒色を呈する。

28は口径30.0cm、最大胴部径56cmの中期後半の大型甕であり、点線を挟んだ破片は底部に近い同一個体のもの。かなり口縁部が窄まる卵形の器形で、胴部にはM字状の突帯を貼り付ける。口縁外端部はナデで面取りし、内端部は丸く収める。外面底部近くには工具痕が、内面胴部中位には板ナデ痕が残り、内面底部はナデ上げ痕が残る。外面には黒斑がある。内外面とも厚くススが付着するため、炉など火を使用するものの部材に再利用した可能性がある。外は茶褐色～灰黒色、内は黄橙色を呈する。

29～32は鼓形の器台である。29は口径10.4cm、底径11.2cm、器高15.1cmの完形品。口縁・底部端部ともナデで面取りする。内面には工具痕、指押さえ痕が残る。色は黄橙褐色を呈する。30は口径9.1cm、底径11.6cm、器高15.3cmを測る。口縁・底部端部はナデで面取り、口縁部内面にはハケが残り、内面屈曲部にはナデ上げ痕がわずかに残る。内外面の一部黒化する。色は黄褐色を呈する。31は口径8.7cm、底径9.9cm、器高15.3cmで、口縁・底部端面はいずれも丸く収める。内面にはわずかに縦ナデ痕が残る。色は黄褐色を呈する。32は口径12cm、底径9.2cm、器高15.2cmで、口径が底径を上回るもの。口縁・底面端面はナデで面取りし、底部内面近くはナデ上げ痕が残る。外面口縁部、内面底部にはススが付着する。色は黄褐色～灰黄褐色を呈する。



第107图 17号土坑出土土器实测图(2)(1/4)



第108図 17号土坑出土土器実測図(3)(1/4)

c. 溝

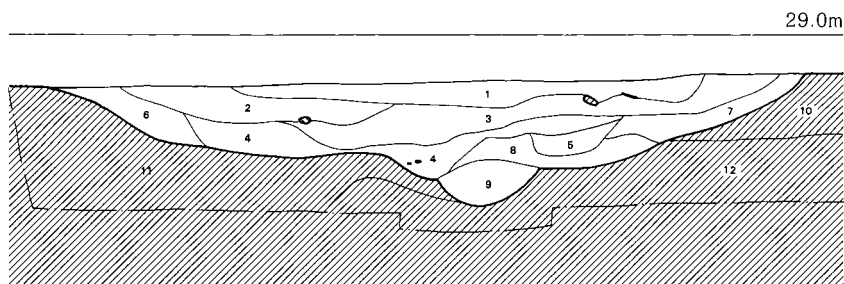
8号溝 (第109図)

調査区中央付近北寄りに位置する、北西-南東方向の溝である。第1面14・15・16・31号住居跡、第2面12号溝に切られる。西側は現在、長さ17m残る。深さは全体的に0.2m前後で、最深部は0.5mを測る。埋土は黄褐色砂質土を中心としており、弥生中期後半を中心とする土器が多く出土した。他に台石(第132図17)が出土している。

出土土器 (図版51・52、第110・111図) 1は口縁が八の字に開く、弥生土器広口壺で、口縁部は口縁内面に粘土を貼り付け、鋤先口縁をなす。9号溝との接合資料である。口縁内端部は、

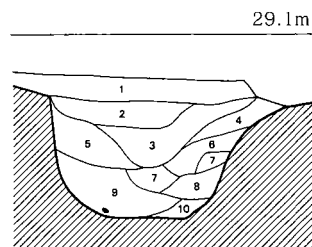
内側につまみ出す。口頸部外面には6本以上を一単位とする分割暗文を放射状に施すが、摩滅のため、正確な単位数は不明。口径41.2cm、胎土は細粒を多く含み、元々丹塗りを施したものと考えられるが、摩滅のため、全く丹が残存していない。内外面にはススが付着し、何かに転用したものか。色は黄茶褐色～暗褐色を呈する。2・3は弥生土器丹塗の広口壺。2は頸部が開く器形で、口径は32.4cmを測り、口縁端部はナデで面取りする。外面には縦ミガキ、内面には横ミガキがわずかに残る。内面には丹が残るが、外面は摩滅のため丹が残っていないが、元々塗布されていたものか。胎土は良いが、焼成はやや甘い。外は黄茶褐色、内は赤褐色。3は口径29.6cm、底径7cm、器高27.2cmを測る。頸部の外反度が強く、最大径が胴部上位になる器形。口縁端部はナデで面取りし、底部はやや上げ底になる。胴部の底部近くは板ナデで調整し、その上位は横ミガキを密に施す。口縁部内面は横ミガキを施し、胴部内面中位には工具痕が残り、胴部下部にはナデ上げの稜が残る。外面全体、口縁部内面は元々丹塗りがされていたが、現在では一部のみ残る状態である。色は黄褐色～灰黄色。4は壺か甕底部で、底径7.5cm。外面には板ナデ痕が残る。外面全体は黒化し、内面は炭化物が付着する。色は灰黄褐色を呈する。

5は口縁外面に粘土を貼り付け、T字状の口縁部になり、口縁外端部は少し下方を向くもの。口径は33cmで、内面胴部中位には炭化物が付着する。細粒は少量含み、色は灰黄褐色～黄橙褐色を呈する。6～19は口縁部をL字状に外折する弥生土器甕である。6は肥厚する口縁端部を丸く収め、頸部外面には指押さえ痕が残る。口径27cmを測る。外は灰黄褐色、内は淡橙褐色を呈する。7はやや張る胴部に、強く外湾する口縁部を持ち、端部はナデで面取りする。口径27.8cmで、頸部外面にはハケ工具痕が残る。外面全体にはスス、内面胴部中位には炭化物が付着する。色は橙褐色～褐色を呈する。8はほとんど胴が張らず、そのまま底部に向かって窄まる器形。口径32cmを測り、ほぼ水平近くまで外折する口縁部で、端部はナデで面取りし、凹線状になる。口縁上端部は上方につまみ上げる。頸部外面にはハケ工具の痕跡が列点状に残る。色は黄褐色を呈する。9～11は胴が張り、くの字状に屈曲する口縁部を持つ。口縁端部は面取りし、凹線状になる。9の口縁上端部は上方につまみ出したもの。口径30cmで、内面にはなで上げの稜がわずかに残る。外面は2次加熱痕。口縁部内面には黒斑あり。色は灰黄褐色～橙褐色。10は口径32cmで、口縁端部を肥厚させる。頸部外面には工具痕が残り、外面にはススが付着する。焼成はやや甘く、胎土も細粒を多く含む。色は黄橙褐色を呈する。11は口径30cmで、頸部外面には工具痕が、口縁部内面にはハケが残る。胴部内面には炭化物が付着する。色は灰黄褐色を呈する。12は胴部が丸みを帯びる中型甕。口径24cmを測る。口縁端部は肥厚し、丸く収めたもの。口縁下3cmには1条の凹線を刻むが、途中で刻まれない箇所もある。外面全体にはススが付着し、内面には炭化物が濃く付着する。胎土には角閃石多く含み、色は黄褐色～灰褐色を呈する。13～16は口縁端部をナデで面取りし、13が口径28cmで、14～16はすべて口径31cmを測る。13は外面に2次加熱痕とススが付着する。色は黄橙褐色を呈する。14は口縁部を肥厚させ、頸部外面には工具痕が残る。口縁下3cmには浅い凹線があるが、小片のため全周するかは不明。色は茶褐色を呈する。15は頸部外面に工具痕が残る。色は灰黄褐色を呈する。16は直立する胴部で、口縁上端部をわずかに上方につまみ出したもの。頸部外面には工具痕が残り、胴部外面にはススが薄く付着し、内面には炭化物が付着する。色は灰黄褐色を呈する。17はやや張る胴部に外湾する口縁部が付く。口径は29cmを測り、口縁端部を丸く収め、頸部外面は強い横ナデで凹線状に窪む。口縁下2.5cmほどには3条の浅い凹線を施すが、摩滅のため不明瞭である。口縁部内面にはハケが残り、胴部には板ナデ痕が残る。胴部外面下部は黒化し、内面中位以下は炭化物が付着する。色は灰黄褐色～茶褐色を呈する。18は短い口縁部で、端部はナデで面取りする。胴部外面は縦ハケで、ハケ工具痕が残る。胴部内面にはナデ上げの稜が残る。外面全体ススが付着し、胴部内面には炭化物が付着する。色は褐色を呈する。19・29は口縁部下に三角突帯を貼り付け、口縁端部をナデで面取り



<溝8土層>

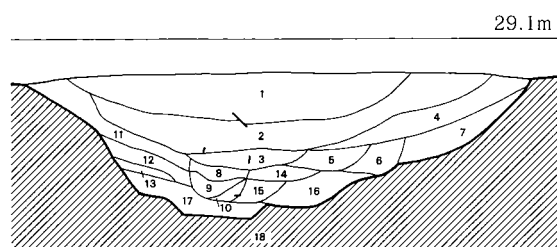
1. 暗黄褐色砂質土(やや粘、土器含む)
2. 黄褐色砂質土(やや粘、土器含む)
3. 黄褐色砂質土(暗褐色粘土が縞状に入る)
4. 黄褐色砂質土(2より暗い、やや粗い砂、ごく小さい礫含む)
5. 褐色砂質土と灰色粗砂混じり
6. やや明るい褐色砂質土(やや粗い白色砂含む)
7. 褐色砂質土
8. 褐色砂質土(7より砂が細かい)
9. やや暗い褐色微砂
10. 褐色砂質土
11. 褐色砂質土(やや粗い白色砂含む)
12. 褐色微砂



<溝11土層>

1. 暗褐色砂質土(やや粘、包含層)
2. 3と4の混じり
3. 暗褐色砂質土(やや粘、土器片含む)
4. 褐色砂質土
5. 暗褐色砂質土(4よりやや暗い、6に似る)
6. 暗褐色砂質土(3よりやや暗い)
7. 黄褐色微砂と3の混じり
8. 暗褐色微砂
9. 暗褐色砂質土(2より細かく、粘質強い)
10. 灰褐色微砂+9

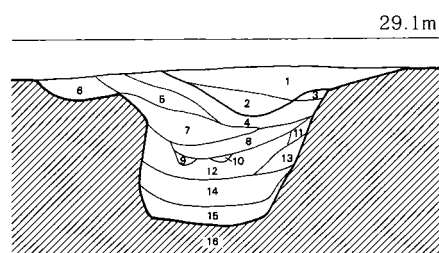
溝11



<溝12土層>

1. 褐色砂質土(やや粘、土器片含む)
2. 灰褐色砂質土(やや粘、土器片含む)
3. 灰褐色微砂(土器片含む)
4. 灰褐色砂質土(やや粘)
5. 暗灰褐色微砂
6. 暗灰褐色砂質土(やや粘)
7. 褐色微砂
8. 黄褐色微砂と灰色微砂、暗灰褐色の互層
9. 黄褐色微砂と暗灰褐色粘土、暗灰色砂質土(やや粘)の混じり
10. 灰黄褐色砂質土(やや粘)
11. 黄褐色砂質土(やや粘、土器片含む)
12. 暗褐色砂質土(やや粘、土器片含む)
13. 黄褐色微砂と12の混じり
14. 暗褐色微砂
15. 灰褐色微砂
16. 暗灰色粘土と15の混じり
17. 12と18の混じり
18. 黄褐色微砂と灰色砂の混じり(地山)

溝12



<溝13土層>

1. やや明るい褐色砂質土、土器片含む(炭粒少量含む)
2. 褐色砂質土(やや粘)
3. 淡褐色微砂
4. 褐色砂質土(2より暗い)
5. 暗褐色砂質土(炭粒少量含む、やや粘、土器片含む)
6. 褐色微砂と灰色微砂混じり
7. やや明るい褐色砂質土
8. 黒褐色砂質土(土器片含む)
9. 褐色砂質土(やや粘)
10. 明褐色褐色粘質土
11. 淡褐色微砂
12. 暗褐色砂質土
13. 灰褐色砂質土(やや粘)
14. 暗褐色砂質土(炭粒少量含む)と黒褐色粘質土混じり
15. 暗褐色砂質土と黒褐色粘質土の混じり(14より黒褐粘多い)
16. 褐色微砂と青灰色細砂の混じり(地山)

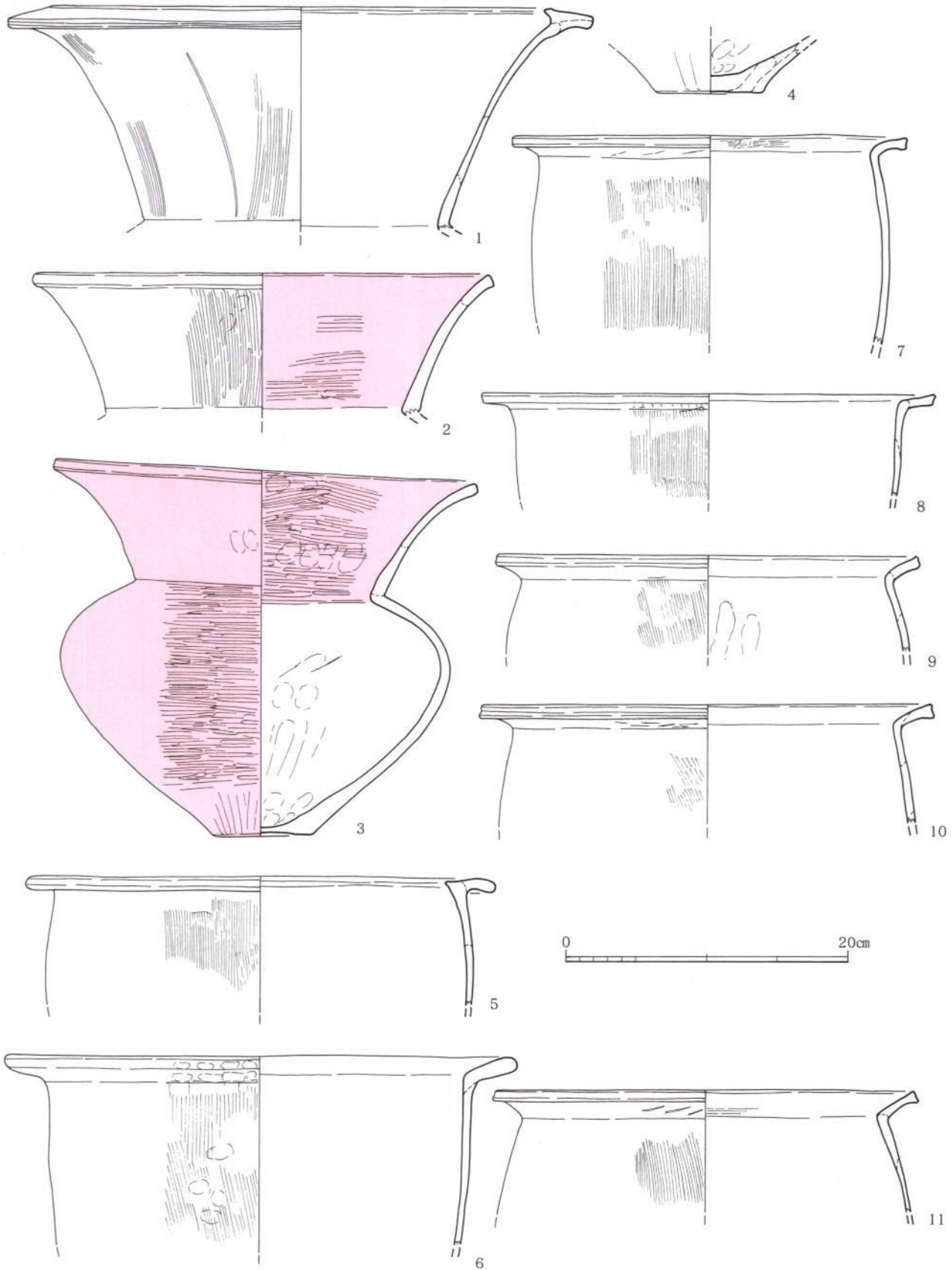
溝13

1・2: 2号円形周溝状遺構

第109図 8・11～13号溝土層実測図 (1/30)

するもの。19は長い口縁部で口径29cmを測るが、小片のため径に自信がない。外は橙色～褐色、内は暗黄茶褐色を呈する。20は強く屈曲する口縁部で、口縁下端部を下方につまみ出したもの。胎土には細粒を多く含み、色は黄橙褐色を呈する。

21～30は甕底部片で、底径は22で6.5cm、30で8cm、その他は7cm前後。22・27・28・30はやや上げ底を呈し、いずれも底部外端部は最後に横ナデを施す。外面には21はスス、23・24・29は火を受け赤変し、28は黒斑がある。27以外は内面に炭化物が付着する。21は胴が張らない器形である。色は灰黄褐色～褐色を呈する。22はレンズ状の上げ底。外は黄橙褐色、内は灰黄褐色～灰黒色を呈する。23は底部外端部にハケ工具痕が残る。外は灰茶褐色、内は灰褐色を呈する。24～28は灰黄褐色～橙褐色を呈する。27はレンズ状の底部で、底部外端部を外に突き出したもの。底部は厚く、2.6cmを測る。内面にはナデ上げ痕が残る。29は底部が厚めのもので、底部外端部をわずかに突出させたもの。内面には工具痕が残る。外は暗黄茶褐色、内は暗橙褐色



第110图 8号沟出土土器实测图(1)(1/4)

を呈する。30はやや上げ底で、厚さ1cmと薄い底部。底部外端部をわずかに突出させる。外は灰黄褐色、内は灰褐色を呈する。

31～33は弥生土器高杯杯部片である。いずれも口径が20cm前後である。31・32の杯部内面は横ミガキが残る。31は口縁部が下がり気味で、外端部はナデで面取りし、少し窪む。内端面はわずかに内につまみ出す。杯部はやや深めで、口縁部頂部にはススが付着する。色は黄橙褐色。32はほぼ水平の口縁部で、外端部はナデで面取りし、内端部はやや斜め上につまみ出したもの。色は橙色で元々、丹を塗布したものか。33は口縁部が下がるもので、外端部は丸く収め、内端部は斜め上方に鋭くつまみ出したもの。外面全体にはススが付着する。色は灰黄褐色を呈する。34は高杯脚部片である。大きく開く杯部に、円柱状の脚柱部がつく。杯部内外面は縦ミガキ、脚柱部外面は縦ハケのち縦ミガキ、内面は四角形の棒状工具で押すことで、杯部と接合し、その後四角形の棒状工具により絞りも行ったもの。外面は丹塗りをを行う。胎土は細粒少なく、外は橙褐色～赤褐色、内は灰黄褐色を呈する。

35～37は鼓形の器台である。いずれも外面は縦ハケ、内面屈曲部にはナデ上げの稜が残る。35は口径11cm、底径13.4cm、器高15.6cmで、口縁端部はナデで面取り、底部端部は外につまみ出したもの。色は黄橙褐色を呈する。36は底径10cm、37は底径12cmで、いずれも外は灰黄褐色、内は橙褐色を呈する。36の底部端部は丸く収め、37はナデで面取りし、底部外端部をやや外につまみ出したもの。

9号溝 (図版36)

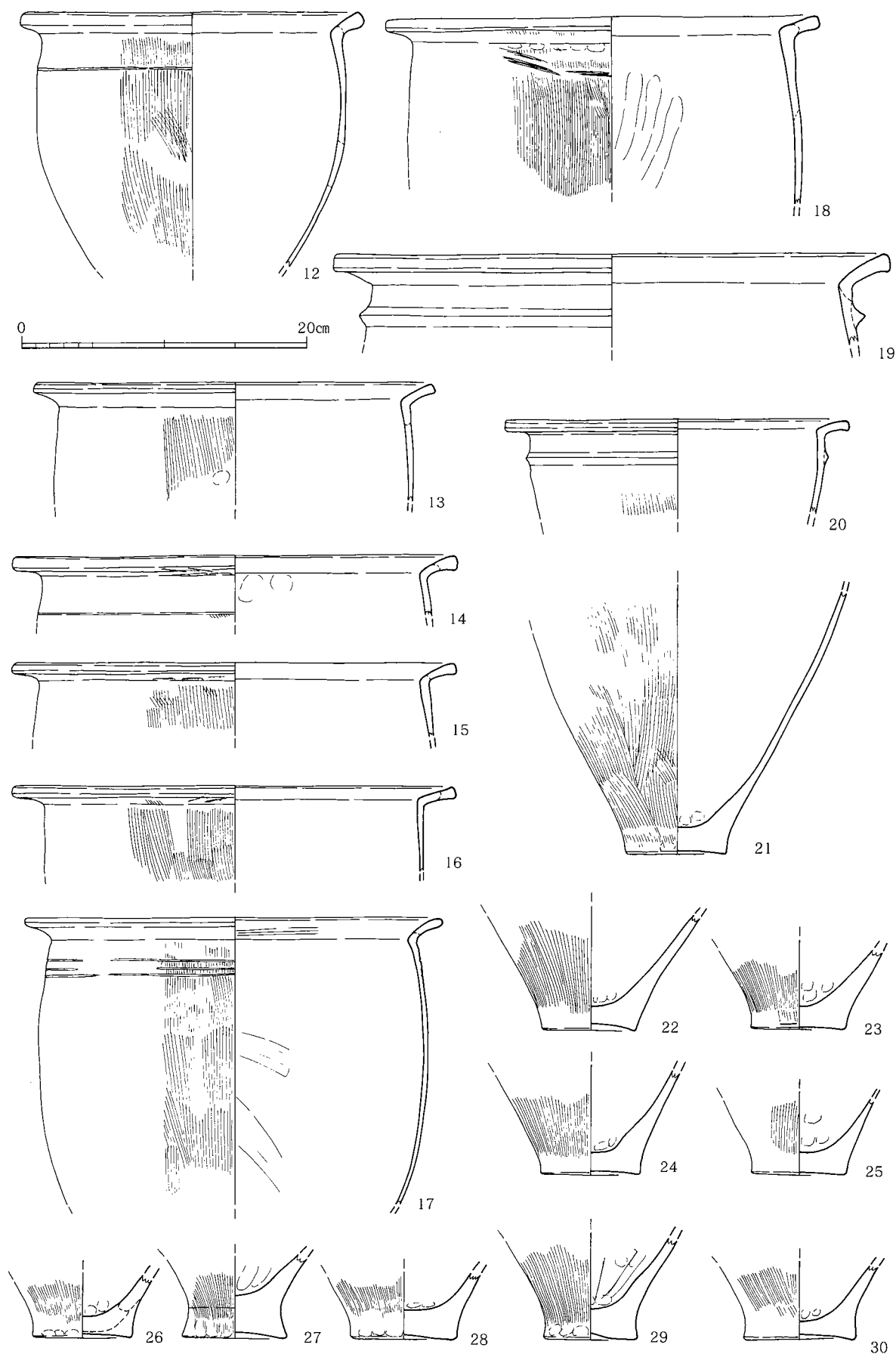
1区中央北壁付近に位置する北西－南東方向の溝である。11号溝に切られる。長さ15.4mを測る。幅は0.7m、深さ0.5mだが、東端付近は幅1.4m、深さ8cmと次第に浅くなる。出土土器から時期は、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭と考えられる。埋土からノミ状鉄器(第134図2)が出土。

出土土器 (第113図38～42) 38は弥生後期の小型無頸壺。口径11.9cmで、口縁部は強く外湾し、端部はナデで面取りする。丸く張る胴部内外面にはハケが残る。胎土は比較的良く、色は暗橙褐色を呈する。39は壺か甕底部で、底径は10.8cmを測る。底部外面はヘラナデで調整し、外端部には粘土接合痕が残る。焼成は甘く、色は白黄褐色を呈する。40は土師器の畿内系二重口縁壺口縁部である。強く外反する口縁部で、口縁端部と屈曲部の稜は鋭く、口縁端部はナデで面取りする。外面はハケのちミガキを施したものか、内面にはミガキが残る。口径は17cmを測る。外は橙色、内は暗黄褐色を呈する。41は高台付の須恵器杯身であり、底径8.9cmを測る。やや高めの高台で、端部は丸く収める。胎土は細粒を多く含み、焼成は甘く、色は淡灰色を呈する。42はかなり歪む須恵器高杯脚裾部で、底径は10.9cmを測る。屈曲部内面と底部下端部との高さの差はほとんどなく、底部外端部は下方につまみ出したもの。細粒をやや多く含み、色は暗灰色を呈する。混入品。

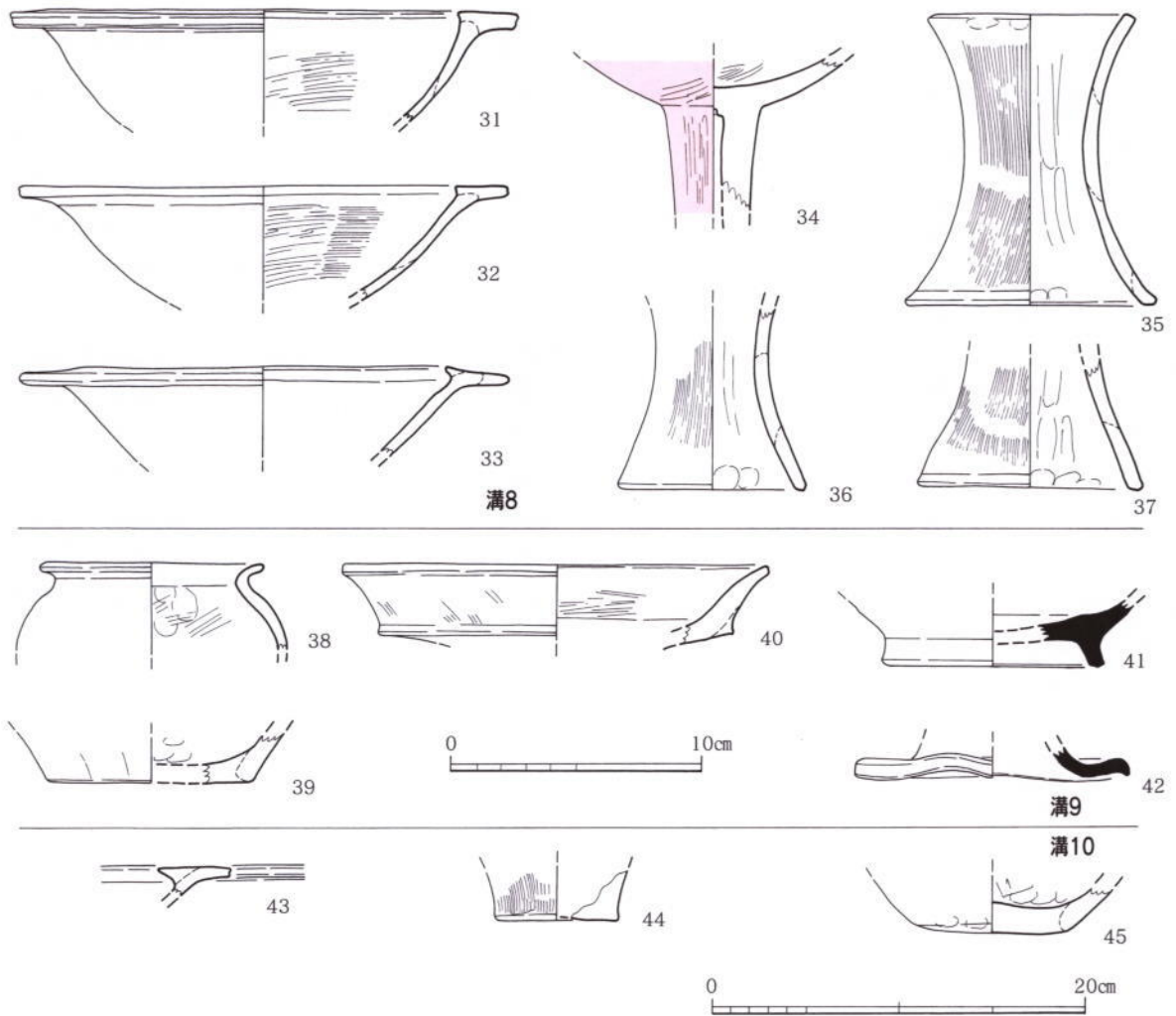
10号溝

1区中央やや南、6号溝南に位置する。第1面20・22号住居跡、4号土坑に切られている。溝は22号住居跡により、南壁のほとんどがなくなっており、北壁で4.4m残るのみである。規模が分かる西端部で、幅1.6m、深さ26cmを測る。埋土は暗茶褐色砂質土のみで構成される。時期は7世紀前半の22号住居跡より前の溝であり、弥生土器も出土しているが、量が少なく時期を確定できない。第2面の溝である。

出土土器 (第112図43～45) 43は弥生土器高杯口縁部。鋤先口縁で、口縁外端部はナデで面取りする。胎土は良く、色は橙色。44は弥生土器甕底部。底径は6.6cmを測り、色は橙褐色。45



第111图 8号沟出土土器实测图(2)(1/4)



第112図 8 (3) ~ 10号溝出土土器実測図 (31 ~ 39, 43・44は1/4、他は1/3)

は土師器甕底部で、底径5.8cmの小さな丸底を有する。内面にはヘラケズリを施す。色は橙褐色～黄褐色を呈する。

11号溝 (第109図)

1区中央北壁付近に位置する南北溝である。調査区外へのび、北端は不明。9号溝より古く、12号溝より新しい。調査区北壁から溝南端までは7.0mを測る。幅0.4～0.9m、深さ0.1～0.5mと、幅、深さとも一定しない。埋土は暗褐色砂質土を中心とする。弥生土器片が出土したが、図示できるものはない。

12号溝 (図版37、第109図)

1区中央付近に位置する東西溝で、溝南半を第1面28・31・32号住居跡に切られる。65・66号住居跡、8号溝より新しい。地山と埋土の識別が難しく、検出できたのは溝西端から14mの地点までである。この地点から東へ7mの地点に設定したトレンチでは12号溝の断面を確認できなかったため、この7mの間に東端が存在する。幅1.8～2.0m、深さは0.2m前後、中央付近で0.55mを測る。埋土は砂質土、微砂を中心とし、弥生土器・土師器が出土したが、溝は古墳時代前期前半の時期と思われる。

出土土器 (図版52、第113図1～13) 1は弥生土器広口壺の口縁部。鋤先口縁で、口縁外端部はナデで面取り、内端部は内側につまみ出すもの。口径は26 cmを測り、内面には横ミガキが残る。色は橙褐色を呈する。2は弥生後期末～庄内式併行期に位置づけられるV様式系の加飾壺口縁部。口縁下端部は強く下方に突出し、口縁外端部には波状文を密に施し、口縁頂部にも同様の波状文を施す。胎土は精良で、色は淡黄褐色を呈する。3は中型の脚付壺であり、丸い胴部に八の字状に開き、高さのある脚が付く。熊本県北部～南筑後地域では弥生時代後期に脚付の甕・壺・鉢が出土することが知られており、筑后市蔵数遺跡137号住居跡出土例などは胴部の張りなどは異なるが、大まかな形態は似ると思われる。弥生後期後半のもの。口縁部は短く直立に近いものになると考えられる。胴部外面は粗いハケ目を施し、内面下部はハケ目、上部は板ナデのち強いナデを施す。脚部端部はナデで面取りする。底径9.2 cm。最大胴部径14.6 cmを測り、外面は黒斑、内面は黒化する。色は黄茶褐色～暗茶褐色を呈する。

4～6は弥生土器甕である。4は口径31.4 cmを測り、短く、くの字状に屈曲する口縁部で、端部は面取りする。胴部外面には黒斑、口縁部内外面にはススが付着する。色は白黄褐色～黄橙褐色を呈する。5は内湾する口縁部で、端部はナデで面取り。口径は31 cmで、口縁部下2.5 cm下には2条の凹線を巡らす。焼成は甘く、色は黄褐色～褐色。6は胴部が張り、口縁端部はナデで面取りする。口径28.4 cmで、頸部外面には工具痕がわずかに残る。色は黄茶褐色～橙褐色を呈する。7は甕底部で、底径は9.5 cmを測る。外面は強い縦ナデを施し、稜が残る。外面は黒化する。色は灰黄褐色を呈する。8は鼓形の器台で、口径は10.4 cmを測る。内面にはナデ上げの稜が残る。色は白黄褐色を呈する。9は弥生土器支脚で、外面にはタタキ痕が残り、口縁部は内側に張り出すもの。胎土は良く、色は黄茶色を呈する。

10は土師器甕で、28号住居跡・9号溝との接合資料。口径19.4 cm、最大胴部径は胴部中位よりやや下にあり、28.2 cmを測る。口縁外端部はわずかに外につまみ出し、頂部はナデで面取りする。胴部外面下部は右上がり、胴部中位以上は左上がりのハケ。口縁部内面にはハケが残り、内面頸部までヘラケズリを施す。外面には黒斑があり、胴部内面には炭化物が付着する。色は灰黄褐色～黒色を呈する。11は小型丸底壺で、丸い胴部に短く直線的に外傾する口縁部を持つ。口径11.4 cm、器高9.7 cm。外面はハケのちナデ、口縁部内面は横ハケ、胴部内面は頸部までヘラケズリを施す。頸部外面には黒斑があり、色は灰黄褐色を呈する。12は土師器模倣杯で、口径13.7 cm、器高4.2 cmを測る。天井部は浅い手持ちヘラケズリ、内面天井部には工具痕が残る。色は橙褐色を呈する。13は高台付須恵器杯身で、底径9.4 cmを測る。低平な高台部で、外面には粘土接合痕が残る。色は灰色を呈する。

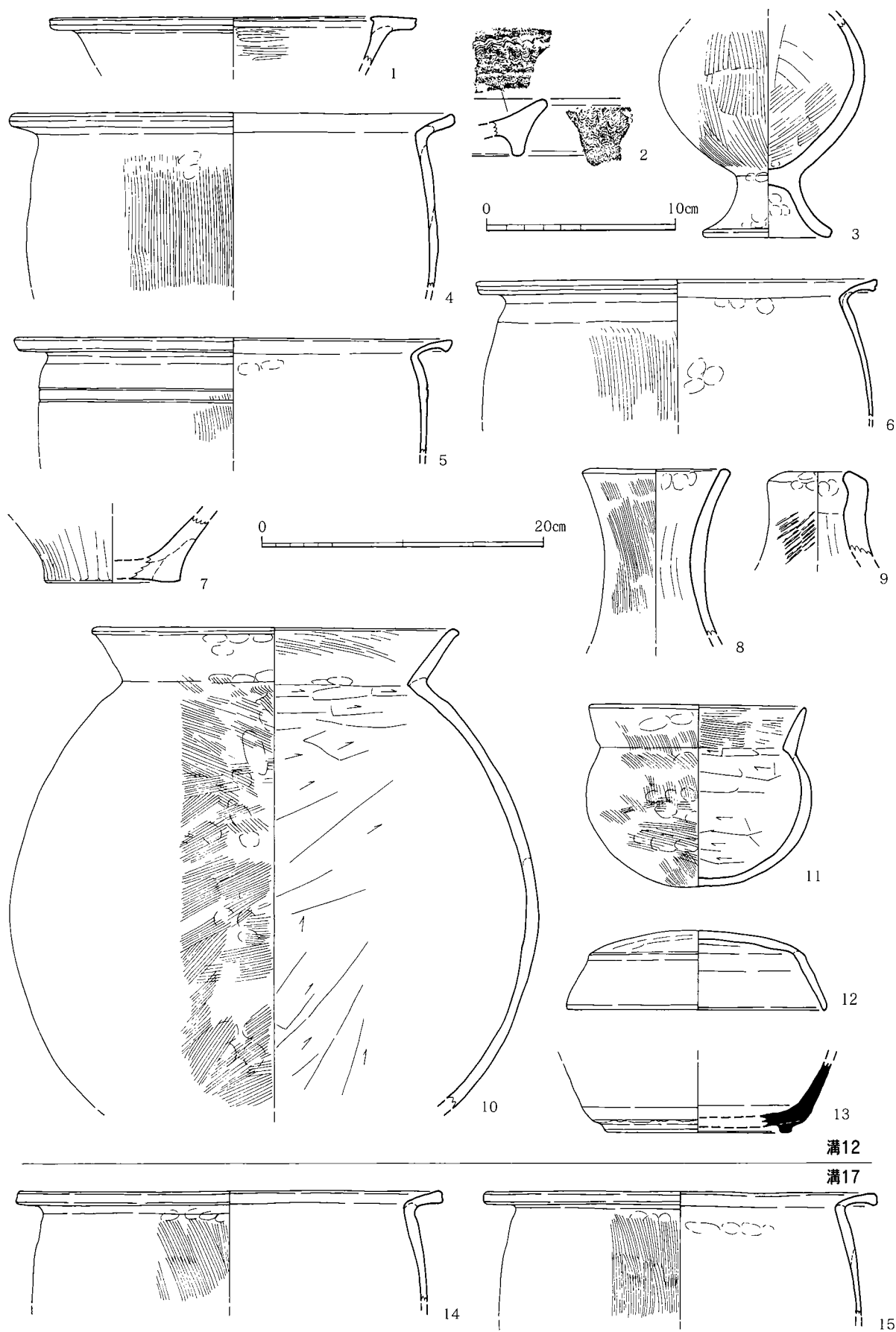
13号溝 (図版37、第109図)

調査区東部北壁付近に位置する南北溝である。2号円形周溝状遺構の下層で検出した。12号溝に切られるため、南端は不明。長さ4.3 m、幅0.65～0.8 m、深さは0.6 mを測る。埋土は暗褐色砂質土を中心とする。弥生土器片が出土したが、図示できるものはない。

17号溝

1区東南端、62号竪穴住居跡南に位置する。上層には第2面60号住居跡があり、62号住居跡を検出するため、60号住居跡床面を下げたところ検出した。北端はピットによって切られ、長さ南北2.0 m、幅最大0.6 m、深さ12 cmで、溝南端が広がり、そのまま調査区外まで延びる小溝である。埋土は暗黄褐色砂質土を呈する。弥生時代中期後半の溝である。

出土土器 (第113図14・15) 14・15は弥生土器甕口縁部。強く外折する口縁部で、口縁端部はナデで面取りする。いずれも外面にはスス、内面には炭化物が付着する。胎土はいずれも良好。



第113図 12・17号溝出土土器実測図 (1~9・14・15は1/4、他は1/3)

14は口縁端部がナデによりやや窪む。口径30.2cmを測るが、小片のため自信がない。色は灰黄褐色。15は口縁端部を肥厚させるもので、胴部外面は細かいハケを密に施す。口径は28cmを測る。胎土は細粒をあまり含まず、色は橙褐色を呈する。

d. 円形周溝状遺構

1号円形周溝状遺構 (図版28、第114図)

1区南西隅、第1面12号住居跡南西に位置し、第1面12号住居跡・第2面49号住居跡に切られ、50号住居跡を切る。北・東側の周溝は未調査であるが、平面形態はほぼ正円に近い径5m近くのドーナツ状を呈すると推測される。周溝の幅はほぼ60cm前後で一致し、周溝の深さは南側で12cm前後、北側で20cm前後であるが、これは表土剥ぎの段階での高低差が影響したものの。周溝を挟んだ外側と内側は、内側が南で3cm、北で12cm低い。内側では3基のピットを確認した。いずれも深さが5cm前後浅いもの。出土土器は弥生中期後半の土器1点しか図示できない。

出土土器 (第116図1) 弥生土器甕口縁部片である。口縁端部をやや肥厚させ、端部をナデで面取りする。色は淡橙褐色を呈する。

2号円形周溝状遺構 (第114図)

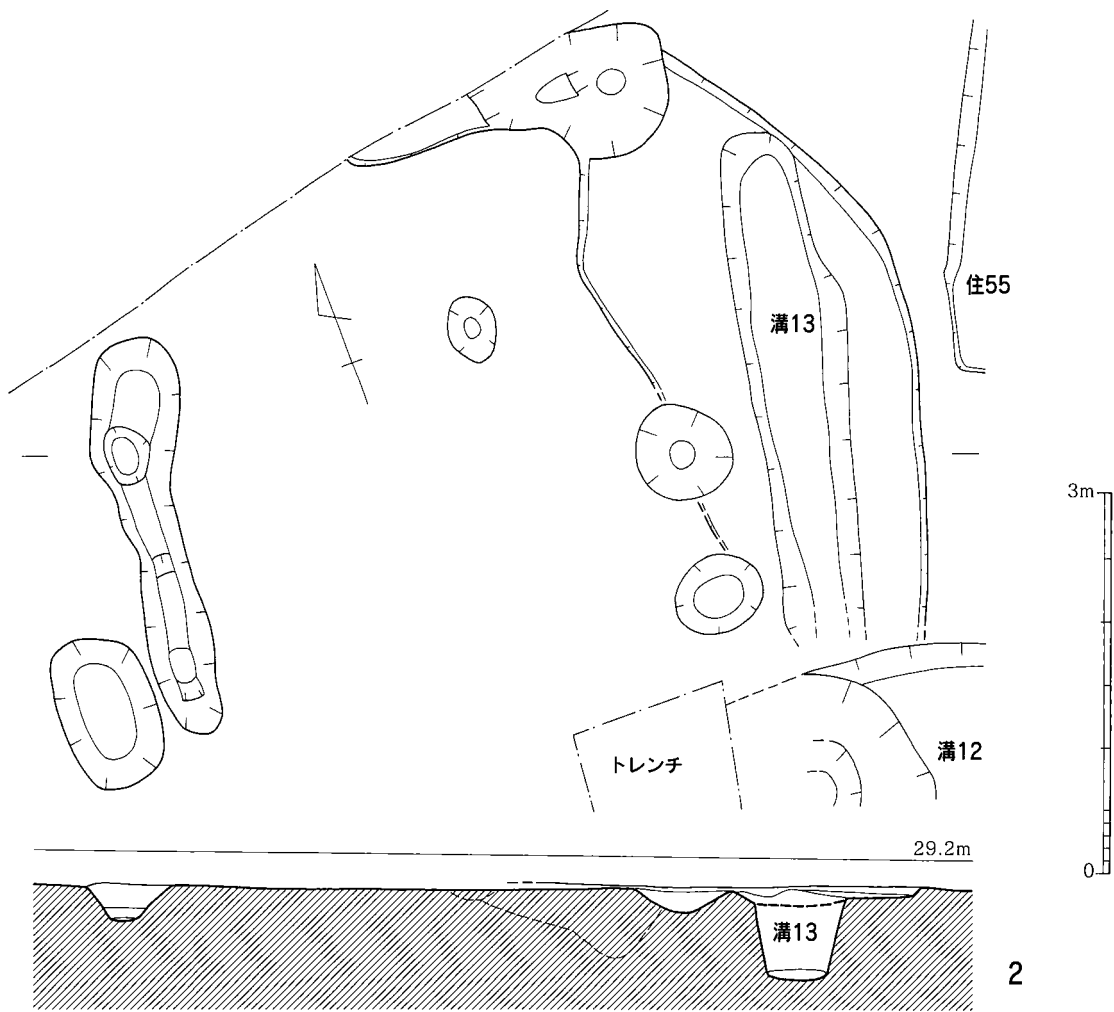
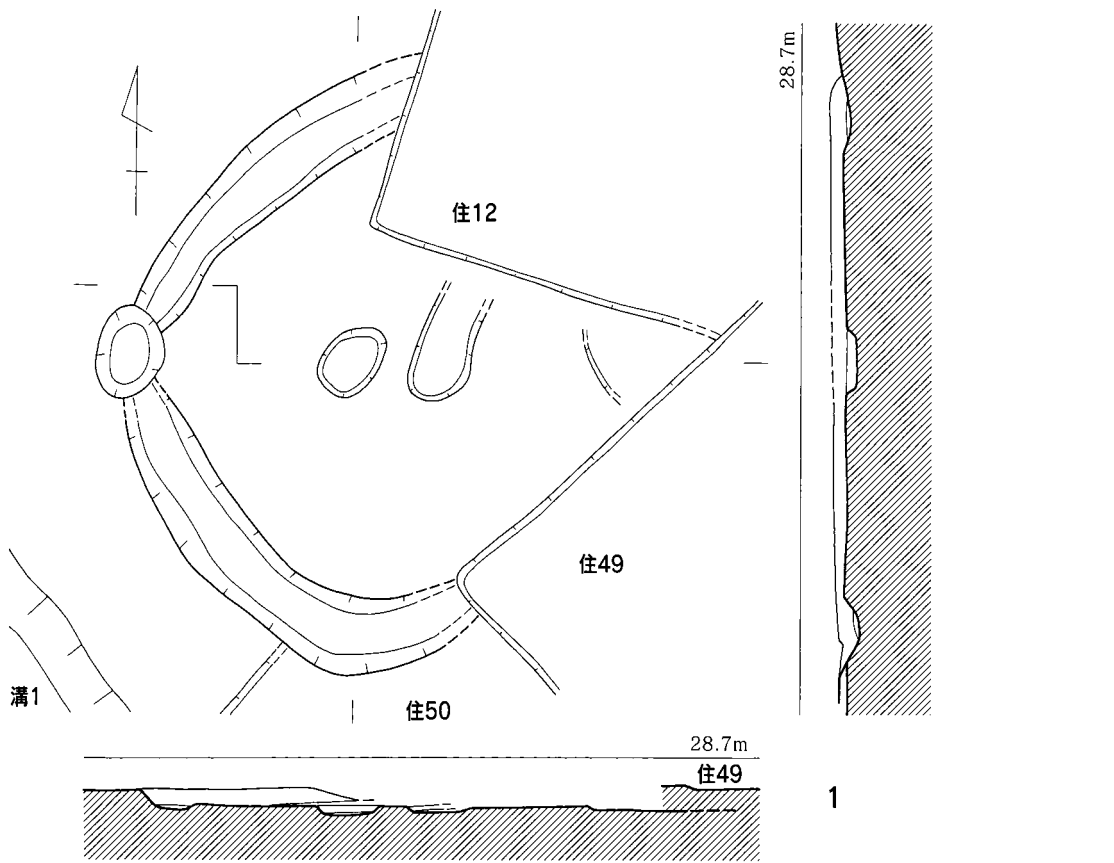
1区中央よりやや東の北端、55号住居跡西に位置し、南を12号溝に切られる。調査時は東・西それぞれ個別の溝と考え調査したが、整理過程において図面上で検討した結果、13号溝上面の段が弧状になること、東西両方の溝の埋土が似ること、13号溝上面に別の遺構の切り込みらしきものが土層で観察できることから、東西の溝を円形に繋ぎ、円形周溝状遺構として報告するが、前述したように、調査時に円形周溝状遺構として認識しておらず、検出しなかった遺構や、別の遺構の可能性もある。

北側は調査区外、南側には周溝が回っておらず、規模は東西で6.6mを測るが、南北は不明。東周溝は周溝の幅が2.2m、深さが5～15cm前後であるのに対し、西の溝は幅0.4～0.7m、深さが18cm～35cmと、全く異なることは非常に気になるところである。周溝の埋土はいずれも褐色砂質土であった。東側の周溝内上端には大きめの3つのピットが切り込み、内側には浅いピットが1基と存在するのみである。周溝内側と外側の高低差はない。西側の周溝内にはピットが1基床面から掘り込む。13号溝との関係は2号円形周溝状遺構の方が折しく、13号溝は古墳時代前期の12号溝に切られることから、13号溝・2号円形周溝状とも弥生時代のものであると考えられる。出土土器は弥生土器が認められたが、小片のため図示できない。

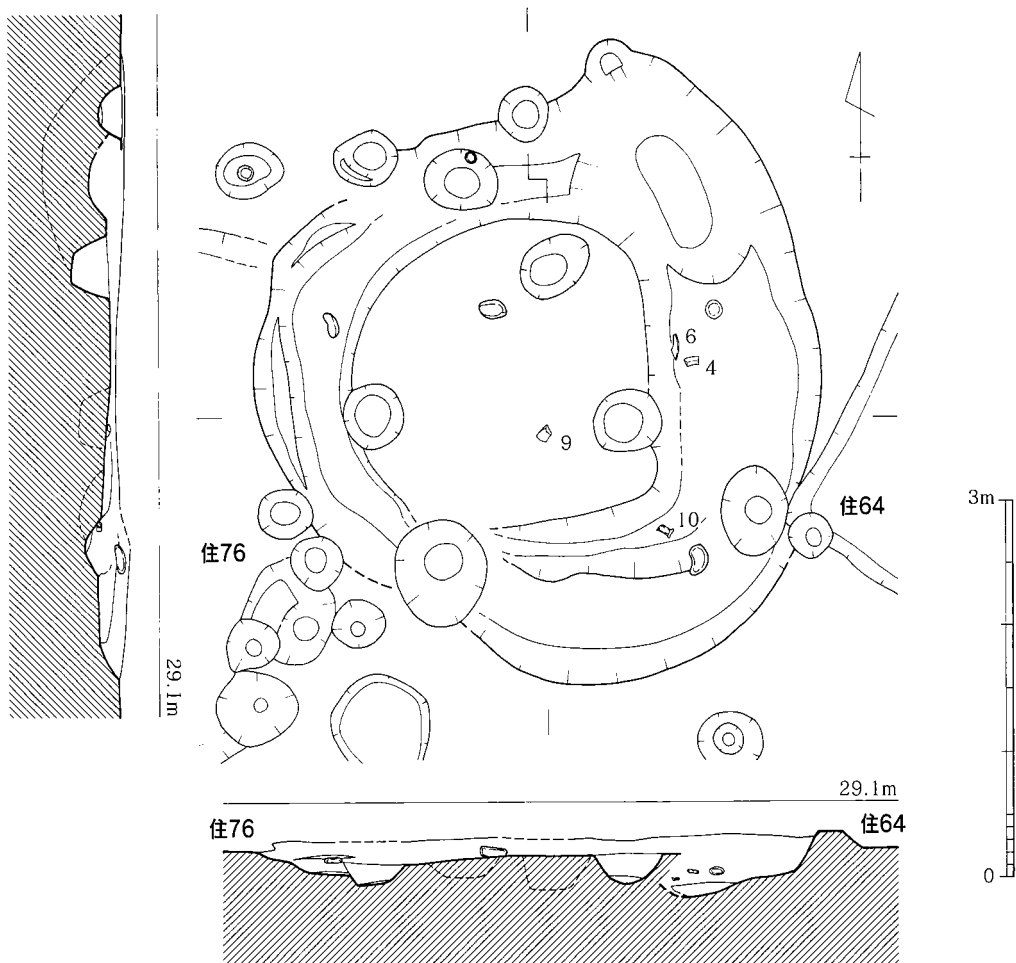
3号円形周溝状遺構 (図版37、第115図)

1区東中央、70号住居跡南に位置し、64号住居跡に西側の一部が切られ、76号住居跡を切る。当初は円形住居跡と考え調査したが、住居の壁と考えていた部分が溝状に下がったため、円形周溝状遺構であると判断した。径は南北4.6m、東西4.5mであるが、やや東南方向に伸びる円形を呈す。周溝には8基のピットが上層から切り込む。周溝の幅は一番広い東南で1.3m、一番狭い北西で0.8m。深さはもっとも浅い東側で24cm、最も深い北東で65cmを測る。周溝を挟んで外側と内側の差は西側で1cm前後である。周溝内側は南北2.4m、東西2.3mのほぼ正円である。周溝の内側の上端を切り込む2基のピットと、北側に単独で存在するピット1基を検出した。出土遺物は第115図9以外は周溝内であるが、いずれも溝底面から浮いた状態で出土した。出土土器から中期後半でもやや古い様相のものと考えられる。周溝埋土から使用剥片(第126図5)と砥石(第128図7)が出土。

出土土器 (図版52、第116図2～12) 2は弥生土器壺の底部か。底径9cmを測り、外面はヘラ

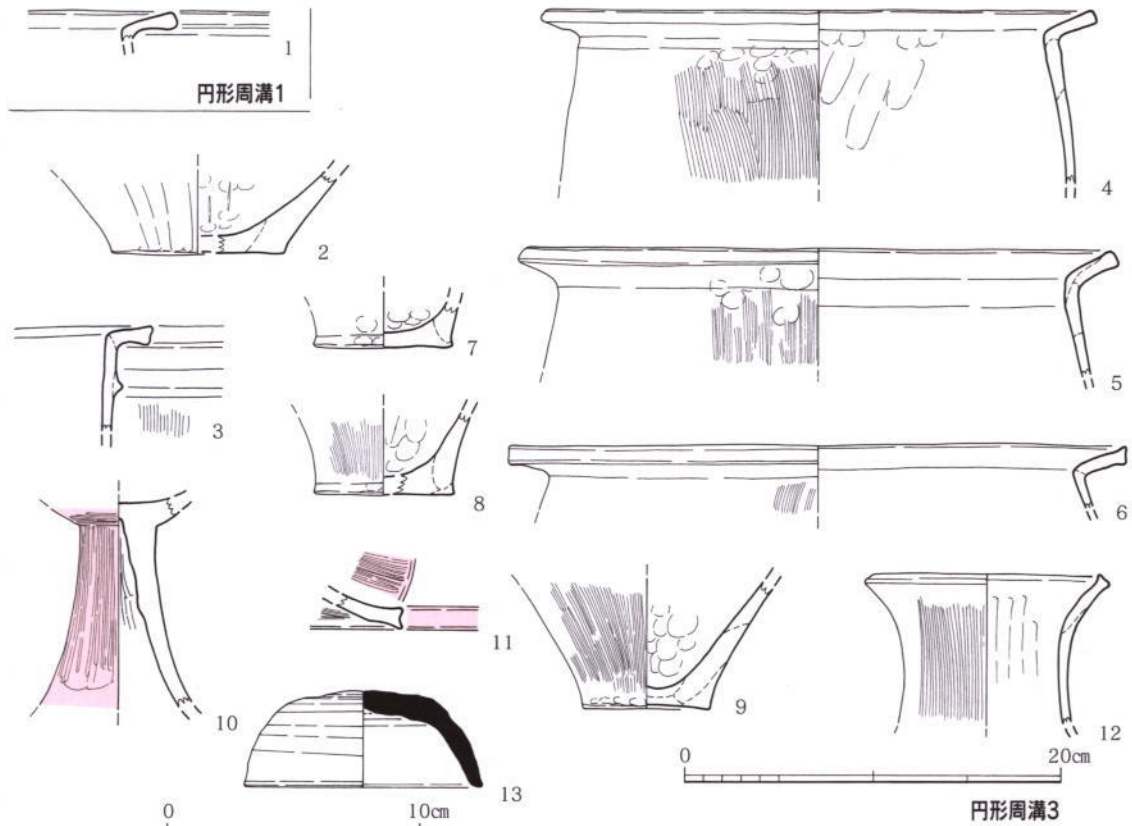


第114図 1・2号円形周溝状遺構実測図 (1/60)



第115図 3号円形周溝状遺構実測図 (1/60)

ナデ、内面には工具痕が残る。外は黄橙色、内は淡橙色を呈する。3～9は弥生土器甕片である。3はほぼ直立する胴部に、水平に外折する口縁部が付く。口縁端部はナデにより凹線状に窪み、口縁から2cmほど下がったところに三角突帯を貼り付ける。色は黄褐色を呈する。4・5はくの字状に屈曲する口縁部を持つ。4は口径29.4cmで、口縁端部をナデで面取りする。内面頸部近くまでナデ上げ痕が残る、色は白黄褐色を呈する。5の頸部は緩やかに屈曲する。口縁端部をナデで面取りし、口径31.6cmを測る。色は黄橙色を呈する。6は口縁端部をナデで面取りし、凹線状に窪み、口径は32.6cmを測る。色は白黄褐色を呈する。7～9は甕底部である。7は小型の甕底部で、底径は7.2cmを測る。底部端部は外につまみ出し、内外面には指押さえ痕が良く残る。外面一部は黒化する。色は黄茶褐色を呈する。8は底径7.4cmで、底部端部をわずかに外につまみ出したもの。内面には工具痕が残る。外は淡黄茶褐色、内は黄橙色を呈する。9はやや上げ底で、底径6.6cmを測る。外面には2次加熱痕が、内面には炭化物が付着する。色は黄橙色～黄茶褐色を呈する。10は高杯脚部。脚柱部外面はヘラナデの稜が残る、のち縦ミガキを暗文状に施し、杯部内外面もヘラミガキを施す。脚柱部内面の杯部との接合部は、ヘラ状工具による絞り痕が残る、脚裾部近くは縦ナデ痕が残る。外面には丹塗りを施す。外は赤褐色、内は黄橙色を呈する。11は高杯脚裾部。端部はナデで面取りし、凹線状に窪む。下端部は下方にかなりつまみ出し、強いナデのため窪む。外面には放射状の暗文を施し、その上に丹を塗布する。内面にはハケが残る。胎土は精良で、焼成は良好。色は赤褐色～灰黄褐色を呈する。12は鼓形の器台口縁部。口径13cmで、



第116図 1・3号円形周溝状遺構出土土器実測図 (13は1/3、他は1/4)

内面にはナデ上げ痕が残る。色は灰黄褐色を呈する。13は須恵器杯蓋か壺蓋で、上層からの混入したもの。口径9.4cm、器高3.8cmで、口縁端部を外側につまみ出す。天井部のみヘラケズリを行う。外面の一部には自然釉が付着する。青灰色を呈す。

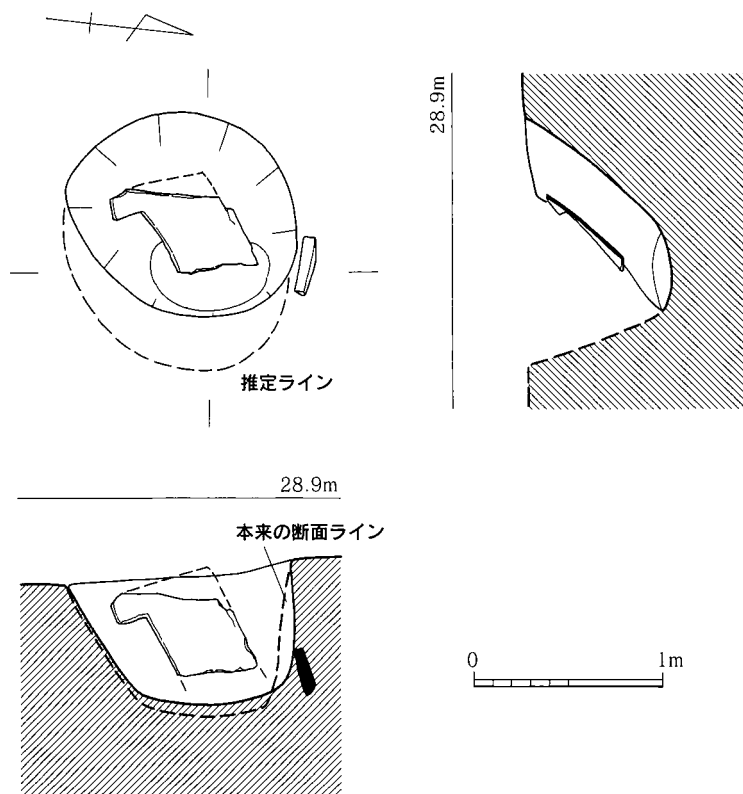
(2) 1区ピット・遺構面

第1面・第2面それぞれで検出し、調査したピット・遺構面出土土器は、本来なら分けて報告すべきであるが、先述したように、1区西側では当初の表土剥ぎで第2面まで下げてしまったため、第1面と第2面のピット・遺物とも混ざってしまっている。ピットも1区西側に集中し、遺物も多く、遺構面出土土器も同様の状況である。このように面としては不十分な調査のため、今回はピット・遺構面出土土器に関しては第1面・第2面合わせて報告する。

a. ピット

ピット116 (図版38、第117図)

1区中央よりやや東より南端に位置し、5号土坑を切る小ピットである。5号土坑検出時、レベル28.9m付近で青銅器片の上端を確認したが、検出段階で5mm前後上端を削ってしまった。精査したところ、青銅器片のみ入れるような南北12cm、東西14cmの円形のピットを検出した。検出当初は検出した輪郭線に自信がなく、5号土坑東半分を掘削し、断面と検出面の輪郭線があるかどうか確認したため、東側は推定線となる。第117図では実線が見通し、破線が本来断面ラインを示す。ピットの深さは8cmで、青銅器片は底面から3cmほど浮いた状態で、やや西に傾いた状態で出土した。壁の傾斜と青銅器片の傾斜は同じであり、青銅器片の大きさに合わせるように、ピットが掘られているように見えること、埋土は灰黄褐色砂質土1層のみであったことから、P



第117図 ピット116実測図(1/4)

部径21.6cmを測る。内外面ハケ調整。外面胴部中位には黒斑あり。色は橙褐色。2は壺底部で、底径9.8cmを測る。外面には縦ミガキを施し、内面にはナデ上げの稜が残る。色は灰黄色。

3～17は弥生土器甕である。3は口径28cmを測る長めの口縁部を有し、口縁外端部はナデで面取りする。口縁端部は黒化し、色は淡橙褐色を呈する。4はやや丸みを帯びながら屈曲する口縁部で、端部はナデで面取りし、外下端部は下方につまみ上げたもの。口径は29cmを測り、頸部外面にはハケ工具痕、頸部内面のやや下側には板ナデの工具痕が残る。外面にはススが付着する。色は白黄褐色。5は強く外折する口縁部で、端部はしっかりとナデで面取りする。口径30cmを測り、頸部外面にはハケ工具痕、胴部内面には板ナデの際の工具痕が残る。胎土は細粒が少なく、色は白黄褐色を呈する。6は口径30cmの逆L字状に屈曲し、内面頸部には稜が明瞭である口縁部を持つ。口縁端部はナデで面取りし、口縁外下端部はやや下方につまみ出したもの。頸部外面にはハケ工具痕が残る。色は黄橙色を呈する。7は甕胴部～底部片で、底径は7.6cmを測る。やや上げ底の底部で、外面には強い横ナデを最後に施す。あまり張らない胴部内面には板ナデ痕、ナデ上げの稜が残る。外面にはススが付着し、内面中位まで炭化物がうすく付着し、その上端部には2条の帯状に炭化物が濃く沈着する。色は暗黄茶褐色～黒茶褐色を呈する。8はくの字状に口縁部が開く器形で、内面頸部の稜が明瞭である。口径30cmで、口縁端部をナデで面取りし、頸部内外面には工具痕が残る。口縁から3.5cm下がったところに浅い2条の凹線を巡らす。色は橙褐色を呈する。9・10は弥生後期の甕である。9はやや肥厚させた口縁端部を強く横ナデし、凹線状に窪ませるもの。口径は29cmを測り、頸部外面には工具痕が残る。胴部外面には2次加熱痕が残る、胴部内面には炭化物が付着する。色は淡橙褐色～灰黄褐色を呈する。10は頸部が丸みを帯びた内湾する口縁部で、シャープな口縁端部を持つ。口径26cmで、内外面はハケ調整。器壁は全体

116は青銅器片を入れるために掘られたものとしておきたい。ピット内からその他の遺物は出土しなかったが、第118図に示しているようにピットすぐ北側で弥生時代後期と考えられる甕破片が出土している。

現在、青銅器片は鉛同位対比による分析を行っており、青銅器片の所属する時期を含めた検討を行っている。青銅器片の実測図や所見については、来年度報告の『堂畑遺跡Ⅲ』の中で報告したい。

ピット出土土器 (図版52・53、第118・119図)

1は弥生後期の壺である。丸みを帯びる胴部にゆるやかに外反する口縁部が付き、端部はナデで面取りする。口径14.8cm、最大胴

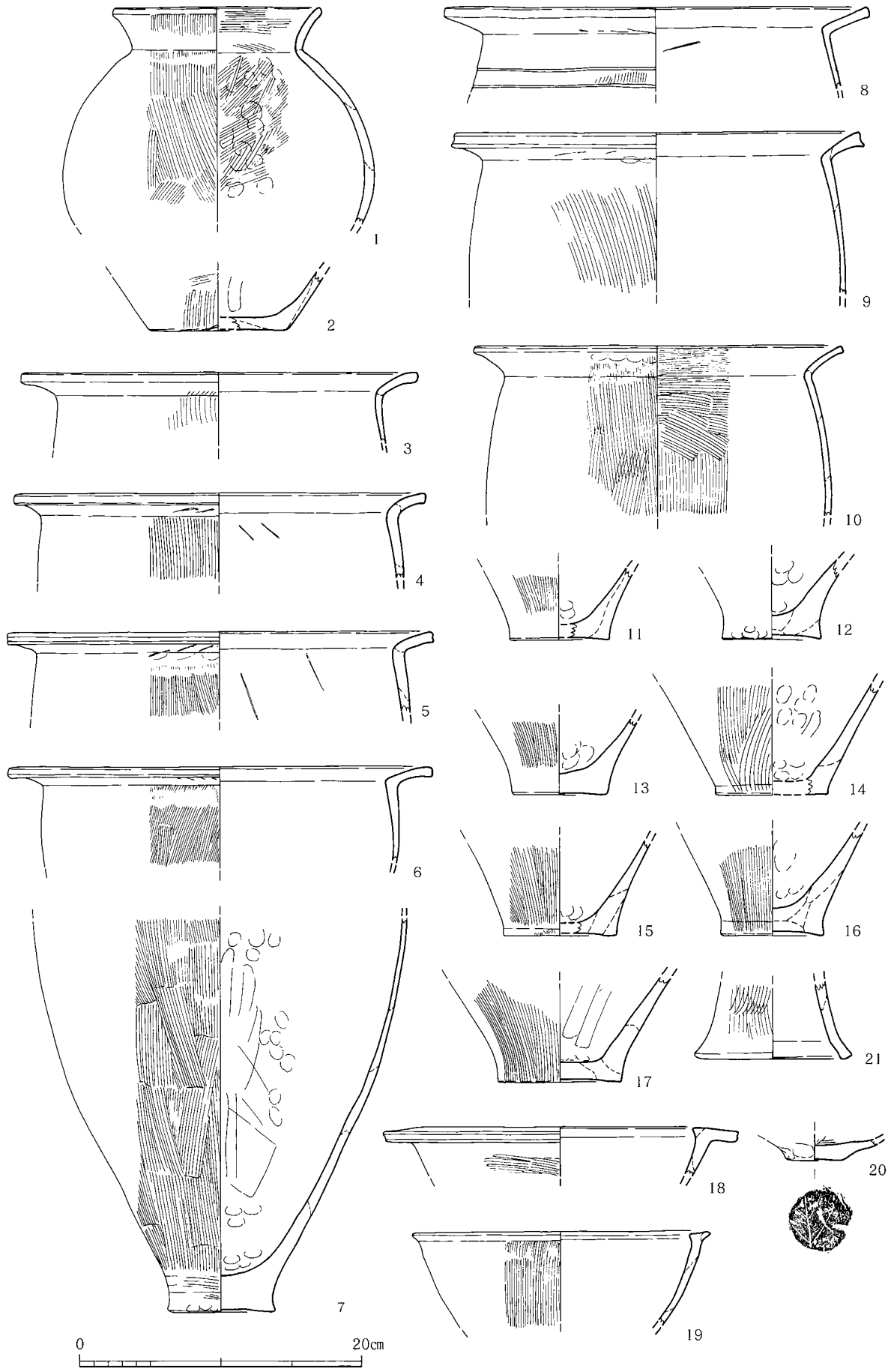
的に薄いもの。外面は二次加熱痕とススが付着する。色は灰橙褐色～橙褐色を呈する。11～17は甕底部片。11は底径7cmで、底部外面には強い横ナデを施す。外は橙褐色、内は灰黄褐色を呈する。12は内面には指おさえ痕が残り、外面は火を受けたため器表が荒れる。焼成はやや甘く、色は淡橙褐色を呈する。13は底径6.8cmで、底部外面には縦ハケのち横ナデを施す。胴部外面にはスス、内面には炭化物が付着する。外は暗灰黄褐色、内は橙褐色を呈する。14は底径8cmで、底部外端までハケが残る。外面にはススが付着する。外は灰黄褐色、内は黄褐色を呈する。15は底径8cmで、縦ハケ後、底部外端に弱い横ナデを施す。底部外端にはススが、内面には炭化物が付着する。16はやや上げ底の底部で、底径7.4cmを測る。底部外端部をやや外に突出させたもので、端部までハケが残る。外面には2次加熱痕、内面には炭化物が付着する。外は橙褐色、内は黄灰色～灰色を呈する。17は底径8.6cmで、底部外端部までハケが残る。内面にはナデ上げの稜が残る。外は白橙褐色、内は灰黄褐色。

18は後期の高杯杯部で、口縁部内端部を内にやや突出させ、T字状になる。口縁外端部はナデで面取りし、杯部は深いものになるか。外面には横ミガキを施す。色は橙褐色を呈す。19は鉢口縁部で、やや内傾する口縁部を持つ。口縁部外端面は丸く収め、内端面は斜め下方向にナデによりやや突出させる口縁部である。口径21cmを測るが、小片のため自信がない。外面は縦ハケで、内面はナデ調整。胎土は良く、色は暗橙褐色を呈する。20は弥生後期の鉢底部か。底径4.1cmの不安定な底部で、底部外面はナデ絞り、内面は工具による絞り痕が残る。底部には葉脈状に工具により線刻を施す。胎土は比較的良く、色は黄褐色を呈する。21は鼓形の器台底部片。底径11cmで、底部端部はナデで面取りする。色は黄橙褐色～黄褐色を呈する。

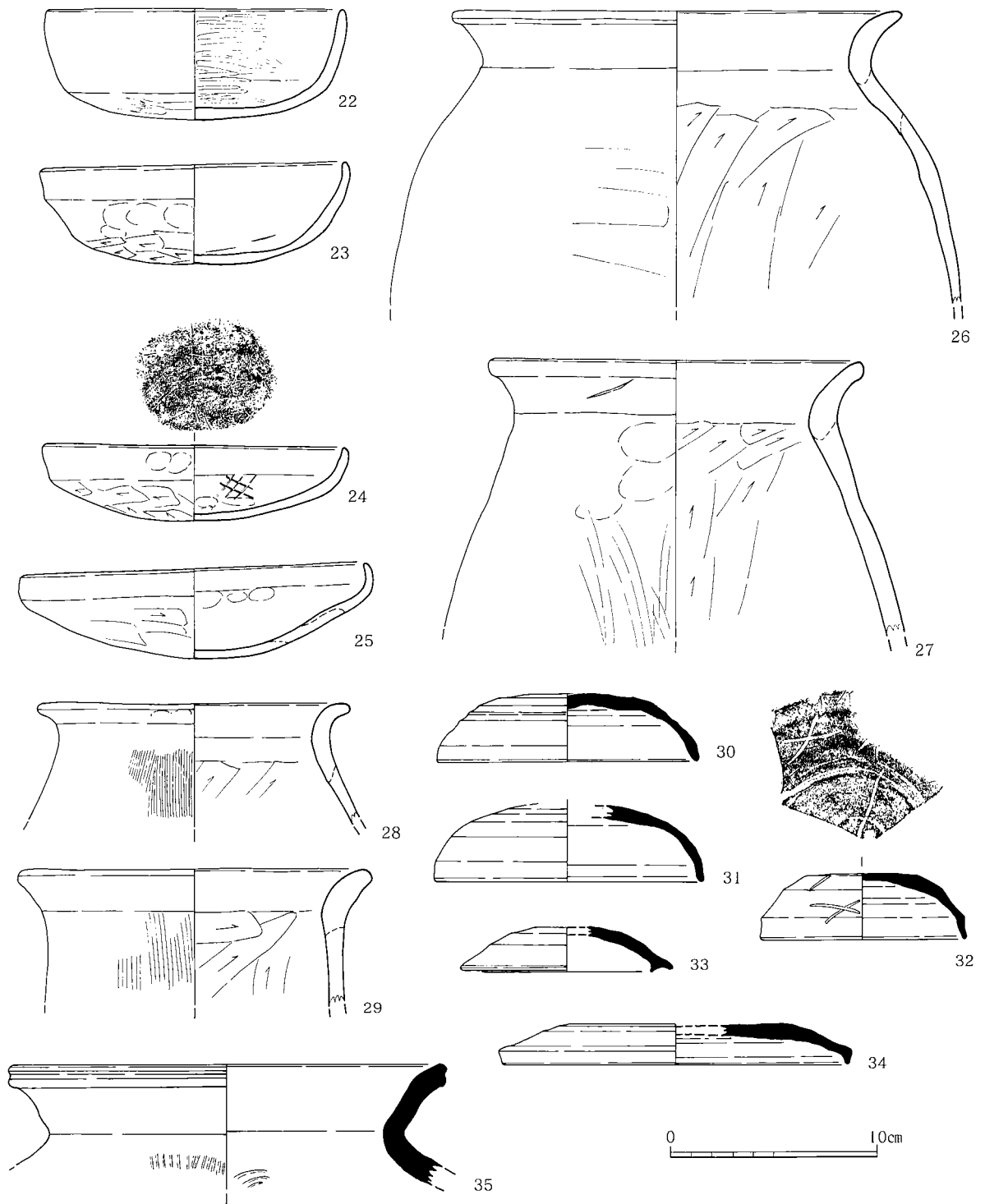
22～25は土師器杯身である。22は口径14.4cm、器高5.3cmのやや深さのある器形で、底部外面には横ミガキが残り、内面にも横ミガキを施す。色は淡橙褐色を呈する。古墳時代後期のもの。23は口径14.8cm、器高4.7cmのやや深さのある完形品。口縁端部はやや内傾させる。外面底部には手持ちヘラケズリを施し、杯部内面底部には工具痕が残る。色は橙褐色を呈する。24・25は口縁部が直立する杯身である。24は口径14.6cm、器高3.7cmの完形品。口縁端部をやや内外側につまみ出し、底部には手持ちヘラケズリを施す。内面底部には「井」のもう1本縦線を足した状態の線刻を焼成後刻む。色は橙褐色～黄橙色。25は口径16.8cm、器高4.3cmの完形品で、口縁端部はやや内傾する。底部外面には手持ちヘラケズリを施し、内面はナデ調整。色は黄橙色を呈する。

26～29は土師器甕片である。26はやや胴が張る胴部に外湾する口縁部を持つ。端部は外方につまみ出したもの。口径11.4cmで、胴部外面は板ナデのちナデ、胴部外面は頸部よりやや下がった位置までヘラケズリを施す。胴部外面にはススが付着し、内面には炭化物が付着する。色は橙褐色を呈する。27は胴部最大径が胴部中位近くの長胴の甕で、口縁端部は丸く収める。口径は17.8cmを測る。胴部外面は粗いハケで調整し、頸部には工具痕が残る。内面は頸部までヘラケズリを施す。胎土は細粒を多く含み、色は橙褐色～黄褐色を呈する。28・29は小型の甕である。28は屈曲度は弱いが、端部を外に強くつまみ出す口縁部を持つ。口径は15cmで、内面頸部近くまでヘラケズリを施す。胴部内面には炭化物が付着する。外は橙褐色、内は暗黄茶褐色を呈する。29は直立する胴部に、外反する口縁部が付く器形。口径は17cmで、内面は頸部近くまでヘラケズリを施す。内面は黒化する。色は橙褐色、内は灰黒色を呈する。

30～34は須恵器杯蓋である。30は口径12.6cm、器高3.3cmで、口縁端部をやや外側につまみ出したもの。外面天井部と体部の境には、強い横ナデにより凹線状に窪む。天井部のみヘラケズリを施す。色は暗灰色。31は口径13cmで、端部をやや外側につまみ出したもの。体部までヘラケズリを施し、天井部には1本の線しか残存していないが、ヘラ記号を施す。外面全体には自然釉が付着する。色は暗灰色～灰色を呈する。32は小型の杯蓋で、壺蓋の可能性もある。口径10



第118図 1区ピット出土土器実測図(1)(1/4)



第119図 1区ピット出土土器実測図(2)(1/3)

cm、器高3.2cmで、口縁端部をやや外反させる。天井部と体部に2ヶ所「×」状のヘラ記号を施す。焼成はやや甘く、色は灰白色を呈する。33は返りの付く小型の杯蓋である。口径10.2cmを測り、口縁部は内側につまみ出す。口縁部と受け部との高さの差はほとんどない。天井部はヘラケズリのち横ナデを施す。34は口縁部が嘴状になる蓋。低平のつまみが付くもの。天井部が平坦になった範囲にヘラケズリを施す。口径17cmを測り、外面全体には自然釉が付着する。色は灰白色～青灰色を呈する。

b. 遺構面

遺構面等出土土器 (図版 53～57、第 120～125 図)

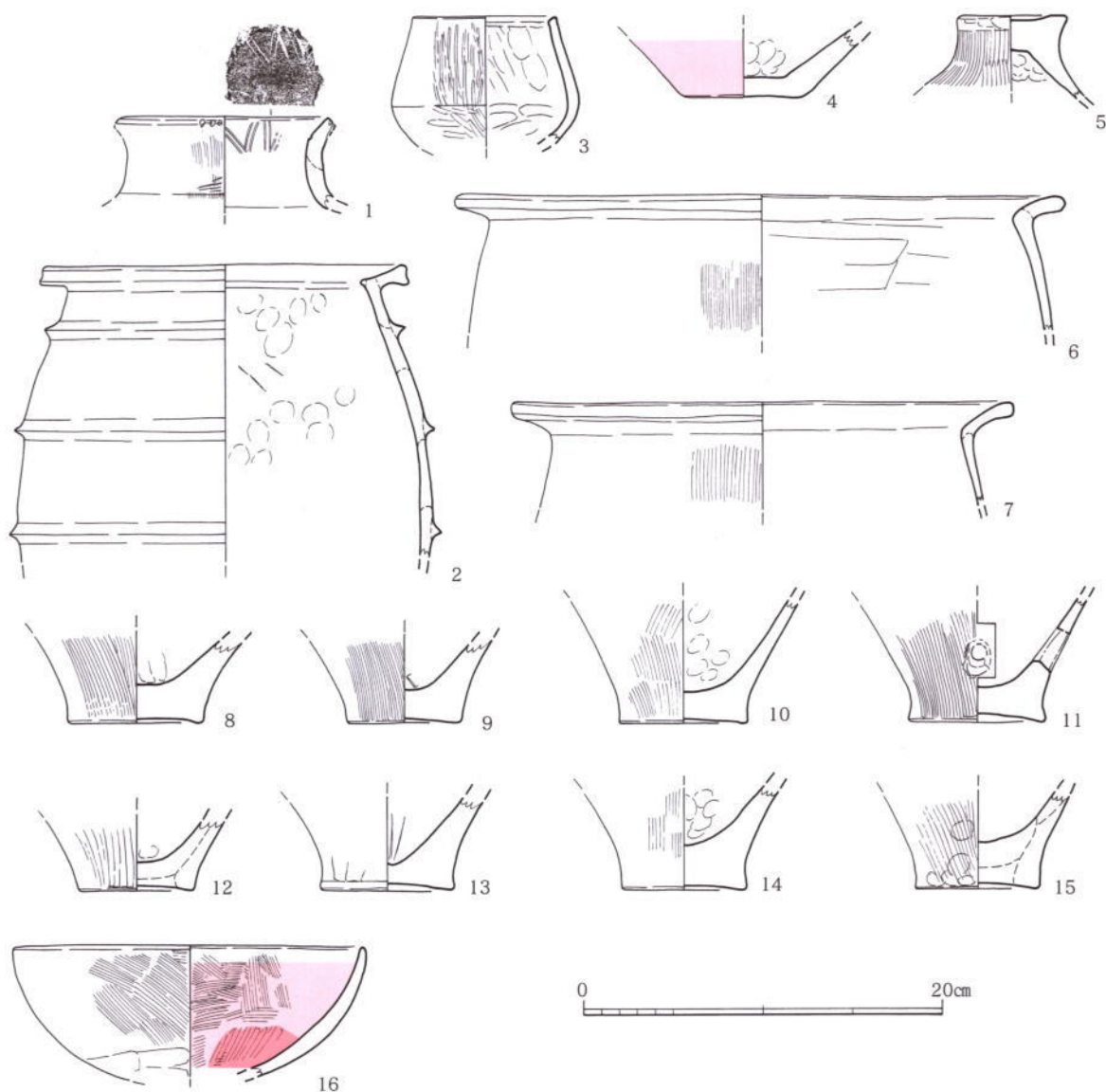
1 はゆるく外反する口縁部で、端部には深めの刺突文を密に施す。口縁内面にはヘラ状工具を使用し、2条の凹線による山形文を線刻する。口径は 11 cm を測り、胎土は良く、橙褐色を呈する。縁部形態と内面の山形文については、中期初頭～前半の大平村下唐原宮園遺跡 31 号土坑に類例があり、刺突文を施す壺も中期初頭～前半に存在することから、豊前系のものと考えられる。(吉田東明 1998 『下唐原宮園遺跡』一級河川山国川築堤関係埋蔵文化財調査報告 2 福岡県教育委員会)。1 区では中期初頭～前半の遺構は確認できなかったが、中期前半の厚底の甕底部などが出土する。

2 は豊前系の無頸壺。下膨れの胴部に、くの字状に短く外折する口縁部が付く。口縁端部はナデにより凹線状に窪み、内面頸部は内側につまみ出す。口径は 16.3 cm で、最大胴部径は 24.4 cm を測る。胴部外面には約 6 cm 間隔で三角突帯を 3 本貼り付ける。外面は横ナデ、内面には指押さえ痕、工具痕が残る。色は黄橙色を呈する。3 は口縁部が内傾する壺口縁部で、口縁端部はナデで面取りする。口径は 8 cm を測り、外面底部は横ミガキ、胴部は縦ミガキを施す。内面にはナデ上げ、指押さえ痕が残る。胎土は良く、色は暗茶褐色を呈す。4 は壺底部で、底径は 6.6 cm を測る。外面には丹を塗布する。色は灰黄褐色～赤褐色。

5 は弥生土器甕蓋で、頂部はやや窪み、頂部外端面をやや突き出した器形。頂部径 5.8 cm で、内面にはススが付着する。外は淡橙褐色、内は黄褐色を呈する。6 は丸く張る胴部に外湾する口縁部が付く。口径 34 cm で、端部は丸く収める。胴部内面には板ナデの工具痕が残る。外面全体は火を受けたために器表が荒れ、ススも付着する。7 はくの字状に外折するやや長めの口縁部で、端部をやや肥厚させ、ナデで面取りする。口径 28 cm で、胎土・焼成とも悪い。色は茶褐色～橙褐色を呈する。8～15 は弥生土器甕底部。9・12 が底径 6.4 cm で最も小さく、11 の 7.7 cm が最も径が大きい。11 は上げ底で、10・11・13 は底部外端部を外に突出させる。11 は底部から 3 cm ほど上に、焼成後内から外に穿孔する。13 のみ外面は板ナデ後、ナデ調整で、12 の外面は粗いハケ目を施す。13 の内面には工具痕が残る。11・12 は外面にススが付着し、8・9・11～13 まで内面に炭化物が付着する。色は外は 8～11・15 は黄橙色、12～14 は灰黄色、内は 9・11～14 は灰黄褐色、11・15 は黄橙色、8 は暗黄褐色を呈す。

16 は弥生土器鉢で、いわゆる内面朱付着土器である。外面底部はヘラナデを強めに施し、ヘラケズリ状になる。内面はすべてハケ調整するが、所々何かで擦ったようにハケ目が消えた箇所がある。底部には朱が付着するが、ハケ目内にも擦り込まれたように付着し、また擦れてハケ目が消えた所に朱が付着する。丹塗土器のように粉状・塗膜状で付着するのではなく、口縁下 3 cm 以下にはやや消えかかっているものの、朱の痕跡が確認でき、朱は液体物である可能性が高い。また外面には火を受け赤変する箇所がある。底部付近の濃いトーンの範囲は朱が良く付着する箇所であり、口縁部に近い、薄いトーンは朱が薄く広がる範囲である。胎土は細粒を含み、焼成は良好、色は橙褐色を呈する。

内面朱付着土器は本田光子が特徴を整理しており、その定義に当てはめれば当該例も内面朱付着土器と言える。この土器の内容物であった朱は液体であった可能性が高く、土器外面には被熱痕跡があるものが多いと考えられている。この被熱痕跡について大久保徹也氏は、一般的に朱(硫化第 2 水銀)を過熱すれば、さほど高温に至らずとも蒸発し、赤色付着物は残存しないが、加熱していることは朱の最終調整に関係する特異な調合作業に関係するものと想定する。石杵も共伴することが多いということであったが、今回の調査では確認できなかった。(本田光子 1994 「内面朱付着土器」庄内式研究Ⅷ 庄内式土器研究会、大久保徹也 1998 「弥生時代の内面朱付着土器」『考古学ジャーナル』438 ニューサイエンス社)



第120図 1区遺構面等出土土器実測図(1)(1/4)

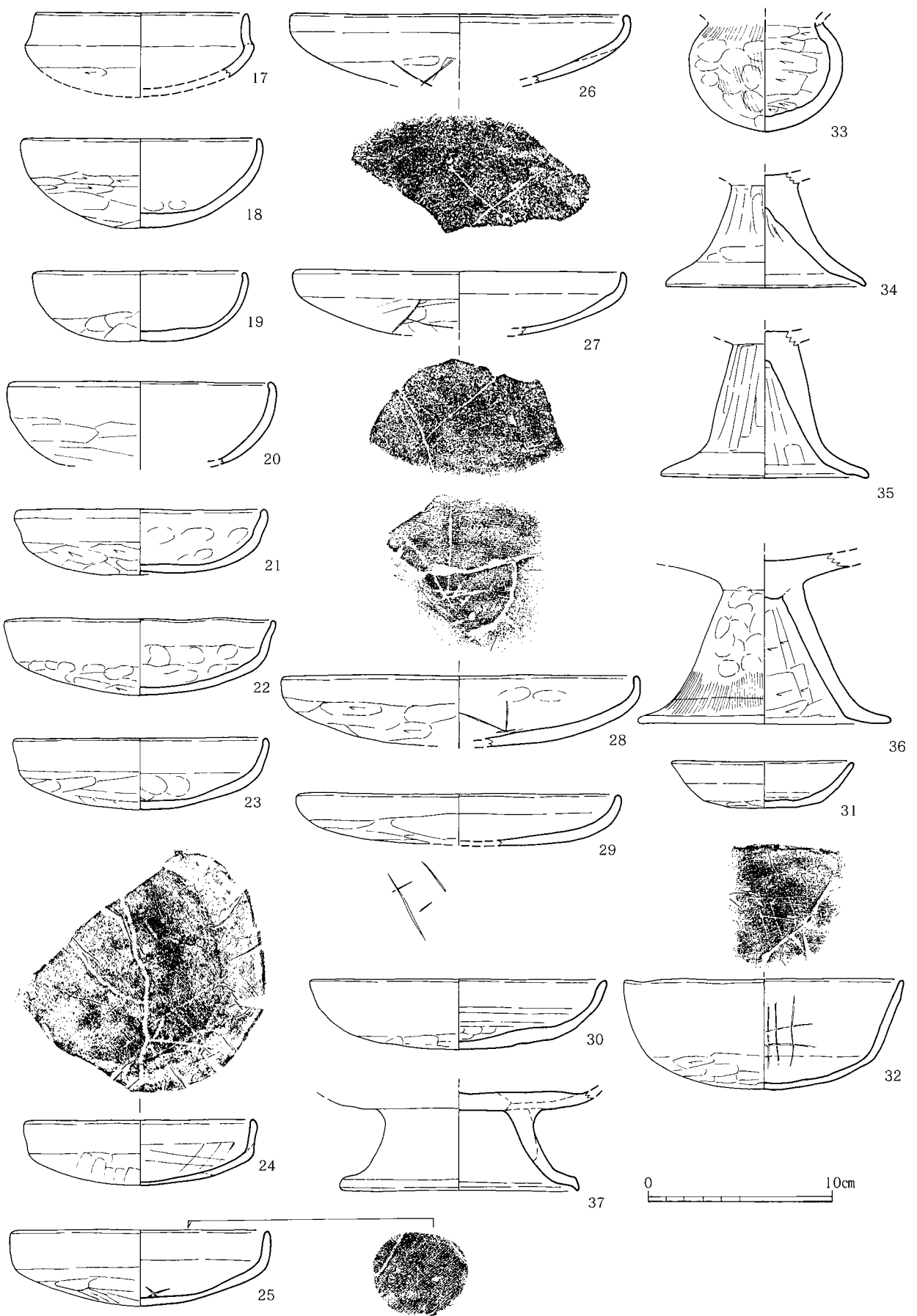
17～32は土師器杯である。17は土師器模倣杯の身で蓋受け部は突出がほとんどないもの。口径11.5cmで、底部には手持ちへラケズリを施す。焼成はやや甘く、色は橙褐色～淡黄白色を呈する。18～20は深さがあり、口縁部が内湾しながら立ち上がり、口縁端部をさらに内傾させるもの。いずれも底部外面には手持ちへラケズリを施す。18は口径12.8cm、器高4.8cm、19は口径11.2cm、器高5cm、20は口径14.2cmを測り、内面には工具痕がある。色はいずれも黄橙色～灰黄色を呈する。21～25はやや器高が浅くなり、口縁部が外傾し、天井部との境に稜を作り出すもの。いずれも外面底部の稜付近まで手持ちへラケズリを施す。21・23の外面には黒斑がある。21は口径13.6cm、器高3.5cm、色は黄褐色～黒色を呈する。22は口径14.6cm、器高4.2cmの完形品で、口縁端部内面にはナデにより凹線状の浅い窪みができている。外面には2次加熱痕があり、内面には指おさえ痕が明瞭に残る。色は黄橙色～白灰黄褐色を呈する。23は口径13.6cm、器高3.9cmで、底部内面も一部黒化する。24・25は口縁部が直立する杯身。24は口径12.6cm、器高3.5cmで、口縁端部は内側上方につまみ上げる。杯内面には横方向に長い線2本、縦方向に短い線3本を焼成前に刻み、それぞれ交差させるが、端の縦3本目は下の横2本目と交わつ

て止まる。外は橙褐色、内は白黄褐色～灰黒色を呈す。25は口径14.0cm、器高4.1cmで、内面底部には「×」状のヘラ記号を焼成後に刻む。色は黄橙褐色を呈する。26～29は器形が低平な杯で、口縁部が直立に近い。底部には手持ちヘラケズリを施す。26は端部内面に浅い凹線状の窪みがある。口径18.2cmで、底部には「×」状のヘラ記号がある。色は茶褐色～橙褐色を呈する。27は口径18cmで、外面底部には「人」状のヘラ記号をある。色は淡橙褐色を呈する。28は口径19.3cmで、口縁部がやや内傾する。内面底部には「人」状に交わった2本の線の交点に、横に2本短い線を入れるヘラ記号がある。色は橙褐色～白灰黄色を呈する。29は口縁部があまり直立しないもので、口径は17cmを測る。内面屈曲部は強い横ナデで凹線状になる。外面底部には縦2本に2本の短い線を刻み、「井」の字状にしようとしたものか。色は橙褐色～黄橙褐色を呈する。30は内湾しながら立ち上がる口縁部で、口径は16cm、器高は3.7cmを測る。やや厚めの底部で、外面底部に手持ちヘラケズリを施す。色は橙褐色。31は小型の皿状の杯で、口径10cm、器高2.5cmを測る。平底に近い底部外面には手持ちヘラケズリを施し、内面はナデにより凹凸がつく。底部外面と内面口縁部は黒化する。色は黄橙褐色を呈する。32は椀状の杯。直線的に外傾する長い口縁部で、口径14.8cm、器高5.8cmを測る。底部外面は手持ちヘラケズリ、内面には「井」に縦に一本線を足したような状態のヘラ記号を焼成後に刻む。底部外面には黒斑がある。色は橙褐色を呈する。

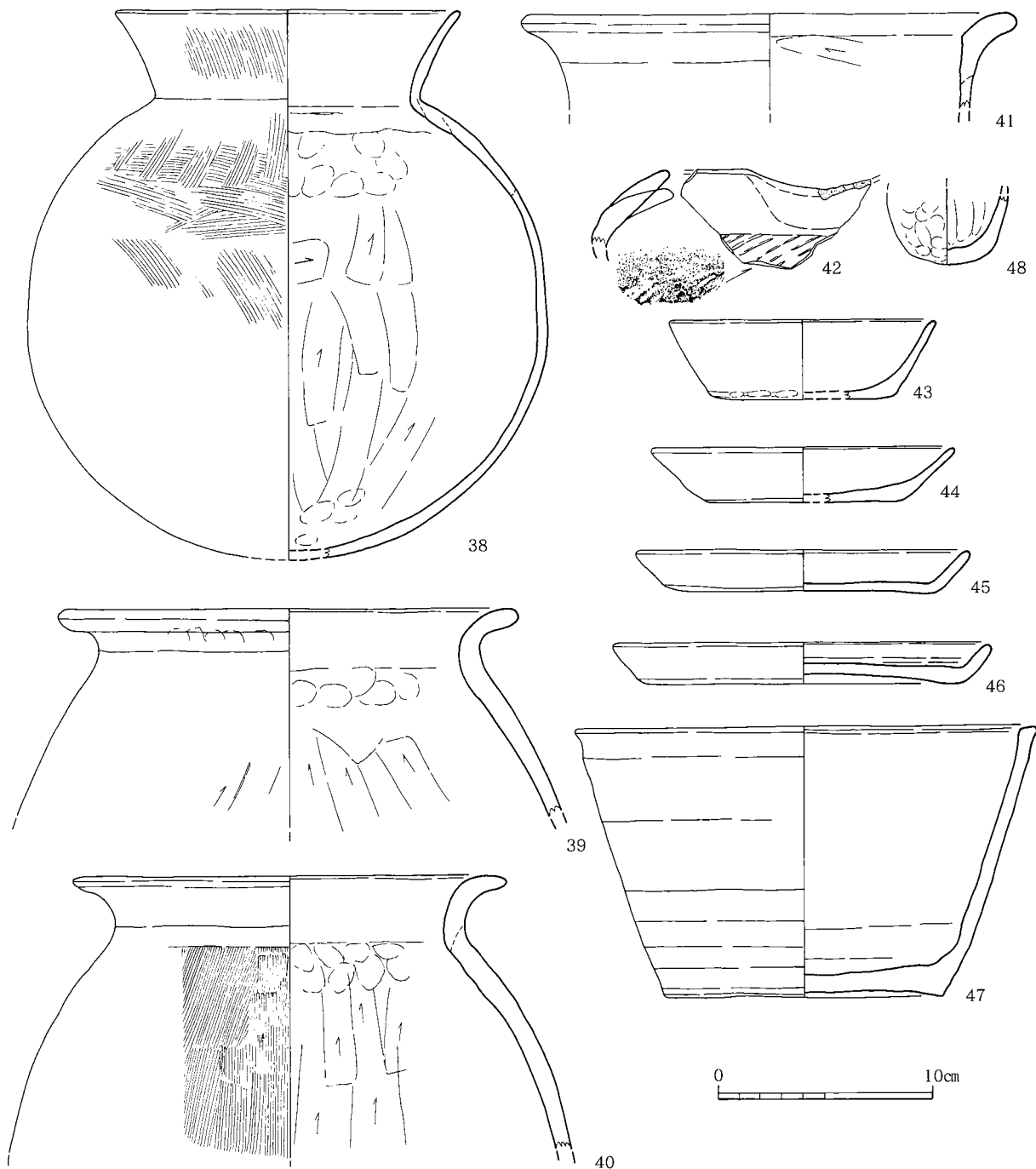
33は土師器小型丸底壺であり、口縁部が欠ける。外面は縦ハケのちナデ、内面は頸部までヘラケズリを施す。外面には指押さえ痕が良く残る。色は灰黄褐色。34～36は土師器高杯脚部である。34・35は脚裾部が強く屈曲する。34は底径10.8cmで、脚裾部は内湾しながら端部に至る。脚柱部外面はナデ調整、内面の杯部との接合部は工具による絞りを行う。焼成は甘く、色は淡橙褐色。35の脚柱部外面はヘラナデ、内面はケズリのちなで調整。底径は11.2cm。焼成は甘く、色は淡橙褐色を呈する。36の脚柱部外面はナデ調整で、指押さえ痕が良く残り、裾部との境にはハケ目が残る。底径は13.5cmを測る。脚柱部内面はケズリによる絞りをを行う。色は橙褐色を呈する。37は土師器高杯脚部で、脚裾部は強く屈曲し、端部は下につまみ上げる。底径は12.9cmで、皿状の杯をもつ。色は淡橙褐色を呈する。

38は土師器直口壺で、口径15.9cm。底部が欠損するが、器高は推定で25.7cmを測る。口縁はやや内湾しながら伸び、端部は上方につまみ出す。丸い胴部で、下半部はハケのちナデ、上半部は口縁部まで縦ハケを施すが、肩部で一定の間隔をあけるのは、口縁部径と対応したものと思われる。胴部内面は、中位までヘラケズリ、上半部はナデで調整し、粘土接合痕と指押さえ痕が良く残る。外面にはススと黒斑がある。外は黄褐色～灰褐色、内は茶褐色を呈する。39～41は土師器甕口縁部で、39・40は長胴の胴部に口縁部が強く外湾するもの。39は口縁端部を丸く収め、胴部外面は板ナデのちナデ、内面は頸部より下はヘラケズリ、頸部付近はナデ調整で指押さえ痕が残る。色は黄褐色～橙褐色を呈する。40は口径20cmを測り、口縁端部は外につまみ出すもの。内面頸部近くまでヘラケズリを施し、頸部には指押さえ痕が残る。色は橙褐色～白橙褐色を呈する。40は強く外反する厚い口縁部を持つ。口径は23cmで、口縁端部は丸く収める。頸部まで強いヘラケズリを施す。色は橙褐色～灰黄色を呈する。

42は片口が付く鉢口縁部。体部は斜め方向のタタキを行い、その粘土を貼り付け、口縁、片口部を成形する。色は淡茶褐色。42～46は土師器皿である。42は口径12.4cm、底径8.8cm、器高3.7cmの高さがある皿で、口縁外面には黒斑がある。色は橙褐色を呈する。44は口径14cm、底径8.6cm、器高2.6cmを測り、底部はヘラ切り後ナデ調整で、黒斑が認められる。焼成はやや甘く、色は暗茶褐色を呈する。45・46は低平な皿で、底部はいずれもヘラ切り後ナデ調整。45は口径15.4cm、底径11.5cm、器高2.1cmで、内面にはススが付着する。色は橙褐色。46は口径17.6cm、底径15.4cm、器高1.9cmのやや大形の皿で、底部はやや中央部が上げ底になり、一



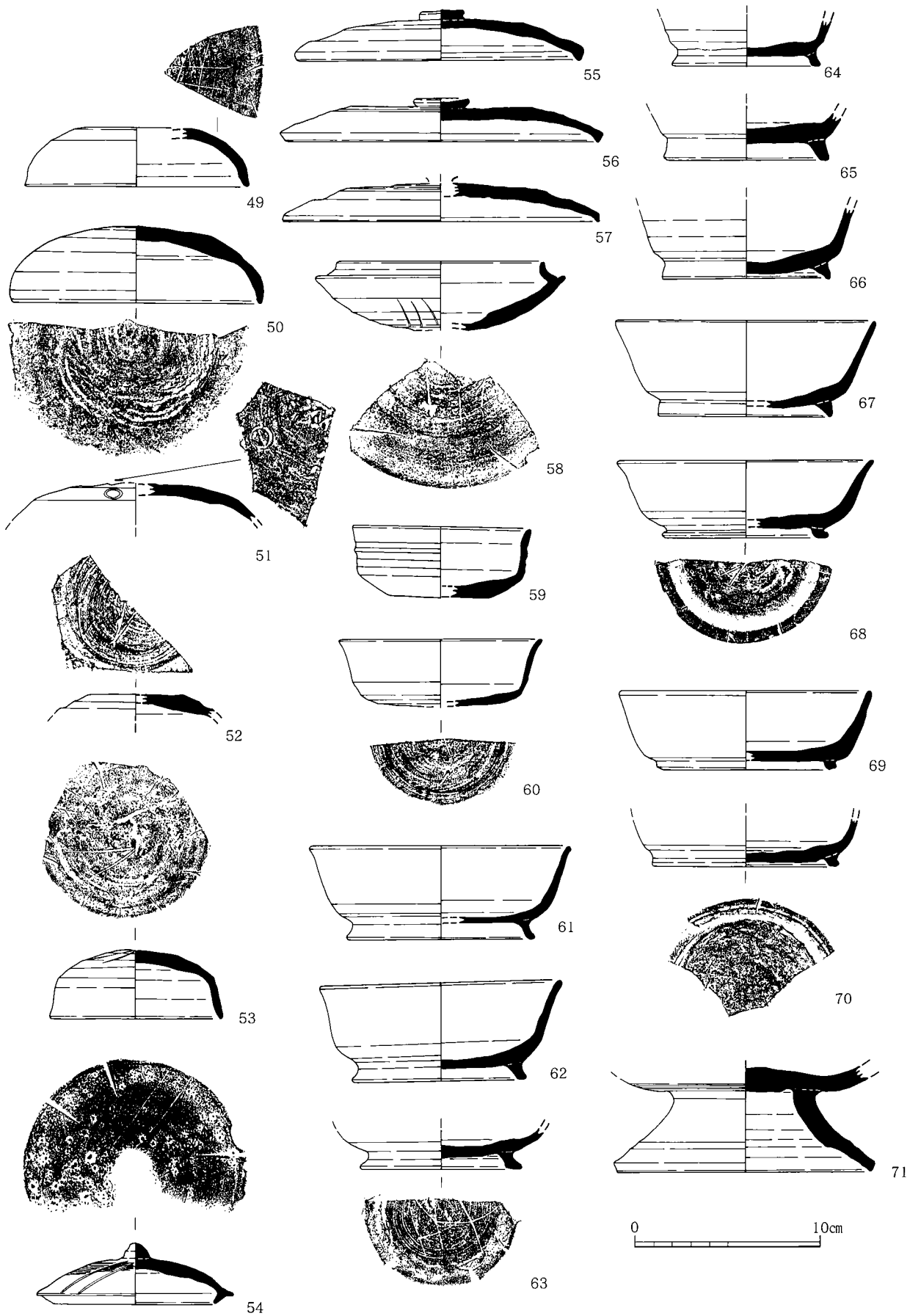
第121图 1区遺構面等出土土器実測図(2)(1/3)



第122図 1区遺構面等出土土器実測図(3)(1/3)

部が黒化する。色は淡橙褐色～灰黒色。47は大型の平底鉢である。口径21.3cm、底径12.7cm、器高12.5cmを測る。底部から直線的にのびる口縁部を持ち、口縁外端部は外につまみ出し、頂部を横ナデで面取りする。体部上部は丁寧な横ナデ、下部は回転ヘラケズリを行うが、何回も丁寧に施し、稜ははっきりしない。外面には黒斑がある。色は黄褐色～黒色。8世紀末の資料か。48は小型の手づくね土器で内外面指押さえ痕が残る。色は茶褐色～灰黒色。

49～53は須恵器杯蓋である。いずれも色は淡灰色～暗灰色。49は口縁端部をわずかに外につまみ出したもの。口径12cmを測る。天井部外面には「井」状のヘラ記号がある。50の口縁端部は下方につまみ出す。口径13.1cm、器高4.2cmで、内面天井部には成形の際の当て具痕がよく残る。51は天井部に径1cmの円をヘラ状工具で刻む。52・53は天井部に「V」字状のヘラ記号を



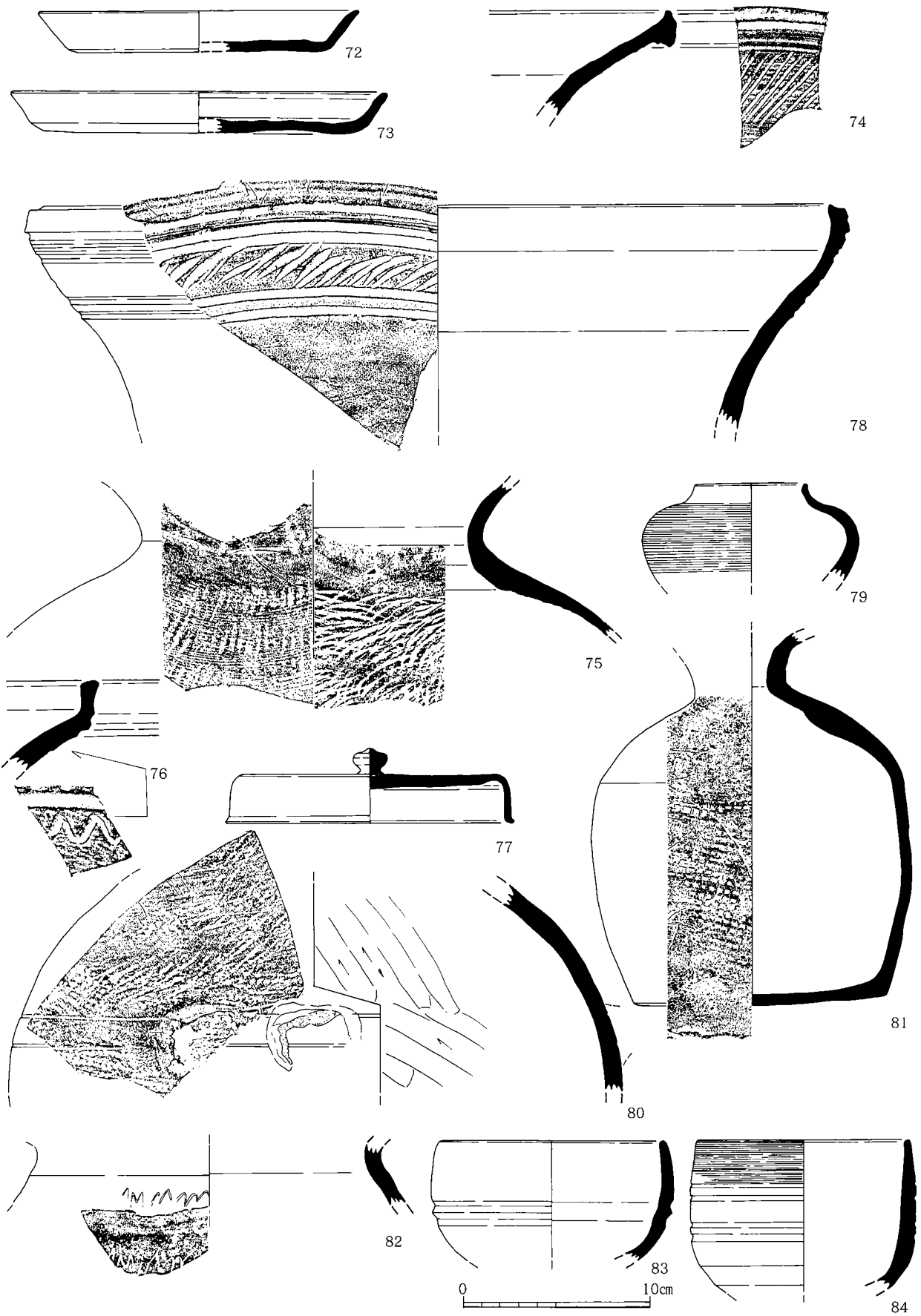
第123图 1区遺構面等出土土器実測図(4)(1/3)

つける。53は口径9.3cm、器高3.7cmで、口縁端部は外反させる。胎土はやや粗い。54は返りのついた須恵器杯蓋で、宝珠つまみが付く。口径6.6cm、器高3.3cmで、返り部外端部を強く外につまみ出したもの。天井部には平行する2本線のヘラ記号がある。外面には厚く自然釉が付着する。55～57は口縁部が嘴状になる低平な須恵器杯蓋。55は口径15cm、器高2.2cmで、やや口縁を外反させる。天井部には低平なつまみが付く。56は口径17.3cm、器高2.3cmで、天井部には頂部が窪むつまみが付く。57は口径17cmで、天井部には小さいつまみが付く痕跡が残る。焼成はやや甘い。

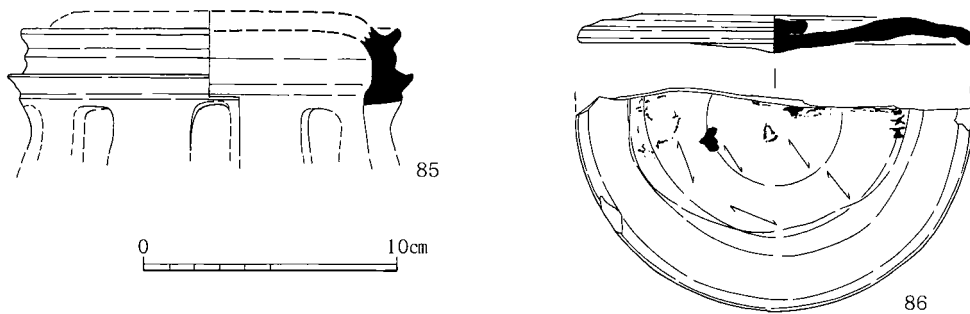
58は蓋受け部がある須恵器杯身である。口縁は内湾しながら立ち上がる。口径16.9cm、器高3.7cmで、底部には「川」状のヘラ記号を刻む。胎土は細粒が多く、色は暗灰色を呈する。59・60は須恵器杯身である。平底で、口縁部は外反する。59は口径9.6cm、器高3.8cmで、底部は厚めで、口縁外面はナデによる凹凸が顕著である。色は暗灰色。60は口径10.8cm、器高8cmで、底部には「V」字状のヘラ記号がある。色は灰色。61～70は須恵器高台付の杯身である。61は口径14cm、底径9.7cm、器高5.1cm。口縁端部は外反させ、高台は高さがあるもの。色は暗灰色。62は口径13cm、器高5.4cm、底径9.2cmで、口縁部は外反させる。口縁内面にはススが付着する。胎土は細粒を多く含み、色は灰色～暗灰色。63は底径8.6cmで、高台端部を強く外につまみ出すものである。高台内面には縦3本線に横1本線を直交させるヘラ記号を刻む。64は底径8cmで、外面には粘土継ぎ目痕が残る。色は灰色。65は高く、幅太い高台を持つもので、底径は8.9cmを測る。杯部外底面にはヘラ切りの痕跡が残る。焼成は甘く、色は灰白色。66・67は高台端部を下方につまみ出すもので、色は灰色～灰白色。66は底径9cmを測る。67は口径14cm、底径9.4cm、器高5.2cmで、焼成は甘く、灰白色を呈する。68は高台端部を強く外につまみ出すもので、口径13.8cm、底径9cm、器高4.2cmを測る。高台内には半分しか残存していないが、「×」と線刻すると考えられるヘラ記号がある。69・70は低平な高台の杯身である。69は口径13.6cm、底径9.6cm、器高4.3cmで、高台端部はナデで面取りし、凹線状に窪む。杯底部にはヘラ切りの痕跡が残る。色は灰色。70は底径10cmで、高台内には「×」状のヘラ記号あり。色は暗灰色。71は須恵器高杯脚部である。底径14cmで、焼け歪みが顕著である。杯部外面はカキ目を施し、底部外端部よりやや上にはナデ凹線がある。底部端部はナデで面取りし、脚部外面と杯部内面には自然釉が付着する。杯部底部は当て具のちナデ調整。色は灰色。

72・73は須恵器皿で、色は灰色を呈する。72は口径17cm、底径14cm、器高2.2cmで、口縁端部はやや外反させる。73は口径20cm、底径16cm、器高2.1cmで、底部にはヘラ切り痕が残る。74は須恵器大甕口縁部片で、口縁端部を上下両方つまみ出したもの。外面にはヘラ描きの斜行文を密に施す。色は灰色。75は甕頸部～胴部片で、頸部径16cmを測る。外面は平行タタキのちカキ目状の調整を施す。色は灰色。76は口縁部が直立する二重口縁壺口縁部片である。口縁屈曲部上下は、ナデにより2条の凹線を作り出す。口頸部には1条のヘラ描き波状文を施す。色は黄灰色を呈する。この二重口縁大型甕は大野城市牛頸石坂窯跡E地点、大宰府史跡第64次SX1546・第74次調査SD205Aなどで出土しており、全形が窺える。(石木秀啓 1997 『牛頸石坂窯跡E地点』大野城市文化財調査報告書第49集 大野城市教育委員会)。しかし、以上の3例はいずれも口縁部が強く外傾する。形式的に時代を経るごとに口縁部が外傾度を増すならば、堂畑遺跡例は古い型式に位置づけることができるか。

77は須恵器壺蓋である。口径15.2cm、器高4cmを測り、高さのある宝珠つまみが付く。口縁端部は外につまみ出す。口縁部外面、内面全体には自然釉が付着する。胎土は細粒をやや多く含み、色は灰色～暗灰色を呈する。78は口径44cmを測る大壺口縁部で、口縁頂部はナデで面取りし、凹線状に窪む。口縁部外面にはヘラ工具による3条の太い凹線を巡らせ、その間にヘラ工具による斜行文を密に施す。口縁部外面下はナデにより細かい凹凸が付く。色は灰色。79は小型の



第124图 1区遺構面等出土土器実測図(5)(1/3)



第125図 1区遺構面等土器実測図(硯)(6)(1/3)

無頸壺で、口縁部はやや外反気味に直立する。口径6cmを測る。胴部全体にはカキ目を施し、一部後でナデ消す。色は灰色。80は7世紀中葉～後半の大型壺の胴部片で、なで肩の器形。外面は縄目タタキが全体に残り、肩部のみのち横ナデを施す。胴部最大径よりやや上には2条の凹線が巡り、その後に把手をつけた痕跡があり、この把手は2ヶ所付けたものか。内面はヘラケズリを行う。色は灰色。81は平底の壺で、底径13.4cm、最大胴部径16.8cmを測る。強く外湾する口頸部で、口縁端部はそのまま直立する二重口縁状を呈するか。胴部外面中位以上には格子目タタキを施し、下半部はケズリのちナデ調整。胎土は細粒を含み、焼成はやや甘い。色は明灰色。82は頸部径19cmで、頸部外面下には棒状工具による1条の波状文を施す。焼成はやや甘く、灰白色を呈する。

83・84は7世紀後半の須恵器椀。83は口径11.7cmを測り、体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がるもの。体部外面には2条のナデ凹線が巡る。色は暗灰色。84は口径11.2cmのほぼ直立する器形である。体部外面はナデによる4条の凹線が巡る。色は茶褐色を呈する。

85は陶硯片である。海と陸の境は不明瞭で、陸部の内堤はなく、陸は丸みを有する。端部硯部と圈台部を連続的に成形したもの。低い外堤で、端部はナデで面取りする。外堤下位には端部をやや上方につまみ出した低い突帯を貼り付け、そのままやや広がりながら底部へと至る器形。ヘラ状工具で切り取った透かしは楕円形を呈し、8ヶ所入れると考えられる。径は外堤下位の突帯部で16cmを測る。胎土はやや大きめ細粒を含み、焼成は断面は灰色で、還元焰焼成であるが、内外面は黄褐色を呈し、酸化焰焼成の土師器の様な色を呈す。

この陶硯は横田賢次郎氏の分類ではI-C-b・二(圈足硯)に当たるもので(横田賢次郎1983「福岡県内出土の硯について」九州歴史資料館研究論集9 九州歴史資料館)、時期は8世紀前半代に比定される。浮羽郡内においては、堂畑遺跡から西へ200mほどの場所に所在する仁右衛門畑遺跡83号竪穴住居跡で、横田分類I-C-b・ロ(圈足硯)の陶硯片が出土し、共伴土器から7世紀末～8世紀初頭に位置づけられる(吉田東明編 2000『仁右衛門畑遺跡1』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第12集 福岡県教育委員会)。陶硯の型式では堂畑例は新しいもの。両遺跡の時期的な集落の在り方など注目される。

86は天井部がかなり内側に歪み、口縁部の高さと同じになる須恵器杯蓋。内面を硯面として使用した転用硯である。天井部が歪んでいるので、天井部と体部との境の窪みが海、口縁部が外堤になる。裏返しても安定しないため、下に皿などを置いたものと考えられるが、外面天井部の一部が摺れていることから、そのまま置いて使用した可能性もある。中心から4cmの範囲は、ナデが消えるほど良く摺っており、墨痕も薄いしみ状のものが点々と残る。外面には薄く自然釉が付着する。口径15.6cm、器高1.5cm、色は灰色を呈する。

(3)1区出土石器・土製品・金属器(一覧表も作成 第2表)

a. 1区出土石器・石製品(図版57～59、第126～132図)

打製石器 (図版57・58、第126図1～7)

1・3～7は黒曜石製の剥片石器である。1は下端部を楔形石器として使用したもの。背面は他方向の剥離で構成される。不純物を含む黒曜石である。48号住居跡覆土出土で2.4gを測る。2は下端部を石錐として使用した質の悪いメノウ製。先端部は欠損し、背面には自然面を残す。63号住居跡出土で、3.6gを測る。3は不定形剥片素材の剥片で側縁を刃部として使用したもの。右側縁以外の端面には自然面が残る。5号土坑出土で、3.6g。4は不定形剥片素材の剥片で、下端部を刃部として使用したもので、一部擦痕が認められる。右側縁には自然面を残す。2号掘立柱建物跡堀り方出土で、3.6g。5は右側縁に微細剥離を有する。3号円形周溝状遺構出土で、2.6gを測る。6は不定形剥片素材の剥片で、左側縁に刃部加工を行い、微細剥離を有する。右側縁は刃つぶし加工を行う。1号溝出土で、5.0g。7は右側縁に微細剥離を有する剥片。遺構面出土で1.7gを測る。

磨製石器 (図版58、第126図8～128図22)

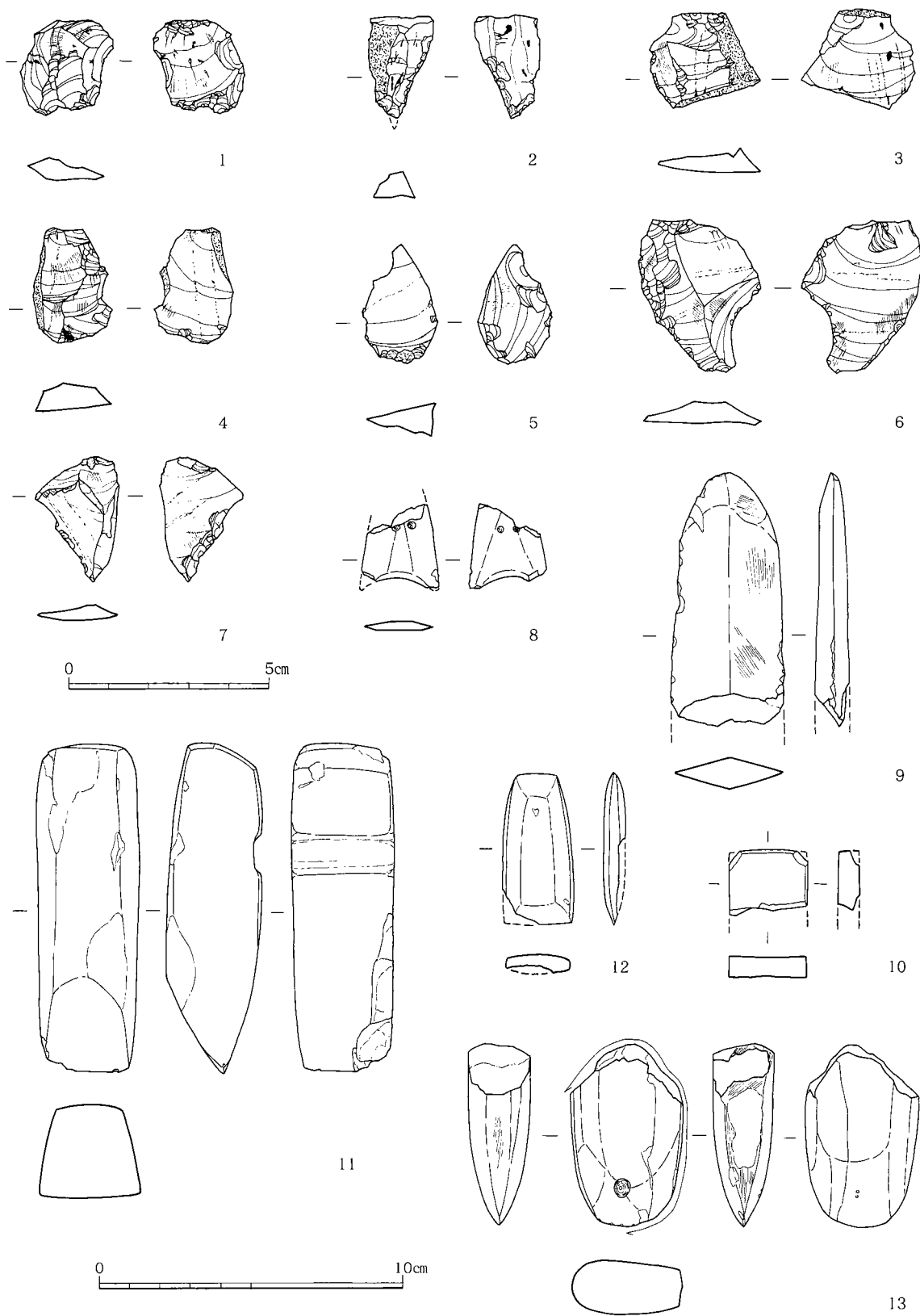
8は基部が浅い抉りを入れる磨製石鏃。稜線は左右非対称で、研磨は丁寧ではない。両面の稜線上に3mmの間隔をあげ、裏表両側から工具で穿孔を行うが、表左側が穿孔途中で割れてしまい、左右いずれも未貫通のままである。長さ2.3cm、幅2.5cm、厚さ0.3cm、重さ2.1gを測る。40号住居跡出土で、片岩製。9の縞は中央を通り、左右対称につくられた磨製石剣の切先部。一部に研磨痕が認められる。先端部は欠損し、刃部は右側縁を中心に微細剥離を有し、強い擦痕もあることから、欠損後にも再利用したものである。ピット100出土で、長さ8.35cm、幅3.7cm、厚さ1.1cmの、頁岩製。

10は扁平片刃石斧の基部片で、丁寧な造りのもの。裏面には研磨痕がわずかに残る。上端部両側縁と裏面は一部剥離し、いずれも使用の反作用でできた剥離か。9号住居跡出土で、長さ2.1cm、幅2.55cm、厚さ0.7cm、重さ8.2gの粘板岩製。

11は刃部の一部が使用により剥離するものの、ほぼ完形の抉入片刃石斧である。表面は風化が進み、わずかに研磨痕が残る。基部内側は丸みを有し、頂部には粗割段階の叩打痕が残る。抉入部は浅いものの、明確な稜を作り出す。66号住居跡出土で、長さ10.9cm、幅3.3cm、厚さ3.1cm、重さ205.9gの頁岩製。

12は平面形が撥形を呈する小型の磨製石斧で、丁寧に研磨を施す。刃部には明確な使用痕は認められず、裏面は欠損する。31号住居跡出土で、長さ5.05cm、幅2.3cm、厚さ0.7cm、重さ12.9gの蛇紋岩製。13は頁岩製の磨製石斧で、石目がよく観察できるもの。右側縁には叩打痕が残るものの、比較的丁寧な造りで、研磨痕が一部残る。刃部には使用による剥離が認められるが、刃部両側縁はこの使用痕上から研磨を施し、丸みを帯びさせる。上端割れ口まで研磨を施す。また刃部の稜付近には表面では1ヶ所、浅いものの裏面からは2ヶ所穿孔するが、未貫通である。このことから石斧を破損後、石斧以外のものに再利用しようとしたもの。遺構面出土で、長さ6.0cm、幅3.7cm、厚さ2.0cm、重さ61.6gを測る。

14～21は石包丁である。15は輝緑凝灰岩、16は頁岩、21は粘板岩、これら以外はいずれも片岩系のもの。15は両面とも叩打痕が残り、わずかに刃こぼれするもの。やや形がいびつである。36号住居跡出土で、長軸6.8cm、短軸4.6cm、厚さ0.5cm、重さ26.6g。16は両面に研磨痕が良く残り、上端部は面を持つ。孔は稜線を持たず、孔の下側がやや擦れる。刃部には再加工の研ぎ直しが認められる。石材はやや不純物を多く含む。41号住居跡出土で、長軸7.4cm、短軸4.4cm、厚さ0.6cm、重さ30.1gを測る。16は研磨痕が良く残るもので破損後、再加工したもの。刃部と側縁がそれぞれ裏面刃部から表面側縁の順で研磨し、断面では片刃状を呈す。孔は破損するものの、稜線が明瞭である。裏面は再加工後の刃こぼれがあり、擦痕が強く残る。62号住居跡



第126図 1区出土石器・石製品実測図(1) (1~7は2/3、他は1/2)

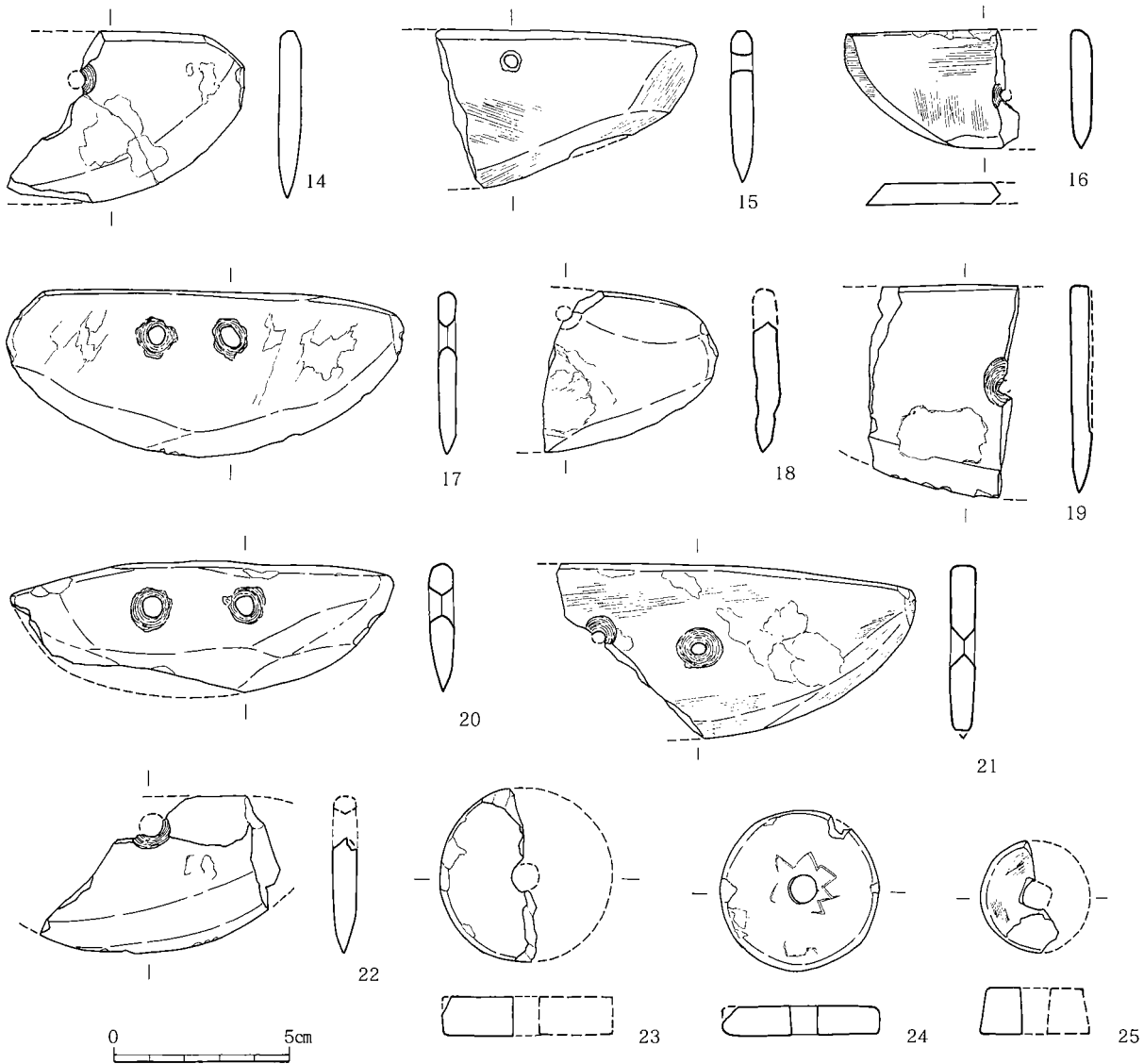
出土で、長軸5.0cm、短軸3.3cm、厚さ0.6cm、重さ14.6gを測る。17は完形品で、叩打痕が若干残るもの。刃部は左側を中心に刃こぼれが顕著であり、孔も使用のため稜線がつぶれる。66号住居跡出土で、長軸11.3cm、短軸4.6cm、厚さ0.5cm、重さ42.5gを測る。18は叩打痕が両面によく残るもので、表面は風化するものの研磨は顕著でないもの。刃部の使用痕も認められず、穿孔する際に破損した可能性もある。73号住居跡北包含層出土で、長軸5.0cm、短軸4.5cm、厚さ0.8cm、重さ24.6gを測る。19はかなり風化し、剥離が進むやや大形のもの。刃こぼれが認められる。遺構面出土で、長軸4.25cm、短軸5.9cm、厚さ0.6cm、重さ26.3gを測る。20は刃部が欠損するもので、背部に叩打痕が残り、緑色片岩のため研磨痕は残っていないが、全体的にやや雑な造りのもの。孔内の稜線ははっきりしない。歪な形態から2次調整を施した可能性もある。遺構面出土で、長軸10.9cm、短軸3.7cm、厚さ0.7cm、重さ43.5gを測る。21は叩打痕が両面に良く残るが、研磨痕が顕著なもの。背部は面を形成する。わずかに刃つぶれし、孔内側の稜線は明確である。遺構面出土で、長軸10.2cm、短軸4.9cm、厚さ0.7cm、重さ42.5gを測る。22は刃部の一部のみ残存し、わずかに刃つぶれするもの。孔内側の稜線は顕著である。孔と背部との位置が近いので、背部を研ぎ直したものか。遺構面出土で、長軸6.8cm、短軸4.4cm、厚さ0.7cm、重さ24.1gを測る。

石製紡錘車 (図版59、第127図23～25)

23～25は石製紡錘車である。24・25が滑石系で、23は細粒砂岩製のもの。23は1/2しか残存していないもので、やや風化が進むもの。4号住居跡下層出土で、径4.8cm、孔径0.7cm、厚さ1.1cm、重さ12.9g。24は端部の稜があまく、造りがやや粗製もの。表面の孔の周りに金属の棒状工具により、鋸歯文を線刻するが、線は弱く消えかかっており、また歪なため全周するかどうかは不明。遺構面出土で、径4.5cm、孔径0.8cm、厚さ0.8cm、重さ29.0g。25は1/2しか残存していない小型のもので、表面と側面には研磨痕が残る。孔は丸ではなく、四角形を呈する。試掘トレンチから出土で、径3.1cm、孔は一辺が0.8cm、厚さ1.3cm、重さ11.1g。

砥石 (図版59・60、第128～130図1)

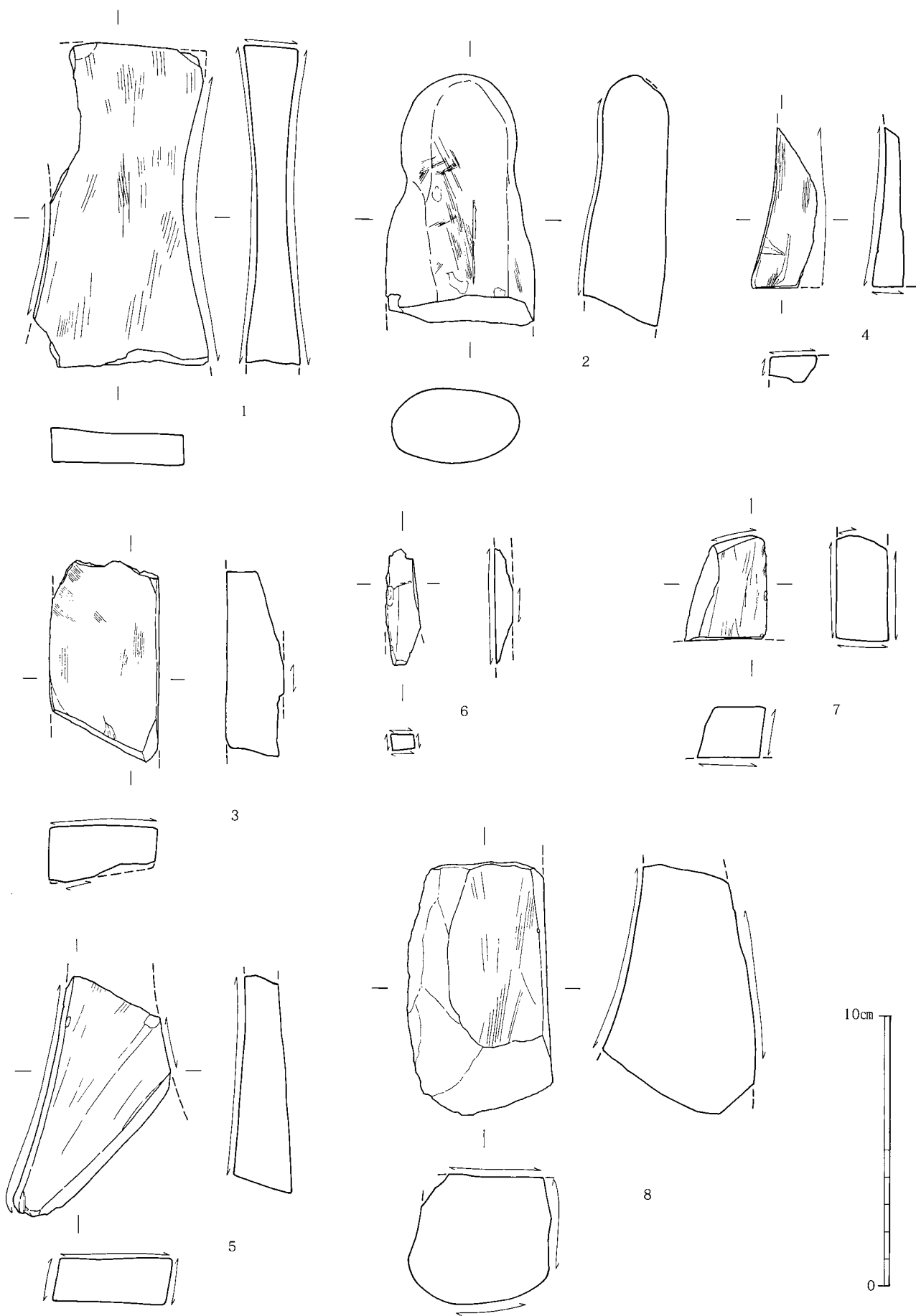
1～16は砥石である。1・2は25号住居跡から出土した。1は長方形の板状砥石である。本来厚さ2cmほどの長方形の板状をしていたものと思われるが、上・下面、左右側面が使用されてそれぞれの中央部が大きく窪んだ結果、バチ形を呈している。上端面・下端面はともに整形時に平坦に仕上げているが、併行して走る擦過痕が認められず、砥面としては使用されていないと判断した。色は黄灰褐色を呈し、重さ203.7gで、非常に目が細かい泥岩製であり、仕上げ砥と考えられる。残存長11.9cm、幅6.3cm、厚さ2.1cm。2は平面形・側面形ともに長楕円形を呈する石製品である。全体に摩滅した原礫面が露出しているが、上面にのみわずかながら平坦面が形成され、縦方向に長く、横斜め方向に短く並行して走る多くの擦過痕が確認されたため、砥石と判断した。下端面は折損しており不明であるが、他の面には調整痕等は確認されず、本来長楕円形の円礫であったものを上面のみ一時的に使用したものと思われる。重さ187.4g、暗灰～灰緑色を呈する粒度の細かい砂岩製で、中砥～仕上げ砥か。残存長9.2cm、幅5.5cm、厚さ2.9cm。3は56号住居跡から出土した。本来厚さ2cm、幅4cmほどをはかる縦長の長方形を呈する棒状砥石であったと思われるが、上端面・下端面ともに折損しているほか、下面の大半も折損により失われている。砥面は上・下面、左右側面が使用されているが、このうち下面は上面に対して平行しておらず、折損後再調整して砥面として利用された可能性もある。また、下端面も折損後砥面として再利用されている。重さ94.9g、灰黄色～明黄褐色の片岩製で、仕上げ砥か。残存長7.1cm、残存幅4.0cm、厚さ2.1cm。4は65号住居跡から出土した。長方形の板状を呈する比較的小型の砥石であったと思われるが、上端・右側面のほか下面も折損によって失われており全形は不明である。砥面は上面と左側面に確認される。下端面は調整のみで砥面としては利用されていないと判



第 127 図 1 区出土石器・石製品実測図 (2) (1/2)

断した。重さ 16.6g、粒度の非常に細かい泥岩製で黄灰～橙灰色を呈し、仕上げ砥と考えられる。残存長 6.0 cm、残存幅 1.8 cm、残存厚さ 1.2 cm。5 は 66 号住居跡から出土した。長方形の板状砥石であったと思われるが、左右側面が顕著に使い込まれた結果中央部が細くなって折損したものである。砥面は左右両側面のほか上面に認められ、下面・下端面も折損後に砥面として再利用されている。上端面は折損したまま調整等も施されていない。重さ 100.2g、灰緑色～灰黄褐色の非常に粒度の細かい泥岩製で、仕上げ砥と判断される。残存長 8.8 cm、残存幅 4.4 cm、厚さ 2.1 cm。6 も 66 号住居跡から出土した。小さな棒状砥石であったと思われるが、上端面、下端面ともに折損して本来の大きさは不明である。砥面は上・下面、左右側面に確認した。重さ 3.8g、赤褐色～暗褐色を呈するきめの細かいチャート質で、仕上げ砥と判断される。残存長 4.3 cm、幅 1.3 cm、厚さ 0.7 cm。

7 は 3 号円形周溝状遺構から出土した。板状または棒状砥石と思われるが、大半を欠失しており本来の形状は不明である。下端面と左側面が残存しているが右側面と上端面は折損して失われている。上・下面、左側面は砥面として使われており、下端面にも砥石としての使用痕が確認されている。また、上端面も折損後再利用されている。重さ 32.3g をはかり、灰白～灰黄色を呈す



第128图 1区出土石器·石製品実測図(3)(1/2)

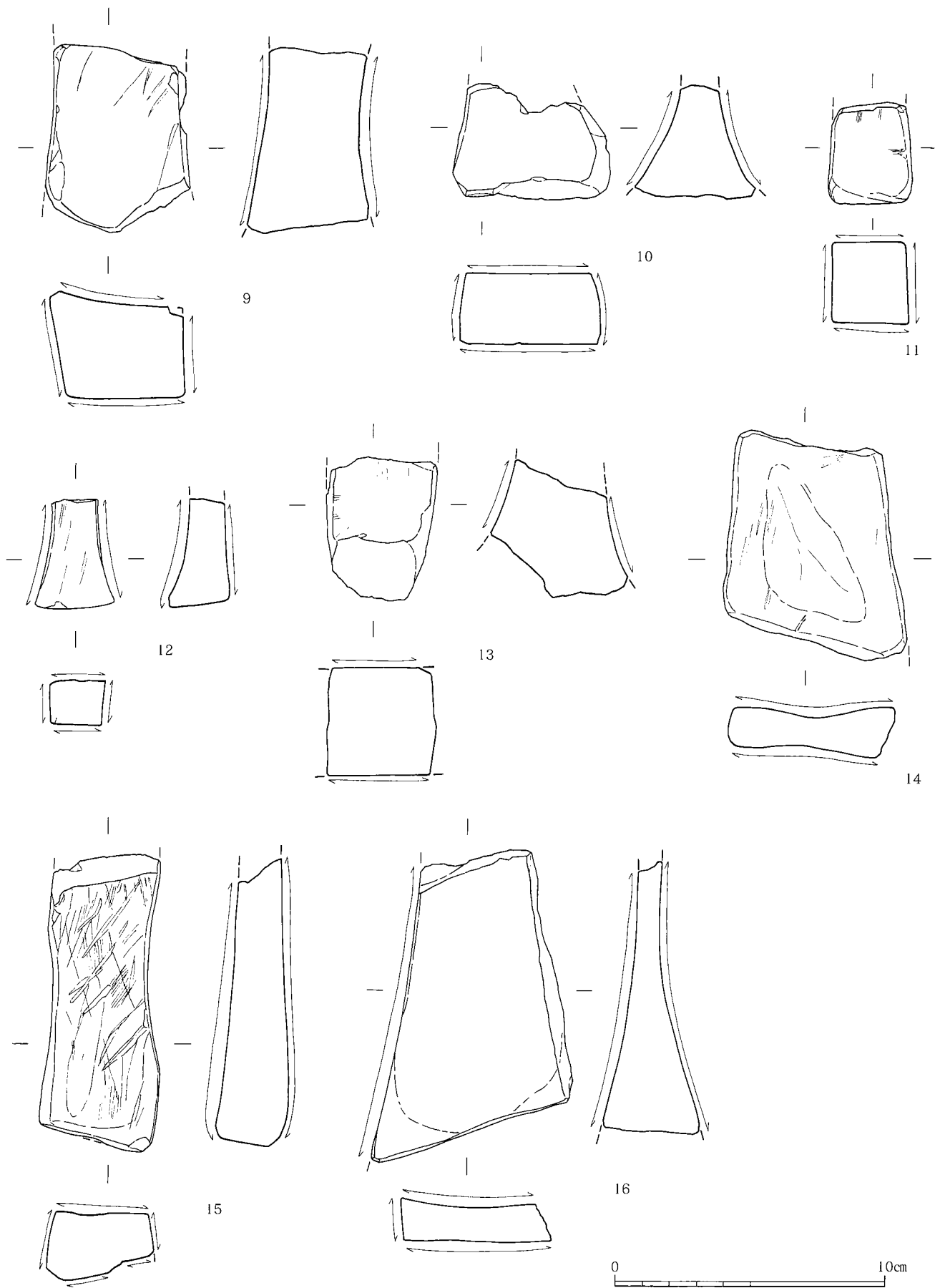
る非常にきめの細かい泥岩で、仕上げ砥と考えられる。残存長 3.9 cm、残存幅 2.9 cm、厚さ 1.9 cm。8 は 5 号土坑から出土した。大きな棒状または板状砥石であったと思われるが、上・下端面、左側面が欠損して全形は不明である。砥面は上・下面、右側面に確認される。上面はよく使い込んで強く窪んでいるが、下面には明確な平坦面が形成されておらず、右側面もよく使い込まれてはいない。上面のみ使い込んでいる点やその大きさから、本来置き砥石として代われ、破損した後に仕上げ砥石として右側面や下面が使われたとも考えられる。重さ 348.9 g、灰白色～灰褐色を呈する非常にきめの細かい泥岩製である。残存長 9.4 cm、残存幅 5.2 cm、残存厚さ 5.6 cm。

9～16 はいずれも遺構検出時の採集品である。9 は棒状砥石であったと思われる。上・下端面が折損により失われる。砥面は上・下面、左右側面に確認される。重さ 212.4 g をはかるきめのやや細かい砂岩製で、粗砥か。残存長 6.8 cm、残存幅 5.4 cm、厚さ 4.5 cm。10 は長方形の板状砥石であったと考えられるが、上・下面をよく使い込んで強く窪んだ結果中央部が折損したものである。砥面は上・下面、左右側面に確認される。下端面は整形時に調整したままで砥面としては使用されていない。上端面は折損したままである。重さ 93.8 g をはかるきめの細かい泥岩製で、色は灰白色～白色を呈する。仕上げ砥。残存長 4.2 cm、残存幅 5.9 cm、残存厚さ 4.4 cm。11 は断面正方形を呈する棒状砥石である。上端面は折損により失われたまま未調整で、下端面は整形時に調整したままと考えられる。砥面は上・下面、左右側面に確認されるが、大きくすり減っている面は認められない。重さ 53.1 g、灰白色～灰黄白色を呈する非常にきめの細かい泥岩で、仕上げ砥である。残存長 3.8 cm、幅 3.1 cm、厚さ 3.2 cm。12 は小型の板状または棒状砥石である。左右両側面がよく使い込まれて強く窪み、中央から折損している。砥面は上・下面、左右両側面に確認される。下端面は整形時の調整のみで、上端面は折損したままである。重さ 29.3 g、きめの細かい泥質砂岩で、中砥か。残存長 4.0 cm、幅 2.9 cm、厚さ 2.3 cm をはかる。13 は大型の棒状砥石である。左右両側面は整形時の調整のみで砥面としては使用されておらず、上・下面のみが顕著に使い込まれて強く湾曲し、中央から折損している。上端部は折損したままの状態、下端面も折損していると考えられる。重さ 112.1 g、灰白～灰黄色を呈し、やや粗めの泥岩で中砥か。残存長 5.2 cm、幅 4.7 cm、残存厚さ 4.5 cm。14 は板状砥石である。上端面は折損したままであるが下端面はおそらく折損後に再調整したものである。左右両面は整形時の調整を残し、砥面は上・下面に形成されている。上面の砥面には中央部に緩やかにくぼみがあり、棒状か先端のものが前後に研いだ可能性がある。重さ 125.6 g、黄灰～灰白色を呈するきめの細かい砂岩製で、粗砥か。残存長 7.9 cm、幅 6.8 cm、厚さ 1.8 cm。15 は棒状砥石である。上端面は折損したままであり、下端面は整形時の調整のままである。砥面は上・下面、左右側面に形成されている。特に上面には、石自体はさほど軟質でないにも関わらず非常に鋭い刃物で切り込んだ痕跡が多く残されているほか、多くの深い擦過痕が残っている。重さ 191.2 g、非常にきめの細かい泥岩製で、仕上げ砥であろう。残存長 11.0 cm、幅 4.4 cm、厚さ 2.6 cm。16 は板状砥石である。上・下面がよく使い込まれて湾曲した結果中央部では厚さが 1 cm 強にまで減じており、この結果折損して上半を失っている。左側面にも砥面が確認されるが、右側面は折損したまま調整すら施されていない。下端面も折損により失われたままである。重さ 238.9 g、きめのやや細かい片岩製で暗褐色～暗灰褐色を呈し、中砥～仕上げ砥と思われる。残存長 11.0 cm、残存幅 7.3 cm、残存厚さ 3.5 cm。

第 130 図 1 は 47 号住居跡付近の包含層から出土した砂岩製の砥石で、下半を欠失する。破面以外の面は全面使用されており、いずれの面も使い込まれて、滑らかである。破面に 2 箇所、穿孔の跡がある。残存長 4.0 cm、幅 1.8 cm、最大厚 1.45 cm、重さ 19.0 g。

磨石 (図版 60・61、第 130・131 図 13)

2・3 はともに 66 号住居跡内 P 5 から出土した。2 は表裏両面を使用している。裏面は段状にくぼむが、くぼんだ部分も磨れている。長さ 4.25 cm、幅 3.7 cm、最大厚 2.0 cm、重さ 38.0 g。



第129图 1区出土石器·石製品実測図(4)(1/2)

3は表面の中心付近のみ磨れており、やや平らになっている。長さ5.1cm、幅3.2cm、最大厚3.3cm、重さ68.0g。4～7は3号住居跡カマド下の土坑から出土した。4は3面使用しており、使用面は平滑である。残存長7.5cm、幅6.6cm、最大厚1.9cm、重さ141.0g。5もまた3面使用している。長さ9.4cm、幅7.8cm、最大厚3.3cm、重さ401.0g。6は5面使用し、表裏面が使い込まれている。長さ7.4cm、幅6.2cm、最大厚2.5cm、重さ167.0g。7は表裏両面を使用し、表面がより平滑である。長さ9.4cm、幅7.2cm、最大厚2.4cm、重さ254.0g。8は36号住居跡から出土した。発掘の際に多くのキズが付いてしまっているが、表裏両面と側面2面を使用している。残存長7.5cm、幅7.0cm、最大厚3.2cm、重さ214.0g。9は56号住居跡から出土した。表裏両面を使用しており、とくに表面がよく磨れている。長さ9.7cm、残存幅7.9cm、最大厚2.6cm、重さ309.0g。10・11は59号住居跡から出土した。10は3面使用している。長さ8.4cm、幅8.45cm、最大厚4.3cm、重さ443.0g。11は表面が荒れており、あまり滑らかではないが4面使用している。長さ9.1cm、幅7.5cm、最大厚5.75cm、重さ421.0g。12・13は遺構面から出土した。いずれも表裏両面を使用しており、かなり平滑になっている。12の長さ12.6cm、幅10.6cm、最大厚3.5cm、重さ717.0g。13の長さは15.6cm、幅12.0cm、最大厚2.4cm、重さ731.0g。

敲石 (図版60、第131図14・15)

14は48号住居跡から出土した。端部にわずかだが敲打の痕跡が認められる。他の面は自然面で、磨れていない。長さ8.6cm、幅8.1cm、最大厚4.7cm、重さ352.0g。15は遺構面から出土した。端部にごくわずかであるが、敲打の跡が認められる。他の面は自然面で全く磨れていない。長さ15.5cm、幅6.15cm、最大厚4.4cm、重さ683.0g。

台石 (図版61、第132図)

16は57号住居跡から出土したが、半分を欠失している。表面と側面の一部が平滑で、実測図のようにおくと安定が悪い。長さ20.5cm、残存幅15.0cm、最大厚12.8cm、重さ4.0kg。17は8号溝より出土している。両側面が磨れており、図の上にあたる側面の方がより滑らかである。表裏面は細かな凹凸が残る。長さ15.9cm、幅25.3cm、最大厚6.5cm、重さ6.0kg。18はP143から出土した。側面の一部を打ち欠いている。表裏と側面の3面が磨れている。長さ19.2cm、幅29.0cm、最大厚6.5cm、重さ8.5kg。

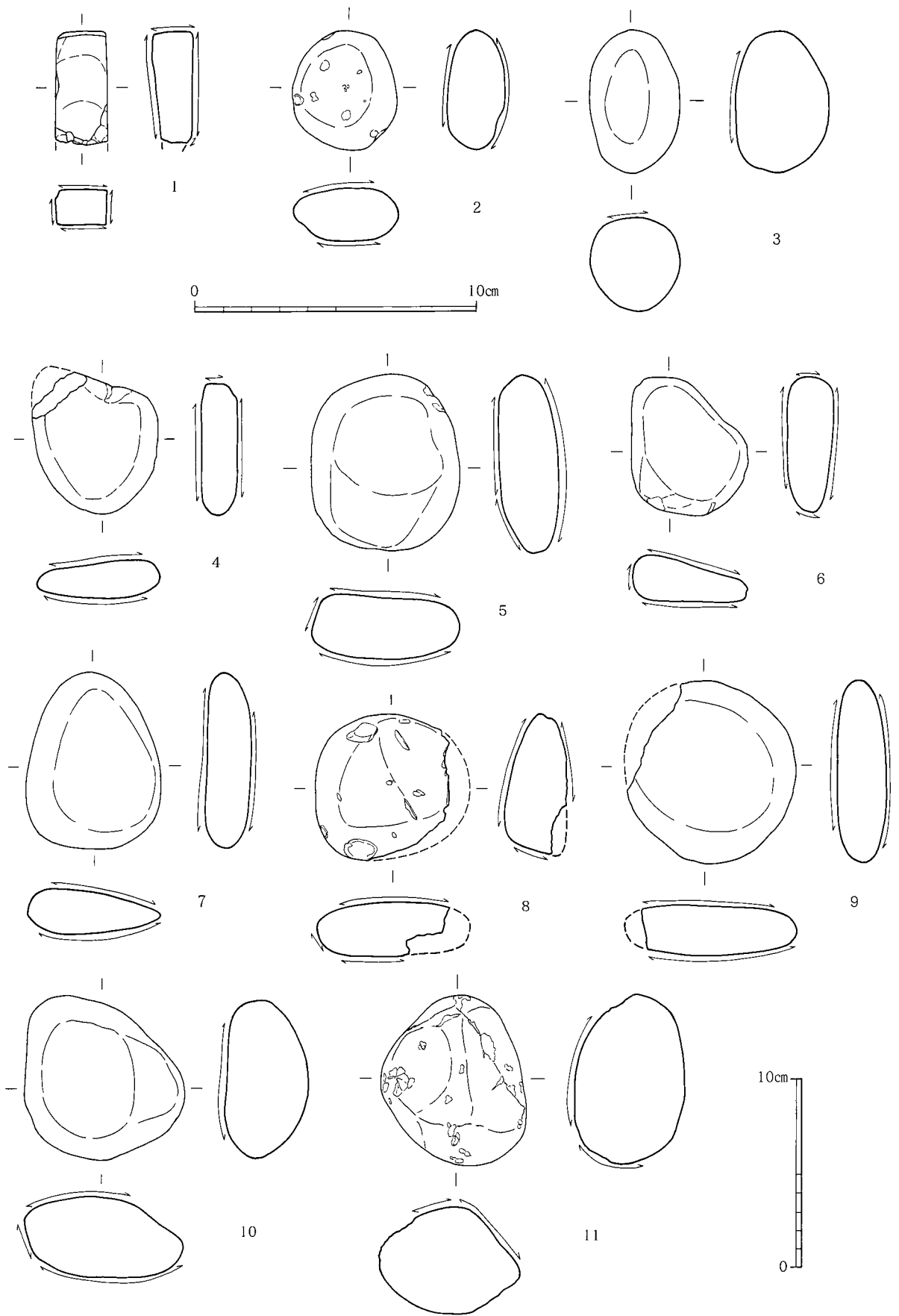
b. 1区出土製塩土器・土製品

製塩土器 (図版61・62、第133図1～26)

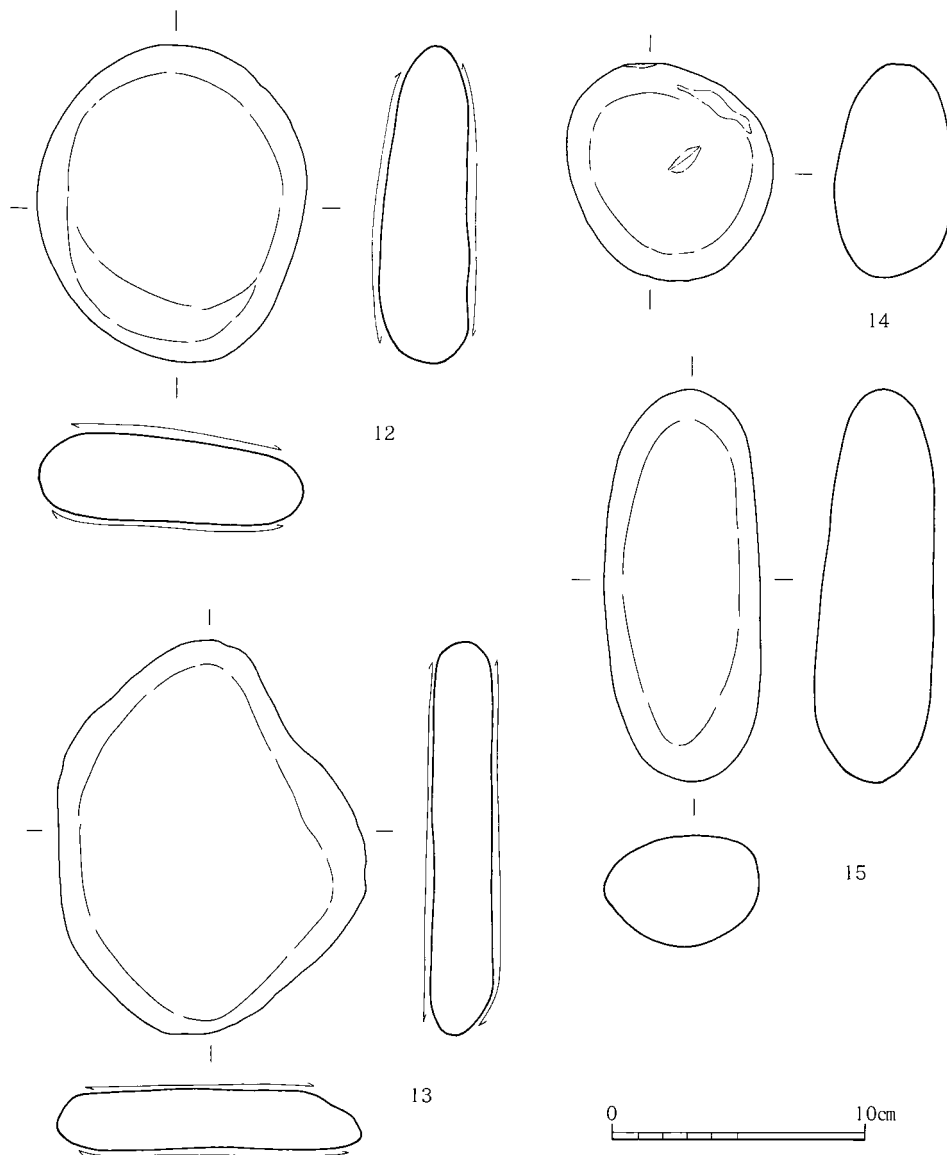
今回の調査区では26点の製塩土器が出土している。これは内面の布目痕や外面における二次加熱の痕跡等の製塩土器としての特徴を備えたものを抽出したもので、これ以外にも多く出土していると考えられる。これらの多くは1号溝から集中して出土している。以下、個別に特徴を記述する。

1～13は円筒状で内面に布目圧痕を残すもので、布目はいずれも比較的粗い。1は口縁端部に内外面から摘んだ圧痕の残るもの。口径10.4cm、最大径12.4cm。内面には布目が大きくずれた痕跡が残る。外面には成形時の強いナデ痕が残る。2も同様の口縁である。口径11.0cm。3は胴部の破片で上下両端が内湾する。外面には圧痕が強く残る。最大径10.0cm。4は底部付近の破片で、外面には圧痕が残る。最大径11.2cm。5は口縁端部上面をやや外傾にするもの。6は口縁端部をはねあげる口縁部片。8・11の外面には圧痕が強く残る。1～4・6～13は1号溝から出土した。

14～19は円筒状であるが内面に布目圧痕を残さないものである。14は口縁部で端部を細く仕上げる。15～19は胴部片で内外面に圧痕が強く残る。14・19は試掘時に出土した。15は52号



第130図 1区出土石器・石製品実測図(5)(1~3は1/2、他は1/3)



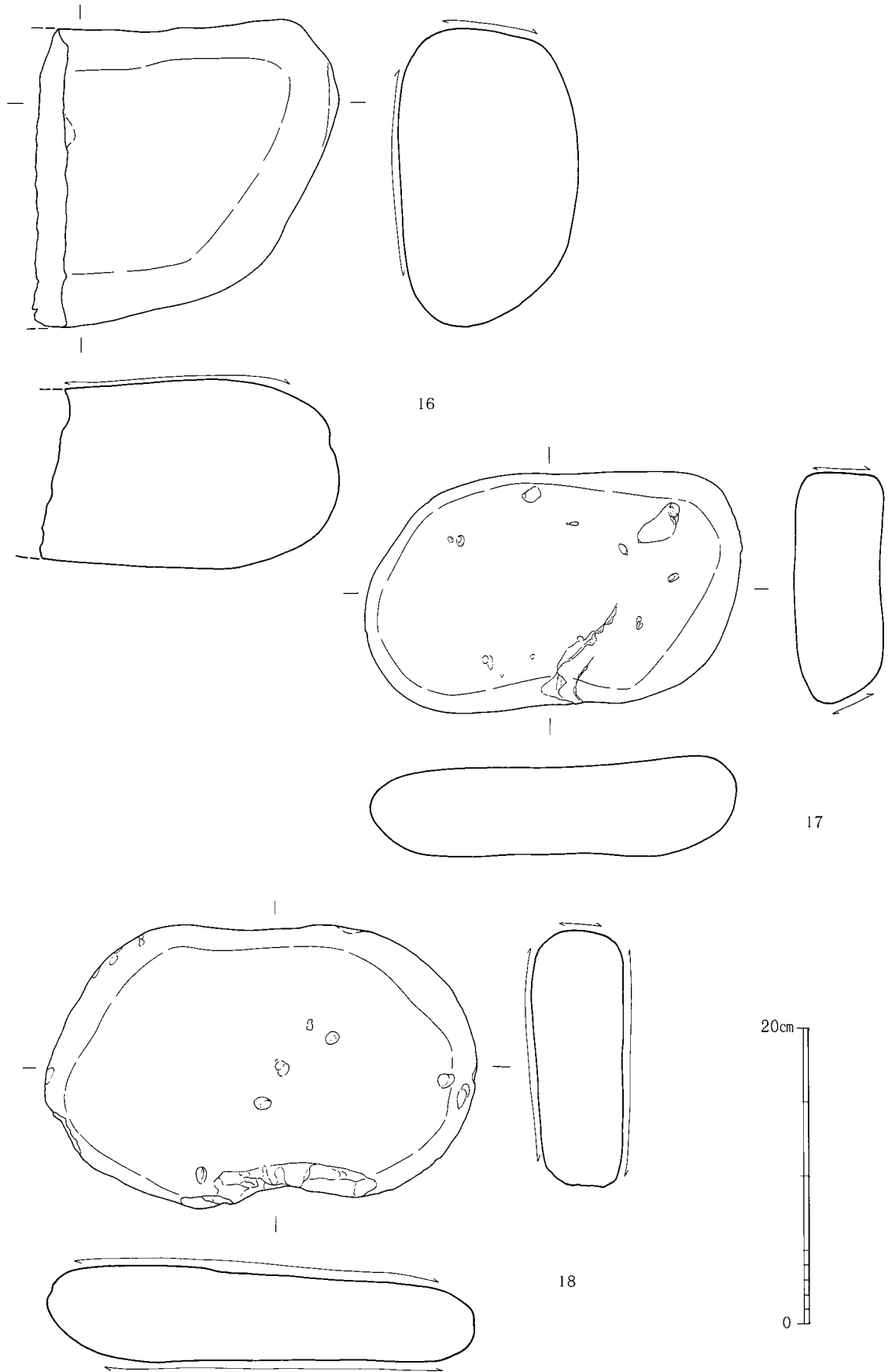
第 131 図 1 区出土石器・石製品実測図 (6) (1/3)

住居から、16 は 1 号溝から、18 は 38 号住居から出土した。17 は遺構検出時に出土した。

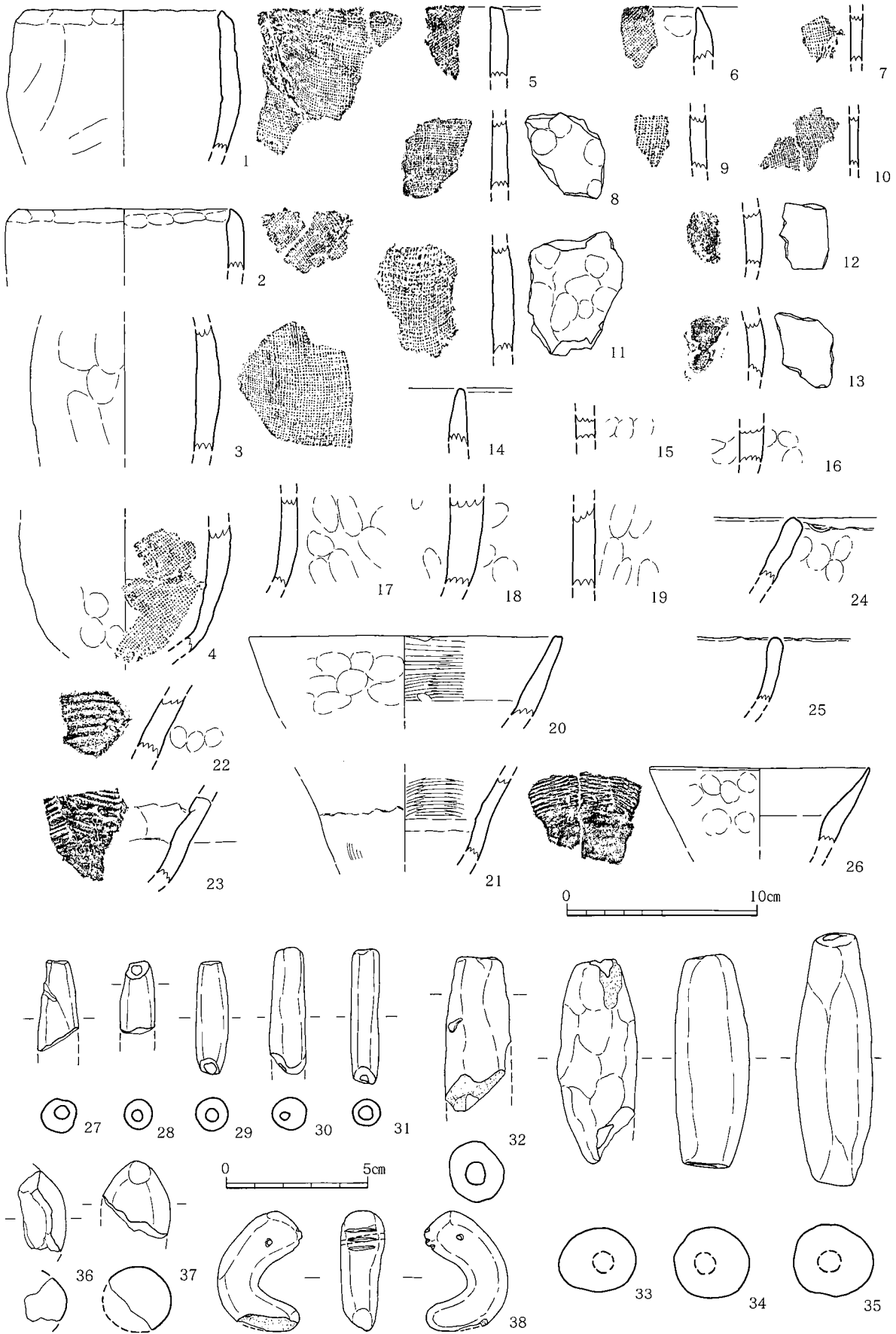
20～26 は鉢状を呈するものである。20～23 は口縁部内面を細かいタタキにより仕上げるものである。20 は上端面を切り、平坦に仕上げている。口径 16.4cm。外面には圧痕が強く残る。21 は 20 と同様の器種である。口縁部と胴部の境は屈曲し、外面には接合痕が明瞭に残る。内面の屈曲部より下半はナデ調整である。22 は内面のタタキが粗いもの。23 は底部付近の破片で粗いタタキ。内面に接合痕が明瞭に残る。24～26 は調整にタタキや布目がなく、ナデおよび圧痕が残るものである。24・25 は口縁端部を丸く仕上げる。26 は端部を細く仕上げるものである。口径 11.4cm。20・21・23 は 1 号溝から出土のもの。22 は試掘時に、24～26 は遺構検出時に出土した。

土製品 (図版 63、第 134 図 27～38)

27～31 は土錘である。27・28 は両端が細くなるもの。29～31 は円筒状を呈するものである。27 は 9 号土坑、28～30 は遺構検出時に、31 は 40 号住居から出土した。長さ 4.8cm、幅



第 132 图 1 区出土石器・石製品実測図 (7) (1/4)



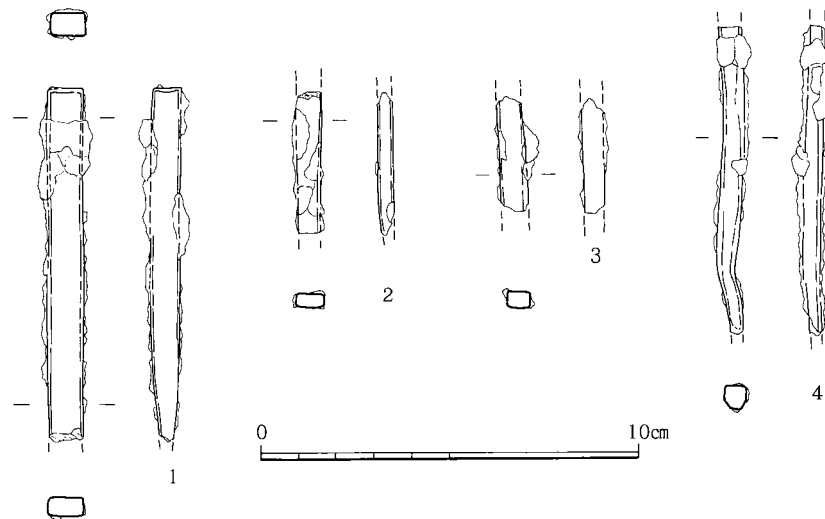
第133図 製塩土器・土製品実測図 (1~26は1/3、27~28は1/2)

1.0cmである。32～35は大型の土錘である。いずれも両端が細くなるもので、手捏ねにより仕上げられている。32は幅2.3cm。33は長さ7.2cm、幅2.8cm。34は7.5cm、幅2.5cm。35は長さ8.9cm、幅2.9cm。32～34は遺構検出時に、35は試掘時に出土した。36・37は投弾である。36は遺構検出時に、37は6号溝から出土した。38は土製勾玉である。長さ3.2cm、頭部の幅1.5cm。手捏ねにより仕上げられ、穿孔付近に三条の沈線を施す。丁字頭の表現の名残であろう。遺構検出時に出土した。

c. 1区出土金属器

鉄器 (図版63、第134図)

1は64号住居址から出土したノミ状工具である。太さ約1cm、厚さ約6mmをはかる断面長方形の棒状を呈し、下端部(刃先方向)のみ欠損して復原長はおよそ10cm程度となる。全体にさびが付着するものの金属質は比較的残り、旧状がよくわかる資料である。上端から約7.5cmの部分まで柱状に伸び、そこから下端まで徐々に厚さを減じて刃先へと至る形状を呈する。重さ29.7gをはかる。2は溝9から出土したノミ状工具である。太さ約6mm、厚さ約4mmをはかるやや不整形な柱状を呈する。上端・下端ともに欠損しているが下端は厚さを減じ始める部分までが確認できる。さびが付着して劣化がやや進行している。重さ2.8gをはかる。3・4は遺構検出時の採集資料である。3は太さ約8mm、厚さ約5mmをはかるノミ状工具である。上端・下端ともに欠損して全長は推定できない。さびが付着して劣化が著しいが、前二者と比べて断面形がやや楕円形を呈するようである。重さ2.8gをはかる。4は径約6mm、長さ8cmをはかる断面不整円形のクギ状鉄器である。上端・下端ともに欠損していて全長は不明であるが、下端部は徐々に細くなっており、先端が鋭くとがるものと思われる。全体にさびに覆われているが内部の遺存状況は比較的良好である。重さ8.4gをはかる。



第134図 1区出土金属器実測図 (1/2)

検出番号	種類	出土場所	長さ(cm)	幅・径(cm)	厚(mm)	孔径(mm)	重量(g)	材質	備考
第126図-1	楕形石鈎	48号竪穴住居跡層土	2.3	2.3	0.6		2.4	黒曜石	
第126図-2	石錐	63号竪穴住居跡P11	2.5	1.6	0.7		3.6	瑪瑙	
第126図-3	使用割片	5号土坑	2.3	2.8	0.5		3.6	黒曜石	
第126図-4	使用割片	2号掘立柱建物跡	2.8	1.9	0.7		3.6	黒曜石	
第126図-5	使用割片	3号円形溝溝状遺構	3	1.9	0.8		2.6	黒曜石	
第126図-6	使用割片	1号溝	3.8	3.1	0.6		5	黒曜石	
第126図-7	使用割片	遺構面	3.1	2.1	0.4		1.7	黒曜石	
第126図-8	磨製石鏃	40号竪穴住居跡	2.85	2.5	0.3		2.1	片岩	孔を貫通
第126図-9	磨製石鏃	ピット100	8.35	3.7	1.1		28.4	頁岩	先端再加工
第126図-10	扁平片刃石斧	9号竪穴住居跡	2.55	2.15	0.7		8.2	粘板岩	
第126図-11	挟入片刃石斧	66号竪穴住居跡NQ-2	9.9	3.3	3.1		205.9	頁岩	
第126図-12	磨製石斧	31号竪穴住居跡	5.05	2.3	0.7		12.9	蛇紋岩	再利用品、孔を貫通
第126図-13	磨製石斧	遺構面	6	3.7	2		61.6	頁岩か	
第127図-14	磨製石包丁	36号竪穴住居跡	6.8	4.8	0.6		26.6	片岩	
第127図-15	磨製石包丁	41号竪穴住居跡	7.4	4.4	0.6	0.4	30.1	輝緑凝灰岩	研ぎ直し
第127図-16	磨製石包丁	62号竪穴住居跡	5	3.35	0.6		14.6	頁岩	
第127図-17	磨製石包丁	66号竪穴住居跡	11.3	4.65	0.5	0.5	42.5	片岩	
第127図-18	磨製石包丁	73号竪穴住居跡北包遺構	5	4.5	0.8		24.6	片岩	
第127図-19	磨製石包丁	遺構面	4.25	5.95	0.6		26.3	頁岩か	二次調整あり
第127図-20	磨製石包丁	遺構面	10.9	3.7	0.7	0.5	43.5	片岩	
第127図-21	磨製石包丁	遺構面	10.2	4.9	0.7	0.4	46.5	粘板岩	
第127図-22	磨製石包丁	遺構面	6.8	4.4	0.7		24.1	片岩	研ぎ直し
第127図-23	石製紡錘車	4号竪穴住居跡下層		4.8	1.1	0.7	12.9	細粒砂岩	
第127図-24	石製紡錘車	遺構面		4.6	0.8	0.8	29	蛇紋岩	断面文を線刻
第127図-25	石製紡錘車	試験トレンチ		3.1	1.3	0.8	11.1	蛇紋岩	孔は四角形
第128図-1	砥石	25号竪穴住居跡NQ-1	12.1	7	2		203.7	泥岩	
第128図-2	砥石	25号竪穴住居跡下層	9	5.5	3		187.4	砂岩	
第128図-3	砥石	56号竪穴住居跡	7.5	4	2.1		94.9	片岩	
第128図-4	砥石	65号竪穴住居跡	6	2	1.2		16.6	泥岩	
第128図-5	砥石	66号竪穴住居跡	9	4.3	1.8		100.2	泥岩	
第128図-6	砥石	66号竪穴住居跡層土	4.4	0.9	0.7		3.8	チャート	
第128図-7	砥石	3号円形溝溝状遺構	3.8	2.4	1.9		32.3	泥岩	
第128図-8	砥石	5号土坑	9.4	5	5.7		348.9	泥岩	
第129図-9	砥石	遺構面	7	4.5	4		212.4	砂岩	
第129図-10	砥石	遺構面	4.3	6	2.6		93.8	泥岩	
第129図-11	砥石	遺構面	3.8	3.2	2.9		53.1	泥岩	
第129図-12	砥石	遺構面	4	3	1.7		29.3	泥岩	
第129図-13	砥石	遺構面	5.4	4	4		112.1	泥岩	
第129図-14	砥石	遺構面	8.8	6.2	2		125.6	砂岩	
第129図-15	砥石	遺構面	11	4	2.7		191.2	泥岩	
第129図-16	砥石	遺構面	11.6	3.6	1.7		238.9	片岩	
第130図-1	砥石	47号竪穴住居跡北遺構面	4	1.8	1.45		19	砂岩	
第130図-2	砥石	66号竪穴住居跡P5	4.25	3.7	2		38	安山岩	
第130図-3	砥石	66号竪穴住居跡P5	5.1	3.2	3.3		68	安山岩	
第130図-4	砥石	3号竪穴住居跡カマド下土坑	7.5	6.6	1.9		141	安山岩	
第130図-5	砥石	3号竪穴住居跡カマド下土坑	9.4	7.8	3.3		401	安山岩	
第130図-6	砥石	3号竪穴住居跡カマド下土坑	7.4	6.2	2.5		167	安山岩	
第130図-7	砥石	3号竪穴住居跡カマド下土坑	9.4	7.2	2.4		254	安山岩	
第130図-8	砥石	36号竪穴住居跡	7.5	7	3.2		214	花崗岩	
第130図-9	砥石	56号竪穴住居跡層土	9.7	7.9	2.6		309	安山岩	
第130図-10	砥石	59号竪穴住居跡層土	8.4	8.45	4.3		443	安山岩	
第130図-11	砥石	59号竪穴住居跡層土	9.1	7.5	5.75		421	花崗岩	
第131図-12	砥石	遺構面	12.6	10.6	3.5		717	安山岩	
第131図-13	砥石	遺構面	15.6	12	2.4		731	安山岩	
第131図-14	砥石	48号竪穴住居跡	8.6	8.1	4.7		352	安山岩	
第131図-15	砥石	遺構面	15.5	6.15	4.4		683	安山岩	
第132図-16	台石	57号竪穴住居跡	20.5	15	12.8		4,000	安山岩	
第132図-17	台石	8号溝	15.9	25.3	6.5		6,000	安山岩	
第132図-18	台石	ピット143	19.2	29	6.5		8,500	安山岩	
第133図-1	製塩土器	1号溝中層							
第133図-2	製塩土器	1号溝上層							
第133図-3	製塩土器	1号溝中層							
第133図-4	製塩土器	1号溝中層							
第133図-5	製塩土器	1号溝							
第133図-6	製塩土器	1号溝上層							
第133図-7	製塩土器	1号溝							
第133図-8	製塩土器	1号溝							
第133図-9	製塩土器	1号溝上層							
第133図-10	製塩土器	1号溝上層							
第133図-11	製塩土器	1号溝							
第133図-12	製塩土器	1号溝							
第133図-13	製塩土器	1号溝							
第133図-14	製塩土器	試験トレンチ							
第133図-15	製塩土器	52号竪穴住居跡							
第133図-16	製塩土器	1号溝							
第133図-17	製塩土器	遺構面							
第133図-18	製塩土器	38号竪穴住居跡							
第133図-19	製塩土器	試験トレンチ							
第133図-20	製塩土器	1号溝中層							
第133図-21	製塩土器	1号溝中層							
第133図-22	製塩土器	試験トレンチ							
第133図-23	製塩土器	1号溝中層							
第133図-24	製塩土器	遺構面							
第133図-25	製塩土器	遺構面							
第133図-26	製塩土器	遺構面							
第133図-27	土錐	9号土坑	3.2	1.4		0.5			
第133図-28	土錐	遺構面	2.6	1		0.3			
第133図-29	土錐	遺構面	4	1.1		0.4			
第133図-30	土錐	遺構面	4.6	1.2		0.3			
第133図-31	土錐	40号竪穴住居跡	4.8	1		0.5			
第133図-32	土錐	遺構面	5.5	2.1		0.7			
第133図-33	土錐	遺構面	7.1	2.7		0.7			
第133図-34	土錐	遺構面	7.5	2.7		0.8			
第133図-35	土錐	試験トレンチ	8.9	2.8		0.8			
第133図-36	投擲状土製品	遺構面	3	1.7					
第133図-37	投擲状土製品	6号溝	2.7	2.4					
第133図-38	投擲状土製品	遺構面	4.1	2.9		1.5			
第134図-1	ノミ状鉄錐	64号竪穴住居跡	4.75	0.5	0.35		29.7		
第134図-2	ノミ状鉄錐	9号溝	1.9	0.4	0.2		2.8		
第134図-3	ノミ状鉄錐	遺構面	1.6	0.4	0.25		2.8		
第134図-4	釘状鉄錐	遺構面	4.1	0.35	0.35		8.4		

第2表 石製品・土製品・金属器観察表

IV まとめ

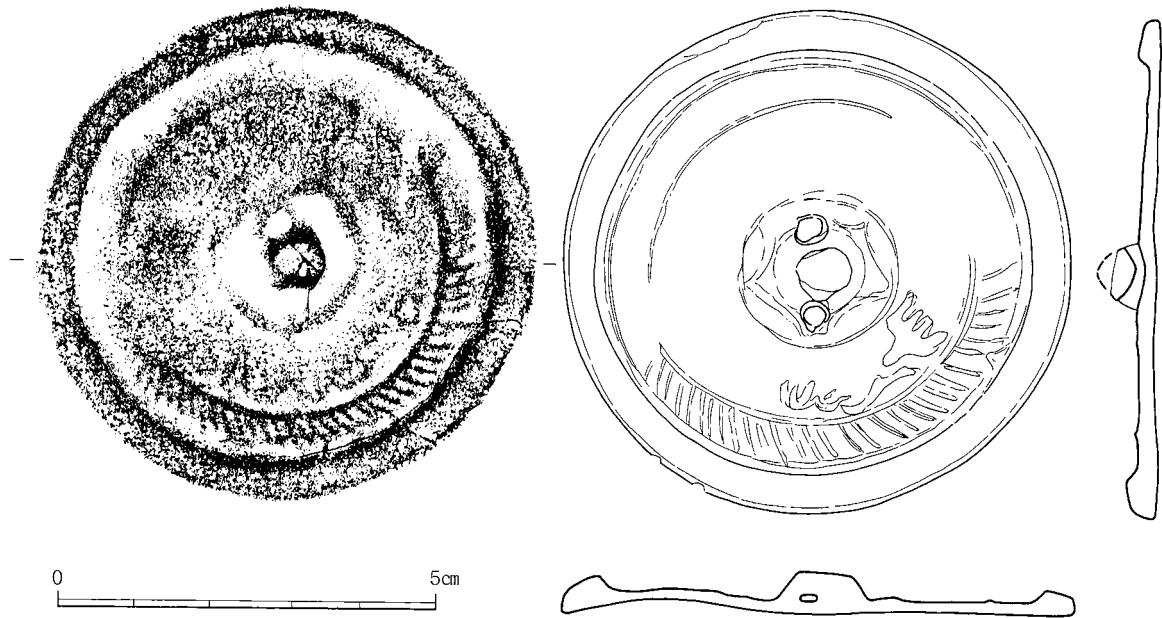
(1) 青銅鏡について (巻頭図版3・図版64、第135図)

弥生時代小形仿製鏡は弥生時代後期の堂畑遺跡1区25号竪穴住居跡を切る3号土坑から出土した(以下、堂畑鏡と略す)。鈕の頂部に古い欠損がある他は完形である。鏡面は凹面を呈すが、鈕の部分が鏡面側に盛り上がっており、本来、凸面だったものが、長年の土圧により変形したものと考えられる。直径は約67mm前後。厚さは鏡縁部分で4mm、擬銘帯の部分で2mmである。重量は35.9gである。銅質は良好であるが、かなり風化しており、表面は剥離しやすい。色は青緑色～暗青緑色を呈す。铸上がりは悪く、全体にぼんやりとした印象を受ける。特に約半分の文様はほとんどわからない。鏡縁はほぼ一定の角度でめぐっているが、一ヶ所のみ角度が変化する部分がある。これは鈕孔を垂直にし、铸上がりの良い部分を下にした場合、わずかにずれるが、ほぼ天の位置にくる。この部分は12mm×2mmの長楕円形に平面が形成されており、あたかも研磨により面取りされたような状況を呈する。これは田尻義了氏が指摘するように湯道を削り取ったための痕跡であろう(田尻2003)。縁は6mm程と幅が狭く、丸みを帯び外側に傾く。その内側に約5mmの斜行櫛歯文がめぐる。櫛歯の角度は一定でなく、幅は2mm程である。縁と櫛歯文帯の境には一箇所、铸型の傷であろうか盛り上がった部分が見られる。櫛歯文帯の一部に赤い物質が付着しており、赤色顔料が塗布されていた可能性がある。櫛歯文帯の内側には幅10mmの擬銘帯がめぐる。擬銘帯には铸上がりが悪いため明瞭ではないが、铸上がりの良い半分では盛り上がりが見られ、これが擬銘となるであろう。この盛り上がりから復原すると铸型には全周で10個の擬銘が描かれていた可能性がある。最も铸上がりの良い部分に縦棒4本が並ぶ文字風のものがあり、モデルとなった前漢鏡で一般に用いられる文字中で、この形に最も近いのが「而」の文字である。似た形態の文字に「之」があるが、これは縦棒が3本である。仿製鏡の擬銘や文様等が簡略化される一連の過程のなかで、縦棒が減ることはあっても1本を増やしたとは考えにくく、原鏡の「而」の文字を写したものとして判断してよいのではないだろうか。この「而」の天地から擬銘が半時計回りに配置されていたことがわかる。擬銘帯の内側には浮彫で五弧の内行花文帯が表現されるが内側の部分のみが大きく窪んでいる。内行花文帯に取り囲まれるように鈕が配置される。鈕は高さ約5.5mmであるが、頂部を欠損しており、本来、8mm程度はあったのであろう。

以上のような文様構成の特徴から、弥生時代小形仿製鏡の中でも比較的古い段階に見られるものであり、この時期に分類される仿製鏡の例は少なく重要な意義をもつ資料である。狭縁—櫛歯文帯—擬銘帯—内行花文帯という鏡背の文様構成は、高倉洋彰氏の分類(高倉1985)によれば、内行花文日光鏡系仿製鏡の第I型a類に属する。この分類に属する鏡は大韓民国慶尚北道漁隱洞出土鏡(小田・韓編1991)、福岡県犀川町続命院出土鏡(重藤1999)、熊本市五丁中原遺跡出土鏡(金田1997)、福岡県筑紫野市貝元遺跡出土(重藤1999)の4面があげられる。これらの中で同範関係にあるに続命院鏡と五丁中原鏡は擬銘帯と内行花文帯の間に櫛歯文帯がめぐる点で堂畑鏡とは異なり、原鏡が異なる可能性がある。漁隱洞鏡は狭縁—櫛歯文帯—擬銘帯—内行花文帯の文様構成、内行花文が五弧である点および擬銘が半時計回りに配置する点で一致する。これらの一致から、堂畑鏡は漁隱洞鏡の系譜につながるものと考えてよいであろう。堂畑鏡は漁隱洞鏡に比して、面径が大きくなり、縁がやや広く、丸みを帯びている点から漁隱洞鏡に後続するものと考えられる。貝元鏡は内行花文が六弧である点および擬銘帯の間延び、これに伴い面径が大形化した点で異なっているが、堂畑鏡に続鏡として考えてよいであろう。貝元鏡は第I型b類の時期に近接し、重藤輝行氏が報告書中で「内行花日光鏡系仿製鏡の変遷の中で住312鏡は傍流のような位置づけと

なる」と指摘するが、堂畑鏡はこの中間に位置するものであろう。

以上のように堂畑鏡は今まで変遷過程を追うことができなかった第Ⅰ型a類でも大型化の流れを示す非常に興味深い資料である。



第 135 図 3号土坑出土小形仿製鏡実測図 (1/1)

(2) 堂畑遺跡1区の調査のまとめ

堂畑遺跡3・4次調査では多くの遺構・遺物を検出したため、今年度は1区の調査成果のみ本書に収め、来年度に2～5区の成果を報告する予定である。堂畑遺跡1・2次調査の成果を含めた堂畑遺跡全体の時期別の遺構の在り方や出土遺物の検討は来年度報告の中で行いたい。ここでは、堂畑遺跡1区のみをまとめるが、2～5区の整理もまだ中途であり、1区の遺構の在り方など若干変わる可能性がある。その際には来年度報告の中で補遺を行いたい。

堂畑遺跡3・4次調査1区は2～5区に比べても遺構密度が高く、第9図の堂畑遺跡遺構配置図を見ても、集落の中心部であったことが分かる。1区では弥生時代中期後半～8世紀後半までの遺構や遺物を確認したが、県道西側の堂畑遺跡1・2次調査においては、第1面は中世の遺構・遺物を主体として構成されており、県道を挟んだ東西部分には中世段階には土地利用の在り方が異なることが分かる。このことは、県道西側には集落、東側は水田という現在の状況とさほど変わるものではなかったことを示している。

まず、時期ごとに1区の遺構・遺物の在り方を検討してみると、集落として形成が始まるのは弥生時代中期後半である。その前段階の弥生時代中期前半にあたる須玖Ⅰ式の土器も出土するが、須玖Ⅱ式古段階と考えられる土器も同時に出土していることから、遺跡のはじまりは須玖Ⅱ式古段階とし、中期後半と本文でも明記した。なお、浮羽地域は遠賀川以東系と言われる土器群の影響が大きく、遠賀川以西系と言われる土器群との折衷形態も認められるなど複雑な様相を見せる。この問題については、2区の20号溝などから当該期の土器が出土しており、遺構の様相を含めて来年度報告の中で言及したい。遠賀川以東系の土器で、豊前系と本文の中で

明記した土器（第32図1、第120図1・2）などは、福岡県東部の豊前地域で認められる資料である。このことは豊前地域～山国川～日田～浮羽という交流の痕跡を堂畑遺跡で確認できたことは大きな成果である。

弥生時代中期後半の62号住居跡は床面積56㎡の大型円形住居跡である。この住居跡では中央土坑を中心に主柱穴が3重に巡り、建て替えの可能性も考えても、2重の主柱穴群を有していたことは確実である。この大型円形住居跡について、福岡地域では集落に一つあるか無いかという状況が確認されており、機能としては集団の共同施設か集団の首長の住居跡であると予測されている（星野1998）。堂畑遺跡例においても同様の在り方を示していると考えられる。62号住居跡に切られる76号住居跡は楕円形を呈するが、この2つ以外の中期後半～末の住居跡はすべて方形を呈している。このことは資料が少ないものの、円形から方形への過渡期を示す資料となる可能性がある。円形周溝状遺構は堂畑遺跡では住居群付近で検出しており、鷹取五反田遺跡における集落域の端に集中して存在する様相とは異なる（水ノ江1998）。中期後半～末の両遺跡の土器を比較すると丹塗精製器種の壺・甕など違いが認められる器種が存在する。これらについては堂畑遺跡2～5区の成果と合わせて検討したい。

後期初頭～前半には33・36号住居跡、後期中葉は25号住居跡、後期後半～古墳時代前期初頭には65・73・74号住居跡、9・12号溝、後期になると1区中央部に遺構が集中する。25号住居跡では豊前系の土器が出土し、62号住居跡から混入ではあるものの籠目土器、12号溝からV様式系の加装壺口縁部が出土しており、古墳時代前期まで豊前地域との交流の痕跡が認められる。特に籠目土器は前述したように福岡県内で4例目の出土（註1）で、上唐原遺跡第4層包含層出土の鉢と形態が類似することは、交流の在り方を示していると言えよう。

古墳時代前期後半の12・28号住居跡は、1区中央と西側に分散して存在する。古墳時代中期の遺構は1区では確認できなかったが、1・2次調査で中期中頃段階の17・23号住居跡を検出しており、やや遺構密度は薄くなるものの、集落が前期から引き続き形成されたと思われる。

古墳時代後期後半になると1区全体に住居跡が広がって分布し、集落が最も発展した時期となり、1・2次調査と同じ様相を見せる。それまで遺構が少なかった西側にも集落域が広がり、西、中央、東部分に大きく3つに住居群が分かれる。またこの時期には住居の主軸が磁北方向を示す住居跡が多いが、1号溝に近い西側には主軸がやや西に振れる住居跡が存在する。この主軸は1号溝が北西―南東を貫く方向と一致することから、住居跡群が地形に影響を受けていることが確認できる。2号掘立柱建物跡も主軸が同様に西に振れる。

7世紀後半～8世紀初頭になると14・18・34・35・59号住居跡のように住居規模が急激に縮小するが、カマドについてはカマド本体は住居から突出し、煙道部も長くなる傾向を示す。住居の縮小やカマドの在り方については、筑後地域では一般的に見られるものであり、2～5区や仁右衛門畑遺跡においても同じ様相が認められる。

堂畑遺跡1区では8世紀前半の43・44号住居跡などが集落の最終段階にあたるが、住居規模が34号住居跡のように小さいものと、43号住居跡のようにやや大きい住居跡が存在する。この時期に遺構面出土ではあるものの、転用硯と円面硯が出土し、識字層の存在を予想させる。堂畑遺跡では2区東側で7世紀後半と考えられる2×6間の9号掘立柱建物跡と1次調査で検出した2×8間の1号掘立柱建物跡を確認しているものの、同時期の竪穴住居跡も存在することから、重藤輝行氏は1次調査の建物跡について一般的な集落の有力者の居館的な建物と推測している（重藤編2002）。美津留川を挟んだ対岸にあたる仁右衛門畑遺跡でも同時期と考えられる大型建物群を確認しているが、報告者である吉田東明氏も重藤氏と同様の見解を出している（吉田編2000）。この仁右衛門畑遺跡では竪穴住居跡から円面硯が出土していることから、一般的な集落まで識字層が存在していた可能性が高く、堂畑遺跡1区においても同じ様相であった

と思われ、来年度の堂畑遺跡の報告と併せてかなり明らかになるであろう。特に仁右衛門畑遺跡と堂畑遺跡は近接することから、集落同士の在り方も含めて興味深い問題となると考えられる。

8世紀中頃には1号溝が埋没しており、堂畑遺跡の県道から東側は集落として形成を終えるが、前述したように西側では中世の遺構が存在することから、現在の集落と重なる形で西側では集落が引き続き形成される一方、東側は田畑として利用され、今日まで至ると思われる。

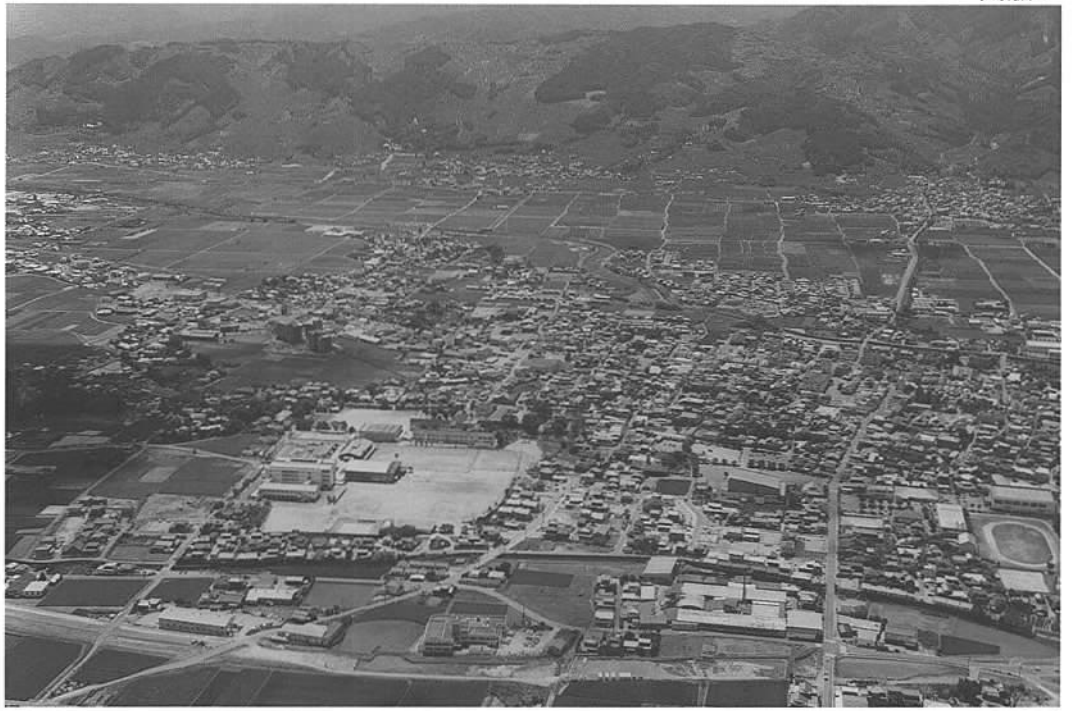
以上で1区の報告を終えることになるが、不十分な調査報告となってしまったことについては、遺跡に住んでいた先人たちに対して申し訳なく、責任を痛切に感じている次第です。来年度は『堂畑遺跡Ⅲ』を刊行する予定であるが、この反省を元に、さらに気を引き締めて報告書作成を行いたい。

参考文献

- 梅崎恵司 1996 「東北部九州—北豊前—」『弥生後期の瀬戸内海』古代学協会四国支部第10回 松山大会資料
- 小田富士雄・韓炳三編 1991『日韓交渉の考古学 弥生時代編』六興出版
- 金田一精 1997『五丁中原遺跡』熊本市教育委員会
- 高倉 洋彰 1985 「弥生時代小形仿製鏡について(承前)」『考古学雑誌』第七十卷第三号
- 田崎博之 1985 「須玖式土器の再検討」『史淵』第122輯 九州大学文学部
- 田尻 義了 2003 「弥生時代小形仿製鏡の製作地—初期小形 製鏡の検討」『青丘学術論集』第22集
- 重藤輝行 1999 「E 青銅器について」『貝元遺跡Ⅱ』福岡県教育委員会
- 重藤輝行編 2002『堂畑遺跡Ⅰ』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第17集 福岡県教育委員会
- 長嶺正秀 1981 「豊前国における古鏡について」『亀田南遺跡』勝山町文化財調査報告書第1集 勝山町教育委員会
- 長嶺正秀 1985 「下稗田遺跡出土の弥生時代前期～中期土器の編年的考察」『下稗田遺跡』行橋市文化財調査報告書第17集 下稗田遺跡調査指導委員会
- 星野恵美編 1998『松木田遺跡群』第2・3次調査 福岡市埋蔵文化財調査報告書第578集 福岡市教育委員会
- 水ノ江和同編 1998『鷹取五反田遺跡Ⅰ・稲崎A・B遺跡』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第9集 福岡県教育委員会
- 吉田東明編 2000『仁右衛門畑遺跡Ⅰ』浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第12集 福岡県教育委員会
- (註1) (財)元興寺文化財研究所 角南聡一郎氏の教示による

図 版

1 堂畑遺跡から
耳納山地を望む
(空中写真、北か
ら)



2 堂畑遺跡から
東を望む
(空中写真)



3 堂畑遺跡から
西を望む
(空中写真)





1 1区第1・2面
全景
(空中写真)



2 1区第1面全景
(東から)



3 1区西南壁土層
(北から)



1 1号竪穴住居跡
(北から)



2 2号竪穴住居跡
(南東から)



3 3号竪穴住居跡
(南東から)



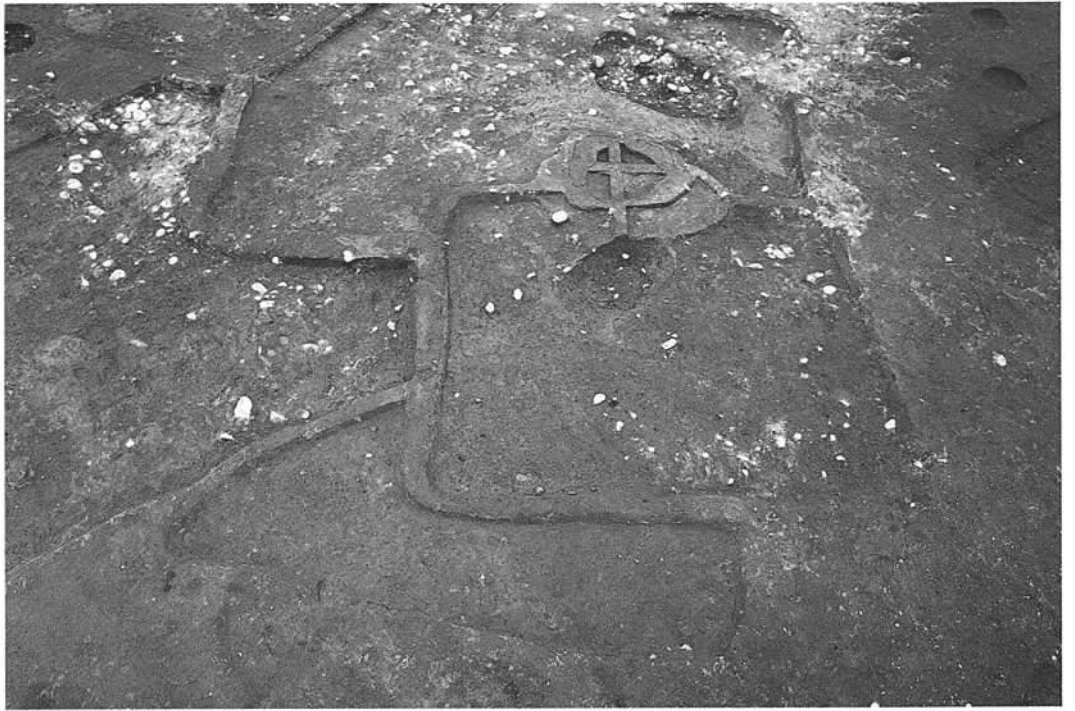
1 3号竪穴住居跡
カマド
(南東から)



2 3号竪穴住居跡
カマド
(南東から)



3 4号竪穴住居跡
(北から)



1 5号竪穴住居跡
周辺
(南東から)



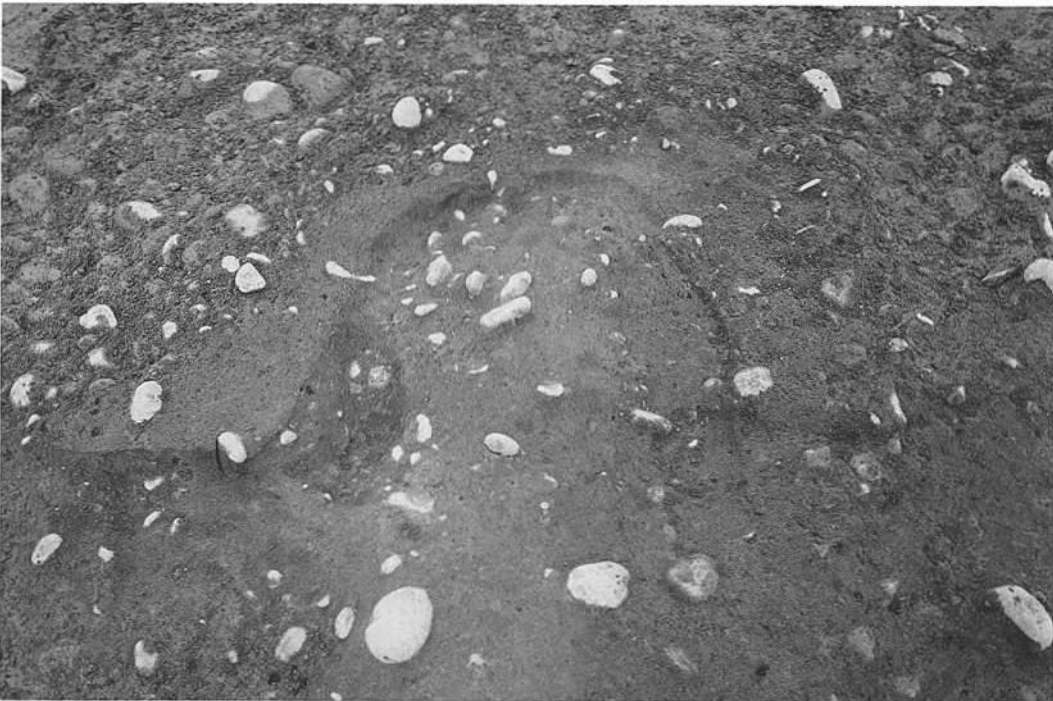
2 5号竪穴住居跡
(南東から)



3 5号竪穴住居跡
カマド
(南東から)



1 6号竪穴住居跡
(南東から)

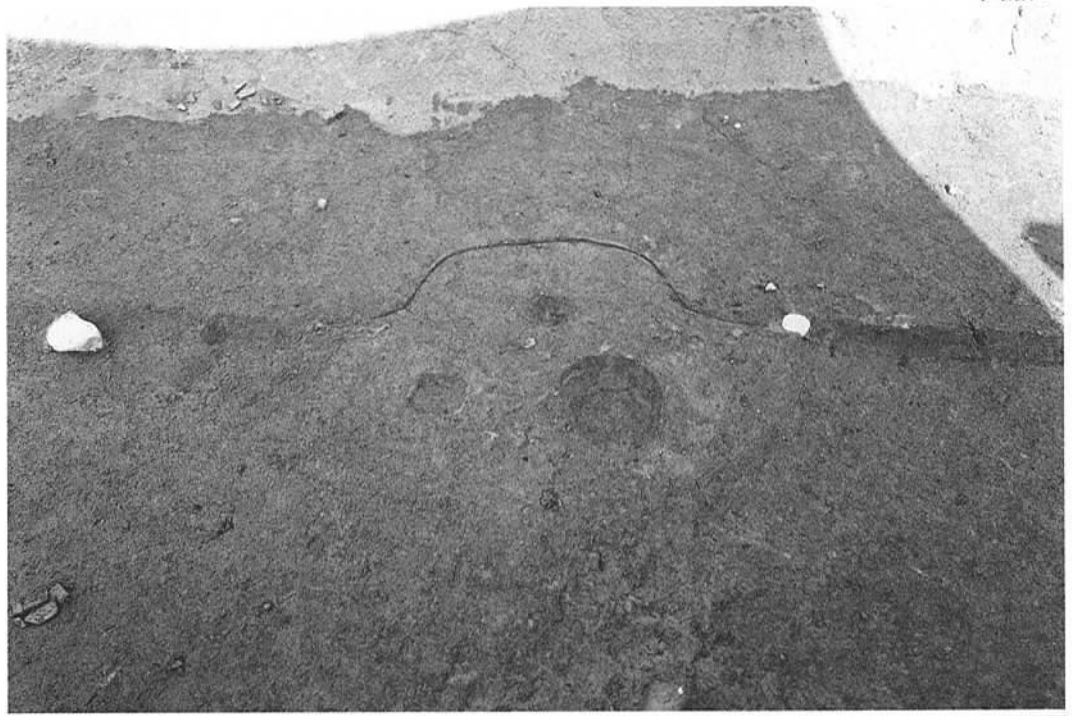


2 6号竪穴住居跡
カマド
(南東から)



3 7号竪穴住居跡
(南から)

1 7号竪穴住居跡
カマド
(南から)



2 8号竪穴住居跡
(南西から)



3 8号竪穴住居跡
カマド
(南西から)





1 9号竪穴住居跡
(南から)



2 10号竪穴住居跡
(南から)



3 12号竪穴住居跡
(北西から)

1 13号竪穴住居跡
(南から)



2 14号竪穴住居跡
(南東から)



3 14号竪穴住居跡
カマド
(南東から)





1 15号竪穴住居跡
(南東から)



2 15号竪穴住居跡
カマド
(南東から)



3 16号竪穴住居跡
(南東から)



1 17号竪穴住居跡
(南西から)



2 18号竪穴住居跡
(南から)



3 18号竪穴住居跡
カマド
(南から)



1 19号竪穴住居跡
(南東から)



2 19号竪穴住居跡
カマド
(南東から)



3 20号竪穴住居跡
(東から)

1 20号竪穴住居跡
カマド
(東から)



2 22号竪穴住居跡
(北から)



3 23号竪穴住居跡
(東から)





1 24号竪穴住居跡
(南から)



2 24号竪穴住居跡
カマド
(南から)



3 24号竪穴住居跡
カマド
(南から)



1 25号竪穴住居跡
(南東から)



2 26号竪穴住居跡
(南西から)



3 27号竪穴住居跡
(東から)



1 28号竪穴住居跡
(南から)



2 29号竪穴住居跡
(北西から)



3 30号竪穴住居跡
(北西から)



1 31号竪穴住居跡
(東から)



2 32号竪穴住居跡
(南西から)



3 32号竪穴住居跡
カマド
(南西から)



1 33号竪穴住居跡
(南から)



2 34号竪穴住居跡
(東から)



3 34号竪穴住居跡
カマド
(東から)



1 35号竪穴住居跡
(南から)



2 35号竪穴住居跡
カマド
(南から)



3 36号竪穴住居跡
(南東から)



1 37号竪穴住居跡
(南から)



2 38号竪穴住居跡
(南から)



3 38号竪穴住居跡
カマド
(南から)



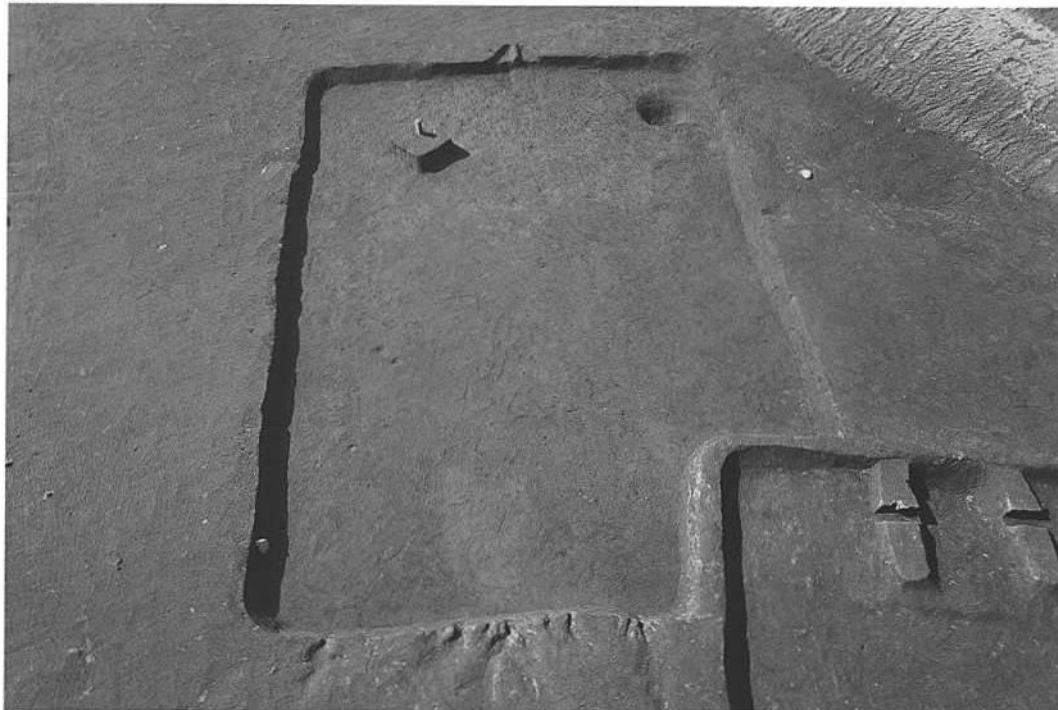
1 39号竪穴住居跡
(南から)



2 40号竪穴住居跡
(南東から)



3 40号竪穴住居跡
カマド
(南から)



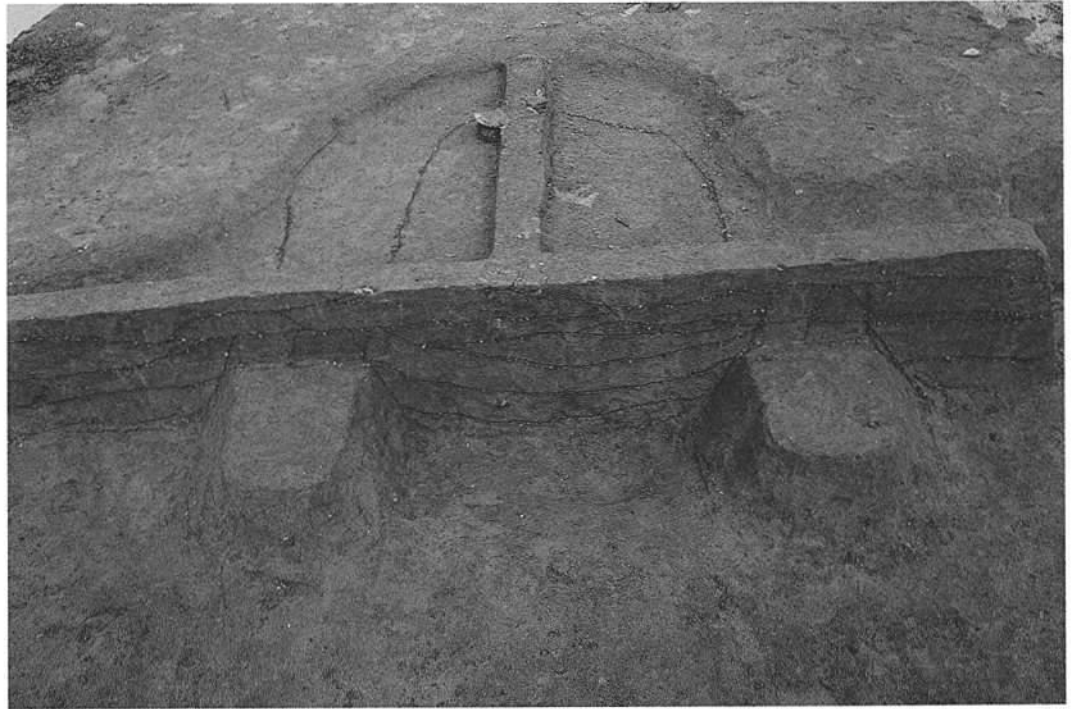
1 41号竪穴住居跡
(南東から)



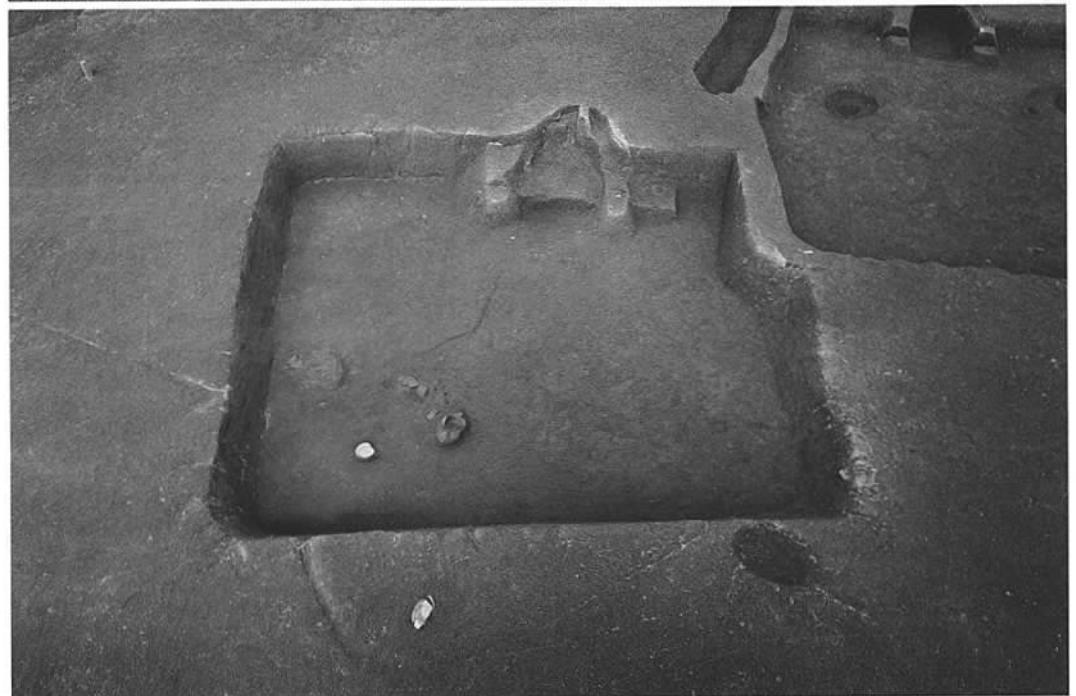
2 42号竪穴住居跡
(南から)



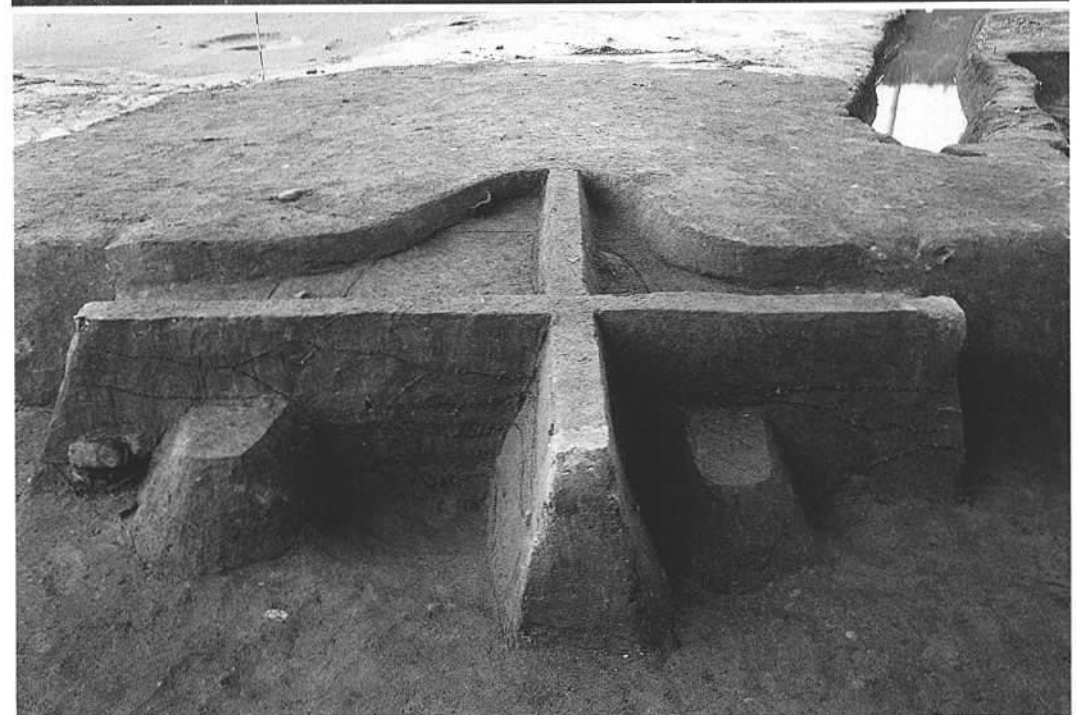
3 43号竪穴住居跡
(南から)



1 43号竪穴住居跡
カマド
(南から)



2 44号竪穴住居跡
(南東から)



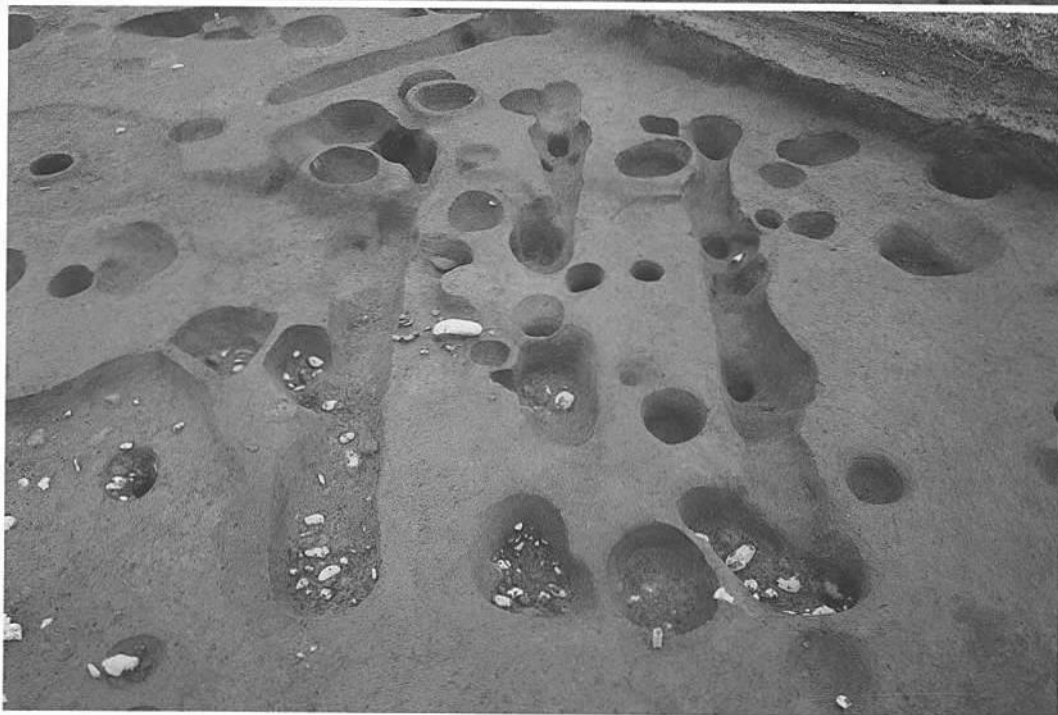
3 44号竪穴住居跡
カマド
(南から)



1 44号竪穴住居跡
カマド
(南西から)



2 1号掘立柱建物跡
(南から)



3 2号掘立柱建物跡
(北西から)



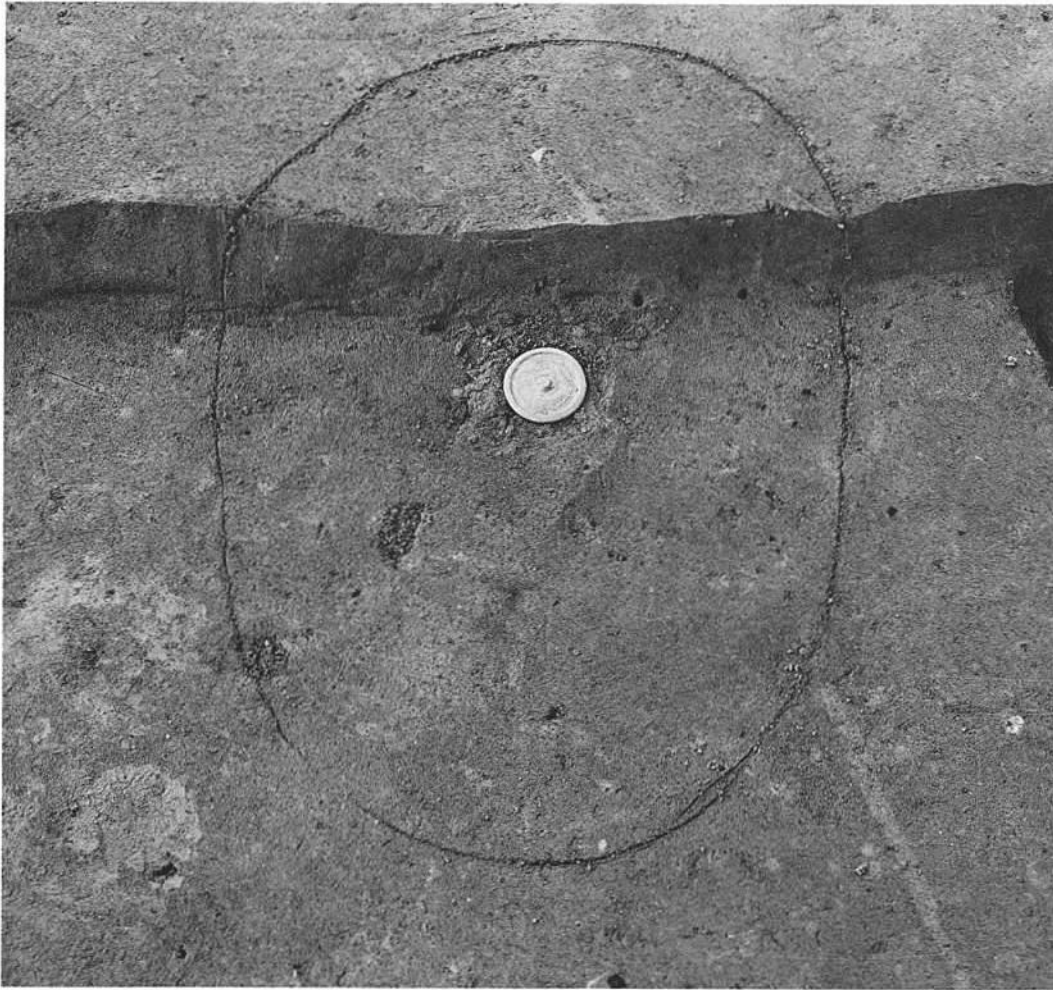
1 1号土坑
(南西から)



2 2号土坑
(南から)



3 3号土坑青銅鏡出
土状況
(北東から)



1 3号土坑検出状況
(北東から)



2 3号土坑土層
(南西から)



3 1号溝南壁土層
(北から)



1 1区第2面全景
(東から)



2 45・46号竪穴住居跡
(南から)



3 47号竪穴住居跡
(東から)



1 48号竪穴住居跡
(南から)



2 49・50号竪穴住居跡
1号円形周溝状遺構
(北から)



3 51号竪穴住居跡
(北から)



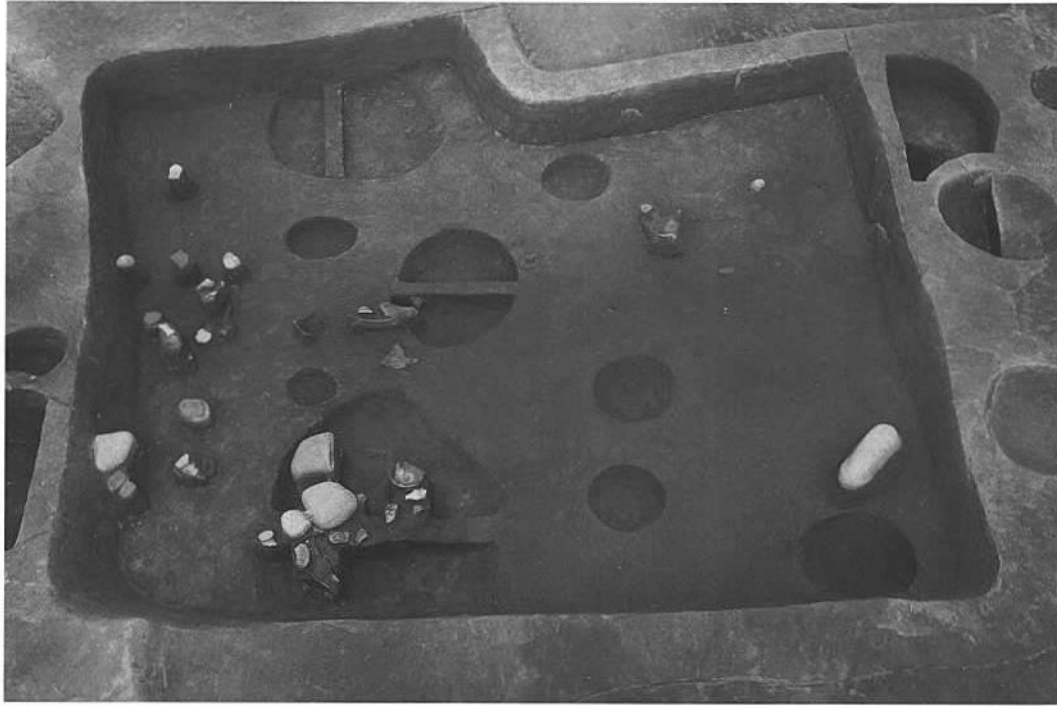
1 52号竪穴住居跡
(南から)



2 55号竪穴住居跡
(南から)



3 56号竪穴住居跡
(南から)



1 57号竪穴住居跡
(西から)



2 58・59号竪穴住居跡、17号土坑
(南から)



3 59号竪穴住居跡
カマド
(南から)



1 60号竪穴住居跡
(南から)



2 61号竪穴住居跡
(南東から)



3 62号竪穴住居跡
(北から)



1 63号竪穴住居跡
(南から)



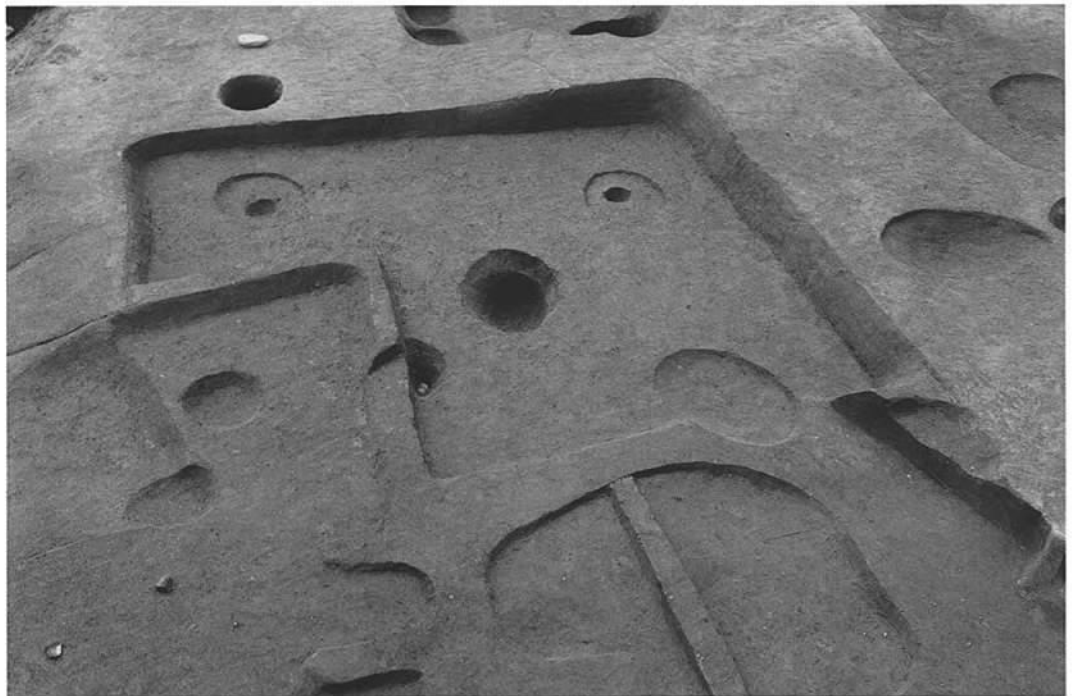
2 64号竪穴住居跡
(東から)



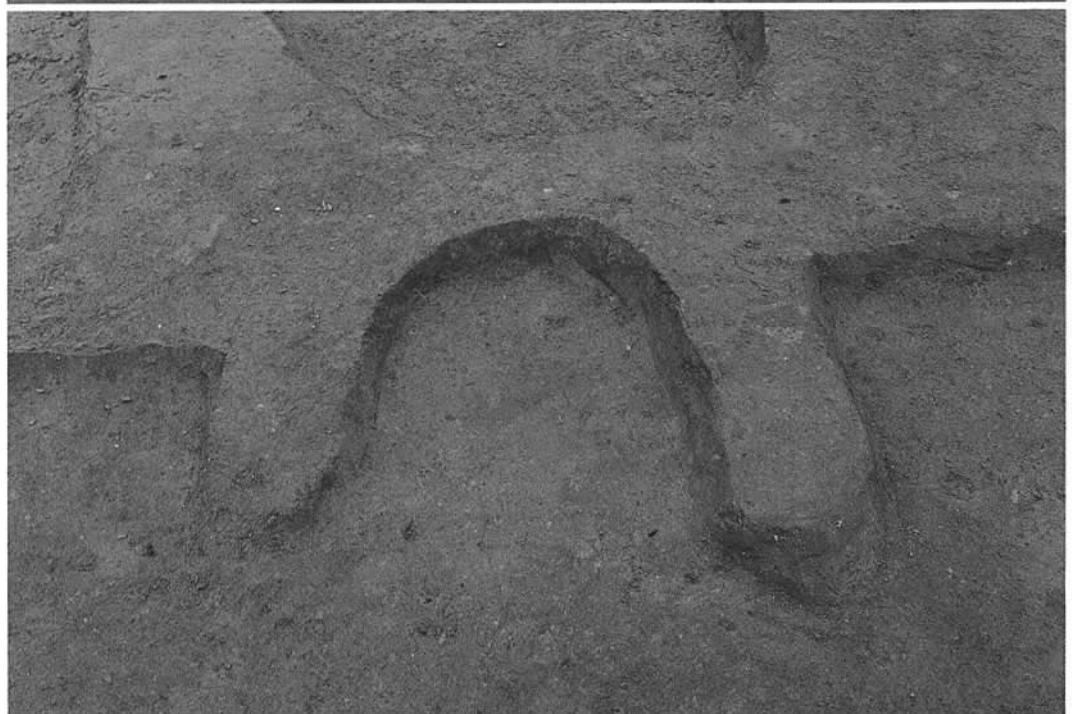
3 65・66号竪穴住居跡、13号土坑
(西から)



1 67・68号竪穴住居跡、12号土坑
(南から)



2 69号竪穴住居跡
(東から)



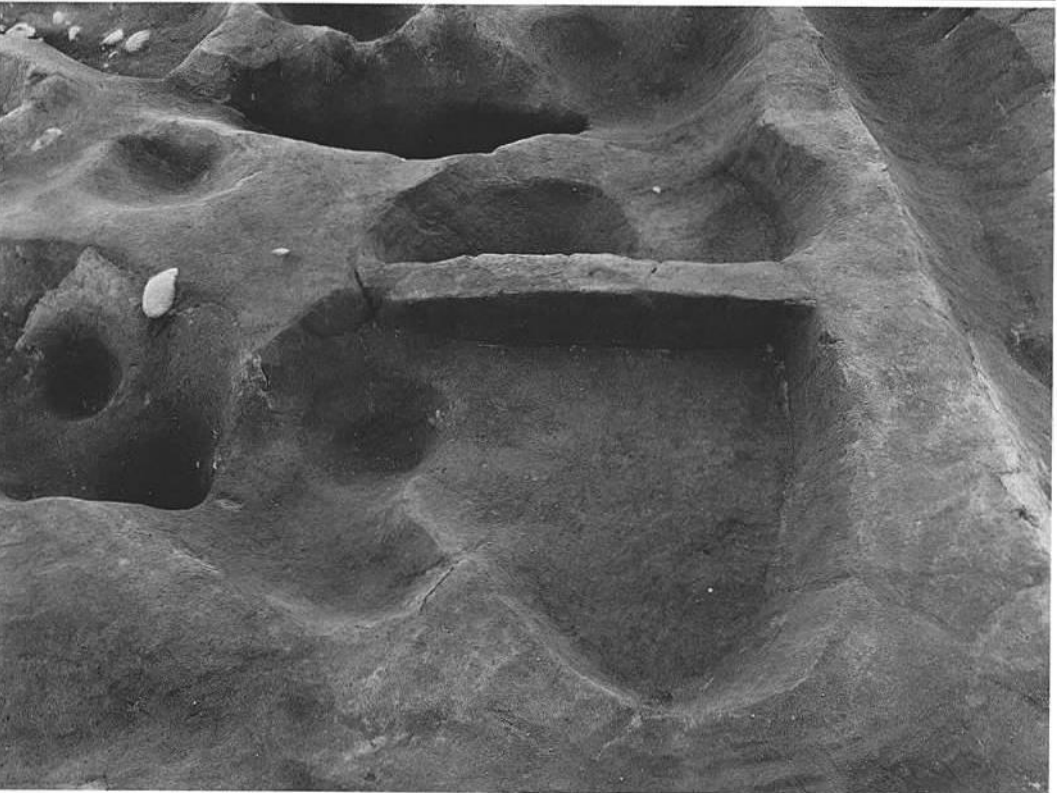
3 70号竪穴住居跡
カマド
(南から)



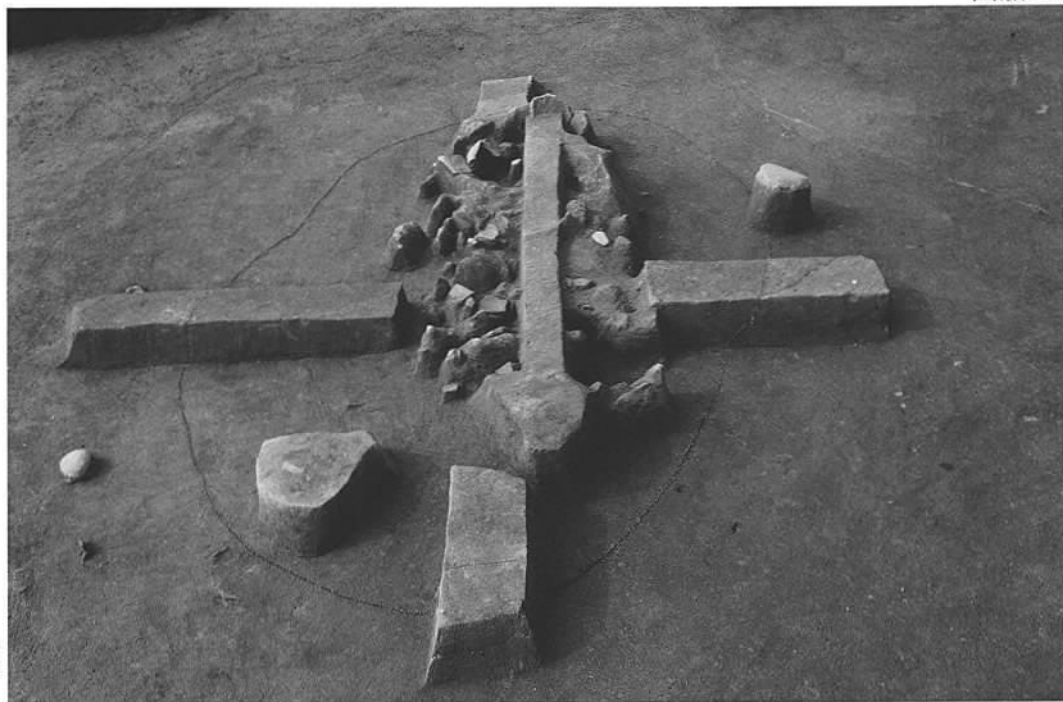
1 73号竪穴住居跡
(南から)



2 5号土坑
(北西から)



3 6号土坑
(南から)



1 9号土坑出土状況
(南から)



2 9号土坑完掘状況
(南から)



3 17号土坑出土状況
(北から)



1 17号土坑完掘状況
(北から)



2 17号土坑付近出土状況
(東から)



3 9号溝土層
(東から)



1 12号溝土層
(南から)



2 13号溝土層
(南から)



3 3号円形周溝状
遺構
(東から)



1 ピット116青銅
器片検出状況
(北から)



2 ピット116青銅
器片出土状況
(東から)



3 ピット116完掘
状況
(東から)



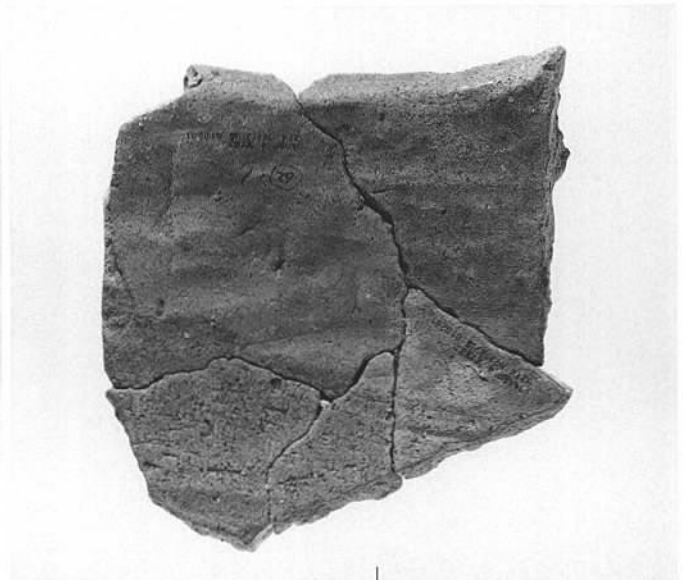
18-14



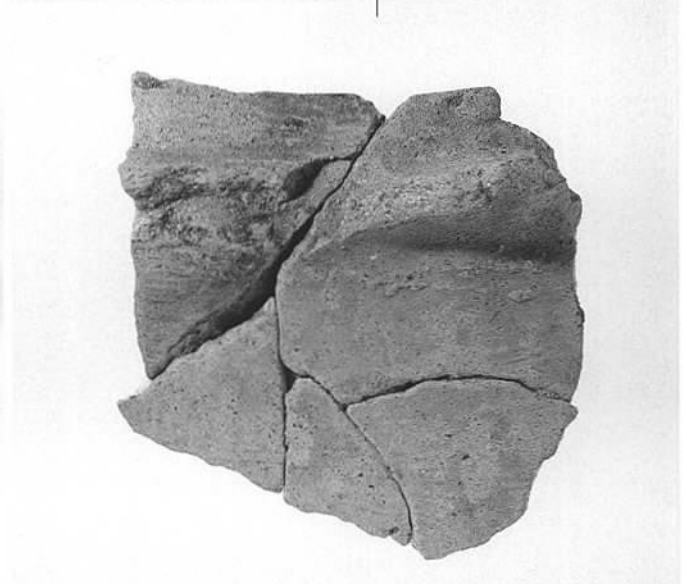
21-31



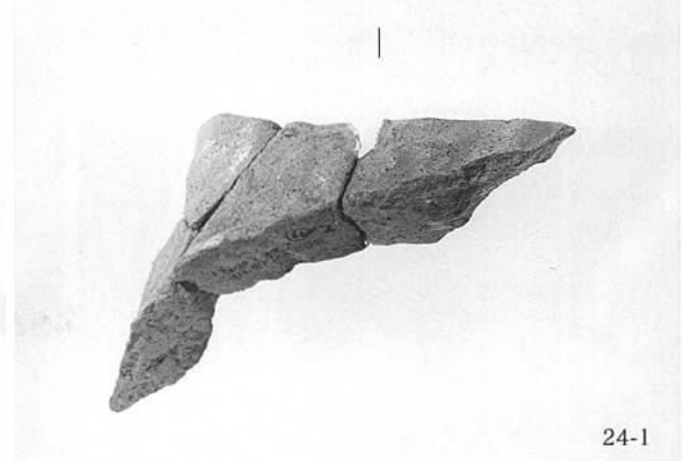
18-20



18-22



18-23



24-1



32-13



32-15

32-1



32-16

32-2



34-11

32-9



34-12



37-12



37-19



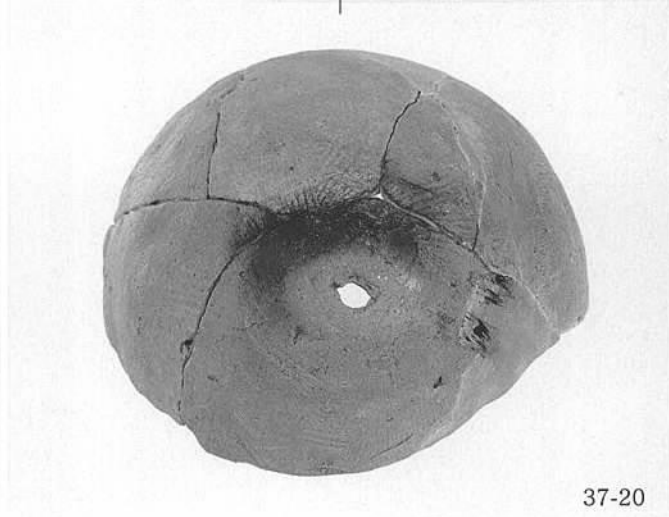
37-13



37-15



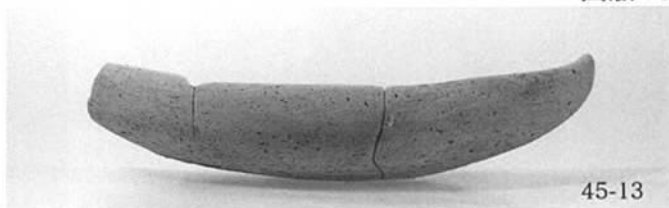
39-3



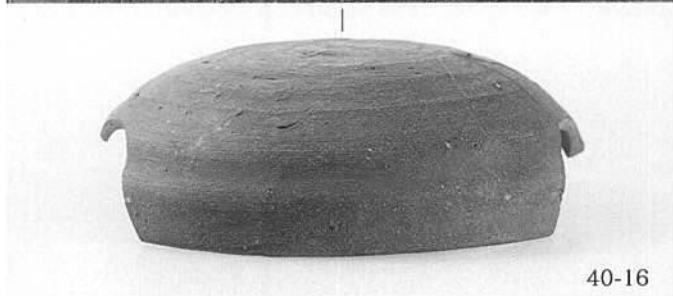
37-20



31号竖穴住居跡出土土器



45-13



40-16



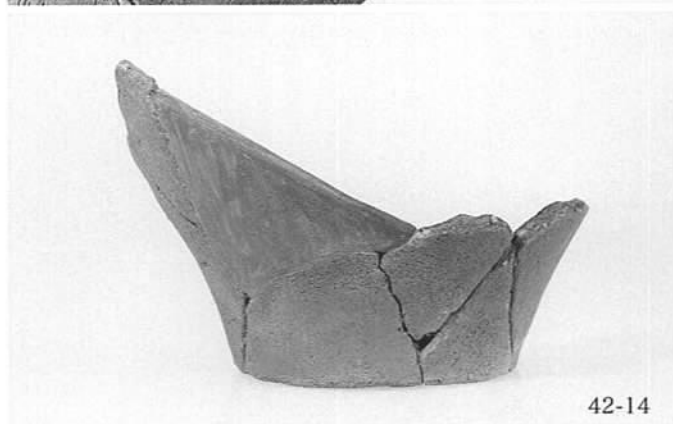
45-7



40-17



45-19



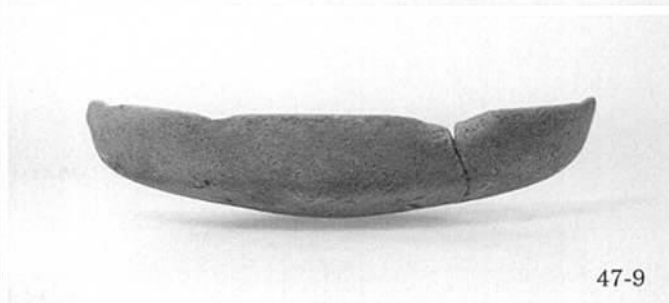
42-14



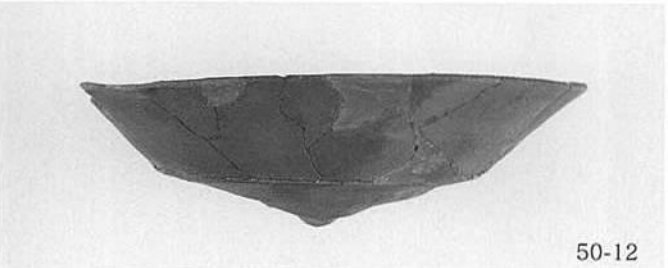
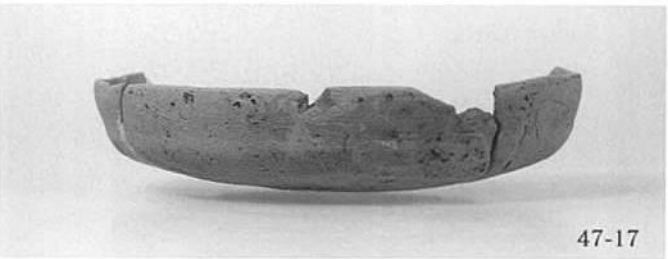
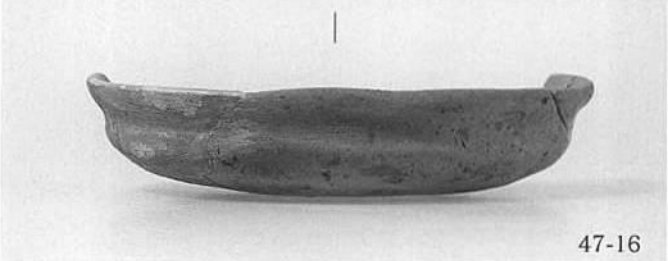
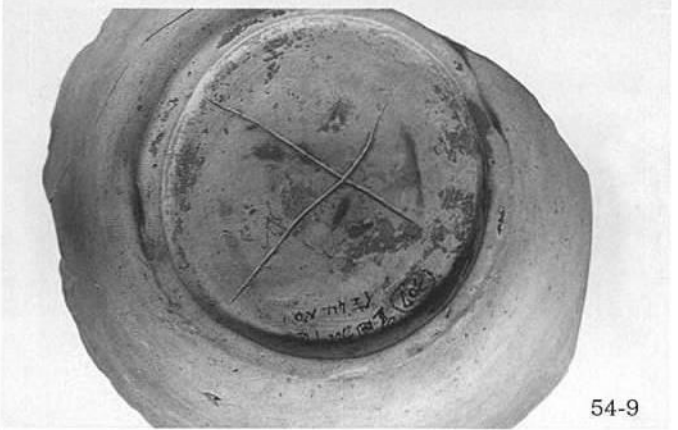
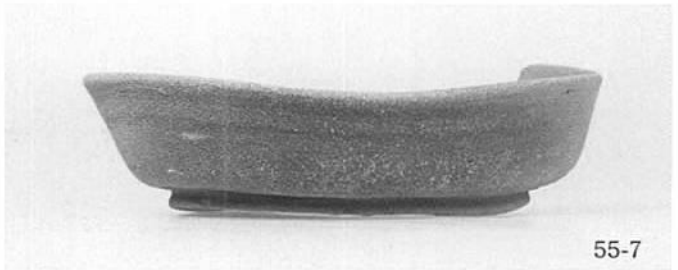
47-3

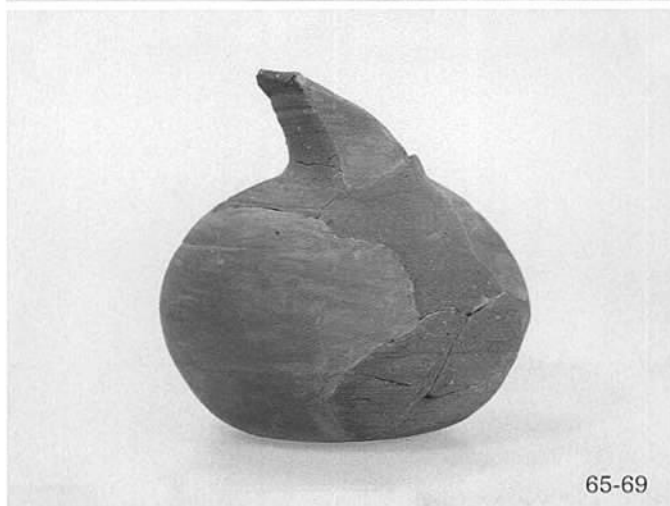


45-12

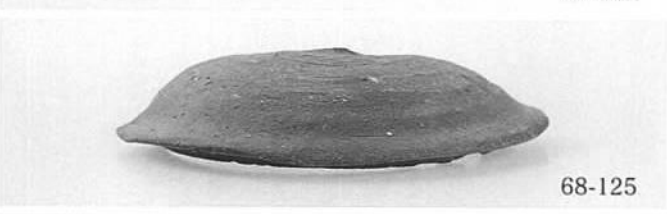


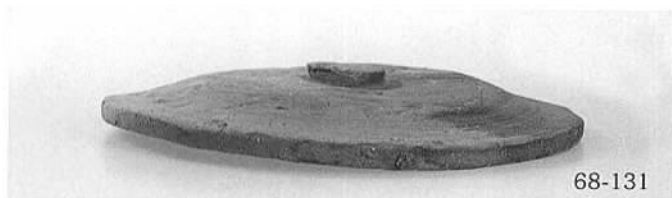
47-9





1号沟出土土器(2)





68-131



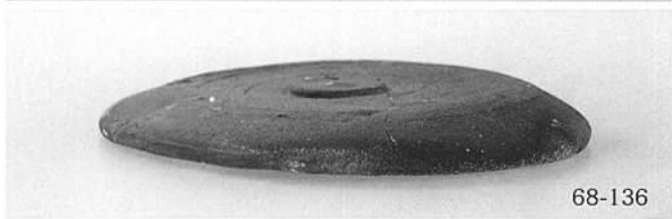
68-132



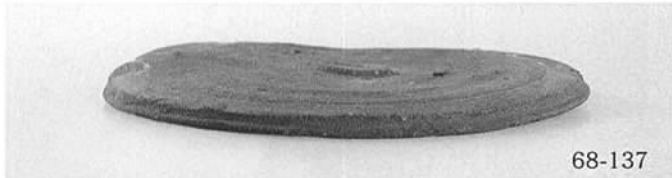
68-133



68-134



68-136



68-137



68-138



68-139



69-143



69-144



69-146



69-148



69-150



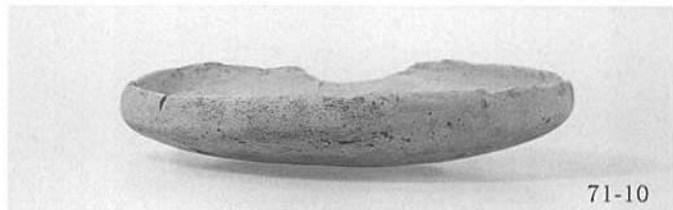
69-155



69-156



71-5





86-18



92-10



92-11



92-13



87-37



92-14



90-10



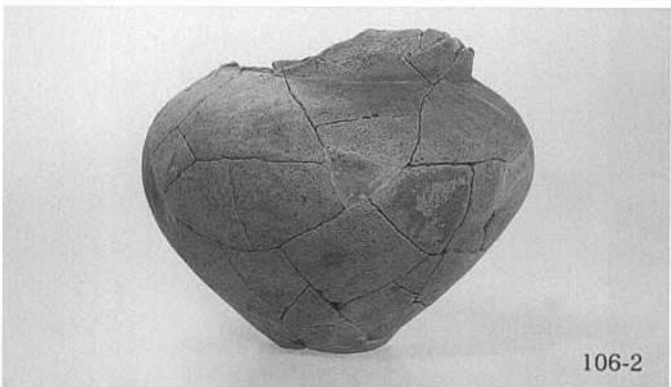
97-3



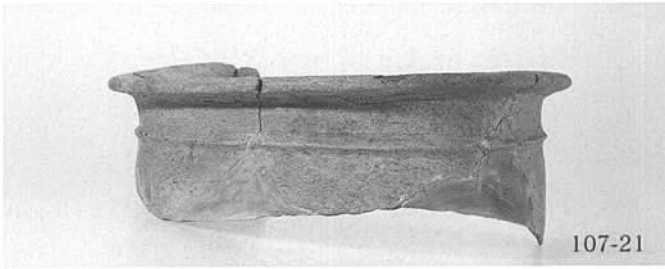
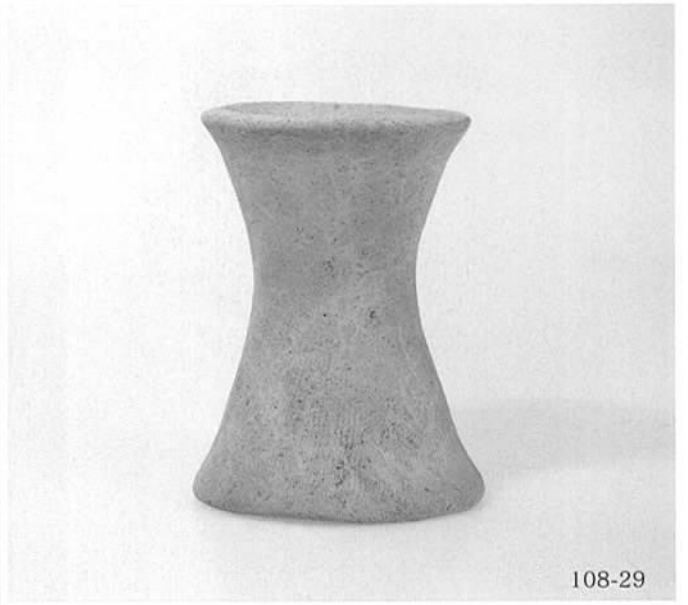
92-5

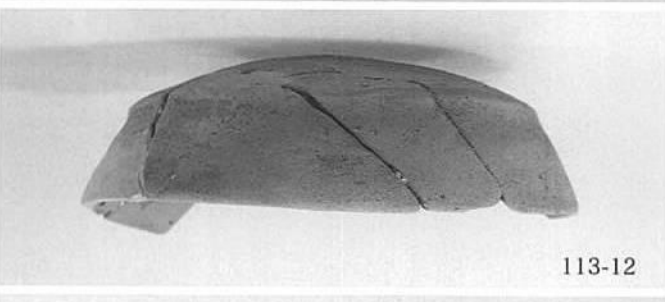
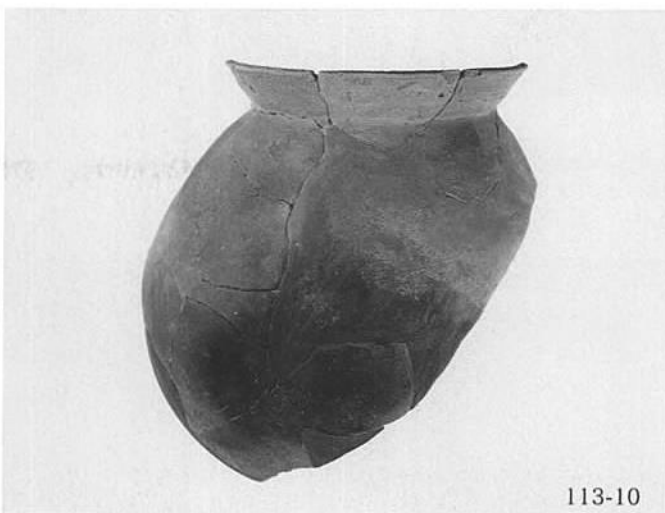


97-4

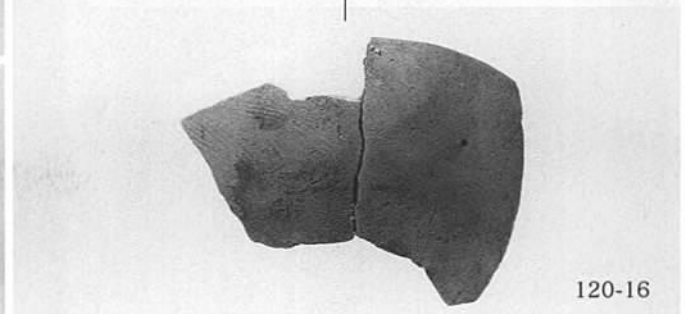
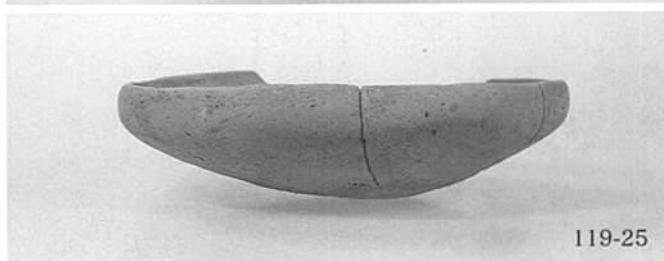
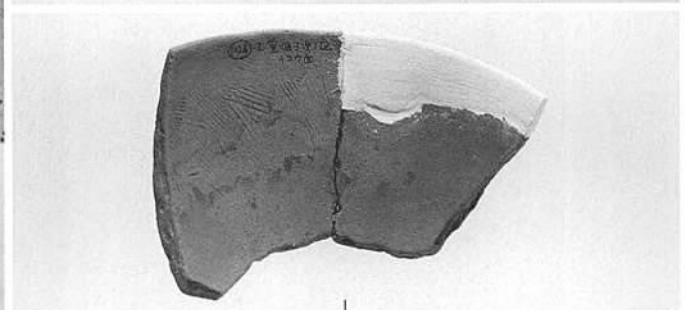
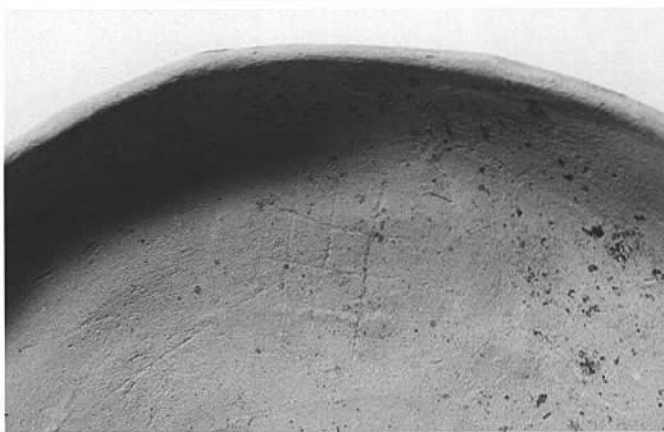
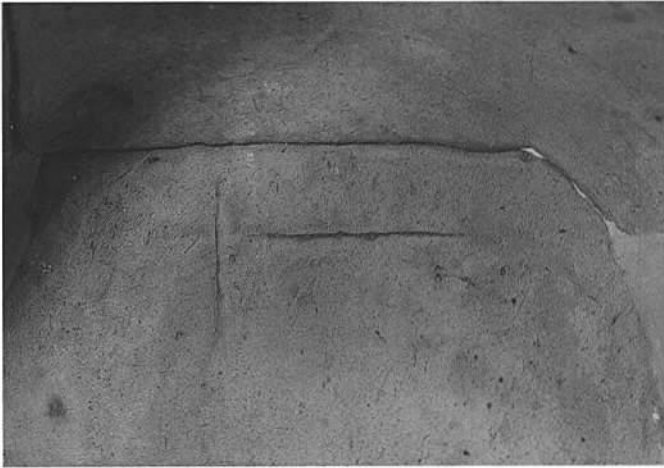


74号竖穴住居跡・17号土坑出土土器

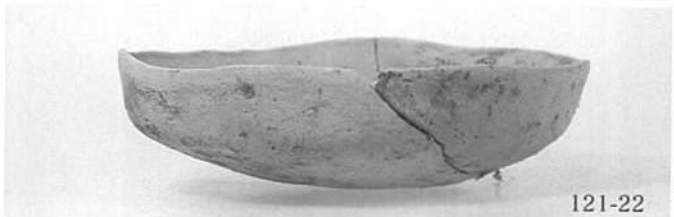
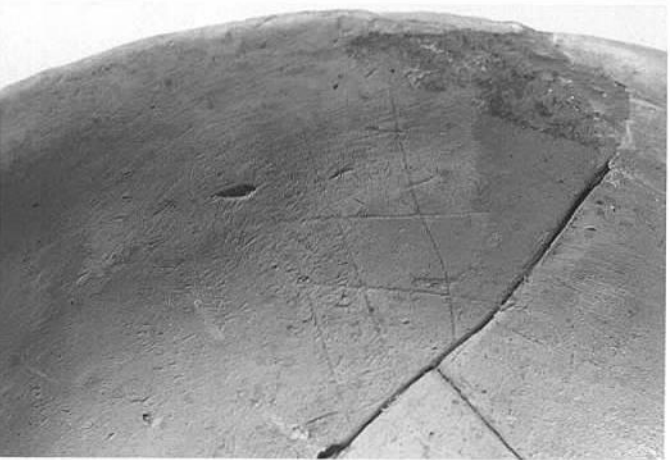
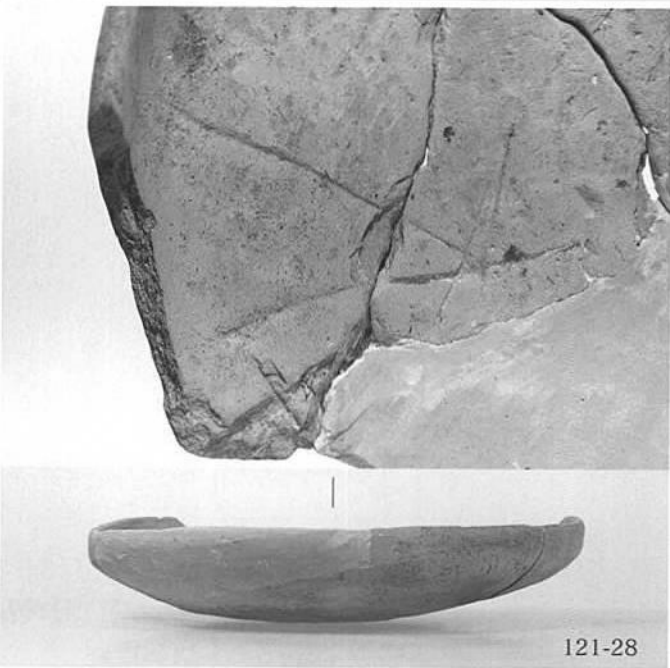
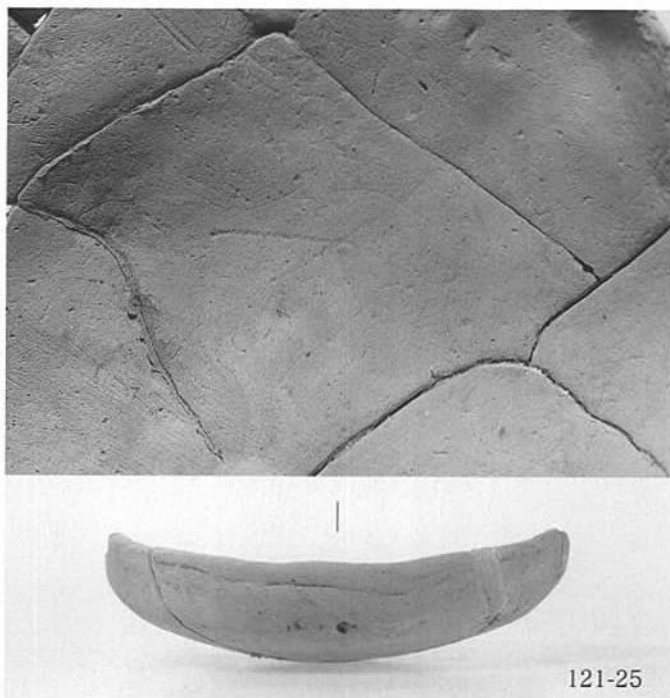
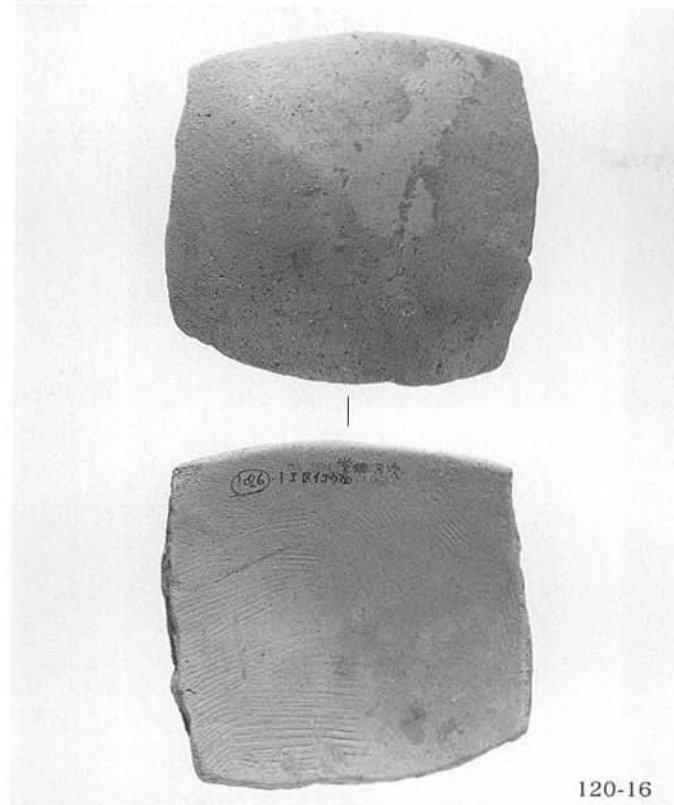




8・12号溝・3号円形周溝状遺構・ピット出土土器(1)



ピット (2) ・ 1区遺構面出土土器 (1)

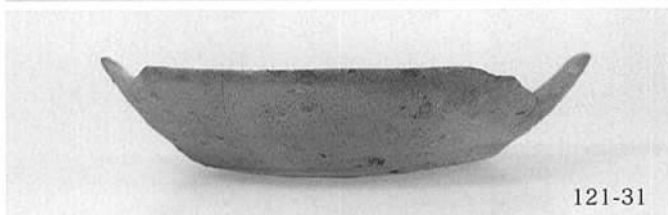




121-29



123-58



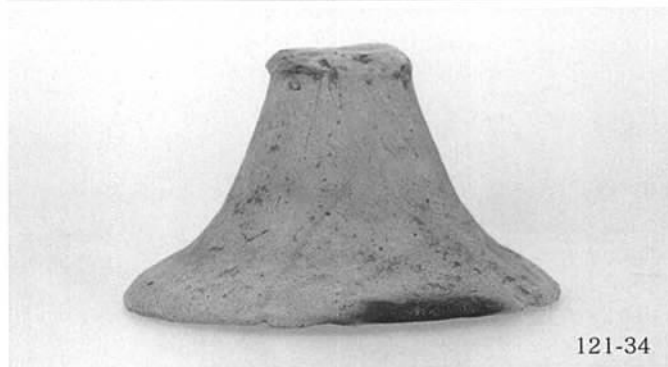
121-31



121-33



123-60



121-34



123-61



121-36



123-62



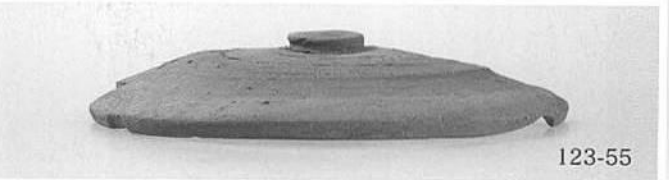
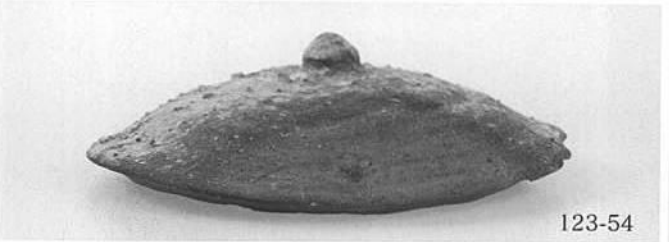
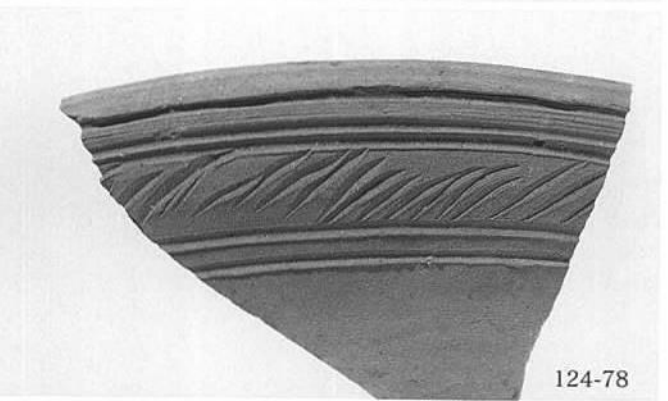
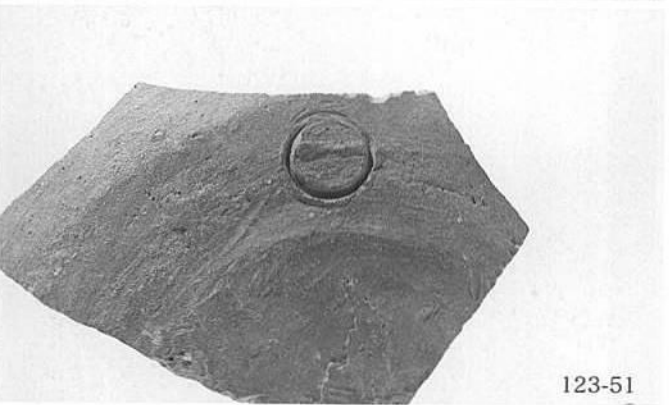
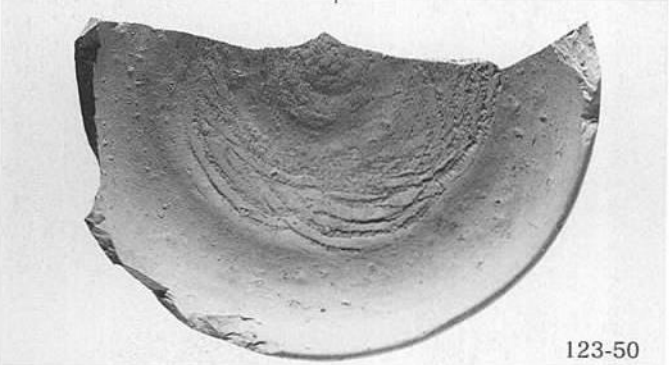
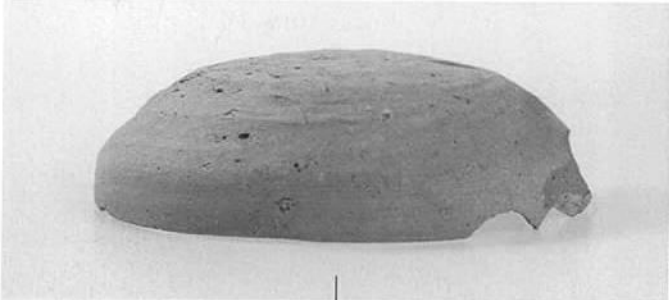
122-38



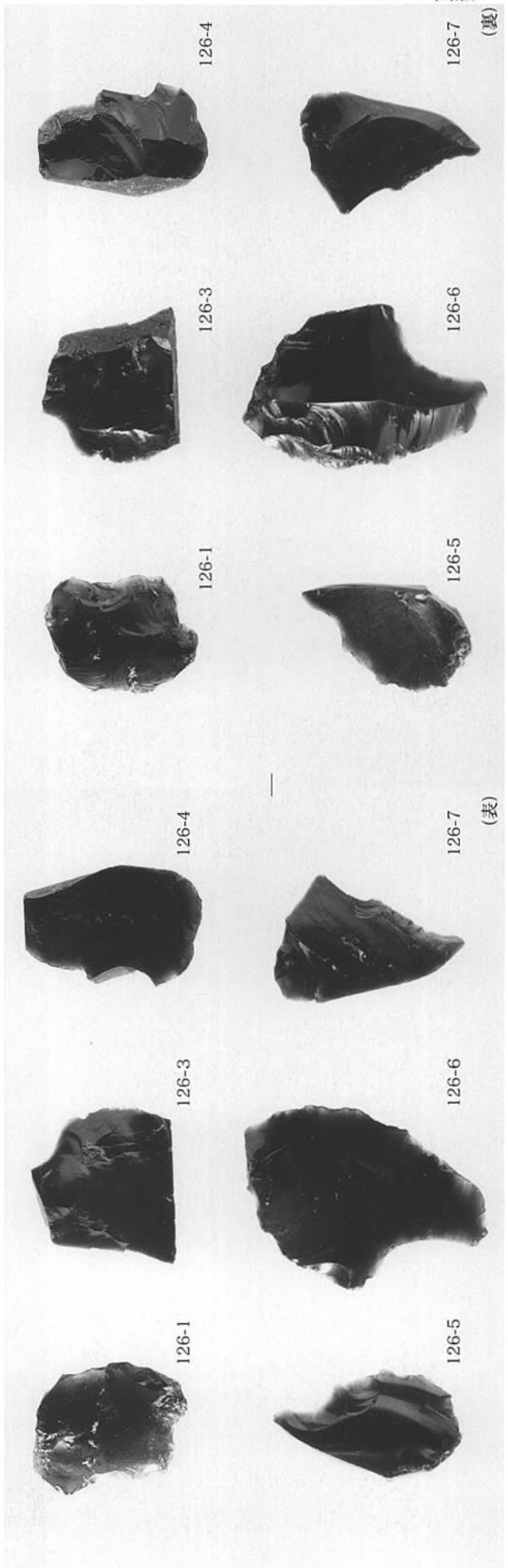
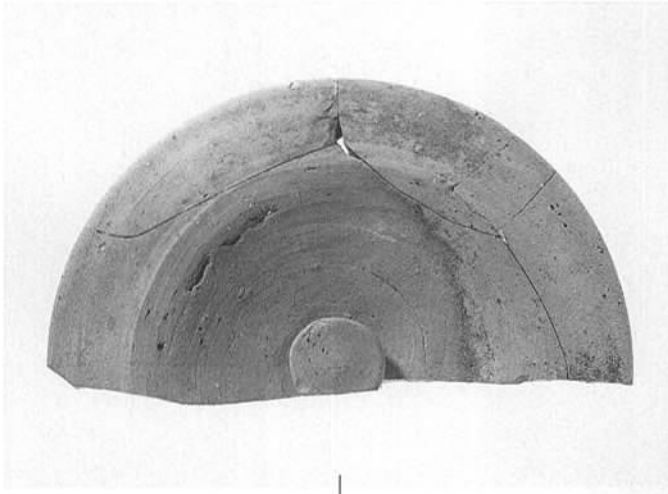
123-63



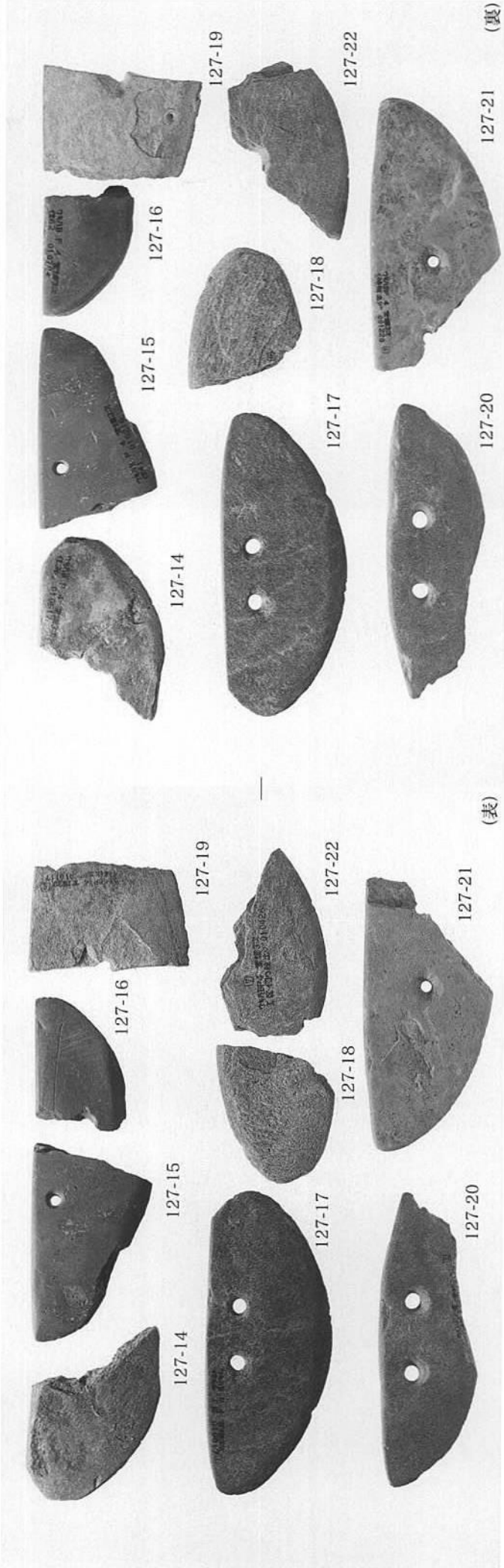
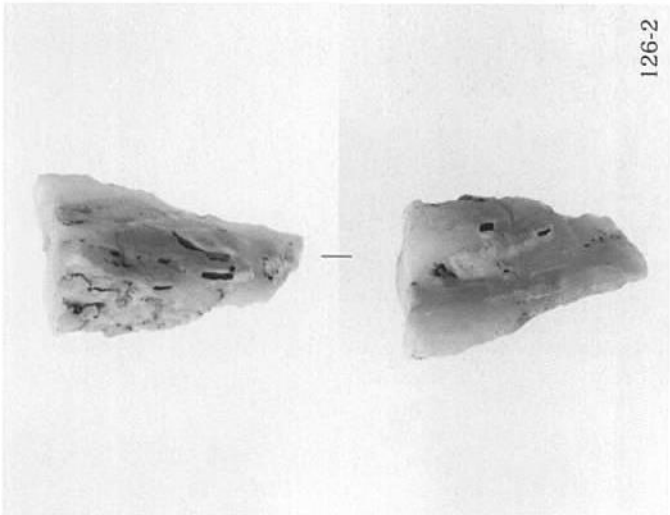
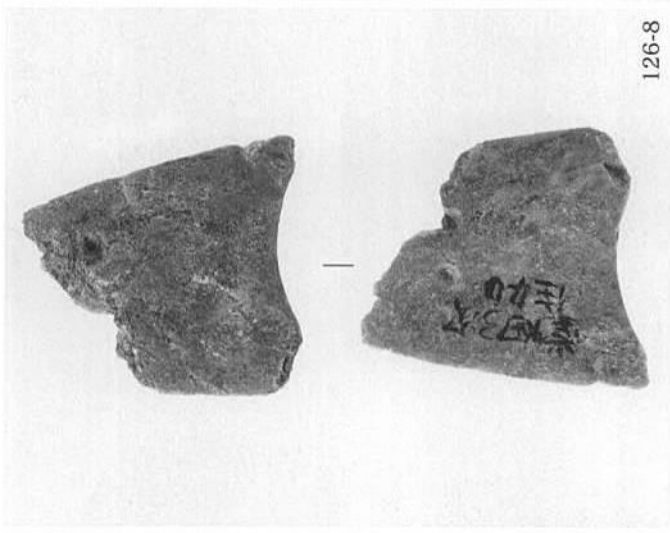
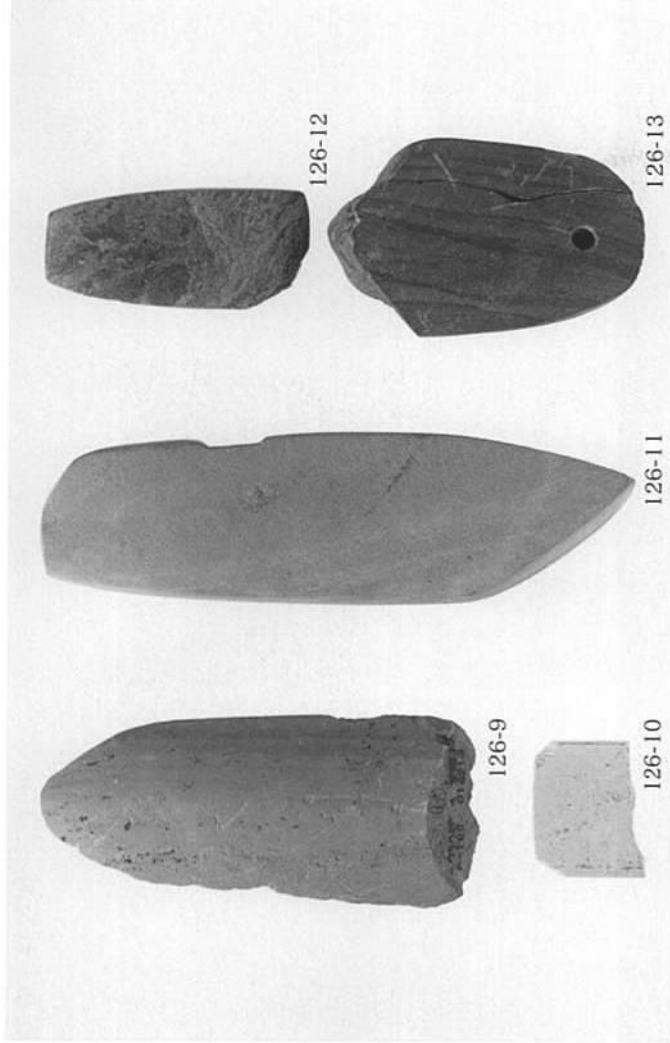
123-67



1区遺構面出土土器(4)



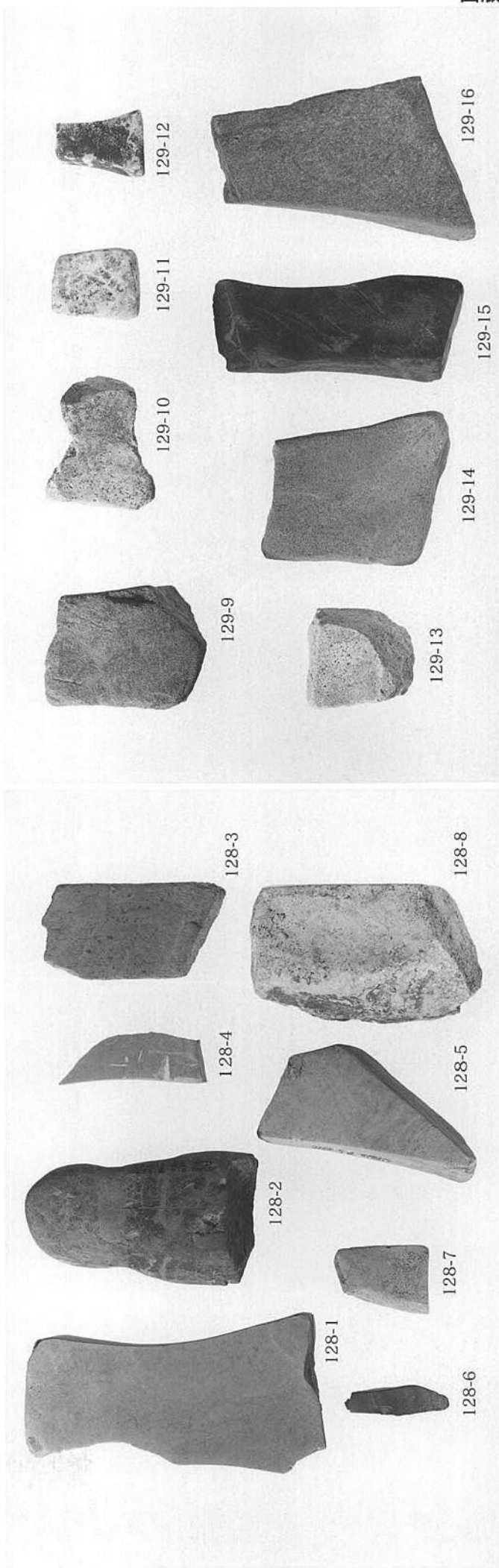
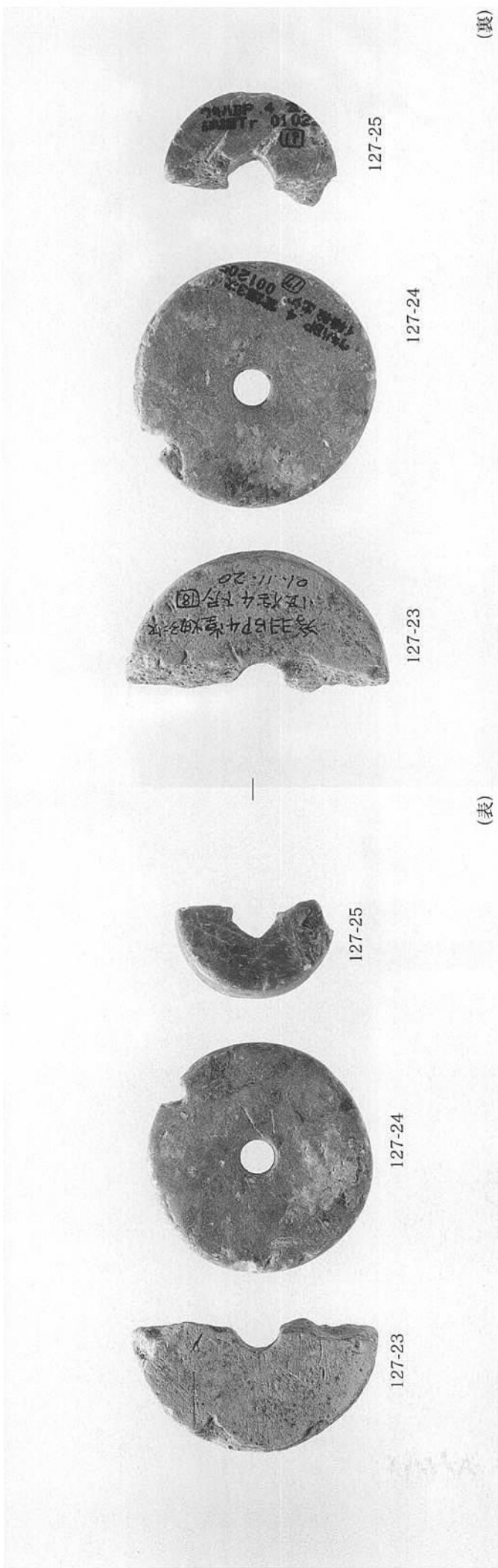
1区遺構面出土陶硯・転用硯・石器・石製品(1)



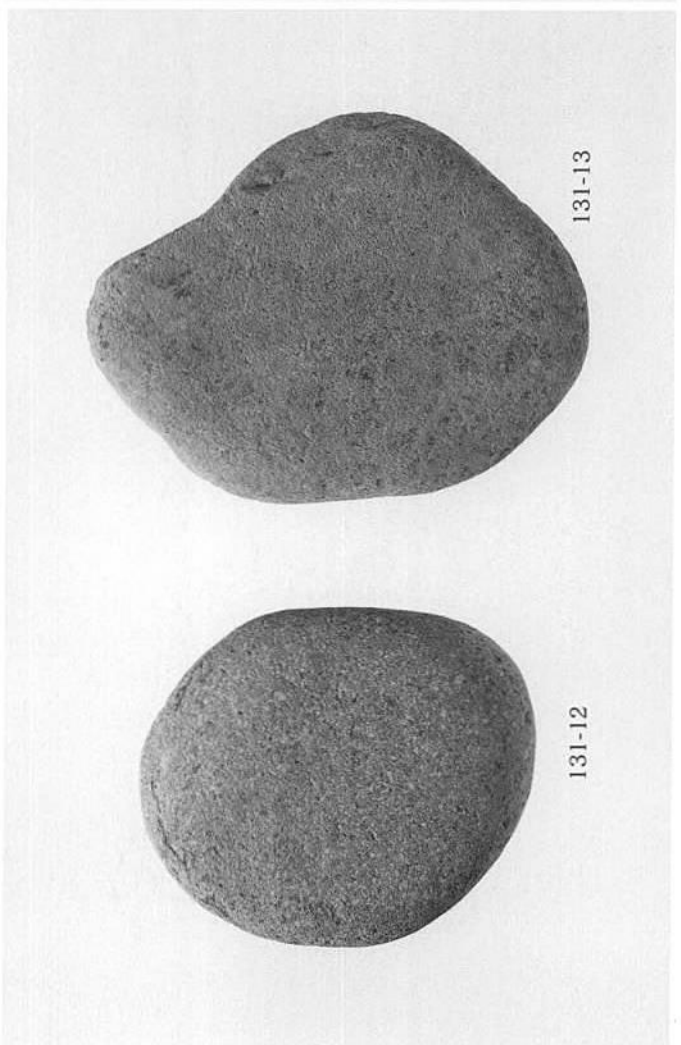
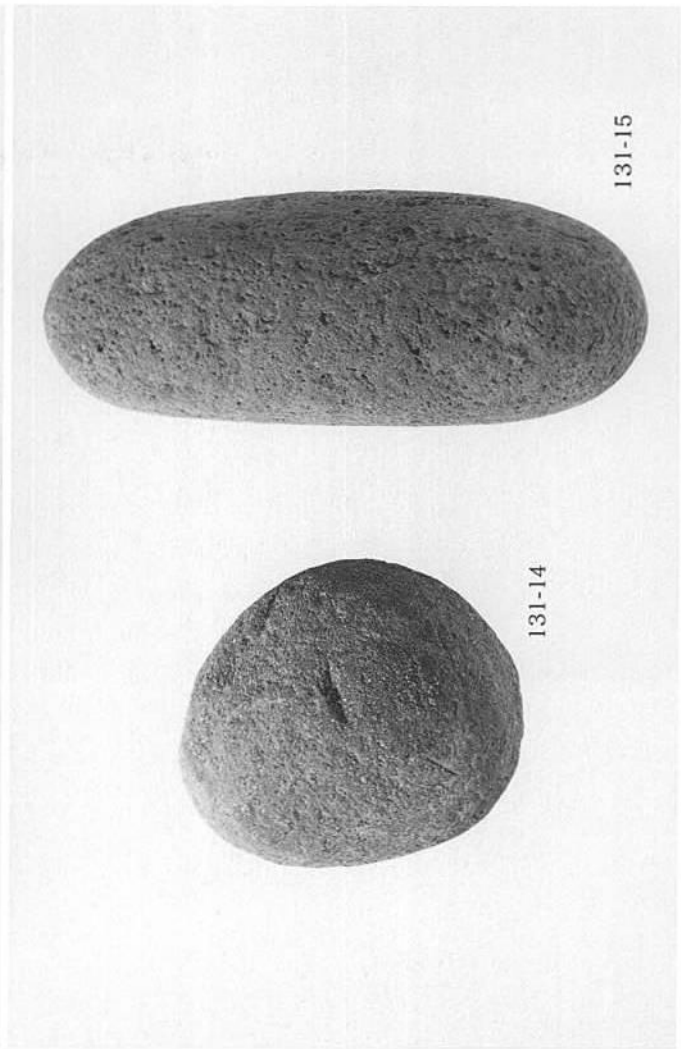
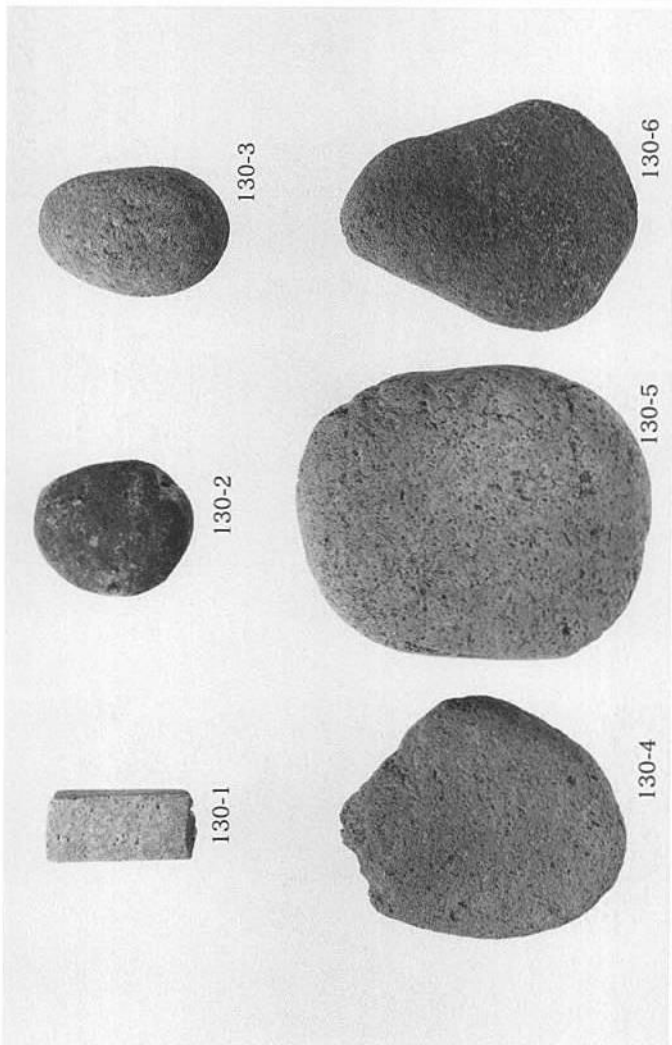
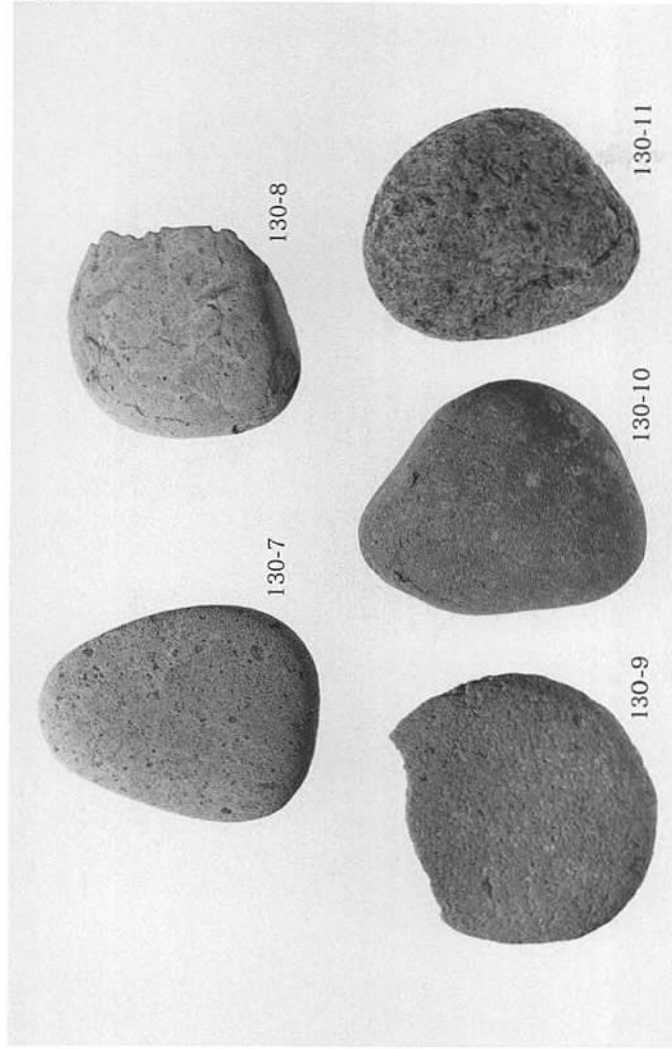
(表)

(裏)

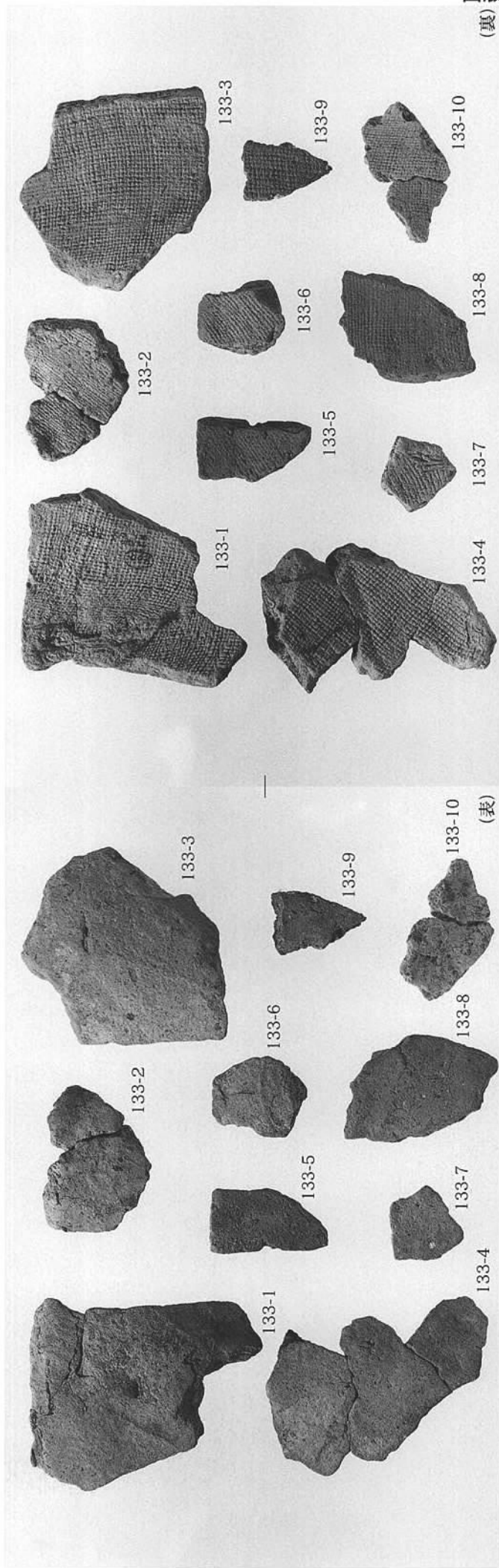
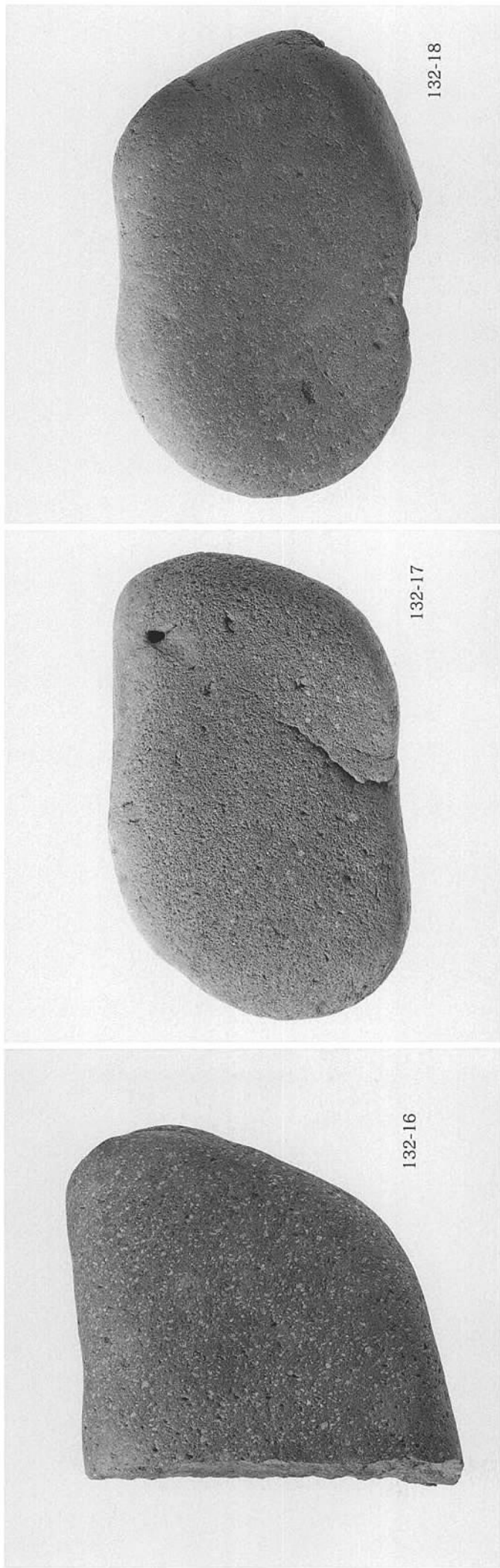
1区出土石器・石製品 (2)



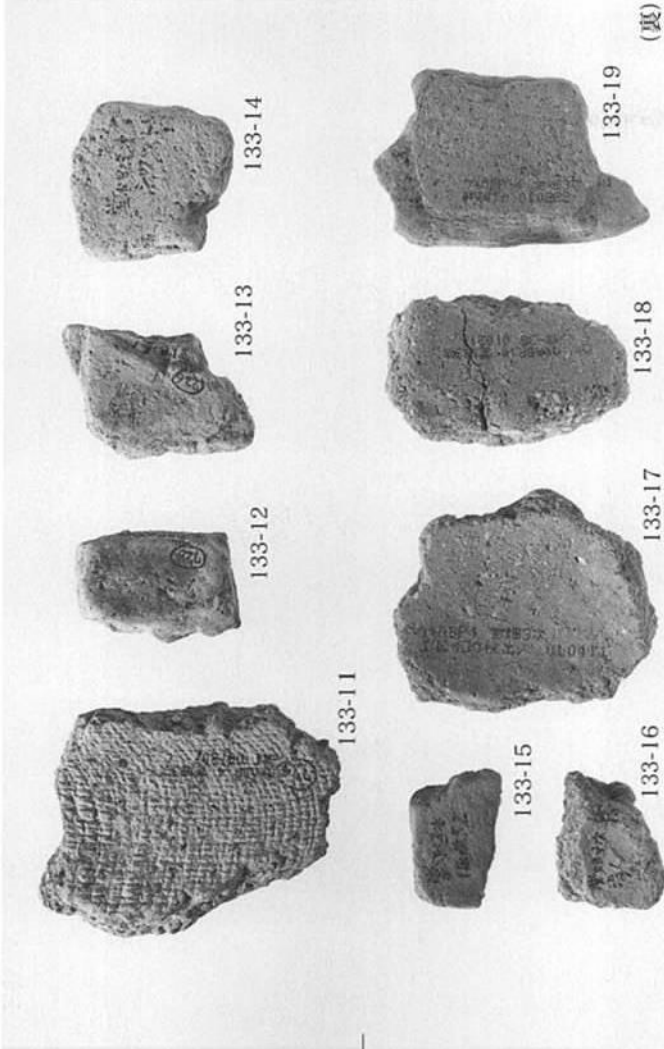
1区出土石器・石製品 (3)



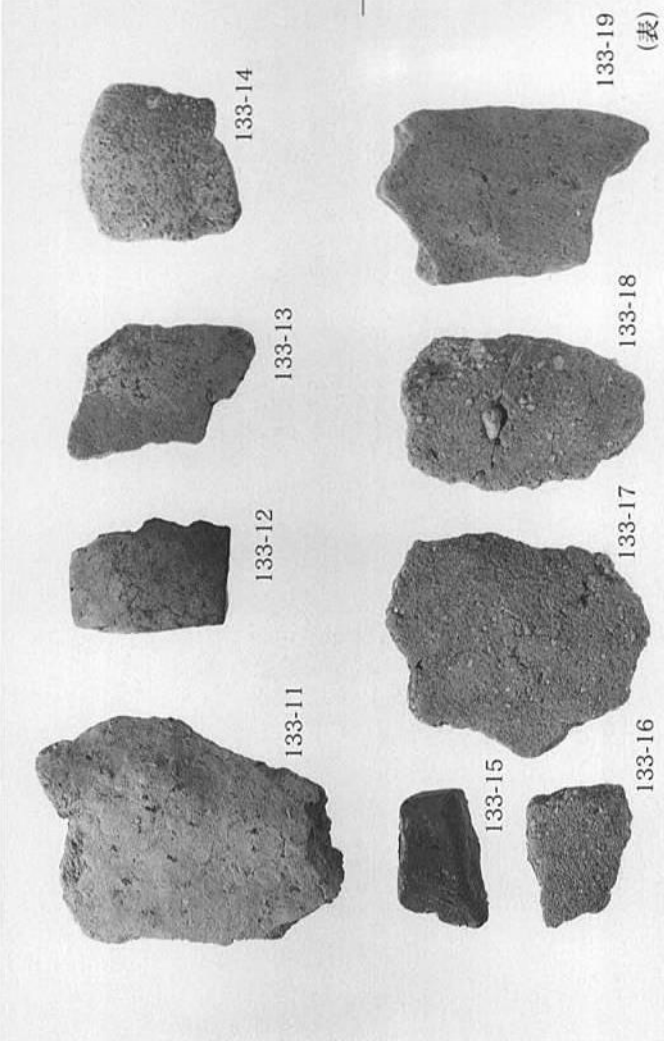
1区出土石器・石製品(4)



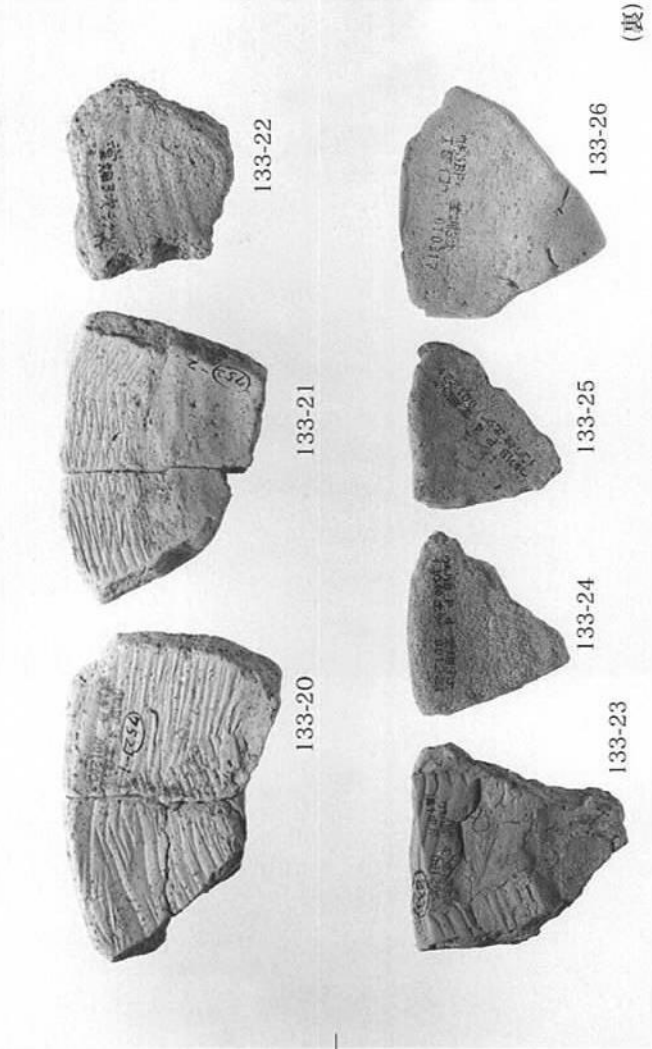
1区出土石器・石製品 (5)、製塩土器 (1)



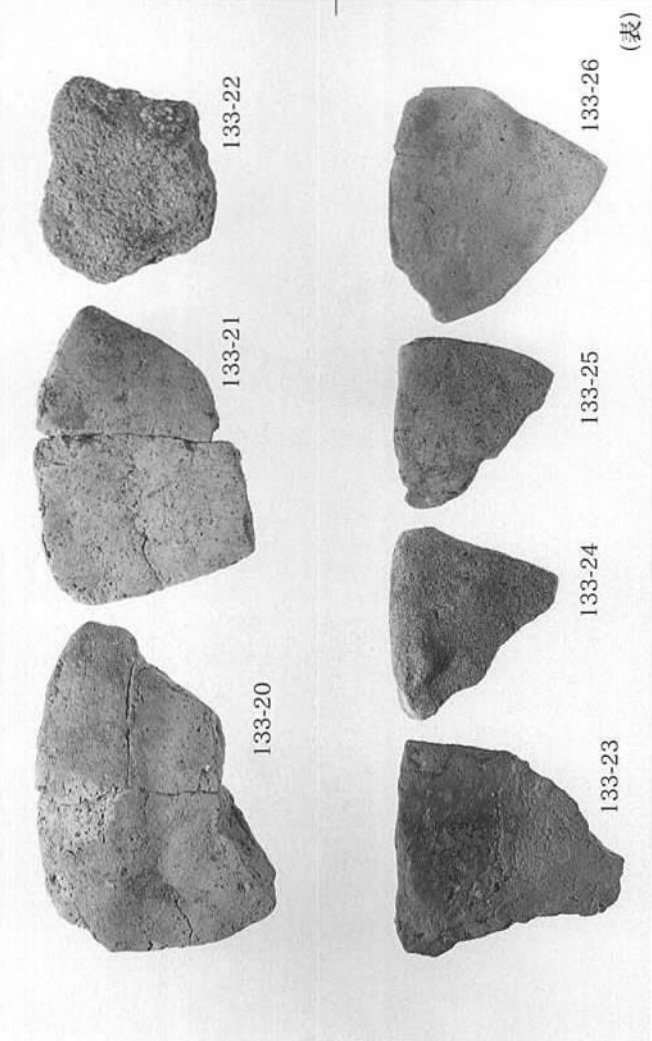
(裏)



(表)

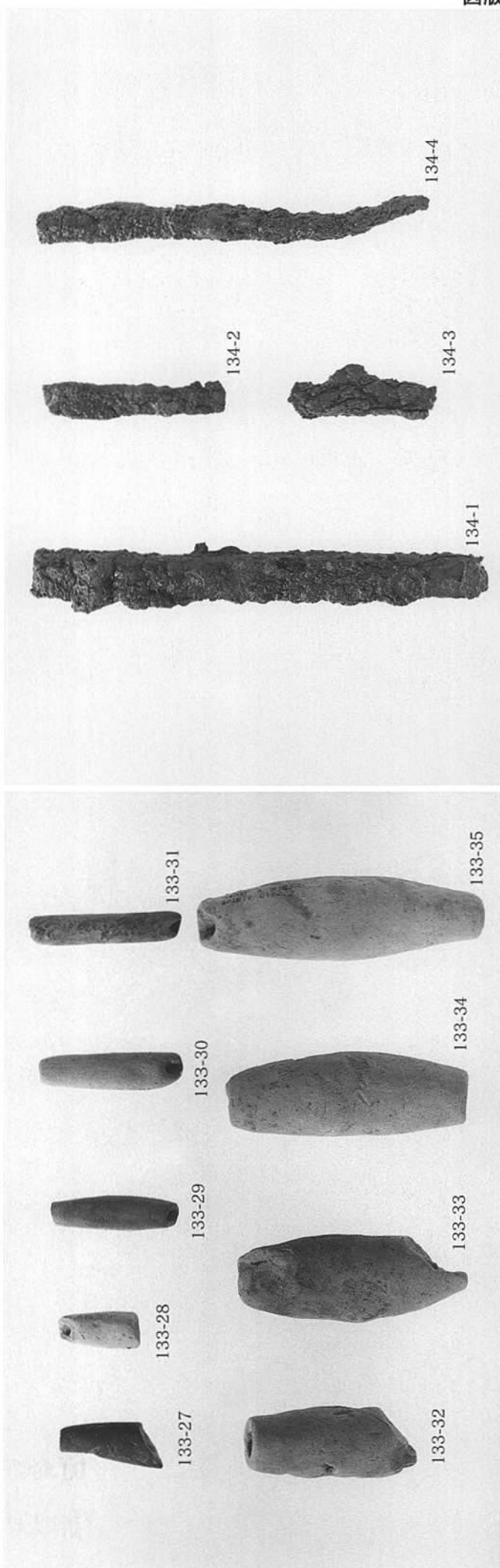
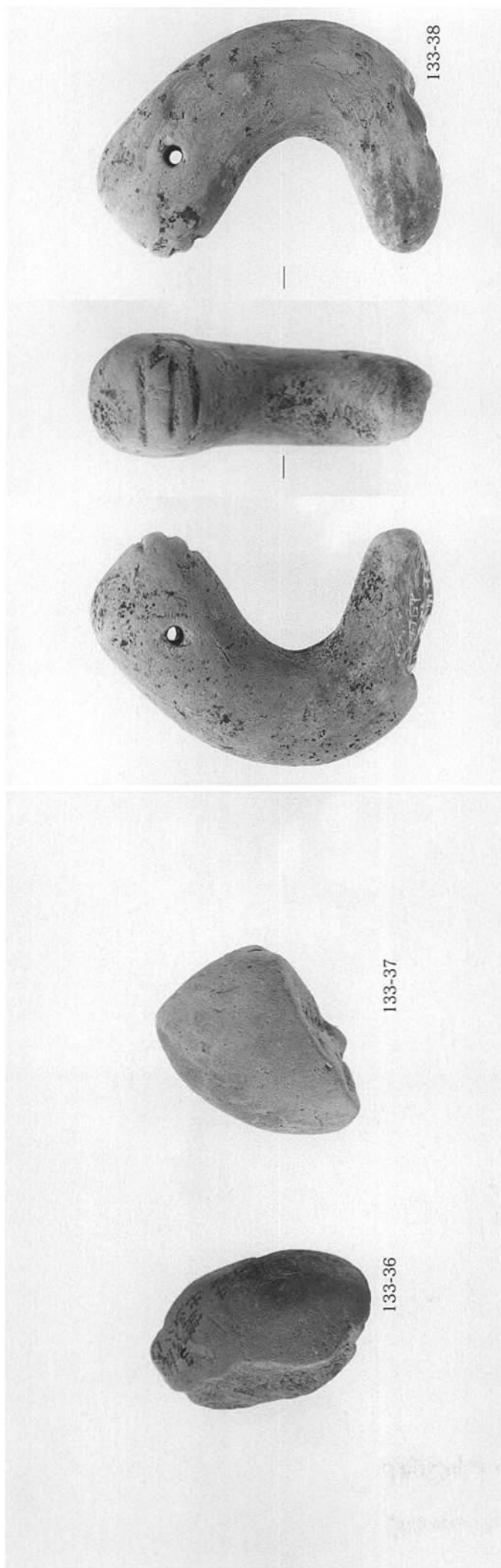


(裏)



(表)

1区出土製塩土器 (2)



1区出土土製品・金属器



3号土坑出土青銅鏡

報告書抄録

ふりがな	どうはたいせき							
書名	堂畑遺跡Ⅱ							
副書名	福岡県浮羽郡吉井町大字新治所在遺跡の調査							
巻次	Ⅱ							
シリーズ名	一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第20集							
編集者名	今井涼子・進村真之・小澤佳憲・大庭孝夫							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8575 福岡市博多区東公園7番7号							
発行年月日	西暦 2004 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。'。"	東経 。'。"	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
どうはたいせき 堂畑遺跡	ふくおかけんうきはぐんよしまち 福岡県浮羽郡吉井町 おおあざどうはたあざどうはた 大字新治字堂畑	40481		33°20'41"	310°45'18"	2000.11.13 ∩ 2001.3.7 2001.4.9 ∩ 2002.3.19 2003.4.15 ∩ 2003.10.31	10.500㎡	道路建設(一般国道210号浮羽バイパス建設)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
堂畑遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 飛鳥時代 奈良時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑 溝 円形周溝状遺構		弥生土器 土師器 須恵器 石器 土製品 製塩土器 鉄器 小形仿製鏡 青銅器片			

福岡県行政資料

分類番号 JH	所属コード 2 1 1 4 1 0 7
登録年度 15	登録番号 11

一般国道 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第20集
210号

堂畑遺跡Ⅱ

平成16年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 合資会社 四ヶ所印刷
甘木市大字馬田336